

第378話 平凡な人生

わしは、普通のサラリーマンの家に生まれ、団地に住んでいて、両親ともに平凡だが中流の家庭で、それ相応の生活は保障され、いたって落ち着いた物わかりのよさそうな父と、優しい母、そして素直な妹と真面目なスポーツマンの兄がいて、窓辺ではカナリアが日差しをいっぱい浴びて啼いている、そんなつつましい家で中学、高校と進み、一流ではないが、名前の通った大学に合格すると上京して、アルバイトをしながら苦学して、親の仕送りにはあまり頼らず、学生でありながら仕事という社会勉強も兼ねながら、スポーツではワンダーフォーゲル部で山歩きをし、そこで知り合った清楚な女性と交際したり、仲間とコンパで飲み歌い、図書館へ通いつめては、法律の勉強にも余念がなく、海外へ行きたい夢もあるから、独学で英会話を習い、いろんな資格も取得するという充実した四年間を無事に過ごす、法律事務所に助手として勤務しながら、司法試験のための勉強もするという若いときの頑張りはある、それだけでも若さを殺すことになるので、運転免許を取って、さっそく中古の車を買って、交際したばかりの女のひととドライブへ出かけたり、映画を見たりして普通の青年がするような恋愛もし、やがて、そのひとと将来を契り、両親に紹介するために、共に帰郷して、久方の古里の夏を楽しんだあと、日取りや式場を予約したりと忙しく、とんとん拍子に結婚へと走り出して、気が付いたらホテルの披露宴で、白いタキシードを来ていて、友人知人親戚に囲まれて祝福を受け、聡明で美しい妻と新婚旅行の飛行機の中、互いに将来の生活に就いて話し合い、初めての海外旅行にヨーロッパを周り、それから二人きりの新しい生活が始まり、所帯道具を二人で買うということも嬉しく、そのうち愛の結晶が誕生して、赤ん坊を中心にした賑やかな暮らしになり、アパートも狭いからとそろそろマイホームをと考え、蓄えた貯金を自己資金にして、郊外に一戸建を買うことになり、ついで車も家族が乗れるセダンに換えて、そうこうしているうちに二人目のベビーが生まれ、これで打ち止めと話し合ったが、失敗して三人目と、だんだん貧乏人の子沢山になり、子育てに妻も忙しく、部屋は玩具で占領されて、新築の家もシールがあちこちに貼られ、落書きされ、天井から洗濯物が干され、上の子が肩車すると思うと下の子が膝によじ登り、末っ子が新聞紙を囓るという毎日が騒々しく、と思うまもなく幼稚園、小学校、中学校とあれよあれよと大きくなって、背丈も追い抜き、親が子を見上げ、子供のお下がりをお母さんが着て、生意気な口をきいて親に殴られ、反抗期でグレたり、学校に呼ばれたり、いろんなことがあったが、時が過ぎるとすべて丸く解決してゆくもので、みんな無事に高校、大学と卒業して社会人になってゆくと、わしも妻も白髪となり、鏡を見ると老けているので、しみじみと妻の手を見て、孫の話もするようになり、とうとう司法試験は通らなかったが、それでもやりがいのある仕事を続けられ、いろんな友人ができたし、仕事を通しての仲間も増え、会合に顔を出したり、出張で各地を回ったり、結構楽しく走り回ることで見聞も広められたが、そろそろ老後のことも考えておかねばと、妻と話しあったりして、子供たちのいない広い家に、淋しさを紛らすために室内犬なんか飼ったりして、それがまたやんちゃな犬ですぐに家族の中心となり、妻も話し相手が犬となり、わしの散歩のお供となり、それはそれで役に立つ動物と思えば、息子同様に可愛く、暖かいストーブの傍で、犬と妻とテレビと温か

いお茶がいつでもあり、好きな読書に勤しんで、たまに孫と電話のやりとり、息子夫婦とメールのやりとり、昔のアルバムやビデオテープをだしてきては懐かしんで眺めていたり、平凡だが、普通の人生をわしは歩めるものと思っていたのだが、そうは問屋が卸さなかったのだな。

わたしたちは、戦争に子供たちを取られ、焼け野原にバラックを建てて、闇市で買ってきた高価な麦に大根混ぜたかで飯を拾ってきた木片で焚いて食べていた。お菜は山菜に浜で拾った貝や小魚を鍋にした。疫病もはやっていたが、雇ったものは医者も薬もないから、確実に死んでゆく。体力のあるもの、貧困に耐えられるものだけが生き延びていた。

第三次世界大戦が勃発してからは、戦争と飢餓と疫病に苦しめられていた。国民の大半がホームレスとなり、瓦礫の上にシートを張って、雨風を凌いでいた。家というもののありがたさを楽しみ感じていた。屋根があり、窓があり、密封されていた。ストーブがあり、水道があり、お湯が沸いた。いまは、そのどれもが調達不可能となっていた。

贅沢はしたいと思わないが、普通の生活がしたい。あばら屋でもいいから、家に暮らしたい。白い御飯が食べたい。電気があればいい。暗くて、寒くて、腹が減る。身の危険をいつも感じていながら、わたしたちは怯えていた。いつ、銃弾が飛んでくるのか、地雷を踏むかもしれない恐怖で、山菜を探しにゆくのも命がけだった。

昔はあたりまえの生活が、いまは懐かしい。何もいらない。ただ、平凡な人生をくれ。わたしたちに、安眠の地と、薬と食糧をくれ。息子たちを生きて戻せ。

ここは、日本だろうか。信じたくもない。水という水は放射能で汚染されていて飲むことは自殺を意味していた。かろうじて雨水を溜めて使っていた。わしも、もう長くはない。皮膚が剥けてくる。湿疹が全身に広がってきていた。どこをどう曲がってきたものか。目も見えない。なにもかもがお終いだ。あのことろ、気づくべきであった。戦争に時間と距離がなくなったことに。

第379話 スト前夜

雨が降っていた。春先のまだ冷たい雨だった。

わたしは、組合専用の部屋の窓から下の通りを眺めていた。近くにこんもりとした杜が妙にくっきりと雨に浮かんでいる。仁徳天皇の御陵だ。わたしは、堺の大手パン工場の廊下や、事務所を行ったり来たりしていた。この日だけは仕事を休み、欠勤届を出していたから、本当は自分の行動範囲は限定されているはずだった。組合の専従は、本社にいて、支店、工場にはいない。

何故か、わたしは、入社して三年目で、堺支部の組合委員長に選任された。ユニオンショップだったから、入社して工場長と人事担当以外はすべてが労働組合に入る。この堺支部は従業員百六十人。その中で幹部二人を除いて、あとはすべて組合員ということになる。

わたしは、二十四歳の若さで、組合支部の総会により、人気投票のように委員長にさせられた。従業員の大半は二十歳前後の女子社員ばかりだった。工場長でさえ、まだ三十過ぎという会社自体が若い。

組合研修が山奥の研修施設であった。そこは党が運営している。その研修センターに三泊缶詰になった。新幹線で、途中下車するとタクシーで別の支部の新委員長たちと、センターへと向かった。途中の林の中に、「引き返すなら今だぞ」「逃げるなよ」「ここは地獄の一丁目」と、恐ろしい看板が目についた。何が待っているのか。先輩からはかなりきついと云われていたが。

三泊は過密スケジュールであった。朝は六時起床。夜は二時寝床。睡眠時間四時間。体操、ランニング、掃除から始まり、戸外でのシュプレヒコールに、大声を出す発声訓練、デモ、座り込みスト、スクラムの組み方、まるで、ラグビーでもしているようだった。そして、労働歌からマゲームなどのレクリエーションの運営の仕方。教室では、演説からヤジのかわしかた、組合の法律の勉強、信念強化訓練といったハードな研修を終えたときは、さすがにへこたれた。

雨の中、わたしは工場の中を見回った。全員、腕には腕章、鉢巻。若い女の子たちが、鉢巻をしているのはいいものだ。きりりと可憐な顔が引き締まる。要求貫徹、団結と赤い色が工場の中に動き回っている。組合の赤い旗も立てられた。いつになく職場には緊張感が走っていた。

「まだ、会社側から回答は出えしまへんか」職工たちが、鉄板を拭きながら、わたしに訊いてくる。

「まだや、落ち着かな、うちの要求十七パーセントのベアに対して、まだ十四や、なかなか歩み寄りを見せん。強気やな」

このままで行けば、交渉決裂、早朝六時からストに突入する。全社員、工場には立ち入り禁止となるので、明日の朝は、この寒い雨の中、工場の周りに座り込みをするのだ。女子社員たちは、おにぎりの焚きだしと、熱いお茶の用意をする準備がなされていた。それまでは、みんなはいつもの仕事だ。もし、ストに突入すれば、市内だけでなく、近郊のすべての小学、中学の給食のパンが供給ストップする。スーパー、デパートのパン売場も空になる。その影響力はすごいだろう。みんな、仕事が手につかない。上の空でやっている。

わたしも、動物園の熊のようにうろうろと、歩き回っていた。それはもう一人いた。工場長だった。やはり、うろうろと工場を歩いたり、廊下を行ったり来たりしていた。わたしとすれ違

。「北村はん、まあ、コーヒーでも飲みまひよ」

と、工場長はわたしを事務所に誘った。事務員も緊張した面もちでコーヒーをいれて持ってきた。やたらタバコばかり吸わさる。

ベアだけではなく、夏冬の一時金も一括上程して、賃上げ闘争をたびたびではなく、年一回に絞りこんでいた。その方が組合も会社側も、エネルギーを消費しなくて済む。賞与は六ヶ月。これは全く譲れない線だった。

「明日も雨やろか」

工場長はしきりに外ばかり見ている。電話がかかってくると、ぎくりとして、顔を上げた。わたしたちは、本部からの電話を待っていた。

昭和四十年の後半の石油ショックが終わり、五十年代に入る。まだ世の中は景気がよかった。ベアも二桁。労働組合も強かった。いまのようなデフレで意気消沈している世の中と違い、景気のいいインフレで、物価も上がってきたが、給与も伸びた。わたしは、組合の海外視察に同行して、その年にヨーロッパを回ってきたが、円はまだ三百円。向こうで飲むコーヒーも高かった

。日本の力がだんだんと高まってきて、海外でも日本製を目にすることが多くなり、タクシーに乗ると、運転手が、オンダ、ダットサンと鼻にかかったフランス語で話しかけてくる。

みんな、まだ若かった。仕事に燃えていた。やればやるほど成果が出て、また見返りもあった。新製品もばんばんと出した。また飛ぶように売れた。まさにNHKテレビのプロジェクトXで見るそのままの世界だった。

本部で三晩、徹夜で交渉が行われていた。鉄鋼、繊維は妥結したそう。そんな情報が入ってくる。夜、六時。すべての業務が終了して、続々と鉢巻をしめた社員たちが、食堂に集結してくる。いよいよ、スト突入か。と、思ったそのとき、本部から一報が入った。十六パーセントで妥結一。

わたしは、各職場を走り周り、社員たちに通達しなければならなかった。

「妥結した。十六だ。すみやかに、腕章と鉢巻は取るように、旗も降ろせ」

そう叫んで、走り回った。ストは回避した。長い三日間だった。

「北村はん、まあ、座りいな、一杯飲もうや」

工場長は湯飲み茶碗に酒をついだ。わたしはどっと疲れが出て、ソファに倒れ込み、工場長や人事課長らと酒を呑んだ。

まだ、雨が降っている。春はひと雨ごとにやってくる。

第380話 焼け跡のオルガン

昭和二十年七月二十八日夜十時過ぎ、マリアナ基地から飛来したB29六十数機が、青森市に焼夷弾五万発を投下した。事前に空襲警報が出たが、市民の多くは待避する余裕もなく、防空壕に入ったり、川に逃げたりしていたが、全市の九割が消失し、犠牲者はその数は不確定だが千人を超えたと思われる。

青森は交通の要所であったこともある。国鉄の操作場があり、青函連絡船の本州の窓口でもあった。当然、グラマンによって、連絡船の多くは撃沈され、それを迎え撃つ高射砲が、虚しく時折鳴っただけだった。すでに日本は戦力を失っていた。

青森市内はすっかり焼け野原となり、青森の停車場から遠く浦町の停車場が見えるほど綺麗に焼けた。建物として焼け残っていたのは、寺と公会堂、議事堂など、堅牢なコンクリートの建物だけが残っていた。その中に古川国民学校の当時としても高い、三階建の鉄筋コンクリートの小学校がそっくり外観を残していた。勿論、火の粉はかぶり、内部は激しく燃焼した。周囲の家屋もすべて瓦礫となっていた。

半月のちの八月十五日、終戦。暫くして、疎開していた人々も焼け跡に戻ってくる。夏の高い空が脱力したように青かった。民衆はいつの時代も逞しいものがあり、市民はそれぞれ、焼け跡の残滓から使えるものを寄せ集め、ちらほらとバラックを建てながら、町造りを始めていた。材木は不足していたから、古い木でもあれば重宝した。

市民の心ない人たちは、焼け残った古川国民学校に忍び込んで、机や椅子の燃え残ったものを勝手に持ってきては、建築材料にしたり、燃料にしていた。

九月に入り、幾分か涼しくなってきたとき、ひとりの復員兵が、青森駅に立っていた。よれよれの帽子に汚れて穴だらけの背囊、足にはゲートルを巻いていた。秋元良介だった。秋元は東京音楽学校を繰り上げ卒業させられてから、一時、青森の小学校の音楽の先生をしていたが、招集されて朝鮮半島に渡った。朝鮮で終戦を迎え、武装解除されて帰還した。早い方だった。

話には聞いていたが、自分の郷里が灰燼に帰したのを目の当たりにすれば、日本は負けたという実感がこみ上げてきた。親はどうしているだろうか、姉弟は。そればかりが気がかりであった。家のあった辺りを探していると、焼け跡に木札が下げられ、「秋元に用事の方は細越の秋元まで」と連絡先が書かれてあった。それで、無事であることが確認されたのだ。

良介は市の南にある細越部落の親戚の家を訪ねていた。そこに両親、姉弟が厄介になっていた。四年ぶりで家族は再会した。

暫く良介は畑仕事を手伝ったりしていたが、自分が教職で就いた一年少しだが、かつての子供たちは、学校はどうなっているだろうかと心配になり、古川小学校へと行ってみることにした。学校は遠くからでもすぐに判るほど、辺りには何も無い。まだ、くすぶったような焼けた臭いが漂っていた。

良介が学校の前に立つと、多くの焼け出された市民が、学校の中で共同生活をしていた。校庭は、焼けた家財や持ち出した道具などでいっぱいになっていた。いまだに多くの市民は住むところもなく、食べるものもない。進駐軍が合浦公園に駐屯して、幾ばくかの救援物資や食糧が配られたとはいえ、人々の腹を満たすまでにはゆかない。市内にアメリカ軍のジープだけが走っていた。

良介は、罹災者の黒ずんだ顔の中に知り合い、教え子を捜していた。

「あれえ、先生様でねえが。よぐ、無事で」と、教え子の母親が声をかけてきた。その母親から、みんなの安否を聞くことができた。浪岡や、郊外の部落へ親戚を頼って疎開していたのだという。

みんな生きていたことに安堵した。良介は学校の階段を上がり、音楽室へとゆっくりと歩いて行った。廊下にはガラスの欠片や落ちた壁などが散乱していたが、掃除すれば、校舎はまだ立派に使える。音楽室から男たちの話し声がしていた。ドアを開けると、何も無いがらんとした教室の窓際に、オルガンだけが一台あって、男二人で、まさにそれを持ち出そうとしているところだった。

「何をするんだ」と、良介が問うと、

「壊して焚き付けにするのよ」と云う。

「これは学校の備品じゃないのか」良介は怒鳴った。

「なんの、どうせ壊れて使いもんじゃねえべさ」

良介は男たちの手をどくように、オルガンに進むと、蓋を開け、ペダルを踏みながら鍵盤を弾いてみた。なんということもない、オルガンはちゃんと鳴った。どこも壊れていないようだった。奇跡的に焼け残ったのだ。

「どこも壊れていないじゃないか」

「そんな、オルガンなんてこんなもの、なんの役にも立ちやしねえべ。いまは、ドラムカンの風

呂に入るのが先決だ」

男たちは、ものすごい形相で良介を睨んだ。生活が優先で、こんな非常時に音楽など必要がない。そう云っているようだ。

「駄目だ。ここは学校だ。また子供たちが戻ってきたら、勉強が始まるのだ」

良介はオルガンの上に身をかぶせるようにして、譲らなかった。男たちは、良介を蹴って、その場を離れた。良介が楽器に触れたのは四年ぶりだった。元々ピアノだったが、オルガニストとして、パイプオルガンもやっていた。こんな学校の小さなオルガンではない。また、教職に復帰しようかと考えていた矢先だった。良介は、音楽を取り戻すかのように、オルガンを撫でていた。

「おまえ、生き残ったか」と、まるで友人に語りかけるように涙さえ流していた。

良介は、壊れている箇所を点検しながら、徐ろにオルガンを弾きはじめた。バッハのコラールだった。荘厳な宗教曲が、誰もいない音楽室に響き渡った。良介は、戦争で亡くなった多くの戦友の顔を思い浮かべながら、鎮魂の曲を目を閉じながら弾いていた。その曲は、廊下から階段を下りてゆく。階下の教室に借り住まいしていた罹災家族の耳にも届いた。みんなは、何か聞こえると、ぞろぞろと三階に上がってきていた。そして、良介の演奏が終わると、みんな一斉に拍手していた。驚いたのは良介だった。気が付いたら子供から年寄りまで、ずらりと音楽室に並んでいたのだ。

まもなく、良介はまた音楽の先生として、勤めることとなった。校長は音楽に理解のある人で、良介に提案していた。

「どうだろうか、秋元先生、音楽会を開いてみたら。みんな娯楽もないし、歌う気力もないのだ。ひとつ、励ましてくれんかの」

良介のオルガニストとしての腕は当時の日本でも数少ない。上野の音楽学校は戦後、東京芸大になったが、良介の同期には團伊玖磨や芥川也寸志らがいた。いまの芸大でもオルガン奏者というのは何人もいない。それほど希少な存在だった。

良介は、戦時中は、国家の一大事に西洋音楽などと、睨まれていたのが、急に解禁になったように、またみんなの前で聞かせたかった。

十月のある夜、校庭にオルガンが運び出された。いい月が天上に出ていた。星月夜だった。大勢の市民が、噂を聞きつけて、古川国民学校の校庭に集まってきていた。校長先生より、挨拶があり、老若男女が、ようやく、落ち着いた気持ちで焼け跡のコンサートに出かける気分になったのだ。

曲目はバロックが多かった。バッハの前奏曲とフーガに始まり、みんなの知っている唱歌に入った。埴生の宿から古里、月の砂漠、荒城の月が、流れると、みんなすすり泣いていた。音楽に言葉はいらない、理屈もいらない。人々はそうした慰めるものに飢えていた。演奏会が終わると万雷の拍手が湧き起こっていた。ひとりひとり、そこに純粋な眼があった。良介は今日ほど音楽家であったことに矜持を持ったことはない。たかが小学校のオルガンではあったが、それは、この夜、どんな立派な教会のパイプオルガンより美しく響いた。

その秋元先生は三年前に他界された。平和のための多くの五線譜を残していた。

いまでも、そのオルガンは保存されている。戦争という悲惨な時代を生き抜いてきた証人として。

そうですか、隆彰はそんなところにいましたか。ええ、画学生でしたがね、芸大を出てから、そうですねえ、三年はパリに行っていました。モンマルトルの安アパートに暮らして、テリトル広場で似顔絵を描いて生活費を稼いでいましたね。確かに楽ではなかったようです。宮田重雄画伯が彼を訪ねて行ったとき、穴の空いたすり切れたスモックを着ていて、食うや食わずの生活をしていたらしいです。食うために「売り絵」を描いて、自分の才能を切り売りしていたんですね。宮田画伯は連れ戻しに行ったんです。「そんなことは止めろ」と、叱責したらしいんですが、げっそりと痩せ細った彼は、もうすっかり自信を失っていたんです。

まあ、そうでしょう。世界から画家の卵が集まってくるパリですから、自分より巧い若く貧乏な画家は掃いて捨てるほどいますからね。彼はショックを受けて安っぽい風景画なんか日本人の観光客好みのビュッフェに似せた手法で描いていたんです。

帰りの飛行機代もなかったらしいですが、のこのこと髭面の汚らしい格好で帰国したくはなかったのですね、彼としては成功して凱旋したいと思っていたんです。みんなそうです。ニューヨークの個展で成功したいとか、少なからず野心を抱いて渡米したりするんです。でもね、この銀座だけでも二百を超える画廊がひしめき合っているんですよ。あなた、毎日、この銀座でどれほどの個展が開かれていると思いますか？ それはニューヨークでもパリでも同じことです。マスコミも取り上げない、通行人も入ってこない、がらんとした淋しい個展が多いんです。

隆彰は、失意のうちに友人から借金して帰国しました。それからの消息は判りませんでした。二十二歳で、ビエンナーレで入賞を果たし、世間の注目を浴びたのが、彼にとっては不幸なことでした。彼は、もう四十を過ぎましたか。そうでしたか、北海道の石狩にいたんですね。

わたしは、銀座でも三本の指に入る画廊の社長と話していた。国領隆彰はわたしの芸大の同期だった。彼が国際的な大賞を得たとき、仲間は驚きと妬みを誰しも持った。世間も天才画家と持ち上げすぎた。早熟で終わる者もいる。わたしは、晩生で、画家で食おうなどとは思っていない。彼と同じ油で平面よりやらないが、こつこつと決して焦ることなく描き続けて、日展や独立、自由といった展覧会に入選して、地道に進んできた。そして、食うためには大学に残り、教育の道を歩んでいた。

国領からはよく手紙が来ていた。それが、ぴたりと音信不通になって、帰国した話も聞いていなかった。古い週刊誌を偶然に見て、彼の生きていたことを知ったのだ。冬の北海道の旅特集の記事の中に、奇人として取り上げられていた。写真で見る限りは、色黒で髭面の熊のような風貌から、とてもあの華奢な隆彰を想像はできない。イオマンテ国領という名前だったが、国領とはそうある名前ではない。その男は、石狩川の河口付近の砂浜に画廊を建てて、自分の住まいとアトリエにして、海と砂浜ばかり描いているというのだ。札幌辺りでは、変人の画家として少しは有名らしい。

わたしは、彼である確信を持って、北海道へと飛んだ。実は、あれから二十年経った彼がどんな絵を描いているのか、見たかった。そして、どうして、そんな辺鄙なところに蟄居しているのか、なにもかも謎に包まれている天才のその後を見たかった。

飛行機は千歳へと降り立った。二月の一年で一番寒さが厳しいときに、よりによって、わたしは衝動的に旅に出たのだ。高速バスで札幌まで行く。外は一面の雪野原で、気温は真冬日の氷点下七度だった。

石狩までは、路線バスに乗って、のんのんと一直線の道路を走るのだ。札幌はもう雪まつりは終わっていて、観光客も少ない。札幌も北のほうが、開拓の臭いがする。バスはだんだんと民家も建っていない原野を走り、大きな石狩川の河口に近い、石狩町に着いたのは、少し陽が傾きかけたころだった。

わたしは、遅い昼食を淋しい町の食堂で食べた。石狩鍋がついて定食だったが、安くてボリュームがあり美味かった。そこのお姉さんに画家について尋ねると、笑うだけで、何も話さないのがこっちも可笑しくなった。何か、わけがありそうだった。歩いても近いと云ったが、田舎の人のすぐ近くは注意しなければならない。都会もんは騙されて、すぐ近くと思うと一時間以上は歩かされたりした。

道路が行き止まりになり、広い石狩川が見えた。積雪はそう多くはないが、雪がそのまま氷のようになって、薄日に光って見えた。どんよりと曇っていたと思うと、陽が差したり、雪がちらついたり、奇妙な天気の中、わたしはどんどん海に向かっていった。砂浜と雪が混じり合って、その先に日本海が吠えるように押し寄せていた。風も強くなってきていた。家もなにもない砂浜の上にぽつんと粗末な家が建つ。看板も出ていたが、それが国領の画廊だった。海辺のアトリエはそのまま、白い建物で、オブジェとなっていた。この何もない海辺の風景に溶け込んでいた。

わたしは、暫く海を見ていた。誰も来ない海だった。その証拠に白い雪の上にも砂浜の上にも足跡ひとつないのだ。丸太で造ったテラスもあり、砂の上に無造作に白い椅子が置かれてあった。そのどれも、彼が造り、配置したものだろう。すべてが絵になっていた。彼の造りだしたもの、それは、アトリエという名の立体造形だったのだ。

わたしはドアを開いた。鍵がかかっていないので、やっているのだろう。一階はそのままギャラリーになっていた。鋳物の洒落たストーブがあり、薪が積まれてあったが、火はついていなかった。電灯も消してある。

「国領さん、おられますか」と、わたしは、声をかけたが、どこからも返事は返ってこない。四十号から二百号までの大きな絵が壁一面に掛かっていた。それは、可笑しかったのだが、壁の向こうの風景が描かれてあった。まさに透過する壁面とでも錯覚させるかのように。砂の上に海浜植物が這っている。そして、遠くにぼんやりとした海があったり、灯台や電信柱が墓標のように立っていたり。

彼は、ここに何十年もひとりで暮らしていたのだろう。それにしても可笑的。誰もいないようだ。床やテーブルの埃がそれを物語っていた。このギャラリーには、人の気配がしないばかりか、もう何年も訪れる人もなければ、生活の臭いも消えていた。二階への階段を上ると、蜘蛛の巣までがかかっている。それはひどかった。綺麗好きな彼は、たとえ貧しくとも、清潔にして

いたはずだ。

「国領さん、いらっしゃいますか」

物音ひとつしない。二階は住まいとアトリエになっているらしかった。電灯がないので、窓際だけが明るく、あとは薄暗かった。わたしは、一瞬、凍りついたように足を止めた。国領がいた。国領隆彰が、わたしをじっと見つめて意味ありげな笑いを投げかけていたのだ。それは、イーゼルにまだ立てかけていた未完成の彼の大きな肖像画だった。風景より描かないはずの彼は、向こうで失恋もし、友人に裏切られ、貧困のうちに夢も捨てて、それからは絶対に人物は描かなかったという。その彼が自分だけは描いていた。まるで生きている人間のように、生々しくキャンバスに塗り込められていた。突然、その絵が喋ったと思った。眼が動いた。わたしは、後ろに下がった。絵は生きていた。

わたしは、後ろ向きに階段を下りると、あとは一目散に砂浜を駆けていた。心臓が鳴っていた。あれは確かに国領だ。キャンバスの中に自分を埋めたのだ。真に芸術を追究する男が最後に辿り着いたのは、自分自身を絵の中に閉じこめることだった。それが、彼のこの世で最後の最高傑作となっていた。

週刊誌は古いものだった。取材したのは十年も前のものだ。彼はその後、自分が絵になると、無人の画廊として、その淋しい風景と同化してしまったのだ。

振り返ってはいけない。わたしはバス停まで涙を拭きながら駆け続けた。

第382話 判決の朝

いつもなら空席の支店長の椅子に、その朝だけは誰よりも早く入社した支店長が座っていたから、大概の社員は驚いた。

「珍しいことがあるな、支店長が一番だなんて」

厳格で目が怖いと懼れられている支店長の様子がいつもと違うことに誰しも気付いていた。あの鋭い眼つきがない。何か定まりのない視線をちらちらと動かしている。それだけでない、立ったり座ったり、時折、窓辺に立ってじっと外を眺めていたりしていた。電話が来るとびくりとした視線を電話の方に送ってきて、少しだけ姿勢を低くしたりしていた。

「おい、支店長の様子、何かおかしくないか」

「そうだな、さっきから落ち着かないっていうか、何かを懼れているような」

男子社員たちが、あれこれと詮索していた。

「愛人がいるのを奥さんに見つかったとか」

「不倫で、相手の旦那から訴えられているとか」

普段、真面目な人ほど裏ではとんでもないことをしているものだ。とても、支店長の勤務態度からは想像もできないことをみんなは想像していた。

当の支店長は、仕事は上の空だった。

「支店長、決済をお願いします」

と、持ってきた重要書類に、なんとハンコを押す積もりが、火のついたタバコを押していたから、ぽっかりと穴が空いた。女子社員は、わあーと泣いて席に戻った。

と思うと、新入社員が、支店長からスポイルしてくれと云うべきところをボイルドしてくれと命じられ、廃棄書類の束を受け取ったが、もう支店長は上の空。新入社員は、そのまま受け取り、流しに持ってゆくなり、ガスレンジに火をつけ、鍋にお湯と書類を入れて煮立てていた。どうみても美味しそうではない。

会社の歯車がみんな狂い始めていた。いつもの支店長の睨みがないから、やることなすことへまばかり。支店長に電話がかかってくる。直通だ。それが、机の上で盛んに鳴っているのに、支店長ときたら、わなわなと震えて、電話をじっと凝視するばかりで、受話器を取ろうともしないで、逆に後退りしている。

「支店長、お電話です」たまりかねた女子社員が支店長の前に進み出て云った。

支店長はみんなの憐れみとも軽蔑ともつかない視線に気が付いて、はっとした顔を向けていた。

「す、すまん、き、君が代わりに出てくれんか」

女子社員が代わりに電話に出た。本社からだった。

「はい、ただいま支店長と代わります」

支店長ははっとした顔をして、電話に出ると、いつにない小声で「はい、はい、どうも」と、情けない声を出していた。

「何かあるわね、絶対におかしいわよ。これはきっと大問題なのよ。会社が危ないとか」

「どうしよう。倒産するのかしら。わたし、仕事探さなきゃ」

「それとも、会社の一大事に関わるような失敗をしたとか」

「責任を取られて、左遷かしら。でも、あの様子では、自殺するかもしれないわ」

女子社員たちも、ひそひそと話し合っていた。妙に電話を怖がるのが怪しい。何を懼れているのか。朝から、支店長ともあろう人がおろおろして、仕事に手が着かない。うろうろと、歩きまわったり、じっと考えこんだりして、精神的にもかなり異常だった。

会社の中では、大声を張り上げ、怒鳴っているのがいつもの支店長だ。その緊張感で社内の空気が保たれていたのに、みんなに不安定な歪みが伝染していた。

支店長は、何かを待っているのだ。それも電話がかかってくることに関係がありそうだ。推理小説ばかり読んでいる社員は、何か臭う。これは犯罪が絡んでいる臭いだ。脅迫されているか。相手が暴力団か。強請られる何か重大な秘密を握られているのではないか。あれこれと推測して、パソコンで仕事をするふりをしながら、その疑問点を列挙していたりする。みんな、同じく、仕事が手につかない。どうも落ち着かない。うろうろ、お茶ばかり貰いにゆくやつ、タバコを吸いに喫煙所に立つやつ。とうとう、支店長の苛々までが伝染して、事務所の中を考えごとでもするように、何人もの社員が支店長の後ろをついて、うろうろ歩き始めた。支店長が踵を返すと、みんな同じように方向転換する。

そして、肝心な電話がかかってくると、全員がドキリとして、電話を魔物か何かのように見つめるのだった。今度は、電話恐怖症が全員に移っていた。誰も受話器を取ろうとしない。事務所

の何本もの電話があちこちで鳴り始めていた。それでも誰も電話を取ろうとしない。一種の集団催眠にかかったようだった。ようやく、その馬鹿らしさに気が付いたひとりが受話器を取る。

「はい、北村ファイナンスですが。はあ、支店長ですか。おりますけど、どちら様ですか。はい」

女子社員が不審な様子で、支店長の電話に繋ぐため、保留にしていた。

「支店長、そのお、名前を云わないんですが、若い女性からです。パパを出してって」

みんなの顔がいままでの疑問が解けたように晴れやかになった。支店長はおどおどと電話に出た。

「おお、佳子か、お父さんだ。何？ そうか、やったか、高校に合格したか。よかった。よかったなあ。お父さんは心配で心配で……」

みんな啞然としていたが、気を取り直して、黙々と仕事に向かっていた。

第383話 宗教戦争

駒田家は、近所からイスラエルのようにと云われていた。いろんな宗教が混在する珍しい家であった。

祖父は天理教、主人は門徒宗の檀家で、妻は日蓮宗、息子はキリスト教、娘は創価学会、居候の叔父は何故か儒教の信奉者ときていた。

普段は仲がいい家族だが、こと宗教のこととなると対立し、いがみ合い、果てはいつもの喧嘩になる。一番末っ子の小学四年生だけが、玩具とお菓子以外は信ずるものがない。

朝から、この家は賑やかだ。祖父は自分の部屋の天理教の祭壇の前で、手踊りしながら「悪気を祓うて助け給えイチレツしましてカンロウだ」と歌いながら祈祷している。二階の娘の部屋では法華の太鼓が鳴りやまない。ますます高鳴る太鼓の音。仏壇の前では主人が読経する。「拓羽意偉雄徒虎……」。そうかと思うと、息子の部屋の MARIA 像の前では、息子が主の祈りを唱える。「天にまします我らの父よ、願わくば……」。妻は妻で、自分の部屋があり、そこには髭文字のお曼陀羅が貼られ、朝のお勤め、南無妙法蓮華経……。

全員揃う朝飯前に、何故か、ダイニングルームにある神棚の前に全員整列して、二拝二拍手。御神酒も上げて、どうやら日本の神様だけは別扱い。信仰の対象外か、特別粋らしい。

御飯を食べるときもちゃんとお祈りをしたり。合掌したりして、戴く御飯に感謝する気持ちは皆同じ。

「子曰く、朝に古本を買わば、夕に死すとも可なり。うん」

叔父は、いつもの習慣で、食卓の前に突然立って、論語をひとつだけ読み上げる。誰も聞いていないが、ひとりだけ満足そうに納得していた。

この家族、どこまで信心があるのか、クリスマスになればケーキを買ってきて、家族でパ

一ティーをやるし、新年ともなると、全員で神社へ初詣。まあ、日本人のいいところは宗教に関しては寛容なところがあるということか。悪く云えば不信心。八百万の神という根本的な宗教観がどこかにあるのか。

もともと駒田家の人々はかぶれやすい性質を持っていた。家族それぞれが同じ宗教に入信すれば問題は起こらなかったのだが、みんな学校、友人、職場の上司と、いろんな人に勧誘されて、のめりこんでいった。世の中がおかしくなれば、何かと苦しいときの神頼みで宗教大流行り。テレビをつけるとまだオカルトブーム。悪霊退治の番組が受けている。先が見えなくなると、すぐるものは非科学的な観念に取りつく。またそこにつけ込む商法もある。

駒田家の諍いは決まって夕食後に起こる。論争が好きなのも性質か。

「なによ、キリストなんか、磔になったとき『神よ、わたしをお見捨てになるのですか』と、云ったこと自体矛盾しているじゃない」

と、娘が息子に噛みつく。

「なんだよ、学会なんか金集めじゃないか。貧乏人から搾り取る」

「云ったわね、侮辱すると許さないからね。ところで、みなさん、今度の選挙はよろしくね。池野大造に投票してね」と、急に態度が変わるから怖い。

「二人ともいい加減にしないか。うちは浄土真宗なんだから、ちゃんと仏壇の前で南無阿弥陀仏をご先祖様に読経してさしあげないと」

「あら、いまは夫婦別姓の時代ですよ。憲法でも信仰の自由は保障されているんですから、あなたがやればいいこと。わたしは日蓮様々ですから、親鸞は嫌いです」と、また夫婦喧嘩が始まる。

「どうせ、二人とも先に死ぬんだから、そうしたら、この家はぼくがキリスト教に改宗するからさ」息子がそんなことを云い出すものだから、父親は周章てて云った。

「なんだと、おれの葬式は、旦那寺の坊さんと呼ばなければならないからな。ちゃんと法事してもらおう。でなければ死んでも死にきれない」

「いやだよ、あんな陰気くさい仏教なんか。キリスト教の方がカッコウいいじゃん」

「何？ おまえ、格好だけで信仰しているのか。中身がないのか。アメリカに洗脳されやがって、だから戦争したりするんだ」

「いやいや、いがみあうことなく、陽気に暮らしましょう。天理王の尊はそう仰せですからな」

「おじいちゃんは、もう長くないからそれでいいの。これから未来を背負って立つ、わたしたち若い人の意見が大事じゃない。わたしは、これから日本が仕合わせになるためには池田先生のご教示により……」と、娘が参戦する。

「まあまあ、いつものことではありますが、子曰く、君子は周して比せず、小人は比して周せず。うん、けだし名言」

叔父までが、諍いに口を挟む。

「何よ、叔父さん、儒教なんか、神様でも仏様でもないものを信じて」

「なんと仰言っしゃる兎さん。すべてが教えですぞ。お釈迦様もキリスト様もマホメットも所詮、人です。先に教典ありきです」

「とにかく、キリスト教だよ。仏壇はぼくの代になったら処分するから」

「なんだとお、聞いたかおまえ、この家は呪われるぞ、仏壇もお位牌も法事もないとは、ご先祖様に申し訳が立たない。こんな息子に育てたおまえが悪い」

「躰はみんな母親の責任にして、あなたは一体、この家の何なのよ」

「やるか」「いいわよ、受けて立つ」

とうとう夫婦取っ組み合いの喧嘩になる。それを制するつもりが、弾みで殴られて、息子、娘、祖父まで喧嘩に割り込む。食卓はひっくり返す、皿は飛ぶ。ガラスは割れる。

すると、末っ子の小学生が叫んだ。

「みんな、やめてよ。喧嘩をするようなシュウキョウってぼくは大嫌いだ。神様がそう教えているの？ 戦争したり殺したり、殴ったり、そんなシュウキョウなんかいらぬや」

みんな、シーンとなった。

第384話 遠い歌

大正、昭和、平成と生き抜いてきた老人の葬儀が、しめやかに執り行われていた。根市省三、享年八十。戦前は青森で海産物問屋から缶詰工場も経営するという地方の財閥であった。戦後、事業に失敗して、没落し、財産もすべてが差し押さえにあったが、わたしは、古本屋という立場で、その解体に立ち会った。たまたまわたしの父と新町小学校の同級生でもあり、商売仲間として、ずっと交際が続いていた。それで、浅虫の自宅を処分されるとき、蔵書を譲り受けてわたしは古本屋の支店を出した。

三万冊の蔵書は和本から洋書まで内容が濃かった。それらの大事な蔵書を紐で括って、運び出していると、根市さんは、割れたSPレコードを持ってきた。

「北村くんよ、このレコードはわしの大事なものなんだが、なんとかもう一度聴けないものかな」

見ると、分厚く重い二枚組の戦前のドイツ盤だ。ジャケットには靴跡がついている。レコードは半分に割れていたのであれば、まだ修復可能だろうが、細かく割れていた。

「これじゃ、無理ですよ。たとえ、きちんと張り合わせても、針が飛ぶどころか雑音だらけで聞こえないでしょう」

わたしは、ドイツ語は読めないが、クラシック音楽は好きだから、フランクと読めた。ピアノトリオらしい。奏者もカザルス、オイストラッフと読めた。

根市さんは、そうかと残念そうな顔をしていた。

「わしが生きている間に一度だけでいいから、この曲を聴きたかった」

「そんな、レコードかCDが出ているでしょう」

「いや、これは、セザール・フランクのピアノ三重奏曲二番と云ってな、いまは忘れ去られた幻の名盤なんだ。どこのレーベルも出していない。まして、ピアノがルービンシュタイン、ヴァイオリンがオイストラッフ、チェロがカザルスといった、往年の大家で結成されている、もう二度と聴けない曲なんだよ」

「でも、そんな大事なレコードを、どうして……、これは踏みつけた足型でしょう」

「終戦後に進駐軍が青森に入ったとき、囚人のような兵隊たちが、うちの蔵に入って、手当たり次第にものを持って行った。そのときに、わしは止めに入ったんだが、銃座でしこたま叩かれた。その兵隊の足の下にあったのが、このレコードだった。彼らには金目のものより興味がなかった。蔵書やレコードは踏みつけて終わりだ」

わたしは、その話を聞いて考え込んでしまった。わたしもフランクは好きだった。ヴァイオリン・ソナタが一番有名で、あのアンニュイな曲想がなんともいえずに物憂げでいい。かなり聞きかじったわたしでも、フランクのピアノ三重奏曲二番の存在すら知らなかった。よくあるのは、遺作の中にある、作者不詳のものが、本人の作曲ではないかと？付でリストに載ることはある。とにかく、やってみようと、わたしは壊れたレコードを預かってきた。

それを暫くは忘れていたが、本人から電話がかかってきて、思い出した。一北村くん、あの割れたレコードはどうなったか。わしはどうやら癌で余命幾ばくもない。医者に宣告されて、いまは病院から電話しているところだ。なんとか、生きている間に一度だけでも聴きたいのだが。頼む。

根市さんが入院していたとは知らなかった。

一はい、いま、なんとか急いで修復してみます。

と、いい加減な返事をしてみたが、果たしてできるものか。わたしは、接着剤で慎重にレコードをジグソーパズルのように貼り合わせてみた。すべてのパーツはあって、レコード二枚はきちんと円盤にはなったが、針が飛んだりするだろうし、雑音が出るだろう。ただ、わたしは蓄音機は持っていなかった。友人で、テレビ局のディレクターをしているオーディオマニアがいた。彼は、確かかなりのSP盤と古い蓄音機の蒐集家でも有名だった。早速、わたしは彼の自宅を訪ねた。レコードは七十八回転だから、一枚が十分くらいしかない。交響曲なら五枚組というのも珍しくない。また、盤は厚く重いもので、落とすとすぐに割れた。

「ほう、これは珍しい。珍盤だね、ちゃんとしていると高値だよ。いま現存しているのもほとんどないだろう。楽譜も大戦で消失したっていう話を聞いたことがある」

その演奏は、戦争が起こる前の録音だったが、敵国を乗り越えてのドイツでの演奏であったということに意義があった。

「よし、ともかくやってみよう。デジタルで録音を取る。そのあと、パソコンで、ノイズを消す作業に数日はかかるが、構わないか」

「やってくれるか、じいさんが死にそうなんだ。何とか聴かせたくてな」

一週間して、友人から「なんとかやったよ」と電話がきて、わたしは、原盤と、録音したCDを貰いにいった。早速、CDプレーヤーと共に病院に持参した。前に見舞いに行った病室に行くと、その個室は綺麗にかたづけられていた。

「ここに入院していた人は、退院したんですか」と、看護師さんに訊くと、

「いいえ、根市さんですが、昨日の朝方、お亡くなりになりました」

わたしは衝撃を受けた。間に合わなかったか。あれほど聴きたいと云っていた曲が、わたしの怠慢で遅れるなんて。ひどい後悔にさい悩まされた。

そのフランクのピアノ三重奏曲二番の悲壮な第一楽章が流れていた。根市省三さんの通夜の席だった。わたしも初めて耳にする隠れた名曲だった。第二次世界大戦をくぐり抜けてきた平和を願う歌が、兵士の軍靴に踏みにじられ、いままたここに再現されていた。

「聴いていますか、根市さん」

献花する人々も、忌まわしい戦への憤りで高鳴るピアノと、平和な安らぎのアダージョの緩楽章に涙していた。音楽だけが、時空を越えて伝えるものがある。

遺影が笑った。そんな気がした。

第385話 平成一揆

二〇△□年、政府は財政難を立て直すために、ついに消費税を五割にし、所得税を現行の三倍にした。健保国保、固定資産税すべての税金も三倍にした。そうしたら大変なことが起こった。サラリーマンが、源泉徴収されて、手元に残るのが一万円にも満たない。ひどい人は、マイナスで、逆に不足分を払わねばならないといった信じられない事態になった。働いても働いても、全部収入が持ってゆかれるばかりか、足りないとくる。生活費が一円も取れないのに、尚も税金を支払えというのか。

とうとう、温厚な国民も怒った。税金を払うためだけに働いているのではない。江戸時代でも四六公民という重税に農民は泣いた。いまは、十公〇民だった。あるいは十一公マイナス一民だ。ここまでよくもみんな黙っていたものだ。怒るには遅すぎた。

それは東北から起こった。北の外れの市から一斉蜂起が始まった。現代の一揆だった。首謀者は金澤命助。それに同人の、前田、工藤、笹田、駒田、北村と続いた。最早、市役所や県庁も疲弊して、地方自治体もやりくりがつかなく、かつては代官、藩主だったが、その役人たちも賛同して、命助たちに随行した。警察も無力化してしまい。いまや、地方では誰も止めることはできない。

みんなは各々一揆の印の旗を車のアンテナに付けた。旗には小さな〇が描かれているだけだった。江戸時代も小さな〇で困ると洒落た。それを連帯と参加の御旗とした。命助の同人が呼びかけたから、市内だけではなく県内のあちこちから、自家用車やトラクター、耕耘機、オートバイ、トラックなどが、続々と一揆参加してきた。みんな一様にアンテナの旗竿にコマルを靡かせ、同じマークの鉢巻を締めていた。そして、国道四号線を東京に向かってどんどん南下してゆく。

初めは、同人の仲間と知人親戚などの百台にも満たなかったが、噂を聞きつけ、不満を爆発させた農家や漁師、道路工事、建築関係、商店の親父、警察官まで、どんどんとその車の列に加わってきた。いまや、国道に合流する車という車は、各郡部から一揆に参加する車が繋がっていた。様々な車があった。ゴミ収集車からパトカー、霊柩車までいた。バーキュームカーは、いざ戦いとなると、威力を発揮するだろう。消防団の放水車も、戦いには使える。みんな、怒っていた。上は百歳近い年寄りから赤ん坊まで、女子供も交えて、みんなバットやスコップなどを車に積んで、目指すは東京だ。

百台が千台になり、一万台と参加車両は膨らんできた。隣の岩手でも宮城でも、住民たちは、車に石を積んだり、物干し竿を積んだりして、どんどん列に加わってくる。マスコミの取材は上空からヘリコプターで行われていた。その臨時ニュースを見た、付近の住民もどんどんと参加してくる。

政府は、国道封鎖に踏み切った。パトカーと機動隊、トラックなどをバリケードにして、土嚢まで積んで、国道四号線を完全に通行止めにした。警官たちも、相手は善良な市民たちだ。自分たちの親戚や友人が加わっているかもしれない。迂闊に手を出せないどころか、公務だから嫌々やっているが、本当は一緒に加わりたいほどだ。みんな困っている。怒っている。

金澤命助を乗せたダンプカーが先頭を切って、凄い排気ガスで走ってきていた。バリケードが見えるとみんな一斉にクラクションを鳴らしたものだから、すごい騒音になった。警官たちは、あまりの数の多さに逃げ出すものもいた。先頭が大型のブルドーザー三台と、ロードローラー、除雪車に代わった。土嚢が積まれようが、トラックが横付けされていようが、構うことはない。先頭の特殊車両の馬力は凄まじいものがあった。一気にバリケードを脇に押しやり、道を開けた。いとも簡単に封鎖は破られた。ますます人々はいきり立った。こうなっては、もう誰にも止められない。首都圏目指して車両の列は爆走していった。その数は五十万とも百万とも云われた。参加している国民は三百とも五百万とも云われた。

一揆のニュースが全国に流れると、それに触発されて、上信越からも、山陰道、山陽道からも続々と国道を東京目指して真っ黒い車の塊が、蛇のようにどこまでも長く続いているのが、飛行機からは見えた。それは、もはや一揆というものではなく、革命に近かった。怒濤の勢いで首都に迫っていた。

政府は自衛隊の応援を要請したが、自衛隊は動かなかった。上が命令を下しても下は動かない。みんな、国の親兄弟が参加しているとケイタイで連絡が入っていたからだ。

追いつめられたのは小鼠内閣だった。国会議事堂と首相官邸に来るのは判っていた。鉄条網を二重、三重にして、車両が突入できないように、国会の周りには急遽、塹壕が掘られた。いまだかつて経験したことのない恐怖が国会議員たちの間に走った。当然、与党の議員たちだが、その党首の小鼠は全く慌てていない様子。

「総理、いまや国民の半分がこの国会目がけて押し寄せてきています。彼らは善良な市民ばかりですから、むやみに発砲したりはできません。どうしたら止められますか。あの国民の暴走を」

官房長官が泣き声になって訊いた。小鼠総理はステレオでXジャパンの歌を聴きながら、ゆったりとコーヒーなんか飲んでた。

「君も、少し落ち着いてコーヒーでも飲んで、ヨシキの歌を聴きたまいよ」

余裕綽々としている小鼠にはその先がどうなるか判っていた。

「大丈夫、彼らは国会へは辿り着けんよ」

「はあ？」

小鼠の云う通り、すべての国道が首都圏の手前で大渋滞に陥り、身動きできないでいた。日本の半分の車が東京へ押し掛けてきたらどうなるか。誰もそこまでは計算していなかった。

金澤命助は地団駄を踏んだ。

「くそっ、一揆はやはり徒歩に限る」

第386話 保証人

町中でよく見かける看板に保証人というのがある。高利貸しと同じで、保証人がいないで借入に困っている人に、保証人になってあげるから、保証料をいくらいくら支払いなさいという。云ってみれば、手形割引と同じで、この不況に貸し渋りで、どこも融資が受けられない経営者などが泣きつく。一千万円を借りなければ、月末の手形が落とせない。身内も友人もみんな資金繰りに困っているのと、業績の悪化を知っていて、みんな門扉を閉じた。それでやむなく保証人の看板に頼る。

窓口には性質の悪そうなおさんくさい連中がいて、

「社長さん、いくらあれば乗り切れるんですかい」

「一千万だ」

「それなら、一千三百万借りれるようにうちが保証人を立てましょう。三百万は保証料として戴きます」というやつで、もっと高いところはいくらでもある。藁をもすがりたい人の弱みにつけこんだ商売だ。銀行が貸さないから、そんな金貸しより率のいい商売が罷り通る。闇金融も違法な法定金利以上の手形を差し入れさせたりして、だんだんと巧妙になってきている。そんなのに引っかかれば大変なことになる。

こんなどん底景気の世の中に、保証料も取らないで、喜んで保証人になるという資産家がいた。その御仁は広いお屋敷に暮らしている、元商工会の会頭もし、大手会社の会長もつい先日辞めたばかりの地元の名士の北村拓道だった。日頃から、政府のやり方には不満をぶちまけていた。友人知人の会社や工場がどんどん倒産して閉鎖してゆくのを忌々しそうに見てきた。銀行のやり口にも腹が立っていた。金を貸してくれと、いろんな人が来るが、返す宛のない人々に貸すと身が持たない。そこで、保証人なら喜んでなりましょうと、判をつくようになった。勿論、善意でしていることで、礼金も何も受け取らない。

それを聞きつけて、近在からも経営難の零細企業の親父たちが頼みに来るようになった。北村家の玄関には連日大勢の親父たちが行列を作った。全く顔見知りでもなんでもない赤の他人でも快く保証人になるというので、中には、融資の資金を得るとどろんしてしまう悪いやつらもいた。それでも、北村は何も考えないで、気持ちよくハンコを押し続けた。一日に数百人の連帯保証人覧に記入と、押印し続けた。それに使う印鑑証明の手数料だけはみんなから貰っていた。何百円かだから、それぐらひはみんな支払って文句はない。

北村の使いの者が、市役所に行って、印鑑証明を三百枚とか申請すると、窓口の係は驚く。最近では自動になって、機械に金を入れると、印鑑カードだけでいくらでも出てくる。

北村の資産内容を知っている銀行は、どこも北村の保証であれば喜んで貸した。それで救われた中小企業は数知れず、聖人として崇めるものも出てきた。こんな世知辛い世の中にリスクを喜んで引き受ける者はいない。

ただ、北村の資産は何十億もあるわけではなく、大口が焦げ付いた場合を考えると、銀行もだんだんと警戒心を抱くようになってきた。いまのところは、まだひと月も経っていないから、焦

げ付くという事故はないが、これからは発生する恐れがある。一日三百人の保証をして、ひと月で一万人くらいになる。その合計の借入保証額は大変な数字になることは、銀行同士の情報交換で判ってきた。

みんなはなんの目的があって、そんな一円の得にもならない保証人に立ってと、北村の行動は不可解なことばかりだった。義人と云っても限度がある。自分の全財産を投げうっても足りないほどの保証を引き受けるのはまさに気違い沙汰だった。

北村には家族というものがいない。両親はとっくに他界していたし、若いときに結婚に失敗してからは、子供もいなかったことを幸いに、ずっと独身を通してきた。いまは、財産を残すものもないし、守るべきものがないということは実に強かった。

自分も若いときから事業で、散々資金繰りの辛さを舐めってきた経験がある。それで、この最近の状況に目を瞑ることはできなかった。そんな義憤が北村を今回の行動に走らせた、評論家はマスコミに書いた。

だが、当の北村はそれほど人がいいのではなかった。彼にはある策略があった。いままでは、彼は一円も出費していないのだ。全く代位弁済というところまでいっていない。多くの商工者たちは、その北村の誠意に答えるように、懸命に働いてきちきちと毎月の支払いは滞ることはなかった。

だが、そろそろ危ない。

また、保証人になってもらおうと、近県からも押し寄せてきた人々が、北村の玄関に並ぼうと、朝早くから来ていたが、門は堅く閉ざされたままだった。電話も通じない。電気工事の業者が来ていた。並んでいた親父たちが詰め寄って訊いた。

「ここの北村さんはお出かけですか」

すると、業者はきょとんとした顔をして云った。

「ここの家は持ち主が変わったようですよ。なんでも東京の不動産会社が買ったとか。前の持ち主は引っ越したらしいですよ」

「ええ？ 引っ越したって、どこへ？」

それは誰にも判らなかった。海外へ行ったらしいということは、成田で目撃されて判っていた。財産はすべて売却されて、その資金はすべてアフガンのボランティア団体に寄附されていた。彼は隠し財産もなく、裸一貫でどこかへ消えたというのだ。

さあ、慌てたのは銀行だった。数千億の債務保証をした御仁がある日突然消えたのだから。

第387話 雪解け

ぼくたちは春が嫌いだった。大好きな冬が行ってしまうのは淋しい。

暑いのはいくら暑くてもいいという夏指向の人と、暑いのは苦手、寒さに強い人がいるようだ。ぼくらは後者のほうで、どんなに寒くても平気だった。むしろ、寒いほうが元気だ。寒いと、思考能力も高まると思う。きりっと妙に冴えて、頭が冷却されてすっきりとする。暑いと

、頭の中がぼうっとして、考えることもたいぎだ。だからというわけではないだろうが、どちらかという、偉大な哲学者は雪の降る裏日本から北国に多いのではないだろうか。

でも、ぼくらは決して頭はよくない。何故なら、学校ではあまり勉強しないからだ。体育の時間なら好きで、授業が終わっても、なかなか教室に引き揚げないこともある。それでよく先生に叱られた。

どうも教室の中に大人しく座っているのが苦手だった。雪が降る日なんか、じっと窓から外を眺めているくらい勿体ない時間はない。猛吹雪なんか、面白くて面白くて仕方がないというのに、どうして、別の勉強をしなければならないんだ。短い冬の、しかも少ない学園生活だから、とにかく大いに走り、雪合戦をしたり、大きなお城を造ったり、かまくらを造って、中で寝ころんだり、したいことは山とある。どうせ、将来といっても、ぼくたちの将来には社会や理科は役に立たないのだ。算数や国語もたいして役に立たない。どうせ覚えたって使うことはないんだ。

そんなことより、いまを楽しんだほうがいいに決まっている。先のことは考えない。明日、戦争があるかもしれないし、大地震があるかもしれない。いろんな予言者が、二千年を過ぎた辺りが地球が滅亡するって云っていることだし、先のことは判らない。長生きしてもいいことはなさそうだ。だから、いまだけを楽しんで遊んで暮らしたほうが幸せなんだ。

将来がないぼくたちに、勉強や試験は何の意味もないんだ。美味しいものをたらふく食べて、ゲームをしたりマンガを読んだり、テレビを見たりすることで、ぼくたちは忙しいのだ。余計なことを考える暇はない。

よく、馬鹿な質問をされることがある。将来、何になるとか、同じことだけど、大きくなったら何になるとか。ぼくたちは大きくなならないから心配はいらない。生まれたとき、子供だったら、死ぬまで子供なんだ。生まれたときから大人だったら、死ぬまで大人。判るかな。判らないだろうな。そのようにして、生まれてきたのだから、仕方がないことなんだ。誰に文句云っても仕様がなし。いつまでも子供でいて、それでいいと思うものもいることだし、子供を経験したことがなく、一生大人で終わるものもいるし、様々だね。結果はみんな同じなんだけど、どうせ、生まれるなら、子供のままだいいよ。仕事をしなくてもいいし、勉強が嫌いだからと、学校をズル休みしたって判らないときもある。一日遊んでいたって、誰も怪しまないし、大人が食べさせてくれるだろう。責任がないっていうことは、自由で楽しいことだ。どうせなら、また生まれてきたら、子供にまたなりたいものだね。

ぼくたちは、太陽が嫌いなんだ。紫外線は大敵だ。こんなことを云えば、女の子みたいだけど、ぼくたちは確かに色白で、なんの化粧もしていないのだけど、生まれつき白いんだ。でも、太陽だけはいけない。太陽を極端に懼れるのは、ドラキュラ以上かもしれないね。晴れた日は嫌で仕方がなし。曇っていたり、吹雪いていたほうが、生き生きとしているんだ。だから、夜は素敵だね。雪がふんわりと積もっていて、電灯だけがぼつりと点いているいるんだけど、雪明かりというのもあって、ぼんやりと、雪の塊が、何かに見えるんだ。春まで雪に埋まっている車や、ポストや、何か判らないものの上に雪が積もっていると、それだけで物語ができそうだよ。

ぼくらは、夜行動するんだ。誰も見ていないときに、子供部屋の玩具たちのように、動いて騒ぐんだ。夜型なんだね。最近の子供たちも、完全に夜型になりつつあるようだ。親がそうだから、子供まで夜中まで起きていたりする。夜ってまた楽しいものね。コンビニもスーパーもいまは

二十四時間営業になってさ、夜中にごそごと出かけて、ドーナツを食べに行ったり、ファミレスに夜食を食べに行ったりするって、ぞくぞくするよね。

その代わり、朝は辛いし、起きるのが苦手。起こしてもらって、朝御飯も食べないで学校へ行ったりする。夜中まで食べ通しだから、どうも、胃がもたれて、朝は食べる気がしないんだ。午前中は眠くて眠くて、ぼんやりしていることが多い。それじゃいけないんだろうけど、ぼくたちの生活パターンがそうってしまったから、もう直らないかもしれない。

ぼくたちが、新学期というのは北国では十一月の中過ぎだ。そして、冬休みがあって、三月の中くらいで、終わるんだ。白鳥がやってきて、シベリアに戻るまでの短い一生なんだね。だから、どんな我が儘云っても許してほしいんだ。

春なんか、来ないほうがいいんだ。気温が氷点下から上がってくると、ぼくたちの死期が近づいているんだ。ほら、だんだんと溶けてきただろう。初雪のときにどこかの子供がこしらえた雪だるまが、根雪になって、春まで生き延びられることは稀なんだ。天気予報では暖冬だって云っていたから、今日も十度という暑さはたまらない。そろそろお別れのときが来たみたいだね。目玉のたどんがぼろりと落ちた。顔も変な顔になってゆく。だんだんと小さくなってきた。明日まで生きていられるかな。ぼくたち雪だるまの運命は、お天気次第なんだ。ほらね小さくなって、原型もなくなってきたぞ。みんな水になってゆく。さよなら……。

第388話 コミュニケーション

会社のデスクにパソコンのないところはない。社員に一台というのも珍しくない。もう必需品になっていて、パソコンがなければ仕事ができなくなっている。

遥商事でも、事務所にずらりとパソコンが並んでいて、朝からみんな無言でバチバチとキーボードをせわしく叩いていて、仕事に没頭しているように見えた。総務部の中里係長が笹田主任にすぐ向かいのデスクなのだが、メールを送っていた。

一明日、どう、競輪に行かないか。三レースは2、6で決まりだ。

一いいっすね、先週は注ぎ込んだから取り返しましょう。

そうかと思うと、工藤部長が、女子社員の杉村に、

一いいだろう。今年になってまだ君と逢っていないじゃないか。もう遅いけど、いま頃になって姫始めと云うのかどうか、いつものホテルで待っている。

仕事そっちのけでオフィスラブだ。

大塚課長は、日土次長とチャットしていた。

一金澤部長の髪は薄くなっていないが、あれはひょっとしてアデランスでもしているのかな。

一リナックスでもやってんじゃないですか。

実にメールやネットのプライベート使用が多いという。上司が近づくと、ワンクリックで画面を切り替えるソフトもあるし、正面からならモニターの画面が見えるのだが、少し斜めからは何が映っているか判らないフィルムも売っている。すべて、仕事中にパソコンで遊ぶためのアイテ

ムだ。しかも、くだらないことでもメールだ。もはや口頭でのコミュニケーションは衰退しつつあるようだ。

会社でもそんな状態だから、家庭でもその延長だった。

金澤部長は最近、奥さんとうまく行っていない。家の中で口を利いていない毎日。ただ、互いに意地があった。きっかけは些細なことだが、どっちも譲らない。それでも、どうしても二人の生活だから、口を利かなければならないときもある。そんなときは、ケータイを使っている。

妻の早苗からケータイにメールが来る。

—御飯にしますか、風呂にしますか。

—風呂に決まっているだろう。何年夫婦やっているんだ。

そう、返信すると、妻から怒った顔の絵文字メールが来る。夫婦喧嘩もケータイだ。

—わたしだって仕事をしているんですからね。たまに御飯支度したらどう？

—なんだと、おれが料理へたなのを知っているくせに。

という痴話喧嘩が延々とメールで続くのだ。

金澤部長の隣家には、同じ会社の高谷専務がひとり娘の尚美とPDAでメールのやりとりしていた。ひとつ屋根に暮らしているながら、親子でも年頃になるとプライバシーと煩い。専務が帰宅すると、尚美はもう自分の部屋に閉じこもる。そうして、同居していても顔を合わせない生活が何ヶ月も続いたりする。娘の部屋に入ろうドアをノックすると、どんな格好しているのか、「入らないで」と、ぴしゃりと云われる。三十過ぎて、まだ結婚の話が出てこないから親としても心配だ。仕方なく、携帯端末で話し合う。

—おまえ、彼氏はできたのか。

—放っておいて、パパには関係のないことだから。

—そんなこと云っても、周りが煩いんだよ。見合いの話もいっぱい来ているし。会社の北村くんなんかどうだ。いい男だし。

とかなんとか、家の中もしーんと静まって、キーを叩く音だけが聞こえる。それは不気味なものだった。人間が言葉を忘れるのではないかと思うほどの静寂がどの家にもあった。

当然、商談でも、面と向かって、これこれの条件で取引がしたいと、今の若い人は云えないので、客を目の前にして、端末で取引条件を打っている。客も客で、面と向かって値引き交渉ができないが、メールなら堂々と恥も外聞もなく値切ることができる。

会社の商談室で、鹿内常務が、対馬工業の社長と大口取引の相談をしているとき、何か臭うことに気付いた。さっそく、メールで社長に、

—焦げ臭い匂いがしませんか。

すると相手もメールで、

—ドアの隙間から煙ですぞ。

ビルが階下から燃えていた。下のレストランから出火したようだ。火災報知器も何故か鳴らなかった。スプリンクラーも作動しない。古い建物だから、点検もしていなかった。

全社員が非常階段から外へ逃げた。遥商事の社長の田村だけが、トイレに入っていて知らなかった。

「おい、社長がトイレに入って、また読書しているらしい。誰か火事だと教えてやれ。」

と、課長の小畑が秘書の風晴にメールで命令した。社長のケータイのメールアドレスを知っているのは秘書だけだった。風晴は同僚の伊藤と二人で、煙が充満する廊下を走り抜け、社長室のトレイの前に立つと、ケータイのメールで、

「社長、火事です。逃げてください。」

と、打った。そして、煙に巻かれないように、また素早く裏階段から逃げた。会社のビルは真っ黒い煙に包まれていた。社長だけがビルから出てこなかった。社長のケータイは電源が切られていたのだった。

あわれ火災の犠牲者が出た。消防士が社長室に駆け込んだときはすでに手遅れだった。事情を聴取していた消防士は怒った。

「おまえら、口があるんだろう、口が。どうしてそんな非常時に口で叫ばないんだ」

第389話 無差別殺人者たち

新米警察官のオサマは、ずきずきする頭を抑えてようやく起きた。一昨日は自分の歓迎会で、村人からいやというほど酒を吞まされた。すっかりと二日酔いで、昨日は一日寝ていた。今日からは警察官として、新しい赴任地でスタートを切ることになる。

人口数百人より少ない国境の村だ。カフェがあるわけではない。映画館もなければスーパーやコンビニもない。車も走っていない。農業の村だ。こんな辺鄙など田舎に回されるのは独身の新米が多いと聞いていた。当分はあちこち回されるだろう。オサマは都会で働きたかったが、暫くはのんびりと暮らしてみようと諦めていた。

こんな田舎だから、事件らしい事件もないし、手柄を立てて昇進するといったチャンスもないだろう。泥棒もないし、交通事故も車がないから、もう何十年もなかった。村の事件簿を眺めていたが、牛に蹴られたとか、土地の境界のいざこざで喧嘩したとか、そんなことぐらいだから、実に平和な村だった。村人もみんないい人ばかりで、わざわざオサマのためにご馳走と酒を用意して、宴会まで開いてくれた。

真新しい制服を着て、帽子をきりりとかぶり、ピカピカの靴を履いて、さあ、村の見回りだ。一日二回は巡回をすることになっている。別に何もないだろうが、油をうって歩くのも仕事のうちだ。

村外れの農道の脇に子供が倒れていた。初めは寝ているのかと思った。それで、抱き起こそうとして愕然となった。頭を撃ち抜かれて、後頭部から出血が激しい。即死状態だった。何の罪もない子供を殺すなんて、オサマは新任早々大事件に遭遇したことで震えが止まらなかった。現場は保存しなければならない鉄則があった。オサマは自分の歩いてきた足跡の通り、そのまま戻った。それから駐在所に戻って町の警察署に電話をしてこなければならない。

来た道を大急ぎで戻ろうとして、木陰に人形のようなものが転がっているのを見た。近づくと

、中年女の死体だった。こちらも銃で胸を撃たれていた。どうも村の女ではない。国境を越えてきた他民族の難民のようだった。それでも、これは立派な殺人事件だ。しかも連続殺人事件。オサマは体の震えが大きくなってきて、頭の中がパニックになっていた。第一日目から全国ニュースの大事件がこの村に起こったのだから。それに第一発見者が警官だった。テレビ局が取材にくるだろう。オサマは一躍有名になる。記者会見の様子まで想像していた。

早く連絡をしなければと、駆け足になると、今度は二つの死体を発見した。草むらに農民と思われる年寄りと若い男の、やはり銃弾が貫通した痛ましい射殺死体があった。これは異常だった。殺人鬼か、頭のおかしいやつが潜入しているに違いない。こんな女子供年寄りを平然と殺すやっは異常者だろう。オサマは拳銃で身構え、四方に威嚇するように銃口を向けた。もうちびりそうなくらい心臓もだくだくしていた。

何の目的があって、こんな民間人を殺さなければならないのだ。みんな手荷物を持っていた。旅行者のようだった。それも、荷物はそのまま、奪われたり、荒らされた形跡がない。女の着衣にも乱れはない。物盗りの犯行とは思えない。やはり、これは、現代の病める犯罪、無差別殺人の様相を呈していた。この事件は警官だけではいけない。心理捜査官も派遣してもらわねばならないだろう。オサマは他に何か犯人の残していった遺留品がないか、足跡がないかと探しながら村の方へとそろりそろりと歩いていた。

すると、小銃を手にした村の男が草原の窪に隠れていた。オサマとおととい呑んだやつだった。

「お、おい、き、きさま、な、何をしている。て、手を挙げろ」

オサマは拳銃を突きつけて、男に近寄った。男は平然として、タバコをくわえていた。

「やあ、おまわりさん。何かあったんですかい」

「何があったと？ 巫山戯るな。向こうの草むらに死体が四つ転がっていた。そして、おまえが銃を持っている。これだけ状況証拠が揃えば充分だ。きさまを逮捕する。大人しく観念しろ。おまえが殺ったんだな」

「そうだよ、おれが撃った。うまいもんだろう。一発づつでしとめた」

この男は猟奇を趣味にしているのかもしれない。完全におかしくなっている。人を殺して、自慢しているのだ。オサマの銃口が震えていた。

近くの草むらから同じ銃を持った村の男たちが数人出てきた。

「何かあったのか」

男たちが笑いながら近寄ってきた。

「このおまわりさんが、おれを殺人罪で逮捕するとよ」

すると、みんな急にゲタゲタと笑い出した。

「死体なんか珍しくないよな。おまわりさんよ。ほら、あっちの木の下を見てみな」

オサマが行ってみると、木の根元には十人できない若い男たちの死体がごろごろしていた。中には銃を手にしている者もいた。オサマは身の危険を感じていた。自分もあのように殺される。犯人たちを見たものは殺される。もう、みんな狂っている。いまだかつてない大量殺人に発展しそうだ。この国に例のない残虐な犯罪だろう。

と、いきなり近くの草むらでひゅるひゅると音がしたと思うと土煙を立てて爆発した。みんな

一斉に身を低くした。

「ばか、おまえも立っているな」

「な、な、何があったんだ」

オサマは男たちに頭を地面につけさせられた。ダダダと機関銃の音がした。やたらと頭の上を弾が飛ぶ。

「おまわりさんよ、昨日、あんた、何していた？」

男のひとりが訊いた。

「昨日は二日酔いで寝ていた」

「そうだろうな、テレビも新聞も見ていないんだ。戦争が始まったのを知らないんだ」男たちはひゃひゃと笑っていた。

第390話 地上は殺意に満ちている

わたしの名前は殺意です。珍しい名前だって？ とんでもない、どこにでもある名前ですよ。わたしは、あなたがたの中にだっているんです。わたしの存在に気付かないふりをしているだけで、本当はぞっとする汗を握る瞬間にわたしを見ているんです。実は、わたしは、あなたがたの突然現れる「魔」なんですね。気の迷いにちょっと指を動かしてやったりすることで、その人の人生をどん底まで落としてやることにひどく快感を感じているんです。趣味が悪いって？ 趣味の問題ではなく、それがわたしの仕事なんです。いや、死事と云うべきか。そうそう、人生なんてトントン拍子に行っていれば、面白くもありません。進路を狂わせることで、悲劇を与えるのです。刺激ではありません。悲劇です。禍福はあざなえる縄と云いますでしょう。人生の半分の禍の部分にわたしが配達して歩くんです。嫌な役目ですって？ いえいえ、人が悲しみ、苦しみ悶えるのを見ているとさっぱりしますよ。あまりに思いあがっていた人間がですよ、病気にしても貧困にしても、トラブルにしても、生きていることを思い出し、ただ、生かされているだけで合わせだということを知る瞬間ですね。でも、そういうときは大概手遅れでしてね、後悔という重い十字架を背中に背負うんです。

そうそう、わたしは、殺意でした。担当がそれぞれありましてね、わたしは人を殺す瞬間に立ち会うのが仕事です。あなた、殺人事件なんて、ふつうは皆さん、シロウトばかりです。つい、数秒前まで人殺しになるなど、考えてもみなかった人ばかりです。衝動的殺人が多いのです。

どうですか、わたしの仕事ぶりを見てみませんか。どうぞ、ついてきてください。初めは、そうですね、床屋にしましょう。こちらの何の変哲もないただのヘアーサロンです。ここの主人は株で大損したばかりです。そのことで、今朝、奥さんと喧嘩しましてね、むしゃくしゃしてたんなんです。

朝一番の客です。サラリーマンでしょうね、可哀想に今日の犠牲者第一号です。このサラリー

マンも上司に髪のことでも云われてむしゃくしゃしていたんですね。

ほら、いよいよ顔を剃る時間になりました。しゃぼんを下顎に塗りました。カミソリっていつも手入れしているから切れ味は最高ですよ。床屋が、珍しく誤ってちょっと切りました。

「痛えじゃねえか、ばかやろう、殺す気か」

サラリーマンは元々態度が悪いんですね。ヤクザみたいな口の利き方でしょう。顎から少し血が流れました。人間、血を見ると興奮するんですね。メンソレタームを塗りましたが、サラリーマンはぎろりと睨めています。床屋は、冷静を装って、首筋近くを剃っています。動脈のところでピタリとカミソリが止まりましたね。ここでわたしの出番です。ちょっと床屋の手首を動かしてやります。すぱりと切れました。血が天井まで吹き出しました。

さあ、次、行きましょう。今度は車のドライバーです。彼は短気な性格で、信号で待っている間も貧乏ゆすりです。会社の経理担当ですが、業績が悪化してやりくりがつかない。社長は遊んでいて、文句しか云わない。彼はかなり自暴自棄になっています。もう、どうなってもいい。そんな気持ちでいるときがチャンスです。赤信号で老婆が横断歩道を渡っていますね。クラクションがあちこちから鳴っています。だけど、かなり痴呆な老婆はわざとらしくゆっくりと渡っています。そこでわたしの出番です。ドライバーは苛々して、右足をいつ踏みこもうかと急発進の体勢に入っています。さあ、わたしはポンと肩を叩いてやりました。車は突然発車しましたね。老婆は宙に跳ね飛ばされました。

さあ、次です。ここは、病院の手術室です。この若い医師はベテランです。それゆえに、手術の依頼が多く、他の病院からも回されてきたり、一日の半分以上は手術室で執刀しています。今日も早朝から五人目です。かなりの疲労とストレスが溜まっているでしょう。医者も大変な仕事です。人間、緊張感が十時間も続けばどうなるでしょうね。この医師は、病院が監獄に思えてきたんですね。自分からも逃げたいと思って、ここでも苛々しているんです。

患者は胆石の手術で、それは簡単な手術で、その医師にとっては胆嚢摘出などちょろいものだったんですが、よほど疲れていたんですね。中年男性でしたが、その患者には恨みもなにもありません。ただ、ぐっすりと眠りたい、どこか遠くへ旅行へ行きたい。医師はそう思っている。自分の患者を抱えていると、休みの日でもケイタイが鳴り、病院に呼び出される。夜中も早朝もない、酒なんか呑んでいられない。いつでも手術ができるコンディションにしておかなければならない。睡眠不足、過労気味、私生活も楽しみもなにもない。

そんな追いつめられた状況で、胆嚢の脇を走る動脈をすり抜けるようにメスが患者の奥深く入ってゆきます。ここで、ちらりと魔が差します。もし、ここで動脈を誤って切ったら、単なる医療ミスで終わるだろうか。この男の生殺与奪の権利を細いメスが持っている。医師はよからぬ想像をしました。さあ、わたしの出番です。わたしは、ちょっと、手元を狂わせてやるだけでよかった。

「先生、何をしたんですか」

助手が慌てふためいていますね。患者の血圧が下がってきました。手術室は大騒ぎです。これでいいのです。わたしは、ひとつの仕事を終えて、充実感を持って引き揚げます。

地上はわたしの依頼者で溢れています。不況、戦争、政治不信で、みんなの苛々が募っています。わたしは引っ張りだこで忙しい。ほら、あなたの足下にもじわじわと殺意が忍び寄っています。

ますね。

第391話 政治はベッドで作られる

政治家の世界でも二代目大流行りだ。文学の世界もスポーツの世界もそうだが、血の繋がりそのまま才覚まで遺伝するとも思われぬ。七光りだけでやって行き詰まる二代目も実に多い。

どこかの県で一躍有名になった知事の本村が、スキャンダルに巻き込まれる前は、表面に出ない女性関係がかなりあった。たまたま今回、表面化したものの、好きものはある日突然好きものになるわけではない。それは奥様が一番知っている。政治家の妻は、そこは心得ていて、昔の武將の妻、代議士の妻という覚悟があるから、今回のことも騒がないというより、諦めているのではないか。本村の浮気はいまに始まったことではない。妻自ら愛人の家に行くというのも、いままでもあったろう。手切れ金を手渡しに行くのが案外妻の役目であったかもしれない。夫の不祥事の後始末を無言でやってのける妻の方が上手なのだ。

ただ、本妻としては一番心配なのは、隠し子だった。自分の息子の次郎が、これからも政界を牛耳ってもらいたいのは、母親としての真摯な気持ち。それが、どこの馬の骨か判らない女に夫が身ごもらせ、それが直系の総領を蹴散らして、将来政界に打って出ないとも限らない。戦国時代の昔でも、閨閥の争いが絶えなかった。まさに歴史は閨で作られた。

本村の妻は再三にわたり夫に確認していた。

「あなた、あなたの葬式になって、そろそろと見たこともない息子娘が出てこないでしょうね」
「まさか、おれは公務で忙しいんだ。とてもそんな時間があるわけがないのはおまえがよく知っているだろう。それに、そんな元気がどこにある。おれも六十過ぎたじいさんだ。世間では年金貰って隠居の身だ。あっちの方はまるで駄目なのは、おまえが一番知っていることだ」

もう、何もできないとは、男がよく使う、妻を安心させるための効果のある言い訳だった。と、云いながら、陰では、本村は強壯剤、精力剤をいろいろ取り寄せて、知事の机の中にどっさり隠していた。赤まむし、朝鮮人参、バイアグラ……。

本村が秘書と上京し、スケジュールを終えると、必ず空白の時間ができるようにしていた。

「わたしは、これから県人会の方々と逢う約束があるから、君はこれで一杯やりたまいい」

と、気前よく呑み代を手渡す。そして、本村は、永田町からタクシーでどこかへと消えて行った。

本村の着いたところは代官山のとあるマンションだった。田舎の知事とはいえ、本村は着るものにも拘り、いつもベストドレッサーでいたいと思っていた。六階までエレベーターで上がると、表札もない怪しげな部屋の呼び鈴を押した。若い女が出てきた。女の顔は輝いた。

「待っていたのよ。逢いたかった」

女は本村の首に両腕を回して性急に接吻した。

「ううん、もう二月も来ないから」

三十は過ぎていたが、マスコミにいた女で、留学の経験もあり語学堪能な知的な女性だった。

取材が重なり親密な仲になっていた。

「少し痩せたようだね、うさぎちゃん」

女を見る本村の顔は政治家の顔ではない。急に言葉使いまで変わる。

本村は焦っているように背広を脱ぎ、彼女をベッドへと連れて行く。

「待っているよ」と、云いながらももひきは二枚もはいているし、腹巻きにラクダのシャツと、脱ぐのに年寄りには時間がかかる。一体、この人は何枚着ているのかしらと、彼女はうんざりして待っていた。玉葱の皮を剥いたように、ひよろひよろした年寄りの本村が出てきた。

「さあ、ちよめちよめしましょうね」ここから先はすっかりと週刊誌か三流ポルノ小説だ。本村は前戯もなく、いきなり本番だった。

「痛くないかい」

彼女は一瞬何を云ったのか判らなかった。

(なんだ、いつ入れたのか判らなかった)だが、本村の自尊心を傷つけてはいけないと、「ええ、まあ」と、適当にごまかしておく才女だった。彼女にはある計略があった。それが成就されるまでは、なんとしてもこの男を繋ぎ止めておかななくてはならない。そのことをどこで切り出そうかと、彼女は躊躇っていたが、接合している今しかないと、その場面で云いだした。

「あのね、わたし、あなたの子供ができたの」

本村はがばっと彼女から離れた。

「もう五ヶ月だから堕ろせないの。男の子だったら、政治って名前にして、将来はあなたのような立派に政治家にしようと思うの。ねえ、いいでしょう。きっと認知してね。いまは、DNA鑑定で判るから」

本村としてはただの遊びだった。女はいくらでもいる。でも、それだけは困る。おろおろしていると、彼女は云った。

「あら、どうしたの。知事に乱れて」

「それを云うなら千々にだろう」

彼女は本村の股をまさぐった。

「あら、すっかり知事んで」

「それを云うなら縮んでだろう」

いつも女は男の股ぐらで、意志を確かめる。

第392話 春 眠

春眠暁を覚えず。春は日中でもうとうとしたくなる気持ちよさ。日差しが温かい。あちこちで居眠りが発生する。

新幹線でも運転手が居眠り。コンピュータでコントロールされているから、全自動運転に近い

ということを初めて知った。無人の電車もあることだから、運転手は別にいなければいなくてもいいのだが、コンピュータが誤作動したらと思うと恐ろしい。突発事故もないとは限らない。そんなときは手動に切り替えて人間が運転しなければならない。最後は人間が一番の頼りになる。

新幹線もいよいよ全自動で、無人走行に切り替えるとJRが発表した。それには大反対が起こった。とても不安で乗ってられないと、老人たちは不信感でいっぱいになり、乗車率が落ちることが懸念された。人件費削減目標があって、今回の無人運転になったこともあるのに、それでは目的を達成できなくなる。この始まりは居眠り運転だった。

これほど、機械化が進み、飛行機も車も運転がオートになりつつあるから、レールの上を走っている列車はそんなコントロールは簡単なことかもしれない。ただ、不安感を払拭するために、運転手は乗車させなければならない。

「いい考えがあります」

JRの効率化委員会では委員の提案を採択することになった。ただ、その決定事項は門外秘としていた。

新幹線がいつものように発車した。運転席には運転手らしき人影が見える。ただ、気ぜわしく妙にきょろきょろして大人しく座っていないおかしい運転手だった。遠目にはそれが誰であるか判らない。制服に帽子をかぶっているが、よく見ると、日光猿軍団から借りてきた猿たちだった。

A市では三月に入って、四月下旬並の二十度近いぽかぽか陽気の日を迎えていた。こんな日は、ただでもみんな眠くなる。正午を過ぎて、市民の多くは陽気に誘われて、昼休みに久しぶりに戸外に出ていた。気持ちのいいくらいの晴天だ。ヘリコプターが何機か空を飛んでいる。昼食を摂って、満腹になるとますます眠くなる。サラリーマンたちが、公園のベンチに座っていて、急に睡魔に襲われた。みんな、座ったまま眠っていた。歩いている人も、つい睡眠の誘惑にかられて、芝生へよろよろと入ると、そのまま横になっていた。

タクシーもバスもトラックも、信号が青になっても動かない。見ると、運転手だけでなく、乗客までが、気持ちよさそうに寝ていた。走っていた車は、スピードを落とすと、道の真ん中や、路肩に車をそのまま停めて、みんな寝ていた。道路を走る車は一台もない。みんな停まったまま眠っていた。

学校では、午後の授業が始まったばかりだった。しーんと静まりかえっている。生徒は全員、机に顔を載せて寝ていた。先生も教壇に座ったままぐっすり寝息をたてていた。

会社でも、すべての社員が仕事の途中でデスクに顔を付けたまま寝ていたし、エレベーターの中では倒れるように寝ていた。社長も電話機を手にしたまま、大きな鼾をかいてゆったりとした椅子に埋もれるように寝ていた。

スーパーでも、買い物客たちは、通路にもたれかかるようにして寝ているものもあれば、ショッピングカートに半分乗ったまま寝ている奥さんもいた。レジの係もその場にしゃがんで寝ていた。家々でもそれは同じだった。居間でテレビを見ながらおばあさんは寝ていたし、庭では犬までが寝ていた。

この街は、目を覚ましている者はひとりとしていないのだった。みんな、ぐっすり深い眠りに落ちていた。日中に、街がひとつ眠ったままというのも、不気味だった。まるで時間が止まっ

たように、生活、交通、仕事のすべてがそのままの状態に眠っていた。

すると、上空から、さっきから街の上を巡回していたヘリコプター二機が国道のど真ん中に着陸してきた。ヘリコプターの中から防毒マスクをした数人の迷彩服姿の男たちが、それぞれ銃を手にして、銀行や宝石店に入っていった。別のグループは、デパートや郵便局、日銀などに入って行った。大きな袋を手には商店やコンビニを一軒ずつ回る者もいた。レジスターを叩いて開けると、札束だけを驚掴みにして袋へ入れてゆく。みんな、顔が見えないように覆面をしていた。街が眠っていても、防犯カメラは作動している。防犯ベルが鳴っても慌てない。警備保障会社の社員も警官もみんな眠っているからだ。

街へ通じる国道や市道はすべて工事中の柵で封鎖していた。ヘリコプターで催眠ガスを大量にばらまき、ひとつの市の住民をすべて眠らせるという大胆な窃盗団だった。

十数億の金を掻き集めると、窃盗団はまたヘリコプターで悠々と引き揚げてゆく。

それから一時間経って、みんな目が覚めた。何時間眠ったか判らなかった。ほんの数分の感覚でしかなかったが、腕時計を見て驚いた。もう夕方だった。オフィスではまた慌ててパソコンを打ったり、電話をかけたりにしていた。交差点では車がまた一斉に走り出した。通行人たちも、立ち上がって歩き始めていた。みんな、寝て起きたようなぼんやりとした顔をしていた。何が起こったのか皆目検討がつかない。

それからまもなく、街のあちこちで悲鳴が聞こえた。

「か、金がない。だ、誰かー」

第393話 味噌汁おやじ

男子厨房に入る。女より男のほうが料理には凝る。凝り過ぎて、材料代が跳ね上がる。女は主婦で家計を考えて作るから、本格的なものは作らない。男はその節約感覚がないから、レシピを見て、オリーブオイル、オイスターソースというと、その通り買ってくる。主婦は代替食品でごまかすが、男は徹底的にプロの味を求めすぎて高くつくのだ。

前田雄三も趣味は料理というほど、料理にはプロ顔負けの情熱を注いでいた。テレビの料理番組はすべて録画予約して、ライブラリーを揃えていたし、料理に関する雑誌や書籍はずらりと買い揃えていた。台所も調理器具が揃っていた。家庭用のガスレンジではガスのカロリーが不足だと、業務用のガス台に替えたり、銅の赤鍋や寸胴などのほか、コックコートまで何故か買っていた。

雄三は一人暮らしだったので、そんな大きな調理設備は普段は必要なかったが、週に一度、土曜日ともなると雄三の家に友人たちが集まってくる。雄三の手料理を肴に呑んだり、本格的なフルコースでワインなど味わいに来るのだ。そのために、毎週、手を替え品を替えてフランス料理、イタリア料理、スペイン料理と披露するのだが、そのままでは面白くないので雄三は、レシピに手を加えて創作料理にしていた。台所の棚には仕込みからやるので、香辛料や洋酒がずらりと並んでいる。独特なブーケガルニを考案し、野菜屑からブイヨンも作った。金曜日から仕込みに

入る。寝かせておくものは時間をかけて熟成させなければならない。ベシャメルソースにしても赤鍋に牛乳を入れて、焦げ付かせないように煮て作るのだ。缶詰を買ってきたほうが簡単なのだが、そこは趣味人としての譲れないところ。

その雄三が最近では洋食から和食に興味を切り替えていた。和食の方がごまかしが利かない。味付けも微妙で難しい。味覚も日本のほうが欧米より多い。四味が五味とおおまかに分けても多いくらい、日本人の味覚はセンシビリティなのだ。

雄三は最初、漬け物に凝った。和食に香の物は欠かせない。北国では、冬の青菜を摂取するには漬け物は大事な食品で、それだから、漬け物文化が発達する。雄三はいろんな漬け物に挑戦してみた。秋田の方でよく漬けるナタ漬け。鉦で切り割りした大根を塩で漬ける。津軽ではそれがガンクラ漬けと云う。形がガンクラだからだ。糶を入れてなれた頃にとろりとした食感もいいが、やはり、男性的に厳寒の冬に虫歯が沁みるほど冷たくひえた大きく割ったガンクラ漬けをかぶりつくのがいい。薄い一枚のおしんこと違って豪快であり、大根の甘さが残って美味しい。

雄三は白菜からきゅうり、蕪なども漬けてみた。大根の漬け物が黄色く着色するのに、南瓜を使ったりして、田舎の味を出していた。それも、すべて、田舎の親戚の婆さんに電話で訊いたのだ。漬け物はやはり婆様に限る。糠漬けにも挑戦した。掻き回し掻き回し、頃合いが難しい。しかも、現代の建築は、機密性が高く、冬でも外気より温度が高いから、漬け物には不向きだ。そのために、わざわざ、雄三は庭に穴を掘って、漬け物用に小さな小屋まで建てた。信じられないことまでする。

漬け物は主に大根だったが、それに鰯を入れたり昆布を入れたり、時には洋風にレモン漬けというのもやったりした。かなりバラエティに富む味が演出できるのも漬け物だ。

漬け物の次に、魚の捌き方も練習した。包丁も本格的にずらりと揃えて、研ぎ方まで本を読んでいた。刺身も綺麗にできれば女性たちに羨望の眼差しで見られる。すっかりと職人気取りだった。焼き物、蒸しものと和食のABCを進んでゆくうちに、最後に辿り着いたのが味噌汁だった。外国でもスープの具にこれほどのバラエティはないだろう。一種類の味噌のスープに数え切れないほどの具を使う。それも地方によってみんな違う。その特産品を味噌汁に入れて食している。

味噌まで手前味噌で、全国にいろいろあって、自分ところの味噌が一番だと思う。味噌汁の味にはうるさいのが多い。その家々に代々受け継がれた味というものもあり、嫁は姑から教わり、味噌汁をちゃんと作れるようになればその家の一員となれる。いまは、そこまで厳しくなくとも、生まれたときから飲み続けた味噌汁の味というのは、生来その人の味覚として定着するようで、そればかりは他の味では駄目なのだ。

雄三の家では昔から糶味噌の白だった。赤味噌や塩辛いものは嫌われた。甘い味噌汁ですつとやってきたから、その味でなければならない。たまに、八丁味噌や仙台味噌をもらうが余所へやってしまう。田舎の親戚から軒下に吊した味噌玉を貰って、糶でさらに寝かせてと、何年もかけてみたが、さすがにそこまで本格的にやる根気はなかった。味噌だけは地元の白味噌を買ってくる。

出汁は煮干しだ。たまに昆布も使うが、化学調味料や、インスタント出汁だけは絶対に使わ

ない。具としては納豆を砕いて入れる。これは挽き割りでは細かすぎていけない。ちゃんと包丁で叩く。葱と豆腐のオーソドックスなものから、フノリもいい。北国では帆立の稚貝も冬に出回る。間引きした小さな帆立を貝ごと味噌汁に入れる。それはいい出汁が出る。冷蔵庫の野菜室にある野菜屑を一掃処理するとき味噌汁はいい。玉葱と人参は甘みが出るし、冬に不足気味のビタミンを味噌汁で補給できる。

さて、土曜日になった。雄三の友人たちが、各々地酒を持ち寄ってきた。今日は和食だということで、ワインではない。

「越の寒梅だ」「田酒だ」「上善水如だ」と、一升瓶を持ち寄る。鱈のいいのが手に入ったから、味噌に漬けておいて焼いた。

「今日のメイン・イベントは味噌汁だ。厳選した大和蛸におれがブレンドした白味噌で作った。蛸は肝臓にいいんだ。二日酔いには利くぞ。まあ、飲んでみる」

みんな慎重な面もちで飲んでいて、じーんと感動していた。

「うまい！ これだけの味噌汁が作れるから、奥さんに逃げられたんだ」

それまでわいわいと騒いでいた連中はしーんとなった。雄三は急にすべてを思い出していた。自分が器用すぎるからずぼらな女房は周りに非難されて、子供を連れて出ていったのだ。味噌汁を飲みながら、雄三は涙ぐんでいた。

第394話 ある評伝

商店街の裏通りに、いつも客が入っていないような寂れた古本屋が一軒ぽつりと店を開けていた。周りは飲み屋ばかりで、夜でなければ開店しないから、昼間は人通りのない小路にそこだけが開いていた。

本間紀一郎はそんな場末の小さな古本屋を覗くのが好きだった。意外な掘り出し物があったりする。いま流行りの大手チェーンの、コミックやゲーム、新古本などの白っぽい本ばかり扱う大型古本店が郊外に幅を利かせているが、そんな店には入りたいとも思わない。新しい本は最近面白くなく、昔の本のなかに教えられることや発見をすることがある。

紀一郎は、店頭の特価台に並べられている、背表紙が日焼けし、埃をかぶっているゾッキ本を覗くのが好きだった。だいたい五十円均一だとか、二冊で百円とか安い。かつて、その均一台で、紀一郎は何気なく手に取ったのが、木下柰太郎の揮毫署名の入った戦前の古い詩集だった。何も知らない店主は数十万はする値打ちの本に五十円をつけていた。それだから古本屋巡りはやめられない。

休みの日ともなれば、私鉄沿線の田舎の路地裏を歩いて、できるだけひしゃげた古本屋を探すのだ。それが楽しみのひとつでもあった。そうして、収穫あったときは、近くの、やはり汚らしい喫茶店で、不味いコーヒーを飲みながら、うきうきする気持ちを抑えながら、そっと古書を繙くのだった。それはちょっとした犯罪心理にも似ていた。別に騙して買ったわけではないのだが、相手が何も知らないばあさんだったりすると、つい教えたくなくなってしまう。まあ、向こうも客から安く買って、損はしていないのだろうが、貴重な本がそうして、二束三文で売られているところに古書マニアの醍醐味がある。

紀一郎はいつものように、その裏通りの古本屋に入った。じいさんが一人帳場で本を読んでいる。客は他に誰もいない。古色蒼然たる棚を見ているとドキドキしてきた。その黴びたような匂いもまたいい。マニアにはたまらない空間なのだ。紀一郎はじっくりと、棚の本を眺めていった。すると、ある本のタイトルで目が止まった。「本間紀一郎伝」とある。「嘘だろう」と、紀一郎は同姓同名の人間がいてもおかしくないが、ひどい喜びようで、その本を手にとってみた。とても開く勇気はなかった。中に何が書かれているのだろうか。出版社の名前がない。多分、地方で出された自費出版の私家版なのだろう。定価もなく、非売品らしい。著者は武野武人とある。それは誰か判らない。自分の名前と同じ偉人や、有名人など聞いたことはない。奥付を見ると、二〇〇四年発行とある。来年出た本ということになる。未来に出版されている本なのだ。何かの間違いだらうと、紀一郎は考えていた。誤植はよくあることだ。それに、この本はヤケているし、かなり古いものだ。ドキドキしながら一ページ目を開いてみた。『本間紀一郎は、昭和三十七年一月三十日、函館の青柳町に生まれた』と、書き出してあるのを見て、

紀一郎は声をあげた。

「そんな莫迦なことがあるか。これはおれのことだ」

紀一郎は呆然と本を手にしながらうち震えていた。生年月日と郷里と名前がすべて一致するものはこの世にはいない。それは、間違いなく自分なのだ。と、思うと、紀一郎は急いでその得体のしれない評伝を帳場に持っていった。二百円だった。その本を万引きしたようにそそくさと内ポケットに隠すと、逃げるようにして店を出た。

いつものように駅前の喫茶店を探して、紀一郎は入った。椅子席に座って、その自分の評伝を読み始めた。両親の名前、兄弟の名前も一致していた。小学校から中学に進むときの友人の名前から、自分でなければ知りえない隠れた悪事も書かれていた。誰にも見つからなかったはずなのに、まるでこの著者は、自分と行動を共にしていたように克明に記録していた。見た者でなければ書けない内容だった。初めて、部屋の中でエロ写真を見ながら手淫したときのことも、その通りに書かれている。ありえないことだ。自分しか知らない秘密、心の中のことまできちんと描写されている。

高校、大学と進み、関西の企業に就職し、恋人に騙され、結婚にも失敗し、仕事も転々と替えて、いつもふりだしだった。書いてある通り、何もいいことのひとつもない半生だった。小説にもならない。平凡だが、内容の乏しい評伝になる。読者は退屈したろう。自分の生きてきたことを活字にしてみても、初めてつまらない人生だと気付くのだ。

あと、数ページで終わりというところで、私鉄に乗って、古本屋巡りをしている自分が出てきた。日付は、まさに今日だった。過去から現在へと読み進んできた。そして、この本を喫茶店で座って読む自分の場面。そこで紀一郎は本をパタリと閉じた。そこから先は未来だった。とても、自分の未来を覗く勇氣はない。しかも、いままでの四十年間で二百ページは費やしているのに、これから先の未来は数ページで終わるのだ。何かある。この近い将来に何かあって、自分の命は終わるのだ。そう、思うと、紀一郎はとても怖くて結末まで読むことはできなかった。

その本をまたしまいこんで、紀一郎は自宅へと帰った。誰もいないひとりだけの家に。手は震えていた。とにかく、この忌まわしい本は燃やさねばならない。

紀一郎は庭に出て、本にライターで火をつけようとしたが、なかなかつかない。車からガソリンを少し抜き取って、それを本につけてライターで着火しようとしたら、今度はなかなかライターがつかない。焼かれるのを嫌がっているように、呪われた本は、風でページを開いていた。ようやくライターに火がついたと思った途端、紀一郎は猛火に包まれていた。衣服から髪の毛から、全身に火が回るのは数秒とかからなかった。本も一緒に燃えていた。その最後のページが風でめくられて、めらめらと燃えてゆく。最後のページにはこう書かれていた。

『……紀一郎の体は本と共に火に包まれた。もの凄い悲鳴が夜に木霊した。二重人格の悲劇はそれで終わろうとしていた。本間紀一郎と、ペンネームの武野武人の一人二役は自殺行為で完結したのだった……』

ぼくは、いまもそうだが、目的も宛もない旅が好きだった。

あれは、十九の夏だった。田舎から東京の大学に出てきたばかりの、何を見ても珍しく、生きていることがそのまま旅だったようなときのこと、ぼくは学生運動に失望し、なによりも自分自身が嫌になり、そんなときに出逢ったのが横浜の大学に行っていた伊都子だった。彼女は目的もあり、将来の夢に向かって、一本の道を歩いていた。それにひきかえぼくときたら、東京に出てきたのが失敗だった。ますます自分が判らなくなっていた。何かに縋っていなければ倒れそうだった。迷いそうだった。

クーラーなんか当時はブルジョアでなければなかったから、真夏は図書館へ涼みに行くか、アパートの部屋で悶々としていた。二ヶ月の長い夏休みに、ぼくはバイトもしないで、帰省することもなく、ただ、彼女のことばかり考えていた。

それではいけないと、夕方、がぼっと起き出した。若いものが、だらだらと昼間から寝ていてはいけない。彼女も大阪の実家に帰っていた。多くの友人はみなやはり田舎へ帰って、ぼくだけが東京に取り残されていた。ポケットには千円札一枚きり、全財産だった。これで行けるところまで行ってこみよう。

昭和四十五年だった。千円で往復できる旅というのは知れている。片道ならどうか。また、ぼくは無謀なことを考えていた。東京駅までとりあえず行ってみた。旅支度などしない。サンダルに半ズボン、ショルダーバッグには文庫本一冊と海水パンツ、タオルだけが入っていた。行き先は決めていなかった。国鉄の券売機で、七百円の乗車券を買った。それで行けるところはと、西と北と南、路線図を眺めていたが、たったいま出発するという電車に飛び乗っていた。目を瞑って行き先も確かめない。どうやら、東海道線らしい。なんだという期待外れで後悔しだした。

電車は小田原を過ぎて、熱海を過ぎた。もうすっかりと夜になっていた。すると、伊都子から手渡された「月の光」という井上靖のエッセイとも私小説ともつかない本を思い出した。靖の母が、幼い靖を捜して狂ったように生まれ故郷の湯ヶ島の月の夜をさまよう下りを思い出した。電車は三島に停まっていた。ぼくは慌てて降りた。そこから、伊豆箱根鉄道で修善寺まで、乗客のない空の電車はとことこと夜を走っていた。それは終電だったから、もう引き返すことはできない。

温泉場まで運ぶタクシーが暇そうに並んでいた。さて、そこからどうするのか。ぼくはすべてが成り行きだった。国道を狩野川に沿ってどンドンと歩いて南下した。無銭旅行だから、足で歩けるだけ歩く。腹が減ったらどうするのか。そこまでは考えていなかった。修善寺を十二時近くに歩き始めて、途中山道にさしかかるところで、雨に遭った。田圃の真ん中のバスの待合小屋で、雨宿りをしていた。なかなか止みそうになかった

。バス停に置かれているビニール傘を拝借して、雨の中を歩き続けた。女ものの赤い傘だったが、暗がりには判らない。金のある若いやつらはスポーツカーでクラクションを鳴らしてゆく。みんな振り向いてぼくのことを笑っている。

井上靖の古里、湯ヶ島を過ぎる。折しも月が出ていた。町中は人も歩いていない。ガソリンスタンドの水道を借りて水をたらふく飲んだ。喉が渴いて仕方がなかった。少し油臭かった。そこからは登りだ。すっかりと山道となると、足下もおぼつかないほど真っ暗になる。疲れてきていた。雨がものすごく強くなり、雷まで鳴っていた。ぼくは、農家の納屋に黙って入り、藁の上で仮眠した。農家の人が出てきて怒鳴られまいかとびくびくしながら横になっていた。真夜中の三時。

少し休んだら雨も上がったようなので、また歩き始める。そこからは伊豆の踊子の場面を思い出す。浄蓮滝までくると、白々と夜が明けてくる。ぼくは、国道から旧道に抜けた。昔の旅人が歩いた道がそのまま残っている。いまは車も人も通らない。登りつめたところに少し広い場所があり、昔は茶店など建っていたのだろう。電灯もない暗いトンネルが行く手にあった。そこが天城峠だった。

井上靖は彼女が好きだったので、読破した。「青衣の人」がここに立っていた。ガクアジサイが群れて咲いている。小説そのままだ。踊り子の一行もここに立ち寄る下りがある。

昨日から何も口にしていないぼくは、無性に腹が減って、畑でもないかと探していた。さもしい話が泥棒をしようと企んでいた。喉の渴きはたまらなく、道端に流れてくる雨水に顔をつけて飲んでた。犬っころと同じだった。岩を荒削りしたようなトンネルを抜けると後は下りだった。雨は上がりいい天気ですぐに暑くなってきた。

いくつかの村を過ぎた。ようやく町らしい町に出ると、ぼくはまた堪らなく喉が渴き、自動販売機の前でもの欲しそうに立っていた。ポケットには百円玉が二個きり。百円だけ残して、缶ジュースとパンを買ってしまった。道端に座り、パンにむしゃぶりつき、ジュースはあっというまに飲み干した。二日ぶりの固形物が胃の腑に収まった。それは却って刺激になり、ますます腹が減る。

暑さには参っていた。次第に太陽は南中する。足にまめもできて、歩くのが辛い。サンダル履きで夜通し六十キロ歩いてきた。片足を引きずりながら、下田を目指した。誰かのために意地になって歩いていた。ぼくが肉体を虐めるほど、あの人を好きなのだと思っていた。何か、山を下りてきて、初めて潮の匂いを嗅いだ。視界が明るく開けてきて、ぼくは海に出ていた。下田に着いたのは午後二時だった。

もう一歩も歩けなかった。海で泳ぐ気力もないまま、海岸の堤防に座ったきり動けなかった。日が暮れてくる。急に不安になってきた。疲れと空腹と眠気で、ここから帰ることばかり考えていた。あの人に逢いたい。そればかりを思うようになっていた。

ヒッチハイクを試みたが、男ひとり、二時間指を上げていても一台も停まってくれない。みんな冷たいものだった。

ぼくは、ポケットの百円玉を握っていた。目の前に小さなパチンコ屋があった。その百円玉一個で、ひょっとすれば東京に帰れるかもしれない。藁をも掴む気持ちで莫迦な

ことを考えた。パチンコ台に座ったが、そんなときは、無情にもパチンコ玉はみんな落ちてゆく。とうとうすっからかんになってしまった。野宿はしてもいいが、食うものがない。どうするか迷った挙げ句、ふらふらと役場に入っていった。

「何、帰りの電車賃を貸してくれと？ 役場では貸せない。警察に行きなさい」

けんもほろろだった。しかも、説教までされた。

「金もないのに、修善寺から歩いてきたって」

みんな笑っていた。乞食と同じだった。警察では、千円貸してくれた。このとき、初めて、警察というところは金も貸すのだということを知った。借用書みたいなものを書かされ、拇印まで押した。

ぼくは最終の伊豆急に乗っていた。無謀な旅は散々だった。そうそう人生なんてうまく行くわけがない。それは十九の夏の学習だった。

第396話 どこかで春が

三月にはいって、逆に気温が下がり、雪が積もってきた。三月の声を聞けば、もう大丈夫だと雪国の人間は考えるのだが、今年は無常だった。なかなか春が来ない。どうしたのだろうか。

原因は生まれたばかりの春の乱獲だった。どこかで春が生まれてる。それをやたらと捕獲する業者が出没していることが、いまや社会問題になっている。それは、高値で取引されている。政府が売買を禁じていたが、禁止されるとますます人間は欲しくなるものらしく、闇市場があったり、ネットのオークションに出品されたりしていた。

同じ春でも早春が高目で、少し老いぼれた晩春は安い。春にもいろんな種類があって、それぞれ価格が決められていた。秘密裡に市場が形成されていて、新鮮な生まれたての春から競りにかけられた。ことに、今年のように天候不順で、いつまでも春が来ないときは、待ちわびる人が多いので、どうしても価格は高くなる。

科学者たちから、園芸化学のプロたちが、こぞって、バイオの技術を使って、春の養殖をしようと試みたが、悉く失敗していた。やはり、春は天然ものより育たない。実験室でいくら飼育しようとしても無駄だった。それと、培養しようと、細胞組織を春先と同じ環境に設定してやっても、天然の春と同じ組成で、増殖することはない。

冬がいつまでも居座っているのは、春が摘み取られているからだ。地元の消防団や、農家の人たちを中心に、密漁を取り締まる民間組織ができあがっていた。彼らは、三交代で、入山するものたちのチェックを行い、盗掘現場を押さえようとして必死だった

一体、春はどんなところに生まれるのか。業者は理屈ではなく、勘で判るようで、そ

の場所は、松茸と同じように、絶対に人には教えない。ただ、学者先生たちの分析によれば、水と関係があるようだ。水が氷の下を解けて流れるあたりで一番初めの春が生まれてくる。案外、それは二月の厳寒のときにすでに芽生えていたりする。木の芽が膨らんできていたとき、いち早く春の卵を見つけた者が勝ちだ。だが、いまだにその卵を見た者はこの世にはいない。すでに孵化して、何かの形としてこの世に生まれたものだけをわれわれは目にするのだ。

気象庁が重大な発表をした。

「このまま、乱獲が進めば、春は絶滅してしまう。春が来なければ夏も来ない。地球はこれから長い冬が続くだけだ」

地球は間氷期から氷河期へと移行してゆくというのだ。かつて、マンモスが棲息していた時代へ入る。すると、赤道直下でも雪が降り、南極と北極の氷が、北緯と南緯三十度まで迫り、かつての穀物地帯では皆無作となる。小麦も米も採れないので、六十億の口を糊することは不可能だった。どんなに食糧を掻き集めても一割にも満たない。人類の大半が餓死することとなる。

鹿内博輔は表向きは堅い役所勤めで、家との往復で真面目一本、酒も女も縁がない男だった。その彼が、人知れずあるもののコレクターであった。家族にも教えない。自室には絶対に誰も入れないように常に鍵をかけていた。中でいつも何をしているのか、家族の誰もが興味はあったが、見たくとも見れない。

博輔が、そそくさと役所から戻ると、夕食後はいつも自室に閉じこもる。それまで、苦虫を潰したような顔をしていたのが、急に顔が晴れやかになる。

「みんな、おりこうちゃんに待っていたかい」

博輔の部屋には大口のガラス瓶がいくつもあって、その中にピンク色をしたモヤモヤした煙が蠢いていた。博輔が帰ってきたのを見ると、煙は嬉しそうに動いた。博輔は氷を削り、ビンの中から逃げないように慎重に雪のようなかき氷を入れた。モヤモヤたちは、群がるようにかき氷を解かしていた。

それは生後二週間の春のみどり児だった。餌は雪、それも新鮮な雪がいい。博輔はわざわざ山奥から持ってきた清水を凍らせて、それでかき氷を作って与えていた。

そんなに可愛がっていた春を博輔は一度だけ食べてみた。余り可愛くなるとつい食べてしまいたくなる。そのまま、生食してみたが、ほんのりと甘く、急に人恋しくなる。味はカルピスのように少し甘酸っぱい。山葵醤油で刺身のように食べてみたが、いただけない。サラダのようにドレッシングをかけてみたが、それもあまり合わない。デザートとしてサワークリームをかけて食べるのがいいようだ。

博輔は、毎年、春が生まれる神秘的な山奥のある場所を知っていた。そこは、車ではとても行けない。登山家でも難儀する、険しい絶壁の途中にあった。ロッククライミングの技術も要するが、そこは毒蛇も出るし、風が強い難所だった。吹き飛ばされないように、二重三重に安全対策を講じて春の棲息する秘密の場所に登るのだ。

博輔は単なるコレクターであり、それをネットで売却して利益を得ようというわけではない。自分の部屋にいつもあのほんわかとした春の匂いと期待感が溢れている甘い感

触を楽しんでいるのだ。ただ、春の寿命は短い。どんなに大事に育てても、時間の経過とともに季節というのは変わるのだ。春が夏に脱皮するのではなく、春は夏を産むのだ。産んだあとは昆虫や魚のように死んでしまう運命にある。

ただ、博輔の場合は春を冷凍保存したり、フリーズドライして乾燥保存して楽しんでいた。甘い思い出、若い命の形跡を偲ぶだけでも、コレクターにはたまらない。それは過ぎてしまった青春への慕情だった。

政府はついに、春の捕獲したり売買したりする行為を禁止する法案を可決した。法を破った者は十五年以下の禁固という重罪となる。名付けて「売春と買春禁止法」と云う。

地球は冷えてきていた。温暖化とは別に、人の心が冷たくなってきていた。春が不足していた。

第397話 人間の楯

ドイツからフランスからアメリカからも、行き先の不明なチャーター機が続々と離陸していた。申し合わせたように、日本からもイギリスからも、世界各国からツアー客が第三国を經由して、イラクの首都バグダットの空港へ到着していた。

イラクは軍楽隊から市民まで、空港に詰めかけて熱烈歓迎の横断幕まで張って、フセイン大統領自らも出迎える熱狂ぶりを見せた。マスコミは国内だけでなく、世界各国の報道陣がカメラの砲列を向けていた。

「ようこそ、平和を願うあなたがたをイラクは国賓待遇でお迎えいたします」

フセインは世界各国から来た人間の楯ツアーのご一行様をVIP専用のリムジンに乗せて、市内で一番格式のあるホテルへとお連れした。そのホテルのスイートルームや国賓室を特別に用意していた。宿泊費はすべて国が持つということで、滞在費は口ハだった。

大臣クラスも出席しての歓迎レセプションまで行われていた。豪華なディナーが用意され、最高級の饗宴が催された。

彼らは、戦争を止めさせるために命を張って人間の楯になろうして、イラクへやってきたのだ。それが全世界にニュースとして流れた。ブッシュ大統領は、平和主義者たちのそんな強行は無視して、それでも爆撃は行くと、発言した。たかが、百人、二百人の人間の楯など、戦争という大きな目的のためには、蟻と同じだといわんばかりだった。人間ひとりの命でも地球より重いという意識はない。数の問題なのだ。

それを聞いて、義憤した戦争反対の各国の善良な国民は、こぞって第二次人間の楯ツアーに参加した。その数はちょっとしたバカンスと同じだった。バグダットの空港が麻痺するほどの離着陸で連日ものすごい数の旅客が入れ込んだ。日本からは一万人規模で、敵国のアメリカからでさえ十万人規模で、ヨーロッパ各国からは合計五十万人の旅行

客がやってきた。ロシア、中国などからも三十万人と、世界から百万を越える人間の楯たちが続々とイラクに集結していた。

そうになると、世界の世論は黙っていない。そのツアーに参加した家の親兄弟、親戚が戦争への猛反対を表明すると、一人の参加者の友人、恩師、会社の同僚まで同調するから、ひとりの楯がバックに百人以上の戦争反対の市民が着くこととなった。数の論理でくるなら、こっちも数の論理で戦うだけだと、イラク国内はお祭り騒ぎとなっていた。まるで、万博かオリンピックでも開くように、世界各国の人間たちで、街という街は賑わっていた。不景気な街は活気が出てきた。みんなが外貨を落としてゆくから、ちょっとした戦争前夜祭で、国の景気は持ち直してきたようだった。

そんな人々の善意を余所に、フセインは、なおもアメリカに嫌がらせをして楽しんでいた。ミサイルがまた出てきたと、小出しにする。

「そうそう、すっかり忘れていました。細菌爆弾も出てきました」

「あっ、そうだ、マスタードガスも残っていました」

「すみません、原爆と水爆も申告漏れです」

国連の査察団に、ごろごろと次々に危ないものを出してくる。そのたびにアメリカは歯がみして、悔しがる。すっかりおちよくられている。イラクに遊ばれているのだ。いま、すぐにでも戦争をふっかけたいが、国連決議で戦争反対に回る国が続出したこともあり、また、決定的なのは人間の楯だった。これが、大規模に行われると、もう手が出せない。戦争をやめさせるにはいい手だった。

ところが、国連が拒否しても、アメリカとイギリスだけでも戦争をすると云う。何がなんでも戦争、戦争、戦争なのだ。選択の余地はもうそれよりないと意地になっている。アメリカは賭に出た。三日の猶予を与える。それが過ぎるとミサイルが飛んでゆくと。そうした予告をすれば、平和団体のグループは命が惜しいから、みんな出国するだろうと甘い計算をしていた。

アメリカの世論も戦争反対に傾斜していった。人間の楯になるために、上院議員自らイラクに乗り込むという者も出てきた。そして、ブッシュの娘も親の反対を押し切ってツアーに参加して、イラク入りをした。大統領の身内まで出てきたとなると、すでに、戦争の理由すら薄れてきていた。

ついに、大統領夫妻が娘のことで口論となった。

「おまえの教育が悪いから、娘はならずもの国家の肩入れをするんだ」

「なんとでもおっしゃい、戦争がそんなにお好きなら、あなた一人でおやりになればよろしいのよ」

そう啖呵を切ると、夫人は荷物をまとめてホワイトハウスから出てきた。

「おまえ、どこへ行くんだ」

あれほど強行姿勢のブッシュも夫人の前では形無しだった。夫人はきっぱりと云いのけた。

「決まっているでしょ。わたしもイラクへ参ります」

これはもう戦争どころではなくなった。娘に出てゆかれて、いままた夫人に見捨てられていた、ただの哀れな中年男だった。大統領は、電話で補佐官を呼んだ。

「大統領閣下、何かお手伝いすることでもできましたか」

ブッシュは力なく弱々しい声で云った。

「すまんが、大統領専用機を用意してくれ。わたしも人間の楯として、イラクへ行こうと思うんだが、どうだろうか」

第398話 無銭飲食

商店街の外れまで歩いてゆくと、汚れた店舗に下手な字でラーメンと書いてある食堂があった。入口のテントは破れて穴が開いているのに修繕もしない。店の外には空き箱がだらしなく積まれていて、見苦しかった。外周りがそうだから、店内は推して知るべしで、ここのラーメン屋の親父、自慢ではないが、もう何年も掃除をしたことがない。保健所の検査が入ったら、一発で営業許可証の取り消し間違いなし。それほど酷い店なのに、何故かいつも人が並んで繁盛していた。場末の店だから、長い商店街を端まで歩いてくるには、駅からかなり歩かねばならない。それなのに、そんな立地の不便さなんのそのと、遠い街からでも、噂を聞きつけて、わざわざこの店のラーメンを人は食べに来る。

全国的にちょっとしたラーメンブームだった。おいしいラーメンがあるとどこへでも行くという自称ラーメン通の高橋和夫は、通勤の途中の駅においしいラーメン屋があると聞きつけて、その汚らしい店へと会社の帰りに寄ることにした。

店の前に立つと、なるほど、噂通りに不潔な感じがしたが、案外、こんな汚い店がおいしいと聞く。和夫は暖簾を潜った。たまたまた方のピークを過ぎたのか、カウンターに席が空いていた。厨房には、店主夫婦と若い使用人が二人の、四人が入っている。棚の上は埃がうっすらと積もっているのが判る。床はねばねばしている。聞きしにまさる店だと納得する。

和夫は初めての店に入るときは、いつも基本の味を知るために、ただのラーメンだけを頼むことにしていた。それがおいしければ、あとはどんなバリエーションを頼んでもごまかされない。基本は麺とスープなのだから、いろんな具で味が判らなくなるより、一番安いラーメンだけとした。

和夫は店内を眺めて驚いた。天井にはパポナ、蠅取り紙、入口には電気虫取り機、そうしたものがやたら下げてある。気が付けば、蠅がわんわん飛び回っていた。カウンターの和夫の前を堂々とゴキブリが歩いてゆく。人間の目に触れても懼れない。逃げない。もう、ここの店の住人といったでかい顔をして、のさばっている。

和夫の頼んだラーメンが来る。細麺で、コシがあってなかなかいい麺だ。それに、何の出汁なのか、スープが確かに美味しい。煮干し出汁ではない。少し獣臭い匂いがしたが、いままで和夫が食べたことのない微妙な隠し味がしていた。何の味なのだろうか。和

夫は、いままで味わったことのない新しい味の発見に内心喜んでいて。そこが、この店の秘伝なのだろう。鰹でも昆布でも鶏ガラでもない。もっと、強烈な何かだ。

半分まで食べて、ふと、和夫はポケットに手を当てると、財布を会社の机の中に忘れてきたことを思い出した。しまった。小銭も持っていない。親父の顔をちらりと見ると、実に怖そうな顔をしている。怒るともっと怖そうだった。どうしようか。明日必ず代金を持ってきますと云っても信用してくれるか。しかも、和夫は何故か、この日に限って、よれよれのズボンに着古した背広を着てきていた。どう見ても金は最初からなさそうな身なりだ。

すると、隣の席で、チンピラのような男が、急に大声を上げた。

「ようよう、ラーメンの上に蠅が浮いているじゃねえか。どうしてくれるんだ」

そうやって客が凄むと、あの怖そうな店主が、急に泣きそうな顔になって、

「お客さん、すみません。お代はいりませんから」と、小声で謝っていた。

「あたぼうよ、誰が蠅入りラーメンに金を払うかよ」

チンピラは唾を吐きかけて店を出て行った。

(そうだ、あの手でゆこう)と、和夫は思ったが、肝心の蠅を掴まえて、態と入れるには、客の目もある。うまくゆかないだろう。それに、立て続けにというのも怪しまれる。そうして、飛んでいる蠅を武蔵のように箸で掴まえようとしていた。

一方、ラーメン屋の夫婦はいまの一件で、かなりしょげていた。何やら夫婦でひそひそと話し合っていた。

「あんた、これで今日は三人目だよ。髪の毛が入っているのは日常茶飯事、考えられないものが入ったりしているからね。この前なんか、あんたの入れ歯が入っていて……。

なんとかしなければ信用がなくなって、客は明日から来なくなるよ」

「判っているって、ただ、追い払っても蠅とゴキブリの野郎はここが気に入ったみたいで、増える一方だ」

「何かいいアイデアはないのかえ」

「ううん、そうだな、何かなあ……。そうだ、いい考えがある。何か入っていたらそれを当たりにして、賞金を出そうじゃないか」

親父はそう云うと、奥の部屋から商店街の売り出しに使う鐘を出してきた。

「一等は一万円、二等は五千円、どうだ」

奥さんは呆れていた。

そんな夫婦の会話も知らないで、和夫はスープを最後まで呑み干した。実にうまいスープだった。感動していた。金のことはその後を考えればいと、丼の底を見たら、なんとゴキブリの死体だけが残っていた。ゲゲ。和夫は急に吐き気がしてきた。このラーメンのスープの秘訣はこれだったのか。

「お、親父、ご、ゴキブリが入っていた」

和夫はようやくそう云うと、親父、にっこりと笑って、鐘を鳴らしはじめた。

「おめでとうございます。お客さん、幸運な方です。それは二等なんです。はい、五千円賞金です」

奥さんも仕方なく傍で拍手をしている。これで、無銭飲食で上げられなくていいが、五千円貰ってもちっとも嬉しいことはない。ゴキブリ入りスープを呑んだことのほうがいつまでも残る。和夫は、あることに気づいた。

「親父、ゴキブリで二等なら、一等は何が入っているんだ」

他の客が嫌な顔をしていたから、夫婦で丁重に和夫を外にお引き取り願った。

「またのお越しをお待ちしております。今日は本当におめでとうございます」

と、ごまかされようとしていたが、和夫はそれでも食いさがあった。

「あのね、一等って、何が入るんですか。一等って」

多分、いつまでもそのことが頭から離れないであろうと、和夫は夜も眠れないことを案ずるのだった。

第399話 卒業のない学校

当節、卒業式でかの「仰げば尊し」は歌わないと聞く。いまの先生たちは仰いでも尊くないし、師に恩を感じずる生徒も減ったからだろうか。代わりにユーミンの歌をうたったり、親たちが聞いたこともない歌がうたわれる。様変わりだろうが、何か情緒がなくなりつつある。

ここに卒業式のない私立高校があった。かれこれ十年は卒業式をやったことがない。全校生徒二千人といういまどき、少子化で子供の数が年々減っているのに、この高校だけは、年々生徒数が確実に増え続けている。それほど人気があるのか。いや、入学したら最後、卒業させない恐ろしい高校だった。全寮制で、寮には鉄格子、学校の周りにも逃げられないように、まるで刑務所かと思間違う高い塀が巡らされていた。

それは十年前に遡る。

「理事長、校長、判っているんですか。この現実を。子供たちはどんどん減る一方です。あちこちの私学が閉鎖の憂き目に遭っています。官学でも、定員を随分減らしています。この辺りの小学校、中学校の子供の数は三十年前の半分以下で、教室ががらがらと空いているそうです。このままでは、わが校も経営難になるのは目に見えています。今年、卒業していった生徒は二百人、今年入学してきたのは百人足らずです。これでどうやって、将来ともにこの学校を維持してゆくことができますでしょうか」

理事の数人が、理事会の席上、発憤して問題提起していた。じっと、目を閉じて聞いていた校長は、急に立ち上がって云った。

「それでは、これからは卒業させないことにしよう」

その発言の意味がみんなは判らなかつた。

「はあ、それはまた、なんと」

「だから、生徒が出るのを抑える、あとはパチンコ玉のように入学してくるので増える一方ということだ」

私学生生き残りのために、入学はできるだけ簡単にしておいた。そのために猿でも入れるくらいの入試問題を作成していた。例えば、数学の応用問題にはこんなのがあった。

問一 太郎くんはリンゴを八個持っていました。ともだちに四個やって、自分で四個食べてしまいました。さあ、太郎くんは最初にリンゴをいくつ持っていたでしょうか。

こんな問題でも間違える者がいる。誰でもとにかく入学させる。そして、卒業試験は百点満点でなければ卒業させないのだ。 π を小数点千桁まで十五分以内で計算しなさい。といった不可能に近い問題を出す。少しでも遅刻をしたら落第、廊下を走っても落第。入学説明会では美人の先生がにこにここと対応しているが、学校をやめたいと、相談に行くと、担当の先生は元暴力団幹部。

「何か、うちの学校に文句でもあるんですかい。話によっては、指を詰めることになるかもしれまへんで」

一度入ったら出られない監獄高校と世間では懼れられた。そうして十年が経ったから、生徒の平均年齢も二十七才。生徒同士結婚して、赤ん坊をおんぶして授業を受けるものもいる。学校での喫煙、飲酒は認められていた。放課後、教室で酒盛りしても未成年でないから許された。中には落第を続けて三十過ぎの高校生も珍しくない。高校の勉強を二十年くらいしている生徒もいた。そうなれば、教科書は丸暗記、歩く参考書とまで仲間からは云われ、その辺の先生よりは勉強に精通していて、先生が休んだときは、たまに授業をアルバイトで受け持つというやつだった。

最長老はこの学校に戦前からいる高校六十年生のじいさんだ。社会に出たことがないから、仕事をせずに、一生、高校生を通してきた。たまたま資産家だったから別に仕事はしなくてもよかった。いつまでも青春にしがみついて、女子高生に囲まれてご満悦であった。自分の孫と同じくらいのクラスメイトとどうして話を合わせているのか。

白髪で腰が曲がった学生服も見苦しいが、なんととっても、一番卑猥なのが、三十過ぎてセーラー服を着なければならない生徒がいることだ。すでに世間ではおばさん。それが制服だからといっても無理がある。

ある日、全校朝礼で、校長がいつになくしょんぼりして、みんなに話した。

「生徒のみなさん、みなさんは、ようやく、めでたく、全員が明後日、卒業できることになりました。突然で申し訳ないが、急遽、わが校でも卒業式をやることとなった」

生徒たちはざわめいた。ここまでくると卒業できることが嬉しくもなんともない。

「先生」と、ひとりの老けた生徒が質問に立った。

「そんな、いまさら卒業だなんて、この不景気で、普通の高校生でも就職がないときに、高校生を二十年やってきたぼくは、なんと履歴書に書けばいいんですか。それに、男子はどこでも三十五歳までの採用で、世の中に出されても、困ります」

「そうだ、そうだ」と、体育館にみんなの野次が飛ぶ。

「わたしも、毎日が若いままで楽しいわ。それに、仕事をしなくてもいいし、まあ、親は大変だろうけどさ。いつまでも臍齧りっていうのも楽でいいのに、これから仕事なん

かできっこないわ」

あちこちからどよめきと嗚咽までしていた。校長はひたすら頭を下げ続けた。

「すまん、この学校は、実は、もうすぐ倒産するんだ。君たちだけではない。わたしも先生たちも出される。この学校は競売にかけられるだろう」

みんなは呆然としていた。私学も破産する。生徒たちはリストラされるように卒業させられるのだ。

若い人たちは、この春に夢も希望もない社会へと羽ばたく。その地獄の学校こそが、死ぬまで卒業がない。

第400話 明治の匂い

明治の雪という何かの題名が気になって、それが実に新鮮な響きで記憶の隅に残り続けている。

わたしが生まれたのは昭和二十六年。太平洋戦争が終わって六年の後である。祖父が青森市の空襲で焼け跡になった街に自力で建てた家で生まれた。二階建て、川と柳の並木のある柳町通りに面して家はあった。市の中心にあたる場所であり、向かいには闇市、デパートなども近くにあり、賑やかな商店街であった。家の正面では洋菓子店と喫茶店を、シベリア抑留から戻った父と、満州から引き揚げてきた母とで切り回していた。一階の奥は工場で煉瓦の手製の釜があり、風呂と便所も下にあった。二階は住居。両親、祖父母、曾祖父、わたしと姉妹二人、独身だった叔父、父の兄夫婦とその子供たちが五人が同居していた。総勢十六人が八畳間が二間、六畳間が一間にひしめきあって生活していた。

人間の記憶というのは個人差があるだろうが、もの心がついたころが記憶の開始時期とすると、洞爺丸台風が起こった二十九年の三歳の記憶が一番古い。

わたしは、よく、虫歯で夜泣きした。その度に、隣の部屋で寝ていた曾祖父が、唐紙を開けて、「うるさい」と怒鳴ったものだった。父は母に夜中起こされて、渋々、すぐ近くの歯医者に幼いわたしを連れて行って、医者も迷惑だったろうが、夜中に叩き起こされて、虫歯で泣く、わたしの治療に当たった。それが、頻繁だった。母は、生まれて生えてきた歯が異常に白く、それがまもなく虫歯になったといい、歯の弱い子であったと述懐する。

曾祖父が亡くなったのは、その翌年だった。わたしが四歳のときである。自宅の狭い六畳の間に仏さんを寝かせ、親戚が座る場所もないくらいひしめきあっていた記憶がある。白髭の曾祖父は明治二年生まれ、その三年前は江戸時代であったというのが信じられない。八十九で亡くなった。雪の降る、寒いときだった。階段を下りて、階下にある

便所で脳溢血で倒れていた。真夜中であつたので、気が付いた家人が、みんなで遺体を二階まで運んだという。

父は、この家で一番威張っていた曾祖父の死に顔を、白い布を取って、わたしたち子供に見せた。

「ほら、これが死んだ人なんだよ」

子供ながらに、いままで頭が上がりなかつた偉い人が、死んだ途端、死者を冒瀆するように扱っている不思議を感じていた。それより、父は、人間が死ぬとこうなると、初めて死者を見る子供たちに学習させたかつたのだろう。

曾祖父の棺は、馬櫓に乗せられ、その棺の両側の長椅子にわたしと祖父、親戚の年寄りたちが並んで座り、近所の人たちが見送りに外に立っている中、馬櫓は鈴を鳴らしながら、町の郊外にある焼き場へと走つた。

曾祖父がいなくなると、その部屋には祖父がスライドして寝ることとなつた。家の中にも順番があるということを知つた。次々に年とつて死んで、居場所が次の隠居の座に譲る。祖父も、明治二十二年生まれだから、後で石川啄木とあまり変わらない年と思うと、随分古い人のような気がした。その祖父にわたしは一番可愛がられた。誕生日が九月一日で、二百十日に生まれたから、台風でもびくともしないようにと、岩之助という名前だつた。文字通り、頑固で家人の云うことを聞かない。

祖母が亡くなると、祖父はひとりで仏間に寝ていた。それが、淋しそうに思えたので、わたしは、小学生から中学になつても祖父と蒲団を二つ敷いて寝てやつた。二階に自分の部屋とベッドがあるのだが。試験勉強で遅くまで机に向かっていると、祖父は決まつて、「まだ、寝ないのか」と、迎えにくる。仕方なく、わたしは、電気スタンドを点けて、下の部屋の蒲団に潜つて、寝ながら教科書を開いていた。

祖父はよく寝言を云つた。

一明治は遠くなりけり。

と、云うものであり、また、

一充れば欠くるるとき世の習い。

というものであつた。

食べ物でも紙でも粗末にしてはいけないと、ケチなほど捨てるものを仕舞いこんでいた。食事のときは、

「おまえたち、こんな贅沢な食事ばかりしていると、いまにバチが当たる。いいことはない」と、口癖のように云つていた。別に贅沢な食事でもなかつたが、戦前の一汁一菜の食事に比べれば、だんだんと生活も豊かになってきていたから、不思議でもなんでもなかつたのだが、明治人の目にはそう見えたのだ。

祖父は、いつも物語のように、生まれたときからの世の中をわたしに教えて聞かせた。日清、日露、太平洋戦争の話を見かせ、昭和恐慌のことなども体験を通じて童話のように話してくれた。

祖父は、汁でも醤油でも残れば、それにお湯を注いでうまそうに飲み干した。それが

、いつもおいしそうなので、勿体ないからそうしているのだということを忘れさせた。食べ物を粗末にすれば叱られたので、わたしは未だに食べ物に対しては、ひとつの神聖な気持ちを抱いて、食べ残すことに不愉快と罪悪感を持つのだ。いい躰をして貰ったと思う。

いろんなところでお年寄りたちと逢う機会がある。明治生まれは少なくなった。明治四十五年生まれの人は今年で九十二歳となる。だんだんと希少価値が出てくるのは当然だ。あの、明治人の気骨が、薄れてくる。

祖父も冬に雪降る夜に亡くなった。九十歳だった。毎年、歴史を埋めるように白い雪が積もってゆくとき、「降る雪や」とつい口をついて出る。その明治は仏壇の中で笑っていた。

第401話 人間をやめた犬

一匹の変な犬が街をうろついていた。首輪はしているが、放し飼いだ。しかも、ロープが首輪についていないから、逃げてきた犬でもなさそうだ。街をうろつくのら犬はほとんど見かけなくなった。それだから、その犬は目立つのだ。しかも、何か様子がおかしい。犬にしては四つん這いの格好が無様だ。どう見ても前足より、後ろ足の方が長いようだ。だから、四つん這いが苦しそうに見えた。セントバーナードの毛並みだから、図体は大きい。人間の太目の大人と同じくらいの大きさだった。

ただ、その犬が、街を歩くと、女子高生やOLたちが、キャーキャーと悲鳴を上げて避けて通る。

「なによ、ヘンタイ」と、犬に向かって云っているから、何かあるのだ。よく見ると、その犬とは、どうやら、着ぐるみの中に人間が入っているのはすぐ判る。本物の犬のように颯爽と歩けない。歩き方もどこかぎこちない。ただ、問題なのは、着ぐるみの股の前と後ろに穴を空けて、肛門と陰囊が丸見えなので、それで若い女性たちが騒ぐのだ。騒ぎを聞きつけて、警官がやってきた。警官もその犬を見て、苦笑いしていたが、公衆の面前で、淫らな格好をしているかどで、その変な犬の格好をしている男は現行犯逮捕されて、警察署まで連行された。連行するときも犬は大暴れして、警官の手を患わせた。

「うー、うわん、うわん」と、やたら吠える。吠え方もどこか人間であると判る鳴き声だった。しまいには、警官に噛みついて、しこたま警棒で叩かれて、

「キャーン、キャーン」と、急に大人しくなった。犬は強いものには服従するのだ。

警官たちが、警察署で着ぐるみを脱がせようとする、犬は必死の抵抗を試みて、なかなか姿を見せたがらない。そればかりか、すっかり犬の格好をし、二本足で立とうと

はしない。「うー」と呻るし、歯を剥き出しにして、闘志をも見せるのだ。どう見ても中の人間は頭がおかしいとしか思えない。

「ふざけるな。いい加減にしないか。調書を取るから大人しく座っている」

警官がは初めは笑っていたが、あまりに演技が迫真に迫っているので、だんだんと不気味に思えてきた。

叱られた犬は、椅子の上に犬のように座っていた。

「さあ、名前は？」

「うわん」「現住所は？」「わんわんわん」「生年月日は？」「わわんがわんわん」

警官は机を叩いて怒った。何を云ってもわんしか云わない。やはり自分を犬だと信じ込んでいる気違いのようだった。

警官の一人が、試しにホッカ弁当を与えてみた。すると、犬は弁当に口をつけて器用に食べ始めた。犬だけでなく、動物は口が尖っているから、手を使わなくても比較的口を突っ込んで食べやすいようにできているが、人間は口より鼻が高いので邪魔で食べにくい。だが、男は慣れているとみえ、犬の毛皮を被っているが、口と目だけは出して、がつつと食欲に食べ始めていた。喉も渴いていたとみえ、皿にジュースを入れて出すと、ペロペロとうまそうに舐めるのだった。

暫くすると、犬を引き取りにきたという老人が警察署を訪ねてきた。

「この犬の飼い主だと云うのだね」

「そうです。普通の犬よりは番犬として役に立ちますし頭もいい。何せ、一流大学を出ていますからな」

犬の男は、老人を見ると「クーンクーン」と、鼻を鳴らして甘えたように老人にすり寄ってきた。

「よしよし、あまり遠くへ行くんじゃないよ。怖いおじさんたちに捕まるから」

老人は頭を撫でて、まるで本物の犬扱いだ。警官たちは呆れていた。

「あのですね、この人が犬の格好しようが、キリンの格好しようが、それはどうでもいいことなんです、尻の穴と金玉だけは法律に違反していますから、なんとかありませんか」

すると、老人はむっとした顔をして云った。

「ポチは、ああ、この犬の名前ですが、毛皮を着たまま脱がないことに決めたのです。小便は片足上げて、電信柱へとスタイルは犬のままです。うんちだって、ワンワンスタイルです。ですから、彼はもう立派な犬です。何か文句がありますかな」

「そうは云っても、一応、人間なんでしょう」

「いや、ポチは、もう人間を辞めたんです。国籍も離脱しましたし、日本人でもない。税金を納めるのも嫌になったのです。戦争はあるし、政治家はアホばかりだし、経済はがたがた、国政はちゃらんぽらん、こんな人間界に嫌気がさしたんです。それまでは、エリートサラリーマンでした、それが、会社は倒産、奥さんは男を作って出て行って、家庭崩壊。もう二度と人間には戻りたくないでしょう。あなた、犬の方がどんなに合わせなことか、税金はないし、人間関係の複雑さはないし、戦争もないときている

。わしも犬になりたいよ、全く」
ポチは、その通りだとばかり、
「ワワンがワン」と、威勢良く吠えた。

第402話 地中の方舟

いい加減にくさくさしていた。運動不足を解消するために、やたら狭い室内を歩き回るのは、周りの家族を苛々させた。それではと、孝幸は筋トレに切り替えた。道具がなくとも、屈伸運動や、腕立て伏せ、柔軟体操はできる。体が確かになまってきていた。それは家族全員がそうだから、定期的にみんなして運動をすることにしていた。汗をかくということもなくなった。第一、風呂に入れないのだから、余り汗をかいたりしても後で体が臭くなるだけだ。体はシャワーを浴びたり、風呂に入る代わりに、滅菌作用のある濡れティッシュで、全身を各々が週に一度だけ拭くぐらいだ。髪は仕方ない。何せ、水が貴重品となっているから、大事に使わなくてははいけない。

風呂に一年入らなくても死ぬことはない。江戸時代の農民はそんなに入らなかったと資料にあったのを孝幸は思い出していた。この部屋には人間の生活に最低必要なものしかなかった。なくてもいいものは持ち込めない。できるだけ、無駄なカロリー、水、空気は消耗することなく、合理的に使用し、消費も極力抑えてゆかなければならない。

六畳間に6人家族が暮らしていた。隣に、トイレと倉庫がある。トイレで排泄されたものは、地中に広く掘られた洞窟みたいなところに放出されるようになっていた。倉庫の中は医薬品と食糧、水だけだった。食糧は、高カロリーで、アルファ化が高いもの、しかも栄養のバランスがとれたものが、選別されて積み込まれていた。煮炊きできないから、そのまま食べられるものだ。火が使えないので、それを考慮した食品だけが、与えられる。そうすると、味気ないものが多い。いわゆる、普通われわれが口にする食事は想像できない。カロリーメイトのようなぎゅっと栄養の詰まった補助食品から、ビタミンは錠剤で補給する。あとは、すべて粉食となる。乾燥粉末にした、人参や大根、じゃがいも、リンゴ、ほうれん草などがある。狭い空間に、より沢山の食料を詰め込むには、粉状のものがいい。形あるものは隙間ができるから、無駄なスペースが生じる。すべて真四角なブロック状に固形化されて、倉庫にびっしりと積み上げられていた。

水は、外気から取り込むが、これをそのまま飲用にするのではなく、科学的なフィルターや触媒を通して、濾過したものを使用するから、微量なものだ。一日に成人に必要な二リットルは採れないにしても、家族で十リットルは必要だ。

空気は、これも外気をそのまま取り入れることはできないから、すべて科学的に処理したものを空気清浄機にかけて、安全であると、機械でチェックしてから室内に取り込んでいる。それらの機械の動力や、室内の蛍光灯、及び、冷暖房に使用する電力は、外に貼り出してあるソーラーシステムの大きなパネルに頼っていた。それらは、うまいぐあいどこからも見えないような山の窪みに設置されていた。

家族は、孝幸に妻の有希恵、本当なら高校生になっている娘の春夏、中学の息子の裕樹、そして、八十を過ぎた祖父母だった。

味気ない夕食が始まる。スプンで、とうもろこしの粉と、ミックスベジタブルの粉を

掬って食べる。味付けはしているが、あまり美味しい食感ではない。

「さあ、今日のデザートはドライフルーツよ。コーヒーも入れましょうね」

有希恵は、少ない食材の中からできるだけ楽しめる組み合わせを選んでいた。楽しみはそれでもないくらいだから。

「ラジオはどうだ、まだ入らないか」

祖父が、一日に何度も訊くのが、ここの日課になっていた。無駄だと判っていても、孝幸も一日に三度はラジオのスイッチを入れて、選局してみる。ひょっとして、どこかの周波数をキャッチするかもしれない。だが、ラジオは、いつも雑音ばかりで、人の声をスピーカーから流すことはなかった。

囚人でも、外の散歩はあるし、運動ができる広いスペースを与えられる。だが、ここでの生活は三・六メートル×二・七メートルよりない空間に6人が閉じこめられているのだ。娯楽としては、ゲームボーイのようなゲーム機から、トランプ、囲碁将棋とあるが、いずれも折り畳みができて、コンパクトなものばかり。勉強もしなければならぬので、子供たちのために、電子辞書を使って、語学の勉強から百科事典で知識を得る。いずれも掌サイズの電卓のようなものに辞書が詰まっている。学校がなくとも、学ぶ時期には学ばねばならない。

そして、もっとも大事な日常の仕事があった。それは、地上の観測だった。ファイバースコープが、地中三十メートルのシェルターから伸びてきていた。それが、山頂の見晴らしのいいところで、潜水艦の潜望鏡のように百八十度、方向を変えて眺めることができる。遙か麓の街の様子も望遠で確認できるようになっていた。そして、あとは、地上の気温、湿度、放射能を測定する器械が常に働いていた。

「おじいちゃん、もうそろそろ外に出られそうだよ。放射能がもう人体に害がないくらいまで減ってきている」

孝幸は観測データを見ながら云った。

「そうか、それでは、下界の空気を吸うために出るとしようか」

「わーい、ようやく、ここから出れるの。嬉しい」

春夏と、裕樹も飛び跳ねて喜んだ。

「何年ぶりだろうね、あんた、このまま、ここで死ぬのかと思ったわ」

祖母も涙を流していた。八甲田山の山頂に埋められた核シェルターから、マンホールの階段を上がって、家族は本物の太陽と本物の空気に触れた。みんな目を射られたように細めていた。あまりに眩し過ぎる。鳥たちが啼いていた。生き物もまた還ってきていたのだ。

「気持ちいいわ」有希恵も大きく伸びをして深呼吸していた。だが、彼らはそれも束の間、改めて現実を直視しなければならなかった。

遙か下に見える青森市は、まるで飴のようにぐにゃりと溶解して見えた。生きているものは恐らく一人としていないだろう。

可愛い子には旅をさせよと、わたしは、長男が中学を卒業し、高校も合格した二十日以上以上の春休みに、合格祝として、全国どこでもJRなら乗り放題のフリー切符を彼に与えた。別にすることもなく、ぶらぶらしていた長男は、親父からのプレゼントに戸惑っている様子だった。

わが子ながら臆病で、目的もなくただふらふらしている性格を叩き直すために、わたしはよく山に連れて行った。北海道にサイクリングもした。息子を鍛えるには旅がいいと、過酷な旅によく同行させた。音をあげる息子を途中で置いてゆくと、後も振り向かず先に行ってしまう。息子は小さな自転車を漕いで泣き泣きわたしの後ろをついてきていた。

小学生のときからそうした男の子としての鍛え方をしたのも、母親がいなかった分、さらにわたしに何かあると、ひとりで生きてゆかねばならない息子のことを考えて、強い子に育て貰いたかったからだ。

「何、お父さん、今度は何なの」

そんな突然に連れ出すわたしの癖を知っていて、息子は不安そうに訊いてきた。

「なんの、たいしたことはない。一週間の旅行だ」

そして、わたしは息子に切符を手渡した。

「明日出発だ。手荷物はいっさい持ってゆくな。今回はおまえひとりで行くんだ。ただし、何かあるといけないから、ケイタイだけは持ってゆけ。金は一円も持たせない。それで、北海道の北の果ての宗谷岬まで行って、着いた証拠の写メールを送ってくる。そこから、今度は鹿児島島の南の果て、佐多岬まで行って、やはり証拠の写メールをお父さんに送ってくるんだ。北と南の端に一週間でタッチして戻ってくるという、これはアドベンチャーゲームだな。どうだ、面白そうだろう」

それは、わたしが息子のために考えた旅だったが、息子はあまり嬉しそうではない。なんだか、おどおどしている。

「勉強も大事だが、これから世界は何が起こるか判らない。遅く生き延びるサバイバルな訓練と思って、一週間後に無事ここに帰ってくるんだ。この旅行にはもうひとつルールがある。行きと帰りと同じ路線を通らないことだ。判るな。時刻表も地図も持たせない。判らなかつたら人に聞け、腹が減ったら、頭を使って喰うことを考えろ」

いまだ十五歳の少年に、わたしは親としてひどいことをしているのかもしれない。一番不安で心配なのは、この父親だった。だが、それが辛い旅であればあるほど、人生の中で最高の思い出として残ることも知っている。

息子は翌日、東京を離れた。彼は、行きは常磐線を選んでいった。特急、各駅停車を乗り継いで北上するつもりなのだ。わたしは、上野駅まで見送りに行って来た。着の身着のまま、すっかり無銭旅行だった。

それから、毎日朝晩、息子のケイタイからメールが送られてくる。

いま、青森に着いた。これから下北半島まで車でいき、ヒッチハイクで長距離トラックをゲットして、函館まで行く。青函トンネルは帰りに通る。同じルートを通らないというのはきついよ。

まるで、電波少年の番組みたいで面白い。電車の中で、おばあちゃんからパンを貰って食べたよ。夜行で寝てゆくから、明日は稚内に着く予定。

わたしは、毎日、息子のことを思うと、心配で、仕事も上の空だった。いつも息子のことを思い、いま、どんなところを走っているのかと、手帳についている全国路線図を眺めて気持ちは一緒に旅行していた。息子から日本最北端の宗谷岬で記念撮影した写メールが送られてきた。

実は、わたしも若いときに全国早周り一周を企てて、挫折した。半周だけして、病気になり引き返した無念を息子で晴らそうとしていた。

北海道を離れて、いま日本海に沿って新潟まで向かっている。こちらはまだ雪がひどい。

ようやく九州入りだ。流氷のオホーツクから、一挙に南下して、桜が咲いているなんて、日本列島は長いんだな。ジャンバーもいらないくらい温かい。

そうして、息子はよいよ最終地点の鹿児島入りを果たした。きっと日差しの明るい日南線で、終点の志布志まで行ったのだ。わたしも若いときは、そこまでは行き着いた。あとは、線路がないからJRのバスを乗り継いで、最南端の佐多岬を目指す。予定通り行くと、この日の夕方前には岬に到着するはずだった。わたしは、蘇鉄のなる南国の春を思い浮かべていた。

息子が東京を発って、五日目だった。かなりの強行軍だったろう。案の定、夕刻に、息子から写メールが届いた。灯台をバックにピースサインを送っている息子の笑顔があった。どこで寝て、何を喰ってきたのか、別にやつれたふうもない。元気そうで安心した。あと二日で東京へ戻ってきたらいい。急ぎ足だから、ただ沖縄と四国を除く日本を素通りしてきただけの旅だったろうが、日本のサイズがだいたい判ってくる。

ところが、鹿児島にいるはずの息子が、病院に入院したと連絡があった。盲腸だった。しかも、それはこの街の病院だった。飛行機でもそんなに早くは戻れまい。わたしは、狐につままれたように、都心の病院にかけつけた。電話をよこしたのは、息子の同級生からだった。

考えてみればおかしい話だった。佐多岬にいた彼からメールが来たのはつい二時間前だった。それがどうしてこの東京にいるのだ。わたしが、病院に着くと、廊下に息子の友人たちが心配そうに数人いた。

「どうした、みんなして」と、わたしが尋ねると、みんなしょんぼりして、

「叱らないでください。この五日間、ぼくの家はずっと泊まっていたんです」

ははあ、息子は嘘のメールをずっと流していたのだ。写真も多分、ネットでみつけた観光地の写真に自分の写真を合成したものだろう。わたしは、わざと、ベッドに寝ている息子に話しかけた。

「どうだった？ 全国一周早周りの旅は、ずいぶんと早かったな」

息子は蒲団をかぶったままだった。合わせる顔がない。まあ、いい。当節の若者はそんなものなのだろう。わたしの若いときの夢は実現することなく、また夢のまま、遠いところにあり続けた。若者たちは、はみだすことのない自由で夢の首を絞めていた。

第404話 笑いのない国

いつからかこの国から笑いという文字さえ消えていた。長引く戦争と飢え、病気と貧困、底の見えない恐慌が、人々から笑いを奪いさっていた。

この国を自分のライフワークの試験台にしようと、コメディアンの中の邪鬼が、空港に着いたとき、何か暗い雰囲気を感じるのを感じていた。いつもそうなのか、人々の心が空が映しているのか、どんよりと曇っていて、太陽の射さない国だった。空港の職員たちもポーターも仏頂面をしていて、愛想がまるでない。スマイルという表現がこの国にはないのだ。

天の邪鬼は、バスで市内に入ると、ホテルへ荷物を置くためにとりあえずチェックインだけ済ませようと向かった。途中の書店で、辞典を立ち読みした。笑うとか微笑という文字がいくら探してもみつからない。そういった感情がないから、当然、そんな言葉も生まれなかったのだろう。街のガイドブックを買おうとレジに持ってゆくと、店員から睨まれた。そして、勘定のときに、罵声さえ浴びせられた。

「この莫迦が、よくも買ってくれたわね、ありがとう」

天の邪鬼はぎょっとした。見知らぬ相手から、しかもお礼を述べられる場合に、怒鳴られるなんて。少し、頭がおかしいのか、それとも店員の教育がなっていないのか。天の邪鬼は、逆上して、

「店長はいないのか、店長は」と、苦情を云おうとした。バタバタと騒ぎを聞きつけて、奥から店長のような男が飛んできた。

「何かあったのか、おい、そこの客、いい本を買って気分がいいと見えるな、ばかやろうが」

ええっ？ 一瞬、何を云ったのか理解するのに時間がかかっていた。目を白黒させていると、店長は云った。

「おまえは、旅行者だな、ちゃんと耳があるなら聴けよ。この国では、こんな乱暴な言葉が相手に対する尊敬語なのだ。判ったか、ばかやろう。誤解のないようにしろよな」

実に怖い国だった。口の利き方を知らないのは、日本の若い者にも多いが、そんなタメ口などまだ可愛いもので、ここでは喧嘩を売られているか、叱られているような言葉遣いが、愛情のしるしなのだ。

天の邪鬼が外に出ると、街頭で、恋人たちが、抱き合っていた。

「おい、ブス、おまえを愛してやる。ありがたく思え」

「なんですって、わたしの方こそ、あんたみたいな男で満足してやるわ」

まるで喧嘩なのだが、ちゃんと抱擁し合っているのだ。気の弱い人なら一時間ともたないだろう。通行人の顔を見ても、一様に苦虫を潰したような怖い顔をしている。実に面白くない顔だ。では、本当に怒ったときは、どんな言葉遣いと顔をするのだろうか。天の邪鬼は、いろいろと想像してみた。自分も日本では随分とヘソ曲がりだが、ここでは普通以下だった。

ホテルのフロントで、さっそく天の邪鬼は、公用語の英語で落語を一席ぶった。

「ええ、毎度ばかばかしいお笑いを。うちのかみさんが、血相変えて家に戻ってきましてね、『あなた、わたし、車に轢かれそうになったのよ』と、云うものだから、亭主、激怒して、『なんだとお、馬鹿な運転手だ。しくじりやがって』」と、小喃を云っても、逆に怒り出すだけ。

「ふん、それがどうした。面白かったぞ、もっとやれ」

とても、受けたようには思えない。場が白けるだけだった。それではと、天の邪鬼、フロントの男性の首筋や脇の下をくすぐってみた。

「何をしやがる、くそつたれ、くすぐったいからやめるんだ」と、怒鳴りながら、笑うでもなく、目を吊り上げて苦しんでいる。

宿泊客の多くが、何事かと、フロントに集まってきていたから、天の邪鬼はついでに笑いの講習会を開いた。

「お集まりのレディース&ジェントルマン、わたしの顔をよくご覧ください」

天の邪鬼はけたたましく笑いだした。ホテル中に響くような声で大笑いしていた。すると、どうしたことだろうか。みんなは、悲鳴を上げて逃げ出した。フロントはカウンターの内側に隠れた。部屋に入っていた客も全員、飛び出してきて、外へ一斉に非難し始めた。みんなの顔は恐怖で引きつっているのではないか。天の邪鬼がただの一回笑っただけなのに、ホテルからは全員避難していた。

少しして、ホテルの前にはパトカーが数台、機動隊までが、楯を持って取り囲んでいた。天の邪鬼がホテルの玄関に立つと、警官の構えた銃が一斉に自分に向けられているのに気付いた。

「な、何なんだよ。おれは、ただ笑っただけじゃないか。こいつらは、何を懼れているんだよ」

天の邪鬼は余りの馬鹿らしさについ本気で笑ってしまった。と、同時に銃声が一斉に起こった。

確定申告の時期がやってきた。どこの社長さんも気が重い。赤字で税金を納めたくても納められない。遥出版社は今年も三月決算は赤字だ。今年もというが、もう十年以上利益が出たことがない。リンゴが赤くなれば医者も青くなり、会社が赤字になれば社長は青くなる。

もういい加減に赤字体質に開き直るか、慣れてしまえばいいものだが、そうはゆかない。社長は第一に、従業員に対しての責任がある。利益を出して、せめて少なくとも賞与は世間並みに出してやりたい。次に、株主に配当を出してやりたい。十何年も配当がないから、株主総会に来る者がめっきりと減った。たまに株主に街で会うと、「あれ、まだ会社があったんですか」と、完全に相手にされていない。そして、銀行に対しても、利益を上げておかねば、融資打ち切りになる。取引先にも不信感を与える。赤字は罪悪で、いいことはひとつもない。少しでもいいから、利益を出して笑って新年度を迎えたいと、どこの社長も考えているが、七割が赤字というから、会社はあっても、金喰い虫で、税金も納められないから、世の中に貢献していない。事業を継続すればするほど墓穴を掘ることになる。

頭の痛い三月だった。なんとかして、粉飾決算をする方法がないかと金澤社長は、前田専務とごまかしを模索していた。

「棚卸しを過大計上しましょうか」

遥出版の倉庫には、書店からの返本の山だった。

「そうだな、税務署が入っても、あの本の山を数えるのは不可能だろうし」

「領収書を破棄しましょうか」

「それもいいな」

普通なら、粉飾とは、利益隠しに使われる。最近はどここの会社も赤字で悩んでいる。脱税ではない。その逆で、架空の利益を計上して、なんとか社会的信用を取り戻さなければならない。税金を納めるためのごまかしだから、税務署は怪しまないだろうが、株主にタコ配すれば犯罪だ。架空売上を計上するやり方もある。翌年度に返品させて、売上の前倒しをするやり方だ。脱税なら、いろんな手口があって、やりやすいが、その逆はどう捻っても出ないものは出ない。しかも、利益を出すまで、距離が遠いほど、ごまかしが難しい。あと少しで黒字だというときは、伝票操作で、なんとかなるが、売上の二割の経常損を出したときは、どう操作してもできない。だから、世の中の会社で、ちょびちょびと利益を出している会社は怪しいということになる。大概、みんなやっていることだろう。

緊急に役員会が開かれた。席上、編集部の中津部長と、営業の工藤部長が、経営方針にまで関わるような発言をした。

「月末までに、かなりの売上と利益を得る方法があります。昨年、ゲラ刷りまでいって

、企画が棚上げになった、例の問題の二冊の本を出版しましょう。すぐに答えは出ますよ」

すると、社長は顔を紅くして、

「あれはいかん、いかんぞ。わが社の沽券に関わることでもある。みんなに笑われて足下を見られることになる」

「そんな悠長なことは云っていただけませんか。わが社に明日はないかもしれませんが、それは、硬派の出版社としていままで半世紀の間、地道にやってこれましたが、この出版不況で、中継ぎの鈴木さんは倒産するし、堅い本を出している真面目な出版社が続々と倒産しています。わが社でも、そろそろ方向転換して、やわらかい本を出さねばならないときが来ているのです」

工藤部長は泡を飛ばしてこのときとばかり経営陣を説得していた。

「岩波書店だって頑張っているんだ。うちは、週刊誌も、コミックも出さないで、先代の時代から哲学書、歴史書、学術書などの老舗としてやってきたんだ。それが、赤字だからとなんで今頃になって、ヌード写真集やポルノ小説を出さなきゃならんのだ」

金澤社長は嘆いていた。守るべき線は絶対に越えてはならない。

「でも、北村夜梅のポルノ小説は、いまや超ベストセラーにのし上がろうとしています。大々的に宣伝して、発売初日で初版十万部は完売となるでしょう。写真家の黙田氏の記念碑的作品、『建田玲を撮る』は、エロティシズムを乗り越してまさに芸術です。それも、あとは印刷に回す段階で停まっているのですから、いまからなら、月末の発売には間に合います。売掛でも、一応売上が立ちます。きっと利益は出るでしょう」

中津部長も自信を持って説得にあたっていた。前田専務も傾きかけてきていた。

「社長、時流には逆らえませんが、ヌードも芸術なら、ポルノも文学です。ここいらで、考えを改めませんか、生き残れなくなります」

金澤社長は思案に暮れていたが、ようやく決断した。

「よし、やってみよう。ただ、品よくやってくれないか。看板に傷がつかないようにな」

遙出版は急に忙しくなってきた。新聞の下段広告を予約、電車の中吊り広告のポスターもすでにデザインが上がっていた。中断した作業を開始するだけでよかった。バタバタと二週間で上げさせる。

いよいよ発売当日。世間はあっと驚いた。あの硬い本ばかり出していた遙出版が、ヌードにポルノ。敵の週刊誌は笑い者にするように特集を組んで書き立てた。それが、逆にもの凄い広告効果で、人々は書店に殺到した。いままで脱いだことのない女優の建田玲が脱いだことも話題をさらった。出版社は、たった一冊のベストセラーで蘇る。二日目になると、全国の有名書店から追加注文が殺到した。初版はすべて即日完売となった。三月の売上は半年分の売上を稼いだ。

社長もまんざら悪い気はしない。世間がなんと云おうが、遙出版だから新鮮味があって成功したのだ。ほくほく顔で、事務所に戻った金澤社長は、みんな、ヌード写真集を

開いて、熱心に眺めていて仕事が手につかないでいるのを忌々しそうに眺めていた。しかも、みんな鼻を押さえている。

経理の遠野課長を呼んだら、課長も何故か鼻を押さえている。

「どうだね、業績は黒字に転換しただろうね」

「いや、それが、赤血で大変です」

社員の多くが、ポルノ小説とヌード写真を見て興奮したとみえ、鼻血を出していた。

第406話 確信

武守警部は、部下に命じて、ならず者の布施允の逮捕に踏み切った。逮捕理由はいつも些細なことだった。だいたいが、捜査がしやすいように、最初に軽犯罪でもなんでもしょっぴいてしまう。その後に家宅捜査で、もっと大きな証拠を押さえるといった、別件逮捕の常套手段だった。

布施は、武守警部にとっては煙たい存在だった。まず、知りすぎている。ヤクザの世界なら、そいつは証拠隠滅のために抹殺すれば済むものだが、警察は、冤罪という手口で陥れる。何がなんでも務所に収監し、口封じをしなければならない。布施の罪状は、脅迫だったが、銀行に爆弾を仕掛けたのが、彼であったという証拠はない。だが、警部は彼がやったものと確信していた。

「警部、証拠がないのに、摘発はまずいですよ」

「いや、おれの目には狂いはない。彼であるという状況証拠があるではないか。あとは、取調室で吐かせるまでよ」

「それも、どうですがね、最近では世間もうるさいですからね、状況証拠で自白強要で、冤罪だと、市民団体の目も厳しくなってきましたから」

「相手は虫ケラみたいな街のダニだ。世間が肩を持つわけがないだろう」

警部は余裕のある笑いを見せて、今回は勝算ありと自信のほどを見せていた。

「おれの第六感が外れたことはないんだ。今回は、おれには確信がある。あいつの根城を捜査してみろ、きつとごろごろと出るものは出る」

「出るって、何が出るんですか」

「相当にヤバイものを隠している臭いがする。たとえばそれはヤクだ。そして、ハジキ、もっとすごいところではプラスチック爆弾。そいつはかなりの殺傷能力と、破壊力があるやつだ。それと、もっと怖いものとして、サリンや細菌爆弾が出てくるかもしれない」

「ああ、オウムから出たやつが、何故か、没収したはずなのに、忽然と消えた、あれです。その後、行方が判らない。それをやつが持っているとしても……」

「そうだ、あいつが絶対に隠している。どれ、捜査班に協力して、家捜しを手伝うとするか。警部補、君も同行するかね」

「はい、警部」

二人は車で、組のアジトに向かった。

「でも、どうして、警部は布施を目の敵にするんですか。確かにあいつは、警察を敵に回した爆弾犯の動機は多分にあります。それでも、証拠が出ないのに、今回の強制捜査は世論でも、マスコミでも非難が集まっていますよ。これで、証拠が出なかったら、われわれの首も危ない」

警部は何故か、余裕のある顔をしていた。不敵な笑いを見せていた。

布施組のアジトは、浮浪者やホームレスたちが多いドヤ街の一角にあった。社会の底辺の人間たちが蠢いている。そこはシャブと、売春と禁制品売買の巣窟となっていた。その元締めが布施組だった。先に捜査に入っているパトカーが三台停まっている。ロープが組事務所前に張られ、立入禁止となっていて、警官が警備に当たっていた。

「警部、ごくろう様です」

若い刑事たちが、白い手袋で物色しているのを止めて立ち上がった。

「どうだ、何か出たか」

「出たのはヤクだけです。それも純度の低い、混ぜものです」

「そうか、その、茶筒のような入れ物に入った、なんというか、カプセルみたいなものは出なかったか」

警部があまり具体的に云うので、

「それは何でありますか」と、他の刑事たちが不思議がる。

一方、警察署で、責められている布施は、小出しに白状していた。

「ああ、思い出した。そうそう、天井裏に、ハジキがあったな。最近はもの忘れがひどくてな。はははは」

布施は布施で警察を嘲笑うかのような態度をとって、刑事たちを苛つかせていた。にやにや笑って、まともに相手をしない。かつては警察と仲がよかったから、馴れ合いもあった。ヤクザと警察は繋がっていた。お互いに情報をやりとりする。金も渡ったりしていた。蛇の道は蛇でまるで同類のようなところがある。

麻薬と銃刀法違反の罪状では、布施を一生、牢獄から出さないようにすることはできない。何か、もっと大きな、決定的な物証を出さなければならない。布施は布施で、そうそう死体が出てきたり、サリンが出てきたりするドジは踏まない。第一、いつ、家宅捜査の手が入るか判らない組事務所にそんな証拠を残しておくわけがない。死体は闇から闇へと葬られたし、抗争や犯罪に使う武器弾薬は、ちゃんと別の場所に隠してある。それを一部の幹部だけが知っているが、いくらねじ伏せられても吐くわけがない。一連の爆弾による銀行脅迫の実行犯の大元が布施であることは、みんな薄々勘づいていたが、巧妙に仕組まれた犯行は、アリバイもちゃんと用意されていた。

武守警部は、布施や幹部たちの拘留期限を迎えて、焦っていた。

「警部、本当にあるんですか。その細菌と毒ガスも」

捜査員は、だんだん疑ってきていた。何の根拠があって警部が布施組の手入れを繰り返すのか、そこの真意が理解できないでいた。

みんなの疑いの眼差しに、警部はかっとなって、つい口を滑らせた。

「絶対に隠しているんだ。それはおれが、横流ししたんだから確かだ」

全員の信じられないと云った視線が集まった。

昨日の味方は今日の敵。テレビのニュースで騒いでいるイラク問題。イラクにかつて武器供与したアメリカが、一番何もかも知っている。

第407話 馬糞風の吹くころに

雪国の三月から四月にかけては一年で一番汚い季節となる。花が咲くにはまだ少し早く、季節の狭間のぼんやりとした気候の中、黒ずんだ汚らしい残雪が街角にこびりついている。

雪が解けると、雪の下からいろんなものがみつかると。雪の上で見えなくしたものは、小さいものなら、春まで待たなければならない。空き缶やゴミまでが、雪の下から現れる。それで、街中や道路端は一冬のゴミで薄汚れた感じがするのだ。

昔はそれに、馬糞があちこちに現れる。馬糞で垂れ流していた馬の糞が、雪解けであちこちに現れる。それが、乾燥して、春の風で吹き飛ばされる。なんとなく、臭いのするのが馬糞風と云い、雪国ならではの風物詩となっている。それが、車が馬にとって代わると、スパイクタイヤやチェーンをつけて走るものだから、道路が削られて、車粉公害と云われるほどの、春先の埃っぽささらなかった。仙台では名物仙台砂漠とまで云われていた。毎日、家の中を掃除すると、窓を開けていると、盛り上がるほどの車粉がチリトリに集まった。それは、人間も吸うから、肺にいいわけがない。ようやくスパイクタイヤが禁止になって、いまは、一昔ほどひどくはない。

それでも、やはり春の風が舞い上げる埃は毎年すごい。市では道路清掃の車両を走らせて、路肩に積もったゴミや埃をこの時期になると掃除するのだ。

雪解けがどんなに嬉しいものか、それは雪国に住んでいる者でなければ判らない。その年の雪が多ければ多いほど、雪解けは待たれるのだ。雪かたづけに追われる毎日がどんなに大変か。二月の二十日頃が積雪量が毎年、一番多いピークとなる。それから一週間であれよあれよと消えてしまうのが、毎年のパターンだ。三月の声を聞くと、もう大丈夫とみんな胸をなで下ろす。

雪解けで、土が見える喜びは、子供のときに味わっていた。いまは、土がないから、アスファルトが見える喜びなら半減だ。

雪の下に緑の植物の芽が出ていたり、また土と遊べる嬉しさがあつた。そして、短靴を履いて歩けるということも嬉しかった。閉じこめられていた冬が終わり、久しぶりに青空を拝んだりすると尚更だ。

北村家でも雪解けで、庭の残雪がめっきりと減ってきた。気温がプラスに転じて、気の早い母親は冬物を仕舞おうとしていた。天気の良い日曜日。春の大掃除も兼ねて、玄

関周りから庭まで掃除をすることとなった。普段は家の手伝いなどしない娘の遥香も、長い春休みに厭きたのか、手伝っていた。

「遥香、庭のゴミを拾うんだよ」

母の元美に云われて、ゴミ袋を手に遥香は、空き瓶やポリ容器などを集めていた。

「あった、去年、この辺で落としたキーホルダーが、出てきた」

いろんなものが雪の下から発見される。あれほど探してもみつからなかったスコップの柄が雪から頭を覗かせていた。手袋の片方が出てくる。何故か遥香の茶碗も出てきた。これは弟と喧嘩したとき弟が腹癒せに雪の中に捨てたものだった。雪の下から露のとうが顔を出していた。これは、まさにこの辺りでは春一番だ。屋根の雪が落ちる庇の下は、一番残雪が多い。それが、北向きであれば、なかなか消えずに四月下旬まで残っていたりする。北村家の屋根は切妻で雪はみんな滑って落ちる。寒気のあるときは、屋根に凍りついた雪はなかなか落ちないが、それが暖気になると一斉に滑り落ちるから、庇の下にいるのは危険だった。毎年、雪の下敷きになって、何人かは死ぬのだ。

それでも、ここのところの陽気で、近所の子の屋根を見ても雪はなかった。遥香のゴミ袋はやがていっぱいになった。

「遥香、何を遊んでいるんだい。さっさとかたづけたら、今度は玄関を掃くんだよ」

家の中から元美のがらっぱちな声が大きく響いてきた。近所に聞こえたら恥ずかしいくらいの声だ。どうして、お母さんは男みたいな性格で生まれてきたんだろう。遥香はいつも男だか女だか判らない自分の母親を嘆いていた。あの性分だからお父さんが出ていったんだ。去年の暮れに忽然と姿を消した父親のことも、遥香はときたま思い出す。お母さんの性格に嫌気がさして、お父さんは黙って家出したんだと、遥香はそう信じていた。いつも命令口調で、尻に敷かれていたお父さんが可哀想だと思っていた。

遥香が、北側の残雪の多い軒下から、お父さんのゴム長が見えていたので、誰の仕業かなと、怒って引っこ抜こうとした。長靴はすっぽりと抜けたが、その後に人間の足があった。雪を搔いてみると、それは、行方不明になっていたお父さんではないか。

「キャー」と、遥香は声にならない叫び声を上げて、母親を呼びに行った。何を云っているのかよく判らない遥香の慌てふためきように、元美も北側へと回ってみた。そして、そこで信じられないものを見た。

「なんだ、お父さん、いない、いないと思ったら、雪の下で死んでいたんだ。ははははは」

元美は豪快に笑った。

第408話 人類絶滅

長い地球の歴史に比べたら、人間の進化した歴史というのは極、短いものだ。それ以前にもかなりの種が絶滅していった。人間だけがこれからも数十億年先まで絶滅しない

という保証はなにもない。いや、きっと減んでいる。それは核戦争か、ウイルスか、食糧不足か、天変地異か。だが、それは突然起こるものばかりだ。

環境ホルモンという言葉が出現したのもつい最近だ。それによって、人間の生殖能力に変化が見られ、ただでさえ少子化で子供の数が減っているというのに、子供ができない夫婦が不気味にじわりじわりと増えているという。すべてが、人間たちの排泄し、作りだした空気や水の汚染が原因である。自業自得といえ、地球単位で集団自殺を凶っているようなものだから、逃げ場がない。アメリカは、排気ガス規制に応じないで経済最優先にした。開発途上国は公害よりも国の貧しさ脱出が先と、ばんばん公害垂れ流しだ。

全世界的に海洋汚染、オゾン層の破壊が進み、いまや、環境ホルモンの影響を受けないところは地上にはないというところまで来ていた。それは、ある日突然に起こった。

全世界で、二千××年三月ころから、びたりと妊娠したという女性が病院を訪れなくなったのだ。それ以前にもだいぶ少なくなっていたが、ついにびたりと止まったのだ。産婦人科は、だんだんと来院者が減って、ついにがらがらとなった。

それは大変だと、政府は戦後ベビーブームとなったときのように、産めよ増やせよと、子供の数に乗じた手当も出そうと新たな法律も作った。それでも効果がない。最近の傾向として、セックスレス夫婦も増えているとかいうので、セックス奨励金まで出そうということになった。逆にスキンなどには課税した。思い切って、ポルノ解禁とした。もう、何でもありあり、好きにやってくれと、多少のことには目を瞑ることにした。

一昔前にニューヨーク大停電のときに、赤ん坊がその日から十カ月後にどっと産まれたということを思い出して、東京の電力不足を理由に、電力休養日を設けて、大停電の一日をわざと作ってやった。それでもベビーができない。頭にきた役人たちは、各家庭を回って、

「お宅たち、やる気あるの。やり方を知らないんでないの」

とまで侮辱するものだから、若い夫婦は怒った。

「何を！ 毎日、朝昼晩、食後三十分以内に行っているんだよ。それでもできないんだ。体位だって、こんなことして、あんなことして……」

市民はみんな必死で子造りに励んでいたにも関わらず、不妊症になったことについて、全世界の医学界はある発表をした。

「これは、神がご自分の意志で、造られた人間が失敗作と思い、滅ぼそうと思われたのです。」

原因は全く不明だった。どんな偉大な科学者たちが共同でチームを作って研究を重ねても、ある時点から、排卵しなくなり、精子も生殖能力を失っていた。それを人工授精させようとしても、悉く失敗した。みんな青くなった。焦った。一年が経過し、二年が経過した。世界から赤ん坊がいなくなった。

このままでゆくと、全世界の保育園と幼稚園は必要がなくなる。そして、十年すれば小学校もいらない。結婚式をあてこんで建てた結婚式場も、塾や習いもの、子供たち相手の玩具メーカー、洋服メーカーなど、すべてが潰れてしまう。

全く赤ん坊が産まれないで二十年があっという間に経った。世界に未成年者はひとりも存在しなかった。子孫繁栄のためにセックスに励んでいたものが、みんなやる気がなくなる。将来の不安でいっぱいだ。突然、線を引いたように、世代が切れるのだから。どんどんと人口は減り続けた。若いものから子供たちがいないから、街は静かで、毎日が通夜葬式のように活気がない。このまま、七十年八十年したら、最後の百歳の年寄りも、誰も介護してくれるものもなく、ひとり淋しく死んでゆくんだ。それよりも先に、社会のシステム自体が人手不足で機能しなくなる。生産現場では作る職人がいない。後継者がいない。電力から、水まで供給するための労働者がいなくなる。家という家は空き家が続出し、街は車も人も歩かない。信号も電灯も停まったきり。そんな時代が先に待っているのだ。

だが、その突然変異が起こる前に、ある国の研究室に冷凍保存されてあった卵子と精子があった。その国では、その受精に成功した。あとは、どこの国も保存しているストックはなく、使い果たしていたから、そのひとつだけがうまく成功してくれたらと、全世界の人々の注目を集めていた。

やがて、無事、ひとりの女の子が誕生した。名前はイブと名付けられた。だが、みんなは喜んでいたが、同時に悲しんでいた。この世のどこにもアダムとなるべき相手がいないからだ。たったひとりで産まれて、たったひとりで死んでゆく運命を持ったからだ。人類最後の人間が元気な泣き声で産声をあげていた。

第409話 アメリカが戦場となる日

多くの国が、他国からかつて侵略された苦い歴史を持つから、戦争の傷跡を隠していた。アメリカは、どこからも侵略されたことがない。南北戦争や独立戦争のような内戦はあったとしても、自国に爆弾が落ちたのは、日本がジェット気流に乗せてアメリカ本土に落とした風船爆弾くらいなものだが、それも被害はなかった。

日本もイギリスも戦争に懲りないのは、首都陥落まで攻められ、大勢の罪のない国民が、銃弾に倒れ、直接に国土が戦場になったことがないからであろうか。常勝軍のアメリカに至っては、真の戦争の怖さを海の向こうで知らない国民が多かったから、いまだに好戦的だと云われるのではないか。

そのアメリカがある日を境に戦場と化すこととなった。それは、イラクとの開戦の三月二十日だった。やはり、地球の反対側の遠い国での戦争ぐらいしか考えていない国民が、実は、イラク国内には、民兵しかいないことに気付いていなかった。精鋭部隊の多くは、観光ピザやパスポートを偽造してすでにアメリカ国内に潜入していたのだ。すべての秘密兵器も持ち込まれていたし、テロの訓練を受けていた特殊部隊、スパイもアメリカへと集結していた。

実のところ、フセインも本国にはいないのだ。テレビに出演しているのは影武者だった。それを知らないのはペンタゴンだけでなく、FBIもCIAも情報を掴んでいなかった。まさかと思う。フセインにとって、いま一番安全なのはアメリカだった。

フセインは勿論、巧みな変装をして、先にアメリカ入りしていたビン・ラディンらと逢っていた。そうして、アメリカが戦争をしかけてくる日まで、すべての用意は調べてあったのだ。そうとは知らずに、半ば空っぽ状態のイラクを攻撃する準備を終えて、いまや秒読みに入っていた。みすみす強大な兵力の前に、旧式の武器で立ち向かって、勝てるとは思っていない。力関係では、明らかに負けるのは判っていた。だから、もぬけの殻にしておいて、アメリカにはただの砂漠に爆弾の雨、ミサイルの雷を勝手に落とさせることにした。新型爆弾の威力はどうやら、地中深く掘った防空壕でも完全に潰すほどの威力を持っているというから、逃げ場、隠れ家がない。この将棋は、陣地を守っているのが歩だけだと、如何に思わせないかの偽装が施されていた。

未明にアメリカのミサイル攻撃が始まった。それに航空機による爆撃も加わって、激しく地上を火の海にした。艦砲射撃も海上から加えられた。無力な市民だけが、ただバタバタと死んでいった。

その朝、ニューヨークで、シカゴで、ロスで、ワシントンで、地下鉄の大火災が起こった。コーラのペットボトルに入ったガソリンを朝のラッシュの車内で引火させた。サイバーテロもあり、アメリカ全土のコンピュータが一時不能となり、交通麻痺も起こっていた。銀行もパニックとなり、通信網もやられていた。ハッカーのプロたちが乗り込んで、あらかじめ準備していた不正アクセスを一斉に実行したのだ。猛スピードでニューヨークを走るワゴン車が、通勤ラッシュで混んでいる市街地にマスタードガスを撒き散らした。

一方、学校やデパートなどの人の集まる場所で、突然、人々がバタバタと倒れた。それは、サッカースタジアムでも、大リーグの球場でも起こった。救急車が頻繁に走ったが、ものすごい数の病人を収容できる能力はない。それは、病院も医師も薬も不足する事態となった。何かの細菌がばらまかれていた。

主要道路の一番ネックになる箇所が次々と破壊されていった。トンネルや、陸橋、崖崩れも爆弾を仕掛けて列車を停めた。道路、鉄道、電話線、送電線など、テロのプロたちが、前もって、どこを断つとどういう影響があるか、ちゃんと計算して、少ない兵力で最大の効果を上げる作戦が実行されていた。それは、殆ど同時多発テロで、全米、イギリス国内で同時刻に一斉に行われた。最も警備の手薄なところを狙っていた。

また、各地のオフィスビルが、学校が、ショッピングセンターが、電車が、航空管制塔が、次々に時限爆弾によつて破壊されていった。その破壊力は、9・11どころではなかった。水道には猛毒が入れられた。ありとあらゆるところで、生活を脅かす工作もしていた。

水を呑まないようにと、マスコミは一斉に注意を呼びかけた。だが、自動販売機で買ったコーラを呑んで倒れる者も続出した。呑むもの食べるもの、もう何も信じられなくなる。家々では、細菌やガスが侵入してこないように目張りして、外から入れないように

にしていた。電話、メール、パソコンは使えなくなっていたし、電気も止まったきり普及しない。まさしく、それは、見えない敵に蹂躪されている戦場さながらだった。

どうやら、アメリカはイラクを甘く見ていたようだ。イラクだけではない。十数億のイスラムを敵に回すと、どうなるか。戦争は一月で決着が付くと予想していたが、この戦争は終わらない。十年経っても、五十年経っても。孫子の代までも。目には目を、歯には歯を。復讐には復讐で。

瓦礫の中に焼け爛れた星条旗だけがたなびいていた。

第410話 ああ、日本語

日本語が乱れていると、いろんな漢字や日本語についての本が売れている。乱れている一因をなしたのが、ITだ。パソコンやケイタイのメール用語が、若い人の間で次第に汎用されるようになり、そのうち市民権を得ると、広辞苑などにも載るのだろうか。

年賀状からメールで来る時代だが、いきなり「あけおめ」と来る。何だろうと思うと、明けましておめでとうの省略なのだ。「ことよろ」というのもある。今年もよろしく願いますの略なのだ。若者たちはすべて省略して云うのが格好いいのだ。

そればかりではない、最近、どうも気になるのが、やたらひらがなが氾濫していること。癒しの一環なのだろうか、銀行もデパートも新しい名前はひらがなが多い。漢字がだんだんと世の中から排斥されているような感じがする。お隣の中国でも略字が進んで、漢字文化からの脱却を図ろうとしているかのようだ。

このままでゆけば、よのなかはたいへんなことになる。かんじのよめないひとがふえて、すべてひらがなでひょうきするようになり、なまえやちめい、かいしゃのなまえまでみんなひらがな。しょうせつなんかよめないからそうるびをふるだけでもよみづらいから、しゅっぱんしゃではついにすべてひらがなでほんをだすこととなった。かんじがないということは、いいかんじではないとかいても、そのかんじが、どのかんじかわからなくなる。きしゃがきしゃできしゃしたとかいても、なんのこともかみかわからなくなるのはたいへんだった。ぶんがくはすべてどうわかえほんみたいになり、おとなもようじもない。

わかいひとはだんだんとかんじをつかわなくなっているから、かんじだけでなくことばもわすれて、かいわもめーるもすべてがひらがなでかんたんなことばよりつかえない、ようちかしてしまった。はじめはあまったれたにんげんのたいこうげんしょうとおもっていたが、それがふうちょうとなってからは、せいかつぜんぱんがすべてひらがなひょうきにあらためられて、かんじのもつけいしょうからくるいみのふかさもあじわいもなく、しゃれもできない。にほんのもつどくとくなぶんかはかんじによるいみふかさからえいきょうをうけたものがおおいのに、それがだんだんあるふあべつとにじゅうろくもじでしかひょうげんできないたんじゅんなおうべいのもじぶんかにちかくなってきていた。

かんじのしようについて、どうじんしのはるかのめんばーがあつまってはなしていた。「これではぶんがくはしんでしまう。ぶんしょうにいろがない。うすっぺらいへいめんてきで、めりはりもなく、われわれのおもいをつたえることができない」

しゅさいしゃのかなざわせんせいそういった。

「それでは、かんじをしようしてむかしどおりにさくひんをはっぴょうしたらいいでしょう」

どうじんのささだがていあんした。

「いまさら、それはかなわないことだ。ひとびとがかんじをすっかりとわすれてしまっているから、だいいち、よめないだろう。いみふめいなしょうせつをかいても、だれもよまなかったらいみがないではないか。それこそ、じだいのながれで、げんだいじんにまんようがなでしょうせ

つをかいて、さあよめといってもよめないこととおなじで、わずかせんすうひゃくねんまえのにほんのぶんがくがよめない。まして、いまのわかいひとにひぐちいちようのさくひんなんかよめないでしょう」

かなざわせんせいのいうとおりだった。

「ぶんがくもたいへんだけれど、このまえなんか、ぎんこうのまどぐちでなまえをよばれたら、たまたまどうせいどうめいがいて、ふたりどうじにたったものだから、まどぐちのおんなのひとがきくんだ、『きむらひろしさまです』とね。すると、べつなおともまけずと、『わたしもきむらひろしだ』『なにをいうか、このわたしがきむらひろしなのだ』と、たがいにゆずらないいちまくがありました。なまえによるしきべつもこんなんになってきました」

どうじんのきむらがいうように、なんかいなしょうせつかの「はにやゆたか」もひらがなでかけば、すっかりとどうわだ。こいずみそうりだいじんといってもちっともえらくはみえない。

つかわれなくなったことばはしごになり、しだいにじしょからはずされる。かんじもとうようかんじはぜんぱいされて、きょういくかんじですらはんぶんはいらないとけずられた。いまやにほんじんのこくごりょくはひとむかしまえのしょうがくせいにもおとるものになってしまった。

「ああ、かんじがかきたい」

「かんじをおもいっきりつかいたい」

はるかはどうじんたちは、すでにあんごうのようになっていたかんじをつかいたくてうずうずしていた。だが、かんじをしようするとうれないので、しゅっぱんしゃもしょてんもとりあつかわないというところまできていた。それでもかんじでしょうせつをかきたい。みんなそうおもっていた。

「くそっ、かきたい、漢字が書きたい」つい、たむらがそうってしまった。

すると、どこでききつけたか、けいかんたいがばらばらとどうじんのあつまりのばにらんにようしてきた。

「おい、いま、きさま、かんじでしゃべったろう」

いちどう、ただおどろいてなにがおこったのかあたふたしていた。

「きさまをたいほする」かんじをつかったつみはおもたかった。たむらはてじょうをかけられながらもこうぎしていた。

「どうしてわかるんだよ、かんじでしゃべったか、ひらがなでしゃべったかがよ」

あわれひきたてられたたむら、どうじんのめんばーたちは、にどとかんじのことはくちにださなかった。

第411話 この子らの明日に

五人兄弟の末っ子の卒業式があった。三月二十日、寒い日であった。分校のような小さな小学校で、全校児童が六十数人。だんだんと教室も空いてきて、子供たちが減ってきた。四男の六年

生は一学年一クラスで十三人よりいない。この温泉場に引越ししてきて、十二年が経っていた。上の息子がこの小学校に転校してきたときのことを、わたしは思い出していた。

あれは、夏休みで、児童は誰もいないとき、先生が三人だけ日直でいたときだった。

「ようこそ、この町から出てゆく人は多いけど、転校してくるのは珍しいので、みんな歓迎していますわ」と、担任の若い女の先生が、嬉しそうに迎えた。

「よし、ぼくたち、ちょっと、学校の中を探検してくるから」と、兄弟で、バタバタと学校の廊下を走っていった。

「あらあら、元気な息子さん。積極的でいいですね」

学校の裏は鬱蒼とした山で、蝉が啼きしきる。

あれから十二年、末っ子も卒業することとなり、これで、もうこの小学校に来ることもないだろう。わたしたち夫婦は、廊下に貼り出されていた昔のスナップ写真の中に、もう結婚して子供までできた息子の写真を見ていた。

三月二十日、十一時四十分。アメリカはイラクをトマホーク巡航ミサイルで攻撃を始めた。国連決議を無視しての戦争だった。刻一刻と、ラジオから状況が報道されてくる。

講堂に紅白の幕がひかれ、整然と椅子とフラワーポットが並べられ、赤い絨毯が敷かれていた。卒業生は前の椅子に一列に並んで座っていた。胸に花をつけて、新調した洋服を着せられていた。中学、高校はあっという間だが、小学六年間は確かに長い。息子も虐めにあって、登校拒否をしたこともあり、思えば波乱のあった六年間であった。壇上の正面に日の丸、厳かに君が代が斉唱される。

ハイテクの武器とはいうが、軍事施設も民間施設も確認できない攻撃目標では、その増大する破壊力で、罪もない老人、子供たちをいまのいまもどれほど殺傷しているのだろうか。

隣にいたうちの兄貴たちとも同級だった子供さんを持つお母さんが、

「ようやく、これで親も卒業できるわ。長かったわ」と、感慨深げに遠くを見つめていた。人数が少ないから、ひとりひとりが名前を呼ばれて校長先生から卒業証書を授与される。少し離れて見た息子はいつの間にか背丈が伸びて見えた。ピアノの伴奏で、卒業の歌が在校生と共に歌われた。小さな口が講堂いっぱい響く声で、うたう。

一世界の笑顔を、ぼくたちとともに…。

末っ子が生まれたのは1991年一月だった。湾岸戦争が勃発した年にこの世に生を受けた。いま、あれから十二年が経っていたなんて、信じられない。わたしの髪の毛も随分と白くなっていた。

ステルス戦闘機や、爆撃機がピンポイント攻撃と正当化する作戦で、実は、民間施設を次々に破壊しているのだろう。バグダットでは、対空砲火で応戦するが、その炸裂は届かない。見えないうところで、たったいまも、どれほどの死者たちが横たわっているのだろうか。

「わたしたちは、輝かしい明日へいま、はばたいてゆきます」

卒業生十三名は、くす玉の割れる中、在校生のアーチの中を退場してゆく。と、そのとき、講堂の窓ガラスが一斉に轟音と共に割れた。何かが爆発した。空は真っ赤だった。火の粉が降り注いでいた。何があったのだ。わたしは、身を伏せて身構えた。逃げまどう子供たち。だが、それは一瞬の幻覚だった。空は白く、大きなぼたん雪が空一面から降り注いでいた。いつになったら

春が来るのだろうか。ぐずぐずと足踏み状態が続いていた。

子供は親を乗り越えて大きくなってゆく。だが、このいとけない子供たちも、いつか戦場に行くことがあるのだろうか。わたしは否定するように首を振り続けた。輝かしい明日へ向かったのだ。その先に戦場があってはならない。

まだ、雪の積もる校庭を眺めながら、教室のストーブにあたっていた。黒板にチョークで大きく卒業おめでとうと書かれてある。壁に子供たちの図画が貼られてある。平和な絵だった。イラクの子供たちは、いつ卒業するのだろうか。戦火の中で逃げまどい、防空壕の中でそれでも宿題をしているのだろうか。

わたしは、職員室のテレビから聞こえてくる空襲警報を聞いた。人間の愚かさは歴史の轍を踏む。滅んでも滅んでも、繰り返し、繰り返し。戦争にだけは卒業はないのだ。

第412話 おのぼり動物たち

たまちゃんフィーバーが治まらない。ますます加熱していた。それほど都会人は自然に飢えているのか。

たまちゃんの連日のニュースを聞いて、白鳥や、渡り鳥たちが、北へ南へ飛んでいって、世界各地で、その日本の都会の異常さを伝えていた。

「あのね、都会もんはおかしいのよ、たまちゃんなんか、いまや大スター。まいにち、カメラを向けられて、記念写真は撮られるわ、マスコミがおしかけ、豪華な帆立の餌なんか与えられているそうよ」

白鳥のお喋りを聞いていたぞうあざらしやトド、イルカや鯨たちが、目を輝かせていた。

「テレビに出られんだべえ。いまは、動物だって、コマーシャルに出ればギャラが貰える、あちこち引っ張りだこのスターだつうからな」

北の動物たちは、田舎もので、おまけにミーハーときていた。一度は都会に出てみたいのが夢だった。

「こんな、流氷の上だば、観光客も来ないから、餌もくれる人間がいねえしな」

トドも、魚ばかり喰っていたから、たまに違ったご馳走にありつきたい。

「よし、おらだちも、都会さ行ってみるべえが」

とは云ってみても、流氷に乗ったままでは南下はできない。そこで、みんな鯨の背中に掴まって、こぞって都会見学の長い旅に出ることにした。

ツバメもあちこちで、たまちゃんのことを云いふらすから、ラッコやワニ、ペンギンたちもその気になっていた。

「一度でいいから騒がりたい」

「有名になりたいよね」「ぼくのキャラクターグッズが売れたり、CDで歌がヒットしたり、憧れるなあ」「オーディションなんかはないのかしら」

野生動物の世界も情報化社会で、すっかりと文明に毒されていた。南からも、日本の都会を目指して、次々に野生動物たちが、旅に出た。

多摩川に、鯨が上がってきたと、大騒ぎになっていた。本来は川を上ってくるなどありえないことだった。早速、マスコミ各社がスクープとして飛び付いた。

「あれ、鯨のそばにトドがいる、ぞうあざらしも泳いでいる」

記者たちが発見するや、その映像はニュース番組で即日報道され、新聞の朝刊のトップを飾った。たまちゃんだけでも大変な騒ぎなのに、鯨やトドなどもいたとなると、全国から観光バスまで乗り付けてくる。連日、土手や橋の上は、ものすごい見物客でごった返していた。露店がずらりと張り付き、観光協会も売店を出した。記念写真コーナーから、望遠鏡貸し出しウォッチングコーナーまで商魂逞しく出現した。警官の交通整理も大変だ。道路という道路は渋滞し、多摩川の両側はちょっとした観光地になってしまった。

ところが、それで終わりはない。次々に珍しい動物たちが遡上してくるから、住民たちもびっくりした。日本には絶対にいない南洋の動物たちもどんどんとやってくるから、縁起をかつぐ人は、青くなった。

「これは大地震の前触れだよ。いや、動物たちが逃げてくるから、ここは安全なのかな」

ワニや大トカゲ、海亀からシャチと、多摩川は動物園と化してしまった。初めは、みんな珍しいので、いろんな餌を与えていたが、押すな押すなと川いっぱい溢れてきた動物たちに啞然とした。多摩川を埋め尽くすほどの多種の動物たちが、川を上ってきていて、下流を見るとびっしりとまだまだ上がってきていた。

記念写真を動物たちと並んで撮るときも、動物は愛想よくポーズをとってくれたりした。餌のねだりかたもとても野生だとは思えないあさましさ。

政府は関係閣僚と専門家を呼んで、今回のこの異常現象について話し合った。

「このままでは生態系が狂ってしまいます。これから夏になっても冬になっても、日本の自然環境では、棲息が難しいと思われます」

「どうも、みんなでちやほやしすぎるから、いい気になっているようです。また、もとの海へ帰すには、無視することが一番です」

大臣は早速、多摩川の河川敷に立て札を立てさせた。

一動物たちに餌をやらないでください。

一動物との記念撮影禁止。

一動物とできるだけ目を合わせないように。

マスコミには取材の自粛を。警察は見物客の排除に乗り出した。すると、急に川の両側は静かになった。もう誰も騒がない。動物たちは、しんと静まりかえった川に浮かんで、暇を持てあましていた。そのうち、すごすごとふるさとの海へと引き揚げ始めた。

スターは一匹あればいい。あとはその他大勢のエキストラ。その動物たちと同じ滑稽さで、いまの若者たちは同一性という没個性の中に死んでいる。

だるい。体がなまっている。完全な運動不足だった。余り体を動かさない仕事をしているからか、それに喰ってばかりで太る一方。

拓春は二十歳過ぎたどこにでもいる若者だ。かなりの肥満で、自分の体重を足で支えきれない。一日、とにかく「だるい」という言葉が何度も出る。

仕事といっても定職はない。午後からパソコンでデータ入力する会社のフリーターをしていた。半日、椅子に座り、指だけを動かす仕事。仕事場まで車で通勤している。どこへ行くにも車で歩くことをしないから、一日の運動量はたいしたことがない。食べた分のカロリーは蓄積するか排泄するか。

二十歳過ぎて、大学受験にも失敗し、進学之梦も諦めた。将来、何になるかという人生計画もない。朝方まで起きて、パソコンでネットを見たり、メールを出したりしていて、いつも起きてくるのは昼だった。完全に夜型の生活に偏っていた。とにかく寝るのが好きで、趣味はというと、睡眠とでも答えそうだ。

両親はそんなひとり息子の拓春を心配して、なんとか規則正しい生活と若者らしい澆刺とした生き方をしてもらいたいと常日頃から口煩く説教しているのに、本人は聞く耳持たない。

「暇さえあれば寝てばかりだ。いまが一番大事なときなんだが、生きている時間が勿体ないと思わないのか」

父親は、たまに変な時間に寝ぼけたようなぼんやりした顔で起きてくる息子に云う。

「お父さんの若いときは、やりたいことばかりで、寝ている時間も惜しかったもんだ。朝は五時から起きて、釣りに行ったり、ランニングしたり、ラジオの英会話講座を聴いたりな。四当五落と云ってな、五時間も寝たら受験戦争に負けると云われたもんだ」

「拓春、朝はちゃんと起きて、朝御飯を食べなさい。朝御飯抜きというのは一番よくないのよ」

母親は拓春の体のことを心配していた。あまり太りすぎて、最近では若者の成人病が急増しているというから、目に余るだらしのない、好き勝手なルーズな生き方をしている息子がいつか病気になるような気がしていた。

拓春はそのうちバイトにも行かなくなった。家にごろごろしていた。テレビを見ているか、ゲームをしていた。友達から電話が来ることもない。訪ねてくることもない。メールだけで済ませているようだった。声優の歌をMDで聴いているときは、コミックを見て、ポテトチップをパリパリやっていた。それをコーラで流し込む。一日に二リットルのコーラなら平気で吞んでしまう。家にいれば、なんだかんだと常に食べていた。いつも台所に降りてくると、一日何回も冷蔵庫を開ける。おやつがないときは、バターがなくなっていたり、ジャムまでぺろりと舐めっている形跡があった。

本は読む習慣がないから、部屋にあるのはアダルト雑誌かマンガだ。もう、すっかり進学は諦めたから、みんな古本屋に売り払い、勉強道具もない。働くでもなく、勉強するでもなく、趣味

もなく、資格を取るために習い事をするでもなく、日々、のんびんだらりと暮らしている。

そんな息子を憂えて、父親は息子の真意を訊くため部屋に入った。

「どうなんだ、この先、おまえはどうするつもりなんだ」

拓春は耳にヘッドホン、鼻歌交じりに首を動かしている。そして、手はいつもスナック菓子を握っていた。

「これ、人の話を聞くときは音楽はやめなさい」

父親は怒って、ヘッドホンを外した。

「一体、おまえは、何を考えているんだ」

実際のところ、何も考えてはいない。ただ、一言、

「だるい」

それを聞いた母親はますます心配になる。

「あなた、拓春、どこか病気なんじゃないでしょうか。精密検査を受けさせましょうよ」

拓春は、しぶしぶ親に連れられて、病院で検査を受けることとなった。検査結果は、肥満と血糖値が要指導とチェックが入ったが、あとはどこも異常なしとなった。だるいのは、精神的なもので、何か運動をさせたほうがいいとアドバイスを受けただけだ。ただ、本人はスポーツは苦手で嫌いだった。人前に出るのもだんだんと億劫になってきて、最近は「だるい」という言葉の他に、「かったるい」と「面倒くせえ」と少し語彙が増えていた。

両親で毎夜、話し合っていた。

「どうするつもりかしら、このまま、一生、仕事もしない、進学しない、結婚もしないで家にいるつもりかしら。何が面白いのかしら」

「面白いわけがない。生き甲斐も目的も何もないのだからな。困ったやつだ」

いくら本人と話しても、答えは出てこない。聞いているほうがだるくなってくる。だんだんと、拓春は動物的になってきた。ただ、喰って寝てばかりいるから、ますますぶくぶくと太ってきていた。頭を使わないから、一次欲求を満たすだけで満足している豚だった。

ある日、家がぐらぐらと揺れた。二階でどすんどすと凄まじい音がして、そのたびに家が揺れているのだ。二階から拓春の悲鳴がしていた。

「ママ、大変だよ」

息子の呼ぶ声に階段を駆け上がってみれば、自分の部屋のドアに挟まって動けなくなっている哀れな息子がいた。

「ママ、助けて、部屋から出れなくなったよう」

肥満高じてドアから体が出なくなった。

出してある物件には、貸店舗もアパートも売地もなく、ただ、島の写真だけが貼り出してあった。ちょっと目には旅行会社のように見える。

引越し先を探していた北村は、じっと、その怪しげな店の前に立っていた。

—無人島売ります。

とだけ、大きく書かれてある。実は、北村は書店経営をしていたが、最近はやればやるほど赤字で、商売をやめようと考えていた。まだ、五十代だから、仕事をやめるわけにはゆかない。女房とは離婚して久しい。息子三人はそれぞれが社会に出て所帯を持った。いまは、北村は気軽な一人身だった。自分ひとり分喰うことぐらい簡単だった。何も、この生まれ育った故郷に骨を埋めることもない。これからは、海外にだって住もうと思えばできるのだ。

あくせく働いても、税金でどっと持ってゆかれるし、増税増税で、最近の日本は住みにくくなった。大地震も起こると、新聞でも騒いでいたし、戦争の危険もかなり高まっていた。いまなら、財産を処分すれば、残るものは残るのだ。親の責任も果たしたし、商売もそろそろ潮時と思い、思い切って、海外への移住も考えていた。

そんな矢先に、その店の看板が目についた。どうせ、あと生きても二十年くらいだろう。のんびり暮らしてみるのもいいだろう。

「無人島か……」

北村はふらふらと吸い込まれるように店に入った。

「いらっしゃいませ。無人島をお探しですか」

椰子の樹があり、壁面いっぱいの珊瑚礁の海のポスターと、南国ムードある店内にアロハシャツを着た社長らしき男が座っていた。

「ええ、老後まではまだ早いんですが、日本が嫌になりまして、こんな国をさっさと捨てて、無人島で暮らしたいと」

アロハシャツは頷きながら、

「そうですね、そうですね、みなさん口を揃えてそう仰言います。こんな税金の高い国にいたら、さんざんむしりとられて、棺桶に入る頃には一円も残っていないとね。それよりだったら、物価の安い、税金の少ない安全な小さな国がたくさんあります。ご予算は如何ほどで……」

と、いきなり切り出されたものだから、北村も躊躇した。

「ポリネシアですか。どれぐらいからあるんですか」

「格安なのは、一坪一円からあります。島といっても、ピンからキリまでありまして、水が確保できるところは高いですし、水のないところは安いことになっております。フィリピンの近くで、周囲十キロの島は、五千万とお買い得ですよ」

「そんな大金はありません。せいぜい五百万くらいではありませんか」

「ございます、ございますとも」と、社長はファイルを出してきて、テーブルに開いた。

「ヒョッコリ島、ですか。どこかで聞いたような名前だなあ」

「ここなら、ご予算通り、原住民も誰も住んでおりません。建物もないので、まあ、住むのなら、家は建てる必要がありますが。あいにく水も湧いておりませんので、雨水を溜めて使用するしかありませんが」

カラー写真では、よく分からないが、空撮したものらしい。リーフ状の珊瑚礁に囲まれた平坦な島らしかった。

「椰子の樹など生えていないんですか」

「ええ、ご自分でなんでも栽培しなければなりません。自給自足の生活ですよ。魚も貝もふんだんに獲れますし、モーターボートさえあれば、食品マーケットのある村のある島まで、往復三十分で行けます」

「どれくらいの広さがあるんですか」

「ゆうに百万坪はあります」

そう云われてもピンとこない。狭い日本の感覚で坪五円と云ってみたところで、どれくらいの広さなのか。ともかく、北村は即決することなく、来週返事をするということで戻ってきた。

毎日、南洋の島のことが頭から離れなかった。常夏の島だから、雪かきをすることもないし、年中裸で暮らせるから、衣服もいらない。毎日、きれいなコバルトブルーの海で泳げるのだ。ここでは、金の心配も、仕事のごたごたもないし、人間関係の煩わしさが無い。ストレスも溜まることはないだろう。

北村は、ようやく決断した。家屋敷をさっさと処分すると、島を購入するよう手配してもらった。自宅の電化製品や家財はすべて売り払った。どうせ、電気がないところに行くのだから、パソコンもテレビもいらないのだ。無人島に持って行く一冊の本だけを選んだ。よく、どんな本を持ってゆくかという質問がある。北村は広辞苑一冊だけを持ってゆくことにした。あとは、必要なものは現地のマーケットで原住民の生活様式に合ったものを購入すればいい。

いよいよ、日本を発つ日、友人、知人が心配そうに見送りにきていた。いままで通りに電話や手紙、メールでは連絡がつかない、新聞もないところに行くのだ。世の中から隔離した世界に一人で暮らす不安もあった。

飛行機で近くの大きな島まで行き、そこからはモーターボートで島まで運んでもらった。現地人たちは、何か意味ありげな笑いを浮かべていた。北村を日本から来た、大学の先生くらいに思っていたようだ。海洋の研究をする人がたまにやってくるという。そう思われて悪い気はしなかった。家を建てるのは後にして、とりあえず住むためのテントを用意した。それと、現地人が利用しているカヌーも格安で購入した。一月分の食料と水だけは、積み込んでおいた。

絶海の孤島ではなく、視界に点々と島が見える。カヌーで漕いですぐ行けそうな距離で安心した。病気になっても困るだろうし、いろいろと食料確保も容易なほうかい。

ボートは島に到着した。何人かの現地人たちが手伝って、荷物を降ろした。みんな、口々に何か云っていたが、言葉が分からない。ボートが行ってしまうと、さすが、北村はひとりになった孤独感に襲われた。

島は確かに広い。緑はなく、島全体が珊瑚でできているようだった。一国一城の主どころか、王様になったような気がした。いろいろと空想して、北村はにんまりと笑った。いずれ、土を運んでもらい、畑を耕作しよう。家も建てたい。現地人の家なら、安いだらう。空はどこまでも青く、海鳥が飛んでいた。海も底が見えるくらい澄んでいた。熱帯魚のような魚たちが泳いでいるのが見えた。魚を獲る網や釣竿は用意してきたし、潜って貝や海草を獲るための足ヒレや水中メガネやヤスも持ってきていた。当分、火は使えないから、天日で干して、干物にして食べるこ

とを考えていた。

カヌーにも乗ってみた。なかなか快適だ。さっそく、テントを張って、ひとりコーヒーを飲むと、日本の雑踏を脱出してきた喜びがひしひしと感じてくる。

北村は、つい旅の疲れで、テントの中でうとうとと寝入ってしまった。ここでは、いつ寝てもいい。原住民たちは一万円で一家五人が一月暮らしているのだという。北村の貯えではしばらく大丈夫だろう。

ぐっすりと眠っていたら、妙に体が濡れていることにぼんやりと夢現で感じていた。何か、海の中で寝ているような感じがして、はっと目が覚めると、それは、夢ではなかった。テントはぷかりと海に浮かんでいた。北村は驚いて、テントの窓から外を見た。

「な、ない、おれの島が消えている」

その島は満潮になれば海に沈むのだった。

第415話 幸福探し

ケイは女子高校生。親が裕福だから、庭と車庫付きのいい家に住んでいた。洋服もやたら買ってもらえるし、パソコンでもケイタイでもデジカメでも、欲しいものは何だって買ってもらえるから、何ひとつとして不自由はない。ピアノのレッスンも個人教授で受けていたし、素敵な大学生の家庭教師が週に三日は家に来る。冷蔵庫の中にはいつも新鮮なフルーツがふんだんにあったし、デザート菓子も切らさずに置いてあった。食事もいつも豪華なものが料理上手なお手伝いさんがやってきてこしらえてくれる。日曜日には父親が家族を連れて外車でドライブに連れていってくれる。家庭サービスも欠かさない、優しい両親を持っていた。弟も秀才で、中学でもトップクラスの成績だったし、いい性格をしている。人も羨む家族として近所でも評判だった。

それでも、ケイは、最近、何か足りないことに気が付いていた。その何かが判らない。精神的にも物質的にも何の不満もないのに、何を自分は贅沢なことを考えているのだろうと、その足りないことが、一番大事なことのように思っていたが、答えを出せないでいた。

「いいね、ケイは幸せいっぱいだね」と、クラスメイトが羨んで云う。そこで、初めて、ケイはあれっと、壁に突き当たる。幸福であるという実感が無いのだ。満たされすぎて、それは現代の子供たちなら多くが感じていることだろう。モノが溢れ、モノに囲まれ、おいしいものをたらふく食べられて、趣味事から旅行からスポーツから音楽から情報からと、多くの友人たちにも囲まれて、好きな彼氏とも適当につきあって、成績もまあまあだし、進路も確定していた。これ以上の何を欲しいのだろう。ケイは自分の贅沢を詰っていた。

ある日、友人たちと帰宅途中に、街頭で不思議な老人が占いをやっていたので、からかいに覗いてみることにした。

「学割で三千ウォンでいって。ケイ、見てもらいなさいよ」

友人たちに勧められて、ケイは老人の前に押しやられていた。老人は白髭をたくわえて、小さなしょぼくれた目で、優しくそうにケイを仰いでいた。ケイは、恐る恐る老人に訊いた。

「わたしにとって、幸福って何ですか」

それは、ずっとケイの考えていたことだった。すると、老人はにこりと笑って、こう答えた。

「あなたの幸福は、パンのみみですな」

「ええ？ あの食パンの捨てるどころですか」

意味が判らなかつた。何故、自分にとって幸福がパンのみみなのか、哲学的な予言だった。ケイはそのことが暫く気がかりだったが、いつか忘れてしまつていた。

いつか起こる起こるとは思っていたが、隣国が突然、国境線を越えて侵攻してきた。一方的な宣戦布告だった。同じ民族なのに、南北に別れて戦うのは半世紀ぶりだった。昨日までは平和な国で、経済的にも恵まれていた国があつというまに戦火に包まれていた。隣国は制空権を勝ち取ると、軍事施設をミサイル攻撃し、空爆した。強大な軍事力の前に首都は敢えなく陥落した。同盟国とは名ばかりで、南北入り乱れた戦場では、誤爆の恐れもあるから、手を出せないで、友軍は撤退しだした。何のための条約なのか。隣国は一週間で南下して、全土を掌握した。みんな甘く考えていた。

僅かひと月余りで、あんなに食べ物とモノに溢れていた生活が、窮乏生活へと落ちた。ケイの父親の会社は爆撃で破壊され、多くの社員が戦死すると、事業どころではなかつた。市街戦のために、母親と弟が巻き込まれて犠牲となった。家は焼かれ、着の身着のままケイは父親と二人で防空壕の中に隠れ棲んでいた。

あれほど、毎日、朝シャンしていた髪も汚れてがわがわになっていたし、風呂に入らないから臭くなっていた。化粧どころか、服もぼろぼろ、穴だらけ、乞食のような身なりだった。喉が渴いたが、自動販売機なんかあるわけがない。雨水が伝って落ちてくるのに、口をつけて呑んだ。街は瓦礫の山となり、くすぶって、焼けた臭いと死臭が漂っていた。ラジオもテレビもないし、ケイタイも壊れた。どこからも情報が入らないから、世界がどうなっているのか判らない。不安いっぱいだった。

みんなバタバタと死んでゆくのがあたりまえな日常になった。異常が日常になる。それが戦争だった。家族を失った悲しみに加えて、次々に死んでゆく知人、友人。病気と飢えが敵弾よりも恐ろしいこととは知らなかつた。水も欲しい。もう何日も食べ物が入らなかつた。

夜中になればこっそりと防空壕から抜け出して、瓦礫の中に食糧を探しに行くが、それも命がけだった。つい一月前までは裕福な生活をして、美食の毎日だったケイも、いまはきっと鼠でも動いていれば捕まえて食べるだろう。

ついこの前まで幸福とはなんだろうと、考えていた自分が莫迦らしく思えてきた。こうして生きていられるだけでも幸福ではないか。温かい暖炉と明るい電灯、そして、やさしい家族につつましい食事。それだけで十分だった。落ちるところまで落ちなければ普通が見えてこない。

ケイは暗がり、兵隊たちが食べ残したパンのみみを見つけた。食事途中で投げ出してどこかへ行った形跡があつた。砲声が夜空に響いていた。銃声が街角で激しく聞かれるようになった。爆音が遠く響いていた。また戦闘が激しくなったのだろう。暫く沈静化していたが、このところまた煩くなってきていた。

ケイは匍匐して防空壕に戻った。父親は体力もなく、横たわっていた。

「お父さん、パンのみみだけど、拾ってきたわ」

ふらふらするのは、食べていないからだ。二人で、分け合ってパンのみみを食べた。美味しかった。世の中にこんなうまいものがあるかと思うほど忘れられない味だった。できるだけゆっくりと噛みしめるように食べた。父親も感激のあまり涙して食べていた。生かされていることのありがたさをしみじみと感じていた。まもなく、頭上で戦車のキャタピラの音が聞こえてきた。大勢の兵隊の声が聞こえた。

「誰か生きているか。首都は解放されたぞ。連合軍だ」

かろうじて生き延びた市民が次々に救出されていた。防空壕の蓋が開けられた。眩しい陽の光が差し込んでくる。ときには生きただけで、あとはなんにもいらないこともある。

第416話 戦争映画

アメリカとイラクの戦争が始まった。双方とも報道に嘘がありすぎる。額面通り聞いている人も少ないだろうが、あれほどのミサイルと爆弾をぶちこんで、犠牲者の数が少なすぎる。どこかで情報は操作されている。アメリカとしては、自国の犠牲者も敵国の犠牲者も少ないほうが世論の風当たりを避けられる。イラクとしては、兵士の死者より、民間人の犠牲を報道して、人道的見地に訴える。どちらも作られている数のトリックがあった。

ニュースとはいっても、アメリカ側が流すニュースはかなりトリミングされ、カットされ編集されている。たかが、ニュースとはいっても、米軍はわざわざ、番組のディレクターとして、ドキュメンタリー制作ではハリウッド一番の映画監督アラーキーを起用していた。アラーキーはペンタゴンの命令とあらば断りきれなかった。それに、一度、実戦の生の空気の中で回してみたかった。ただ、それは芸術としての写真であり、政府が介入するのは判っていたから、ある程度、自分を殺して、なおかつ凄い一本を撮ろうと思っていた。スタッフも連れていった。カメラマン、照明、録音、小道具まで用意していた。すべて軍の要望だった。

「これから、おれたちが撮るのはドキュメンタリーなんかじゃない。作られた真実、ただの戦争映画だ」

ペルシャ湾に浮かぶ空母からヘリに乗せられて、最前線まで機材と一緒に運ばれた。アラーキーはいい気がしない。今度の仕事は死ぬかもしれない。危険がいつも潜んでいる。ヘリの中でアルコールを呑みながら、アラーキーはスタッフたちに愚痴を吐いていた。報道なんか記者の仕事ではないか。それわざわざハリウッドからお出ました。ホワイトハウスは何を考えている。確かに記者の取材した写真、記事はどこかで検閲されていた。あまりにむごたらしい殺戮現場は絶対に撮影許可は下りない。

早速、一行は、海兵隊に随行して撮影に入った。政府からの注文が多すぎた。プライドの高い監督なら、引き受けないだろうが。アラーキーは政府の仕事で喰っている。逆らえない哀しさはあった。

砂漠の中にある村から機関銃が発砲された。戦車砲が撃ち込まれた。村にいるのは兵士だけではないだろう。村人も隠れているかもしれない。そんなことはお構いなしに砲弾が次々に撃ち込まれていた。若い村の女が赤ん坊を抱いて飛び出してきた。続いて老婆が逃げてきた。それを敵兵と思い、一斉射撃が始まった。そうして、民間人でも区別なく射殺される。

それをカメラで撮っていると、軍の将校からNGが出た。

「カット、カット」

そんな惨い場面は撮ってはいけない。砂漠の中に手足がもがれて死んでいるイラク兵の死体も、麻袋にすべて入れられて、人目とカメラに触れないようにして隠された。綺麗な戦争を見せるのだ。死体があってはならない。まるで、昔のチャンバラ映画と同じで、斬られたやつが、画面からどこかへ消えている。血も出ないし、斬った音もしない。決してリアルではない。戦争はファンタジーでなければならない。

村から白旗を掲げて投降してきた兵士たちがいたが、てっきり突撃してきたものと勘違いして、数名を撃ち殺してしまった。そのシーンも当然カットされた。兵士を十数人捕虜にした。殴る蹴るの暴行を加えていた。さらに戦力を殺ぐためだろうが、重大な違反だった。そんなことが日常的に行われていたにも関わらず、マスコミの目には触れさせない。後ろ手に縛った捕虜に、米軍の兵隊がさも親切そうに水筒から水を与えていた。そこでは撮影許可が下りた。

「いま、撮らなくていつ撮るんだ」と、嫌みっちらしく将校に云われて、アラーキーはむっとした。すっかり演出されて、作られた報道が全世界に流される。これはドキュメンタリーではない。

衛生兵が負傷した捕虜を看護する場面や、食事を与える場面だけが、クローズアップされていた。

弾痕の生々しい家や、燃えたり、破壊された民家も撮してはならない。無傷な農家の前にいた老人に、畑仕事を続けるように通訳が話していた。のどかな農村風景を撮影させられた。震える農民たちの肩を笑いながら兵隊たちが抱いて、さも友好的だというところの演技も撮影させられた。その家の中では、老婆と幼い子供が死んでいた。

海兵隊は、砂漠をバグダットに向けて進軍していた。すると、突然、兵士たちを乗せたトラックが、対戦車地雷を踏んで大爆発を引き起こした。乗っていた歩兵二十数名が火だるまになって吹っ飛んだ。撮影隊はすかさずカメラを回したが、将校によって制止させられた。

「莫迦、味方の被害も報道してはならん」

通信兵が、ケイタイで、本部へ連絡していた。

「地雷でトラック一両が走行不能になりました。歩兵二十四名が軽い負傷で……」　すべて、通信傍受されているから、暗号のようなものだ。軽い負傷は死亡のことで、かすり傷で重体。それがそのまま共同通信に送られる。

砂漠の砂嵐は、いくら人間が死んでも埋めてくれる。広大な墓場なのだ。いくら血を流してもすぐに隠してくれる葬儀場なのだ。

部隊はチグリス川を越えて、首都へと進んでいった。うんざりした顔の撮影隊も随行していた。

サア、アナタモ怖ガラズニ、戦争ニ行キマセンカ。

戦争はキレイナモノデス。国ノ名誉ノタメニ戦イマシヨウ。

第417話 H₂O?

スペースシャトルが、太陽系第三惑星に帰還したのは、宇宙船時間で三年、地球時間で二十年が経過していた。クルーは三人いた。ガイヤ船長とハシモト、スペンサー教授だった。彼らは、太陽系外の惑星探索も含め、氷の巨大な欠片を地球めがけて搬送する方法を模索するために出かけていた。

そのころの地球は水不足が深刻になり、水争いで、戦争まで勃発するという異常事態にまで発展していた。彗星なども氷の塊であることが多く、それらの軌道を人工的に修正してやり、大気圏に突入させる。そうした遠大な計画によって、水不足を解消しようと、彼らは長い旅に出たのだが、通信機器の故障で、地球と連絡がつかないまま、調査を続行していた。計画は悉く失敗に終わり、地球に氷の塊を突入させるには、核爆発という原始的な方法ではエネルギーがあまりにも足りないことが証明された。宇宙では慣性の法則が働くが、小惑星の衝突や、引力などによって、コンピュータで計算された軌道通りには行かなかった。

近づいてくる地球が青い星というより、赤い地球に見えたのは目の錯覚ではなかった。火星と見間違ふほどの変わり果てた姿が窓の外に展開していた。スペースシャトルはアリゾナの空軍基地へと着陸した。

出迎えは静かなものだった。これほどの長期に渡る探索は人々に忘れ去られてしまったものが、報道陣もない。一台の乗組員搬送車両だけがシャトルの方へと走ってくる。

三人が地球の空気を吸ったとき、何かもの凄く乾燥していることに気付いた。地面は旱のように割れ罅が入っていたし、草木が一本もない。緑が全く目につかないのは、アリゾナの砂漠のためだと思っていた。

「ようこそ、ご無事でご帰還され、おめでとうございます」

出迎えた基地の隊員は、何かみんな同じような顔をしていた。顔や手ががわがわと皺だらけだった。一見して老人かと思間違ふ。乾燥しているから皮膚もがさがさなのか。

三人は、司令室に連れて行かれた。地球の日付は確かに二十年は経過していた。探査に出発したときは、船長は三十五で、三年経って三十八で戻ったが、実際は同僚は五十五歳になっているはずだ。司令官から歓迎のワインが振る舞われた。ビンのコルク栓を抜いて、グラスに注がれたものは、液体ではなかった。

「これは？」

船長が訝しがると、司令官は笑って、

「そうでしたな、あなたがたは初めてでしたね。ロビンソンクルーソーと同じでしたからな。ワインは香りだけを楽しむものになりました」

基地の隊員たちは、一様にグラスを鼻に近づけて、匂いを楽しんでいるようだった。

スペンサー教授は、急に大学が心配になり、電話をしようとした。

「あなたのいたコロンビア大学ですか。あそこはすでに廃校になっています。この国には研究機関や大学というものが最早存在しないのです」

スペンサーは云っている意味が理解できなかった。ハシモトも日本に電話しようと番号を告げると、みんなに制止された。

「どうしてですか。自分の家族が心配で、電話をするだけなのに」

「あなたの家族は恐らく、もうこの世にはいないでしょう」

隊員の一人が、心痛な面もちで、そう云った。

「それは、二十年も経っているから、父母は生きていても八十を過ぎていますが、待っていると云った恋人も五十は過ぎている。でも、どうして、みんな死んだと云うんですか。核戦争でもあったんですか」

隊員たちはひそひそと話していたが、

「まあ、万が一ということもありますから、確認させていますから、暫く時間をください。二十年で地球はがらりと変わりました。あなたがたのホテルはとってありますから、暫くはゆっくりと休暇を楽しんでください」

三人は、反重力カーに乗って、砂漠の道なき道を飛ぶように走った。タイヤのない車だった。殆ど揺れない。宙に浮いたまま滑るように走る。途中の赤茶けた荒野にめぐり取られた窪みがあって、橋がかかっていた。

「おい、見ろよ、これは以前、川だったところだ。完全に干上がっている」

他にも、湖の跡らしき窪みもある。まるで、水という水が地上から消えてなくなったような景観だった。

やがて、超高層ビルの林立する都市へと入っていった。すべてが未来の都市だった。市民は肌を乾燥から守るためか、体にフィットした特殊なコスチュームを着て、フードの付いたヘルメットをすっぽりとかぶっていた。

先にホテルへと入った。三人とも喉がからからになった。どうも、乾燥しているようだ。ホテルのレストランに飛び込んで、さっそく三人は喉を潤すためにビールを頼んだ。だが、出てきたビンは、またワインと同じく、ただの香りだけのようだった。

「わたしたちには、本物の液体のビールをくれたまえ」と、ガイヤ船長がボーイにきつく云うと、

「少々お待ちくださいませ」と、ボーイ同士が、こちらをちらちらと見ながら、何やら話し合っていた。

「あのう、失礼ですが、液体のビールというのは取り扱いしておりません」

スペンサー教授もむっとして、

「それなら、ミネラルウォーターでもいいから、持ってきたまえ」と、苛々した口調で命じた。

ボーイは首を傾げて、また席に戻ってくると、

「ウォーターとはどんなものでしょうか」ときた。巫山戯ているのか。ハシモトも席を蹴って立った。

「話しにならん。こんな店、出ましょう」

三人は、カンカン照りのストリートで、ドラッグストアを見つけて入った。確かに、地球は異常な暑さだ。雨もずっと降っていないようだ。その店でも、缶ジュースはない、ドリンクという

ものが置いていない、缶詰も、アイスクリームも、水分のとれるものがひとつも置いていない。
「一体、どうなっているんだ」

ついに三人とも、外出を諦めて、ホテルの部屋へと戻った。たまらなく喉が渴いていた。一刻でも早く水分を補給しないと、倒れそうだった。ホテルには洗面台があっても水道の蛇口がない。バスルームに入ると、浴槽はあってもシャワーがない。トイレはどこにもない。

慌てふためいて、三人とも、ホテルのフロントに抗議に行った。すると、フロントにさっきの司令官たちが、様子を伺いに来ていた。みんな困った顔をしていた。

「司令官、何故、この街には水道がないのだ。われわれは喉が渴いて仕方がない。なんとか、手配してくれ」

すると、司令官はマスクと手袋をはずした。そこには、醜い老人の顔があったが、よく見ると、皮膚の表面は海綿状の無数の襞で覆われているのだ。

「あなたがたは、純粋な人間としては、最後の生き残りです。あなたがたが探査にでかけてまもなく、地球は大規模の干魘に襲われまして、それでなくても水不足の折り、九割の人類が死にました。人間は水を呑まないと三日ともたないのです。生き残った人たちは、水分がなくとも生きてゆけるよう、人間をサイボーグのように改造しました。皮膚をサボテンのように、空気に触れる面積を増やして、できるだけ、空気中の水分を吸収できるようにしました。内蔵は殆ど機械でできています」

そうして、司令官は自分の腕を外して見せた。

第418話 初期化.....RESET

それは突然に起こった。全世界の人間たちを、強烈な電磁波が襲った。一瞬だったようにも思えるし、十分くらい続いたような気もした。その衝撃波は、ヒマラヤの山頂でも、南極観測隊にも、イラクの砂漠でも、ニューヨークのマンハッタンでも聞こえた。聞こえたというものではなく、すべての人間の耳や鼻や目から入り込み、脳の奥深くまで到達するような衝撃だった。

と、飛んでいた旅客機が、突然に急降下しはじめ、次々と墜落を始めた。走っている車はまるで、運転手がいないように蛇行運転を繰り返して、追突したり、街路樹に衝突して停まった。交差点では四方から走ってきた車が信号を無視して衝突、炎上した。電車や地下鉄も、同じだった。運転手が気を失ったように運転席にだらしなく座ったまま、ギアもハンドルも握ってはいない。まるで、無人のように駅に停まらずに通過していた。コンピュータで制御されている電車だけは非常停止していた。乗り物はすべてどこかへぶつかって停まっていた。

船舶も大変だった。港へ入ってきたタンカーも、操縦不能に陥ったように、どんどん岸壁めがけて進んでくる。このままでは大惨事になる。だが、誰も止めようとしないうし、警報を出そうともしない。船もあちこちで座礁していた。

一体、何が起こったのか。

ここは、東京、青山通り。洒落た店が並んでいる。買い物に出ていた人々が、急に立ち止まって、うろうろしていた。不安そうに四方を眺めていたと思うと、しゃがみこんで、大声で泣きだした。路肩に停まっているタクシーの中でも、運転手が泣きじゃくっている。帽子を口にくわえて、いやいやをしていた。

スーパーマーケットの中では、レジ係の女子社員が、べたりと座りこんで泣いている。それを見つけた老婆が、寄ってきて、キャーキャーと嬉しそうに騒いでいる。ショッピングカートを引き張っていた買い物客たちは、自分がいま、何をしているのか、まるで覚えていないように、じっと立ち尽くしていたかと思うと、急にぐずるもの、笑うもの、奇怪な言葉を発するものなどが続出した。

高校の数学の時間。黒板に大きく方程式が書かれていたが、それを途中まで書いていた数学の先生が、チョークの手を止めて、じっと黒板を見ていたが、急に、訳の分からない線をぐるぐると書き始めた。それを見ていた生徒たちも、ノートに書き写す手を休め、急に、ぐるぐるとシャーペンで意味不明の線を書き始めた。

レストランで、まさに食事をしようとしていた客が、突然、ナイフやフォークを使わずに、手で行儀悪く直接掴んで、口に運んでいた。厨房ではコックたちが、いままで調理していた手を止めていたが、徐に、自分のこしらえた料理を手掴みして口に運んだ。いずれも、ぼろぼろと赤ん坊のように口から零して食べている。涎もすごかった。

「まあまあ、んま、ままま」と、恰幅のいい紳士が、何を云っているのか判らないが、ご機嫌で食べている。床に落としたものも、這い蹲って食べていた。

イラクでは、まさに米軍と、フセインの親衛隊が、衝突寸前であった。と、突然、銃声やんだ。ふらふらと立って、ただ歩く兵隊たち。自分がどこにいるのか判らないで、立ちつくしている兵隊。中には、はいはいして砂漠の上を赤ん坊のように進んだり、両軍入り乱れて、仲良く砂遊びをしていた。戦車も止まったきり動かない。

司令部では大変なことが起こっていた。オペレーターたちが、キャーキャーとはしゃぎながら、操作パネルのボタンを滅茶苦茶に叩いて遊び出したから、ミサイルというミサイルが発射された。それも少しの間の混乱で、やがてすべての電気供給が停止すると、赤い非常ランプだけがブザーの音と共に点滅し出した。それが、怖いのか、司令官始め、将校たちが一斉に火のついたように泣き始めた。

会社でも家庭でもどこでも、子供から老人まですべての人間が乳児に戻ったようだった。指をしゃぶったり、ものを掴んでは投げてみたり、やたらとその辺のものを口に入れてみたりして、中には呑み込んで危険なものまで口に入れて苦しむものも多数出てきた。おしっこも垂れ流して、ぐずるものが続出する。うんちに至っては、OLも重役も、みんなそのまま服を着たまましているから臭うこと。

腹が減っても、手の届く近くに食べ物があればいいが、缶詰があっても開け方が判らない。自動販売機があってもお金の使い方が判らない。喉が渴いても、水道の蛇口の捻りかたも知らない。言葉すらみんな忘れてしまったかのよう、

「ばぶばぶ」「だあだあ」と、赤ちゃん語を喋っている。

慌てているのは、天界だった。ゼウスが、その地上の異常を気付いて、かんかんになっていた

。「誰だ、リセットボタンを押したやつは。これから地球が面白くなってくるというときに、人間たちの記憶をすべて消去してしまうとは」

かつて、バベルの塔を造ったときも、悪戯な天使たちが、言語をばらばらにってしまった。今度は、すっかりリカバリーしてしまったのだ。

ゼウスは地上の混乱を眺めていて、まんざら悪い気はしないようだった。

「まあ、これもいいか。悪い大人が増えたからな。これで地上に悪人はいなくなったわけだな」

第419話 最後 to 笑う者

この長引く不況下で、どの業界も生き残りをかけて熾烈な闘いを余儀なくされている。消費が冷え込んでモノを買わなくなったから、価格は暴落、これでもかと畳みかけるような価格競争に各社、追いつめられていった。どこが潰れてもおかしくはない。利益の上がっているところがほとんどないのが小売業の現状だ。どこが潰れるかではなく、どこを潰すか。そして、自分の店だけが競争にうち勝って残らねばならない。経営者はみんなそう思っている。最後に残る者が笑うのだ。

スーパーマーケットもできすぎから潰れる店が増えている。人口二万当たり to 一店というのが、あちこちにできるからそれが一万になり、五千になり、いまやG市では三千人に一店という激戦地になっていた。スーパーが背中合わせに建っているところまである。消費者にとって、そんなにスーパーはいらない。共に張り合って、安売り合戦をするのは大いに結構だ。客にとっては安いほうがいいに決まっている。

スーパーはるかは、この市に三店舗を展開している。社長の前田は鼻息が荒い。「いいか、何がなんでも敵を粉砕するのだ。向こうが一円安くしたら、うちは二円安くしろ。チラシでは負けるな」

販促課長の笹田が、どこからくすねてきたのか、他店のチラシのゲラを手にして前田社長に見せていた。

「なんと、スーパーほくてきは卵が三十八円だと？ なになに、スーパーふみのがくは大根が九十円だと？ よし、うちはそれより十円安い超目玉でぶつけよう」 社長は発憤して、そう息巻いた。すると、工藤仕入部長が意見した。

「し、社長、それはあんまりです。卵の卸値が、昨日の相場で八十円ですよ。大根は不作で百円以上はしています。無制限に売るというのでは、確かに客動員はあるかもしれませんが、最近の客はしっかりしてしまして、目玉商品だけを買ったらさっさと帰るんです。それに、売れば売るほど損をする。五千人が買いにきたら、それだけで五十万の赤字です」

社長はもう目が見えていない。

「なんだと、おまえはやる気があるのか、何がなんでも競合店には負けるわけにはゆかないんだ。潰せ、周りのスーパーを蹴散らせ」

また、大号令がかかった。この戦争はまるで先が見えていない。売上は各社下がる一方で、昨年度の売上は平均しても、二十年前と同じだ。昭和五十八年の売上と同じで、十年このかた赤字続き。借金はその景気のよかった頃の五倍に膨れあがっていた。それで、人件費は倍になり、あらゆる経費は上がっているというのに、利益の出る体質まで持ってゆくにはほど遠い。もがけはもがくほど墓穴を掘るのだが、それでも座して死を待つわけにはゆかない。やはりチラシを新聞に折り込んで、セールだ。そして、周りの店を潰せば生きる道が開けてくる。弱肉強食そのままの戦だ。

「社長、スーパー壇が不渡りを出したそうです」

総務の日土課長が取引先から情報を聞いてきた。

「そうか、いずれ、店舗は処分するはずだ。そこにわが店を出店する。従業員と什器備品はそっくりそのまま使わせてもらう。格安で店舗展開ができるというものだ」

すると、経理の駒田課長が、青くなって社長に詰め寄った。

「社長、何を考えているんですか、うちの社員の給与もようやく払っているというときに、どこからそんな金が出てくるんですか」

「心配せんでいい。銀行だって売れない不動産抱えて大変だろう。家賃を払ってやるんだよ。逆にありがたがられる。うちが出店しなければ、中央から大手スーパーが乗り込んできたらお終いだ。これはマーケットの面取り合戦だからな。出店の隙を与えないようにするんだ」

世はまさに天下盗りの戦国時代も末期だった。長い戦争でどこも疲弊してしまっていた。

「社長、ほくてきは土曜日頭で超目玉の春の行楽シーズンフェアを打ってくるそうです。つがるこまちが十キロ二千五百円、フルーツ缶オール六十円、ペットボトル百五十円とくるそうです」

敵方にもスパイがいた。すべて情報は筒抜けだ。

「よし、うちは、同じ内容で、金曜日の朝刊に入れろ」

原価を割っての仁義なき闘いが日夜行われていた。それでも無理して出した売上も前年割れで踏んだり蹴ったりだ。広告費を使い、特価で安売りしても去年より悪い。財務内容はどんどん悪くなる一方だ。

とうとう、息切れしたスーパーほくてきが倒産した。スーパーふみのがくも破産した。この市では唯一スーパーはるかだけが生き残った。

「ざまあみろ。とうとう勝ったぞ」

ところが無理が祟って、従業員の給与は二ヶ月も溜まる、社会保険料も未納、銀行からも利息の支払いの催促、手形の先延ばしに取引先も応じなくなった。はるかも追いつめられていた。確かに客数は倍以上になった。売上も鰻登りだ。それでも資金繰りが間に合わない。明日の手形を落とす資金不足は到底掻き集められない。取引先から代金支払いの電話がくる。従業員の家族からも給与のことで社長に電話。噂を聞きつけて事務所に集金が押し掛けてくる。駒田課長と日土課長が対応にでんてこまいしていた。口々に説明を求めて、「社長はいるか」と、みんな喧嘩腰だ。電話は鳴りっぱなし、銀行からは明日の件で呼び出し。ずっと寝ていなかった前田社長は、とうとう発狂した。

「ははははは、ははははは」

みんな社長のところに駆け寄った。

「し、社長」

この戦は勝者のいない戦だった。そして、どこもいなくなった。

第420話 老害

溝口から同人誌が送られてきた。彼はわたしと同じ年で、五十にならんとする。いつも彼の書く小説は作文で、私小説という名を借りた、ありのままの実生活の記録だった。家庭内のどうでもいごたごたが書かれていた。本人は日記のように書いていて面白いのかもしれないが、読者は人の家のささやかなホームドラマに飽き飽きしてくる。

だが、今回の小説は違っていた。彼は、三年前に田舎から老父母を引き取って、共に暮らすようになった。それまで二十年以上もの間、離れて暮らしていた。田舎の家を売り払い、その金で新居を建てて、一家で住んだ。奥さんと共稼ぎだった。娘は高校生で、ひとりっ子。かなりボケがはいた父親のことを殺意を持って書いていた。いままで、脇役だった八十過ぎた父親をテーマにしたのは珍しい。

いつか、酒を呑みながら、その書いたことについて話し合った。

「あんまり酷いのではないか。自分もいつかそういう年になるのだし、父親に対してくたばれみたいな云い方は」

「いいんだ。あんなやつ。顔も見たくない。飯を喰うときも、食卓にぼろぼろ零すし、いつもぼうと、ただ座っているだけで、見ていて腹が立つ。何を考えているんだってね。ああなるまで生きていたいと思わないね」

溝口は、両親と人生の半分も共に暮らしていなかったから、老いということについて、その経過が見えない。ひとり息子だから、引き取ろうと思ったが、いきなり連れてきた両親はすでにかつての面影はなかった。溝口にとって、父親とはいつまでも力強い存在であり、相談に乗ってくれる聡明でやさしいものであった。その父親のイメージがまるでない。だらしないほど、生きる屍になっていた。そんな父親は認めたくない。見ていられない。愛情の裏返しとでもいうべき、憎しみと排斥が彼の心に湧いていた。それがいつか殺意になっていた。溝口は実にストレートで単純な思考回路の持ち主である。年取った子供のようなところがあると、奥さんも嘆いていた。

「ただ、ぼうと座っているなんて、おとなしくて可愛いじゃないか。うちの両親と交代してみようか。うちのは年も似たようなもんだが、うるさいぞ」

わたしが云うのは本当で、溝口の両親のように弱っている年寄りではなく、老いてますますの口で、元気すぎるし、うるさすぎる。少し弱って、ボケてきたら扱いやすいだろうといつも思う。

「よし、どっちの年寄りがいいか、一週間、交換してみようじゃないか」

冗談で云ったことが本気になった。それから十日あまりして、我が家に本当に溝口の両親が遊びにきた。代わりにうちの両親が体験のためだと、一週間預かってもらうことにした。

「いいか、すぐに音を上げて、返品したいと泣きを入れてくるなよ」

と、わたしは溝口に云ってやった。

「なんの、そっちこそ明日にでも手に負えないと返しにくるなよ」

我が家は、あのうるさい両親がいなくなって静かになった。代わりに来たのは、借りてきた猫よりまだ静かだ。お婆さんの方は民宿でも泊まっているような感じで、

「いいお宿ですねえ、お世話になります」と、愛想がいい。おじいさんのほうは、どこにいるのか判らない。ぼんやりと何も云わずにただ座っているだけだった。

「一週間ですけど、自分のお家だと思って、気楽にしてください」

嫁も、口うるさくしなければ年寄りには嫌いではない。お茶を勧め、あれこれと茶菓子を出した。か細い感じが、年寄りの悲哀を漂わせ、何かしてあげたくなる。

「明日の日曜は、近くの温泉にみんなで行こう」

お婆さんは、「ありがたいことです」と、涙を流して頭を下げていた。いままで、向こうで虐待されてきたものか。あまり大事にされてこなかったようだ。

確かに夕食のときに、おじいさんは、ぼろぼろと幼児のように御飯を零していたし、手掴みで食べたりしていた。大きな赤ちゃんがいると思うと気にならない。お婆さんは廊下に小便を洩らしていた。

「お婆あちゃん、パンパースは嫌だって聞いていたけど、布だったらいいでしょう」と、嫁はさらしを切って用意していた。

「何も恥ずかしいことはないんです。わたしの年齢でも失禁はあるんですよ。半分近い人があるんですって。女は特にね」

向こうの家から聞いていたが、そんなこともたいしたことはない。誰でもいづれなることだ。寝たきりでないだけありがたいと思わねばならない。

寝しなに夫婦で、それぞれの体をマッサージしてやった。そんなこともされたことがないとみえて、お婆さんは泣くのだった。年寄りが泣くというのはそれだけで哀れだった。

「いいご両親じゃない。あんなに弱ったら、親孝行もしたくなるわね」

と、嫁はしみじみと云った。

「向こうはどうしているやら」

うちのじいさんは、元気すぎて余っていた。とにかくいつもじっとしていない。仕事が好きなのだが、ボケているから余計なことばかりする。注意すると頑固で、云うことを聞かない。すぐ怒鳴る。軍隊で鍛えた体と強情は持てあます。

それに比べて婆さんは病気マニアで、神経過敏、一日中騒いでうるさいのだ。

案の定、二日目に溝口から電話があった。

一助けてくれ。もういい、判った。お宅の両親を返すから、うちのを戻してくれ。

一ほらな、判ったろう。どれほどお宅の両親がいいほうか。扱いやすいし、楽だろう。で、どうだった。

一どうもこうもない。朝、六時前に、おれたちと娘の部屋をがらりと開けて、「いつまで寝ているんじゃ、いい若いものが」と、窓を開けて叩き起こされる。近所に迷惑なくらい大声で庭先で体操を始める。それも禪一本でだ。いまどき禪なのかよ。一時間おきに飯はまだかと怒鳴る。

「さっき食べたでしょう」と嫁が云うと、「飯も喰わせんで、おれを殺すつもりか」とくる。そうかと思うと、乱暴にバタバタと大掃除を始める。頼みもしないのに、タンスまで動かして。上や下への大騒動だ。娘も悲鳴を上げている。で、お婆さんときたら、すぐ救急車を呼んでくれと、昨日から三回も呼んで、叱られたよ。どこも悪くないんじゃないか。病気ボケなのかい。食事では文句ばかりつけられて、揚げ物は油分だから体によくない、酢のものは胃に沁みる、砂糖はよくない、肉も酸性、魚も塩辛いと、それじゃ喰うものがないじゃないか。一日中、機関銃みたいに喋りまくって、うるさいことうるさいこと、あれもボケの一種なのかい。二人ともなんとかしてくれ。うちの両親のほうが静かでもいいのが判ったよ。

一そうか、それなら大事にしるよ。同じボケなら静かに限る。

第421話 反抗期

「おい、朝食はパンにするぞ」

夫が折角、味噌汁を作ったのに、買い置きのフランスパンを熱い牛乳に浸して食べていた。北見奈緒美は最近の夫の反抗的な態度に頭にきていた。

「昨日は、味噌汁がいいって云ったのに」

すべからく妻の逆を求めるへそ曲がりかと思っていたら、二人の息子たちまで同調している。まあ、二人とも中学生だからこっちは本当の反抗期なのだろう。

「弁当のおかず、どうしていつも食べ残してくるの？」

「だって美味しくないんだもの」「あんなの喰えるかい」

奈緒美は絶句した。あんなに素直な親に逆らったことのないいい子たちだったのに、どこでそんな口のききかたを覚えてきたのだろうか。

「だったら、朝御飯ぐらいちゃんと食べて学校に行きなさい」

「嫌だよ、食べたくないもの」

二人とも、最近勉強も宿題もしないで、ゲームばかりやっている。少し注意すると、かかってくる。白を黒と云う。すべてが逆だ。反抗期は順調な精神の発達過程なのだと判っていても頭にくる。そうして、自分の手から次第に息子たちが離れてゆくのが、何か怖い。奈緒美は母親として、ひとつづつ大人になつてゆく子供たちに一抹の淋しさも抱いていた。

夫が会社に行き、息子二人が学校へ行くと、奈緒美は同じ団地にある北の辺出版社へパートタイマーで午前中だけ働きに行っている。仕事は版下までパソコンのDTPソフトを使って作成するデスクワークだった。いまは、出版社も、印刷屋の仕事にまで入りこんで、少しでも本の原価を下げようと努力しているのだ。その分、印刷屋が大変だ。

「おはよう」

と、いつも奈緒美は明るく同僚の里中さんに挨拶するのだが、何故か里中さんもふんと横を向いている。（あれ、虫の居所が悪いのかな）と思ったが、別に気にすることなく、昨日の打ち込みの続きをしていた。

「里中さん、そこの原稿取ってくれない」

奈緒美が手の届かないところにある原稿を回してくれるよう頼んだが、

「自分で取ればいいでしょう」と、あの優しい里中さんが別人になったようだった。奈緒美が愕然としているところへ遅れて入社してきた社長の斎藤が、憤然と机に向かって、足を無造作に上げていた。

「お茶！」と、いつにない乱暴な口調で、奈緒美に命令していた。

「は、はい」（おや、こちらも機嫌が悪いぞ）

奈緒美がお茶を入れて持ってゆくと、

「ぬるい、こんなお茶が飲めるか」と、窓を開けて捨てた。

「酷い、いつもぬるいほうがいって云ってたじゃないですか」

「今日は熱めのお茶が飲みたいんだ」と、社長は慙然と答えた。

電話がかかってきた。昨日、三校まで渡した自費出版の客だった。

一ああ、北見さんですか、原稿、気に入らないから書き直します。

一ええ？ 三回も校正してですか。

一何か文句ありますか。気に入らないものは気に入らないんだ。

（大作家でもあるまいし）でも、奈緒美はぐっと我慢していた。この世は誰かが折れなければならない。それにしても、近頃は変だった。世の中、ぎくしゃくして、人間関係が潤滑に回っていない。とにかく引かかる。昔の誰かが、大卒が増えたら、文句が増えたと名言を吐いた。日本もだんだんと個人主義が台頭しはじめ、悪く云えば自己中が増えた。

奈緒美は少ししょんぼりして、買い物して帰ろうと、いつもの化粧品店に立ち寄った。

「ドアが少し開いているわよ。ちゃんと閉めてね」と、いつもはにこにここと笑っている女主人も今日はっけんどんだ。奈緒美は恐る恐る訊いた。

「あのう、プラセンタエキスありませんか」

すると、女主人はきつとした顔を向けて、

「あるけど何よ、あんたみたいに色白なのが、どうして美白しなきゃならないの。わたしに対する当てつけ？」

と、態度がかなり悪い。奈緒美は驚いて外へ飛び出した。

（わたしが何をしたっていうのよ。みんな、どうしてわたしにばかり反抗的態度をとるのよ）奈緒美は泣き出しそうだった。

ところが、街角でも、知り合い同士で、いがみ合っていた。あちこちでやっていた。スーパーでは、レジ係と客が云い合いをしていた。銀行に寄ったら、銀行の中でも窓口と客、融資と商店主、待っている客同士が、ぎんぎん云い争いをしていた。どちらも譲らない。誰も謝ろうとしない。自分の主張ばかり通そうとしていた。

銀行のテレビの番組の中でも、キャスター同士が口論しているのが信じられないが放映されて

いた。何か世の中が急におかしくなってきた。四方八方どこを見ても反対だ。

テレビの臨時ニュースで、国連の環境と気象のアセスメントの様子が入っていた。各国の学者が緊急に集まって、全世界に急激に広まった反抗的態度に就いて、調査研究発表がなされていた。

それによると、地球上は各地の戦争と、恐慌、犯罪、教育の荒廃、家庭の崩壊、人間関係のごたごたが頻発して、地球は次第に冷えてきて、反抗期に入っていると、警告していた。

「なんだ、そうだったのか。わたしひとり素直で損しちゃった。よし、わたしも家に帰ったら反抗してやる。誰が弁当なんか作るか、飯焚き女じゃねえや……」

第422話 萌 風

福寿草が咲いて、マンサクが咲くと、あとは花という花が順番を待って並んでいた。老詩人のSさんが死んだのは、そんな賑やかな春のおしゃべりが聞こえる頃だった。

昨年晩秋に蜘蛛膜下出血で倒れた。病院に運ばれたときは、口もきけない状態であった。次第に脳が萎縮してゆき、意識が掠れてゆく。大晦日までは意志表示があったというが、正月明けからはなんの返事も返ってこない。

その朝、妙なことがあった。黒いズボンを探していたが、喪服の下より出てこない。まあ、それでもいいかと穿こうとしたが、何か使うような気がしてまた仕舞ったのだ。

古書マニアの老人から店に電話があって、新聞のお悔やみのコーナーに名前が出ていたとわざわざ知らせてきた。死亡広告は載せなかった。あれほどの人でも知らせないで、密葬するのか。わたしは何故か理不尽な思いで憤りすら覚えていていた。だが、すぐに思い直した。Sさんのそれが主義だった。

生きている間に決して詩集は出さないと、わたしが勧めるのに固辞し続けた。若いときの処女詩集一冊で、それっきり本を出したことはない。五十年近く、書き溜めた詩はものすごい数だろう。同人誌には発表していたが、それは仲間で楽しむためのものだ。詩なんか誰が読んでくれるだろうか。読者と名のつく人はたったひとりでもいい。世に迎合するための安っぽい詩は書くものではない。そして、毅然とした孤高の人でいつもポプラのように真っ直ぐに立っていた。

Sさんは口癖のようにアフォリズムを引用して云っていた。

「われわれは、大衆のサーバントではない」と。

あまりにも明るすぎる日曜日であった。あちこちで雪国の風物詩のタイヤ交換が始まる。气象台は積雪零を発表していた。それでも庭先には残雪がある。温かい風が吹いていた。春一番か二番か。風立ちぬ、いざ生めやもという詩が口をついて出た。

誰にも知らせていなかったのに、わたしがひょっこりと火葬場に顔を現すと、Sさんの奥様が泣いて告げた。

「やはり駄目でした。ゆうべは、留守のときに家までおいでいただきましてありがとうございました」

お棺の窓が開けられ、変わり果てたSさんと入院以来の対面をした。それは手の届かない遠い人だった。

「お父さん、拓くんが来たのよ、あれほど拓くと云っていたのだから」

奥様がもの云わぬ人にそう呼びかけたものだから、わたしはぐっと堪えていたものがどっと決壊した。九時三十分、棺は窯に入り、この世と遮蔽されて赤いランプが点灯した。さようならSさん。少し早い享年七十二。

同人の合評会はいつも喫茶店の片隅で行われた。コーヒーが好きなSさんは絵描きとしての才能もあり、その店の壁にSさんの絵が飾ってあった。

「児童詩を読んでも感動を与えるものがある。言葉をイメージ化して、そこからどれほどの感動を与えるかだね」

手厳しい批評もしたが、すべての的確だった。詩でないものにはきっぱりと詩ではないと云いきる。

一時間半。それは人間の焼けて骨になる時間だった。わたしは、何故かポケットに忍ばせてきた本を開いて読んでいた。こんなときと思うが、それはSさんの愛読書だった。原民喜の「夏の花」一冊。詩人としても鉄道自殺した民喜の才能が惜しまれる。原爆詩人として峠三吉とともに評価されていた。多くの死が止めることができないほど言葉に零れていた。

Sさんは云った。

「死んだものより生きているものが大事。老いさらばえたものは道を開ける」

そうして、若い人たちの詩の発表の場を与えようと尽力した。すべての詩人は若い感性のうちに開花した。年にとって何が詩人だと自嘲するように自ら身を退いていた。決して表に出ないこと、無名であること、それがSさんの哲学であった。だから、本は出さない。ホテルでの派手な出版記念パーティーはすべて欠席した。多分、生前から奥様に遺言のように話していたのだろう。葬式は家でやれ、供物は辞退しろ、身内だけでひっそりとやれと。その通りになった。誰にも知らされぬ寂寥たる死だった。

Sさんの骨を拾う。それが、自分の務めか昔からの約束でもあるように、わたしは無言で軽くなったSさんの骨を骨箱に入れた。人間は、終いには一尺四方の箱に収まる。

やがて、エリオットの謳った残酷な四月が来る。そうすれば、花という花が開花し、地中から緑がいつせいに芽を吹き出す。新しい生命で賑やかな春がきていた。一粒の麦のようにSさんが亡くなり、若い詩人たちが新鮮な歌を芽吹く。

それが何の不思議もなく、年々に花咲く。残るものなど何もいらぬ。枯れて肥やしになり、また次の世代が育ってくればいい。ある種の無常観ともいべきSさんの言葉の断章を思いながら、眩しい火葬場の外へと出た。あまりに明るすぎた。なにもかもが。

さよならだけが人生だ、とは云いますが、この場を借りて皆さんに別れを告げなければならなくなりました。

家を長い間、不動産屋に任せておりましたが、ようやく買い手がついて、引っ越しすることになりました。いままで、わたしは、十四回も引っ越しを重ねてきました。札幌、東京、横浜、富山、名古屋、岡崎、大阪、堺と、若いときは、転勤ではなく、自分から好んで新たな天地を求めて出発しました。

もともとわたしの中には近江商人の血が流れております。その血が騒ぐのです。ひとつところに長く暮らすのが苦手なようで、十年もいたのは長いほうです。先祖は、近江から盛岡までやってきて、海産物を手がけていたそうです。それが、八戸藩に流れ、青森に住むようになったのですが、明治に入ってから弘前で和菓子屋をやっていて、商売が左前になると、畳んで、青森市にやってきたのが大正に入ってから。それから南部煎餅の店をやりながら、ずっとこの地におりました。思えば、すべて倒産によって動いたのです。商売が駄目になるということは、その町に迷惑をかけた人がいるということで、恥もあって、やむなく引っ越したのです。

いまでも三十年くらいが事業の寿命とはいいますが、世の中、五十年、百年と店をやっているところはなかなかありません。いつかは潰れます。たとえば、青森の繁華街を見れば判ります。駅前からずらりと両側に商店が並んでおりますが、三十年前もあって、いまも商いを続けている店がどれほどありますか。みんな、店をやめたり、どこかへ行ってしまいました。

わたしもここが区切りだと思ひまして、思い切って商売をやめることにしました。もう五十過ぎて、あちこちへ引っ越しするのも、これからは体力、財力もかかることだし、なかなかできそうもないので、そろそろ終の棲家を探さねばなりません。動物の本能と同じで、死に場所は念入りに調べます。自分の骨を埋めてもいいところを探しました。それは、この雪深い郷里ではなかったのです。

この際、店もやめ、家も売れたことだし、青森の地を離れようと思ひました。家族とも相談しましたが、初めは猛反対を受けました。墓参りにしても、親戚が沢山いることだし、確かに友人など関わりのある生活を切り捨てて、他国へに行くというのは勇気がいることで、わたしも随分と苦しみました。単身赴任ならともかく、子供や老父母もいることです。みんなを説得して、新たな人生をここではないどこかでやり直すために共に行くというところまでようやく漕ぎ着けました。

思い切って日本を離れることにしました。わたしは、この国に失望していました。この先もよくなるまいだろうと思ひます。腹のたつことばかりで、まるで国民を馬鹿にしている政策ばかり、どんなにわれわれが頑張っても、頭がおかしい人たちばかりですから、もう、行くところまで行くでしょう。それに人生の残りを犠牲にすることもありません。逃げると云われても返答に困りますが、実際、逃げ出したい気持ちはありました。恥ずかしい気持ちもありました。ニュースを見ても、テレビを見てもあまりに恥ずかしいことばかり。こんな国はこちらから捨ててやります。せいせいしました。ようやくふんざりがつきました。

七月までには、整理して、念願のヤップ島へ移住です。それこそ電気もガスもないところへ家族で引っ越しです。そこで、わたしのやりたかったアンドウショウエキの思想を実践いたします

。直耕といいまして、自給自足の生活に入ります。そのために少し、農業の勉強もしてきました。福岡さんの提唱する自然農法です。それと、食事はすべて自然栽培で採れた作物からマクロビオティック料理で、文明の毒を食べ物から除去します。自然の理に適った生活、まったくの無公害の生活をするのです。晴耕雨読で、文明を否定した生活がしたいとこの二十年以上もずっと考えてきました。それはこの日本では遂げることはできません。黙っていても税金がきます。空気も水も作物も汚染されています。何よりも情報が汚染されております。

もう、人と金の煩わしさにストレスを溜めて、ちまちまと働くのが嫌になりました。ヤップ島は村長が古い考えをもった人で、文明の利器を極端に嫌う頑固なところがあり、好感を持ってましました。石器時代の大きな石のお金のごろごろしている島です。石器時代に戻って原始共産制の生活をするというのが、わたしの長年の夢でした。それがようやく実現することとなりました。

皆さんには大変お世話になりました。逃げるようで大変、心苦しいのですが、どうぞ、あんな馬鹿がいたと笑ってやってください。これから大変な時代がやってきます。ひと足先に疎開いたします。もし、後で来れる人がありましたら、どうぞ、おいでください。そのときは、腰に葉っぱを巻いて、裸足のわたしが出迎えるでしょう。

本当に名残り惜しいですが、長い間ありがとうございました。それでは皆さんさようなら。

第424話 ヨーグルト

いろんな夫婦の形がある。わたしは、それを悪趣味にも覗いて歩くのが好きだった。よしんば一度は夕食のご相伴にあずかりたい。その家の味噌汁を呑み、その家で漬けた漬け物を食べる時、わたしは生活の一部を覗いたと思う。覗き趣味の醍醐味はそんなところにあった。

紀田家はまさに夫婦円満、非の打ち所がない、人も羨む家庭だった。夫の秀幸は公社務めで、堅い仕事に就いているが、趣味は音楽で私生活は別の顔がある。妻の奈緒子は小学校の先生をしていた。聡明で、優しい母親であり、中学の息子を二人持っていた。この夫婦に不満と云えば、あまりにも幸せで順調すぎる人生に少し退屈しているぐらいだろうか。

それでも、おちゃめな妻を拘束しない夫は、妻をある程度自由にさせることで、少しの距離を持ち、付かず離れず関係を持続していた。数年前に建てた家にはテラスもあり、庭も手入れされ、花が四季折々に咲いた。

わたしは、家族ぐるみの付き合いをしていたが、あまり人の家に入り浸るのが好きでない女房を置いて、よくひとりで仕事が終わったあとに遊びに寄った。

いつも何か手土産を探すのが楽しみであった。ちよつとしたものでいいが、気の利いたものがあると、今日は何にしようかと、子供たちの顔も思い浮かべていた。梅干しを持っていったときもあるが、大概は健康にいいものが多い。そのお返しが必ずあるのも楽しみのひとつで、別にそれを期待して行くわけではないが、行く前には決まって奥さんにメールを打っておく。

一シュークリームなどというものは、決して用意することのないように。くれぐれも甘いモノは

太りますゆえに、お気になさりませぬように。

暗に要求しておく、それが、テーブルの上に出た。この夜は、手土産に黒酢を持ってゆく。疲れがとれるので、呑みやすいはちみつ入りのやつを。いつも綺麗に掃除の行き届いた玄関から居間が、なんとなく、我が家と比べて、清楚でいい。我が家ときたら、足の踏み場がない。モノで溢れ、乱雑である。ここに来るとほっとするのはそのためか。

そして、奥さんの入れるコーヒーがうまい。豆から挽いてくれるのだが、いつもブレンドの中身を聞くのを忘れた。コーヒーの隣には甘党のわたしにはたまらないケーキがいつも出てくる。わたしの座る席というのもいつも決まっていた。四人掛けの食卓。家族四人だから、丁度四角形に納まる。我が家は、一時、九人がいた。六人掛けのテーブルだったので、食事は二交代だ。三世代と一緒に住むから、がちゃがちゃして賑やかだ。ここに来ると、核家族の甘い匂いがする。

秀幸とは音楽の趣味で話が合うが、とりとめのない話のようで、実は、夫婦生活の質問が隠されていた。ちょっとしたことで、答えを聞き出すと、あとはそのピースを繋いで、どんな夫婦なのか次第に輪郭が見えてくる。あまり仲のよい夫婦を見ると壊したくもなり、嫉妬してくる。その点、うちなんかはいつも修羅場で、喧嘩も派手だ。もう夫婦生活なんか無いのだ。

互いに中年になってくると、出てくる話題は病気のこと。そして、専らの関心事は健康。健康お宅と云われても仕方がないほど、いろんなことを試している。どちらかという二人とも肥満気味で、なんとか痩せようと努力してはいるが、一方では節食して、一方では甘いものをしっかりと摂るからなんとなく無意味なことをしているようだ。奥さんはいつ見ても若くて綺麗だ。あまりに嵌りすぎている夫婦なので、そのままテレビドラマの世界だった。わたしはカメラになって、追いかける。

ここに座っているだけで、何か幸福のお裾分けをされている感じだ。いつもそうだった。この椅子に座り、コーヒーを飲んでいるだけで、幸福のウイルスに感染したような微熱を感じていた。

奥さんは、

「ヨーグルト、好きかしら？」と訊いた。

「うん、貰えるものならなんでも」と、またわたしはさもし根性が剥き出しになっていた。ヨーグルトは家族全員が好きだった。

「カスピ海ヨーグルトの株を友達から貰ったのだけど、分けてあげるわ」

ポリ容器に三分の一だけ入っていたヨーグルトの菌。それに牛乳を加えて、半日置いたら、また別の容器に移してどんどん増やすといいと云う。

「うちの娘が、このカスピ海とかいうのを探して、あちこちのデパートやスーパーを先週の日曜日に一緒に探しにいったんだが、どこでも売っていなかった。娘が大喜びするだろう」

わたしは、ついこの前の諦めきれない娘の顔を思い出していた。

「あら、このヨーグルトの菌って、売っていないのよ。みんな、友達から友達へと、分けてあげるものなの」

わたしはそれを聞いて、たったいまもイラクで起こっている戦争のことを思い出した。殺し合うことで、その子供や友人へと憎しみや復讐心が伝播する。戦争は、そうして何世代にも渡って受け継がれ、終わらないのだ。

エイズや、新しい肺炎ウイルスにしても、どんどん繁殖して人類を滅ぼす。それに比べたら、このヨーグルト、人間を健康にしてくれて、友達から友達へと株を分けて、どんどんと幸福を繁殖させる。

喜田夫婦の幸せを貰って、わたしは暇した。それはまた別の友達に分けてやろうと思いながら

。

第425話 自動機械生活

朝、起きると味噌汁から御飯、コーヒーまですべてができて、夢のような生活がいま現実になろうとしている。主婦をズボラにした家庭生活のオートメ化はさらに進んでいた。

自動調理機というものがある。メニューに合わせた材料を上からぶちこむだけでよかった。例えば、八宝菜という中華の中のアイコンをクリックして、それに見合った分量の食材を入れてやる。指示された通りに入れると、各々の材料が、調理の順番に中で仕訳される。そして、自動的に皮が剥かれたり、賽の目に切ったりして、それが煮たり焼いたり炒めたりされて、一番下の大皿にできあがって盛りつけされて出てくる。塩加減も薄口、濃い口と調整ができるようになっている。しかも、タイマー付きだから、材料さえ入れておけば、食べたいときに合わせてできている。

食器を洗うのも全自動で、拭く手間もいらない。洗濯もいまは一槽で、乾燥までやってくれるのが主流だ。掃除はというと、お掃除ロボットが売られている。部屋の形や掃除の範囲を記憶して、黙ってスイッチを押すだけで、掃いて、拭いて、ワックス掛けまでしてくれる。

家の中の電灯も人がいないと自動的に消えたりするから省エネだ。セキュリティもすべてコンピュータでドアに立ったものの顔を認識して、そのファイルに登録されている客の名前を覚えてくれる。いちいちドアを開けなくても、誰が来たか判るのだ。不審な人物や、凶器を持っている人は、赤外線カメラで分析、警告を発してくれる。

家の中はすべてホストコンピュータが管理して、エアコンも生活習慣に則って作動するし、テレビもいつも見ている番組に自動的に回してくれる。家の者はなにもしなくていい。そんな中で育った子供たちは、庖丁の使い方を知らない。リンゴの皮剥きなどできない。まな板と云っても見たことがない。調理器具のひとつひとつが、博物館に入り、親が子供たちに教えている。

「わたしたちの子供のときはね、こんなものを使って料理していたんだよ」

何でも全自動でやってくれるから「主婦」という言葉もなくなった。家にかかりきりになる必要はないから、「家事」という言葉も死語になった。妻は家にいなくてもいいから、外に出る。奥にいないから、奥様ではなくなり、外様と呼ばれるようになる。

杉村さんの家でも、ハイテクのコンピュータ制御された家に住んでいる。生活習慣を機械が学習するから、いちいちスイッチを押して回らなくてもいい。どうしてもスイッチを入れる必要のあるときは、命令すればいい。音声認識システムで、機械の操作はすべて言葉でできる。

杉村さんは夫が会社へ行ったあと、何もすることがなく、いつも家の中をうろうろしていた。テレビも見厭きた。ショッピングもつまらない。子供がいない家庭だったので、ペットをいろいろと飼っていたが、そのペットも飼育専用ロボットがやってくれる。すっかりロボットに懐いて、すでにペットの意味がなくなっていた。やることがない。それは囚人のようで、実に辛いものだった。寝て食べてばかりでぶくぶくと太る。それではいけないと、シェイプアップ・マシンに体を預けるだけで、手足の運動を自動的にやってくれる。自分の意志で体を動かさなくても、勝手に動かしてくれるというものだ。

どこの妻も仕事がない人は、退屈していた。人生はつまらないものだ。やり甲斐も、達成感もない。長く、単調な時間だけがだらだらと続くだけだ。人間も長生きしたから、百までは生きる。こんな状態であと、七十年も生きなければならないのかと、杉村さんはうんざりしていた。

ところが、突然、大きな問題が起こった。電気の使い過ぎにより、大停電が起こった。たちまち、コンピュータはダウン。すべての機械は使用不能になった。大変なことになった。ドアが開かない。住人は家から出られない。家に入れない。調理器が動かないから、御飯支度ができない。それでもみんな腹が減るから、手動でなんとかしようと、先祖が使った、庖丁なるものを出してくるが、はて？ 使い方が判らない。米のとぎ方、水加減、炊き方も判らない。水道もコンピュータで制御していたから、出なくなった。

この停電は復旧にかなりの時間がかかるということになった。だが、そのニュースもテレビが点かないから情報が入らない。窓は自動ロックされていた。窓ガラスを割ろうとしたが、泥棒がガラスを割って入れないよう、割れないガラスだったから、どんな硬いモノをぶつけても割れない。杉村さんは焦ってきた。喉が渇く、腹が減る。家に閉じこめられた人々がかなりいた。

「出して、ここから出して」泣き叫ぼうが外には聞こえない。あちこちの家庭でそんな現象が頻発した。救出の電話をかけたいが、電話もすべてストップしていた。この世で電気がなくて動くもののほうが少なかった。ケイタイもモバイルもサーバーや中継がダウンしていたから、すべて連絡がつかない。窓を必死で叩いて、通行人に知らせ、ようやくレスキュー隊が駆けつけるところはまだいい。多くの住民は取り残され、水もなく、米はあっても調理できずに餓死していった。

この二十一世紀の科学文明の最先端の国で、餓死する。そんな笑えない悲劇があなたを待っている。

第426話 蝸 牛

ブロードバンド時代で、世の中はなんでも早くあればいいという思想から、ここに来て、またユックリズムが再燃してきていた。そんなに急いでどこへ行く、という標語も昔あった。

急いで走り去るほどの人生か。あまりにスピードを出していたために見落とすことも多々ある。たとえば、それは四季の移ろいで、道端の草花にすら目が行かない。あまりに忙しいので、そんな小さな生命を愛でるゆとりすらなくなっているのだ。

そんな中で、のろのろ歩く人種が出現した。背中に大きなリュックサックを背負っている。その形が、貝の家を背中に付けているカタツムリのようなだから、彼らをカタツムリ族と呼んだ。背負ってみればそうたいして重いわけではない。軽い素材でできているらしい。不自由な感じがした。狭いところには入れないし、満員電車では嫌がられる。でも、彼らは、絶対にそのリュックを背中から降ろすことはなかった。風呂に入るときと、寝る時だけ降ろすのだ。中には寝るときも装着したまま寝ている人もいと聞く。

果たして中に何が入っているのか。それは、デパートでも売っている。安全エアバッグと名付けられた防護ハウスだった。その機能には目を見張るものがある。車や落下物が接近したとき、危険を感知して、バックに急激に空気が入り、真四角なエアバッグになり人間を包んでしまう。それが、車のエアバッグの発想からきたもので、運転手だけでなく、歩行者の身の安全を確保するために開発されたのだ。瞬時に膨らみ、すっぽりと人間を外気から隔離してしまう。それは、風船のようになっていて、衝撃にも強い。表面が鏡のように反射する素材でできていて、熱にも強い。摂氏三千度の猛火の中で二時間は耐えられる。ハウスの中には酸素ボンベが装備しており、一時間分の空気がある。また、外気の酸素だけを吸収する取り入れ装置も付いている。もし、どこかのビルにいて、火災に遭遇したとき、非常栓を引くと、たちまちハウスになり、有毒ガスと猛火から身を守ってくれる。移動は、不便だが、転がして進むよりない。

また、銃弾やナイフも通さない防弾構造になっているので、不意に通り魔に襲われたときなど、また、強盗に遭ったときは、ハウスの中で絶対に安全なのだ。戦地でも爆弾やミサイルの直撃を受けない限り、怪我をすることはない。

地震のときも建物の下敷きにならなければ、このハウスの中で三日は生き延びることができるよう、固形のサプリメントと水が三日分はハウスの中に常備しているのだ。

そして、連絡のためのケイタイの予備と、小型のテレビとラジオがセットになったもの、夜中でも見える赤外線スコープなども装備していた。

テントは、また放射能も通さない素材で出来ていたので、もし戦争、事故があったときでも、被曝はまぬがれる。外気が零下三十度でも気密性が優れているので、二十度を保っているから、冬山で遭難しても救出を待つ時間は稼げる。

終電に乗り遅れ、泊まる金もない酔っぱらいのおとうさんは、道端でごろりと寝たくなるとき、ハウスにすれば、朝までその中で寝ていても平気だ。家庭内でも夫婦喧嘩で、怖い奥さんが庖丁持ちでしたら、即ハウス。踏んだり蹴ったりされても、ハウスの中で亭主はにんまり。

水にも浮くので、津波、洪水、いろんな災害からも身を守ってくれる。一度使うと手離せなくなる。シートベルトも一度してしまうと、しないときは実に不安なのと同じで、ハウスを背負っていないと、とても怖くて歩けなくなってしまった。

大きさもいろいろあって、赤ちゃん用から老人用まである。中にはオプションで、簡易折り畳みトイレ付というものもあるし、キャスターが付いていて、それが電動で走るというのまで出てきたから、転がって移動しなくても人間の歩く速さではバッテリーの続く限り移動が可能となってきた。

いまや、町のホームレスたちもみんな使っていた。いや、ホームレスだけでなく、いままでアパート住まいしていた独身の男たちも、これはコンパクトで居住性もよく、どこでも寝られるキャンプ生活の醍醐味もあって、アパートを引き払い、ハウスの中で生活するものたちが増えつつあった。家の中も安全ではない。世の中物騒になると、安全なのはこのハウスの中だけとなった。会社の近くの公園にぽつぽつとサラリーマンたちのハウスが転がっていた。ぽつんぽつんと明かりが点いている。電気はソーラーで昼間充電できるものだ。通勤ラッシュが嫌で、会社の駐車場や、屋上に住んでいる社員もいた。

学生たちも大学のキャンパスの中できろくろとハウスで暮らしていた。内部で超小型のノート

パソコンでネットを見たり、音楽を聴いたり、DVDで映画を見たりしていた。恋人同士なら、ツインタイプも発売していて、二人で住めるのだ。人ひとりが入るといっばいの狭い家だが、何か安心する。それは、母親の胎内にいるような安心感だった。

駅前広場、商店街、歩道橋の上、スーパーの店頭、いろんなところどころと、ハウスが見えた。街の至る所にハウスが転がっていた。その光景は、危険な外界から身を守るために殻に閉じこもったカタツムリというより、さなぎに似ていた。

そうしているうちに、人間はやがてみんな虫になった。

第427話 猫の散歩

わたしの近所に住む吉田さんは、実に怪しい人だった。朝夕、飼っている猫の首輪にロープをつけて、町内一周の散歩に連れて行くのが日課になっていた。それが犬なら判る。猫を無理矢理散歩させる人というのは聞いたことがない。無理矢理と云ったのは、犬と違い、猫は人間の命ずるままに真っ直ぐ歩いたりはしないのだ。あっちふらふら、こっちふらふらと気促な動物なのだ。その猫を犬のように散歩に連れ出すというのが第一可笑しかった。吉田さんは、その猫で近所の有名人になっていた。

近所の人の噂では、吉田さんの年齢は還暦を越えているということだが、老人と呼ぶには若すぎる。ちょっと目にはまだ五十代。年齢不詳である。口髭がトッポジョージョのようであり、痩せた体躯に精悍なマスクがなかなか決まっている。少し日本人離れした顔が国籍不明でもある。仕事は何をしているのかよく判らないところもミステリアスだった。一説にはミステリー作家で、中央の雑誌に推理小説を発表しているとか、あちこちの会社の役員をしていて、黙っていても役員報酬が入ってくるのだとか、あるコンサートで吉田さんによく似たミュージシャンを見たという情報まであった。革のベストにウエスタン帽をかぶり、バンジョーを弾きながら、グループでカントリーを歌っていたというのだ。

何者か判らないところが、ますます話題の主で、みんなの注目を浴びることになるのは当然だ。風変わりなところは、やはり猫を散歩に連れ出すことであった。

吉田さんは愛想がよく、近所に挨拶は欠かさない。近所づきあいもあるし、奥さんもいろんな会合で会うので、雰囲気は別にすればそう不審な家族ではなかった。

ただ、おかしいことがひとつあった。猫を散歩に連れ回るのがその日によってコースが違うということであった。わざわざ小路を抜けたり、遠回りをしたりと、一周五百メートルのコースが毎日違うということに、町民たちは気づいていた。

「今日は、煙草屋の横から池田さんのマンションの前を抜けて、国道に向かいましたよ」

余程暇な町民らしく、ほかに話題がないのか、いつも吉田さんのことが話に出た。

「わたしも見ましたよ。嫌がる猫の首を引っ張って、眼科の前を公園通りに抜けてゆきました」

「あれって、動物虐待にならないかしらねえ」

近所の井戸端会議では決まって吉田さんの散歩の目撃情報が寄せられた。おかしい人、変わっ

ている人というのが吉田さんに対する大方の評価だった。

猫が歩く方向に吉田さんがついてゆくとすれば、気まぐれな猫は、人様の庭に入ったり、塀の上を歩いたりするのだが、猫のするがままについて歩くのなら、吉田さんも一緒に塀の上を歩かねばならないのだが、そんな格好の吉田さんを見たものはいない。やはり、吉田さんは猫を引っ張りながら、自分の思う道順を強制的に歩かせているのだ。それは、自由を愛する猫にとっては迷惑千万の話で、動物虐待に近いものだろう。

それと不思議なことに、吉田さんの猫の散歩の時間が実に正確なことだった。朝は、七時きっかりに家を出て、七時二十分頃に帰宅する。夕方は五時に家を出て、ぐるりと歩いてやはり二十分には帰宅。町内の人は吉田さんの姿でだいたいの時刻を知るのである。

ところが、吉田さんの家の前がある夜、突然パトカーが数台停まった。機動隊のバスまでやってきて、ドヤドヤと警官隊が吉田さんの家を取り囲んだ。一体何があったのだろうと、近所はみんな玄関から顔を出していた。バジヤマ姿の吉田さんと、あの猫までが、手錠をかけられてパトカーに乗せられていた。

「どうしたのかしら。吉田さんって、怪しいけど、そんな悪いことをするような人じゃなかったのにねえ」

「何の仕事か判らないが、こんなに沢山の警官が突入したからには、かなりヤバイことをやっていたんだろう」

みんな口々に囁き合っていた。刑事らしき人達が、ダンボール箱に証拠書類らしきものを詰めて、トラックに運んでいた。パソコンから通信機器まである。吉田さんの奥さんが泣き喚いて可哀想だった。多分、旦那さんが何をしたのか奥さんも判らなかつたようで、一時、警官に詰め寄っていたシーンもあった。

「どうして、うちの人が連行されるんですか、何を悪いことをしたんですか」

善良な一般市民を逮捕する。警察に非難の視線が集まっていた。

翌日の新聞にトップで吉田さんの顔写真と猫の写真が出ていた。朝夕の散歩を装って、隣国の偵察衛星に情報を送り続けたスパイの嫌疑がかかっていた。衛星に判るように、猫の鈴につけた発信機で、散歩のルートが宇宙から見るとその動きそのものが暗号となっていたというのだ。上空から見る散歩コースの幾何模様がそれぞれ意味があったというのだ。

チェーホフの子犬を連れた奥さんというのは可愛らしいが、猫を連れたおじさんというのは、やはり怪しいのだった。

第428話 デパート

老舗のデパートが閉店する。そのデパートはわたしの生家から歩いてすぐのところだったので、近所の子供たちの遊び場でもあった。四階建てで後で五階になった。

屋上に遊園地とあざらしがいるちょっとした水族館みたいなのがあった。くるくる回る飛行機に乗るのが、子供ながらに怖かった。一度だけ乗って懲りたので、それからは二度と乗らなかった。その頃は平屋が多く、デパートが市内でも高い建物だったから、見晴らしがいい。その屋上にさらに高いところを回る飛行機に乗ると、眼下に街が見下ろせて、高所恐怖症のわたしは、ただ青くなって目を瞑っていた。

いまのようなセルフはなかったから、売り場はすべて対面販売で、欲しい商品はショーケースの中に入っていて、店員がいちいち説明してくれた。エレベーターガールもいた。人と人の距離がいまより離れていなかった。ものの売り買いにしても、人間の声があった。

四階に大衆食堂があって、たまの日曜日には、親父が子供たちを連れて行って、お子様ランチを食べさせる。普段、仕事ばかりで家にもいない親父のせめてもの罪滅ぼしであった。お子様ランチには、普段食べたことがない珍しいご馳走がちまちまと並んでいて、目を見張った。昭和三十年頃は、まだご馳走というと魚肉ソーセージ、卵焼き、バナナだ。そのランチには、なんとウインナーソーセージとプリンがついていた。ケチャップライスに旗まで立っている。軍国主義の名残か、それは日の丸だった。

わたしは、家内と閉店セールスのデパートに行ってみた。もう何年も来たことはない。デパート自体に入るとということが最近はない。やはり、車社会で、無料駐車場の広い郊外のショッピングセンターに行ってしまうのだ。

デパートを閉めるのは惜しいという話はできない。いつも利用している客ならともかく、何年も入ったことがない人間に云う権利はない。それより、店内に入ると、老朽化して、天井も古く、塗りが剥げがかったのを見ると、よくいままで営業してきたものだと感心する。何か懐かしい匂いがしてきた。

地下の食品売場を見ても、着る物、家庭日用品、ステイタスグッズ、何を見てもいまは欲しいものがない。消費欲求がなくなったのは、ただでさえ、現代はモノに囲まれて生活していたからだ。モノが溢れ、捨てている。家の中はひどいもので、タンスの引出しが閉まらない。衣類が溢れて、引出しからはみ出していた。押し入れの中も収納棚もこれすべてモノでぎっしりだ。お歳暮、お中元、引き出物、土産、そうした使わないものでも捨てるに捨てられない、人に上げて名前の書いてあるものなど、家全体が不要な未使用の品々で溢れかえっている。

それだから、別に買うものはないのだ。デパートはそんな時代に突入して苦戦している。それはこの老舗だけでなく、どこの大手も同じこと。食べてなくなるものは別として、なければなくてもいいものの、どれほど多いことか。モノ余りの時代の廃墟がこのデパートだった。

わたしは、婦人服を見ている家内をおいて、昔、四十七年前のことになるが、このデパートの屋上に通じる階段を落ちたことを思い出して、まだあるかどうか確かめたくなった。あれは、わたしが幼稚園のときだ。その頃は絵を得意としていたわたしは、薬局の子と一緒に画板に画用紙を挟んで、当時の子供らと同じく、下駄をはいて階段を駆け上がっていた。下駄で階段は危険だった。まして、子供のこと、夢中で駆け上がり、つい足を踏み外した。わたしは、一番の上から下まで転がり落ちたのである。一瞬、五歳のわたしは何か起こったのか判らずに、びっくりしたまま立ち上がっていた。友達が、わたしの顔を指さして、何か叫んでいた。生温かいものがたらたらと伝って落ちてきていた。それが血だと判ると、突然わたしは泣き叫んだ。それまで五秒く

らの間の抜けた時間があったろうか。

デパートの男の人が駆けつけてきて、わたしを抱きかかえると、デパートの隣にあった病院へと駆け込んだ。わたしは全身血まみれになっていた。額が裂けて、何針か縫ったというが、全く判らない。ただ、声がかすれるまで泣いた記憶がある。

いまでも、そのときの古い傷跡が額に残っている。階段恐怖症にも一時なったことがある。

記憶違いか、どうも屋上に行く階段は方角が別のような気がした。その閉店するデパートはずでに屋上は閉鎖していた。あの賑やかな動物や乗り物のあった屋上ではなく、使われなくなった平台やワゴンが積まれたり、商品の箱が積んであったりして、何か埃っぽい。

それでも、当時の思い出に繋がる何かがあるのではないかと、客も上がってこない屋上までの階段を上がっていった。すると、店内のBGMが、懐かしい歌を流し始めた。上を向いて歩こうがかかっていた。錆びて、長く開けたことのないような古いドアを開けた。そこには、紛れもない当時のままの遊園地が廃墟のままあったではないか。錆びて壊れた飛行機が、鉄塔から吊るされていたし、あざらしのいた大きな水槽もそのままだ。わたしは、時間が逆流するのを感じていた。そして、自分の手を見ると、だぶだぶのワイシャツに隠れていたが、随分と小さくなっているのだ。ズボンもだぶだぶで歩くことはできない。靴も同じだった。わたしは、みんな脱いで、自分の顔などを手で触ってみると、子供に戻っているではないか。

屋上から見る市内は低く、昔の町並が続いていた。遠く海に四本煙突の青函連絡船が、黒い煙を吹き上げて、海峡を渡って入港するところだった。

何が起こったのか、わたしは焦って、引き返した。画板を持った子供がひとりいてこっちを見ている。薬局の子だった。その子供が、あっと声をあげた。すると、わたしは足を踏み外し、階段を転げ落ちていた。

わたしは少しの間、気を失っていたようだ。気がつくときデパートの裏の病院のベッドの上になっていた。家内が心配そうに顔を覗きこんでいる。

「気がついた？ あなた、一体どうしちゃったのよ」

わたしは顔を確認するため手で撫でていた。髭を剃ったあとがある。手も大人の手だった。

「どうしたんだろう。夢でも見たのかな」

「夢だなんて、どうかしているわよ。屋上にあなたのシャツやズボン、靴なんかがあったそうよ。下着のまま階段から転げ落ちて頭を打ったから心配したわ。たいして怪我はなくてよかったけど」

まだわたしはぼおとしていたが、思い出したように家内に訊いた。

「屋上にな、昔のままの遊園地があったぞ」

「何を寝ぼけているんですか、屋上にはなんにもありませんでしたよ」

でも、わたしは確かに見た。あれは幻覚でもなんでもない。確かな置き去りにされた時間なのだ。

帰りがけ、わたしは病院の玄関から、デパートの崩れそうな外観を仰ぎ見た。そこだけは時間が止まってみえた。

第429話 入学式

四月の第一月曜日。着飾った親子が連れ添うように校門を潜っていた。学校の正門には入学式会場と大きな立て看板があり、天気も上々、花もそろそろ咲き始めていた。

親のほうがおどおどして緊張していた。却って子供のほうが堂々としていた。

「なんだか、照れるわね。心臓が高鳴るみたいよ」

本間美香のお母さんは落ち着かない様子。

「何云ってるの、たかだか入学式ぐらいで」と、美香は笑い飛ばす。

「そうかい、着物を着ている人なんかいないねえ。みんなフォーマルで、間違ったかしら」

お母さんは、昨日から何を着てゆこうかと、ファッションショーを繰り返して、ハレの日だからと、普段着たことのない色無地と羽織を出してきた。美容院にはおととい行っていた。入学式とは云ってもおめかしに時間と金がかかる。

「困ったお母さんね、わたしが付いていなければ何もできないんだから」

校門から前庭に入ると、風晴のお母さんが、息子と共に歩いているところだった。

「あら、風晴さん、あなたもここの学校だったの。知らない人ばかりでどうしようと不安だったけど、お仲間がいて嬉しいわ」

本間さんは趣味のサークルで一緒の風晴さんに声をかけた。

「本間さん、入学式なんか二十何年ぶりでしょう。緊張するわね」

「何云ってんだよ、おふくろ、しっかりしてくれよ。これだから大人は駄目なんだ」

息子の方が大人だった。

「ああ、よかった。本間さんに風晴の奥さん、一緒の学校でよかったですね。ついで学級も一緒ならなおいいが」

と、後ろから娘と一緒に来たのは大塚さんだった。

「よう、大塚、君んちはお父さんか、うちは母だ」

大塚さんの娘と風晴さんの息子は同級生だった。

ぞろぞろと正面玄関から入ってゆく。母親、父親だけの人もいるが、両親揃って来る家もあった。息子、娘たちは手に手にデジカメやビデオカメラを持って、看板や玄関前で親子で記念撮影をしている光景があちこちで見られた。親のほうに照れている。

学校に入るのも懐かしい親たちが、廊下をきよろきよろとの珍しそうに眺めながら歩いていた。受け付けで、胸にシルクの花を付けてもらう。それもまた嬉しいような恥ずかしいような。受け付けを済ませると、案内のあったクラス分けに則って、各学級に入った。椅子も机も懐かしい。黒板もまた思い出深い。あちこちで、「よう」「おまえと一緒にか」と、知り合い同士が声を掛け合う。子供の年の割に親の年はまちまちで、もう白髪のじいさんみたいなものもいるし、すっかり老婆のような母親もいた。お水系のど派手な化粧の母親もいれば、まだ学生ではないかと思う若いお父さんもいた。女の年齢も判らないが、最近は男の年齢も判らなくなってきた。着る

ものもいま流行で若い。息子と同じ服装を父親がしているから、まるで兄弟みたいな親子も珍しくなくなった。それほど、親が若返り、友達親子が増えた。その分、親としての権威も誇りもなく、子供から逃げる親が増え、親としての資質も問われるものが実に多い。子供から逃げるなどコマーシャルを流している通り、親の方に問題があるのが多いのだ。

教室では各々の名前を呼ばれた。中にはふてくさって、横を向いて、いい加減に「ふあい」と返事して、先生に叱られている人もいた。必ずしも、この学校に喜んで入学している人ばかりではないのだ。仕方なく来た人が多い。そればかりか、強制入学させられている人もいて、この学校の入学が義務づけられていた。まるで、少年鑑別所のように、ここでは教育は学問より生活態度、性格改造などが行われるのだ。社会的、家庭でも問題のあるものがここに集まっていた。

全員が顔見せが終わると、クラスごとに担任の先生に引率されて、そろそろと整列して、入学式会場の体育館に入場した。吹奏楽が演奏される中、拍手が式場に響きわたった。付き添いの娘、息子たちは、椅子に座って、心配そうにわが親の姿を目で探していた。

親たちが入場して、新入生の席に座ると、しーんとなった。開式の辞のあと、校長先生の挨拶があった。

「今日は、お父さん、お母さんたちの晴れやかな入学式です。みなさんは、親として未熟に育ちました。この親高校では、立派な親としての教育を徹底し、子供たちになめられない大人を養成することを目的にしております。弱い、無責任な親を強い親にして社会復帰させるよう：：」

第430話 奇妙な男たち

最近では年上の嫁をもらうのがトレンドとなっている。スポーツ界でも芸能界でもそうなら、周りを見てもひとつ年上の嫁は金の草鞋どころか、七つ上、一回り上はざら、中にはどうしても無理な設定の親子ほど年の違う年の差がある。テレビドラマもそんな愛の形をテーマにしているのが主婦に受けている。明らかに年増たちの願望だ。だが、いまは愛があれば年の差なんかという可能性が出てきた。

男たちは実に弱くなった。姉さん女房もいいが、それに隠れるだらしなさ。女はいつの時代も強い。それに比べて男は威勢の衣を借りただけの、弱きもの汝の名は男であった。

わたしは世の中が屈折してくると、変態が増えるという社会学の論文を出すために、助教授と二人で街角ウォッチングにでかけた。社会は現代の病気を写すカルテだった。それをフィールドワークで観察する。統計をとる。今和次郎が提唱したモデルロジーが、いまは社会病理のサンプル採集にも役立っている。

もっとも人の集まる渋谷の道玄坂で、助教授と待ち構えていると、奇態な連中がやってくる。ここは、平日でも夜中でもいつも若い人たちでひしめきあっている。

最初に来たのは、異常に胸が膨らんだ女だった。巨乳と呼ぶにはあまりにも出ている。何か大

きな物体を隠しているようでもあった。

「助教授、あれはなんというファッションなんですかね」

見ると、三十くらいの大柄の女が鳩胸のように胸をせりだして苦しそうに歩いている。さっそく助手のわたしがインタビューしてみた。

「あのう、すみません。失礼ですが、あなたの胸は何か隠しているんですか」

女は嫌だというふうに笑うと、

「これはわたしの彼よ」と、云うのだ。

なんと、小柄な男といっても小さすぎるが、いつも赤ん坊のように乳房にくらいついている彼氏が巨大なブラジャーの中に暮らしているというのだ。わたしは絶句した。それは、巨乳の雑誌なんか見ると、その大きな胸の谷間に埋もれて窒息してみたいとか、抱かれて眠りたいとか、そんな男の願望は判るとしても、そこで生活しようとはまでは考えたことはない。赤ん坊になれば、男は外に出なくてもいい。ひきこもる大人もいるが、女に養育される身でいられることは幸せだった。ヒモがさらに亢進した形として、われわれはその寄生を記録した。

次にやってきたのは、三十代校半の人妻風だが、ロングスカートから足が四本出ている。そして、こっちは出尻なのだが、異常に膨らんだスカートが、中世のスカートを思わせた。早速、インタビューしてみた。

「あのう、あなたのスカートの中ですが、何かもう一人人間がいるようなんですが：」

女は恥ずかしそうに俯くと、

「これ、わたしのハズですの」

と小声で云った。別に周りを気にしなくとも、明らかにおかしいのだから、隠し立ては必要ないのだが。

「ということは、スカートの中には旦那さんが入っていらっしゃる」

信じられないくらい小さな旦那だった。小人か幼児が隠れて、一緒に歩いているようだ。

「うちの人はとてもシャイなんで、人前に出たがらないんです」

そうして、いつも、どこに行くにしても、女のスカートの中に隠れている亭主。まあ、お尻に齧りつきながら歩くというのもオツなものだと思うが、それも男の願望だろうか。女のスカートの中ほど男にとって魅力的で神秘的なところはない。隠している部分ほど覗いてみたいというのは、なにもスケベな男だけではなく、ごく普通の感情なのだ。そこに住んでしまうというのは、それは思い切った人生の転換だった。

「ちょっとだけ、旦那さんの顔を拝見したいんですが」

すると、小さな足がバタバタとごねるように地を踏んだ。

「と、おっしゃってますから、お断りします。足から上はプライベートルームですから」

女がまた二人三脚のように歩き辛そうに小股で歩いていった。いつから女のスカートが家になったのか。テントだと思うとそんな感じもするが。

今度は、向こうから歩いてくる二十代の妊婦も何かおかしい。蟹股で歩いてくるのだが、苦しうだった。臨月なのか、お腹がかなりせりだしている。マタニティドレスを着てはいるが、雰囲気妊婦らしくない。化粧でごまかしてはいるが、妊婦というのは眉毛が薄くなったり、どこか判るものなのだ。それが、はつらつとした顔をしているから、どうも妊婦ではないような。そ

こで、早速、調査をしてみることにした。

「失礼ですが、赤ちゃんの予定日はいつですか」

若い女は羞恥みながら、云った。

「ここだけの話ですが、これは赤ちゃんではないんです。わたしのフィアンセなんです」

それも驚きの現象だった。とうとう、女の子宮で暮らし始めた男が出現した。話を聞くと、結婚の条件が子宮で生活するというものだった。カンガルーじゃないんだからと笑うと、婚約者はひどく気の弱い非社会的な人なので、世間の風に当たるだけで人格障害を起こすというのだ。そんなひ弱な男が増えたとはいいいながら、考えてみると、男の理想、究極の生活は、女の子宮で暮らすことではないか。外敵から身を守ってくれる母性本能に包まれて、母と同じ鼓動の癒しの音を聞きながら、原始に還ったような記憶のはじめに棲むというのは最高だろう。

ただ、いつも逆さにして、入口から顔をたまに出して、食べ物をもらう様子を想像して、その男は他に何の楽しみを人生に見出すのだろうかという疑問が湧いてきた。

「助教授」と、わたしが振り返ったとき、助教授の姿はなかった。

「ここだ、ここだよ」と、声のする方角を見ると、助教授は通りすがりの外人の女の頭の上にちょこなんと座って、手を振っているではないか。

「わしは、ここで当分生活してみようと思う。何事も体験だよ。カラスの子になったようで、このブロンドの巣の上の生活は、見晴らしもよく、女の髪に包まれて眠るというのも悪くないね」

わたしも、助教授に見習って、女の陰に隠れて生活してみたくなった。どれ、わたしをかくまってくれる女はいないものか。わたしは、ナンパということをしてみようと手当たり次第に声をかけた。

第431話 結婚記念日

息子がこの六月に挙式する。そのことで、ホテルから係の女性がわたしの店まで打ち合わせにきた。

「前にも電話でお話した通り、打ち合わせは若い人たちで決めるよう話しておりますから、電話やメールで確認してください。来月またこちらに来るそうですから、詳しいことはそのときにも。とにかく、息子の結婚式には親は口を出しません。どうせ仲人も立てないことですし」

わたしは、一方的にまくしたてた。家と家との結婚でもない。まして、親が結婚するわけでもない。本人たちの自由にさせてやろうと思った。

わたしは、そのホテルの係の名刺を見て、

「ああ、ホテルAさんですか、わたしもそこで挙式したんです。そうそう、そう云えば、四月八日、今日でしたよ」

もう、忘れるくらい思いもしなかった日付が甦ってきた。すると、係の女性はすかさず、「それは、おめでとうございます。今日で何周年なんですか」「ええ？」

しばらくの間の抜けた時間があった。わたしは、そんなことをいままで考えたこともなかった。先妻とは、もう十四年前に離婚していた。係の女性は、わたしの答を待っていた。さあ、何年なんですか。ちょうどいい節目であれば、息子の披露宴で司会が一言言い添えるネタにでもしようと思っていたのか。答えに窮した。死んだ子どもの年を数えるのと同じくらい虚しいのは、別れた妻との結婚記念日を、もし、いまも連れ添っていれば何年だと数えるばかりさ。そのカウンターは別れた日で止まったのだ。

そのうち、ひと回り以上も下の若い後妻を見て、不思議がるといけないから、「もうとっくに別れて再婚したんです」と、正直に話した。すると、女性は急に悪いことを聞いたと、そこは営業、うまいもので、話をすりかえた。

そして、わたしの中には新しい結婚時計がちくたくと秒を刻んでいた。いま七年目を刻んでいた。結婚時計というものは、普段は全く意識しないものだ。ネジを巻くこともない、決して正確ではない。たまに遅れたり、忘れたりするくらいだ。それが、一年に一回何年目を報せる、一緒になった年の数だけゴーンゴーンと鳴る。英語ではgone、goneと過ぎ去る数だけ鳴るのだ。

結婚記念日がふたつあるのだが、すでに失効したのは別にして、有効な記念日は大事にしたい。わたしは、毎年、いまの女房と入籍した五月十六日を二人の特別な日にしていた。互いにバツイチで子連れのリ婚だったから、結婚式は挙げなかった。入籍した日を結婚記念日としていたから、何か思い出がない。

その日、わたしは女房を突然町に出てくるよう、呼び出した。仕事を終えてから、一旦家に戻り、御飯仕度してから、女房は待ち合わせのレストランにやってきた。日頃、あまりこんなレストランなんか連れてこないから、女房は普段着だった。

「何よ、こんな雰囲気のお店なら、ちゃんと云ってくれたらよかったのに、それなりの恰好してきたのよ。まるで場違いじゃないの」と、入ってくるなり女房は怒っていた。恥ずかしい思いをしたようで、きょろきょろと周囲を見まわしていた。幸い、客は少ない。

「たまに、食事を奢るといふから、焼き鳥屋かせいぜいもんじゃ焼きだと思っていた。レストランときたから、それでもよくてファミレスと思っていたのに、なによ、ここは、高級じゃないの」

そういえば、女房はあまりこんなところに連れてきたりはしない。どちらかという、和食好みで、大衆向けが好きだったから、こうした気取った店には連れてきたことはなかった。

「さあ、何を食べようか、何でも好きなものを頼んでいいよ」

「大きく出たな、さては宝くじでも当たったかな。どれどれ」

と、女房はメニューを眺めていた。フランス語ばかりで、内容はちんぷんかんぷんだった。そして、女房の目は値段に釘付けにされていた。わなわなと震えている。そのうち、ぱたりとメニューを閉じると、いきなり立ちあがった。

「あんた、出ましょう。ここ、高いわ」

「まあ、坐れよ、たまに贅沢したってバチは当たらないさ。普段から二人で共稼ぎして頑張っているんだから。ここはおれに任せろよ」

ウェイターが来て、わたしは下を俯く女房を気にしながら、前菜と、アラカルトをいくつか注文した。ボジョレーの栓を抜いて、ウェイターはわたしのテーブルに置いた。そして、わたしのグラスに注いだ。ワインの味を確認する。女房はメニューの中のワインリストにあった値段が六千円とあったのを見て、大声を出した。

「あんた、何考えているの。六千円もあれば、子供たちにペットボトルのジュースを何本買ってやれると思うの」

他の客がちらちらと見て笑っている。

オードブルがきた。それも値段を見て、びっくりして文句を云った。

「何よ、ばかにしている。こんなちょぼちょぼの盛り付けで四千円だって。あんた、この一皿で、納豆三個入がいくつ買えると思うの。木綿豆腐なら四十丁以上買えるのよ」

わたしは恥ずかしさのあまり、女房の口を押さえたかった。メインデッシュの鴨のオレンジソース煮が出てきたときは、佃煮が、たくあんがと云い出しかねない。案の定、女房のやつ、また比較をやりだした。

「あんた、この一皿で、わたしたち家族の二日分の食費だよ。毎日、スーパーに行って、しかも夜遅く行って、売場の人半額シールを貼って歩くのを後ろから付いて歩くわたしの気持ち判っているの？ 家計を浮かせるために一円でも安いものと、毎日ケチケチして生活を切り詰めているというのに、こんな贅沢してバチが当たるわ」

女房は怒り出した。二日分の食費を五分足らずで食べることに罪悪感を感じないのかと、わたしを詰るのだ。

「いいじゃないか、今日は何の日か知っているのか」

女房はまるでクイズのように考えていた。

「天皇誕生日」「ムービーケイタイの発売日」「ガクトの誕生日」「キンロウカンシャの日」なんという無知、ひとつも当たらない。今度はこっちが怒りだした。

「おれたちにとって一番大事な日だよ」

「判った。あんた、この前の貸した金、返す日でしょう。利息もつけてよ」

「そんなんじゃない。今日はおれたちの結婚記念日なんだ。どうだ、判ったか」

今度はわたしが大声を出した。すると、女房はしばらく考えていたが、

「それがどうしたのさ」ときた。「そんなのどうでもいいの。それよりとっとと食べよ。食い終わったら、こんな落ち着かないところ、早く出ようよ。さあ、明日から粗食だぞ。今日の分を食費で減らすからな」

わたしはがっかりした。ムードも何も無い。砂糖とパンの残ったのをナフキンでくるんで明日の朝食にしようとしている女房を見て、やはり焼き鳥屋にしておけばよかったと後悔していた。

目がだんだんと悪くなってきたのは中学三年からだ。教室の後ろの席では黒板の文字が見えなくなっていた。眼鏡をかけるというのはかなりの抵抗があった。眼鏡をかけている人を体の不自由な人と同列に見ていた。自分はその中には入りたくはない。

子供のうちは周りに近眼の子は少なく、珍しかった。いまでこそ小さい子が眼鏡をかけているのは珍しくないが、今の方がゲームやテレビの影響で目が悪くなっているに違いない。

それで、わたしは、クラスでただ一人、眼鏡をかけている友人の古い眼鏡のレンズだけを貰った。それを西洋の貴族のように片目にはめて授業を受けていた。

高校に入ると、視力がないということは致命的で、どうしても眼鏡を作らねばならなくなった。姉妹、両親共に眼鏡をかけているので、遺伝体質なのだろう。その頃になると、逆に眼鏡をかけること自体が何か弱者のようで、ハンディを持つことに密かなナルシズムにも似た感傷が漂い、わたしはついに眼鏡をかけるようになった。爾来四十年近く、ずっと眼鏡をかけている。若いときは、一時コンタクトにしたが、何度も落としたこともあり、埃が入ると痛くてたまらないので、そのうちに眼鏡に戻った。

別に眼鏡に凝るわけではないのだが、眼鏡は三つ持っていた。仕事で一日のうち九時間はびしりとパソコンを打つので、仕事用の中距離用眼鏡と、老眼の入った、読書用、そして車の運転用の強い眼鏡と、使い分ける。遠近両用は何か年よりくさくて、敬遠しがちだった。

それは、ある日、突発的に起こった。眼鏡が三つ入った鞆が車上荒らしによって盗まれたのだ。幸い財布や通帳、貴重品は身につけていたから、盗難にあったのは眼鏡ぐらいのものだった。眼鏡をその日に限ってはずして、わたしは銀行にでかけた。眼が疲れるのではずすことはある。被害が少なかったので、盗難届は警察には出さなかった。どうせ、安物の眼鏡だったからだ。

ただ、困るのは仕事ができないこと、車を運転するのが危ないことだった。世の中がぼんやりと見える。眼鏡を作りゆこうと思っていたが、すぐにはできないだろう。一日二日は不便だが、我慢しようということになった。左右とも〇・〇一だから、視力検査では一番上の大きな文字が見えない。

眼鏡がないと、家の中ではいつも騒いだ。それは、朝と決まっていた。家人にはいつも「置く場所を決めておいたら」と、云われるのだが、ひょいとはずして、その辺に置いた眼鏡を忘れて、別のことをする。それがとんでもない場所だったら、なかなか見つからない。どこかのじいさんのように、いつも「眼鏡、眼鏡」と、探し回るのだ。なければ困るもの、もう、体の一部になってしまったものだ。それが、ある日突然になくなる。それは新鮮な感覚だった。テレビも見えない。毎日、戦争や汚職や悲惨な事件のニュースか、くだらない娯楽番組ばかりだったから、テレビも見る気力がなくなったときだ。これはちょうどいい機会だと、わたしはテレビを見るのをやめた。世の中は見ることも大事だが、見ないことも大事なときがある。

わたしは神経質なほうで、わりと人の顔色を窺うほうだった。来客があっても、友人でも、いま、どんな感情を持っているかと咄嗟に読んでしまい、それに合わせて対応するといった疲れることをしていた。それが、相手の顔がぼんやりとしか見えないので、気にかからない。人間関

係のストレスが一番多い社会だ。せめて、人の顔や視線も気にしないくらいがちょうどよい。そのために眼鏡がないというのはいいことだった。

街を歩いても、ゴミや薄汚いところが眼につかないから、それも不快な思いもしなくてすむ。チンピラのような人間も、売り店の張り紙も、車の渋滞も、宝くじ売場に並ぶ人の群れも、橋のたもとで泣く女の顔も、交通事故の現場も、ミニスカートのように制服を改造した厚化粧の女子高校生の集団も、みんなみんな見えない。わたしは、見えないことの快適さを堪能していた。これはいいものだ。

チラシやステッカー、のぼりや垂れ幕、看板もうるさく、いろんな勧誘がある。売りこみ、バーゲン、いかさま商法、風俗、闇金、援助交際、いろんな情報が飛び交っている街は、グロテスクな生き物に変貌していた。ときには情報を断絶してみることも必要だ。

わたしの属する文学の会に顔を出した。二ヶ月に一度、各々の作品を発表して、それについての合評会が行われる。女性が半分近くいる。小説を書く人、俳句、詩、エッセイと多様な顔ぶれが集い、酒を飲みながら文学談義に花を咲かせる。

「あら、喜多村さん、久しぶりですね。眼鏡はどうされたんですか」と、お酌しにきた仲間の女性の顔がぼんやりと見える。顔の皺がない。夜目遠目傘のうち、その夜は女性が何か美しく見えた。

第433話 デジタルな生活

最後のアナログ人間の壬生は、ついにデジタルに転換せざるをえなかった。

壬生は戯曲を書いて細々と生活していたが、たまに賞金目当てで別のペンネームで新人賞に応募していた。その応募規定もついに原稿用紙を受け付けなくなっていた。壬生は、せっかく自分専用の名前入りの原稿用紙を作ってもらったばかりなのだが、それも無駄になりそうだった。出版社でも、経費節減とスピードアップのために、入稿はCDかフロッピーディスクでなければいけないということになった。いままで、頑固に手書き原稿で行ったのが、ここにきて拒否されたのだ。この前の懸賞ドラマには全国から三百近い応募があったが、手書き原稿は壬生ただひとりであった。それだからこそ、年配の審査員には好意的に迎えられ、目立つこととなり、一席に選ばれた。

ただ、次第に時代が変わり、周囲がすべてデジタルの世代になってくると、最早いつまでもアナログに固執するわけにはゆかない。そこで、すでにデジタルにどっぷりと漬かっている友人の北村に相談に行った。

「どんなものかな。いまさら屈服するのも癪だが、とうとう門戸が閉じられてしまったからには、おれも観念してパソコンをやろうと思うが」

五十過ぎて、古風な壬生にとって、横文字が苦手どころか、メカにも弱く、論理的な構成が肌に合わないときている。

「そうさなあ、この街でもとうとうおまえ一人になったらしいが、政府は何をしているんだ。絶滅寸前のアナログ人間を種の保存の建前から、どうして隔離しないんだ」

「おいおい、おれはトキじゃないんだ。それに、アナログの女性を与えられ、子作りに励んでもいいが、生まれた子供はアナログとは限らない。あれは遺伝しないんだろう」

世間に負けた壬生を北村は責める気にはならないが、何とか壬生ひとりでも残ってもらいたかった。

「なんとか、頑張っ、アナログで留まれないものか、人間国宝とか重要文化財とかに指定して、壬生だけでも汚染されないようにしたいものだが。それよりも、博物館に依頼して永久保存してもらおうとか」

「おれは剥製じゃないんだから」

ということで、北村の使い古しのパソコンを壬生は貰って帰った。簡単な操作のテキストも借りてきて、壬生は家で読んでいた。回りくどいドストエフスキーやムジールなどの難解な小説はすらすらと読めるくせに、「ネコでも判るパソコン」という本を借りて開いたら、いろんなわけのわからない専門用語の羅列で、ここは日本ではないのかと思ったくらいだ。壬生は、嘆いて奥さんに云った。

「おれは、ネコ以下なのか」

奥さんは笑って、

「だったら、図書館で《ネズミでも判るパソコン》という本を借りてきませんか」

「そうか、とうとうおれもネズミまで落ちたか」

壬生は始めは恐る恐る一本指でキーボードを叩いていたが、だんだんと三本が五本と、そのうち間に合わないで足の指まで借りるようになりまてなつた。やりはじめるめと面白い。これは便利だ。すごい。と、誰でも一度は嵌る文明の利器への驚愕から尊敬、崇拜へと変わってくる。それはデジタル信仰とでも云うべき、一種の宗教なのだ。

壬生はいつかペンを持つのをやめていた。気がつけば、日記も戯曲もエッセイもすべてファイルで保存していた。あれほど三十年の長きに渡って書き溜めた原稿用紙やノートが箱で六個もあった。それが、デジタル生活に入ってから、三十年分でもたった一枚のCD-ROMに収まってしまふということが判つた。しかも、それは永久保存されデータが劣化しない。すぐに版下まで作成でき、本にすることも早い。編集、校正が楽だ。自分の日記で、なにかの事実を思い出そうとしたら、言葉で検索すると、何月何日とすぐにその日付まで飛ぶことができる。実に便利、たいしたものだ。まさにパソコン大明神様。

ところが、作家としての壬生は、慣れてきたところで、パソコンと喧嘩をすることになった。

壬生が「見れる」と打つと、ご親切にも、「それはら抜き言葉です」と、赤字で修正文字が入る。「いくらでも、いくらでも」と打つと、コンピュータが自動的に内容を把握して、おせっかいにも「それは、繰り返し言葉が入っております」とくる。「仰言る」という昔は云い慣らされた書き方が出てこない。「視る」と打ちたいのに、それが一発で出てこない。いちいち辞書機能からひっぱりか、視力と打って、力を消すというような面倒なやりかたをしていた。

「おれは、この文字が使いたいんだ」と、とうとう、壬生は爆発して、パソコンを叩いた。短気で癩癩持ちの壬生は、その一撃でパソコンを壊してしまった。パソコンは万人向けに作られているから、汎用文字だけが使用される。作家のこだわりまで計算に入れて作るわけがない。森鷗外も里見とんもその一字が出てこない。外字で作るよりない。

定型文書を強要する機械には、どうしてもついてゆけない。仕方なく、壬生はまた黙々と原稿用紙にぶっといモンブランの万年筆を持って、カリカリと書いていた。ここでは、自分の意思だけがある。誰に監視され、注意され、書きなおされることもない。原稿用紙の世界には言論の自由がある。デジタルな生活はあえなく終わっていた。

第434話 獲物

肉食動物が、獲物を狙うにはある程度の距離がある。その距離というのは、獲物を捕獲するための長年の英知から生まれた、自然と計算された間合いなのだ。当然、風下に限る。匂いというものが、どんな動物もかなり高い能力で嗅覚というレーダーを持っているのだ。

元子もその独特な嗅覚が人より特化していた。どこに獲物があるのか、視力もさることながら

、匂いで感ずるのだ。長年の主婦感覚というものは、どこかで研ぎ澄まされる。それは、とりわけ買い物という生き残るための戦争において顕著となる。スーパーもデパートも主婦にとっては戦場だった。一円でも安いものを、先着何名様に何何を破格値で、タイムサービスは、何時からどこの売場で何を売るのか。そういった情報をまるで、競馬新聞を赤鉛筆で、チェックするように、まめに比較検討するのだ。

金曜日にはセールの特売品が各店一斉に新聞に折り込まれる。それを元子は鉄で切り取り、自転車で行ける近くの店だけを三店選んで、そこを何度も往復する戦略を練っていた。うまくゆけば、今月の食費を二割削減できるかもしれない。すべて目玉商品だけで、あとはどんなついで買いも、誘惑にも負けないこと。そのためには、売場に貼られた「広告の品」の下げピラまでまっしぐら。脇目もふらずに、どどどと、先着の数量限定コーナーを周り、どどどと、レジに直行する。

だが、この日はそれだけでは終わらなかった。まだ、やるべきことがあった。それが、元子の今日の獲物だった。ただ、その獲物に近づくには、品位というものもある。羞恥心をかなぐり捨てて、その場所に行くというのも、何かすでに女を捨てている年齢だとはいっても、どんな素敵な独身男性が見ているか判らない。元子はぎりぎり、おぼさんの厚顔無恥の領域に入る三十五歳だった。四十、五十になってしまえば、もうどうでもいい。ジャージで買い物しても平気だが、まだ、元子はちゃんと化粧して買い物に出る。テレビドラマのようなジャニーズ系の青年と、どんな巡り合いがあるか判らない。常に周囲を意識しているぎりぎりなのだ。

でも、それだけは欲望を抑えることはできない。第一次欲求というものは、人間の生存に最低必要な欲望だから、それをセーブすることはできない。動物的本能の命ずるままに、元子は獲物へと近づいていった。ただ、真っ直ぐに、その獲物へと近づくと見え見えで、下品になる。そこをスマートにやりこなすには、長年のキャリアがいるのだ。まず、仕草が大事になる。決して、もの欲しそうな顔をしないことだ。無意識を装い、さりげない様子で、しかも獲物をゲットするときは実に素早く確実に、そのスピード感が、やはり猛獣にも通ずるものがある。

その獲物には関心がないのだと、周りにアピールするためにやり過ごすことも策略の大事な演技だった。その日の元子は、獲物に近づくに、近くの冷蔵オープンケースの中に並べられている。パックされたハマチや鮭の切り身をわざと手に取ってみたりしていた。目は絶対に獲物を見てはならない。あくまでも無関心を装うのだ。少しずつ、足をすり足で横に進ませながら、獲物へと確実に接近している。まだ、同じことを考えている敵は現れていない。敵と獲物の奪い合いということはないにしても、同時にタッチすることは、実に卑しい感じがする。だが、やりやすいのは、敵が一人でも二人でも獲物を手にした後だった。人間の心理というのは不思議なもので、誰も手にしていないものに手をつけないといった群集心理が働く。たとえば、どっさりと売れ残っている商品は、敬遠するのだ。そして、あと少しで売りきれものには殺到する。その人気もさることながら、心理操作されている場合がかなりあるということを客たちは知らない。切らす、なくなる、ということで購買意欲を煽るのだ。

元子は、じりじりと獲物に向かって接近していた。獲物との距離はわずか一メートルになった。買い物カゴの中には特価品だけがあるばかり。元子のケチは徹底していて、夕食に刺身が乗るといことは、正月ぐらいのものだ。その刺身コーナーに入った。獲物まであと五十センチ。も

う手を伸ばせば届くところにあるが、そこをぐっと我慢する。それでも、興味のないといった顔は崩さない。それは、男に対してもそうだ。あんたには興味がないのよ、といった顔をしていると、プライドの高い美男に限って、逆に好奇心を向けてくるといった、そんな戦術に似ていた。

いよいよ元子の決行のときがやってきた。それでも絶対にきよろきよろしてはならない。余裕のある雰囲気大事だ。さあ、元子の手が伸びてきた。獲物を爪楊枝で刺した。そして、マグロの刺身を三切れくらい通すと、素早く口に入れた。刺身なんか、試食販売でなければ口に入らない。朝一番だから、まだ新鮮でおいしい。なんという幸せ。

だが、元子の戦いはそれで終わりではない。冷蔵オープン平台の周りを何気なく一周してくる。ぐるぐると同じところを回っていれば怪しまれるから、近くの販売棚も覗く振りもしなければならぬ。試食を何度も食べるためには、こうした涙ぐましい苦労があるのだ。メロンもある、ビールもある、漬物、ナッツ、干物、佃煮。あちこちへ寄るだけで、昼飯を浮かすことができる。一日のうちで、この時間が元子にとって、至上のときだった。

元子はいよいよ、試食の最終地点のお惣菜コーナーへとさしかかる。そこにはなんとエビフライがあるではないか。滅多にそんな高級品を試食に出すことはない。しかも、今日のものは冷凍の貧弱なものではない。ブラックタイガーだろうが、身も大きく、揚げたてだからまだ熱い感じがする。ただ、誰かが先に試食したようで、どろりとしたエビフライがあった。きっとそれは中華風に何かあんかけしたものだろうと、少し焦げたような黒いものがついた大きなエビフライを素早く口に入れた。その間、〇コンマー秒の早業だ。目にも止まらぬ早さは、試食に熟練したものでなくてはかなわない。すると、近くにいた子供連れの奥さんが叫んだ。

「あっ、食べた」

元子はドキリとした。試食を食べたことが人にみつかっただけでなく、大声で指摘されたのだ。その奥さんは驚いて、元子のところに近づいてきて云った。

「ごめんなさいね、いま、あなたの食べたものね、この子が口から出して、床に落ちたのをふんづけて、それをまた、この子ったら試食の皿に戻したの」

元子はぬるりとした口の中の感触にぞっとした。涙を垂れた男の子がにたりと笑っていた。

第435話 無期懲役

町工場がひしめきあっている下町に、タオルを製造販売しているハルカ・コーポレーションはあった。金澤社長は、項垂れてその日も早めに出社していた。年とってくると、どうしても早起きになる。家にいても落ち着かないから、仕事はないのだが、なんとなく会社にならなくてはならないと、それで、ともかくも社長室の椅子に座っていれば、それで少しは気分が落ち着くのだった。

事務員たちが出社してくる。裏の工場では製造員たちが、全員、駐車場に集まって、元気のな

体操をしていた。以前は全社員で、社長が先頭に立って掛け声も大きく体操をしたものだが、いまは、声もない。

事務所の電話も鳴らない。たまに掛かってくると、原料問屋か銀行だ。一か月から現金取引にさせてくれませんか。うちも楽ではないんです。いままでの七夕手形はそのままでもいいですが、ちゃんと落ちるのでしょうか。

取引先は完全に疑っていた。七夕手形とは、支払いサイトが一年ということだ。振り出した手形が一年後に決済される。誰もそんな保証のないものは受け取らない。一年後に会社がないかもしれない。明日が判らないほど、この辺りの工場も次々と閉鎖していた。下町は火の消えたようになっていた。

後は、受注の電話もない。みんな、何も云わないから、静かな事務所だった。工場では機械の回る音はするが、それも午前中だけ、午後はする仕事もないから、機械を磨いたり、外を掃除したり、人も機械も遊んでいた。稼働率が半分以下に落ちた。毎日、確実に経費だけは出てゆく。みんな、経費節減のために、電燈を消して、事務所も薄暗い。暗い会社がますます暗くなる。誰も何も無駄話もしないし、笑うことなどない。社長も書類を出したり仕舞ったりしているばかり。

こうなるのはずっと前から判っていた。生産が間に合わないくらい売れていた時期に、東南アジアの各国に機械を輸出して、技術指導をして、向こうから職人たちが、この下町に研修のために集まった。そして、中堅メーカーは、現地法人まで作り、安い人件費で思いがけない価格で輸入できた。

ところが、次第に海外の工場も力をつけてくると、工場との契約を切らして、直接取引をするものが現れた。輸入業者たちが、低価格の商品をどしどしと市場に供給することになった。それはタオルだけでなく、下町のサンダル工場も、スニーカーの製造メーカーも、傘を作る会社も、ベルト、靴下のメーカーも軒並み受注が減り、深刻な不況のなかに抜け出せないスパイラルという螺旋状の地獄へとくるくと落ちてゆくこととなった。

金澤社長は、前田専務と二人で、メインバンクへと向かっていた。月末の返済どころか利息も払えない状況で、なんとか支払い猶予の相談に行ったのだ。

「ということで、いま、タオル生地を使った、Tシャツをユニシロの商品企画部に持ち込んで、全国五百箇所でする企画を立てていまして、それが二ヶ月のちの量販期に間に合えば、確実に売上は倍増、支払いはまとめて払えますが」

前田専務が銀行の支店長に新商品の説明までして、汗だくで唾まで飛ばしていた。それを支店長は手で払いのけながら、

「そんな、決まってもいない話をしてもらっても仕方がないでしょう。おたくに貸付したのは手形貸付ですよ。取引先の手形は決済して、どうして銀行の手形は落とせないんです。同じではありませんか。それをまたジャンプしてくれという相談ですか。困りましたな」

金澤社長はもうすっかり疲れきっていた。この資金繰りの辛さから早く解放されたかった。「では、不渡りを出すしかありません」

支店長は青くなって叫んだ。

「なんということを云っているんです。判りました。今月だけです。来月からはちゃんと頼みますよ」

銀行としても、三百万くらいで、三億もの貸付金が焦げつくのは困る。またずるずるとこうした関係が続いてゆくのか。支店長はあっちを見てもこっちを見ても同じような暗い顔が伝染していた。いまや、この町の九割が赤字で、どこも苦しい。銀行も不良債権ばかりで大変だ。

金澤社長は、内心がっかりしていた。本当ならモラトリアムに応じたのだから喜ぶべきところだが、本心は、誰かに首を締めて楽にしてもらいたいと思っていた。安楽死が一番いい。だが、会社が破産するときは、かなりの痛みを伴うのだ。従業員の家族や、自分の家族、保証人の顔、零細な取引先の社長の顔を思い浮かべると、とても酷でなかなかできない。それでは、いままでのように、同じことの繰り返しで、地獄で受けるタンタロスの苦しみを永劫受け続けなければならないのか。会社を潰すのは簡単だった。手形を落とさなければいいのだ。ぎりぎりの線で毎日がハラハラドキドキの繰り返し。寿命は縮んで、明日にでも死ぬかもしれない。精神的にもよくない。資金繰りで走り回っている自転車操業も、もういい加減やめたくなった。

あまり期待はしていなかったが、ユニシロからは、新企画を断ってきた。ユニシロは同じような内容で、中国のメーカーに作らせた。国産メーカーは縫製はしっかりしているが、工賃が高い。ユニシロはすべてそうやって海外に作らせていた。

頼みの綱の大きな商談が壊れてから、金澤社長は月末を乗りきれないと判断、ハルカ・コーポレーションを整理することに意思決定した。その報告をメインバンクにしに行った。銀行の支店長は、社長の話を聞くと、顔を真っ赤にして怒った。

「なんですと、破産するとな。とんでもない、そんなことはさせるか。お宅とうちはもはや一蓮托生だ。とことんつきあってもらいますぞ。いいですか。破産は絶対にさせません。資金は出しましょう。いいですか。余計なことは考えないことです。借金は死ぬまで払えばいいんです。まだ、時間は十分ありますぞ」

死ぬまで払ってもらいます。倒産したくとも銀行が倒産させてくれない。社長は、すっかりとしよげて帰った。この苦しみは終わることはない。これから先も、資金繰りで頭を悩ませ、取引先に頭を下げ、従業員の給与もなんとかしなくてはならない。気が狂いそうな毎日が、蛇の生殺しのように延々と続くのだ。

手形決済の月末に、また銀行から電話だ。サラ金のように怒鳴る。銀行もひと皮剥けば、ただの金貸しだ。

「またですか、手形貸付を差し替えますから、来月末でまた差し入れてくださいよ。全く、少しは経営改善の努力をしてください。いいですか。妙なことは考えないでくださいよ。」

まるで、麻薬だった。銀行も会社もどっちもやめられない。どっちが先に暈れるかだ。それは、終わりのない試合だった。いつまでもゴングが鳴らない。リングで叩かれ殴られ血を吐き出して、ふらふらになっても倒れない。すでに十ラウンドは過ぎていた。

金澤社長は、裁判所に行く決意をした。前田専務を呼んで、タオルを持ってくるように内線電話をしていた。何事が始まるのかと、前田専務が神妙な顔つきで、社長室にやってきた。

「前田くん、長い間ありがとう。わたしは、これから弁護士のところに行ってくる。君は、このタオルを銀行に持って行って、投げつけてこい。試合は終わりだ」

第436話 行商人たち

昭和三十年代。いろんな新商品が開発され、巷に科学的と云われる不思議な商品が話題になっていた。そうした、目新しい商品を売りにくるのは、いまのようなマスメディアが発達していないから、行商が町や村を歩いて売りにきていた。

わたしが子供のときは、よく町の辻に人だかりができていて、なんだろうと覗きに行ってみると、それが決まって大道で商品説明を面白可笑しく口上を述べて売りこむフーテンの寅さんのような怪しい路上セールスマンがいたものだ。

「さあさ、ぼく、この帳面にこの摩訶不思議なマジックインキで書いてごらん」

わたしは幼稚園だったか、その太い変な形のマジックというもので、「アトム」と。カタカナで書いてみた。

「さあ、次にそこのお嬢ちゃん、この消しゴムで消してごらん」

やはり町内の同じ幼稚園に行っている子が帳面に書かれた文字を一生懸命に消そうとしたが、消えない。次におじさんは、そのハテナのついたマジックで白い手ぬぐいにわたしの名前を書いた。

「さあ、この手ぬぐいの文字を石鹸で洗って消してもらいましょう」

と、用意していた洗面器の水でやはり町内のおばさんに洗い落としてもらっていたが、名前は落とせなかった。

「あらあら、不思議。消しゴムでも消えない、洗濯しても落ちない、これぞマジックインキの威力です」

すると、商店の親父が一本買った。わたしも、おれもと、マジックインキは次々に売れていた。

中にはサクラを使い、身内が先に買うというのがあった。それは、周りにバレていて、特に、一等いくらのかじ付というのは、見たことのない子供がひょっこりと現れて、いきなりくじを引くと一発で一等の大きな玩具の箱を貰って、またどこかへ走り去ってゆく。それは、きっとあのおじさんの子供なんだ。隣町でも同じ子供を見たと、大人同士、ひそひそと話していて笑っているのをわたしは子供ながらに覚えていた。不思議にはイカサマもあるということ。

泣き売というのもあった。よく使う手は、死ぬの生きるのと騒ぐやつ、それを慰め、人助けのために買ってやろうじゃないかと、美談にしたてて同情する野次馬にインチキ商品売りつける。泣いて売るのも、もらい泣きして買う振りをするのもグルである。

チー公というのもあった。大きな鞆に背広なんか入れて歩き、若い男など呼び止める。

「お兄さん、この背広買っておくれよ。いままで十年、真面目に働いてきた工場が倒産、わたしには給与の代わりに現物支給で、はい、さよならだ。なんとか、これを換金して今日のおかず代を女房に渡さなきゃ子供も飢え死にだ。デパートでは二万円で売っている高級舶来生地の上物

ですよ。それをたったの五千円、いいえ、三千円でもいいんです。お願いします」と、頭を下げられると、可哀想になって、つい買ってしまふ。後で、家に帰って着てみると、袖が片一方長かった。というような落語のような騙し商売が結構往ったり来たりしていた。

いまでこそ、人々は学歴も高くなり、情報も過多で、そうそう、そんな単純な手には乗らなくなったが、その分、心理的に研究している巧妙な詐欺に引っかかる。昔の方が、人間が素直だったのだろう。映画館に行っても、高倉健が後ろから斬りつけられそうになるシーンでは、大概、「危ない、健さん後ろだ」と、館内から声がしたものだ。いまはそんな声を出すものはいない。純粋な人間が少なくなり、みんなどこか濁ってきていた。

都会から田舎ものを騙すためにいろんなものを売りにくるのは、いまも昔も同じだが、もの珍しさでは、昔のほうがなにかと面白かった。デパートでよくやる実演販売もいまは少なくなって、代わりにモニターがビデオを流し続けている。蝦蟇の油売りよろしく、その巧みな口上が娯楽の少ない田舎町にはちよつとした芝居だったのかもしれない。

あるとき、また町の川淵に人だかりができていた。何でも好奇心のあるわたしは、また、駆けつけて、大人の股の間から顔を出して、その輪の中央で、折りたたみ椅子をテーブル代わりに、言葉に独特な抑揚をつけた喋りかたで、みんなを笑わせながら、サングラスに黒いマントのへんでこなおじさんが、ポンポンと調子よくまくしたてていた。

「ここに取り出しましたハンカチ。種も仕掛けもございません。ほら、ぼうや、手に取って見てくださいな。真中に穴も空いていない正真正銘の正絹のハンカチだ」

わたしは、それを手に取って、太陽にすかして見たが、何の変哲もないごく普通のハンカチに間違いはなかった。

「ねえ、不思議でもなんでもないでしょ。さあさ、手品はこれから。この何でも消せる消しゴムで、消してごらんにいれましょう」

サングラスのおじさんは、不思議な消しゴムで、ハンカチの真中をゴシゴシと消し始めた。そうすると、驚くことにハンカチが真中だけ消えたのだ。おじさんは、そこに手を入れ、鼻も入れた。そして、確認してもらうため、みんなに回してもらった。穴の空いたハンカチを手手に、みんなは首を傾げる。すると、どこからともなく拍手が沸いた。

嘘のような消しゴムだった。文字を消すのではなく、物体まで消してしまうのだ。

「あのう、お願いがありまして、わたしを消してくれませんか。もう、ここにはいられないんです」

そう名乗り出たのは、つい先月奥さんを病気で亡くし、店も借金でたたんだという靴屋の親父さんだった。

「それは・・・」と、サングラスが躊躇っていると、いきなり親父さんは、不思議な消しゴムを奪い取ると、自分の手足を消し始めた。みんな危険を感じて後退りしていた。輪が大きくなっていった。あっという間だった。親父さんの片手が消えていた。片足も消えた。胴も消しにかかったから、腹にぽっかりと穴があいたように向こうの景色が見えるではないか。

「キャー」と女の人達の悲鳴が聞こえた。やめさせようと近づくものも、逆に消されてはたまらないから手が出せない。親父さんは、顔も消し、もう片方の足も消した。すると、ぽとりと消し

ゴムを持った手首だけが地面に落ちた。自分の手だけは消すことができないで、ひくひくと動いている。みんな、恐怖のあまり、一目散に逃げ出した。

サングラスのおじさんは、仕方がないと云った顔をして、ひくひく動く手から消しゴムを取り返すと、親父さんの残った手を消してやった。傍にはわたし一人だけがいて、じっと最後まで見届けていた。おじさんは、消しゴムが一個も売れなかったので、悲しそうな顔をして、誰もいなくなった川端の店をたたもと、椅子を折りたたみ、ポストンバッグにみんな仕舞いこんだ。そうして、とぼとぼと項垂れてどこかへ去っていった。

それっきり靴屋の親父さんの消息は判らない。警察に話してみたところで、とても信じてはもらえまいと、町内の人達はそのことを口にも出さなかった。

わたしは、子供心にも何でも消せる消しゴムで、いつかの絶対に消せないマジックインキのおじさんと、戦わせてみたかったと悔やむのだった。

第437話 夢魔

わたしは見たんです。それは、わたしにだけ見せたものなんでしょう。誰も知らないで、平気な顔しているけど、みんなの頭の中には夢魔という子供たちがたくさん棲みついているのをどんなに説明しても判ってもらえない。

その夜、わたしは眠れないで寝返りばかりしていました。そのうち、子供の声が耳の奥深いところで聞こえるんですね。ごちゃごちゃと訳の判らない言葉で話しているんです。じっと耳を澄ませて何を話しているのかと、聞きとろうとしてみましたが、まるで早送りしたテープのような声で、とにかく早口なんです。ひとりふたりではなく、数百人はいるようです。

それで、わたしは、意識をそこに集中しました。すると、気がつくのと、わたしも小人になっていて、暗い洞窟を歩いているんです。洞窟は岩石ではなく、赤い柔らかな人間の皮膚のような感触で、高さがわたしの腰くらいの繊毛が生えていました。その奥から例の声が聞こえてくるんです。ここはどこだろうと思いましたが、ひょっとして、自分の耳の穴を歩いているのかなと理解するのに、少しの時間がかかりました。

洞窟は突き当たりに壁がありました。それはわたしの鼓膜だったのでしょうか。驚いたことに、それは壁なんかではなかったんです。ちゃんと取っ手がついたドアだったんです。わたしは、大きなドアを開けて中に入りました。中には何故か明かりが点いていて、内部の様子がぼんやりと見えました。巨大な貝殻のようなドームがありまして、コンサートホールのような音で、工場の機械ががたがたと動いている音が聞こえます。そこで、夢魔とわたしが名づけた小人たちと初めて遭遇しました。彼等は、みんな素っ裸でした。ただ、男女の区別もなく、生殖器が見えません。髪もなく、体毛がないんです。全身がつるつるしているんです。耳がロバのようにピンと立っていて、鼻はなく、鼻穴だけがふたつ空いているんです。宇宙人のようで不気味でした。わたしの姿を見ても、全く無視しているのが、どうやらわたしの姿が見えていないようなんです。み

んな、せかせかして動き回っていました。工場の機械の配線と思ったのはシナプスでしょうか。真っ赤な配管を液体がものすごい早さで流れているのは血管でしょうか。どくどくと音を立てて生き物のように動いていて不気味でした。

わたしは、白い巨大なドームのドアから中に入りました。どうやら、わたしの脳味噌の中のようなでした。その中は、かなり入り組んだ構造になっていて、無数の部屋に分かれているようでもあり、騒々しい音がひっきりなしにしていました。その中で、夢魔たちは、どんな作業をしているのかというと、次々にベルトコンベアから運ばれてくるフィルムを鋏で切り刻んでいるんです。わたしは、そのフィルムの切り取られたひとつを手にとって見てみますと、なんと懐かしいことに、わたしの古い記憶の映像だったんですね。モノクロもありますが、フルカラーのものもあります。写真のポジフィルムは、わたしの十年前、二十年前、もっとも古いものは五十年前のまだ二歳のときの幽かな場面が写っていました。母親が立ち去ってゆく後姿があります。わたしは地べたに座りこんで泣いていました。そうかと思うと、二十歳のわたしが、鎌倉の由比が浜を彼女と二人で歩いている夜の砂浜です。車のライトが走り去るのが見えます。

そんな断片を夢魔たちは、実に適当に切り抜いては、別の画面と勝手に繋いで、ひとつのありえないコラージュを創作しているんです。時代も場所も滅茶苦茶です。大阪の心斎橋が北陸の暗い崖淵にあったり、そこを全学連の格好をした彼女が、わたしの息子と手をとって歩いている。わたしは、つい笑ってしまいました。その突拍子もない発想が、とても無邪気で、いい加減だったからです。

そこは、わたしの頭脳の内部で、夢の創作工房になっているのでした。膨大な記憶の画像ストックからランダムに取り出して、そいつを切り刻んでは繋いでいる、シナリオもディレクターもない無心な子供の手になる支離滅裂な映画の製作工場だったのです。小人たちは、初恋の人の写真の顔の部分に、死んだ祖母の顔を貼りつけて、パリのリドの中にあるおでん屋で、喪服を着て結婚式を挙げているといった、意味のない夢を映写機にセットしていました。

そこまできたとき、目覚時計が突然鳴って目が覚めました。しばらくぼんやりとしていましたが、とても夢とは思えないほどリアルな体験でしたから、果たしてそんなことってあるのかと、先生にお尋ねしようと思って来たんです。

わたしの不思議な体験をずっと聞いていた心理学の専門医の先生が、頷きながらノートしていましたが、ぱたりとノートを閉じると、わたしに向き直って話し出しました。

「どうやら、あなたはミクロの世界の体験を瞑想のうちになさったようですね。何の不思議なこともありません。われわれの深層心理に眠っている断片的なデータは必ずしも系統だてたファイリングシステムをしていない。キーワードで繋がっている場合が多いんです。予知夢ということも、過去のデータの趨勢を単にその延長線上に描いて見せるだけのことです。果たして、それは夢だけのシュールな芸術でしょうか。われわれは、現実の世界でも、切り貼りして、騙し絵の錯綜した世界を見ているんですよ」

心理学の先生が何を云っているのか、わたしにはほとんど判らなかつた。先生はやおら鋭い鋏を取り出すと、なんと、空間を切り出した。わたしは、椅子から飛び跳ねた。先生はにやにや笑いながら、なおも空間を四角く切り出していた。

「ほら、これが現実の空間です」

先生が手にしているぺらぺらの空間にはドアの一部と床が映っている。切り取られた跡には黒い無の空間が覗いている。

「政府は、われわれを欺くために、こうして切り取った錯覚を別の場所に貼り合わせて、ありもしない世界を偽造しているんです」

わたしは、声を殺して先生の部屋を出た。一目散に駆け出した。そんな馬鹿な。われわれはすべて騙されていたなんて。作られた嘘の世界だったなんて。わたしは首を横に振り続けた。何もかも否定しなければ、自分という人間はいないのだと。

第438話 電車の乗客たち

快速電車は、都心を出ると、三十分はどこにも止まらずに、隣の県まで走り続ける。夜遅い電車は、勤め帰り、酔客などで、長椅子の座席はすべてびっしりと座っていた。ひとりも入る空きがない。立っている乗客はいなかった。

電車が発車する寸前に杖をついた老婆がひとり乗りこんできた。歩くのもやっとだった。老婆が乗りこむと、ベルが鳴り止み、電車のドアが閉じた。乗客の多くの視線が老婆に集まり、一様にしまったという顔をしていた。シルバーシートにまで座っていた。しかも、乗り合わせていた人々はみんな四十代以前と若い。こんな夜遅い電車に年寄りあまり乗っていないものだ。

老婆は座る席を目で探してきょろきょろしていたが、空いている席はない。乗客は全員、老婆と目を合わせないようにあらぬ方向を向いていた。誰も立って、「どうぞ、おばあちゃん、ここに座って」と、優しく声をかける者はいない。

電車が走りだすと、老婆は杖をつき、腰を曲げたまま、捉まるところもなく通路をあっちへよろよろ、こっちへよろよろ、同情をかう格好をしていた。普通なら、そこまでしていると、立ちあがって席を譲る人が出てきてもいいのだが、みんな、誰かが立つだろうと、周囲を窺ってばかりで、すでにその機を逸していた。

中で一番の年配といっても、五十くらいのサラリーマンが、二十歳くらいの若い男を睨みながら、

(いまどきの若いものはなっとらん。いの一番に立つべきだろう。わたしは、この中で見たところ年上らしいから、立つことはないのだ)と、考えていた。

その隣に座っているOLは罪の意識を持ちながらも、心の中で自分が立たない正統性をひとり納得させていた。

(わたしは、疲れているのよ。今日はすごく忙しかったし、一日立ちっぱなしで、足が棒のような。座る権利はあるはずよ)

向かいに座っている中年のおばさんは、急に腰をさすり始めた。

(みんな健康そうなのに、どうして席を譲らないの。わたしはぎっくり腰なのよ。今日も病院へ行ってきたの。みんなに診察券を見せてやりたいわ。立っているのも苦痛なのに、それがみんなに

は判らない。わたしは立派な病人なんだわ。いじわるして座っているわけではないのよ)

おばさんは、じれったい目で、周囲に自分の痛みを訴えていた。

大学生は、みんなの視線を感じてふて腐ったように両足を投げ出してぐったりと座っていた。(なんで、みんなおれを見ているんだ。おれが一番若いからか。この社会はなんでも年功序列か。若いという理由だけでどうして立たなければならないんだ。おれだって、試験で三日徹夜していて眠いんだ。元気な中年が先に立てばいいんだ)と、斜め向かいに座っている頑強な作業服の男に視線を送り返した。

作業服は咎められるような学生の視線に、憤慨していた。

(な、なんなんだよ。おれがどうして立たなければならねえんだ。おれは勤労者だよ。公共工事の現場で、あんたらの快適な生活を守るために日夜ヘルメットかぶって重労働してんじゃねえか。そのおれが、どうして犠牲にならなきゃいけないんだよ)と、ぶすっとして横を向いた。その剥いた先に若い奥さんがいた。

奥さんは自分に視線が集まったので、少し周章てて、顔を赤らめた。

(そんな、わたしに立てという目だわ。みんな知らないけど、わたしは妊婦なの。お腹は目立たないけど、妊娠三ヶ月なのよ。いまが一番大事なときだってお医者さんが云ったのよ。流産の危険性があるから、過酷な運動はしないようにってね。だから、わたしはこの中で一番座っていられる権利があるんだわ)と、真向かいの紳士に今度は視線が集まった。

紳士は、何故、自分を見るのかという驚きで目を大きく見開いて呆然としていた。手にはずっと大事そうに大きな鞆を抱えていた。

(わ、わたしは荷物を持っているだろう。荷物なら床に置くとか、棚に上げるなりしたらいいだろうという目をしているな。とんでもない、この中には明日の朝、買いつけに必要な五千万円が入っているんだ。手放すわけにはゆかないんだ。重い荷物を抱えたまま、立っているというのか。それは酷なことではないか。頼む、判ってくれ)みんなの非難の視線に懇願するような目を返していた。

その間も老婆は中央の通路をあっちへよろよろ、こっちへよろよろと、倒れそうだった。とても、まともに見ていられない。それでも、席を譲るという行為に勇気はあるもので、第一恥ずかしい。いい格好してと、実際いいことをしているのだが、そんな目も集まるから照れる反面、逆にシニカルな目も集まるから嫌なのだ。

みんなは気まずい雰囲気の中、腕時計を覗いたり、早く電車が駅に着かないかと、窓の外を苛々して見ていたりしていた。一分がものすごく長く感じられた。いまさら、席を譲るというのも恥ずかしいし、負けたことになる。ここまでくれば意地でも立つものか。みんなは同じことを考えていた。

すると、電車が大きく揺れた拍子に老婆は通路に転倒した。杖がドアのほうへと転がった。全員、どきりとした顔をしていたが、次の瞬間、全員、目を瞑って、ためぎ寝入りをきめこんだ。わざとらしく鼻をかくものまでいる。見て見ぬふりの中に腐敗臭が漂っていた。

書く人は読む人でない場合が多い。書くからには読まねばならないのだが、何故か、書くのは好きで読むのは苦手だという人が多いのだ。もの書きは、詩にしても小説にしても短詩型にしても、自分の作品は読んでくれと配るのに、人の作品は読まない。書くというスキルだけが確立していて、それにかかるデータが何もないから、本人は斬新な作風と自負しているのが、その辺にごろごろしていた陳腐なものとは判らない。

書店の郷土出版のコーナーにも自費出版の本が平積みになっているが、創作ものは売れない。いま話題の中央の作家の小説ですら、なかなか売れないときに、地元のその辺のシロウトの本など知人か親戚でなければ手にもとらない。本を読むという習慣のある人の絶対数が減りつつある。活字離れた。その中で小説離れも進んでいる。最近の小説は面白くないという声が多い。現実のほうが奇想天外で、事実は小説より奇で、虚構が現実を超えないからだろうか。それでも、作家志望の予備軍は全国に数百万いるそうで、若い人はネットで小説や詩を発表している。同人誌も花盛り、書き手は減るところか確実に増殖し続けている。

北村拓子は五十を過ぎて、いままで三十年もの間、同人で書き溜めてきた小説集を自費出版した。子育てを卒業し、家のローンも終わり、亭主もあと数年で定年を迎える。ここにきて、ようやく時間というものが増えてきた。いままで、家族のため、他人のために走り回ってきた日々が過ぎ、自分と向き合う時間ができる、拓子は、ひとつの区切りで本を出してみようと、地元の東街出版社を訪れた。

「小説ですか。パソコンをおやりになるのだったら、テキストファイルにして、入稿していただくと、その分安くできますが。部数とページ数、仕様で予算見積もりは出ますがね」

前歯の抜けた出版社の社長が、実にいやらしい笑いを忍ばせて対応した。

拓子は思い切って、布貼りで箱入りの特装本を作ろうと、自分のへそくりをすべて注ぎ込むことにした。これは夫には内緒だ。

拓子は五百冊を作ってもらった。これが売れると元は回収できる。自分の寅の子がまた戻ってくるのだと皮算用していた。実際、定価を二千五百円に設定して、全部売れたとしたら、印刷代とトントンになると計算していた。本の出版といってもバカにならない。車一台買える費用がかかる。それでも、もし、その本が大手出版社の目に止まったら、はたまた、なんとか賞に送り、ノミネートされたら、新聞社に送ってやって、書評で取り上げ、書店で売れに売れ、増刷するようなことにでもなれば、と、拓子は夢のようなことを考えていた。よしんば、刷り増しして、利益が出たら、それで夫と二人で海外旅行でもしようかなどと、だんだん夢は膨らむばかりだ。

本ができあがってくると、拓子は急に大作家になったような錯覚に囚われた。毎日が嬉しくて仕方がない。図書館とマスコミに寄贈として送った。親しい友人にも送り、あとは拓子が自ら書店に足を運んで、置いてもらうようセールスすることにした。早速、商店街で一番大きな書店に向かった。

「あのう、わたしの書いた小説集ですけど、置かせていただけませんか？」

書店の店長は、気難しい顔をして、本を手にとると、ページをめくることもしないで、

「自費出版ですか。二千五百円とは高いですね。第一、失礼ですが、無名のあなたの本は売れません。うちとしても、売れる本だけを並べなければ、坪効率が悪くなりますから、商品回転する本だけを並べているんです。それに、あなたのように自分の本を置いてくれと毎日、沢山の人が詰め掛けるんです」

拓子が後ろから押されるので、何だろうと振り返ると、すでにずらりと人が並んでいる。みんな、自分の本を手にして、売りこみに来ているのだ。

あちこちの書店ですべて断られた。大手出版でも、専門書なら五百、三百という初版だそうだ。全国の二万弱の新刊書店に行き渡る数ではない。千部、二千部という数もざらで、全国を相手にしてもその数だ。それなのに、地方のしかも無名の面白くもない小説の自費出版で五百は多い。拓子は現実を余りにも知らなすぎた。

でも、せっかく作ったのに、売り先がなければ予定が狂う。友人を通して、無理矢理ようやく小さな駅前の書店の隅に置かせてもらった。拓子は興奮して喜んだ。始めは百冊車で持っていた。すると、友人の頼みだから仕方なく置いてやっているんだと、つっけんどんな云い方の店主は、五冊、いや三冊でもいいんじゃないの、と全く売る気がないそぶり。拓子は完全に頭にきた。それでも、自分の書いた本が初めて店頭で並ぶのは嬉しく、毎日売れ行きを確認するために書店に顔を出した。一週間たっても、ひと月たっても一冊も売れない。

どうして、誰も買わないの、拓子は読者に憤慨していた。わたしのような才能のある隠れた作家の本を手にも取ろうとしない。実際、拓子は、一日、その書店に張り込んで、自分の本を誰が手に取るかと、見ていたことがあったが、その小説のコーナーには人影すらなかった。みんな、マンガと雑誌のところをたかって、文芸書のところには人は立たない。まして、拓子のような地元の主婦の書いたような本は見向きもされない。

三ヶ月経って、本の委託期間が終わり、拓子は書店から三冊そのまま返された。すっかりとしょげかえていた。駅前にも、商店街にもよく見ると、道端に沢山の人間たちが本を並べて売っているのだ。昔、道端で自分の詩集などを売っているフーテンを見たことはあるが、いまは、アマチュアの作家たちが、書店で取り合わないの、ずらりと並んで道端で本を売っていた。

「ねえ、おばさん、わたしの本、買ってくれない」

「ぼくの推理小説買ってください。二千円のところ半額でいいですよ」

「これはわしの自分史じゃが、一冊どうかのう」

「お願いします。この歌集、買ってください」

「エヴァンゲリオンのパロディ小説で一冊。一冊五百円にしまーす」

デパートの前でも、駅のコンコースでも、街角でもものすごい数の作家の卵たちが並んでいた。通行人は煩がり、誰ひとりとして購入していない。

拓子が返本とそっくりそのままダンボール箱に入って積み上げられた、自分の本を恨めしそうに眺めながら、自宅で横になっていると、玄関のチャイムが鳴った。昼間のセールスだろうと、ドアを開けると、そこに憔悴しきった若い女性が本を手立てしていた。

「あのう、わたしの書いた恋愛小説なんですが、買ってくれませんか。お願いします。今日のごはんも食べられないんです」

そうやって、泣きながら、訪問販売までしているのだ。

「ぼくのエッセイ集を買ってください。でなければ、印刷屋への支払いができないんです。なんとか一冊お願いします」

次々に本を売りにやってくる。世の中にそれほど作家志望の人がいることに驚かされた。

拓子は思った。それも判るわ。第一、わたし自身も本を読まないもの。家には本らしてものはほとんどなかった。

読書週間でアンケートをとると、月に雑誌以外のちゃんとした本を一冊でも本を読む人は二パーセントしかいない。百人いると実に九十八人は本とかかわりのない生活をしているのである。

第440話 元子の場合

女の三十九歳というと、サガンの「ブラムスはお好き」の主人公の年齢だ。女として迷う年齢として取り上げている。二十五がお肌の曲がり角なら、四十は女性としてというより、男の対象としてのぎりぎりの年齢で、かなり焦る年でもある。勿論個人差はあり、三十でもう女を捨てておばさん化している人もいるし、五十でも艶っぽく、まだまだ男を騙せる人もいる。それでも、三十と四十は随分と違う。その間に太い線が引かれているような気がする。三十九は女としてのラストチャンスなのだ。

元子は今年三十九になった。何か更年期障害の話も出て、体のあちこちにガタがきていると夫の博史に話していた。苛々の年齢で、何かと夫の顔を見ると愚痴るので、博史はできるだけ家では元子と目を合わせないようにしていた。自分の書斎に閉じこもって、好きな音楽を聴き、パソコンに向かっていたり、本を読んでいたりする。それがますます元子を苛つかせた。

あなたはいいわよ、自分の好きなことをしていればいいんだから。わたしには何の趣味もないし、毎日、家事に明け暮れて、ただの飯炊きおばさんよ。そんな愚痴も何百回聞かされたことだろうか。

事の始まりは、今年の春に娘の春香が高校へ進学したこと、息子の信幸が中学に上がったことだった。いままで、母親にべっтарいの姉弟だったが、二人とも部活で忙しく、夜遅くに学校から帰ってくる。専業主婦の元子は、ただでも時間が余っているのに、子供も話相手にならない。

日曜日くらいはとっていたら、春香はボーイフレンドが出来たと、さっさと化粧してデートに出かけてしまった。息子はどうかと、

「ねえ、今日はどこへ買い物に出かけようか」と、信幸に声をかければ、

「ああ、ぼく、これから友達とカラオケに行くんだ」と、こっちもさっさと出かけてしまう。以前は家族揃って、買い物したり、ドライブ行ったり、いつも子供たちが周りにいた。それが、子供たちが大きくなると、親とは遊んでくれない。ぐっと寂しさが襲ってきた。

まあ、パパと二人で映画でも見てくるか。仕方ないなあ。と、元子は思い直して、遅くに起きてきた博史に甘えたような声をかけた。

「ねえ、たまには何かおいしいもの食べてから映画でも：：」

と、ねだると、博史はそれを制するように、

「ああ、今日は取引先とゴルフへ行くんだ。そのあと呑んで帰るから晩飯はいらないからな」と切り捨てた。

元子は完全に家族に捨てられていた。みんな、出かけてしまって、がらんとした家にひとりぼつんと座っていると、このまま年とってゆくことの不安と焦燥が前面に立ちはだかっているのが見えた。子供は成長すると親離れするのは判っていたが、親は子離れしていない。夫も仕事と趣味の仲間とのつきあいで、いつも遅く帰ってきた。子供たちもそのうち、友達も増え、広い世界に出てゆくと、家というのは寝るためのものにすぎなくなる。母親の必要性もだんだんと薄れてくるものか。元子の苛々はそんなところから出てきていた。

元子は、ひとり新聞を眺めていると、自然と求人募集の欄に目がいついていた。

「パートタイマー募集。パソコンのできる方。三十九までか」

元子はパソコンはまだ日が浅い。使いこなすまでいっていない。どこの募集も三十九までだ。やはり、三十と四十の間には太い線が引かれているのだ。

「わたしも、何か仕事しようかな。それと、趣味ごと、カルチャーセンターか」

元子は、習いもの、資格取得のスクールなどのチラシも見ていた。元子に欠如しているのは、友達、話し相手、サークル、生き甲斐、生きている実感、ドキドキするような刺激、それが無い。いつまでも、夫を待つ女ではいられない。子育てもそろそろ卒業し、妻として母としてより女として自立したい。

でも、なかなか新しい世界に飛び込んでゆく勇気も思いっきりもない。このままでは、家族の中で疎外感にさい悩ませられる。何か行動しなくてはならない。

月曜日。元子は決心して、パートセンターへと出かけた。不況でなかなかいい仕事はない。あっても資格要件がある。みんな特殊技能のあるスペシャリストだけを求めている。何ができますかと、聞かれても、飯炊きですというと、限定されてしまう。こんなことだったら、のんびんだらりと主婦をしているんじゃないわ。いまからでも遅くないから、何か資格を取りにゆこう。

元子は学生時代に仏文を専攻していたのを活かして翻訳の仕事でもないかなと、とりあえず翻訳の勉強のために、アカデミー学院に通うことになった。それと同時に遊んでもいられないから、スーパーのレジ打ちのアルバイトをすることにした。

「へえ、おまえがスーパーでね、それと翻訳の勉強か」

夫はいつまで続くかなぐらいにしか思っていなかった。結婚して十八年。、やったことのない仕事ができるかな。

スーパーは時給は安いが平日の昼間だけといういい時間帯が気に入った。店長は三十半ばで竹野内豊に似ている。妙に元子に親切に教えてくれる。他のパートがやきもち焼いて、

「店長ったら、わたしたちにはそんな手とり足とり教えなかったのにさ」と、ぶつくさ云っていた。元子もまだぎりぎり男好みのするスタイルと美貌を維持していた。帰り際、店長が、「今度、君と二人きりで歓迎会をしたいね」と、元子は誘われていた。

アカデミー学院に行ったら、やはり資格を取りに通っているサラリーマンから、

「奥さん、一度、呑みに行きましょうよ」と、云われたし、講師の先生からは、「もっと多くのことを学びたいと思いませんか。あなたがやる気があるなら、課外授業もオーケーですよ」と、危ない話を元子に持ちかけていた。

元子は知らなかった。専業主婦でずっと、外に出たことがなかったが、外の世界は危険がいっぱいだった。いや、甘い誘惑か。

元子はうきうきして家路についていた。もし、誘われたら、強引に連れこまれたら、わたし、断る勇気があるかしら。元子は自分の前に急激に開けてゆく世界に眩暈すらしていた。

昔、朝鮮戦争の後に、女の三十八度線という言葉が流行った。貞操を守れるかどうかという、現代の若い女性には無縁なヤマトナデシコの話だったが、その三十八は女の危険ラインの暗号かもしれない。すでにそのラインを突破した元子は、もう一人別の女に目覚めようとしていた。

第441話 恐怖政治

三期目を迎えた本村知事は、新年度の人事も、イエスマンだけを自分の周りに配置して、よりやりやすい組織にしてご満悦だった。特に、今回は、部長人事には、睨みをきかせられる煩方を起用した。仕事ができるのではなく、怖がられている人物を抜擢した。さらに、新しい部署として知事の親衛隊とも悪口された補佐室を設けた。大統領でもあるまいし、知事に補佐官がいるのはこの県だけだった。それも一人二人ではない。税金の無駄使いともとれる十人はいた。それぞれが、その道のプロであり、いずれも武道合計十段の体格のいい猛者ばかりを選んだ。ちょっと目にはヤクザにも見えたが、元プロレスラーもいたし、鬼警部と云われた警察畑も側近として置いた。それが、県庁を知事を頭にしてぞろぞろと闊歩するときには、みんな道を開け、声を飲んだ。ものすごい迫力があつた。それに囲まれて、以前ならひとり孤立して、威勢だけを張っていた知事も大威張りだった。

「知事、例の女性問題で、県議たちが不信任案を提出しようという動きがありますが」と、秘書課長が報告すると、親衛隊でブレーンの一人、元弁護士の補佐官が、

「何の、やつらにはできんよ。議会解散すると、また選挙資金がいる。そんな余力があるものか」と、薄ら笑いを浮かべていた。

「その前に打つ手は打っているよ。ふふふふ」

知事はある策略を持っていた。それを実行に移していた。議員のひとりひとりにいろんな女性から手紙を出させた。その女もすべて、側近の回し者だった。

一わたしはひとり暮らしの窮状を有権者のひとりとして、議員様に直訴したいと手紙をしたためましたことをお許してください。

艶かしい文面と字面に大概の議員はころりと騙されて、逢いに行った。そこから知事の二の舞になる議員が続出した。みんな、美人には弱い。すべて、証拠を握られて、訴えられた。知事の計画はまんまと成功して、不信任案は否決された。

ますます、県庁では知事は威張りに威張り、あまりふんぞり返って、後ろに倒れたほどだった。知事のやること成すことすべて独裁政治に変わっていった。もう、誰も文句も云えない、命令を怠り、無視したものは左遷、もしくは第三セクターの冷や飯食い。

もともと本村知事は何かを恐れていた。実は気が小さいのだ。それだから自然体ではなく、妙に威勢を張りたがる。よく吼える。よく吼える犬は虚勢だけで弱いものなのだ。何かを怖がるから、弱いものを虐待する。昔、ヘロデ王が、キリストが生まれたとき、神の子に王の座を奪われると、二歳以下の赤ん坊を皆殺しにしたのと似ていた。白人も性的に黒人を恐れたため、差別し虐待することで、優位性を植え付けたのは、黒人を種の優位で恐れていたというのだ。ヒトラーも何かを恐れていた。ファッションに走り、相手を押さえ込もうとするものはすべて何かを恐れていた。

知事にはそれだけではなく、いつも怒鳴り、文句を云い、逆らう余地も与えないところに、ヒポコンドリーの性格があるのは精神科の先生でなくとも判る。おおらかで、人望があり、人格者

であるという形容からはほど遠い。自らを滅ぼそうとするものに対しては、顔を背け、その腹威勢を弱きものの迫害で晴らしているのだ。

暴君本村はいよいよ自分の好きなように県政を動かしていた。県民には優しい知事を装い、畑仕事をしている人がいれば、わざわざ車から降りて握手して励ます。一日何人と握手するかということが、今後の自分の支持者獲得のためのセールスだったが、一日の半分はそれに費やしていた。外面がよく、身内には鬼より怖い。

知事の周辺では異変が起こっていた。この二年の間に、失踪した者が五人もいた。ノイローゼ、精神病で入院した者は七人、県庁を辞めた者は数知れず。常に粛清が陰で行われていた。暴力団まがいの恫喝、嫌がらせは日常茶飯事、県庁の中には反省室と称する拷問道具まで備えた部屋があった。

そんな独裁者も、いつも何かに怯えたような目つきをしていた。卑屈な態度もそれに表れていたし、女のヒステリーのように叫ぶのも、いつもびくびくしていることの反動だった。

四月から、知事室に天野雀玖が異動することになった。事実上は昇格なのだが、みんな周囲は同情するだけで、本人も喜べない。妻は給与が上がって喜んでいたが、天野は遺書まで書いていた。妻には云いふくめていた。

「もし、おれが帰らないことがあったら、このCDを金浜弁護士に渡してくれ。いいな、もし、県庁の者だと人相の悪い者たちが家に入ってきて、このCDだけは絶対に渡すなよ」

天野は庁内では知りすぎた人間のひとりだった。極秘の知事の人権蹂躪、その他公表できない隠された事実を暴露している証拠の画像、音声が入っていた。知りすぎているものは、逆に知事の側近として置くことによって常に監視されることになる。気の弱い天野は、毎日が針の筵に座らせられているようなもので、神経がピリピリしていた。

「おい、天野」と、知事は呼び捨てだ。いつも怒ったような口調だ。知事の周りには木刀にみたてたモップや、鞭にみたてたロープを持った不気味な取り巻きがうろうろしていた。ナチの親衛隊のような怪しげな連中は、いつでも金のためなら人をも殺すと云われていた。職員たちは、いつもびくびくおどおどしていて、建物が地震のように震えているのだった。

だが、一番びくびくしているのは実は知事だった。特に、夕方になって帰宅する時間が近くなると、いつも何か恐れるように時計を見ていた。何かと用事を口実に帰らない日もあったが、嘘はすぐばれるので、夜の会合がないときは、諦めて家に帰るよりない。そんな知事のおかしな様子を疑って、これは何かあるかと、天野は密かに尾行することにした。知事には人に云えない秘密があるに違いない。天野は、前から何か重大な家庭内の問題があるのではないかと推測していた。知事のコートに天野は隠しマイクを取り付けた。いままでも電話の傍受などをして証拠集めはしていた。いざというときは自分の命と引き換えに知事を道連れにする覚悟だった。

知事が急に気が重い顔をして自宅の玄関に入った。天野は少し離れたところに車を止めて、FM受信機で、家庭内の会話を録音しようとしていた。いきなり、ヘッドホンに大きな恐ろしい声が響いてきた。

「あなた一、ポケットに入っている女の名刺は何よ。また、女作っているのねー」

「ち、違う。お、おまえ、それは誤解だ」

「なんですって、誤解も六階もあるかー」

ヘッドホンにビシッバシッと殴る蹴る音が入ってきていた。そして、知事の哀れな声が。

「た、助けてくれ。ひえー」

第442話 キリギリス国

ハルカ電器は、北日本にチェーン展開している家電の量販店だった。大卒の採用試験が行われていた。試験は常識問題と作文、面接だ。みんな、リクルート・スーツでびしっときめている。面接には金澤社長と笹田人事部長、駒田営業部長があたっていた。

「君はうちに入社したらどんな仕事をしたいかね」

質問はすべて定まっていた。

「はい、企画をしたいと思います」

「はい、財務担当を希望します」

軒並みスタッフ希望だ。誰も現場に入りたいとは云わない。

「企画もいいんだが、今日の面接者のほとんどが企画だ総務だと希望するんだね。うちはそれぞれひとりづつあればいいんだが、どうして販売員は嫌なのかね」

金澤社長は質問を変えた。

「売り子ですか。そんなのは女の子でも足りるでしょう。ぼくはもっと高度な頭を使う仕事したいんです」

それを聞いて、笹田部長のペンは不資格の項目にチェックが入っていた。金澤社長も現代の若者気質に根性が欠落していることに嘆いていた。自分たちのときは、たたき上げだ。現場第一主義で、進んで第一線に立ったものだ。現場を知らないで何が企画だ。

「あなたねえ、いきなり企画室に入って、何かやれますか。会社の内情も知らずして、プランを立てられますか」

憤慨した駒田部長が面接の学生に質問していた。みんな汗水流して働くということをしたがらない。頭だけを使おうとする。この国は学歴社会になり、進学率が高まり、猫も杓子も最高学府を出てはいるが、お陰でやたらキリギリスが増えて、アリのがいなくなった。

「あなたの趣味は？」

と質問すると、軒並み「音楽」と答える。ひと昔前は「読書」だった。今は本を読む人が減ったから、読書も訊けばマンガだったりする。

「ほう、音楽はどんなものを聴くのかね」

「はい、あゆの歌とかラップとか好きです」

「はて、魚の鮎の歌というのがあるのかね。サランラップの歌が出たのかね」

社長は古い人間だ。音楽というとバッハやブラームスだ。そんなポップスなんか趣味と堂々と云えるのか。

「特技は何かね」と訊くと、

「はい、キーボードをやります」「アコースティックギターです」「ドラムを叩いています」と、こちらも軒並み音楽だ。楽器を齧っていない者はいないほどみんな何かやっている。それもまたベートーヴェンではなく、ロックなのだ。

面接の待合室でも、耳にはヘッドホンで、MDを聴いていたし、ケイタイで着メロをダウンロードしていた。読んでいる雑誌もJポップやロックに関するものばかり。歌舞音曲は、本人の情操のためにはいいかもしれないが、所詮遊びだ。それを何年やったからといって、人間性が養われることもない。知識が身に付くわけでもない。積み重ねがないので、日がなりフレインするだけの音楽だ。

若者たちは、ただ、音楽という麻薬に大事な時間を埋没させていた。テレビでもラジオでも一日そればかり、耳にはヘッドホン、買い物に出てもどこでもBGM、あちこちで着メロが鳴る。頭の中はすでに半分が音楽にずっぷりと浸って、音符で埋まっていた。

ハルカ電器では困ったことが起こっていた。採用試験で、販売や外商などの営業を希望する者がひとりもないのだ。試験を受けた者三百人からスタッフは五人あればいい。あとはすべてラインなのだ。ホワイトカラーばかり望んで、ブルーカラーはしたがない。店は誰かが修理担当をし、誰かが商品管理し、誰かが配送しなければならない。それが、この就職難に贅沢なことをぬかして、それでなければ入社しないと逆に選んでいる。話にならない。

スタッフで入社させた者でも、会社の仕事を初めは全部知ってもらうために、すべてのセクションを一週間づつでも回ってもらう研修をすることになっていたが、それすらも、「約束が違う」と、蹴って、さっさと会社を辞めてゆく尊大さ。いまの若者の失業者の中にはそんな贅沢な者も多い。高学歴は無駄にプライドだけを高くした。もっと楽しく給与を貰いたい。余暇をもっと欲しい。仕事二の次、趣味に生きたい。

金澤社長はついに堪忍袋の緒が切れた。

「よし、そんなに現場作業が嫌なら、日本の若者たちはうちでは使わないことにする。いくらでも海外から仕事をしたいと来ている。わが社は、今後、すべて外国人の労働者を採用することにしよう」

早速、面接に東南アジアから中国から南米から人が詰め掛けた。給与は安くはしない。差別はしない。その代わり日本語に堪能でなければならない。仕事を覚えるやる気があること。待遇は寮もつけ、生活は不自由ないようにするという好条件であった。各社がそれを聞きつけて追随したから、日本全体が外国人労働者に頼る比率が高まった。さあ、ますます日本の若者たちの仕事がなくなる。アリが外国からぞくぞくとやってきたのだ。かつての日本人がそうであった勤勉を、彼等はまだ持っていた。長い繁栄と贅沢に慣らされた日本人が勤勉であることを忘れていった。

街頭を仕事もなくうろつく日本の若者たちが増えた。一生懸命汗水垂らして働く外国人を馬鹿にしていた若者たちもいよいよ食えなくなった。それでも、手にはしっかりとギターを持っていた。

街角に乞食のように座り、ギターを弾いて歌を歌う若者たちがあちこちで目につくようになった。ハルカ電器の店頭にも二人の若者たちがギターを弾いて歌っていた。髭は伸び放題、服は

ぼろぼろ、空腹で腹は鳴る。

「ママ、あの人たちは仕事をどうしてしないの？」

外国人労働者の母と子が店の前を通ったとき、娘が訊いていた。

「あの人たちは、仕事を忘れたのよ。歌ばかりうたってね。可哀想な人たちなの」

そうして、若者たちの前に置かれた空き缶に小銭を入れてめぐんでいた。

第443話 桜の樹の下に

城山公園の桜は満開だった。お堀は日当たりがいいから、もう五分散りで、水面いっぱい花びらが埋めていた。週末なので、大勢の花見客が、朝からシートを持ってきて陣取っていた。会社で花見をやるときは、若い使い走りの社員が、社命で朝から週刊誌片手にシートの上で場所取りだ。ぐるりをロープまで引いて、他の人が入れないようにしていた。そんな団体が土曜日ともなるといい場所を確保するために車で、カラオケの機械や、蛍光灯、発電機、風除けのテント、バーベキューの道具まで一式を車で運んでいた。

公園の中は露店もかなり出ていて、観光客も遠方から押し寄せ、賑やかであった。すでに、酩酊状態で、昼からできあがっているおとうさんもいて、臨時派出所のテントに収容されていた。いまも昔もトラの始末は悪く、あまり酷いと一泊してもらう人もいる。そんな、警察官のテントに血相を変えて、ひとりの真面目そうな教師タイプの中年が飛び込んできた。

「桜の樹の下に、大変なものが埋められているんです」

きらりと光る眼鏡の下には鋭い眼があり、酔っ払いとは思えない。しかも、背広にネクタイをきちんと着ていて、勤め帰りのような鞆まで持っている。とても怪しい男には見えない。

公園は毎年、いろんな人が来るから、こんな男が突然飛び込んできて、警官たちは動じない。

「何が埋められているって？ それは死体だと云うんじゃないだろうな。どこかで聞いたような文学的な下りだな」定年間近い巡査部長が相手をした。男はまともに相手をしてもらっていないことに腹を立てて、抗議の口調になった。

「人がせっかく親切に教えているんじゃないですか。そんな、死体なんかあるわけがない」「だったら、あなたは、埋めるところを目撃したんですか」

「いや、見ていなくとも判るんです。わたしの目には、なにもかも見えるんです。ほら、あんなに一斉に咲いている桜が、何かの養分を吸って狂おしいほどの色で咲き乱れているというのは、あなたがたには異常な生態系のクライマックスにおけるシンボライズしている黙示とは思われませんか」

巡査部長は困ってしまった。そう、不可解な観念論でこられても。

「まあ、難しい話は別にして、何が埋まっているというんですか」

他の巡査がじれったそうに訊き出そうとした。

「あなた方の目、その目です。わたしを気遣いか何かと見ていませんか。疑っているでしょう。違いますか？」

そう、切り込まれては、言葉に詰まる。半分は、まともに話など聞いていないのだ。みんな酒飲んで、騒いで歌って、裸踊りまでする始末。それにひきかえ任務とはいえ、そんな馬鹿騒ぎの取り締まりにも当たらねばならない。こっちは酒も飲みたいが、飲めないで、いろんな連中の相手をしていなければならないんだ。巡査部長は、心の中でそう思っていた。

「それじゃ、あなたの云う樹の下に連れて行ってください。スコップを持っていったほうがいいですか？」

「そうです。スコップです。必要です」

「でも、それは爆弾とか、危険なものではないんですか。そうなら、われわれの手には負えない。処理班を呼んでこなくてはならんから」

男はぎろりと眼鏡越しに見返すと、不気味に笑った。

「大丈夫ですよ。危害を加えるようなものではありません。せっかく皆さん、花見で浮かれているんです。こんな楽しい席を物騒にしたくはないですから」

若い巡査がひとり、スコップを手に男の後ろから付いていった。

「どの樹の下ですか？」

巡査が訊くと、男は驚いたように振り返った。

「どの樹ですって、あなたの目は節穴ですか。ここにあるすべての樹ですよ。すべての樹の下に隠されているんです」

信じられないといった顔をして、男は巡査を嘲笑った。

「だから、さっきから聞いていて、何が埋まっているというんです。もったいぶらずに話してくださいよ」

巡査は苛々して、いよいよこの男がどこかおかしいことに確信を持つに至った。精神的に病んでいる。目つきが正常ではない。ひょっとして、病院から逃げ出してきたのかもしれない。巡査は、ちょっと、男との距離をおき、警戒し出した。

「ああ、あなたも、やはりそうだった。みんなと同じ目でわたしを見る。事実を知らなさすぎる。この世に見える花だけを見ているんだ。花の下には何がありますか？」

巡査は憮然として答えた。

「それは、枝があって幹がある」「そうです、その下には何かありますか」「地面の下には根が張っている」「そうですね、で、あなたにはその根を見て云っているんですか」

巡査は、この男は何を云いたいのかと、腹が立ってきていた。

「見えるわけがないでしょう。ただ、樹の下には根があるものなんです。そんなことは小学生でも知っている常識です」

男は、ようやく答えに近づいたように、落ち着き払って云った。

「あなたには、見えないものを信じている。そうですね。わたしにも見えないが、信じているんです。さあ、一本づつ樹の下を掘ってみなさい」

巡査は、半信半疑でスコップで桜の樹の下を掘り返した。根に傷つけないように注意しながら、掘り返していた。周りの酔っ払いたちが、もの珍しそうに寄ってくる。三味線が鳴り、太鼓が

叩かれ、手踊り民謡に加えて、昼から若者たちのカラオケと、宴もたけなわになってきたいた。桜の花も風で散り、見上げた空は回転していた。その中で黙々と巡査は穴を掘る。何かにスコップの先が当たる。掘り出してみると、それは、日本刀だった。錆びている。

「それは、三島由紀夫が切腹した刀ですね」

男は平然と云ってのけた。巡査は慌てる。

「なんで、そんなものがここに埋まっているんだ」

巡査は云われるままに次々に桜の樹の下をあちこちで掘り返した。出てくる出てくる。若い巡査には見たこともないものが次々と。

「それは、千人針といいまして、出征する兵隊に寅年の女が縫ったものです。敵弾に当たらないという迷信ですね」

「これは、海月のようにぐちゃぐちゃしていますが、死んだ人の言霊ですね。われわれの中にもいるもんです」

「それから、こっちの得体のしれない化石は、いまはもう現代人には退化してありませんが、やむにやまれぬ大和魂ですな」

そんなものがいろいろと出てくるから、巡査は発狂寸前まで頭が混乱していた。

「見てごらん下さい。桜の薄紅の色を。あれは戦争で死んだ人たちの血を吸い上げて、それで実に美しく咲いているのですよ」

「ひ、ひえー」巡査は、スコップをその場に投げ出して逃げ出した。春はどこか狂っている。

第444話 わたしは誰だ

あなたは、小さいときに童話で小公女や小公子といった本を読んでいなかったらどうか。女の子なら誰でもきっと、自分は母親から生まれたのではなく、どこか高貴な家で生まれて、何かの事情で捨てられたのだ。そうセンチに考えるのも、意外なことに冗談で母親が、おまえは川に流されてきたのをお父さんが拾ってきたのとか、まだ性教育のなんたるかを知らない親が、わたしはどこから生まれてきたの？ という子供の問いに、やはり同じ答えを云ったかもしれない。それで、大概是、自分の親は誰なんだろうと密かに悩んだりしていた記憶があるはずだ。

実は、わたしもそうだった。というより、もう、ずっと前から社会人になっていたが、いまさらながら、わたしに幼児の時分の記憶が欠落していたことに気づいていた。わたしはひとり息子で、両親もよくできた人で、そんな、女の子のような他愛もない夢物語を考えることこそ可笑しいというものだ。だが、よく考えると、我が家には、わたしの幼いときの写真がないのだ。どうしてかと疑問に思ったこともなかったが、親探しという特集記事を新聞で見て、自分も本当の両親から生まれたのかなと、初めて疑ってはならない領域のことまで考えた。考えれば、思い当たるが多々あって、わたしは、この家に貰われてきた可能性がある証拠を捉まえていた。それは、この家でわたしが存在した証拠の写真がいまから十五年前以前には遡れないからだ。そのある一時点からふつりと切れているからだ。そのことについて、わたしは優しい両親に訊いた

ことはない。訊くことこそいままで育ててもらったことに対する恩を裏切る行為のような気がしていた。

そんなふうに疑いを持つと、急に親が親でないように思われ、何かと他人行儀になるからおかしい。

この前も、わたしのために、デパートでセーターが安かったからと、わたしの好みの色と柄を知っていて、母はわざわざみたててくれたのに、わたしはまるで他人のように慇懃無礼なお礼をして笑われた。そう云えば、わたしはこの方、自分の住民票も戸籍謄本も見ただけではない。すべて親がやってくれていたのだから、自分の目で確認したことがないので、なんとも云えないが、確かにおかしいのだった。そのことを両親に訊くというのが怖く、それはきっと両親も同じことではあるまいか。何も知らずに、ずっとこのまま、何の不自由もなく過ごしていれば、いままでの満ち足りた生活ができるのだ。

父はこの町の議員を長くしていた町の名士で、母も病院を経営していた。裕福な家の子として、わたしは大学を卒業してから、父の関与する建設会社の仕事を手伝っていた。

鏡で見る限りは、わたしの顔は確かに父と母の合作であったように、どこか似ていた。皮膚の色、髪の色、そして、なにより斜に構えて見る癖が、親子であるという確証になるほど、そっくりなところがあった。食べるものも美味しく、家も広く、わたしの部屋にはなんだったか。家族で年に数回海外旅行もしたし、あとは、わたしが結婚しないのが不足なだけで、こんな幸せな人生はないというのに、わたしときたらなんということを考えていたのだ。そのことは、あまり思わないようにして、忘れようと、わたしは仕事に打ち込んでいた。

ところが、ある日、わたし自身の体の変調で、また、あの懐疑が浮かんできたのだ。腕が上がらなくなってきたので、外科へ行ってみた。どうも、腕が重い感じがして、回らなくなったのは、よくある炎症であろうかと、何か重いものを持ったか思い返してみていた。肩がぎしぎしと鳴るのだ。

整形外科の医師はレントゲンを撮って、わたしの診察をしたが、こんなおかしなことを云うのだ。

「あなたのご両親は何もあなたに云っていないんですね」

「はあ、何かと云いますと」

「あなたの出生のことについてです」

この肩の上がないことと、出生のことと何の関係があるのだろうか。わたしは思い巡らしても不可解だった。

「そう云えば、わたしの幼児期の思い出がなにひとつないんです。わたし自身の記憶がある時点からその前が空白になっているんですね」

「そうですね。そうですね」医師は何もかも判っているように頷いていた。こんな、初めて会った医師に何故、わたしのことが判るのだ。

「それで、わたしの肩のことはどうなったんでしょうか」

わたしは医師が何も云わないので苛々して訊いた。

「ここでは治療できません」

おかしなことを云うばかりか、レントゲンの写真も伏せて、わたしに見せない。そして、複雑そうに顔をしかめて、天井ばかり見ているのだった。

「まあ、いつかはこんな日が訪れるでしょう。それはあなたがたの宿命です」

医師はまた意味不明のことを口走った。何のことなのだ。

「では、わたしの肩はどこで直してくれるというんです」

わたしは悲しくなって訊いた。

「そうですね。困りました。話していいものかどうか。お母様とお話してよろしいですか」

医師は家に電話して母となにやらごちゃごちゃと話していた。ひょっとして、わたしの肩は癌か何か、大変な病気なのだろうか。わたしは急に不安になってきた。よく、家族の人にと云われるらしい。本人には告知しない医師がそういった行動に出る。医師は電話で了解をとっていた。

「はい、判りました。わたしから話していいんですね。それでは、なにもかも本人にお話いたします」

母と合意ができたらしい。いよいよ、わたしの病名を告知するらしい。わたしは緊張して体が強張った。

「お母様にご了解いただきましたので、わたしから何もかもお話ししましょう」

徐に、医師はレントゲン写真をひっくり返して見せた。信じられないことに、そこに映っているのは肩の中の歯車や精密機器だった。

「あなたの肩は潤滑油が不足しているんです。修理工場を紹介しますから、そちらで直してもらってください。いまは、ロボットも人間そっくりに作ることができますから、記憶までインプットできるんですが、あなたは、子供のいない夫婦に貰われたんですね。そのとき、過去のデータを初期化してしまったから、少年の思い出がないんです」

わたしがロボット。あまりのショックに人並みに意識が薄れてゆくのを感じていた。

第445話 健康茶

いまは、健康茶ブームになっている。様々なお茶が市場に氾濫している。痩せるダイエットティーからビタミン入り、漢方薬、かつての清涼飲料が糖分取り過ぎで体によくないと、そっちのほうに人々は目を向けていた。

ハルカ食品では、新商品の企画会議をしていた。役員がずらり並んだ会議室に、本間商品開発部長が新しく発売する予定の健康茶の試飲を行っていた。

「これからは、地域限定で、そこに行かなければ呑めないお茶ということで売り出すと、観光客の土産にもなります。それと、ターゲットは絞り込む必要があります。万人向けのお茶は無難ですが、それなりにしか売れません。あなたに呑んでもらいたいとセグメントすることで、商品を個人向けにするんです。そこで、わが社の命運を賭けた北国だけのエリアで発売することになります、これがそのお茶です」

会議室はがやがやと新しいパッケージの缶と、ペットボトル、それに試飲の紙コップを前に騒

がしくなった。

「ここにありますが、おじいさん向けの長生き茶は、三杯飲むと死ぬまで生きると云われている高原の長生きの麦茶にボケ防止の公孫樹を入れた、ズバリ『じっ茶』。風邪をひかないために黒豆茶、これは弱っているばあさんにいいお茶で大変呑みやすい。ズバリ『ばっ茶』。こちらは、センナが少し入った便秘に効き、吹き出物など美容にいいお茶で、娘さん専用で、ズバリ『姉っ茶』。働き盛りのお父さんには糖尿病の予防にもなる赤松の葉を煎じた、ズバリ『とっ茶』。苛々が昂じた現代の主婦のために、蓮とヨモギを煎じた、ズバリ『かつ茶』。それらを缶とボトルで一斉に発売いたします。他県では意味が判らない方言をネーミングにしていますので、まさに地域限定。スーパー、コンビニの自販機、棚を埋めると、その在庫だけでもかなりの納品が期待できるでしょう」

本間部長はかなり興奮していた。いままで、ハルカ食品で、これほどのラインを一気に発売したことはない。そのために広告宣伝費もかなり投入する。大きな賭けではあった。これから売り出す食品の成功のキーワードはヘルシー、ナチュラル、ダイエットだ。そのすべてを網羅している。しかも県産品を使用しているので、物産協会からの推奨も受けられる可能性がある。駅や空港、観光地でも大々的に売り出すことができる。

会議でも、社長以下、すでに夢の中だった。もう、売れて売れてしかたがないといった想像までしていた。

「よし、やろう」

社長以下、みんなやる気が湧いてきた。と、急に腹が刺しこんだ。この健康茶、みんな試飲とばかり、さっきからすべてを大量に飲んでいて、腹の中はお茶でげぼげぼ、混ぜるな危険、腹の中で混ざると、それは強力な下剤となった。全員、トイレへ駆け込んだ。

工場ではいよいよ生産開始され、生産ラインは順調に流れているように思えた。原料のほとんどは県産品を使用するというので、手配も完了していた。すべてが、順調すぎて怖い。何か落とし穴がなければいいがと、幹部社員も心配するほど滑り出しは好調だった。

新聞は一面広告を出した。問屋を通して、自販機にもステッカーを貼る。缶に付いたシールで漏れなく当たるプレゼントも用意して、CMガールにアフタヌーン娘を起用するといった力の入れよう。工場ではてんでこま이었다。やたら原料が増えた。よく見ると判るが、似ている茶葉があった。現場では慣れないこともあり、大量のセンナと同じ効果のある野草をどっさりすべての茶に入れてしまった。

さあ、いよいよ新発売の日、ハルカ食品の全社員が、スーパー、デパートの店頭で風船を子供たちに配ったり、マネキンさんを頼んで、試飲販売を行っていたりした。トラックは県内全域にどんどんと配送していった。

「父っちゃん、おめのお茶だど。とっ茶が、どったら味すんだべな。呑んでみが」

「ばっ茶だど、おらのお茶だ。どれ、試してみるが」

発売記念のお試し価格は半額だ。どこでも飛ぶように売れていった。報告が続々と本社に入る。社長はほくほくだった。ところが、午後から大変な騒ぎが起こった。お茶を飲んだ人々が次々と腹を押さえてトイレに駆け込む。強力な効き目のお通じにいいと云われている葉っぱだったからたまらない。スーパー、デパートのトイレは長蛇の列、駅から公衆便所も人が並んだ。みんな

必死で顔から脂汗。救急車はひっきりなしに街を走っていた。病院は満員、ついに保健所の職員までがかりだされた。トイレに一旦入ったものは、なかなか出てこない。止まらないのであった。

「ううう、出る」と、悶え苦しむ人々、通行人たちが、路上に蹲る。電車、バスの中も大変な騒ぎだった。

「く、車を止めてくれ」

あちこちに車が乗り捨てられ、運転手もとにかく建物に駆け込む。街はパニックになった。みんなの共通した飲み物はあのお茶だった。さっそく保健所の立ち入り検査がハルカ食品の工場に入った。お茶は出荷停止、どこでも販売を止めた。

マスコミが事務所に殺到した。ただ、ひたすら陳謝する社長以下幹部たち。

「これからどうされるつもりですか。被害はかなり広まっているようですが。ただ、幸いなことにみんな症状は軽いようですが」

社長は汗を拭き拭き、しどろもどろ。

「そのお、つまり、下痢には便秘でして、便秘には下痢ということで：：」

「何を云っているのかさっぱり判りませんが」

新聞記者は呆れてどう対処するのかと返答を迫っていた。そこに、工場長が試飲のお茶を持ってきた。

「こ、これから、下痢によく効く葉っぱのお茶がありまして、それを新商品で急遽発売いたします」と、お茶を濁した。

第446話 ペテロは三度嘘をつく

背の高い姿勢のいい司祭様が、わたしの髪に聖水をかけ、額に聖水で十字をしるした。十歳のとき、わたしにもうひとつの名前が増えた。ペテロ博史。洗礼は何かとても後悔するのではないかと思った。子供心にも、もうわたしは戻れない聖域へと入ってゆくのだという緊張感があった。神の僕となると、もう、どこにいて何をしても常に、悪いことはできないという意識がわたしを束縛していた。

聖アンデレ教会はプロテスタントの聖公会に所属している。青森でも歴史のある教会で、明治から続く。そこを訪れた関係者に明治二十年頃、牧師として青森に赴任してきた詩人の山村暮鳥がいる。啄木の妹もひと月の間、教会に身を寄せた。寺山修司が付属幼稚園を出ている。わたしが敬愛していた藤林先生は、シュウちゃんとしょっちゅう気にして呼ばれていた。保母さんにとって、どんな人間もただの子供だったのだ。その思い出だけで見ている。

わたしも幼稚園はそこで、いつもクリスマスには聖劇をするのである。キリスト降誕の物語を

幼稚園児たちが一生懸命、父兄の前で演ずるのだ。衣装は本格的なものだが、毎年使うので、無駄にはならない。追手を逃れて、ベツレヘムにきたマリアとヨセフが天使たちに見守られながら既にキリストを産む。その兆しの星を羊飼いたちがみつける。三人の博士たちがお祝いの品を持って、ベツレヘムまで旅してくるというあらすじなのだが、わたしは三人の博士のひとり演じた。寺山も同じ役をやった。寺山修司論を書いた本の中で、寺山が演劇に入ったきっかけをその聖劇にあると言及していたが、何千人といままで演じてきて、彼だけがとなると疑問だ。

藤林園長が、わたしのクリスチャンネームをペテロとした名づけ親になった。何故、わたしにペテロと付けたのか、それはわたしが同期の中で一番背丈があり、取りまとめ役であり、そのくせ小心者で、言い訳がましく、その場しのぎの嘘をつくという弱い性格も見ぬいていたからだと思った。ペテロはキリストの弟子の中で最長老であり、みんなの纏め役であった。最後の晩餐のときに、キリストにみんなが忠誠を誓うときに、キリストはペテロだけに、あなたは三度、わたしを知らないと言おう、そのとき鶏が三度鳴くと予言する。

小学生のときは、東北教区を転勤してきた若い執事について、聖書の講義を受けた。遊び盛りの子供が日曜日のたびに聖書を暗記させられる。それが嫌で嫌で仕方がなかった。中学、高校になっても、日曜学校には通い続けた。部活で行けないとき以外は欠かさず礼拝に出ていた。真面目な信者だった。理事長も兼ねていたのは版画家の佐藤米次郎さんだった。医者や先生、事業家など多士済々の顔ぶれがいた。午前中に礼拝が行われる。司祭様は時事問題にも触れながら、聖書の言葉と対比してお話された。聖餐式では、薄い麩をパンとし、キリストの肉にみたて、葡萄酒をキリストの血とし、子供にも少しだけ本物の酒を飲ませた。聖餐式をすると、一週間の罪がすべて浄化されるような敬虔な気持ちになるのだった。

わたしが、教会に行かなくなったのは社会人になってからだった。藤林先生は、わたしの結婚式に出席した年に病死した。司祭様も白血病で苦しんで、子供の体のように小さくなっていた。わたしが県病に見舞いに行った二日後に亡くなられた。あんなにやさしくいい方が、何故、苦しんで亡くなるのだろうか。それを見ていて、神も仏もあるものかという気になった。どんなことをしても人間は救われないのだと。

わたしは、結婚してから一時、ギャンブルに狂った。女房に嘘をつき、夜中まで遊んだ。そして、子供に手もかかるときに家を放っておいて、授業料と称する金を注ぎ込んでいた。鶏さえ鳴かなかったが、それがひとつの嘘だった。

また、立て続けに女房が懐妊したので、性的に強いわたしは、出張のたびにトルコ通いをしていた。浮気はしたことがないが、仕事という名目で遊んでいた時期があって、それがひとつの嘘になった。

最後の大きな嘘は、自分の行き方が嘘の上を歩くことで果たしていた。欺瞞な生活は、虚構の世界に自分をのめりこませることで、家族や仕事を振り向かないことだった。ある意味では冷血な離れた自分が、ダダリストのように傍観していた。

わたしは、性格というものは生涯変わらないものと思っている。いつもどこかで言い訳を考えている卑屈な性格は、いまでも幼少の頃も変わらない。それが、つい嘘になる。その場しのぎの発言が、ぼろりと嘘となって、場をとりつくろうのだ。

そして、ついにわたしはペンで嘘を書くというところまで、行き着いていた。その嘘なら許さ

れる。原稿用紙の罫目の中は自由自在の虚言の場となった。しかし、どこかで見ている冷徹な視線があった。それは誰か。

わたしが嘘をつく、どこかで、鶏が鳴いた。それは実にぞっとする生理的に嫌な鳴き声だった。昔、わたしの家では養鶏をしていた。家の裏に鶏小屋があって、悪いことをすれば鶏小屋に入れられた。自分の背丈くらいもある鶏が怖かった。それがトラウマとなり、いまでも鶏肉だけは絶対に食べない。

だいぶたってから、故藤林園長の代わりに園長をしている姪に、「また、教会にいらっしゃいよ」と、誘われたが、わたしはもう信心もなにもない。「いやあ、こんな汚れた体で、祭壇の前に出るのが怖くて」と、云うと、「そんな純粹に考える人こそ、もう一度来てもらいたいな」

先生はそんなことを云った。かつて、高校生の娘だった、いまの園長も老けた。同時にわたしも白髪頭だ。いまさら何を祈ることがあろうか。ペテロならずもいまのわたしは、キリストをはっきりと拒絶できるのだ。

第447話 出会い系サイト

いま、人々が一番求めるのは、人であった。これほど身近に人間がいても、互いに許しあい、腹を割って話す相手を求めたり、恋人を探したりするのが、現代人は苦手なのだ。

世の中はセルフサービスになり、自動販売機化すると、買い物しても人と話す機会が薄れる。ケイタイ、パソコンのメールの普及で、直接会話も苦手になったせいもある。

出久野望は、三十過ぎても友人も彼女もいない。ただ、メル友なら何十人もいる。相手の顔も本名も知らない友達だ。どこに住んでいるのかも判らない。男か女かも定かではない。相手が嘘をついていればそれまでだ。それでも、真剣に悩みごとなどを聞いてくれるうち、近くの知人や姉妹よりもっと身近に感じられるようになる。毎日、メールのやりとりだけでなく、チャットもやって、文字の会話をリアルタイムにしている。

そんな望が、出会い系サイトにアクセスしたのは、自分にもそろそろ恋愛対象が欲しいと思い初めて、誰か異性を求めるために怖々と検索エンジンの窓に出会い系と打った。すると、ばらばらと何千と出てくるではないか。望は驚いた。こんなに沢山あるものなのか。いままで、女性に興味がなかったわけではないが、パソコンお宅歴が長いうち、内に籠る性格になってからは、チャンスを悉く逸していた。だんだんと会社から家へ、自室へと直帰するようになってからは、いつも外では孤独だった。彼女ができる体型でもない。かなりの肥満になって、体だけでかくても気は小さいときている。

望は、そのサイトの健全そうなのをひとつ選んでアクセスしてみた。出会い系というと、高校生の売春の温床のように思われているが、多くは健全なのだ。みんな真面目に恋人や友達、趣味の仲間を探しているのだ。

望は自分のアドレスや趣味、血液型などを入力して登録した。自分の好みのタイプを絞れるか

らしい。外れは少なくなる。それが、コンピュータのいいところだ。

望は、背丈の小さい、ほっそりとした口リ系を好んだ。地域は近いほうがいいから、自分の住んでいるエリアにし、年齢は幅をもたせて、十八から三十までとした。趣味についても、体育会系でも理科系でもない文科系の人を選んだ。すると、向こうも、望のような太いが優しい男性を希望する人と、たったひとり繋がった。理想のタイプというものは、どんな人にも当てはまるもので、太目の人が好きな人もいるし、背の低い人を好む人もいるわけで、一概にスマートな長身がもてるわけでもない。

試行錯誤しながら、次々に相手を取り替えるのもいいが、なかなかこれぞといった相手には巡り合わないものだ。望には年齢的にももうそう遊んでいる余裕はない。そろそろ結婚相手としてつきあってみたい。それで、すべての条件にぴたりとお互いにくる相手が、この県内に一人だけいたのだ。もっとも、登録しているのは、この県内で何千人いるか判らないが、全人口の中から抽出したわけでもないから、パソコンのできない人の中にも、このサイトに登録していない人の中にも、もっと素晴らしい女性がいるかもしれない。そんなことを考えたらきりが無い。

望は、大和撫子という二十六歳の女性とメールのやりとりをすることになった。いろんなチャットの会話にしても、相手の性格がよく判る。互いにぴったりするのがよく判る。ただ、引っ込み思案なのまで似ていて、ごり押ししないところが好きでネット上での交際をしていた。互いに失望しないように、IP電話で、テレビカメラでの会話はしない約束だった。だんだんと親しくなっても、互いの顔写真を送りあうこともしない合意があった。相手がどんな顔をしているのかと互いに想像しあうのが、文通のいいところでもある。そのほうが、愛は熱烈になりやすい。現実を想像は遥かに超えるのだ。

二人で映画を見ることもあった。チャットを繋げたまま、同じネットで流している有料の映画を見るのだ。同じ時間に同じ映画を見て、話もできる。それは、映画館の中にいるのと同じだった。ただ、隣に手を伸ばしても相手がいないだけだ。

また、海外旅行もネットのライブカメラの中継で共有しあっていた。いま、ハワイ島の夕陽を二人で眺めていた。そうかと思うと、香港の夜景をビクトリアピークから見下ろしていた。すべて、自室にいながら、二人で同じ光景を並んで見ているのだ。そうして、旅行に行ったつもりで会話を楽しむ。

望は撫子とヴェニスにもいた。フロリダの海岸を楽しんでいたとき、望は勇気を出して求婚した。しばらく、無言の時間が続いたが。絵文字でニッコリマークが書かれた。それはOKのサインだった。

それから数日後、二人はネット上で婚姻届にサインし、押印して市役所に届け出た。いまや、印鑑証明から転出、婚姻届までネットでできる時代になったのだ。互いに顔を見たこともない者同士が、結婚する。それも、インターネット上でだ。それだけではなかった。二人は結婚しても一生、同居することはないのだ。このまま、仮想の家に棲み、仮想の新婚生活を別々の家において送ることになるのだ。セックスレス夫婦が増えている。男と女は何もセックスだけで繋がっているのではない。言葉でも十分感じるし、離れているバーチャル・リアリティの世界だけで、汚い現実を見なくてもいい。夫婦別姓で、日常生活になんら変化はない。

ある日、望と撫子は街中ですれ違った。互いに、ちらりと顔を見ていた。そして、心の中で密かに思っていた。—あんな人と一緒になったら災難だわ。まさか、互いが夫婦であったなどとはゆめゆめ思わなかった。

第448話 話しかけるな

夫婦の会話が最近とみになくなった、と美津子は感じていた。結婚した当初は、真っ先に勤め先から帰ってきて、二人の時間を大切にしようね、なんて、いまじゃ考えられないことを云ってのけた雅彦も、次第に、職場のつきあいだと遅くご帰宅だ。大概是呑みと麻雀なのだ。それでも、同じ勤め先に夫婦でいることだけがせめてもの救いだった。部署が同じだったから、一緒に仕事をすることもある。普通は夫婦というものは部署を離すものなのだが、息の合った仕事ぶりがかわれていて、たまに仕事で同行することもあった。夫婦共稼ぎでいられるのも、子供ができないということもあった。子供でもできれば、生活にメリハリができ、それはそれで大変だが、楽しいこともある。夫婦の会話がなくなったのは、結婚して十年が過ぎた頃からだった。同じ人間が朝晩顔を合わせ、職場でも顔を合わせるとなると、新鮮さはまるでない。

それに不満を持っているのは美津子のほうだった。雅彦はいい。勝手に自分の好きなことをして遅くまで遊んでいればいいのだ。美津子は一応、妻として買い物もしなくてはならないし、ご飯、お風呂、掃除とすることはいっぱいある。どちらかという、美津子はおしゃべりが好きなほうで、雅彦は口が重いほうだ。亭主が帰宅するなり、ぴったりと美津子は後ろからついてまわり、あんなことがあった、こんなことがあったと立て続けに喋りまくる。雅彦のほうは天皇陛下のように「あっ、そう」とか、「うん」とか「すん」とかしか云わない。それが、人の話をまともに聞いていないからと、美津子は憤懣やる方ない。

いつか云おう云おうと機会を窺っていたが、そのときがやってはきた。この際だから、夫婦とはどうあるべきなのか、愛までも確かめてやる必要があると、美津子はじっと待っていたのだ。

夫婦にいつもの共同の作業指示がきた。滅多にないのだが、ベテランの夫婦だから、決まってこの二人のチームに作業命令が下るのだ。トラックで現場まで向かい、器具機材を下ろすと、慣れた手つきで作業を続けていた。他の人たちは離れたところで眺めているのだった。難しい仕事なので、この夫婦に任せておこうということだ。

雅彦は緊張した面持ちで、ビニールテープなどを出していた。美津子が、脇で補助していたが、このときとばかり、夫に話し掛けた。

「あなたねえ、わたしたち一緒になって十年よね」

「うん」

「その間、旅行へ連れていったことが何回あると思う？」

「うん」

「また、その、うん、だわ。何よ、人の話なんか何も聞いていないじゃないの。あなたにとってわたしというものは、空気よりもっと悪い。よく、夫婦というものはそのうち空気みたいな存在になるっていうけど、あなたにとってわたしは空気以下ね。まるで真空だわ。何もないのと同じだわ」

「うん」

「また、うん。うんしか云えないの。なんとか云いなさいよ」

「すん」

「まあ、悔しい。すっかり人を馬鹿にしているわ」

雅彦は夢中になって仕事をしていた。雅彦にとっては集中することが仕事だった。人の話なんか聞いていられない。

「もう、わたしなんか愛していないのよ。あなたは、いつも残業だなんて、遅く帰るのは、きっとわたしと顔を合わせる時間を減らすためなんだわ。絶対にそうよ。そうに決まっている」

美津子は次第にヒステリックな声になってきている。

「あなたは、手を握ってくれたこともしばらくない。あれほどキスも食後三十分以内にしてくれたのに、いまは、なあに、目も合わせようとしな。一体なんなのよ。あなたにとってわたしは何？」

美津子はとうとう涙まで零していた。雅彦は完全に無視して作業を黙々と続けている。美津子も口は休みなくしゃべっているが、手は夫の手に合わせて動かしていた。

「結婚記念日も誕生日も何もないものね。よその夫婦はちゃんとクリスマスもやれば、生活を大事に演出しているのよ。うちだけだわ、なにひとつあなたから買ってもらったこともない。いいえね、ルイ・ヴィトンのブランドものを買ってくれとは云わないわ。賈物のビニールバッグでもいいのよ。あなたのその気持ちが欲しいのよ。ねえ、わたしって間違っているかしら。間違っているといえば、あなたと結婚したことかしら。ひょっとして、あなた、他に女ができたのじゃないの。だから、わたしとは口も利きたくないのよ。ええ、そうでしょう。きっとそうなんだわ。ねえ、なんとか云ったらどうなの」

すると、いままで我慢していた雅彦が鬼のように振り向いて怒鳴った。

「うるさい、おれに話しかけるな。おれたちはいま何をしているのか判っているのか。工事現場で見つかった不発弾の処理をしているんだ。これから信管を抜くというときに、ごちゃごちゃとうるさいんだよ」

第449話 疲労宴

息子の結婚式の日取りが近くなってきていた。親は口出ししないで、若い人たちに任せようと思っていたが、傍で見ている、つい口を出したくなる。ホテルからきちんとすでに印刷して出欠のはがき、封筒などが一式上がってきていたのに、千葉にいる息子からは何の連絡もない。わたしは、印刷をなりわいとしてやっていたので、少し手伝ってやろうくらいに考えていたが、だんだんと時間だけが過ぎてゆくのだ。はがきに書いてあるいついつまでご返信くださいという締め切りが近くなってくるというのに、名簿を送ってこないのだ。苛々して、何度も電話で催促したが、本人は忙しいからと、云っている口調がのんびりしていた。みんな予定がある。こんなものは早めに出すに限る。でなければ、先に予定が入ってしまうものなのだ。

日曜日、息子には関係なく、自分の知人友人、先輩、親戚をリストアップしていたので、親の

関係でも先に出そうと、半日でやってしまった。何も難しいことはない。ようやく、息子から名簿が送られてきた。メールにテキストファイルで添付してきていた。それは、若い二人の友人関係、そして上司だ。それをCSVファイルに変換して、住所録に読み込みさせて印刷した。すると、その名簿の中に別れた女房の名前があるのを見つけた。友人に入れていた。いいのか。一瞬、複雑な場面を思い浮かべていた。確かに、あいつらの母親には違いない。ただ、後妻はどう思うか。後妻は後妻で、本当の母親なら、息子の式を見たいだろうから、こっそりと呼んでやったらと、殊勝なことを仰言る。一生に一度しかないことだから、わたしは気にしないわよと、云うのだが、当日、披露宴で、友人席で出席して見ている、見られる方も何か意識するし、見る方も、本来なら花嫁花婿の傍に立つべき人がいまは他人で遠くから見ることも残酷だ。どうしたものかと、わたしは老父母に少し相談した。

すると、両親はいとも簡単に、何年経ったかえ、十五年ぐらいかえ、殺人事件の時効も十五年だってね。もう、みんな子供も大人になったし、わだかまりもないことだ、いいんではないかえ、と、なんと離婚と殺人事件を一緒にしてくれた。まあ、出席する人達も、半分は以前の女房の顔を知っているわけで、どんな感じがするんだろう。

まあ、お互いに恨んでも憎んでもいないのだから、すべて時間が解決してくれるのだ。それも、ひとつの何かのふんぎりのような気がした。

また、バラバラになっていた友人たちがまた一同に集まることになるのも嬉しかった。三人が破産して、住むところも判らなかった。ようやく、探し当てて、電話をしてみた。懐かしい友人の奥さんが電話口に出ていた。元気そうで安心した。みんな老舗の商売をたたんで、どこかで生きていた。この七年くらい全員が集まる機会はなかった。けども、結婚式とは云っても金のかかることだ。中には随分と無理をして出てくる者もいるのだろう。心苦しい感じもした。こんなときでもなければみんな集まらないから、これもまた昔のように顔を合わせる機会なのだろうが。

去年から親戚が三人亡くなった。世代交代だった。親戚が集まるのは最近は葬式よりなかった。みんなで、今度は、めでたいことで集まろうねと、話していた。黒いネクタイはできればもう締めたくない。白いネクタイで集まりたい。そんな話に合うように息子の式が近づいた。

ホテルとの打ち合わせ、祝辞を頼む人に挨拶。タクシーチケットから遠方の客の宿泊手配。着る服も出してみなければ。いろいろと慌しくなってきた。両家を代表しての挨拶もある。それは本を読んで、型通りだ。面倒でなくていい。余計なことは云わぬが花。前日になると、親戚や姉妹が続々と我が家に顔を出す。その対応でも忙しい。

そして、ついに当日がやってきた。それまでの準備でも疲れていたのに、これからは気疲れだ。親戚の顔見せをし、式が終わり、写真撮影も済んだ。いよいよ披露宴だ。親が一番端っこで目立たないようにしているものだ。どこにいるか判らないようにひっそりと遠くから眺めている。

ただ、わたしの性分で、小さいことにも気がつく。ホテル側でやることにも口出しして、やれビールがない、灰皿だ、子供さんにジュースをと、阻喪のないよう四方八方に気を配りすぎる。そして、夫婦で各席を回り、お酌しながら挨拶しながらも、ピリピリと一部の隙もないよう、目配り気配りを怠らない。緊張のあまり、具合が悪くなってくるが我慢する。別れた女房の前の席に夫婦で回る。顔を見たことのない後妻は笑顔でお酌する。元気そうね、と云った目だけで挨拶

挨拶を交わす。互いに年取った。孫のいる年齢だ。それ以上のことはない。二百人いると、二百分の一でしかない。そうだ、息子の年の分だけ老けたのだ。互いに再婚していたから、いまは他人と同じなのだが、子供たちはどこかで繋がっている。現にこうして勝手に呼んでいるのだ。

古い友人たちが、久しぶりに集まっていた。その席では、ただ懐かしさがこみ上げてくる。クラス会と同じ昔日の顔が重複してくる。いつまでも中学の仲間と思っていたが、坊主頭もいいじいさんになってくる。再就職して以前より遅くなったやつ、リストラで、いまも奥さんに養われているやつ、大変なときに来てくれる。

さて、いよいよクライマックスの花束贈呈。そして、両家を代表しての謝辞。わたしはマイクの前に立った。普段からでも口べたなのが、今日は、極限まで疲れきっていた。ライトの中、ストロボもたかれる。みんなの顔が暗がりの中にぼんやりと見えている。いや、見えていない。何も見えない。白くなっている。おや、変だぞ。わたしの頭の中も真っ白だ。いま、何を云う場面なのか。本に書かれていた挨拶も何も真っ白。一瞬の沈黙が、二瞬になり、三瞬になり、しーんと静まり返った会場にいつまでも時間が止まっていた。

第450話 回覧板

港町に引っ越してきたばかりの高梁は、いままで都会暮らしをしていて、地方都市というものの生活経験がない。まだ独身だから当分はドサ周りの転勤が続くだろう。二階建のアパートの一室を借りて住んでいた。

それは、その朝というより未明に起こった。高梁の部屋のドアを何者かが、大声で叫びながら壊れるような強さで叩いているのだった。高梁はそれでびっくりして飛び起きた。時計を見ると夜中の三時半だ。

「起きろ、おい、隣のもんだ」

火事でも起こったのかと、高梁はパジャマのまま、急いでドアを開けた。

「な、何が起こったんですか」かなり焦っていた。高梁の声も震えていた。ものすごい形相の中年の男がドアの前に仁王立ちして、云った。

「はい、回覧板。これから仕事だからよ。船は朝が早い、すまねえな」

にんまりと笑って回覧板を手渡してゆく。船員だろうか、荒っぽい性格だ。腕に彫り物がある。高梁はとんでもないアパートに越してきたと思った。港町は船乗りだけでなく、よそ者が多く、何かと町は荒っぽい雰囲気はあった。周りには工場も建っていて、空気も悪い。仕事でなければ、こんなところに住みたいとは思わない。

いまは、地方都市でも、なかなか隣人とのコミュニケーションはなくなったようで、隣は何をする人ぞだ。顔も合わせねば、何をしている人か、名前も知らないで何年も暮らしている人がいるくらいだ。だんだんと都会の悪いところが伝染してきていた。引越しの挨拶に高梁が近所を回ったときに、みんな余計なことをと、挨拶代わりに配ったタオルを返してよこす人もいたくらいだ。

「よろしくお願ひいたします」と、挨拶されて困惑している。これからも関わりなく生きていたのに、あんたなんかとは話もしたくない。みんなそう思っていて、いい顔はしていない。

隣との唯一の関わりは回覧板であった。それとても、玄関前に置いたり、郵便受、新聞入に差し込んで終わりなのだが、このアパートは底がないから、玄関に置くと雨に濡れる。新聞入は小さくて入らない。仕方なく、ドアを叩くことになる。仕事で日中は留守の人が多し。高梁の反対隣の人には夜のお勤めらしく、昼間は寝ている。朝なんか「回覧板です」と起こそうものなら、機嫌の悪いこと。

いつかは、恐る恐るドアを叩くと、ブスツとした透け透けのネグリジェ姿で、髪をアップにしてカールを巻いているスツピンの女が出てきて、

「朝帰りなのよね。起こさないでくれる。あんた、よく見ると可愛い顔してるわね」

不機嫌な眠い顔が急に笑ったりするから、なんとも怖いアパートだった。

回覧板というのも、週に二度は回ってくる。内容はくだらないものが多い。役所の広報から、学校の新聞など、子供のいない家なんか関係ないもの、通販のカatalog、共同購入にしても、すべて業者の商売だ。警察からの注意と指名手配の似顔絵、町内で亡くなった人の葬儀のお知らせと、普段、つきあいのない人にはどうでもいいことばかりだ。自分の押印欄にハンコかサインをして隣に回すのだが、高梁は殆ど見ていない。

「おう、いるか、大統領」また、隣の怖いにいさんがドアをどんとどんと揺れるほど叩いている。今度は大統領ときた。時計は夜中の三時。高梁は、頭にきて、ドアに張り紙をしていた。「回覧板はドアの前に置いてください」と、いう紙も、暗くて見えないのだろう。効果がなかった。泣々と起き出した。

「おう、こちとら忙しいんだ。とっとと出てきやがれ」

「す、すみません」高梁は眠気もとれた。これでは安眠妨害だ。一度起こされると、朝まで悶々として眠れない。こんな日が週に二回もこれから続くというのは耐えられない。

高梁はドアの前に大きな郵便受の箱を買ってきて置いた。大きく、夜光塗料で、「回覧板はこの中へ」と、目立つように書いた。これで大丈夫だろうと、安心していたが、その翌日。

「こんちくしょう。てめえ、ぶち殺されてえか。おれは、こんな箱の中に入れて安心できねえ性質なんだよ。大事なものは手渡しっていうヤクの密売でもそうだ」

高梁は結局、どうしても起こされてしまう。

「は、はい、すみません」そして、おどおどと毎日、いつ来るかいつ来るかと怯えて暮らさねばならないのか。

翌日、高梁はホームセンターから土嚢をたくさん買ってきた。隣との境目に土嚢を積み上げて、バリケードを作った。ドアを叩けないようにすればいいのだ。ついに、高梁は自衛手段に出た。たかだか回覧板のためにどうしてそこまでしなけりゃならないんだ。自分の弱さが情けない。

バリケードは効果があった。ドアを叩くことがなくなった。しめしめ、これでぐっすりと眠れるぞ。高梁は安泰の日々を送れると思っていた。

夜十時に、「高梁さん。おられますか。宅急便です」と、たまに来るのは配達か。回覧板ではなかった。それにしても、回覧板はどうしたのだろうか。ちらりと高梁は気にしていた。こんな

夜でも時間指定で宅急便も来る。

「着払いになっています。ハンコと集金よろしいですか」

どこからだろうか。本のように薄い包みだ。着払いというのが気にかかる。差出人が書いていないのが怪しい。ただ、会社の書類だったら、明日使うかもしれない。

高粱が包みを破って中をあらためると、なんと、中から回覧板が出てきたではないか。とうとう、隣も対抗措置に出たのだ。今度は、こっちに出費を迫る。とんでもないことになった。このままでは、いつか隣に殺される。高粱は、青くなってそそくさと引越しの準備をし出した。どこか別のアパートを借りて移ろう。

引越しはまるで夜逃げのように一日で完了した。もともと独身で荷物も少ない。がらんとした部屋に回覧板だけがぼつんと寂しく置かれてあった。隣の人も、その隣の人も待てど暮らせど回覧板が回ってこない。どこかで止まっているのだと、町会長もどこかにある回覧板を探していた。回覧板はついに「返らん板」になってしまった。

第451話 イワンの街

荒涼たる砂漠と原野が続いている。昔は、この辺りも水田であったというのが信じられなかった。所々に枯れた木や草がぱやぱやと生えている程度で、無毛地帯とはこんなところを云うのか。戦争が長引いて、爆撃に次ぐ爆撃で、農民たちも兵隊に取られると、働き手を失って、田畑を耕すものがない。次第に荒れてくる。土地は自然に任せてもいいのだが、人間の手で潤いを与えてやることも必要だ。それが、大概にして人間どもは自然を荒廃させるものなのだ。ことに戦争は枯葉剤を撒き、ナパーム弾で焼き、焼夷弾に油を撒く。数年にわたる激戦地は草木も生えない荒地になってしまうのだ。

その街は、民族も違う。国の端にあり、隣町まで五百マイルも離れている。隔離された街だった。かつては異民族が支配して、ここに文明を築いた。それが、近代化の波に乗り、石炭の露天掘りで街は活気を帯びて、ホテルは建つ、ビルは林立する、ショッピングセンターは乱立するといった、近代化が急速に進んでいた。それが、ここにきて、隣国との長引く戦争で、電気はストップしたままだ。原発が破壊され、火力発電所、配電設備などが破壊されつくされた。復旧の目途どころか、まだ戦争は続いているのだ。

敵国の軍隊が、攻めに攻め、ようやくこの国の奥地のイワンという街に辿り着いた。緑や作物を枯らす薬剤を国中に散布したため、この辺りも緑は見当たらない。すでに、反撃する能力を失って、発砲も返ってこない。それでも、それが却って不気味で、歩兵たちを震撼させた。あまりにすんなりと敵兵を受け入れる街というのも逆に怖いものなのだ。何か落とし穴が待っているような気がしていた。

道路には車が放置されていた。車が走っていないのは、ガソリンが底をついたからだ。電気も停止したままなので、昼でもどこの商店も暗い。その通りをリヤカーで荷物を運ぶ人々や、通行

人がいたが、みんな衣服はボロボロだ。顔も黒いのは、こびがたかっているのだ。それ以外ではなんら変哲もない、平和な街に見えた。

兵隊が、銃を手に建物沿にじわじわと警戒しながら進んでいると、道端に風で飛ばされている紙屑があった。紙屑と思ったのは、なんと札束だ。百ドル紙幣で百枚の束。一万ドルがいくつか、転がっているのだ。兵隊たちは、争うように札束を拾い集めていた。道路がきらきら輝いているから、何が落ちているのかと思ったら、一面に金貨が落ちている、というより敷き詰められていた。半信半疑で、手に取ると、紛れもない本物の金貨だ。もう、戦争なんかどうでもいい。兵隊たちは必死で金貨も掻き集めて、ポケットというポケットに詰めこんだ。みんな、腰回りや胸が異常に大きく、重たそうだった。

街の人々は、その金貨の上を踏んで歩いている。札束も無視して、ゴミと同じ扱いだ。「どうなっているんだ、この街は、まるで金に困っていないようだが、みんな貧乏くさい格好しているじゃないか」

兵隊たちは貧困と金の関わりが理解できなかった。

子供たちが道端にしゃがみこんで、何かで遊んでいる。

「へい、坊やたち、何で遊んでいるの」

兵隊たちが見たものは、金塊やダイヤだった。どこから持ってきたのか、指輪や黒真珠のネックレスなどを、石で壊して遊んでいる。兵隊たちは玩具だろうと、笑って見ていたが、兵隊の中に質屋がいて、どれどれと鑑定し始めた。玩具にしてはよくできているから怪しんだ。質屋は真っ青になって叫んだ。

「おい、こいつは本物だ。しかも十カラットもあるクリアなものばかりだ。このひと掬いで時価五億は下らないだろう」

兵隊たちが、街をくまなく搜索したが、敵兵が潜む様子もない。商店はすべて閉まっていた。デパートもスーパーも営業していない。銀行は入口が壊されて、そこから子供たちが出入りしていたようだ。子供たちが数人、中で遊んでいたから、兵隊たちが注意した。

「こら、泥棒はよくないぜ」

すると、子供たちはきょとんとして、

「泥棒って、何のこと」

ここの子供たちは泥棒の意味も判らないらしい。また、何かを金庫から出してきて遊んでいる。見ると、ロレックスの腕時計、ノートパソコンの新品まである。腕時計も百万以上はする。その他に、シャネルのバッグなどの高級ブランドものがごろごろ床に転がって、ままごとの材料にされている。

「どうなっているんだ。この街は、金銀財宝に何の興味も示さないとは」

兵隊たちは、指揮官の驚嘆を余所に、そういったものの略奪に余念がない。みんな、もう戦争なんかどうでもよくなっていた。目の色が変わってきていた。

大隊はあまり奥深く入りこんだため、補給部隊が追いつかないでいた。戦闘で立ち往生して、この街を占領した大隊は孤立することとなった。補給路が断たれたので、飲用水と食料が切れた。仕方なく、現地で調達しようとした。指揮官は、街の通行人を掴まえて尋ねた。

「われわれは、腹ぺこで喉もたまらなく渴いている。千人分の食料を提供してもらいたい。ただ

とは云わない。ここに十万ドルがある」

と、さっき、道端で拾い集めた札束を示した。すると、ぼろぼろだが、ステッキに帽子をかぶった紳士が、首を横に振る。

「そんな、食えないものと交換はしません」

食えないもの、確かに札束は食えない。指揮官は大笑いした。兵隊たちも、昨日から飲まず食わずで、ふらふらしながら、家の戸を叩いた。

「何か、飲むもの、食うものを分けてくれ。ただとは云わない」

ちょうど、食事時で、一家五人が、小さなチーズとパンを切り分けていた。ミネラルウォーターの瓶もある。

「頼む、ここにダイヤとオメガの時計がある。これと交換してくれないか」

兵隊が懇願したが、みんな無言で首を横に振るばかり。

「これだけあれば、一生遊んで暮らせるんだぜ。それをパンひと切れと交換すると云うんだ。悪くない話だろうが」

兵隊はついに怒った。すると、その家の主が重い口を開いた。

「いや、たとえ、宮殿をくれるといっても、この街の人たちは水の一滴もくれないだろうね。ここでは、食い物が貨幣なのだから。食えないものはどんな高価なものでも、ただのガラクタです」

そう云って、憐れみの表情をした。

多くの兵隊たちは、子供を騙して、武器を玩具だと、ジュースなどと交換していた。子供たちはころりと騙されて、兵隊からピストルや銃を貰って遊んでいた。大人たちはケチだが、子供はくれるというので、みんな武器と食べ物、とりわけ子供のおやつと交換しだした。バズーカ砲はキャラメルと、機関銃はビスケットになった。それもできないものは民家を武力で襲って略奪しようとして、逆に撃ち殺されていた。そして、多くの兵隊たちは、完全に闘争本能をそがれて動けなくなり、餓死していった。

戦争が始まって、食料を買い占めした住民たちだけが、ひっそりとこの街で生き続けているのだった。

第452話 プライバシー

ようやく、加奈子は自分の部屋を持てた。女の子も二十歳を過ぎると、いつまでも家族と一緒にいるわけにはゆかない。ひとりの空間を持てる喜びというものを徐々に味わっていた。それはたった二畳ひと間の小さな部屋だけど、自分ひとり寝るだけなら、それぐらいのスペースがあればいい。窓にレースとヤマモトカントウのデザインの厚手のカーテンを二重に引いた。天井の電球には、少しくラシックにガラスの傘をつけてみた。蛍光灯の白色よりは、黄色い光が懐か

しい。

好きな音楽もあまり高くして聴けないから、ヘッドホンで聴いている。いまはMDだからLPモードで録音すれば、ベートーヴェンの交響曲九曲もたった二枚の掌に収まる円盤に収録されてしまう。世の中が住みにくく、狭くなればなるほどモノはコンパクトになってくる。たった二畳とはいうけれど、本棚もかつてのようにいない時代だ。文学全集、百科事典などもたった一枚のDVDに収まってしまう。だから、加奈子の部屋には本は一冊もない。そのかわり、DVDで映画も見れて、録画もできる、本も読める小さなノートパソコンがあるだけだ。それ一台でテレビにもラジオにも映画館にもなる。音楽もそれで聴いている。ITの進化のお陰で、何でも圧縮されたから、省スペースで済むというのは随分と便利で素敵だった。

その部屋には思い出のアルバムや、日記帳といったプライベートなものがみあたらない。それもこれもすべてDVD一枚に収まってしまう。

着る服も下着も薄くて温かい特殊な素材になってきたから、衣装ケースひとつあれば、四季の衣類はすべて収納できる。小さい部屋ながら小さな流しが付いている。ひとりだから、調理をするわけではない。ひとり分の材料を買ってきて、料理をすると割高になるし、余った材料を保存する冷蔵庫も必要になる。このスペースでは車に置く、コンパクトな冷蔵庫より置けない。だから、加奈子はすべてご飯からおかずまでレトルトだ。朝はお湯だけ沸かして、スープとカロリービスケットだけで済ませる。

蒲団なども壁に折りたためるベッドだし、テーブルも椅子も壁から起こすことができる。そういう作りになっているのだ。機密性も高いから保温効果もあり、冷暖房費が極端に少なくていい。住まいにかかる経費というのも省エネで安い。車も軽自動車が売れていたが、住まいもそうで、モノというモノがその居住空間に合わせてすべてコンパクト化してきていた。大きいことはいいことだと昔のコマーシャルにあったが、スモール・イズ・ビューティフルがさらに進んで、多機能で集約型の機器が増えたせいで、便利が凝縮されたのだ。

手を伸ばせばなんでも取れるというのもいい。掃除もものの三分で終わる。初めは、加奈子は窒息しそうな恐怖感に襲われた。閉所恐怖症の気があったのだろう。ただ、人によっては押し入れの中が好きで、暗い狭いところにわざと寝泊りしている人もいるのだ。慣れてしまえば、却って狭いながらも楽しい我が家、こんな快適な生活はない。

週刊誌もいまはネットで配信されてくるメルマガを見ているが、それに載っている特集で、五坪で二階建の2LDKというのがあった。一部屋がすべて二畳以内の超ミニ住宅なのだ。天井の高さもようやく大人が立てる程度。窓もドアもギリギリサイズで、家具というものは少ない。壁の折り畳みスタイルで、多目的に使える部屋の構造にしている。玄関も小さいので、何かガリバーになったような錯覚に囚われる。坪単価四十万でも二百万で一戸建が買えるのだ。なんといってもランニングコストが安いのがいい。土地だって、建蔽率を計算しても五坪買えばいい。庭もジオラマのような小さな空間で楽しめるキットが売っていた。車庫までは無理としても庭付き一戸建が貯金で買える。

そんな時代がきたというのも、天変地異のせいであった。加奈子だって、以前は家族で大きな家に住んでいた。ひとり一部屋でも十畳もあったから、広々とした部屋にふわふわのセンターラグを敷いて、ベッドも大きかった。廊下も無駄なまでに広く、拭きぬけも玄関のホールも無意味

なくらい広く高くとっていた。掃除も大変なら、冷暖房もかかった。庭も広く、池まであった。車庫には車が二台。いまならとても考えられない。人口密度が急激に高まって、超高層住宅がどんどん建っていったが、それも追いつかない。政府は土地に対する固定資産税をどっと高くしたため、争うように住まいを小さくしていった。それはいいけど、と、加奈子は困った問題といつも直面しなければならなくなっていた。これは加奈子だけではない、どこの家もそうなのだから我慢しなくてはいけないことと判ってはいるが。

加奈子はそっとカーテンを開けてみた。やはり、窓ガラスにはべったりと男の顔がへばりついている。それも一人二人ではない。普通なら覗きか変態かと悲鳴を上げるべきところが、加奈子は平然とカーテンを閉めた。この部屋の半径三メートルにどれほどの人間が棲息しているのか。息使いが聞こえてきそうだ。隣の家も五十センチと離れていない。その家の隙間にも人が住んでいる。

加奈子は外出しようとアパートの部屋を出ようとドアを開ける。その前にドアの外に向かって、

「いま、ドアを開けますから」と、一声掛けなければならない。何故なら、アパートの廊下にも人が暮らしていた。廊下は格安らしいから、加奈子は贅沢なほうなのだ。びっしりと廊下にいるんな家族がひしめきあっていた。そこで寝起きしているのだ。蒲団の上で生活している。

「ごめんなさい。ちょっと通してください」

と、加奈子が人の頭の上を跨いで外にようやく出ると、家もない人々が、路上にもびっしりと生活しているのだ。どうしてこんなにも人間が増えたのか。いいや、人間は増えてはいなかった。土地が減ったのだ。地球温暖化で急激に海水面が上昇するや、日本でも海拔十メートルは海の底になった。平野が僅か国土の十数パーセントよりないのが、皆無に近くなり、多くの都市が水没した。

加奈子は年頃だが、とてもプライバシーなどと云ってはられない。横になって寝られるだけでも幸せと思わねばならない。そう思った。

第453話 謎の白装束

山の中に突如として白い集団が出現した。車も白いビニールで覆い、全員、白衣に白い帽子、マスクに白いゴム長といった、全身白づくめの集団だった。何故か、その辺の樹木までも白い布で巻いていた。ただ、一緒に連れている猫は白い布で巻いていないのだった。それが、パフォーマンスで、クリムトのようなアートだというと、そこまでやるかと凄いということになり、世間から尊敬の眼差しが集まるのだが、どうやら、芸術ではないらしい。ひとりの白装束を捉まえて、インタビューしていた。

「あなた方はどうして、白で覆っているんですか」

「電磁波が、小惑星が」と、訳のわからないことを口走るから、面白がってマスコミが追いかける。最近、ニュースが途絶えていたから、これはいいネタになると、フィーバーしているマスコミの方が異常だった。白い集団は、単なる狂信者たちの集団で怖くもないが、それを追いかけて、けしかけ、加熱するマスコミの方が怖かった。どっちが狂っているのだろう。

放っておけばいものを、これは突付けば面白そうだと、玩具にしようとしている。ニュースがないから、穴埋めに格好の材料だ。これでしばらくは騒げる。視聴率を上げるため、紙面を埋めるためなら、何だってするのが怖いところ。

終末思想が横行すると、いろんな奇態な集団が出てくる。ノストラダムスは不発に終わったが、エドガー・ケイシーの予言が残っている。1999年ではなく、2004年までと幅があるが、いずれにしてもタイムリミットは来年いっぱい。地球は核戦争で滅ぶのか、惑星衝突で滅ぶのか、はたまたウイルスにやられるのか。いろんな危機感を煽って、陰でひと儲けしようと画策している輩の顔が見える。

新米のニュースキャスターの山谷は、ローカル局の社会部に入ったばかりの、本当は機材運びをやらされるところを、初仕事ということで、今回の山を任された。真面目な性格が、どんな取材をすることかと、部長以下みんな心配はしていた。

さっそく、みんな報道陣と一緒にあって、山中をマイクを片手に走り回っていた。白装束が、どどどどどと逃げ出せば、一行はどどどどと追いかける。

「い、いま、また、逃げてゆく、はあはあ、ました。どこへ逃げて、ゆ、行くのでしょうか。あっ、突然立ち止まりました。何をするのでしょうか。な、な、なんと、立小便をするところです」「カ、カメラ、カット」「これは、中継なんだから、モザイクは入れられないぞ」

山谷は、どうでもいいことの、彼らの一挙手一投足までテレビカメラに向かって報告していた。

「ただいま、立小便を済ませた白装束は、手も洗わないで、ふたたび駆け出しました。おっと、また立ち止まりました」

向こうが立ち止まると、報道陣も立ち止まる。白装束は徐にケイタイを取り出して、どこかへ電話していた。山谷は白装束の男にマイクを向けて、訊いていた。

「ケイタイからも電磁波は出るんですよ。どうして、あなたはケイタイを所持しているんですか」

「それはですね、過酸化水素水がアルファ波と触媒で反応するとですね、ミトコンドリアが条件反射するからですよ」

「○▲■×？ という彼らは非常に科学的な、しかも専門的な知識を駆使しておりまして、かつてのオウムのように、かなりハイレベルな高学歴の集団ではないかと推測されます」 山谷は汗びっしょりで、息も切れていた。

「あなたも、この仕事を続けていると、きっと癌で死にます。白い布を貸しますから巻いた方がいい。ほら、もう、顔に死相が出ていますよ」

科学者か医者のように白衣の人にそう指摘されると、急に若い山谷は不安になった。白が防いでくれるのだ。そういえば、広島原爆のときも白い服を着ていた人がケロイドを免れたという

話を山谷は聞いたことがある。山谷は真面目なやつで、すぐに感化されやすい。男から帽子とマスクと白衣を借りると、自分も白装束になり、テレビカメラの前に立った。

「わたしも、白装束を着てみましたが、何か安心するような」というところまで、話すと、CMが咄嗟に挿入された。本社で中継を見ていた部長が、慌てふためいた。

「やつを起用したのは間違っていたか。この番組が終了したら、また機材運びだな」

コマーシャルを挟んでいる間に現地で大変なことになっていた。

「山谷さん、聞こえていますか。山谷さん」と、ワイドショーのキャスターが山谷に呼びかけていたが、映像が流れていた。音声も途切れて聞こえない。何があったのだろうか。すると、やがて、山谷の必死で走る後姿が画面に映り出された。それをカメラが追う。他の局のカメラも一斉にある方角へと走っていた。やがて、テレビの画面に異様なものが映し出されていた。近くの林道の木という木に、今度は赤い布が巻かれているではないか。そして、その先に、車という車を赤いビニールで覆い、全身これ赤い服と赤いマスク、赤い帽子で覆われた不気味な連中が屯していたのだ。

「な、なんと、こ、今度は、赤装束の集団が出現しました。まさしく、謎の赤集団です」 各局のカメラが回された。山谷は勇気を出して、彼らにインタビューした。

「ど、どうして、こちらは赤なんですか」

すると、眼鏡の縁まで赤いテープで巻いた男が答えた。

「資本主義の連中が、ベータ波を出して、われわれを殺そうとしているからだ」

もう、訳がわからなくなってきた。報道陣は騒然となっていた。と、そこへ、空に打ち上げ花火があがった。一体、誰が、何のために。山谷は、これから何が起こるのか、不安でいっぱいになって、赤い男に訊いた。

「こ、これから、な、何がこの山中で始まろうとしているんですか」

赤い男は泰然自若として答えた。

「運動会だよ」

第454話 ストリート・ミュージシャン

「ぼくは、何がなんでもミュージシャンになるんだ」

瀬川慧はテーブルのひっくり返ったダイニングルームで、息を切らして、拳を握って震えている父親と対峙していた。慧の片手には、ギター一丁、片手にはリュックサック、この家を飛び出す用意をしていた。

「慧、あんた、まだ高校二年でしょう。大学進学はしなくてもいいけど、高校だけはお願いだからちゃんと卒業してよ」

母親は泣いて頼んでいた。慧はグレてはいなかったが、どうしても歌手になりたい夢を棄てら

れない。勉強も投げ出して仲間と集まっては、ギターで歌っていた。作詞作曲もするシンガーソングライターとして仲間からも一目置かれていた。

「かっ、勝手にしろ」

父親は興奮のあまり、テーブルまでひっくり返したが、奥の部屋に行くと、酒をかつくらって横を向いたままだ。母親は、散乱した食器の破片などを拾い集めていた。

「でも、あんた、この家を出て行って、ひとりでどうやって食べてゆくつもりなのよ」

まだ十七歳の世間知らずが、しかもひとりっ子で甘やかされて育った息子が、ギター一丁でどうやって食べてゆくというのか。

「だから、さっきから云っているでしょ。しばらくはストリート・ミュージシャンして、全国を渡り歩くって」

母親はなおもおろおろして、

「でもね、それはあんた、テレビの見すぎではないかい。電波なんとかという番組だろう。テレビで取り上げてくれるのはほんの何人かだろう。ほら、この街の駅前にも、松の木デパートの前にも、ギターで歌っている若い人達がいるじゃないか。あんなことをするんだらう。前に空き缶置いて、恵んでもらって、まるで乞食と同じだよ。昔はね、傷痍軍人さんが、アコーディオン弾いたり、ハモニカ吹いたりして、繁華街の道端に座って、お金を恵んで貰っていたけどね。あんたたちみたいな五体満足で、これから勉強して働かなきゃならない、いい若いものが、人の施しで食べてゆくというのはあさましいよ」

慧は苛々した口調で云った。

「乞食じゃないって。ヨーロッパでも、ニューヨークでも、そうしたアーティストたちが、あちこちで自分の歌を人々に聴いてもらっている。そこから始まるんだ。ポプコンにも出るし、オーディションも受けるし、プロのミュージシャンになるためなら、どんな苦労もするさ」

いつまでも子供だと思っていた息子が遠くなってゆくような淋しさを母親は覚えていた。

「あんたも、お父さんそっくりになってきたわね。無鉄砲というか、頑固で、やると云ったらどうしてもやらねば気がすまない性分がね。お父さんの若いときは、定職もなく、そうだったんだよ。わたしはね、そんなフーテンみたいなお父さんの生き方が好きで一緒になったのだけどね。でもね、音楽で食べてゆける人って、ほんのひと握りでしょう。あんたみたいな若者は全国に五万といるわよ。喰えない人の方が断然多いというのも忘れないで」

「大丈夫だよ。ぼくの歌のオリジナリティは学校の先生も誉めてくれたし、そのうちインディーズでデビューして、CDにして売るし、いまにあっと云わせてやるから」

すると、奥で煙草をすばすばやっていた父親が口を挟んだ。

「ふん、何がインディアンだよ。ひよっこのくせに、おまえに音楽なんか判ってたまるか。おまえの指は女の子みたいに綺麗だろうが。ギター弾きってな、指の先から血が出るほど弾いて弾いてひきまくるものよ。そんな甘いもんじゃねえ」

慧はむっとして、また喧嘩腰になる。間に母親が入る。

「そういう、お父さんに音楽が判るのか、ギターが弾けるのかよ」

「これ、慧、お父さんになんて口のききかたをするのよ」

すると、怒るはずの父親はにんまりと笑った。

「おう、喧嘩早いのも、おれの若いときとそっくりだな。おまえも、おれの才能を引き継いだか。どれ、母さん、あれを出してきてくれ」

「あなた、もう二度と弾かないって、あれほど仏前で約束しましたのに」

「いいんだ、慧のためだ。おれが音楽のおの字を教えるんだよ」

母親は奥の押入の中から四角の箱を出してきた。その中から古いギターを取り出した。

「どれ、弦が錆び付いているだろうな」

慧は驚いた。そんなギターを父親が持っていたことも知らなかった。

「お、お父さん、ギターを弾けるの」

「ばかやろう。誰に向かって云ってやがんでえ」

「そうよ、お父さんは昔、セミプロだったの。それでお金稼いでいたのよ。そんなお父さんの歌に惚れて、お母さんは結婚したのよ。でもね、ちゃんとした堅気の仕事に就いてくださいとお願いして、それから好きなギターに触れることもなかった。あれから二十年以上も経っているのね」

「指が動くかな。おい、慧、音合わせしよう」

「いいよ、チューニングだね」

「いちいち、横文字を出すな」

父親はスケールを巧みな指の動きですらすらと弾いた。ハイポジションもコードも完璧だ。慧は凄いと息を呑んだ。

「さあ、慧よ、これからおれと二人で、そのストリップ・ミュージックとやらにでかけるぞ」

「ストリート・ミュージシャンだってば」

父親は、粹に背広を羽織るようにすると、ギターを首からかけて、強引に息子の手を引いた。

「ど、どこへ行くのさ」

「決まってんだろ。これから酒場を流して歩くのよ」

そう云うと、父親のギターから哀愁を帯びたイントロの音色が響いた。

「酒は泪か溜息かー」

第455話 角の煙草屋

ぼくはひとつの物事が気になると、たまらなく解明したくなる性分だった。世の中が複雑怪奇になると、見えない部分が増えてきた。構造が単純ではないのだ。理屈っぽいのは子供のときからの性癖で、やたら周りに何故、どうしてと質問攻めにする。

そんなぼくが、気になりだしたのは、煙草屋だった。何故煙草屋は角にあるのかという単純な疑問だった。煙草屋の角、角の煙草屋というのは定番だった。どうしてだろう。

そうして、必ず、昔なら可愛い娘がいたものだが、いまはすっかり婆さんになって、煙草屋は若い美人がいなくなっていた。どうしてか。

ぼくは、くだらないことと思いながらも、この街の煙草屋を一軒ずつ調査してみた。角店で煙草を売っている店が全体の何割にあたるか、煙草屋のうち、何割が角で商売をしているか。

角店で薬局をしている店があった。ぼくは、おかしなことに、むらむらと怒りがこみあげてきた。それで、ずかずかと店の中に入ると、白衣を着た店主に云った。

「どうして、ここは薬屋なんですか」

すると、親父はきょとんとして、

「どうしてって、先代から四十年もやっているんで、ここは、うちの土地だし」

と、おかしなことを云うやつだなといった顔をしていた。でも、ぼくは、角が煙草屋でなければとても赦せなかった。

「角店というのは、煙草屋でなければいけないんです。昔から角の煙草屋と決まっているんです」

ぼくがそこまで断定し憤慨して云うものだから、親父は恐れおののいて、奥に引っ込んでしまった。暫くして、けたたましい笑いが聞こえた。

そして、また調査のために歩きはじめると、次の角は煙草屋でぼくは安心した。心の中で、角はこうでなくっちゃと自分の意見に自信を深めるのだった。

「こんにちは」

ぼくは、店番のいない煙草屋の小さなガラス戸を開けて、奥に叫んだ。

「誰もいないんですか」

すると、しわくちの腰の曲がった婆さんがひょこひょこ出てきた。

「あいよ、何の煙草だえ」

その姿を見ると、ぼくはまた怒りがこみあげてきた。

「煙草を買いに来たんではありません。煙草屋の調査です。ところで、おばあさん、どうして、あなたは、ここの店番しているんですか。若い、綺麗な娘さんはいないんですか」

婆さんもきょとんとして、ぼくの云った意味が飲み込めていない様子。

「はあ、わたしゃ、ずっとここの店にいましたが」

ぼくは苛々して云った。

「そうじゃなくて、昔から角の煙草屋の娘というものは美人で、町一番のきだてよさと決まっているんです」

すると、婆さんの目がハートになって、急に嬉しそうにそわそわしだした。

「あんた、いいこと云うね。そうなんだよ。わたしも戦前は、この町でも一番の美人でね、煙草屋小町と云われたもんだよ。それは、男たちが云い寄ってきてね、断るに忙しかった。待っておくれ、いま、昔の写真持ってくるから」

と、奥に引っ込んだところで、ぼくは退散した。角店の煙草屋の婆さんはぼくの固定観念を完全に崩した。とても赦せるものではない。

次の角に行くと、そこは、昔は煙草屋だったらしいが、いまはコンビニだ。店頭に自販機だけを置いている。そこで、店内にいる初老のオーナーに訊いた。

「どうして、煙草屋をやめて、コンビニにしたんですか」

オーナーは変ないいがかりをつけるやつだと云った顔をして、警戒しながら話した。

「それは、時代の流れでね、煙草だけではやってゆけない。愛煙家が極端に減ったからね。みんな禁煙しだしたし、あちこちで禁煙の看板出したり、外でも吸えない時代だ。健康に悪いとやめている人ばかりだ。日本タバコも別の商売にも手を伸ばしているというしさ」

ぼくはまたむらむらときた。

「それは判ります。ただですね、煙草屋というのは、角に小さな窓があって、そこから可愛い娘が顔を出し、対面販売をするものです。そうじゃありませんか。それが、ずらりと並んだ自動販売機でごまかしてもらって、あなたは罪の意識がないんですか」

オーナーはぎょっとして、

「な、なんだと、人を罪人扱いしやがって、とっととうせろ。この気違い野郎」

と、急に下品な言葉遣いになって、ぼくを外に追い出した。

外はすっかり日が暮れた。ぼくは、何かとても悲しい気分を襲われていた。街は変わる。人も変わる。変わらないのはぼくだけだ。それでも考現学という、街角ウォッチングで、いまの時代がよく見える。

さてと、ぼくは明日からポストと消防自動車は何故赤いか、というテーマで調べてみようと思う。

ぼくは、こんなことでもしなければ、仕事がないのが辛いのだった。

第456話 彼女が走るとき

ぼくの好きな女の子のタイプは普通とは変わっているかもしれない。明るい、活発な人、素直な従順な人、愛想のいいよく気が付く人、笑顔が素敵で、思いやりのある人はみんな嫌いだった。ぼくの好きなタイプは、暗く、どこか影のある陰気くさい、黴っぼくじめじめして、この世の不幸を一身に背負っているといった苦痛を顔に表し、どこか貧乏くさく、不良じみた女の子が大好きだった。

みんなから敬遠され見向きもされないタイプだから探すのは苦労しない。世間で云う当たりではなく外れが好きなので、彼氏いない歴この道数十年というベテランあり、まるっきり男とは縁のないそのまま墓場行きといった女の子でも、蓼食う虫で、ぼくといった変わった趣味の男と出会うことができる。

でも、そんな趣味は昔からあるようで、ものすごくもてる美男子が、結局もらった奥さんが、考えられない不美人であったり、つりあいのとれない夫婦がよく歩いているのをみかけるが、美人に飽きて、普通では物足りなくなった結果がアクメに走るのだ。美人は三日見ると飽きるが、不美人はそれなりに顔のアンバランスが何かアブストラクトな深い魅力があり、何年も見ても飽きないくらいの不思議な魅力があるというのを知る男は本物だ。外見に騙されて、ほいほいと結婚して後で大概の男たちは後悔する。「なんだ、顔だけだったのか」と。

中国の故事にも「顰に倣う」というのがある。西施という春秋時代の越の美女が、悲しい目にあい、顔をしかめたのを美しいと、国の女たちが真似をして後に物笑いになったという有名な話。でも、それは、きっと本当に美しく思えたに違いない。ぼくのような人間が世の中にはいっぱいいるんだ。

ということで、ぼくがみつけたのは、花散みちるという十八の子だった。番茶も出花というけれど、みちるはとても開花宣言のない花のようだった。いつもしぼんでいて、いるかいないか存在すら判らない。目立たない地味な子だった。今年の春に高校を卒業して、専門学校に通っていた。

ぼくは、大学の合コンで彼女を見初めた。こっちは大学三年の六人で、向こうもとにかく不均衡にならないよう数だけは合わせて六人で来た。洋風居酒屋で、カラオケボックスにもなっている店に集合した。向こうの六人のうち、ひとりだけピカイチがいた。どこから見ても麻布のお嬢様、気品があり育ちがいい会話、そして理知的。みんなの目は彼女に集まっていた。もうひとり、ボーイッシュな容姿でスポーツならなんでもという女の子がいて、その二人くらいが眼中にあって、あとの四人は、そこにいたのという全くの無視状態だった。会話からも外されていた。ぼくは、そのすでに見捨てられていた四人の中で、特に酷い、絶対にブービーメーカー間違いないという保証書付の暗いみちるという女の子に視線を送り続けていた。それは、遊んでいる女の子とは違い、きっと汚染されていない、いわゆる「手つかずの自然」だった。中学、高校で処女を喪失するのは半分以上いるという。彼女はきっと、その少数民族に入るのだ。貴重な、保護されるべき、絶滅種のひとりなのだ。

グループで、すき焼きをやれば、みんな争って肉に箸を進めるが、ぼくは、肉なんかいらぬ。すき焼きで好きなのは春菊だった。みんなが嫌いなものにはいるそれを好きだったから、誰ともバッティングすることはない。余裕で、ゆっくりと箸を進めるのだった。

案の定、みちるには誰も声をかけなかった。散会してから、銘々が意中の人を争うように、一人の美人を巡って次に向かったとき、ぼくはみちるに声をかけた。

「ねえ、君のケイタイの番号とアドレス教えてくれない」

それからだった。ぼくは、週二くらいの割でみちるとデートした。みちるは風変わりな女の子で、決してブランドものに拘らない。いつもすっぴんで化粧もしない。野生がそのまま歩いていた。何よりもいいと感じたのは、いつも顔をしかめていることであつた。そして、どこか物憂げで、人の目を見ることはない。視線を床に落としたまま、言葉数も少なかった。自信のない無口で暗い影を持って、いつも苦痛に歪んだ顔をしている。それは、ぼくの女の子のイデーそのままの条件を満たしていた。

とても、毎日、写真を見て素敵だなんて惚れるような顔ではないが、なんとかしてやりたい、君の不幸を共有したいと、男の持つ包容力がむくむくと起きあがってくるような子だった。

ぼくは、みちるとある日、湘南海岸へとドライブした。中古だけど、ぼくの愛車はスポーツタイプのフル装備だ。みちるは、ちっとも色気のないスラックスにトレーナーといったいでたちで、髪も染めていなければ、どうでもいいといったふうに、輪ゴムで後ろにまとめていた。ぼくにはそれがまた、たまらなくいい。幸福はどれもみな同じように見えるが、不幸は様々といったトルストイだったかの言葉を思い出すほど、薄幸の女性に憧れた。何かわけのありそうところが、そのまま小説になる。

車は第一京浜を走っていた。すると、みちるはみるみる顔が青くなってゆくのだ。額に脂汗もかいている。それをちらりと横目で見て、ぼくはなんという不幸を滲ませている女性なのだろうと、ますますいとおしくなるのだった。何も云えない、緊張感が感じられて、その辺の慣れてすれ違った女の子とはまるで違ふ。

「気分でも悪いの」と、訊くと、

「ううん」としか云わない。そのうち、ぶるぶると震えがきたので、これは病気かなと思っていたら、突然彼女が苦しそうに叫んだ。

「お願い、車を停めてー」

そして、車を停車させると、助手席から腹を抱えるようにして、脚をなるべく開かないように小股でよろよろと近くのコンビニに駆け込んだ。暫く出てこなかったが、出てくると、苦痛はやわらいでいたとはいえ、複雑な困った顔をしているのだった。

「大丈夫？」と訊くと、黙って首を縦に振る。そして、また暫く走ると、

「と、停めて、お、お・で・が・い」と、声を殺して頼むときの横顔が苦痛に歪み、これがまた素晴らしい顔だった。ぼくは、車を停めないでわざと走らせてやったら、どんな顔になるのだろうと、悪趣味なことも考えていた。

みちるは、その日だけでも十回は車を停めた。その顔を思うたび、ぼくは恍惚にひたれる。ああ、女性はかくあるべきと。

第457話 自然恐怖症

生まれたときから、土を知らない子供たちがいる。昆虫も図鑑でしか見たことがない子供たちがいる。海で泳いだことのない子供たちがいる。親からしてそうだから、子供は自然を知らないで育っていた。

都会で生まれ育った都村貴之には三人の息子がいた。みんな小学生。妻の美穂も東京生まれの東京育ち、田舎を知らないで育った。親子三代が東京生まれのぱりぱりの江戸っ子だ。親戚もみんな都会周辺に住んでいたから、本当の田舎に行く用事もない。貴之は家庭サービスとやらで、家族で海や山へ行くということはしない父親だった。もともと自然が嫌いというより、怖いという観念で見ていたから、アウトドアなど縁遠い。その息子三人はどこへも連れて行ってもらえないから、プールでは泳ぐが、海で泳いだことはないし、学校の遠足で山へ行ったぐらいで、まったくといっていいほど自然と触れあうことがなく育っていた。

最近の学校の先生もまたそんな、自然に対して興味のない若い先生が増えた。ただ、受験だ、部活だと、自然教育ということをやっていない。やっていないから、その知識も何も知らないで育ってゆく。せめて、親がガーデニングの趣味でもあれば、庭に花や作物を植えて体験させるのだが、いまは学校で理科の授業に少し使う程度だ。それも、買ってきた袋入の黒土に化学肥料。子供たちは、土とはホームセンターで売っているもの、植物は人工の窒素カリなど、工場で造ったもので生かされていると思っている。われわれ人間も口に入るものはすべて工場を経由していると思っているから、作物もまたそうであっても不思議ではない。

最近、ドブというものがいない。街に川もない。みんな暗渠で蓋をして、衛生面でもかなり消毒したりしているので、都会では蠅も蚊も、虫という虫が少なくなっていた。ゴキブリでさえ家庭内で駆除がしっかりしているから絶滅状態で、家の中で蜘蛛もいなければ、庭がないから蜂もこない。虫というものを目にすることもなくなった。夏なんか、窓を開けておいても蚊取りマットなしでも平気だ。

そう云えば、カラスも雀も激減し、姿を見ることもなくなった。地域によって、郊外ならまだいるのだろうが、都会は人間様だけの棲息場所となってしまった。

都村貴之は、ペットショップで売られているカブトムシやクワガタを不気味そうに同僚と眺めていた。会社の帰りに、同僚の息子がねだったというので一緒に立ち寄った。

「餌も売っているんだ」と、数千円もする高い虫のおもちゃを買っていた。

「君んとも一匹買ったらどうだ。小学生三人いるだろう。喜ぶぜ」

すると、貴之は首を横に振り、

「とんでもない、うちのはもっぱらテレビゲームにはまっているから、こんな生き物には興味がない。第一、おれも、女房も虫は苦手だな」

そうなのだ。都村家だけでなく、多くの家庭が、パソコンやら、ゲームやら、テレビの世界に

のめりこんで、自然からほど遠い生活をしているので、興味すらない。親からしてファミコン・テレビ世代だ。その子供となると、すっかり部屋に閉じこもるオタッキーが多くなる。

小学校の遠足から帰ってきた息子が、美穂に話していた。

「遠足って、怖かったよう」

台所仕事をしながら、まだリュックをおろしていない息子の話を聞いていた。

「怖いって、遊園地のお化け屋敷へでも入ったの？」

「そうじゃないんだ、高尾山に登ったんだ。それがね、どこも緑でいっぱいなんだ。草に触ると虫が飛びだしてきて、ぼくたち、みんなで、目を瞑って、先生の後ろにしがみついて歩いたんだ。でもね、先生も怖いんだってさ」

「そう、ママも嫌ね。山だとか、森林だとかに行くの大嫌い」

緑が怖い。人間たちが本能を忘れ、古里喪失した機械文明の鬼子になったとき、日本人の古くからの自然と共生する精神をも失っていた。森が怖いから、木を伐採してきた自然と闘うヨーロッパの民族と近くなってきていた。かつては黒い森、シュヴァルツバルトと呼ばれていた豊かな森も激減した。いまや、ドイツでも国土の三割より森林がない。日本よりずっと少ないのだ。

その都村家に大変な事件が起こった。それは、日曜日の朝だった。普段は、窓も閉めていた家だったが、あまり天気がいいので窓を開けて掃除していた。いまのアルミサッシは二重のペアガラスで、しかも断熱材も壁に入っているから、気密性がいい。しかも、エアコンで年中快適だ。別に窓を開ける必要性はないのだ。下手に窓を開けると、覗きや空き巣のほうに怖い。窓にはいつも泥棒の侵入を防ぐための警報機が付いている。

上の息子がトイレに入ったときだった。何か、見たこともないものが息子の顔を襲ったのだ。突然だったので、息子はトイレから転がって飛び出した。

「うわあ、ママ、化け物だ。大変なのがトイレにいるよう」

そう叫んで青い顔で全身を震わせていた。ズボンを下げっぱなしで、倒れそうな息子の異常な様子に動転した美穂は、箒を手に、トイレのドアをそっと開けた。すると、その大きなものは、いきなり美穂の顔を目がけて飛び出した。驚いた美穂は、首を絞められたような悲鳴を上げて、玄関の電話まで走りこんだ。そして、手当たり次第にあちこちに電話していた。

「た、大変です。衛電団地の都村ですが、急いで来て、助けて」

それから五分と経たないうちに、都村家の前に、消防自動車四台、パトカー三台、救急車が一台、次々に停まった。近所の人達も何事かと、一斉に飛び出してきた。マスコミまで、数台、追いかけて取材に来た。

「都村さん、何があったんですか」

警官隊が到着して、防弾ガラスの楯を手に、都村家に突入した。すると、錯乱状態で、廊下に腰が抜けたようにして、座っている美穂が、怯える息子を抱きしめながら、指さす方角に、大きな銀蠅がゆうゆうと飛んでいた。

日本人の先祖は、アリューシャン列島を越えて、アラスカへ渡り、極北の地に留まったものがエスキモーとなった。新たな土地を求めてさらにアメリカ大陸へと入った。そして、その地に残留したものがインディアンになり、さらに南下して、中南米へと移り住んだものがインカ帝国を造り、インディオとなった。

われわれに流れている血の遺伝子は、調べてゆくと、インカまで脈々と続いている。血は歴史を覚えているのだ。

ジョン・フォードだけでなく、西部劇では悪役はいつもインディアンだった。西部開拓の昔から、アメリカ人は、黄色人種を毛嫌いし、脅威を感じていたのではないか。黄禍という言葉はその頃からあったのではないか。

ウエスタン・ムーブメントは金や石油を求めて西海岸へと向かう。そして、太平洋に出ると勢い余って、海を越えて、アメリカ人は西へ西へととにかく闇雲に西へ行きたがる習性があるようだ。金のある日本へ。そして、野蛮なインディアンのように見立てる北朝鮮へ。ベトナムへ。カンボジアへ。アフガニスタンへ。それでも足らずに、さらに西へ西へと騎兵隊ならぬ軍隊を進めて、とうとう、アジアの西の果てのイラクまで石油を求めて来ていた。

インディアンは嘘つかないが、日本人も含めて、多くのアジア人は嘘をついてきた。前しか見えない単純な馬車馬のアメリカにはそれが赦せない。すべて、アメリカが正しい。アメリカが世界の憲法だ。みんなハンバーガーを食べなければならない。世界言語は英語でなければならない。そして、宗教はキリスト教。コンピュータはマイクロソフト。車はリンカーンだ。

そして、経済的にも世界を征服しようとする。自然豊かな緑の国に工場を造らせ、工業化させると、公害なんのその、安い賃金、安い原料で、世界へ向けて出荷する。海は汚染され、森林は伐採され、沃土は砂漠化し、人々は奴隷化する。軍隊の西進と、平行して企業の西進が続いた。

インディアンだけでなく、小さなアジアの国の長老は嘆いた。

「昔、空、青かった」

イラクがあっさり制圧されてしまうと、好戦的なアメリカは、物足りなさを感じて欲求不満に陥っていた。第一ラウンドで相手が倒れた試合のようなもので、まだ序の口だった。競馬の馬の興奮を抑えることはできそうにない。

よし、次はヨルダンだ。そしてトルコ、それが終われば北アフリカ戦線だ。大統領も興奮して止められない。常勝軍アメリカの勢いは、怒濤のごとく押し寄せた。

二十一世紀の戦争はキリスト教国とイスラム教国との戦いだ。これはイデオロギー闘争より深く長い戦いだ。イデオロギーは時代の変遷で変わることもあるが、宗教は千年も二千年も変わらないできた。

風俗、習慣まで忌まわしいものとして禁止するようになると、占領された国民も穏やかではない。一夫多妻制を止めさせると、喰えない女性がどっと出た。豚肉を無理矢理食べさせると、アレルギーで死人続出。女性を解放すると、その反動で貧しさから淫売が増えた。

アメリカは、子供と同じで、玩具は壊して遊ぶものだった。あちこちで破壊し続け、やりっぱなし。後始末は苦手なわがままな少年だ。復興のために金はできるだけ使わない。それは日本な

どにやらせる。こっちは戦争で忙しいのだ。そんな暇はない、と。アメリカのトルネードの通過したあとは、草も生えない。死屍累々と罪のない弱いものたちの白骨が散乱堆積していった。

アメリカは、アルジェリア、ナイジェリア、モロッコへと侵略戦争の前線を進めた。その頃になれば、イギリスだけでなく、フランスもドイツも反対しきれなくなり、やむなく荷担することとなった。このままでゆけば、アメリカ一国に世界征服されてしまう。モロッコへふたたび外人部隊が入った。

西へ、西へとアメリカとそれに引きずられる連合国の軍隊が、アフリカ大陸を席卷し、ついに大西洋へと出た。もう、誰も止められない狂牛の群だ。訳も分からず大西洋を突き進む。コロンブスが、黄金と胡椒の利権を求めて東に行くのを間違えたように。二十一世紀も、「自由」とか「解放」という大義名分の御旗のもと、実は傀儡政権による植民地支配となんら変わらないやり方で、どんどんと侵略、鎮圧と続けてきたのは、かつての日本も同じだったが、すべてが利欲のためのジ・ハードだった。

大西洋を渡りきると、そこにアメリカがあった。なんと、七百五十日間世界一周。地球は丸かった。司令官は本国に辿り着き、大統領に報告した。

「西部戦線異状なし」と。

第459話　　いい女の条件

男は誰しも、機会を窺っている。据え膳食わぬはというが、美人に声をかけられて、嬉しくない男はいない。ましてや、誘いがかかれば、よほどの理由のない限り、靡かないのはどうかしている。清廉潔白な政治家でも靡くご時世だ。

天野惹も真面目で通しているが、その中のひとりに過ぎない。奥さんと子どもがいるいないに関わらず、男はみんな同じようなものだった。天野は仕事のうえでも余裕が出てきた四十だが、四十にして惑うのは女にだった。昔から、厄払いというのは、そんな危ない時期に戒めとして昔人が考えたのではあるまいか。ただ、昔は四十ではご隠居さんだ。いまは働き盛り。家も建て、子育ても済み、財産も地位もある程度確保して、女房にも飽きた頃。男にはいつも危険な罠があると警戒しなくてはならないのに、いまだそんな危ない目に遭っていない天野は、そろそろ自分にもチャンスが巡ってくるのではないかと、期待していた。

若い子にはおじさんはもてる時代なのだ。特に天野ぐらいの年齢が一番、老けてもいないし、精力的で大人の男の魅力を感じさせてくれる。

そのチャンスというのは意外にも早く到来した。鈍感な男でも、チャンスというのは結構あるのだが、相手のモーションに気づかないだけのこと。ずっと後になって思い返せば、あの時はそんなことだったのかと後悔する場面は多々あるものだ。天野は敏感すぎる。気が利きすぎるというのも、逆に女に警戒されるのだ。そこが判っていない。

天野は、その夜、会議で遅くなり、車で帰宅した。郊外の一戸建を購入して十年経っていた。

家が古くなる分、子どもたちが成長し、女房も独身の頃とは体型が横に成長していた。いまは、楽しみといたら、趣味のサークルで酒を飲むか、仕事だけだった。だんだんと人生に退屈を感じ始めていた。それは、男にとって危険な兆候だった。

十一時過ぎると、車は殆ど走っていない。それでなくても夜は寂しい市道だ。山が近い分、何か迫ってくるような怖さがあった。仕事場から車で三十分はかかる。帰って、晩酌をやり、女房の小言を聞き、夕刊を見て、テレビでニュース番組を見る。野球は阪神が勝ったろうか。巨人は嫌いだった。

余りに運転していて寂しいので、カーラジオで音楽を流す。ジュリー・ロンドンの甘いセクシーな声が歌う。すると、いろんな女の顔が浮かんで消えた。

と、道路脇で、手を振っている女性の影がヘッドライトに映った。若い女のように。タクシーと間違ったか。でも、別の用件かもしれない。一応、停まってみた。白いアコードが女性の脇に停止した。女は、黒いストッキングに短めのぴっしりとしたスカートをはいて、白いブラウスだ。長い髪がしっとり濡れている。服も濡れねずみだった。フロントガラスには水滴がついていないので、天野は不思議に思い、窓を開けて掌を出してみた。雨は降っていない。二十代後半のものすごい美人だった。天野はぞくりとした。

「どうしたんですか。ここいらじゃ、タクシーは滅多に通りませんよ」

天野は無言でじっと天野の目を見詰めている女に声をかけた。

「乗せて」

と、女はそれだけを小声で云った。声だけがどこか別のところから聞こえたような気もした。細身でモデルのような長身、憂いを含んだ目は何かを訴えかけようとしているようだ。青白い顔が、外灯にも判った。全身が濡れていた。何か、わけありのような気がした。天野は後ろの座席のロックを解除して、ドアを開けてやった。

「どうぞ。どこまで送ればいいですか。ぼくは、この先の団地まで行くんで、その辺りまでなら乗せてゆきますよ。タクシー会社の営業所もあるし。コンビニもある。バスはとっくに終わっちゃったけどね」

天野はぺらぺらと興奮を抑えて一方的に話していた。女は後ろの座席に座った。人が座るときは、その重みで幾分か車体が沈むはずだが、その感触がなかった。ひょっとして。天野は、ある噂話を思い出した。白い服の女がよく立っていると。ここいらは霊界スポットらしい。と、すれば、幽霊一。

車はまた走りだした。バックミラーをそっと見た。もし、映っていなかったらどうしよう。よくある話だ。交通事故で雨の夜に轢き殺された女の霊を、生前、女が帰ろうとした実家の前まで乗せてゆく。そして、振り向くと、姿がない。シートがびっしょりと濡れている。背筋がぞくぞくとして、天野は緊張して運転していた。いくら美人でも幽霊ならご免蒙りたい。カーラジオのボリュームを高くしようとしたが、妙に電波が乱れて音楽が雑音に掻き消されていた。仕方なくラジオを切った。間がもたないので、天野は恐る恐る話しかけた。

「あのう、濡れていますよね。雨は降っていないんだけど」

天野は核心をついた質問をしていた。すると、女はさっきの透き通るような小声で云った。

「川に落ちたんです」

天野はぎょっとした。この近くの川に身投げした自殺した霊かもしれない。バックミラーの女の顔はほっそりとした横顔で、いまにも泣き出しそうな目をしていた。そして、じっと、外ばかり目で追っていた。

「これで、拭いてください」と、ハンカチを後ろに渡した。

「ありがとう」とだけ、消え入るように云うと、女は髪や肩をハンカチで拭きはじめた。後部座席から何か冷気が伝わってくるようで、天野はヒーターを最大にした。

「寒くありませんか。そんなハンカチなんか役に立たないようですね。風邪をひいたら大変ですよ」

「ごめんなさい。いいんです」と、女はしくしくとすすり泣き始めた。いよいよ、恐怖が全身を包んだ。金縛りに遭ったように体が強張っていた。女は顔を両手でおおっていた。その手をとったときに、口が耳まで裂けていたとか、もっと古典的にのつぺらぼうだったとか、天野はいろいろと怖い想像をして震えていた。それにしても、女の髪からか、風呂上りのようなリンスの匂いが漂ってきていた。ちらりちらりとバックミラーを気にして見ていた。いつ、女が消えるのか。あるいは豹変するのか。あんな人の歩かないところにいたということ自体、普通ではない。天野は、それでも怖いもの見たさと、美人の条件、自分の好みのタイプと完全無欠の女をちらちらと見ていた。次第に、幽霊でもいい、耳無し芳一のようになってもいいから、こんな女とつきあってみたいと馬鹿なことを考える余裕まで出てきていた。男のいやらしさは怖さに勝るか。天野は背広を脱ぐと、女に与えた。「これをかけてください」

女は恐縮していたが、背広を上半身にかけて。やがて、車が団地の手前の村にさしかかると、女は、一軒の電灯の点いている家を指差して、

「すみません。その家なんです」と、震えながら云った。天野は道路沿の民家の前で停まった。

「ここで少し待っていてくださいませんか」

と、女は云うと、車を降りて、その家の中に入っていった。水も滴るいい女だ。その後ろ姿もたまらない。ただ、家に入ったきり、よく出てこないときがある。そして、後で、その家の人に訊くと、その夜が、その娘の祥月命日だったりする。ぞっとして、車を出そうとすると、家の中から、あの女とおばあさんが出てきた。

「いや、うちの孫が、車の運転間違えて、車ごと川に落ちたというから、ぶったまげました。ご親切にも助けていただいたそうで」

「背広も濡らしてしまって、あのう、お礼したいのですが、ケイタイのお電話番号教えていただけませんか。お食事でもよろしかったら一緒に」

女はバスタオルを体に巻きながら、長い髪の間でようやく微笑んでいた。

白装束の集団が、立ち退きをくって、車で行き場なく移動を続けていた。どこの村に行っても、気持ち悪がられ、排斥運動が起こる。かつてのオウムと同じように見ていた。彼らは、迫害ならぬ白害を受けていた。でも、誰が被害を被ったのか。白装束は不気味なだけで、悪いことをしたのか。

白取白蔵は、自分の名前に白があるから、白装束には親近感を抱いていた。自分でも白という色は好きで、よく着るので、見ていて違和感はない。それに、仕事は医師なので、病院に行くと、看護師から医師、カーテン、蒲団、壁から天井、これすべて白だったから、なんの不思議もなかった。そんなことで、世間はつまはじきにするが、白取だけは同情していた。

「なんとか、彼らを社会が受け入れるようにできんもんかな」

仲間の医師たちともテレビを見ながら話していた。ひとりの中年の内科医が云った。

「格好が不気味だからですよ。どう見ても怪しい格好でしょう。白でもいいんですが、もう少し野暮ったくなく、ファッションブルに迫ったらどうでしょうか。例えば、全員が白装束の上から白いマントを付けるのです。そして、サングラスを付けて、額には三日月…」

みんな想像していたが、

「なんだ、月光仮面じゃないか」と笑った。

「いいじゃないですか、まだ正義の味方のほうが印象がいい」

「そうですね、子供たちにアピールして好感を得るためにも、ただの白ではなく、ワンポイントにキティちゃんのシールを胸に貼るとかしたらいいかもしれませんね」

看護師まで知恵を出していた。なんとか、社会に受け入れられる方法はないかと、考えるのも楽しかった。社会が異端を排除しようというのは判る。それは、昔からあることで、特に理解できない狂信的な新興宗教に対しては、戦前から住民との軋轢があり、政府も宗教弾圧した歴史もある。それが、宗教であれば、まだ少しは許されるところがあるが、科学的とくると、いよいよ近寄りがたく、云っていることがマンガだから始末が悪い。

白装束の集団は、中部地方を迷走していた。それを空からテレビ局のヘリコプターが追う。取材陣が追っかけて、うるさく付いて回る。一般の野次馬の車も多く、警察が監視のため随伴していた。だから、彼ら集団は五十人くらいでも、その取り巻きの多く、一種のお祭りのパレードのようになっていた。彼らが移動すると、その取り巻きも移動する。観光客や地元の人達までどっと一目見ようと押し掛けるから、ちょっとしたブームにまで発展しそうだった。タマちゃん現象に似てきていた。

白装束の集団を見ようと観光バスまで到着した。観光客たちは、白装束のメンバーと腕を組んで記念写真を撮ったり、サインを求めたりしていた。そのものすごい野次馬に、アイスクリーム屋が店を開く。地元の観光協会も商売だと、物産を並べて売る特設会場まで出現した。

もっと商魂逞しいものは、白装束グッズというものまで売り出して、白衣に手袋、帽子にマスク、それぞれに「謎が謎呼ぶ白装束」と、文字が染め抜かれていたお土産まで出した。便乗するものはどこにでもいるもので、急遽、地元の菓子メーカーが、記念銘菓を発売した。白装束饅頭に白装束せんべい、いずれも白餡やホワイトチョコレートを使用して、パッケージも真っ白だ。

白取医師は、その光景をテレビで見て、これはゆけるかもしれないと、友人の広告代理店の偉

いさんに電話してみた。

「...、ということで、どうだろう。彼らを社会復帰させるために一役かってくれないか」

広告代理店の幹部は、暫く返答に窮していたが、

「よし、判った。やってみよう。意外な反響があるかもしれない」

ついに大手広告代理店がその騒ぎに乗り出した。白取の友人が直接、白装束の幹部と逢うこととなった。説得には時間がかかるだろう。

「いかがですか、これはですね、あなたがたのことを思って、わたしの友人の医者が、そうしたらどうですかと提案したことなんです。いいですか、世間は、みんなあなたがたの敵ではないんです。あなたがたを受け入れようとする人々もいるということを忘れないでいただきたい」

広告代理店の説得によやく代表の女性も応じた。どうせ、行くところがないのだから、その提案に従うほうが、合法的であるし、警察の監視を受けることもないだろうと幹部連中と話し合い、承諾することで合意した。

広告代理店は俄に忙しくなってきた。今年一番の大きな仕事だった。あちこちに文書を送る。ファックスからメールをクライアントに発送した。すると、ものすごい反響があった。大手、チェーンストアから引き合いがきた。デパートやスーパーからも、興業プロダクションからも予約を入れてきた。広告代理店はあまりの人気に嬉しい悲鳴を上げていた。

白装束の人気を商売に使おうと、デパートではイベントに起用した。エントランスホールで白装束のショーを開いた。買い物客がそれを見たさにどっと押し掛けた。見世物にするという白取医師のアイデアは当たった。コマーシャル契約もすでに何本か入っていた。CDを発売するための作詞作曲もできあがっていた。白猫のタンゴや白いブランコといったカバー曲も入っていた、白一色の歌を彼らが歌う。アパレルメーカーはこぞって、今年の夏の流行を「白」と決めた。

日本全国が白一色の大流行になりそうな雰囲気だった。

白取医師は満足そうにテレビで成り行きを見守っていた。

「そうなんだ、せっかくの人気を利用しない手はない」

第461話 われにも五月を

雪国で四季を通して一番美しい月といたら、それは五月だった。雪解けの埃っぽさがなくなり、ようやく青空らしい空が見え、花という花がどっさりと眩暈がするほど咲き乱れ、ストーブを仕舞い、コートを脱げる五月。それは半年の雪に埋もれた鬱積した生活から一挙に解放される、豪雪の地方でなければ、判らない歓びの五月だった。雪国の人々は五月と聞いただけで、何か心躍る。

寺田修一は、昔の懐かしい五月のことを偲んでいた。もう、忘れるほど昔のことだ。いつからだろうか。こんなにも、空がくすんで、青空らしい空はなくなり、空気がべつとりとタールを含んだように渋く汚れているようになったのは。空はいつも広大な虚無のようにとらえどころがない。

樹木は枯れ、花は萎んだままだ。世界から季節を剥奪したのは人間どもだった。季節を乱獲し、密売するようになってから、春夏秋冬だけではなく、一月も二月も三月もみんな盗まれたまま行方不明になっていた。

修一はとっくに死んだ人間だったが、この世界は死んだ者と生きている者の区別もつかない。だから、ふつうに家族といままで通りの生活ができるのだが、家に帰れば、明治生まれの祖父などもいまだ成仏できずに、仏壇の前に座っていたりする。そんな賑やかな家のようなのだが、どこか奪われた空のように陰気くさく、無口な家だった。それは、この街のどこでもそうなのだが、季節喪失したわれわれは季語のない世界に暮らしているからだった。

修一は、朝食の時間に、未亡人となった妻のユキエと向き合っ、ぼろぼろと箸では摘むことのできない乾いたご飯を食べていた。

「子供たちはどうした」

修一の声は心の中でしか響かない。ユキエは夫の声にぼんやりと目を上げると、
「学校に行きました。勉強はしないそうです。来月の六月を製造するために、かり出されているんです」

ユキエもひどく事務的にまるで教科書を棒読みにするように云った。

「そうか、戦時体制と同じだな。中学からみんな十二ヶ月の製造工場に勤労奉仕か」

ユキエはようやく人間らしい感情を剥き出して云った。

「あなたはいいですよ、すでに鬼籍にお入りになられたのですから。わたしたちは生き地獄」

修一は、また妻の愚痴を聞くのが嫌で、箸を置くと、外出の支度をした。曾祖父なども廊下に座っている。別に邪魔ではないのだが、目障りだ。幽霊になっても痴呆は治らない。話し声のしない家は嫌いだった。それで、修一は人間の本当の声を探しに街に出たりする。

近頃、修一はどうしても欲しいものがあつた。欲しいとなるとたまらなく、たったいま、手にしてみたい性分だったから、うろうろと探すことになる。それは、生前のまだ修一が幼い頃の「五月」だった。

五月がどこかで売ってはいはしまいかと、五月を探しに街をうろつく。すでに絶版になり、希少価値がある五月はなかなか入手できないだろうと思われた。

とあるスーパーの中に入り、店員に訊いてみた。

「この店では、五月なんか売っていないでしょうね」

喪服を着た泣きやんだばかりの店員は答えた。

「新商品で発売される予定もありません。そんな古いものでしたら、骨董品店に行かれたらよろしい」

そうして、近くの骨董屋を教えてくれた。背中に卒塔婆を背負ったままの仕事も大変だ。

修一は、くすんで音楽のない街を骨董屋の前に立った。そこだけは何か彩色があり生者の欲望がいまだに蠢いているような気がした。店内には、もう使われることのない「初恋」だとか、「笑い」が、干涸らびて売られていた。胡散臭そうな親父が帳場に座って「罪と罰」を読んでいた。修一は疑問があると、判然りと訊くほうだ。

「ごめんなさい。どうして、いま、ドストエフスキーなんですか。あなたは、粘着性気質なんで

すか」と、いきなり失礼な質問もする。ぎろりと眼鏡越しに睨む親父。

「そういうおまえは足がある。この世にいないものが、人間のふりをする。まさにシェークスピアか、能の世界だな」

親父は文学で商売を駄目にしようとしているらしい。

「あのう、わたしに、五月を売ってくれないか」

すると、親父は外の通りを左右眺めながら、玄関のガラス戸にカーテンを閉めて云った。

「おまえ、そのことを誰から訊いた」

季節を売買するのは法律で禁止されている。かなりヤバイことを親父はしている。修一はそうならむと急に嬉しくなった。

「あるんですね、昔の五月が、あの高い青い空と、鳥の囀り、花の乱舞」

親父は血相を変えて、口に人差し指をあてて、

「しっ、声が大きい。壁に耳あり」

修一は壁をくまなく見て耳のないことを確認していた。ただ、口がくっついていて、ぱくぱくと何か喋っている。

「だが、残念だな五月は幽霊には売れない。実体のないものは信用がおけんからな」

「そ、そんな。わたしは、これでもちゃんとした幽霊会社の役員をしている。幽霊預金だってあるんだ」

修一は仕方なく妻名義のクレジットカードを出して購入することにした。三回払いにしてもらった。五月は四角いガラスの容器の中で、縮こまっていた。

「随分、萎縮しているな。虐められたのか」

骨董屋はタバコの煙を吹き付けながら、首を一回転回しながら笑った。

「五月は、おれがレイプしてやったのよ。使用済みだから安くしておいた。はははははは」

修一は気分が悪かった。五月に処女は期待していないが、純粋な風はなければならない。それも、あの男に汚されたと思うと。

修一は、昔よく遊んだ墓地の裏の原っぱに行った。そこだけは昔のままだが、草は枯れ、木は骨のように立っているばかり。修一は、ガラスの函から五月を空に向かって逃がしてやった。すると、灰色の空は一面の青空になり、鳥がどこからともなく飛んできた。気が付くと草原も緑が甦っていた。修一はその中に倒れ込んだ。

「五月に生まれたものは五月に死ぬ」

修一の誕生日はもうすぐだ。そして、命日もそれに重なる。これでようやく、本当の死を死ぬる。修一はみるみる骨になり、その骨すらも甘い風に乗る塵となる。

人々はうっとり空を見上げていた。忘れていた色彩に弔いの歌を聴いていた。

長屋のようなアパートに八田さん一家が住んでいる。高校生の娘と奥さんと三人暮らしで、八田さんは地方公務員だが、暇なポストに就いているせいか、気が長い性格だ。その隣に今度引っ越してきたのは、熊谷さん。そこは子供のいない夫婦で、大工の棟梁をしていた。こちらは喧嘩早く気が短い。

「おう、親父いるかい。今度、隣りに越してきた熊谷だ。何かと世話をかけるかもしれねえが、隣のよしみでよろしく頼む」

すると、のそのそと八田さんが出てきて、

「そうおかい、あなあたあが、こおんどう、ひいっこおいしいしてきたあひいとおかあい」ゆっくりとした口調で云うものだから、熊谷さんはおったまげた。

「随分と悠長な人だね。おれのことは熊と呼んでくれ」

「くうまあさあなかあい」

とても聞いてもらえない熊谷さんはすでに苛々していた。

「あのな、言葉ってな、子音に母音がかっついてるが、母音を延ばすんじゃねえんだよ。もっと早口で云ってみなよ」大工さんと云っても最近は大学出で学がある。

「早口って、これくらいかい」

「まあ、それで普通の早さだがな。口を開けてみな。舌が長すぎるのかな。絡まるんじゃねえんだろな」

熊谷さんは初対面の人に対してもズケズケとものを云う。

「ところで、お宅の母ちゃんはいねえのかい」

「女房は三年前に買い物に行きました。遅いなあ。まだ帰ってないんですよ」

「な。なんだと？ 三年前に買い物に出たきり帰ってねえだと。それは拉致されたんじゃないか。それとも逃げられたか。いずれにしても警察には届けたのかい。よくのんびりと云えたもんだ」

「そういえば、うちの娘も遅いんだ。高校へ行ったきり、一年帰ってこないんだな。今日は何日だと思っているんだか」

「げっ、バ、バカな、あんた、何、考えてんだよ。それは行方不明ってんだ。一年も学校に行きっぱなしの高校生がいるかよ。家出か誘拐か、何らかの事件に巻き込まれたか、どっちにしても、捜索願出したほうがいいよ。ったく、どうなってんだい」

「そうかい、それなら、いまから、ソウサクネガイを出すけど、文面を考えるから、一年待ってくれないかねえ」

「一年、な、なんと、卒業論文じゃねえんだ、ハクトオバンで電話一本でいいだろ。このコンコンチキメが」

熊谷さんの血圧はかなり上がっていた。八田さんと話しているだけで健康に悪い。

と、そこへ買い物に出たまま帰らなかった奥さんがのそりと帰ってきた。

「あ・な・た、たあだあいいまあ」

見ると、買い物に出かけたときのエプロン姿に買い物かご。ただ、どこかくたびれている。

「なんだ、おまえ、遅かったじゃないか」

熊谷さんは、そんな問題じゃねえだろうと、とさかに来ていた。

「あーなーたー、どーしーてー早口なーのー」

「こちらの引っ越してきたお隣りさんが、どうもこうもないのだが、その、なんだな、つまり、平たく云えばだな、わたしたちがだな、そのお、話している、なんというか」

「るせえ、結論からトントンと云いやがれ。白か黒か、イエスかノーか、それからだらだらと話やがれ。このウストラトンカチ」

熊谷さんの顔が真っ赤になっていた。

「そうすれば、早く喋るわね。わたしは、買い物に行った三年前ね、駅前のスーパーまで歩いて三日」

「なんだとお、一キロ先まで歩いて三日だとお、でんでん虫でもあるまいし」

「それでね、買い物していたら、昔の彼に逢っちゃって、それからね、話し込んだら、懐かしくなってさ、つつい一年経ってしまっ」

「何、立ち話で一年だと」熊谷さんの合の手が入る。

「いいえね、気が付いたら一緒に暮らしていたのよ」「そんなとこだらうよ」「それでね、思い出したのよ、買い物の途中だったことを。ほら、買った牛乳がブルーチーズになっちゃってさ、ははははははは」

そこへ、のそのそと高校生の娘も帰ってきた。

「お帰り、随分と遅かったじゃないか」

娘はよれよれで汚れきった制服を着ていて、すっかりと疲れきっていた。

「わたしは、頭が悪いのよね。放課後に残されて、数学の応用問題を解くまで帰るなと先生が云ったから、一生懸命に考えたわ。ようやく一問解いたのが半年後、学校に泊まりがけで、みんな弁当分けてくれて」

母親ももらい泣きしていた。

「あなたは、そういえば、昔から計算が弱かったものねえ」

熊谷さんの血圧は上が二百を超えた。

「あんたら、アホの一家か。娘が学校に行って帰ってきて一年か。卒業するには千年も通わねばならないぞ」

「でも、これで、また家族一緒に暮らせるんだ。晩ご飯を店屋物でもとろうかい」

「いま、電話するね、わたしはカツ丼がいいな」

その話を聞いて、かちんときた熊谷さん。

「なんだ、なんだ、自分で作らないで、出前を取るだと。贅沢なこって」

「いいえね、自分たちで作ると、いつのものになるか判りませんから、手が遅いというか、大根の皮を剥くだけで、半日はかかります」

「そうか、口だけじゃなく、手も遅いのかい。ただ、まだ三時だよ、いまから晩飯は早ええだろう」

すると八田さん、にこにこ顔で云った。

「いいえ、ご飯を一口噛むのにも、一時間はかかりますから、いまから食べても明日の朝までかかります」

熊谷さん、とうとう血圧が高くなってぶったおれた。

「た、たいへんだあ、き、きゅうきゅうしゃを呼ばあなあけえればあ、急いでえ、手遅れにいなあるうかあもおしれえなあいかあらあ」

奥さんが電話に辿りついたのは、それから三十分してからだった。

第463話 希 薄

「息苦しい感じがするというんですね。それと倦怠感ですか。一応、精密検査をやってみましょう」

「はあ、お願いします」

田村幸信は、四十を過ぎたばかり。健康には自信があった。いままで、病院の門を潜ったことはない。それが突然、変調をきたした。何がどう悪いのかということがはっきりしない。ただ、胸が空虚な感じで、酸素が不足しているように、窒息するような恐怖に囚われる。そして、以前のようなやる気が起こらない。とてつもない疲労感が何か重い枷となって、自分の上にのしかかっている。

田村は、心電図、レントゲン、検尿、血液検査と一通りの項目で調べられた。結果は一部、明後日ということだが、医師の診断結果はおよそ出ていた。

「どこも異常がないようですね。健康そのものです。ストレスからくるパニック障害というのがありますが、それも初期の段階で、いまなら克服できるでしょう。何か、趣味はありますか？」

「はあ、麻雀とかカラオケとか」

とりわけて趣味とは云えないものだったが、他にパチンコもあった。単なる娯楽だ。

「それもいいですが、もっと、外に出て体を使うスポーツがいいですね。ジョギングなんか毎朝やられたらいかがですか」

そう云われて田村は仕事に復帰していた。中堅の証券会社の営業をやっていたが、最近の株の低迷で、新規の客の獲得は皆無だった。ノルマだけが、いつも鬼のように成績達成ボードの上で睨んでいた。それは、田村だけでなく、巨額の赤字を抱えて、いまにも倒産しそうな会社全体の暗い重さを全社員、幹部が背負っていた。いつか、社員同士の会話もなくなり、アフターファイブのつきあいもなくなった。それどころか、共稼ぎの家を狙って、夜のセールスが多くなった。昼間は留守が多い。年金をたんまりと貰っている老人は、もう意欲がない。若い人をターゲットにしていた。そのために、夜間まで事務所には煌々と電灯が点いて、電話セールスをみんなしていた。残業なんかつかない。

田村が家に帰ると、いつも十時を回っている。妻は自分の部屋に引きこもり、テレビの音声だけが聞こえていた。夫婦でも別々の部屋に寝ている。すでに家庭内別居が始まっていた。中学の息子は反抗期で、少しグレていた。急に男っぽい匂いがしてくると、口数が減ってきた。いまは、親と口もきかない。何をしているのか、まるで親には見えてこない。高校にあがったばかりの

娘も、何を考えているのか田村にはさっぱりと判らない。ケイタイで遊んでいるのをたまに見かけるが、髪を染め、化粧して外出するときも、親の顔も見ない。

いつからだろうか、挨拶ということが市民生活になくなっていった。電話がかかってくることも、いきなり要件だ。実に非礼な気がする。家でも会社でも、季節、儀礼にかかる挨拶がとんとなくなっていた。おはようもこんにちわもない。取引先とのお世話になっておりますもない。挨拶は人間関係の潤滑油なのだが、それがなくなってからは、言葉というものが少なくなっていた。みんな、メールでは結構、コミュニケーションはとっているらしいのだが、その影響もあるだろう。

挨拶の喪失でぎくしゃくしているかと思うとそうでもない。いつのまにか、みんなそんなもんだと割り切るようになっていた。いまや、上から下までみんなそうだった。お祝いもお返しも、もう、歳暮も年賀状もなくなっていた。すべて、自分は自分、他人は他人と関わりのない生活に徹するようになり、自己中が増殖してから、冷たい社会が成立していた。

田村だけでなく、そんな症状を訴える患者が増えていた。不況が第一にそうさせる。何をやってもうまくゆかない。給与はカットされる。失業は増える。それで、家庭崩壊をあちこちで起こしていた。

ある朝から、田村に異変が起こっていた。空気が薄く感ずるのはいつもだが、今度は、家の内部ははっきりと見えるのに、家族だけが、薄っすらとかすれて見えるようになったのだ。田村は自分の目を疑った。こすってみた。頭を叩いてみた。視覚障害まで出てきたのかと、愕然となった。妻の体が透き通って、後ろの冷蔵庫が見えるのだ。自分の体はちゃんと見えるのに。

田村はいつものように出勤した。外を歩く人の姿も薄く見える。それは、会社に行っても同じだった。幽霊のように消え入る感じだ。そればかりではなかった。人の声も次第にかすれてゆくのだ。幻聴か。どうやら、脳にきたらしいと田村は焦って、先日行った病院に駆け込んだ。

「あなたもですか。今日はあなたで五人目です。みんな同じ症状を訴えています。ここでは対処できませんから、紹介状を書きましょう。精神神経科においでなさい」

医者は難しい顔をしていた。田村が外に出ると、さっきよりますます見えなくなっていた。どんどん酷くなる一方だ。

「駄目だ。このままではおれは終わりだ。気が狂ったのかもしれない」

田村が、薄くなってゆく人間たちの中に、田村と同じように、きよろきよろして焦っている通行人を見つけた。

「ひょっとして、あんたも、見えなくなっているのか」

と、中年のサラリーマンに声をかけてみた。

「そうなんだ、昨日から、ぼんやりしてきて、人間だけが見えなくなり、聞こえなくなっている。車の騒音や、犬の吠えるのは聞こえるんだが、ほら、あなたの……」

男の声も次第にフェードアウトしてきた。

なんなのだ。これは新しい伝染病か。田村は恐ろしさのあまり走った。すると、何かにぶつかった。多分、通行人なのだろう。見えない。人間だけが見えない。聞こえない、人間の声だけが聞こえない。完全に人間の姿は街から掻き消され、運転手の見えない空のタクシーが走りさる。バスも無人のまま走っている。信号の音だけが聞こえている。すっかりと無人の街になっていた

。

「嫌だ、助けてくれ。おれは、ひとりになっちまった」

田村は、恐怖のあまり絶叫した。田村の声だけが、誰もいない街の谷間に反響していた。

第464話 学 校

放課後の誰もいないはずの中学校から、夕闇が落ちる頃に、ふらふらと一人の男性教師が出てきた。背広はズタズタに切られていた。ネクタイも半分がない。ワイシャツは破れ、靴跡がついている。鼻血は止まったが、顔面に血がこびりついていたし、目の回りは青く腫れていた。全身痣だらけのようだった。かろうじて歩いている様子だった。校門の前までくるとバタリと倒れ込んだ。通行人がそれを発見して、救急車を呼ぼうと、ケイタイを耳に当てると、先生は通行人の足を掴んで懇願した。

「頼む、通報しないでくれ、このまま家に帰れるから。このことは内密にしてくれ」

学校。そこは教育の場であった。教えるものと教えられるものとの、厳粛なヒエラルキーが、いまは全くなくなっていたばかりか、逆転現象を起こしていた。

「キャー、やめて、許して」「た、助けてくれー」毎日のように、学校の内部から、先生方の絶叫が聞こえてくる。

「おれが頭悪いんじゃないやねえんだろ、おまえの教え方が悪いんだよ、なあ、そうだろう」

「は、はい、確かにそうです。わたしが悪うございました」

「そうなんだよ、初めから素直にそう云ってれば、怪我しなくて済んだんだよ。これからは、ゲタ履かせろよな。みんなに百点くれればいいんだからさ。間違った答えは、おまえがちゃんと直してくれればいいの。判った？ 返事は？」

今日も学校の教室で集団の虐めだ。先生が生徒に虐められる。学級崩壊は、とても勉学の場ではなくなっていた。教室を見渡してみると、ゲームボーイをしているもの、ケイタイでメールを打っているもの、エロ本を堂々と開いて見ているもの、コーラやおやつを遠足のように持ち込んで、お喋りしながら食べているもの、窓辺に立ってタバコをくゆらしているもの、誰もまともに勉強なんかしていない。その中で、先生が血祭りに上げられている。みんな、手に手にカッターナイフやチェーンを持っていた。竹刀やエアガンまで持ってきている。生徒たちは髪は金髪、ピアスをして、女の子たちはど派手な化粧、ちちくりあって、キャーキャーと騒いでいる。教室の後ろでは、MDステレオをがらがんかけて、踊っている生徒もいた。そうかと思うとテレビを持ち込んで見ていたり、教科書もノートも筆記用具も机の上にはない。

校長室はもっと悲惨な状態になっていた。数人の不良生徒たちが、校長の椅子を占拠し、足をヤクザのように机に上げている。歴代の校長の肖像写真には、マジックで悪戯書きされていた。校長を足蹴にして、棒でこづいて遊んでいた。生徒たちの足の下で校長はなおも説得しようと怯えながらも諭していた。

「君たち、いま、授業を蜂起して、このまま教養もなく、社会へ出たら、君たちの将来はどうなるんだ」

「ケケケケ、おれたちの将来だとよ。ざけんじゃねえよ」

「この日本を背負って立つ若者が、こんなことでどうする」

「けったくそ悪いぜ、おい、もっとヤキ入れてやれ」

校長は棒で叩かれ、足で蹴られ、あちこちから出血していた。窓ガラスに血飛沫が跳ねていた。

職員室も酷い有様だった。先生方は一ヶ所に集められ、床に正座させられていた。先生たちの財布から札を強請るもの、勝手にコピーの機械を使うもの、パソコンでアダルトサイトを見るもの、電話機はすべて線が切られていた。机の中は荒らされ、書類が散乱し、土下座して謝っている先生もいた。多勢に無勢だ。生徒たちも近頃は体も大きく大人以上の体格をしている。すっかりと学校は占拠されていた。

ガラスは次々と割られ、廊下は破片で大変なことになっている。消化器を噴射させたり、理科室の劇薬を混ぜてばらまいたり、壁にスプレーで落書きしたり、破壊と略奪で、学校は戦争でもあったような状態に荒れていた。

生徒が帰ってから、先生たちが全員残って、今後の対応について話し合った。

「われわれにも、もう時間がありません。このまま、屈服していても、負け犬で死んでしまうだけです。いままで、親たちにもバカにされ、それを聞いている子供たちからも暴力を受け、先生と云われるほどのバカでなしとか、先生は生徒のなれのはてとか、いろんな侮辱にも耐えてきました。もう、我慢がなりません。立ち上がりましょう。PTAが怖くて先生がやっていますか」

教頭がいきまいて拳で机を叩いた。

「そうだ、そうだ」と、場が盛り上がってきていた。無傷の先生はひとりもいない。みんな、腕を包帯で吊っていたり、松葉杖をついていたたり、顔は絆創膏だらけだ。

「目には目を。明日から、生徒を愛の鞭で導きましょう」

そうやって、先生はプロテクターで防御することにして、手にはヌンチャク、若いときに暴れたゲバ棒。

中学校は翌日から、内乱が始まった。授業どころではない。先生と生徒の仁義なき戦いだ。中学校だけではない。街の至るところで喧噪が聞こえ、略奪、暴行が頻繁と起こっていた。市民はパニックになり、暴徒となり、警察も無力だった。殺人、放火はあちこちで行われていた。こんな、追いつめられた状態になって、人間の本性が判る。すべての人間には時間がなかった。最後をおいしいものをたらふく食べながら、家族で寄り添うものたち、やりたい放題の悪事に狂奔するものたち、様々な終末の光景が賑やかに繰り広げられていた。

空にはすでに肉眼でくっきりと見えるほど、小惑星が接近してきていた。直径千キロの惑星が、地球に衝突するまで、あと二日だった。

奈保子と圭一郎は、姉妹都市の交流会で結ばれた。海峡を挟んで、向かい合わせた街と街が、姉妹都市の契約を締結した記念の船旅に二人は選ばれていた。その客船で、近海をツーリングしたときに、若者たちの参加者たちの中で、いくつかのカップルが誕生していた。その中のひと組が奈保子と圭一郎だった。

出会いが劇的であればあるほど、縁というものを奇遇として感じて、より強く男女を結びつけることになる。特に、旅という不安定な非日常の精神状態の中では、より互いを見えなくするのだ。

奈保子も四十になった。圭一郎は三つ上だ。お互いに若いときの面影がないくらい太っていた。結婚して気が付いたら十八年も経っていた。その間に二人の息子が生まれたが、すでに中学に上がっていた。子育て、家事、そして、共稼ぎの仕事に、趣味のサークルと、目まぐるしくあつというまの十八年だった。海のロマンが幻惑させた愛は、醒めるのも早かった。圭一郎は自分の趣味に逃げ、奈保子も、サークル活動に淋しさを逃がしていた。十年経つと、互いの存在は空気みたいになり、それが十五年経つと後悔に変わってきていた。子供たちが大きくなり、もう親と一緒に歩かなくなると、その子供中心だった家庭が、いつか、夫婦だけのものとなる。日曜も部活で息子たちのいない家に夫婦だけが向き合っているとき、奈保子は改めて、この男は誰なんだろうという疑問が湧いてきた。奈保子が読んだチェーホフの本に「孤独が怖ければ、結婚をするな」という下りがあった。まさに、幸せの絶頂から見下ろせば、後は下り坂なのだ。夫婦は、次第にどうでもいい存在として相手を見るようになり、それが過ぎると、邪魔な存在として煙たがる。

惰性で夫婦をしているものも多いのだが、向き合ってみて、改めて、奈保子は夫婦って何だろうと、自問することとなった。子供たちがやがてこの家を出ると、本当に二人きりになる。それが恐ろしい気もする。

二人の結婚記念日の日に、奈保子はそれとなく圭一郎に訊いてみた。

「今日は、何の日か知っている？」

圭一郎はノートパソコンのキーを叩きながら、空返事だ。夫婦の会話も最近はない。圭一郎に云わせれば、別にいまさら話すこともないだろう、だ。暫くして、

「アイスクリームの日だったけか」と、とぼけたような夫の返事。

「そうね、口の中で溶けてしまえば、甘いだけのただの思い出か。今日はね、結婚記念日なのよ」

「へえ、それがどうした」

「あなたには、特別な日に思えないの？」

「思い出したくもないね」

そこまで云われると、さすがの奈保子もかちんときた。いままでの鬱積した気分がどっと吐き出される。

「あら、そう。あなたがそんな気持ちでいたなんて知らなかったわ。わたしの青春返してよ」

初めて、奈保子はそんな紋切り型の棄て台詞を吐いた。すると、キーボードの手をぴたりと止めた圭一郎は、真剣な顔で、奈保子のほうを向いた。

「いいだろう、返してやるよ」

「えっ？ こんなときに冗談を」

奈保子は普段、冗談も云わない真面目な圭一郎の口から出た言葉を疑った。

「そんなときがきくと来ると思って、大事にとっておいたんだ」

そう云うと、圭一郎は、絶対に開けるなよと昔からきつく云っていた函を取り出した。いつも、奈保子は中に何が入っているのか知りたがっていたものだ。いま、その函を出してきた。

「何なのよ、その中にまさか青春が入っているなんて云わないでしょう」

「そのまさかだ。おまえの青春は、寝ている間にコピーして保存しておいたのだ」

そうして、圭一郎が蓋を開けると、そこには真綿に包まれたパープルのゼリー状のものがはいっていた。それが何故か生き物のようにドキドキと動悸しているのだ。

「さあ、これを呑んだら、また若いときに帰れるよ。二十二歳の別れの前の、独身のおまえにな」

半信半疑で、その不思議な物体を奈保子はいろんな角度から眺めていた。

「これを呑んだら、あなたはどうなるの？」

「さあ、多分、歴史は変わらないだろうから、いままでと同じだろう。どうせ、いてもいなくてもいい存在だろうからな」

奈保子はぴくぴくと動く「青春」を一気に呑み込んだ。すると、ふうっと意識が薄れてゆく。

奈保子が目覚めたのは、実家の自室だった。頭がぼんやりして母親の声で渋々と起きだした。何か重大なことを忘れていたような気がしていたが、それがなんなのかどうしても思い出せない。長い夢を見ていたような気もするが、すっかりと消去されていた。また母の声だ。

「奈保ちゃん、あんた、旅行へ行くんでしょ。遅れるわよ」

若い母の声が台所から階段を伝って上までかるやかに上がってきていた。奈保子は、洗面所で髪をといた。二十歳の奈保子がいる。旅行の準備はできていて、部屋に荷物がまとめてあった。着てゆく洋服もハンガーにちゃんとかかっていた。父親は仕事だ。

「おい、気を付けて行ってくるんだぞ。三泊四日の船の旅か。いいだろうな」

奈保子は、集合場所の港まで仲間の車が迎えにきて一緒に向かった。大学を卒業したばかりの奈保子は、この春、栄養士として病院に勤務していた。仲間の美智や冴子が、もう出会いを求めて浮き足だっている。

「どんな素敵な人が来るのかしら。もし、奪い合いということにでもなれば、わたしは友情を棄てるからね」

そうって笑う澆刺とした若さが眩しい。

青年の船は港に停泊していた。すでに、海の向こうの姉妹都市から、若者たちが乗り込んで、デッキから手を振っている。奈保子たちは大きな客船に乗り込んだ。エスコートするように、見知らぬ青年たちが並んで迎えた。その中に奈保子ははっとするような背の高い優しい目をした人を見つけた。向こうも奈保子を気にして見ているようだ。

甲板でレセプションがあり、両市長の挨拶のあとに、青年団長同士の堅い握手ののち、船上ウエルカムパーティーが行われた。

冴子と美智は、積極的に自己セールスして、相手の輪の中に入ってゆくのに、奈保子だけはどうしても気後れして、壁の花になっていた。すると、傍で男性のソフトな声が出た。

「あのう、お名前を訊いていいですか」

奈保子の傍にさっそく来たのはさっきの素敵な青年だった。奈保子はどぎまぎした。初対面からピンと来る人というのは滅多にいない。

「北、北野奈保子といます」

顔が幾分か紅潮していた。意識しないようにすればするほど顔に出てくる。

「ぼくは、本郷圭一郎です。よろしく」

奈保子はすっかりのぼせていた。こんな人と結婚できたらいいだろうなと想像しながら。

船は甘い香りを漂わせながら外洋へと出航していった。青春は何度あってもいいものだ。ただ、その先に待っているのは疲れ切った現実だけだということをもまだ誰も知らないでいた。

第466話 街を捨てよ書へ戻ろう

少年Aは高校をサボって街で日がな遊んでいた。学校に行かない不登校の生徒には、ひきこもりの生徒の他に、Aのように外で遊び回っているやつもいた。陽性と陰性があるとすれば、Aは前者だ。いつもひとりが多かったが、仲間がいないわけではない。自発的無職青年のBだった。二十四歳にもなって、職に就かない、というより、仕事にあぶれていた。有効求人倍率がこの街では全国最低で二割しかない。五人の求職に対して一人の求人だ。それも、まともな仕事はない。ハローワークに初めのうちは、AもBも日参していたが、求職の人で溢れ、いい仕事は倍率が高く、学校に真面目に行っていない若者は書類審査で落ちた。

少年Aは、時間を毎日持て余していた。どこで時間を潰そうかと考えるのも苦痛だった。青年Bもまた同じで、街をいつも自転車で走り、うろうろしていた。二人とも家でごろごろしていれば、近所の目がうるさい。親も口うるさい。それで、一日中、外にいるのだが、ゲーセンに行っても小遣いが無いから、遊べない。ミスドやマックへしけこむ小銭もないときている。働かざる者喰うべからずと、父親ががんとして、小遣いも渡さない。補給路を断られたものは、悪事に走る。二人はゲーセンで知り合ったが、朝飯も抜いて、昼も喰う金がないので、つるんで万引をやっていた。

喉が渴いたらコンビニでジュースだ。腹が減ったら、スーパーで弁当だ。書店でコミック、自販機を壊してタバコや小銭を盗むといったことを繰り返して、いまだに捕まったことがないのが不思議だった。そして、二人のいる場所は公園のベンチか、市民センターのロビーが多かった。テレビもあり、雑誌、新聞もただで読めるロビーのふかふかのソファに座って、昼寝をしたりしていた。

そこには壮年の失業者たちも屯していた。中には会社に行くような鞆をさげて、スーツをきちんと来た紳士までいて、昼になると、奥さんの作ってくれた弁当なんか食べている。世間体が悪いから、毎日、こうしたセンターに「出勤」しているのだ。奥さんにはリストラされたとは云えないでいた。

そんな世間の吹き溜まりが、こうした公共施設の休憩所にできていて、一日、何もすることのない人々が沢山いるのだった。都会に出れば、選ばなかったら、いくらでも仕事はあるのだが、若者たちは親元から離れたくない。ひとりで生活することができない、喰えないものが多かった。

青年Bと少年Aがいつものように、公園のベンチでねそべりながら空を見上げていると、いきなり、白髪のじいさんが顔を覗かせた。見たこともない品のある身なりで、にこにこ薄気味悪く笑っている。少年Aが半分、目を開けて云った。

「なんだよ、なんか用かよ」

じいさんは顔は皺だらけだが、本当の年は見た目より若いような顔をどこかに残していた。じいさんは云った。

「君たち、毎日、退屈だろう。どうだ、街は面白いか」

「なわけねえだろう。もう、飽きたよ。なんか面白いことでもあんのかよ」

「君たちは、何をしたいのかな」

「るせえな。したいことが判ったら苦労しねえよ」

「そうか、そうだな、欲望もないか」

「欲望ならあるよ。ケイタイが欲しい。金払わねえから止められてさ、それから現ナマだな。一億あれば遊んで暮らせるだろ。それに彼女だよな。スポーツカーもいいな」

「将来、何になりたい」

「なんだよ、アンケートに答えたら景品でもくれるのか。そんなの考えたこともねえよ。仕事がねえんだから、将来もけったくれもあるかい」

「そうか、そうだな。ところで、君たちは、ナガヤマノリオって知っているかい」

「なんだ？ ナガヤマなんとなかって、お笑いにいたっけか。ロックでもやんのか」

「いやいや、知らないで結構。君たちはこのまま、みすみす大事な青春を徒労で終わらせるのか。いまが、一番楽しくなければならぬときだろう」

「何が楽しい？ 毎日が地獄じゃねえか。おれたちみたいな若者がごろごろしている。政治家がみんな悪いんじゃないの。社会のせいだよな。あんな連中、拳銃でもあれば撃ち殺してえよ」

青年Bも起きてそんなことを呟いた。

「そうさな、おじさんも、いや、昔、そんな無鉄砲な、いや、鉄砲はあったな、若者がいてな、社会に責任転嫁して、連続殺人した莫迦なやつがいたんだ。でもな、そいつは、逮捕されて、刑務所の中で初めて自分というものに向き合ったんだな。中学もろくに出ていないやつだったが、マルクスの資本論を独房で読破した。ヘーゲル、ニーチェ、フォエルバッハ、次々と哲学書を読みあさった。そして、『無知の涙』という一冊の本を書いたのだ」

「じいさんよ、説教は沢山だぜ。家でも耳にタコができたんだ。そのナガヤマというのと、おれたちと何の関係があんだよ」

「君たちのいるこの街は、一見自由なようだが、ここは巨大な牢獄なんだ。金があるものには、愉快でたまらない構造になっている。金がないものたちには鎖で繋がれたも同然だ。そうは思わないか。君だって、欲しいものは沢山あるだろう。それを指をくわえて見ているだけだ。だがな、そういったモノというものにはすぐ飽きがくる。街は欲望が渦巻いている。万引も日常的にな

ってくると、スリルもなくつまらないだろう」

「どうして、じいさんは知ってたよ。見たのか、おれたちの盗るところ」

二人とも飛び起きた。

「モノというものは、すぐに壊れるし、盗まれる。街はそんなくだらないモノを売るためにあるんだな。どうだろう、そろそろ、本当の面白いことをしてみないか」

「そんな面白いゲームがあんのかよ」

「あるとも、すべての面をクリアしてしまうようなゲームとは違う。死ぬまで到達しないゲームだよ。それはとても膨大なものだ。いまだに征服したやつはおらん。しかも、それは、少しの金で、人生観が変わったり、目が覚めたりするんだな。世の中が不思議と透けて見えてくる。いままでの何倍も世界を楽しむことができるんだ。それはだな、モノに束縛されるのをやめることだ。頭の中に知識を貯めるんだな。そいつは、火事で燃えたり、泥棒に盗られたりしないんだ。裸一貫で、どこへでも持ってゆける」

「なんだよ。超小型のノートパソコンみたいだな」

「そうだ、頭の中にあるハードディスクにどしどしとファイルを保存するんだ。どれ、わたしについてきなさい。いいところへ連れてゆくから」

そうして、退屈していた二人は、何か訳の分からないことをいう奇妙なじいさんに付いていった。その行き先は、裏通りのさらに裏通り。角を曲がったところにある一軒の古本屋だった。

「林語堂」という看板が出ていた。誠実買取、古書専門。じいさんは、ドアを開けるなり、奥の帳場へ向かって叫んだ。

「おやじ、また、客を連れてきてやったぞ」

奥から、丸眼鏡の若いときは美男子だったろうと思われる店主がひょいと顔だけ出した。

「おう、いつもすまん」

「なんだ、ただの古本屋じゃないか」

二人は口を揃えて幻滅したような言い方。

「騙されたと思ってだ、この一冊をとにかく読んでみる。頑張って一冊でいいから読むんだ。すると、二冊目が読みたくなる」

じいさんが勧めたのは、「指先物語」というショートショートだった。二人は、ジュースを買う金をポケットから渋々出した。まともな本というものを買ったことも読んだこともない。最近の若者の活字離れはひどいものがあった。それをこのじいさんはボランティアで客引きをしている。ピンクサロンなら、可愛い女の子と遊んで一時間三千円ボッキリでのそのそとついてくるが、古本屋ではそうは行かない。相手をその気にさせる説得に時間がかかる。若者二人はその本を通路に座ってさっそく読み始めた。いつの間にかじいさんは姿を消していた。店主はいつもそうして、客を連れてくる不思議な男の顔をどこかで見たことがあると、いつも思っていて、思い出せないでいた。若者二人に訊いてみた。

「あの、じいさんみたいな人な、名前は知らんか」

「名前？ ああ、なんかナガヤマノリオとか云っていなかったかな」

「ナガヤマ……、まさか、似た顔といったのは、そうか、あの人だったんだ。だが、ナガヤマは確か、死刑が執行されたはずだ。他人の空似だろう」

店主は、また椅子に腰掛けて昼寝の続きだ。若者たちが帰ったあとの古本屋は、開店休業。窓から吹き込む風で、仕入れた本がぱらぱらめくれた。そこに、一冊の「無知の涙」があった。

第467話 卓袱台返し

父親が全国的に弱くなった。父の威厳というもの、風格というものは明治大正で終わったのか。世の父親たちは、実に形無し、バカにされ、すっかり元気がない。それは、戦後のナイロンストッキングの強度とは関係がない。家庭での主婦の台頭による、力関係のベクトル指数とも関係がない。あるのは、環境ホルモンで男性の闘争本能が失われつつあるメス化した自然といわれる、一種の公害によるもの。そして、教えが弱体化して子孫に伝播してゆく結果なのだ。去勢された父親たちはびくびく、おどおどしながら家庭に隠れていた。わざわざ、新聞の公共広告で、優しいだけのお父さんを辞めませんかと訴えられる恥ずかしさ。もう、そこまできていた。「お父さんはな、お父さんなのだ」と、新聞を見ながら、気むずかしい顔で家族を睨んでいる、そんな漫画のネタもアイロニーから生まれる。

北村守男も、例外ではなく、その辺の弱い父親だったが、まだ、頑張っただけの虚勢を張っている。五十になろうとする県庁の課長職をしていた。役所で一番ストレスがあるのは人間関係だ。狭い建物の中に派閥、セクショナリズムが蔓延り、毎日が人間の軋轢で嫌な思いばかりする。守男のように中間に位置すると、上と下の両方から責められる。

部下の前では威厳を保とうとするのだが、部長が入ってきて、課長を頭ごなしに罵倒する。部下の目の前で、守男は上司としての誇りも削がれる。家では、母親が子供の前で父親を詰めるのと同じだった。そんな、へこへこ頭を下げる守男を普段から憎々しく思っている部下たちは、いい気味だと陰で笑っていた。守男のような中堅管理職の云うことを次第に部下は聞かなくなる。家では、子供は母親について、父親の云うことを聞かなくなる。

むしゃくしゃすることばかりだった。すべてに自信を失っていた。下からは文句を云われ、上からは叱られる。全く立場がない。発作的に窓から飛び降りたくなる。部下にもものを頼むときは、「お願い」だった。そして、その部下のヘマの責任だけはとらされて、上からは頭ごなしだ。役職手当を返上したくなる。

守男の唯一の楽しみは、勤め帰りに寄ってゆく、一杯飲み屋だった。とまり木に座って、ばあさん相手にもつきりにやっこで、管を巻くことだった。家で酒は出ないから、晩酌を安酒でやってゆく哀しさ。

「また、あんたの愚痴と泣き上戸かい」

ばあさんはほとんど嫌な客を持って余していた。他の客が来ると、そっちばかり相手にして、守男は放って置かれる。

「ヒック、どうせ、おれは、どこでも余され者だよ。どうせ、おれは……」と云うのが口癖に

もなってしまった。

家に戻ると、冷たく冷えたおかずの上に新聞紙が掛けてある。女房は亭主を待っていることはない。風呂も冷めていたし、ご飯もないときもある。帰ってこようが、来まいが関係のない夫婦だ。もう何年もご飯をよそおって貰ったこともない。

守男は、三杯ひっかけていい気持ちで、帰ると、冷えて干涸らびたような余り物でご飯を一膳だけ食べる。そして、寝るまでひとりぼつんと居間でテレビを見ていた。息子に娘も大学だから、いるかいないか判らない。家族全員が顔を合わせるときはあまりない。

ただ、朝は、みんなと顔を合わせる。洗面所でかちあうと、

「おい、おやじ、邪魔なんだよ、どけよ」と、息子に云われる。親が邪魔でどけるとは、どこの世界の話だ。そこまで家族からもバカにされ、舐められていた。

一番早く起きるのは守男だ。家のことをしなければならぬ。一番遅く起きてくるのは女房だ。その女房も仕事だ。化粧に時間がかかるので、家事なんかしてられない。守男が、出勤前に洗濯物を干して、食器まで洗う。自分の朝食はトーストを焼いて、インスタントコーヒーを入れるだけ。弁当まで自分で作ってゆく。

「あんた、冷蔵庫の買い置きのおかずは今晚のだから、弁当に入れないでよ。たくあんなら入れていいけど」

奥の部屋から女房殿の声が飛ぶ。仕方なく、守男は自分の弁当に、梅干しひとつにたくあん数切れをいれた。こんな弁当、恥ずかしくて誰にも覗かれたくない。いつも、蓋で隠して食べている。

テレビで朝のニュースを見ようとすると、娘が勝手にチャンネル替えて、芸能ニュースに占いだ。新聞を読んでいると、息子が取り上げて、テレビ欄を見ていた。何から何まで父親の居場所も尊厳もない。粗大ゴミ以下の扱いだ。ファザー・ハラスメントとでも呼びたい。

いつからか、こんなか弱い父親たちが増えてきた。怒らない、叱らない、叩けない、怖くない、情けない…。地震、雷、火事から親父は消えた。代わりにそこに子供が居座る。

鬱積した気持ちが捌け口がないから、胃にくる。いつも胃薬の世話になる。悔しさをなんで解消すればいいのか。いつもただ酒飲んで泣いていた。

勤め帰りにいつもの縄暖簾を潜ろうと、横丁へ曲がってゆくと、そこに新しい店がオープンしていた。勤め帰りのお父さんたちが、野次馬のように群がっていた。守男も何だろうと思ひ覗いてみた。

「なになに、元祖卓袱台返しの店？ ストレス解消に一回一万円だと？ 高いじゃないか」

守男が覗くと、中は畳の部屋になっていて、何かドラマのセットのような造りだ。丸い卓袱台があり、みそ汁やご飯、おかずが並んでいる。昔の家の夕食風景のようだった。そこに、母親役の女の人が、やはり昔のかっぽう着を付けて座っている。息子、娘役の子供までいる。そこに、予約したお父さん役のサラリーマンが入ってきて、胡座をかいて座った。なにやら、女の人がサラリーマンを詰ったり、文句を云ったりしていた。子供までがバカにするセリフを吐いているのは守男の家と同じだった。すると、いきなり、サラリーマンは怒った。いままで出したことのない大声で怒鳴ると、卓袱台をひっくり返した。それを見ていたお父さんたちから大きな拍手が聞こえた。守男も見ていてすっきりとした。

よし、おれもやってみよう。一万円は安い。いままで、したくともできなかった昔の親父の卓袱台返しができるなんて。感激のあまり、守男は目をうるうるさせていた。セットがすべて、元通りにされた。掃除もすぐにできた。おかずなどの経費もかかっているから、僅か十分で終わる怒りの爆発も、一万円分はあるのだ。とうとう、こんな新手の商売まで出てきたのだ。

守男の番になった。

「ただいま」と、我が家に帰ったときのように、背広を脱ぎ、ネクタイもとって、卓袱台についた。すかさず、高校生の息子が、

「この、くそ親父、小遣い上げろよな」

と口汚く云えば、娘もそれに輪を掛けた口の悪さ。

「何、その不細工な格好、とても恥ずかしくて、お父さんと友達に紹介できないわ。ねえ、お母さん、お父さんを別な人と取り替えてよ」

「ええ、こんな安月給の人と結婚したのが間違いでした。うだつの上がない、バカな人と一緒になるんじゃないよ」母親役まで憎たらしい口をきく。守男はついに切れた。いままで、怒ったこともなかったのに、かっとなって、叫んだ。

「バ、バカにするな。てめえら、なんだと思ってやがんだ」

みんな慣れたもので、さっと身をおかわす。卓袱台は見事にひっくり返し、ご飯みそ汁が畳に散乱した。

「ああ、さっぱりした」見物人から拍手が一斉に起こった。

守男は腹いせして、いままで溜まっていた鬱憤を晴らした。考えてみれば、洋風な生活になってから、椅子テーブルの生活だ。上座も父の席も居場所もなくなれば、テーブルも大きく、重くてひっくり返すことができなくなった。みんな、お父さんたちは帰りしな、同じことを考えていた。

一昔はよかった。父親は父親でいられた。永遠に悲壮ではあったがな。

第468話 危ノーマルな家族

柳沢さんが引っ越してきたのは、閑静な住宅街だった。新築の家は手が届かないから、中古住宅を購入した。その隣の家が、奇妙キテレツな造りをしていたので、前からどんな人が住んでいるのだろうと興味があった。

引っ越しの挨拶に、タオルを持って、一応、隣近所を回った。

「あの家はどんな方が住んでいるんですか」

向かいの家に先に行ったので、柳沢さんは尋ねてみた。すると、お向かいさんは、関わりになりたくないように、手を横に振った。

「これから、挨拶に行くんですが、気を付けてくださいよ。この近所では変人一家として、

つきあいがないんですから。旦那さんはデザイナーとかで、サルバドール・ダリっていうんですか、あんな口髭にリボンをしているんですよ。奥さんはフリーライターで、スキンヘッドで尼さんみたいだし、子供二人も魚眼レンズのような眼鏡をかけて不気味ににたにた笑うから、怖くて」

そう云う隣の橋本と、選挙でも出るのかと思う、大きな表札というより、広告塔のある家を怖々と見た。門からなにやら大きなジャバラの管が前庭を蛇のごとく這っていて、それが、複雑に絡まっているようにも思えた。家の形自体が、奇妙で、斜めに傾いている巨大キノコの格好だ。ちょっと目には遊園地。とても住居とは思えない。

柳沢さんは、嫌な予感がしたが、門から入ってみることにした。蛇のような管が入口になっている。どうしても、その中を通らなければ玄関まで辿り着けないようだ。直径2メートルくらいの管は、入ると何か、生き物の巨大な腸の内部を潜っているような気分だ。それが、まるで迷路のように中で分岐し、どちらへ行けば玄関か迷う。途中で郵便配達の人と出会った。彼はようやく人間に出会った感激で目を潤ませていた。

「よかった。出口はどちらですか。もう、一時間も迷ってしまして、閉じこめられたかと思いました」

そんなに複雑な迷路とは思わなかった。郵便配達の人にだいたいの行き方を訊いて、柳沢さんはなんとか玄関まで行き着いた。とんでもない家だ。

ドアにチャイムがないので、ドアを叩いた。

「橋本さん、隣りのものですが」

すると、中からノックの音がした。おかしい。また、柳沢さんがドアを叩くと、それに応えるようにノックの音がするではないか。

「橋本さん、いらっしゃるんでしたら、開けてください」

すると、中から苦しそうな女の人の声がした。

「入ってます。ちょっと待ってください」

そして、水洗を流す音がしたと思うと、ドアのロックを解錠する音がした。

「お待たせ」と、ドアが開くと、そこは便所だった。スキンヘッドの奥さんがすっきりした顔で立っていた。

「あのう、失礼いたしました。トイレとは思わなかったものですから」

「いいんですよ、ここが玄関ですから」

「ええ？ お宅は玄関がトイレになっているんですか」

「そうなんです。入るところと出るところが一緒だと話が早い」

「そ、そんな問題じゃないでしょう。それに、この迷路みたいなくねくねした通路は何ですか」

「ああ、最近、訪問販売も多いし、ピッキングする空き巣も多いでしょう。この入口は夫のデザインで、腸を通過して、玄関に排泄されるというイメージかしら」

奥の部屋からデザイナーの亭主も出てきた。

「お隣に越してきた方ですか。どうぞ、よろしかったらお茶でも」

と、後込みする柳沢さんの中に招き入れた。柳沢さんは覗いてみたい興味もあった。便器を跨

いで入るなり、梅図かずをのホラー漫画のように、眩暈がして、真っ直ぐに歩けないでいた。

「なんだか、気分が悪くなりました。どうして、斜めに造ったんですか」

「斜めではないんですよ。これが真っ直ぐなんです」

そう云って、ダリ髭の主人は分度器や水平器まで出してきた。柳沢さんの前で、ちゃんと水平に垂直、角が直角なことを実証して見せた。

「どうして、斜めに傾いて見えるんですか」

目の錯覚にしてはおかしいと柳沢さんは自分の視神経を疑った。

「それは、外の世界が歪んでいるからです。それに慣れてしまうと、普通になってしまう。ここが実は正常な感覚の家なんです、世間では変っている、普通じゃない、奇人変人と噂していますね」

「でも、天地は逆になっているでしょう」

「そこまで普通じゃ面白くないでしょうから」

「拘って生きていたいですからな」

夫婦はつんとすましてそう云った。

家の中は廊下が天井に、天井が廊下になっている。逆さまの世界だった。そして、壁には騙し絵が描かれていた。3Dのシュールなアクリル画で、傾いた皿からスッパゲッティが廊下に落ちているように思えるが錯覚だった。

居間に通された柳沢さんはまた驚いた。居間は球体なのだ。

「これは、珍しい部屋ですね。ボールの中にいるようです。でも、どうしてまた、こんな部屋を」

「世の中は四角四面に仕切られた空間にわたしたちは生きています。でも、地球は丸いでしょう。自然が創り出すものは丸や曲線が多いのですな。直線は人間が創るんです」

さすが、デザイナーだと、感心して聞いていた。柳沢さんは次第に慣れてくると、安心感すら覚えてきた。居間の上に台所がある。夫人は、すたすたと、球面を歩いて、天井にあたる台所で、逆さに立ちながらお湯を沸かしてお茶をいれていた。水道の水が上に落ちているのが見えた。

「ど、どうして、あんな芸当ができるんです。これは、何かトリックがあるんでしょう」

「はははは、あなたも外の世界の人なんだ。重力があるから、上だとか下だとか云っているんです。この家には天地も東西南北もありません。世界から乖離して成立している空間なんです」

柳沢さんはますます判らなくなってきた。不思議の国のアリスでもここまでは不思議ではない。奥さんはすたすたと歩いてまるで引力があるように、応接セットまでお茶を運んできた。茶葉は皿に盛られてあり、茶碗には白湯だけが入っていた。夫婦は、徐に茶葉を手掴みするとむしゃむしゃと食べはじめた。それを飲みこむと、白湯を飲む。

「胃の中でおいしいお茶ができるんです」

柳沢さんも真似してやってみた。胃の中に味覚を感じずる舌でもついているのか。

首を傾げているところへ、魚眼レンズをつけている息子たちがきた。歩きながらも参考書を読んでいる。しかも、後ろから逆に読んでいた。

「うちの教育方針で、本は最後から逆に読ませているんです」

「いまの世の中、逆さにすれば、すべてよく見えるということをいまから学習させているんで

すな、はははは」

何がなんだか判らなくなる。視覚は周囲に慣れてきて、眩暈はしなくなったが、とてもこんな家には住めそうにない。柳沢さんは暇することにした。半時はいただろうか。廊下も真っ直ぐに見えるし、斜めに見えていた壁も垂直に見えるようになった。おかしいこともあるものだ。柳沢さんは、何が正しくて何が間違っているか、感覚も含めて、常識という基準が判らなくなっていた。

ようやくのことで、外へ出ると、今度はさっきより強い眩暈がした。道路がうねっている。電信柱が曲がっている。突然、柳沢さんは吐き気を催した。真っ直ぐに立ってられない。歩くことも困難になっていた。

「どうしたんだ。街が完全に歪んでいる」

歪に造られたものの狂った世界の正体を柳沢さんは見てしまった。それは気づかない人だけが、歩ける世界だった。

第469話 虹をつかんだ

小さいときは、虹というものが手で掴むことができるものと思っていた。そんな絵本があって、虹を掴むために遠く旅に出て、ついに虹の懐にたどり着くというもので、実に不思議な絵本であった。そういうことが現実にできるものと信じていた。

また、虹というものが薄い輪で、横から見るとただの線に見えると思っていた。同じような絵本で、地平線の彼方まで旅に出て、月を掴みに行く話があったが、それも似ていた。月というものが、遠いものではなく、手で触れるくらいの身近なものであったという驚きが子供心にもあった。

その思いは大人になっても続いていて、虹というものはいつでもこの手でつかめるものと思っていた。いまでも虹が出ると車に乗って、その麓まで行ってみようと思うのだ。

わたしは若いときはご他聞に漏れず自信過剰なところがあって、この世に自分のできないことはないと思っていた。野心もあり、自分だけが沢山本を読み、自意識過剰で自惚れていた。それが、だんだんと挫折を繰り返してゆくうちに、自分の小さなサイズが判ってくると、諦観ですべてを括るようになり、不思議なものがなくなってくる。世の中のカラクリが見えてくると、夢も萎んでくるものだがそこが人間の浅はかさ。あらゆることを唯物的に考えることで、感動も新鮮さもなくなってきていたが、最後の夢の尻尾にしがみついていた。

事業で失敗し、財産をすべてなくしてしまうと、あとは、重い現実だけが残っていた。いい大学を出て、資格もいろいろと取得しているから、再就職は容易だろうと、簡単に考えていた。だが、すでに自分の年が五十を越えていることに気が付かない。五十というと、昔なら、あと五年で定年退職だ。もう、その人間に会社が期待し、賭ける年齢はとっくに過ぎていた。すでに社

会的にはできあがった終わりに近い人間なのだ。

ただ、自分としては、まだまだ働けるし、若いつもりでいた。子供たちはみんな大きく、社会に出ていたからいいとして、自身の処遇に関しては、ひどく慎重だった。もう、後がないとすれば、失敗は許されない。すでに再生できる年齢は過ぎていた。いまさら、道路工事もできまい。体力もかなり落ちていた。

不況が長引き、いい就職は地方都市では皆無だった。

「いいのよ、人生の有給休暇だと思って、少しゆっくりと休みなさいな。わたしが当分は家計を支えられるから」

と、気丈夫な女房はそう云ってくれる。毎朝、晩御飯の仕度までして、勤めにでかける。もともと美容院に長く勤めていたが、いまは、ホテルや結婚式場の出張髪結いや着付をやっていた。技術のあるものはいい。わたしのように、口先だけで生きてきた営業畑は、やはり歩合給の怪しい会社で、人を騙す押しつけ販売のセールスよりないのか。それも、大儀であった。すっかり髪結いの亭主よろしく、遊んで毎日を過ごしていた。ラフな恰好で、自転車にまたがり、サンダル履きでパチンコ屋に行くか、宝くじを買いにゆくか。

日曜には、無料の送迎バスで、郊外の競輪場にでかける。もともとギャンブルは好きなほうで、事業も賭博と考えて、結果的にすってしまった。わたしの人生そのものが博打だった。一攫千金を狙い、山師的な一発勝負で危ない橋ばかり渡ってきた。それが、悉く外れた。大きな整理のつかない借金を前に破産宣告をするはめになってしまった。それでも、いまだ野心は捨てられず、懲りない性格で、雀荘に行ったり、株に手を出したりして、女房に咎められていた。これは、死んでも直らない病気なのだ。

大概の男はバカな夢をロマンだと言い訳して、いつもオーラス役満で取り返そうとする。

いつものように、街をふらふらと自転車で走っていると、空に大きな虹がかかっていた。久しぶりに虹を見たような気がして、橋の上に自転車を止めて、しばし眺めていた。すると、子供の頃のように虹の麓まで行って見たい衝動にかられた。郊外の畑の向こうの野原の辺りから虹が出ているように見えた。わたしは、必死でペダルを漕いで、だんだんと人里離れた山懐へと行きついた。虹は、街から見ると大きな半円に見えたが、それは近づいても大きさは変わらないのが不思議だった。遠くから見た大きさと近くから見た大きさが同じというのは、一体どうしたことだろう。ただ、近づくと従って、虹は頭上高く聳えるように見えてきていた。

ようやく、わたしは虹の根元までやってきた。原っぱの中にぽつんと自転車が置かれてあり、自転車には何やら大きな四角い木製の箱が荷台に積んである。その傍らにピエロのような不思議な恰好をしている老人が立っていて、その箱を操作しているらしかった。実に、虹はその箱から空に伸びている。

ピエロは、手回しオルゴールのような箱の横に付いているハンドルを一生懸命回していた。その箱の上のラッパから、虹が次々に空に伸びていっている。ピエロは、わたしを確認すると、笑ったようにも見えた。

「虹って、あんたが作っていたんですか」

「とうとう見つかってしまいました。誰も知らなかったんですが」ピエロは云った。

「へえ、こんなふうに虹は製造されていたんですね」

わたしは珍しい機械を拝見するように、箱を隅から隅まで眺めまわしていた。

「原料は何なのですか」

「それは、人間の破れた野望だとか夢だとか、そんなものを吸い取って七色に分解して空中にふたたび拡散させるのです。いわばリサイクル事業ですね」

「そうか、それで、虹を見ると、何か希望が湧いてきますね」

「そうです。落ちこんでいる人にまた夢を見させるのです」

「触ってもいいですか」

虹は薄い氷の板のようなものらしかった。

「どうぞ、食べてみますか」

「食べられるんですか」

「おいしいですよ。ただ、これを食べると人間には免疫ができて、もう夢を見ることも野心を持つこともなくなり、世界がモノクロに見えるんです。それでもよかったら、食べてみてください」

わたしは、少し躊躇ったが、いままで、身を滅ぼしてきたギャンブル癖を治癒する良薬になればと、その虹の欠片を口に入れた。確かに甘い、夢心地のような味がする。恍惚にひたって、わたしが目を開けると、すでに自転車もピエロも消えていた。虹も見えなかつただけではない。視界に色彩がなかった。昔の白黒テレビを見ているように、色が見えなくなっていた。そして、わたしは、疲れきった老人のように、賭け事のいっさいを忘れて家路につくのだった。周囲がすべて、重い、厳粛な現実だけに思えてくる。今日の米代をどうして稼ぐか、そのことばかり考えて足も重かった。

第470話 あの人の後姿に

あの人がお辞めになりました。それは突然の会見でありました。翌日の新聞は掌を返したように、勇退を誉める意見を取り上げ、いままでの功績を列挙して、惜しまれて辞めてゆくように書いておりました。その前日までの皮肉たっぷりのこき下ろしの文字は一言もありません。それは、死んだ人を葬式にまで詰る人がいないのと同じで、一応の敬意を表してのことと思います。ただ、昨日の今日ですから、なんとなく白々しい限りではございます。

県庁の天野さんは、あの人辞任するという臨時ニュースで、夜も眠れないで、朝寝ていました。あまりの興奮で、まるで宝くじが当たったような喜びでありました。それは、職員全員の気持ちを考えますと、いままで、あの人に左遷されたり、苛められ、罵倒され、精神的にも追いつめられていた多くの同僚は同じ思いであったと推察されます。

その朝、天野さんが県庁に出勤すると、玄関に多くのあの人を擁護する立場の人達が詰めかけておりました。

「知事を辞めさせるなー」

と、ねじり鉢巻でいきまいております人相の悪い殿方たち、警備員に制止されてもめております。

「一体、あいつらはどこの団体なんだ？」

すると、その対応に当たっていた知人が、

「あれは、風俗店組合のメンバーですよ。テレクラとか、ピンクサロンとかの社長連中ですよ」と、苦笑していました。

「それが、どうしてまた知事を庇うんだ」

「そこなんです。知事が彼等に約束したらしいんですね。来年は、君達の年にするからと。文化観光立県の次がスポーツ立県、そして、来年はピンク立県という標語までまた考えていたらしいですよ」

「な、なんだと、自分のしたことをカムフラージュしようとしたのか」

「そうなんです。庁内だけでなく、至るところをピンク一色にして、ソープランドも解禁にするとか。貧乏県が稼ぐ方法としては、昔も今も娘の身売り、色で観光客を呼び込もうとしていたらしいです」

「そうか、そうだったのか」

天野さん、知事の本当の狙いが判って愕然としました。貧すればどうする？で、ついになりふり構わず、地元で金の下りることならなんでもと、たまたま、自分の趣味に合ったことを県政で推し進めようとしたのでございます。

「完全に開き直っているのか。それとも、全国に知れ渡ったキャラクターをもっと積極的に活用しようとしたのか。いずれにしても、核処理施設や実験炉よりはましだが」

天野さんが、理解に苦しんで、庁内を歩いていると、すれ違う女子職員たちの顔がいつもと違うことに気がつきました。いままで、あの人の恐怖政治に神経を尖らせていた暗い顔に久しぶりに笑顔が戻っておりました。みんな、どこかうきうきした感じで、歩くのもスキップです。

可哀想なのはあの人でございます。各職場をげっそりとやつれた顔で、挨拶回りしておりました。それは、もう面と向って悪く云うものはおりません。腹では笑っても、口では、

「知事、辞めないでください。もう一度、われわれのために」

と、ごますりも最後のひとすり。その課長の言葉にじーんときたあの方は、一瞬、「そうまで君らが云うのであれば」と、辞任を撤回するような云い方をしたものですから、回りが焦っておりました。

「いいえ、どうぞ、ゆっくりとご静養なさってください。あとは、われわれが知事のご遺志に報いるために……」

「おいおい、わたしを殺すのか」

と、いった按配で、職員全員が、動揺しておりました。

「バカ、余計なことを云って、もし、ここで気持ちが変わったらどうするんだよ」

と、あの方が立ち去ったあとの部署では、みんな汗を拭いておりました。

あの方が庁内をひと回りする間、マスコミと警備員が、そろそろとついてまいりますから、ちょっとしたパレードでございました。

もう、いろんなところで次の知事選に出る人の名前が飛び出しております。そのひとりが、知

事下ろしのテグスを引いて、その後の手ぐすね引いていたとか。いろいろと陰謀もあったようでございます。もう、誰を信じていいのか判りません。

いよいよ、あの人が県庁の正面玄関から、出てゆくところです。多勢の職員たちが、二階から階段まで、びっしりと見送りに詰めかけておりました。全員が泣いておりました。中には、唇を震わせて、噛み締めて堪えている人もおりました。くくくく、と声が漏れてきます。あの人が、一瞬、振り返り、淋しそうな視線をみんなに送りました。そして、ドアに手をかけました。もう、二度と来ることもないでしょう。すると、全員から大きな拍手が沸き起こりました。拍手の嵐の中、淋しい後姿を残してあの人は去ってゆきました。

みんな、拍手を惜しみません。心の中から喜びでいっぱいだったからです。

(よかった、本当によかった、辞めてよかった)

拍手は嬉しさの余り、自然と出たものでした。涙も当然、嬉し涙でした。唇を噛んで、笑いを堪えていた人は、あの人がいなくなると、思いっきり笑いました。

「さあ、日の丸を出すんだ」

天野さんは、部下に命じました。

「今日は、何かの祝日ですか」

「今日は、節分だ」

第471話 探求書

古書店林語堂に、ある日、若い女のハスキーな声で、電話注文があった。

「古本屋さんですね。わたくし、森下美咲と申しますが、本を探していただきたいのですが……。オルセ・ヨーバインの「窃視考現学」という本はございますか？」

林語堂の店主の北村は、はたと考えた。たいていの入荷した書名は頭にインプットしてある。十数万冊の本が、脳細胞のジャンル別の保存ファイルに蔵ってあるのだ。それを検索するのに、コンピュータみたいなスピードではできないが、本の題名を聞いただけで、どこに属する本なのかぐらいは見当がつく。

「うちでは、取り扱ったことはありませんねえ。恐らくかなりの稀覯本になる本とは思いますが。題名からして、とても学術書とは思えません。私家版か発禁書でもないんでしょう？」

「さあ、わたくしには判りません。とにかく、いますぐにでも読みたいんです。どうにかして探していただけますか？ お金はいくらでもお支払いいたしますから。」

そう云って、電話番号だけ伝えて、女の人は電話を切った。声も色彩がなく無表情の顔が一瞬浮かんできた。きっと綺麗な上品な感じの人なんだろうなと、まだ五十は過ぎたとはいえ、女性に関心のある北村は、見えない客を想像していた。

古本屋にはあまり女性は来ない。骨董品もそうだが、どうやら、古いもの、人の使ったものは

、女性はあまり興味がないようだ。それで、たまに妙齢の知的な女性がふらりと店に入ってくると、北村はドキリとする。古本屋の主人というものは、どこでも無愛想で、いらっしゃいませも云わない。むすむすと本を帳場で読んでいたりする。

「親父さん、カーライルの翻訳ものがないかな」と、先生タイプの男性が訊くと、面倒くさがつて、

「その辺の山を掘り返してみな、あるかもしれないし、ないかもしれない」と、どうでもいい返事をするか、あっても探すのが面倒だから、始めから「ないよ」と、返答するばかり。それが、こと、美しいご婦人が入ってきて、

「伊藤晴雨の画集なんか、ございませんでしょうね」と、羞恥みながら小声で尋ねたりするものなら、

「はい、はい、画集でございますね。探して差し上げましょう」と、急に親切になる。「縛りですか。ご主人と。いいですねえ」想像して、にたりと笑う。

ということで、女性の味方の店主は、インターネットの古書検索ページで、窃視考現学という書名で探したが、五百万冊のデータからは回答はなかった。よほどの珍本なのだろう。北村も聞いたことはない。ただ、日本で翻訳されていて、出版されているということは、明治かそれ以降か、最近では聞かないタイトルだ。地下出版のものとなるとなかなか市場に出ることもない。考現学という言葉自体が今和次郎以降だから、そうも古くはないだろう。北村はあれこれと扱うような全国の古書店を思い巡らしていた。それが、限定本となると、好事家か奇書マニアの手に渡って、それこそ出てこない本というのは沢山ある。北村は、難しい注文だと、すでに投げ出していた。

ところが、翌日になって、またその女性から電話があった。

一昨日の本ですが、ございましたでしょうか。

一いいえ、ネットで検索をかけましたが、全国の五百店の古本屋のデータベースにも登録されておりません。難しいと思いますよ。中央の市場を抱えている大手の古書店さんならいざ知らず、うちのような地方の小さな古本屋では探すことも大変ですから。

一そうですか、それなら、また明日、お電話をさしあげます。

一明日ってねえ、そうそう今日明日に入るといってもありません。探求ノートにはちゃんと付けておきますから、気長に、そうですね、一年でも二年でも待っていただかないと。

一それは、困るんです。わたくし、すぐにでも読みたいのです。この手に取って、頬擦りしたいくらいとおしいのです。明日、お電話差し上げますから、きっと見つけてくださいね。

そう云って、一方的に電話は切れた。

「そんな、無理難題を云ってもらっても困る。一年にどれほどの本が出ていると思っているんだ。七万点だ。それに雑誌と同人誌などの私的なものを加えると十万を越える。十年で百万点。奈良時代の木版本から現代まですべての本はもうすぐ百億冊になるんだ。その中から一冊の本を探してくれというのは、浜の真砂からコンタクトレンズを探す以上に難しいぜ」

北村はぶすつとして独言を吐いた。

ところが、翌日、また例の女性から電話があった。時計を見ると、何故かきっかりと二時だ。

一お願いした本は見つかりました？

—だからねえ、あなた、こんな珍しい本は、そうそうあちこちへ転がっている本とは違いましたね、出てくるもんじゃありませんて。そうお急ぎでしたら、余所の古本屋をあたってください。

—なんですって？ わたくしの希望を受け入れられないと、そう仰言るのですね。それは、あなたがたのお仕事ではございませ

第472話 ロビンソン・クルーソー200X年

マークは完全に参っていた。以前は一日中、寝ていられたら、どんなにか幸せだろうと思ったときもあった。なにものからも束縛されず、自由でいられたら、どんなにか素敵だろうと思ったこともあった。世の中が煩わしくなれば、人間関係も面倒だ。仕事がマイナスへと傾きかければ、どんなに努力しても報われない。収入は減る一方だった。何をしてもうまくゆかない。

でも、いまは、そんな雑多なことも懐かしい。どんなに苦しくても人間が傍にいるというだけで、いまよりはずっとましだ。せめて恋人がここにいてくれたら、いや、友人でもいい、家族の誰かでもいい。それとも、全くの他人であってもいい。いまは、人間の声が聞きたい。

マークは、一日中、空を仰いでいたり、海を眺めていた。ひょっとして、救援の飛行機が飛んでくるかもしれない。水平線の彼方から、船影が見えてくるかもしれない。そのときのために、発煙筒も準備していた。なるべく、そのときのために使用しないで、懐中電灯も用意していた。どんなに暗くなっても、電池の消耗だけは避けていた。飛行機が夜間、飛んでくる爆音がしたら、ライトで上空に信号を送ることもできる。航行する船の灯が見えたときも同じようにしようと思っていた。救助信号だ。それだけは判る。

赤い布を繋ぎ合わせて、大きな旗も用意した。そいつは、日中、飛行機か船が近くを通ったら、報せるために使うのだ。いま、マークがやることといたらそんなことぐらいだった。

缶詰はまだ在庫がある。ただ、いつも同じ缶詰ばかりで飽きてきた。桃のシラップ漬なのだが、完全に糖分の取りすぎになるだろう。あちこち、探しまわり、ようやく見つけた鯖の缶詰も、塩っ辛い。甘すぎるか、辛すぎるか。いずれにしても体にはよくない。マークは、ふかふかのパンが食べたいといつも想像していた。それと、分厚いビーフステーキもいつも空想の中に登場する。子供でもあるまいし、三十過ぎたいい男が、食べ物のことばかり考えるのは、ひとりぼっちになってからだ。それまでは、食うという行為そのものが容易であったから、いつでも手に入り、家があったときは、冷蔵庫にはビールだって冷えていた。マークの空想は続く。クラッカーに手作りのジャムとホイップクリームをこってりと載せて、熱いコーヒーで朝食を摂りたい。夜はバーボンにゴーダチーズの大きな塊にかぶりつく。あれこれと考えていると、食欲も出る。ただ、目の前にあるのは、桃と鯖ばかり。死の海からはどんな魚もとれなかった。海草らしきものもない。砂を掘っても貝も出てきやしない。マークはすっかりと諦めていた。

空を仰いでも飛ぶ鳥の姿もない。たとえあったとして、撃ち落したりする道具がない。たまに、違った食べ物を口にしたいものだ。マークは思った。人間、最後の最後は、食いもののことばかり考えるのだろうか。

マークの日課は、無線を傍受し、こちらからも、常に発信する仕事もあった。周波数を少しづつ、微妙に変えてゆきながら、交信相手を探すのだ。電気はなくとも、ソーラーシステムだから、受送信に使うぐらいの電力はただで手にはいる。ケイタイも以前は持っていたが、中継がダメになると役に立たない。電波の届かないところが多すぎる。電話も使えない。モバイルの小型パソコンも、ソーラーに繋げてネットにアクセスしようとしたが、すべてのサーバー、電話局

がダメだった。そうすると、ネットワークで繋がっていた、すべての最先端の通信手段が使えない。単独で、送信できる無線機が旧式だが、一番使えるということが判った。

ただ、マークは、助けを呼ぶためだけではない。人間の声が聞きたかった。話がしたかった。無線機を短波放送のラジオに切り替えて、電波を受信しようとした。全世界の放送がキャッチできるはずなのに、いつも雑音ばかりで、歌がいきなり流れてきたり、ニュースをやっていたりするとはなかった。だが、諦めてはいない。きっと、いつか電波をキャッチできるだろう。マークは、アンテナを上げた。それは、広大な宇宙から、異星人の交信を試みるオズマのアンテナにも似ていた。

マークが朝、目覚めると、決まってする仕事があった。それは、壁に日付を刻むことだ。今日が、何年何月の何日なのか。曜日なんかすっかり忘れた。ひとりの生活には曜日は無縁だ。毎日が安息日のようなものだったからだ。ただ、時間を知ることは食料の消費計算に役立つ。マークが命からがら、ここに来てからすでに一年半が経っていた。食べ物と水と衣類があったから、飢えと寒さは凌げてきた。

マークは、家族のこと、恋人のこと、同僚、友人のことを考えることもあった。みんなどうしたろうか。おれのように何処かで生き延びているのだろうか。それともみんな死んでしまったのか。どうして、誰も返事をしない、応えないんだ。マークは、発狂寸前だった。孤独がこんなにも怖いものと思ってもみなかった。いくら叫んでも、誰もいないという事実だけが、恐ろしい空虚としてマークを包囲していた。

干上がった海では、魚や貝が絶滅し、それがものすごい死臭を漂わせるという。やはり、一年前まで、マークの周辺では、マスクをしても耐えられないほどの死臭に悩まされ、怯えながら、ずっと食糧庫に隠れていた。隠れた場所がよかった。ほとぼりが収まるまでずっと、外に出ないでいた。多くの死体は、野ざらしになっていて、それが太陽に焼かれ、ぶすぶすと膨れてくると、肉はくずれ、骨が露出し、それも崩れてゆくと、臭いはしなくなった。もう、この街には生きているものの影もない。

マークは、街で一番高いビルの屋上にいた。そこから毎日、空と海を眺めて暮らしてきたのだ。このたびの大戦は、生物化学兵器や、中性子爆弾、毒ガスなどが、無差別に使用された。人間や動物だけが死ぬのだ。見下ろした街はそっくりそのまま、無傷で残っていた。ただ、生き残ったものたちで、食料は奪い尽くされ、水を飲んだものは解けた毒で翌日は冷たくなっていた。いまは、街の路上にいくらかの人骨が散乱しているだけで、生き残ったものは、マークただ一人だった。

無線機が何かの電波を捉えた。マークはいつになく興奮していた。
一聞こえますか。誰かいたら、返事してください。

それは確かに生きている人間の呼びかけだった。発音のいい英語で、やはり、マークのように生き残って、どこかの国のどこかの街で、生存者に呼びかけていたのだ。

一こちら、サンフランシスコ、応答願います。どうぞ。

戦争は、街そのものを無人島にしていた。

第473話 蔵書家

どんな小さな地方の町にも、全国で十指に入るといわれる様々なコレクターというものがあるようでございます。何も、東京だから、コレクションが集めやすいとは限りません。わたしの知る限りでは、この人口二万人の港町には、SPレコードの収集家としては、知る人ぞ知るといいますから、マニア垂涎の的でございます。もともと、商船の船長を長くしておりまして、世界の港を回っているうちに、自然と集まったということですが、時価いくらほどいたしましょうか。

また、クラシックカメラの収集でも名前が知れた方がいらっしゃいます。ライカ、ハッセルブラッドの往年の名機を自宅のガラスケースに陳列して、ちょっとした写真機博物館のようだと、見た人から聞いた話ですが、いろいろと隠れ人間がいるものでございます。

ああ、わたしですか、わたしはこの町で古本屋をやっているしがないやつでございます。もう、かれこれ三十年、この商売をやっていますが、地方ではなかなか古本を売って食ってゆくというのは難しく、自家製の古書目録などをあちこちに郵送して、通信販売で細々と食べている次第です。

それで、この前のことになりましたが、とあるお屋敷から電話で、蔵書を見積もってほしいということで、その夜、わたしは、この町で代々続いた商家にお邪魔いたしました。わたしたち業界では、農家と商家の蔵には本はないと云われていまして、これは定説のようです。商売人というのは、金勘定に忙しく、本など読んでいられないのでしょう。それで、あまり期待をしないで参りました。たとえ、あったとしても、経営学やハウツウものの過ぎてしまえば終わりの本ばかりだと思い、あるいは、棚飾りの画集や文学全集なんかが、ずらりと居間に並んでいる光景を想像しながら、いまはそんなものは売れない時代ですから、断る口実を考えながらしぶしぶお邪魔したわけです。

庭も広く、車庫も三台分もあり、玄関だけでもうちの居間より広いときています。

お手伝いさんか、玄関に出てくると、奥にご主人を呼びに行きました。

「いやいや、お待ちしておりました。ささ、どうぞ書斎に行きましょうか」

ご主人はそわそわしながら、やけに嬉しそうな態度で、わたしを二階の書斎に上げました。家では粋な着物姿で、わたしよりは少し年上の六十近い方か。階段も洋風の螺旋階段で、窓も六角の出窓。シャンデリアはいささか時代遅れの感じがいたしましたが。

わたしが書斎に入りますと、あにはからんや、民俗学、工芸、紀行文学、古代史研究などの趣味のいい本がずらりと並んでいるではありませんか。広い書斎の本棚は壁面を埋めておりましたが、それだけでは収納しきれず、廊下から床に平積み、黒い両袖のどっしりとした机の上まで辞書がうず高く積まれておりました。

「これは、すごい、こんな蔵書家の方がこの町にいたなんて、全く知りませんでした」

そうわたしが云うと、うきうきしたご主人は、
「驚くのはまだ早いですよ」と、隣室のドアを開けました。なんと、そこは書庫になっておりまして、二十畳くらいの部屋にまるで図書館のように書架が整然と並べられ、本がきちんと分類整理されているのです。わたしの頭の中でレジが叩かれておりました。ざっと見ただけで、その蔵書量は判ります。本棚ひとつで単行本三百冊ですから、五十本あったとして、それが二重に収まっていたので、三万冊の蔵書です。しかも、一冊づつどれをとっても分厚い専門書で定価も高いものばかり。柳田国男、折口信夫、南方熊楠の全集を始めとし、柳宗悦、河井寛次郎全集、大航海時代叢書、東洋文庫や県別地名辞典なども揃いであるのです。最近、こんなお客に行き当たったことはなく、わたしは固唾を飲んで呆然とつっ立っておりました。その次にわたしが考えたことは資金繰りでした。預貯金をはたいても、これだけの本は買えないかもしれません。

そんなわたしの様子をご主人は嬉しそうに眺めておりましたが、わたしよりも興奮して、嬉々として本の説明をし始めました。限定本や署名本を出してきて見せて、

「この澁澤龍彦の署名本なんか、いくらで買ってくれるものですか」と、わたしをテストするように云います。わたしとて、この道三十年です。だいたいの相場ぐらいは判ります。お手伝いさんがお茶とケーキを運んできました。ご主人はお茶を飲む時間も惜しいように、わたしに喋りっぱなしでした。この本を探すに神保町百二十店を風潰しに歩いた話だとか、荷風の私家版を三十万で落手した苦労話だとか、黙って聞いていればすべて自慢話でした。わたしは、店を閉めてきましたので、時間がありません。さっそく、見積もりのためにすべての本を見て回りました。その後ろをご主人はついて回り、わたしが計算しているのに、ごちゃごちゃと話しかけてくるので、煩くてかないません。二時間かけて、大雑把な見積もりを出しました。その金額を見て、ご主人はひと言、

「考えておきましょう」と、にべもない返事。

わたしは、興奮から醒めないでその家を退出いたしました。店に戻っても、貸し渋りの銀行窓口の顔が浮かんでくるばかり。こんな減多にないチャンスをみすみす逃す手はないと、資金調達のことばかり考えておりました。

でも、一週間経っても、二週間経っても相手からは返事がありません。安く見積もったかと少し後悔しておりました。逃がした魚は大きいかと、いつまでもくよくよと考えることになります。と、向こうのご主人からまた電話が入りました。

「また、新しい本の見積もりをお願いしたい。」

まだ、別のところに本を隠していたようで、わたしはふたたびお屋敷を訪ねました。ご主人はドアを開けて、わたしの来るのを心待ちにしているようで、わたしの姿を認めると、子供のように飲んでおりました。

「待っていましたよ。今日、お見せしますのは、秘蔵の本でしてね」と、案内したのは今度は倉庫の中でした。ひんやりした倉庫にワインからブランデーの高価なボトルがずらりと寝せてありました。その中の茶箱を開けて、中を見せてもらいました。そこには、黄表紙や洒落本、枕絵などの刷物が入っているではありませんか。すべて江戸時代の和綴本です。状態もよく、絵入太平記ものなども揃っているようです。

「どうですか、すごいでしょ。当家に伝わる家宝の中にあつたのです。これなんかは山東京伝

の落款が押してある逸品ですぞ」

くぐぐとまたご主人の自慢話が続いた。

「それで、前の見積もりの件なのですが」

と、わたしが切り出しても、人の話は聞かないで、蔵書のことばかり説明しております。そのとき、わたしははっと気がつきました。（この人は売る気がないのだ。まるで、友達も誰もいないように、本について話す相手がいないのだ）そうなのです。周りを見渡しても、本を読む人などいくらもおりません。ひとりの読書家の周りに百人の家族知人がいたとしても、本を読む人はひとりかふたり。読書家というものは実に淋しい孤独な存在なのです。これほどの趣味のいい蔵書を収集しても、多分、ここの家の奥様も子供たちも、仕事仲間も、誰も本に興味がないから、この蔵書の意味を理解できない。本を読まない人にとっては、どんな貴重な和本でも、紙くずにししか見えません。きっと、この人は、誰にも自慢できないので、古本屋を呼んだのだ。わたしなら、商売柄、本の値打ちが一番判る。わたしは、次第にただ利用されているのではないかと思いはじめました。

ご主人はまた書齋で冷めたお茶に口をつけることもなく、ひたすら本に対する熱い思いをわたしに語るのです。わたしはというと、そんな自慢話を聞いている時間はなく、ただ、腕時計ばかりが気になりました。

逃げるようにその家を退散いたしました。見せびらかすためだけに古本屋を呼んだのは、道楽よりない。そんなものにつきあっていられません。

でも、また一週間くらいして、先方から電話がありました。

「また、いい本がありましたので、見積もりを。」

わたしは、仕事が忙しく出られないと丁重に断りました。ご主人は非常に残念そうな口調でした。

それから何日かして、古書組合の例会が隣の市であり、わたしも出席いたしました。古本屋の親父たちが集まって、何か噂をしておりました。聞けば、例のご主人の蔵書のことです。

「おや、わたしは、中に入りまして、見積もりを頼まれましたが。その後、何の返事も貰えなくて」と、わたしも口を挟むと、

「うちも二回呼ばれました」「わしなんか、三回ですぞ」「ぼくも、たらたらと自慢話ばかり聞かされました」古本屋の親父たち、口を揃えてそう云いました。

第474話 書物はそうして殺された

はじめは、ゴミの収集場所で、捨てられている本を物色するのに抵抗があったが、いまはなんとも思わなくなっていた。それほど貴重な本が次々と本に全く興味がない人達によって、ゴミ化しているのだ。

わたしは、この町で長く古本屋をやっていた。如何に本が粗末な扱いを受けているかということが、この商売をやっていてよく判る。どんな立派な学識のある蔵書家でも、亡くなったら、遺族の誰も本を読まないとなれば、すべてゴミの日に紐で縛って出されるのだ。つい、先日も古めかしい本の束がゴミ置き場にいく束も見えたので、わたしは、車を止めていつものようにゴミを掻き回していた。それは、太宰治の研究本、特集雑誌などが五十冊余り、ゴミになろうとしていたのだ。慌てて拾った。

また別の日には、明治の末に出された分厚い「日露戦争史」を拾ったことがある。書物は世代を超えて受け継がれない。どこかで切断してしまうとすべてゴミになる運命を持っていた。

最近は異常なくらい本が入ってくる。若い人たちが本を読まないのに加え、読む本の傾向もがらりと変ってきた。いまは、文学全集など読むものはいない。売りに来て、断られるのは文学全集が多い。それだから、みんなゴミに出してしまうのだ。女房は不吉なことを云った。

「あんた、せっせと買っているけど、実は、ゴミを買っているんじゃないの？」

わたしは憤慨した。

「そんな、ゴミだって？ 確かに活字離れで、本読みの人口は減っただろうが、この三十万の街にだって、読書家は百人や二百人はいるだろう。客がいる限り大丈夫だよ。それに、江戸時代から連綿と続いてきた古本屋という商売がなくなるわけがないだろう」

わたしがそう云ったのは、ついひと月前のことだった。ところがである。急にパタリとお客が来なくなった。それは、いままでも天気の悪い日なんかは、客数ゼロのときもあったが、まるで線を引いたように、その日から客が来なくなった。本を売る客からはひっきりなしに電話はかかってくる。ただ、出てゆかないで、入る一方だから、こちらも仕入を止めた。このままでは在庫倒れになってしまう。

新聞、ラジオ、テレビでは朝から大問題を取り上げて騒いでいた。また新手のウイルスが今度ではアメリカから日本に入ってきたという。そのウイルスは人間の脳の言語野を冒すというのだ。ものすごい勢いで感染していった。その伝染病に罹患すると、新聞も本も読めなくなる。字というものを認識しなくなるというのだ。当然、読むことができないから書けない。あちこちで大変なことが起こっていた。

うちの女房から高校の娘までその病気に罹った。

「おまえ、大丈夫か。どこがどうおかしいんだよ」

わたしが、ぼうとして家にいる二人に症状を問いただした。

「テレビを見たり、あなたの云うことはよく理解できるのよ。でも、テレビに出るテロップが何かなんだか判らない。新聞もごちゃごちゃと活字が並んでいるようだけど、もう、ダメだわ、日本語を忘れたみたい」

それなら英語はどうだと、単語を見せるが、まるで読めない。日本語だけでなく、文字そのものが読めなくなっていた。

ともかく病院に連れて行こうと、市民病院まで車で二人を送った。途中、街中で人々は右往左往していた。バスの時刻表、工事に行き止まりの看板、そんなサインも理解できない。

病院も超満員だった。散々待たされて、診察の順番になったら、医師が交代した。先の医師も感染したか、カルテが書けない読めない。医師や看護師までが勤務ができない状態になっていた。

「先生、原因はなんなのですか」

「さあ、それがいま解明を急いでいるところですが、あなたのような、日頃から本を読んでいる人は免疫力が強いんでしょうな。あまりこのウイルスに感染しないそうです。大脳を冒されることで、失語症に似た症状になるんです。話し言葉だけは理解でき、読めない、書けないという純粹失読、純粹失書というふたつの症状が同時に表れるという珍しい病気です」

いまのところ治療法がないということで帰された。娘は学校に行ったが、先生までそんな病気で教えられなくなり、休校となった。

新聞も意味不明の文字の羅列なので、購読をやめる家庭が増えた。新聞社も休業した。書店という書店は客がガタ減りしたのでどこも廃業していった。出版社も印刷所も倒産続出だ。

銀行でも、ATMの操作が判らないでおろおろしているサラリーマン、窓口の銀行員も突然字が書けなくなり、立ちあがる。係員に腕を掴まれ、連れてゆかれ、交代の女性が窓口に坐る。客も預貯金の払い出しの紙に書けない。みんな上を向いたまま立ち尽くしていた。

会社でも、すべての業務が停滞していた。パソコンのキーは無意識に叩くが、画面に出てくる文字や数字の意味が判らない。焦った社長は、そんな社員や幹部を研修室に集めた。社長自ら幼稚園の先生になる。ホワイトボードに大きく文字を書いてみせた。

「さあ、皆さんで大きな声で云いましょう。これが『あ』ですよ。これが『い』ですよ」

いい年の大人たちが全員声を揃えて、

「あ、い、う、え、お」と、文字の認識の練習だ。そして、ひらがなからノートに書かせた。日頃からパソコンばかり叩いて、「書く」ということをしないために、人間の一番使わない弱いところをウイルスが攻撃したのだ。

多くの本がゴミとして出されていた。ますます本はゴミになった。作家も食えない。紙の消費も減って、ボールペンも売れない。本は連日、大量に処分されていった。図書館も機能を果たせず閉館となっていた。本は山積みされ焼かれていった。代わりに隆盛を極めたのはテレビ業界だった。新聞も名作も、週刊誌も、そんな番組の中で朗読された。かつての活字文化がみなブラウン管に入ってしまった。

すべての学校は閉鎖して、病気に罹った先生は失業した。わたしの店もいまは休業中の札がかかっていた。もし、わたしもいつかそのウイルスに感染することがあるかもしれないが、この事態の記録だけはつけておこうと、毎日、事細かにノートに日記のように世の中のことを記述した。記録するものがいなければ、これから先の歴史は空欄になるのだ。全人類が、失語症になり、文字というものが役に立たなければ、文字のなかった古代へと遡ることになるだろう。文学や歌は伝承となり、歌い継がれ、墓石に刻む名前もない。

本が好きなわたしは、本が読めない、そして、もの書きを趣味にしているから、書けないという苦しみは想像以上に残酷な気がした。とにかく、書けるうちは書いておこう。読めるうちに本を読んでおこう。

と、ここまで書きすすめてきて、おや、おかしい。かんじがかけないぞ。じしょのせもじがよめなくなってきたぞ。ひらかなまで、なんだかあやしくのんにとにてしつれ、○×た÷≠≤§
〒※♂♀☾.....？。

第475話 橋上の人

嫌だわ、あの人、また橋の上に立っている。でも、なんとなくニヒルで素敵な人。いくつぐらいなのかな。

美奈子は毎日事務所から眺められる橋の上に、ただっ立っている、年の頃は二十後半くらいの芸術家タイプの髭をたくわえた男性を気にしていた。

「ミナちゃん、何をうきうきして見てんだい」

係長が、にやけて机の前に立っているものだから、美奈子はどぎまぎし、ついで顔を紅潮させていた。

「怪しいな、誰か外で待っているのかな」と、係長が外を背伸びして見た。

「ほら、あすこに立っている男の人、毎日熱心に川を眺めているんですよ」

とうとう美奈子は白状した。係長はおかしな顔をして、

「別に、どこにも人なんか立っていないじゃないか」

「うそ、いるじゃないですか」と、振り向けば、すでに男の人は消えていた。

「おかしいな、いましがた、橋の上から川面を眺めていたんだけどなあ」

美奈子は、その人の名前も素性も知らないが、あれこれと想像するうち、いつか自分の理想の男性に近くなってきていた。想像はいつも現実を超えて、人を美化し、愛を昇華させた。まさしく、洞穴に投げこまれた花が結晶するように、勝手に物語がフィルムを回し始める。

美奈子は二十五。そろそろ結婚に焦り始める。いまを巡り合いもチャンスもなく、過ぎてしまえば、あっという間の三十だ。女は不思議と二十代で焦り、三十代で諦める。そうになると、どっしりと構えるか、ひとりが気楽になって、キャリアウーマンと呼ばれるように、女より仕事を選ぶか。いずれにしても、いい男を掴みたい。いましかない先輩を見ていてそう思う。美奈子のいる会社は小さな運送会社だから、事務員は美奈子ひとり、後はすべて中年の運転手ばかり。みんな妻帯者だ。このまま、こんな街外れの周りに林よりない淋しい運送屋の事務所にて、オールドミスになってしまうのが一番怖い。でも、ここにも若い男との出会いもない。

美奈子が郵便局に書類を出しに行ったときは、かなりの大降りの雨だった。六月も近い。このまま梅雨入ってしまうのか。何か憂鬱な毎日だ。

美奈子が傘をさして、あの橋の上を通ろうとすると、いた、あの男がいつもと同じ服装、白いジャケットにキナリの白いジーンズをはいて黒いTシャツがコーディネートとしてはいいセンスだ。美奈子は、いままで、事務所の窓から眺めていた人に最も接近することとなった。どきどきしてくる。

「あのう、濡れますから傘をお貸ししましょうか」

美奈子の口から咄嗟に出た言葉。云ってしまってから自分でも意外な気がしたか、はっとしてひるんでいた。

男は、悲しげな目を美奈子に向けていた。

「どうも、でも、あなたが濡れる」

「いいんです。わたしは、ほら、あの会社のものですから」

「いいえ、ぼくは、濡れても構わないんです」

変なことを云う人だと思った。美奈子はいつか、男に傘を半分与えていた。かなりの至近距離で、胸は男の腕に触れていた。

「どうして、毎日、この橋の上から川の流れを見下ろしているんですか」

美奈子はいつか訊こうと思っていたことを切り出した。

「この、川で死んだ人がまだ上がらないんで」と、淋しい声が雨に消えかけた。

「ああ、知っています。二週間前でしたか、この上流で身投げがあったんですよね。わたし、新聞で見て驚いたわ。心中だったって、女の人が水死体でここから一キロも下流で見つかったのね。でも、男の人がまだ見つかっていないって。その人を探しているんですか。もう、搜索は打ち切りになったんでしょう。もう、海まで流れて行ったんじゃないかって、消防団の人たちが話していましたよ」

すると、男は急に大声をあげた。

「違う、この辺りにいるんだ。きっといるんだ。川藻に絡まっているか、深みの岩陰にひっかかっているんだ」

美奈子は、真剣な男の表情に、何か悪いことを云ったようで、俯いた。きっと、死んだ男の兄弟か親友であったかもしれない。

「ごめんなさい。余計なことを云って」

美奈子は素直に謝った。

「いいや、こっちこそ、大きな声を出して。でも、なんとかして、川底から引き上げてやりたいのだ。なんとかして」

男は、それでいつもこの橋の上から眺めていたのだ。何かわけがありそうだとは思っていた。

「し、失礼ですけど、その人はあなたの身内の方なんですか？」

美奈子はなんとか手助けがしたいと思い訊いてみた。

「身内だと、とんでもない。それはぼく自身なんだ。ぼくは、こうして、毎日、いまかいまかとぼくの死体が浮かんでくるのを待っているのさ」

美奈子は、はっとして男から離れた。この男が間違いでなければ、幽霊だということか。男は哀れみを浮かべた目で美奈子に訴えかけようとしていた。

「そうじゃないか。でなければ、ぼくは浮かばれない……」

美奈子は傘を男に押し付けて、会社の建物まで走った。美奈子は、いましがたの会話を信じていいのか、判らないまま、逃げてきた。事務所では、係長と専務が窓辺に立っていて、帰ってきた美奈子を見ると、大声で笑った。

「ミナちゃん、さっきからここで見ていて、おかしかったよ。あんた大丈夫かよ。頭がおかしくなっていない？ 橋の上でひとりで喋って、終いには傘を投げて走ってくるなんて」

第476話 密室の花嫁

わたしは、不運の塊みたいなものだった。生まれてこの方、いいことの何ひとつとしてない、ついていない男だった。それは、わたしの姿形に起因するものが多かったように思う。まず、背丈が低いこと、顔が醜いことで、友達も少ないし、小さいときから苛めの対象になり、どこか卑屈になっていて、性格まで醜くひん曲がっていた。それだから彼女なんかいるはずがない。三十を過ぎるこの年まで、女の人の手も握ったことはなかった。

そんなわたしに嫁を世話してくれるという親戚がいた。あまり信用のおけない従兄だったが、「結婚したいという女の子がいるんだけど」と、話を持ちこんだときには、まず、からかわれていると思ったほど、自分に女など縁のないものだと言っていた。従兄は続けた。

「割れ鍋に閉じ蓋じゃないや、君に最適な人だと思う」

わたしは完全に疑ってかかっていたので、話半分に聞いていた。

「きっと、その女の人って、ぼくにお似合いなくらい不美人なんだろうね」

「いやいや、それが、とびっきりの美人ときている。絶世の美女だ。傾城とまで云われる危険なほどの美女だけ」

ますます怪しい。

「それなら、かなり頭がおかしいとか、犯罪を犯したとか」

「それもないね。ただね、結婚したあとの条件があるんだ」

ほら来た。ただでそんな美女がわたしのような醜男のところへ来るわけがない。「それはね、一緒に暮らしても、絶対に顔を見てはいけないということ、話をしてもいけないこと、体に触れてもいけないという、三つの約束を守らなきゃいけないんだ」

「なんだ、それじゃ、結婚する意味がないじゃないか」

ふざけた話だ。手も握れない花嫁なんかあるものか。

「いいのかい、そんなこと云って。こんなチャンスはまたとないよ。第一、失礼だが、君のような男のところへ、誰がこの先、嫁に来るものか」

それはそうだ。少し思案したが、どんな人でもわたしは嫁に来てくれるだけで有難いと思わねばならない。こっちには選ぶ権利はないのだ。わたしは、従兄に話を進めてもらうよう頼んだ。

その結婚はわたしのお見合いの写真を相手に送るまでもなく、とんとん拍子に決まっていた。相手の人もわたしの顔も見ようとしない。まあ、見たら驚くから見ないほうがいいのだが、それでも生涯の夫になる人の顔も見ないで一緒になる。一体、どんな女性なのだろうか。名前と年齢だけは教えてくれた。綾小路深雪、二十七歳という。何か、旧家のお嬢様のような名前だった。本籍は山の手の高級住宅街だから、きっと、かなりのお金持ちの出なのだ。婚姻届だけが、わたしの前に出された。本人の筆跡なのだろうが、女の人のような細かいが、綺麗な字で書いている。まるで書類上だけの婚姻のようであった。何かわけ有りなのだろうが、それも訊いてはいけないことになっていた。

わたしは、両親を早くから亡くして、ひとり息子だったから、自宅にひとりで暮らしていた。極普通のサラリーマンだ。日曜日に、花嫁はやってくる。彼女の専用の部屋を用意してくれと従兄が云うから、いまは使用していない母の部屋を綺麗に掃除して空けておいた。その引越しの間、従兄はわたしに少し席を外しておいてくれないかと、わたしは、喫茶店で、引越しが終るまで三時間も時間を潰さねばならなかった。

そうして、家に戻ると、荷物を運んだトラックはすでにはいない。従兄だけが玄関で待っていた。

「引越しは完了した。二階の部屋に荷物や家具も置いた。病身のお母さんのための特別に造った部屋だったんだね。バストイレ付の部屋で、彼女はひどく気に入っていたようだ。もう、二階の部屋にいるよ。一応、ドアに内鍵をかけてもらった。さあ、今日から新婚生活のスタートだね、おめでとう」

そう祝福されてもちっとも嬉しくはないのだ。結婚したという実感がまるで伴わない。従兄が帰ってから、わたしは、そわそわして居間にいた。この家にもう一人の得体のしれない花嫁がいるということ自体、不思議な気がした。二階の部屋の前にそっと行ってみる。何者かがいる気配はしたが、中から物音はしても、声がしない。テレビの音声がするから、テレビは持ってきたらしい。話をするなというから、また、そっと階下に下りてきた。

わたしはあることに気がついた。それで従兄に電話を入れてみた。

一訊くのをおぼれたが、彼女は部屋から出ないのかい。

一そうだな、出るときもあるが、顔を見られたくないから、殆ど部屋にいるだろうね。

一ということは、食事の仕度や洗濯や掃除は誰がするんだい。

一それは、いままで通り君がやればいいことだ。花嫁さんの分もちゃんとこしらえて、ドアの前に置いておくんだ。ノックするだけで判るから。贅沢は云わないことだね。嫁に来てくれただけでも光栄に思わなきゃ。

そうか、そんなことだったのか。それではいままでの生活と何も変わらない。ただ、誰か傍にいてくれるという孤独からの解放はあった。

わたしと見えない花嫁との生活はそうして始まった。一月、二月となんら変わったこともなく過ぎていった。深雪は、好き嫌いなくすべて食べてくれる。わたしの料理はうまいほうではないが、いつも面倒だから冷食かレトルトものが多かった。フルーツや、ケーキ、ジュースなども差し入れのようにドアの前に置いた。いつか、隠れていて、ドアから出てくるところをそっと見ようと試みたが、わたしのいる気配がするのか、彼女は警戒してドアを開けることはなかった。そして、わたしがいないときに、食事を取りいれて、食べたあとのトレーが、いつのまにかドアの前に置かれていた。

わたしが会社に行っている間に外出したりしているのだろうか。それなら近所の人も目撃しているはずだ。でも、隣近所はわたしが結婚したことも知らないでいた。まだ、ひとり暮らしのように思っているらしかった。

仕事から帰り、夕食の仕度をし、二階の閉ざされた部屋の前に食事を置き、自分でもダイニングルームで飯を食いながら缶ビールを飲み、テレビでナイトーを見る。いつもの生活があった。

ただ、こんな生活に疑問を感じ始めていた。これでいいのか。これが人間の夫婦の有り方であっていいのか。わたしは、無性に女を抱きたくなかった。わたしにも人並みの性欲というものがある。ひとつ屋根の下に美人の妻と一緒に暮らしていて、抱くことも一緒に寝ることもできないなんて、それこそ、ご馳走を目の前にして飢え死にするような状況だ。

ドアの内鍵といっても、ただひっかけるだけのものだから、ドアの隙間に薄い下敷のようなものを差し込んで、上に思いっきり上げると、開錠できるというのを他の部屋でやったことがある。

その夜、多少蒸し暑かったが、わたしはむらむらした気持ちで、深雪が寝静まった時刻にそつと階段を上がっていった。深雪は耳が敏感のようだから、泥棒がするように、廊下のまんなかではなく、端を歩くことで足音を殺して部屋に近づいた。息まで押し殺して、わたしの存在そのものを空気のように無にしていた。ただ、動悸だけが耳の奥まで高鳴って聞える。下敷をドアに静かに差し込む。わたしの中の男はすでに獣のようになっていて、自制することもできないでいた。今日こそ、深雪を抱くのだ。

わたしは、鍵を手早く開けると、ドアをついに開いた。突然、暗い部屋に電灯がついた。わたしは、あっと、息を呑んだ。そこに、ベッドから起き上がった彼女が立っていた。

「見たなー」と、彼女は振り返った……。

第477話 望郷古書店

神田神保町というと、有名な古書街。昔は百五十軒が軒を連ねたというが、最近は地上げ屋にやられたり、固定資産税を払うのも大変と、後継者不足も手伝って、廃業する店が増えた。大通りに面した有名店ではないが、裏通りのさらに袋小路に入ったところにある。「望郷古書店」というのをご存知だろうか。

わたしも、友人から話を聞いて、是非行ってみたいと思い、足を棒のようにして歩き回ったがとうとう探せなかった。人に訊き、交番に尋ね、古書店にもあちこち訊いたのだが、誰もそんな古書店は聞いたことがないと首を傾げるばかりだった。

どうやら古書組合にも加盟していないような怪しい店のようだった。あるいは、人伝に聞いた話だから信憑性はないが、信ずる信じないは読者に任せるとして、とにかく、紹介することにする。

その袋小路というのも、一度迷いこんだのが、次に探しにいったも、小路自体が消えたように判らなくなるという不思議な体験を、実は多くの読者家が体験していた。人間の錯覚ということもある。左に折れたのを右と覚え間違いすると、あとはすべてが狂うことになる。その小路は、そこだけが何かひどく懐かしい感じが漂い、電信柱にしても腐らないようにタールを塗った丸太の柱だったし、そこに巻いてある看板も四十年か五十年前の当時のままのものだったというのだ。そして、この東京のど真ん中にありながら、古書店の建物は外側は板張り、正面はすべて木枠のガラス戸であったという。いまどき、そんな古めかしい店も見つけない。

さらに不思議なことに、間口は三間と狭いし、建物だって、外側から見ても四間よりなさそうだから、十坪ほどの小さな古書店なのだが、中に入ると意外に広い。ずっと奥の奥まで店が鰻の寝床のように長いというのだ。入口から入るとすぐに、ここは普通の古書店ではないと気がつく。看板からしておかしい。「思い出産業—あなたの行きたい時間と空間へ」と、訳がわからない。そして、文学、教育学、哲学といった分類の仕方ではないことがすぐに判る。北海道から青森と続き、沖縄まで、棚ごとに郷土本が並べられ、それぞれが県単位の陳列棚になっていた。さらに奥に進めば、昭和元年から始まり、平成にはいるまで、各年代別の本が、それぞれの本棚に並べられていた。それらが、分類表示板で、主通路からずらりと見えるようになっていて、行ってみたい土地や、自分の古里へ帰りたい人は、そのコーナーへと入るだけで、懐かしい郷土出版の本が並んでいる。

また、青春時代に還りたい人がいたとして、それが七十年安保の年であれば、昭和四十五年のコーナーに入るだけで、当時出版された高橋和巳や小田実の本が並んでいたりする。

店主は、いるのかいないのか判らない。無人店舗かと思うと、突然、本を整理している不気味な老店主に鉢合わせしたりする。店内はひどく暗く、本は背文字がかるうじて見える程度だ。それがこの店を神秘的に見せている。客は、まるで、本棚の袋小路に隠れているようにいないようだった。しんと静まりかえって、人の気配がしないのだが、夜遅くなって、店主が、もう閉店ですと、店の雨戸を閉めにかかると、どこにこれだけの客がいたのかと思うほど、大勢の客たちが、まるでゴキブリ駆除の煙を撒いたときのように、ぞろぞろと出てくる。

ただ、この店の不思議は入った客と出た客の数が違うということにあった。外できちんとカウンターで測っていた者がいたわけではないが、なんとなく、入った客より出た客が少ないというのだ。ということは、その差の客はどこかに消えたことになる。

ある人が、その古書店に行ったときも、一緒に入った客が、いつまでも昭和二十年のコーナーから出てこないの、不思議に思って覗いてみると、本が一冊開いていて、本人の姿が見えないというのだ。そして、その本の開いたページの写真を見て、その人は驚いた。さっきの客が、玉音放送を直立不動で聞いている学童の傍に立っているではないか。しかも、他の人たちは、胸に名前入の布をつけた貧しい服装をしているのに、その人だけは、現代風にさっきまで着ていた服装で写真にちゃっかりと入りこんでいるというのだ。

本は人を飲み込んだり、食べたりするのだろうか。よく、小説を読んでいるうちに、自分も主人公になりきって、いつか、小説の中を歩いていたりすることはある。それが現実のものとなり、気がついたら、本の中に入りこんでいた。本にのめりこむとはいうが、本当にのめりこんで、作中人物にまで入りこんでしまうというのは、たまに聞くことだ。

いまは、不況でどこも誰も大変だった。現実逃避をしたいのが、手っ取り早く懐かしい本を読むに限る。本は、読むだけで、その人にまた鮮やかな記憶を復活させて、田舎へでも、過去へでもたちどころに連れてゆく。

実は、この話を聞いた友人から、ある日突然に葉書が舞いこんだ。暫く、失踪していて、行方がわからなかった友人だ。わたしは、ひょっとして、あの不思議な「望郷古書店」に行っ、仕事も家庭もうまく行っていない彼のことだから、過去へと逃げたのかなと思ひました。

その葉書の日付は昭和三十九年になっていた。しかも、どうやら、彼は、以前から話していた

鹿児島島の西の外れにいるらしい郵便局の消印が押してある。文面はこうだった。

「やあ、ご無沙汰してました。ぼくは、四十年前に戻って、海沿いの村に暮らしている。ここは、魚もうまいし、海もとってもきれいだ。ぼくは中学二年で、いま勉強に部活にと楽しく青春を送っているよ。故郷の懐かしい顔が、そのままここにはある。君も、どうだ、一度遊びにこないか」

わたしは、彼を連れ戻すことを家族にも頼まれていた。それで、毎日、仕事帰りに神保町に立ち寄り、あの「望郷古書店」を探しているのだが、いまだにみつからない。

第478話 人生不可解なり

若い人たちの集団自殺が流行っていた。マスコミが報道すると、それを誇大にスクープし、論説委員が、社会現象だと書きたてた。それが、あちこちで騒ぎたてることによって、感染して広がるのだ。いまの若い人たちは、ひとりでは死ねない。ひとりでは何もできない人が増えていつている。ネットで自殺サイトを探すといくらでもあることに驚く。その中には安楽死の仕方から、自殺マニュアル、自殺名所の詳しい地図までが載っている。その、サイトを訪れる若い人たちは、死ぬことが怖い、同じ思いの人と一緒に死ねないと、掲示板に書き込んで、仲間を募る。

一番、安易に死ぬ方法として、車を目張りして、閉め切った状態にして、中でバーベキューに使う木炭を燃やす。あるいは、ホースで排気ガスを車内に取り込む。意識がなくなり、眠ったようにして死ぬのだ。

この若者たちの集団自殺は、実は、予兆にしかすぎなかった。

政府は、隣国を警戒して、着々と軍備を増強していた。自衛隊という名称はそらぞらしくなり、ついに軍隊とはっきりとした化けの皮が剥がれた名前に改正していた。昔のように、陸軍、海軍に空軍まである。それぞれは、省として格上げされ、陸軍大臣、空軍大臣などが内閣に現れると、徴兵制も法案可決。予備兵、民兵としての軍事教練も、小学校から必修として取り上げることとなった。シベリアンコントロールは形骸化し、表向きの文民内閣は傀儡政権で、実は実権は軍部が掌握しているという軍事政権になっていた。

そのころになれば、日本経済はますますどん底に落ちて、銀行も資金注入が間に合わず、潰れるに任せるより仕方がなくなる。預金保護も実行できない有様。政府がまるであてにならないので、銀行の債権取立てが強行された。大手企業と心中するつもりでいた。連鎖的に中小企業から零歳企業と、下請けまで余波が及び、バタバタと各地で倒産が相次いだ。

ただでも就職がないときに、大量の失業者が街に吐き出された。技術、キャリアのある中年はまだ使える。まったくやる気もない、働かない若者たちがますます余る。仕事の効率を考えると、主婦のパートの方がばりばりと働くので、ちゃらちゃらした若い女の子たちも仕事にあぶれた

。一家の大黒柱の職のほうはどうしても優先になるので、全国にどっと若者の失業者が溢れた。

東大を出ても、仕事がない人が沢山いた。ホームレスをしていたり、ゴミを漁っている乞食を調査したら、大学院で博士号をとった御仁までいて、週刊誌では乞食博士と騒いでいた。

政府の財政難は、福祉を切り捨てても、軍事予算の増大で、賄いきれなくなり、どんどん税金、社保の負担を上げて行く。いまや、若者たちの給与の七割が天引きされて、ほんの小遣い程度より振込されない。年金試算でも、この若者たちが老人になるまでに年金財政は破綻して、支給されないという計算が報告されていた。

仕事もない。あっても、只働きに近い。稼いでも税金で持ってゆかれる。年金も老人福祉もない暗い将来しかない。長生きすること自体が地獄の世の中になってきた。そして、兵隊にとられる。各地の紛争に出兵して、毎日、戦死者が新聞に交通事故の死者数のようにカウントが出る。

もはや、この国で生きていることがバカらしくなる。希望も明るい未来もなにもない。死んだほうがどんなにか楽か。

若者たちは、そろそろとあちこちの断崖絶壁の自殺の名所に行列を作り始めた。押すな押すなの騒ぎで、何万人もの若者たちが連日、崖淵に立って、集団で飛び降り自殺していた。海はそんな若者たちの屍でいっぱいになった。

コンロを車に持ちこんでの自殺も増えたから、コンロが品切れになった。ガス自殺も多いから、ガス会社は供給を止めた。ビルの屋上も閉鎖された。危なくて歩道も歩いていられない。車への飛びこみも増えたから、どの車も時速二十キロの徐行運転。いつ自殺志願者が出てくるか判らない。怖くて運転もできない。

J Rも線路に入れないように、フェンスを高くした。富士山の樹海に入る者たちを規制し、入山の警備を強化していた。首の吊りそうな木は切った。

ところがそんなことをしても、いくらでも死ぬ機会と手段はある。若者たちの集団自殺を止める手だてはなかった。

藤村操が華厳の滝に飛び込んだ哲学的な死とは違い、個人の懊悩ではなく、世の中そのものが不可解になってきていた。生きている価値がまるでない。若者たちに「将来」とか「希望」という言葉が死語になりつつあった。死に至る病は、伝染病のように若者たちに蔓延していった。そんなときでも国会では、

「やりくりがつかないから、来年から消費税を五十パーセントにいたします」

と、ばかげた議論が飛び交っていた。とてもつきあっていられない。こんな日本に誰がした。

第479話 地震と詩人

関東大震災が起こったとき、寺田寅彦は、上野の精養軒で昼食を摂っていた。いきなり震度5以上の地震がきた。九月一日のことだった。激しく揺れる中で、食事の手を休めて、科学者の寅

彦は、まず真っ先に建物の堅牢であるかどうか見た。最初の揺れで、大概は決まる。それに耐えられたから、この建物は安全だろうと、確認するように食事の手を止めていた。次に、科学者の観察眼で、ボーイや客の慌てふためきようを見物していた。それほど気持ちの余裕があったのだ。

寅彦の随筆集の当日の日記の下りにそういうことが書かれていた。寅彦は物理学者で、吉村冬彦は詩人で俳人だった。詩人はまた、冷徹に物事を解析するように、事象を言葉に置き換える作業をする。そのために常に自分をも離れた目で見ていたのだ。地震が起こったとき、彼のふたつの目があつた。一方は科学的洞察力、もう一方は詩人としての歴史的瞬間の自動記述装置。

寅彦は書く。多くの客は皿をひっくり返し、金も払わないで、外に逃げていった。客である自分を残して、ボーイもひとりとしてその場にはいなかった。寅彦は食べ終わり、みんなの帰ってくるのを待っていたが帰らないから、何か無銭飲食のような罪意識で、悠々とレストランを出てきたというのである。

林語堂古書店の親父である北村は詩人でもあつた。詩人という職業は、この日本においては存在しないから、古本屋の親父をしているだけのことだ。詩を書いて、それを売って生計を立てているものは、ひとりとしていないというのは、詩が売れないからであり、他に多くの詩人たちは、学校の先生をしてみたり、翻訳の仕事に携わっていたり、研究本を出してみたりしながら、細々と暮らしている。詩人で所得番付に並んだというのは聞いたことがない。とくに日本は詩人という粗末な扱いを受ける。変態か、食えないやつと思われる。

そこで、普段は別の職業になりすまして、隠れ詩人をしているものが多い。日本では詩人ですと恥ずかしくて口にも出せない。詩を作るより田を作れと、能無しの代表みたいに思われ、軽蔑され、石を投げられ迫害され差別される。外国では詩人の社会的地位は高く、戦後、シベリアに抑留された日本の詩人が、ラーゲリで、「きさまの職業はなんだ」と、ソ連兵に尋ねられ、「詩人です」と云ったら、急に態度が変わり、尊敬の眼差しで見られたという。

だから、ここでは北村は決して自分が詩人であるということは口外しないことにしていた。林語堂の企業秘密でもあつた。

その日の夕方、地震があつた。かなりの揺れで、蛍光灯が天井で空中ブランコのように揺れている。それを見ていて、北村は中也の詩を思い出した。やよーんやゆーんと揺れている。という余裕はない。本が崩れるのが心配だ。だんだんと酷くなるので、店内にいたお客に避難勧告を出す。口でうーうーと警報を発した。

「お客さん、店内にいては危険です。外へ逃げてください」

というのも、天井までうず高く積まれた本が頭に落ちてきたら怪我をするかもしれない。本は、置き場がなく、通路には平積み、本棚は二重になり、いつ落ちてきてもおかしくない。本棚の間にいけば、本の下敷きになり、圧死するかもしれない。地震のないときでも、初めてきた客は驚き、

「ここは、危ない店だ。長居は無用だ」と、逃げるように帰る。今回の震度は3だった。近所の人たちは、みんな外に出ていたようだ。そして、北村の店の中を覗いて、本が崩れていないのを見ると、

「おい、いまの地震は震度4以下だぜ。林語堂の本が崩れていないから」と、安心して家に戻っ

ていた。林語堂の本がかつて崩れたのは「はるか沖地震」の震度5のときだ。4では崩れないのを近所は知っていた。林語堂の店が一種の地震計になっているわけだ。

本は一冊も落ちていなかった。普段でも危うい恰好で、積み重なっている本が微妙なバランスを保って崩れない。北村はその積み方はまさに芸術の域だとますます地震ならぬ自信を深めた。

あちこちからメールや電話がかかってくる。

「大丈夫でしたか。あなたの店の本、埋まっていないかと心配して」

とさっそくのお見舞だ。

「ええ、大丈夫です。本は見事に一冊も落ちませんでした」

北村は、幼稚園のときのことを回想していた。

一拓ちゃんは、本当に積木がお上手ですね。

幼稚園の先生はいつも北村を誉めていた。積木をどこまで高く積むことができるか、それが誰よりも得意だった。その器用というか技術がいまに役立っている。

詩人が本の下敷きになって死ぬのは本望だ。女の下敷きになって死ぬのも悪くはないが、男としてみっともない。やはり、本の下で白骨死体で発見されるのが詩的でいい。北村はそんな想像をしていた。たとえ、ビルが倒壊し、街が陥没し、国が津波に襲われようが、詩人はそれすらも詩に書くだらう。点はしじんの下の人につき、じしんの上に点を付ける。なんのことか。

高校生の娘から電話があって、電車が止まっているから、家に帰れない、送って行ってというから、北村は店まで来るように伝えた。駅から店までは五分で来る。

「お父さん、みんなを連れてきたよ。送って行ってね」

女子高校生が集団で店にやってきた。一番遠い子で、ここから一時間はかかる町だそう。北村はうんざりした。ひとりひとり下ろしてゆかなければならないのか。

詩人は地震には強いが、労役には弱いのだった。

第480話 一冊の本の運命

本は、人手に渡り、各地を転々とし旅をする。

林語堂店主の北村は、古本屋の親父をやって二十年近くになる。老眼が近年ひどくなり、仕事をするときの眼鏡越しに怪しい客を睨んでいたりする恰好は、すっかりと板についてきた。万引が多いから、自然と、人を見たら万引と思うようになり、目つきも刑事のように疑い深くなる。

最近、街にブック・ナントカという大手チェーンの新古本屋が駐車場付で売場面積百坪以上という大型店でどしどしと進出してきて、地元の小さな古本屋は次々に閉鎖に追い込まれた。北村の店は、細々とながらやっていっているのは、ブック・ナントカが扱わない古書専門に切り替えたからだ。決して、忌々しいとか、敵対心を燃やしたことはない。逆に、北村にとってはいい仕入先ができて嬉しい。支店を運営しているのは、みんな若い人ばかりで、本を読んだこともない人がやっている。マンガやゲーム、音楽関係は得意でも、こと文芸書や専門書になると判らないからいいのだ。

それで、北村は一週間に一度は寄ってみる。百科辞典と間違えてか、諸橋の大漢和辞典もバラ売りしていて、一冊百円で落手した。吉田健一著作集も、三島由紀夫の初版本も、井伏鱒二の落款、署名本もただの百円だ。本を持ちこむ方も二束三文で、そんな値打ちものも二十円、三十円の買いなのだろう。本の持ち主なら、絶対にそんな安値では売らない。ばかにするなと怒るだろうが、大概は遺族が売りに来る。亡くなったじいさんの蔵書で、息子は全く本を読まない。それがどんな価値ある本か興味もない。古臭い汚らしい本だから引きとってもらっただけでいい。

だが、ブック・ナントカでは、そんな戦前の古書は引き取らない。すべて処分してしまうのだ。業界ではそれが大問題になっている。日本人の大事な文化財産になるべく史料もすべて焼却処分されているのだ。

この前も、林語堂のお客で、本を集めて六十年の老人が、その新しい店のカウンターに、荷風の戦前の初版本があったのに目をつけた。

「それは、いくらで売ってくれるんだ」と、老人はわなわなと震える手で財布を出していた。すると、アルバイトの若者は、そっけなく、

「これは、売れません。捨てるんです」と平然と応えた。

「な、なんと、捨てるのなら、是非譲ってくれ」

と、老人は何度も懇願したが、「規則で、捨てる本はお売りできません」と、頑固だ。そんな教育を受けていて、指導が徹底されていた。みすぼらしい本は店に並べるな。すべてゴミにする。経営方針がそうなのだ。社長自身が本を読まないシロウトで、本をモノとして見ていて逆に成功していた。現代の風潮そのものなのだ。

荷風の本は古書店で買えば十万を下らない本ではあったが、とうとう、ゴミにされてしまった。老人はその話を林語堂に来て、悔しそうに北村に話すものだから、北村は、真剣に、ゴミ回収業者に化けて、ブック・ナントカに行ってみようかと思ったくらいだ。多分、貴重な本が裏のゴミ箱には山とあるに違いない。

北村が、その店で、百円均一の棚を見ていたら、何か、以前扱ったことがあるような本が並んでいた。ジャン・コクトーの全集の端本だが、北村も読んだことのある本で懐かしく手にとってみた。その見返しにブック・ナントカの価格ラベルが貼ってあり、大阪の有名古書店のシールが貼ってあった。そのシールがはがれそうになっていて、その下からなんと、北村の筆跡の鉛筆で書いた値段が見えた。この本は、林語堂で売った本には間違いがない。それを買っていった客が、大阪に転勤して、そこで古書店に売る。また、その店で買った客が、どこかのブック・ナントカの支店に売る。支店同士で本の移納をしているようだから、その本は、支店から支店へと回されて、とうとう、またこの街へと戻ってきていた。売った記憶は十年以上も前になるから、十数年かかって、北から南へ旅行してきた。

北村は、その本には特別の思い出があった。だから余計覚えている。その本は、実は、北村がある女にあげたものだった。その女は、北村と彼の友人と天秤にかけていた。消極的な北村は友人のように、彼女を引き込めなかった。

「おれたち、春に式を挙げることになった。スピーチを頼むぜ」と、友人に云われるまで、北村は何も知らない道化師を演じていたわけだ。その衝撃から立ち直るまで暫くの時間がかかった。

確か、それから七年が経った頃、北村が古書店を開業してまもないときだ。友人から電話で、本を処分したいという。彼の家の中は乱雑に散らかっていた。男やもめという感じだった。どうしたものか、リサイクルセンターが来て、ドレッサーやタンスまで運んでいた。奥さんの衣類だろうか、ゴミ袋にいくつも入れていた。

「なんだ、引越しかよ」と、北村が訊くと、

「そうじゃない。あいつが突然出ていった。他に男ができたらしい」と吐き捨てるように云った。奥さんの残していったものは、すべて処分するという。もう、戻ってこられないようにしてやるといった憤懣が怖いくらい満ちていた。奥さんの蔵書は主に外国文学が多かったが、北村も何か複雑な思いで引き取っていた。かつて愛した人の本が、仕入れでくる。ただ、北村もその頃は女房子供がいた。そんな思い出を蔵しておくようなスペースもない。それらは商品として売られた。何か、惜しい気持ちはあった。本の一ページづつにあの人の視線があり、指が触れ、同じ小説を読むという共有感覚を得られる。まだ、北村のどこかに残っているものがある。

そのコクトーが、いつも詩歌のコーナーに売れないであったが、毎日、北村はハタキをかけながら、売れないでほっとしていたものだ。それほどの思いのある本だから、売れたときも知っていた。

店に新婚さんらしいカップルが来たとき、女のほうのコクトーに手を伸ばした。

「それ、買うだろうか。列車も一日がかりやしな」

若い男が財布を出して、ついにコクトーは売れていった。どこへ行くのだろうか。北村は、その本の行方をいつまでも見守っていた。

あの二人も別れたのかもしれない。本の中には、思い出も愛も憎しみもいっばいに詰まっているものだ。女は失恋するとき髪を切るように、本を処分した。それは、男のほうであったかもしれない。思いを断つときに皿を割るように、本が売られた。

北村は、ふたたび出戻りしたコクトーを手にしながら、いままで幾人の女性たちの手に渡った

ろうかと、想像していた。その本は、それからは売ることではなく、北村の本棚に納まっている。

第481話 最後の手段

客数がこのところめっきりと減った。本が売れない。そうぼやいているのは、林語堂古書店の店主、北村だった。だんだんと本を読む人が減ってきたので、それは、長い間の趨勢で仕方がない。全国の新刊本の書店も、つい十数年前には三万店あったものが、二万店を割った。三割以上の減で、倒産、店仕舞いした。この地方都市でも、大型店はかろうじてやっているものの、小さい書店は殆ど姿を消した。古本屋も同じ傾向を辿っている。北村がいくら足掻いても、逆立ちしてもどうすることもできない。

だが、座して死を待つというわけにもゆかない。なんとかしなくてはならない。そこで、北村にある考えが湧いた。何を思ったのか、多少白髪交じりの髪を床屋に行ってすっぱりと剃ることにした。

「スキンヘッドにしてくれ」

と、近所の床屋で云うものだから、床屋の親父、

「古本屋辞めて、今度は仏門にでも入るんですか」

と、思いきった北村の剃髪を笑っていた。

むしゃくしゃしたときは、よく北村は頭をまるめることはあったが、それも5分刈り程度だった。

「ありがとうよ。ああ、さっぱりした」と、自分のつるつるの頭を叩いた。

それから、夜になると、北村は毎日、フィットネスクラブに通った。店が終わると、スポーツタオルとトレパンを持って、いままで運動など縁遠いものが、どうした風の吹き回しなのか。クラブは会員制で、会費を納めれば、何時間利用してもいい。北村は一日、二時間はそこで汗をかく。いろんな筋トレのマシンがあって、足腰を鍛えるもの、腕の筋肉を鍛えるもの、ランニングマシンなど、普段、運動不足で肥満気味の体からまず改造しなければならないと、やっきとなっていた。

五十を過ぎたら、腹が出てきた。胸も垂れて、そこいらのペチャパイの姉ちゃんよりはある。Cカップぐらいか。全体に醜い中年太りになっていた。ぶよぶよしていて、なんとも情けない体型を締めてゆき、筋肉を復活させなければならない。スポーツなど、若いときはやっていたが、社会に出てからはとんとご無沙汰だ。若いときは水泳をやっていたので胸は大きい。北村はボディビルの教本を読みながら、上半身に筋肉をつける運動をしていた。ひと月、ふた月とするうちに、その効果は現れ、腕も太く、肩から胸にかけて、筋肉隆々となってきた。

いまさら何をするつもりなのか。ボディビルコンテストに出る年でもない。

もりもりと飯を食い、ますます体が大きく逞しくなってきた。女房も子供も驚いた。あれほど、しけた中年のお父さんが、まるでプロレスラーのように生まれ変わったのだから。

「お父さん、どうしたの？ いまからプロレスに出るって云うんじゃないでしょうね」

女房はこのところの変化にとてもついてゆけない。何をこの人は考えているんだか。

次に、北村は着る服を買いに行き出した。いままでは、女房がバーゲンの特価台から安いシャツなどを買ってきたのを不満もなく黙って着ていたのが、自分で買いにゆくというのも珍しい。

北村はどちらかという、地味な無地の服が多かったが、がらりと好みを変えて、派手な柄ものにしていく。とても普通の人間なら着るのに抵抗があるような気障を乗り越えて怖いくらいの服装だ。それを着て、サングラスをかけて街を肩をいからせて歩くと迫力がある。

店でアルバイトを雇うことにした。いままでは、北村ひとりでやっていたが、今度からは営業方針を変えたので、できるだけ若く可愛い女の子を夕方から閉店まで雇うことにした。いまは、なかなかアルバイトもない不景気だから、時給を上げて張り紙ただけで面接にどっと押しかけた。その中で、できるだけセクシーな肉感的な女の子で、顔はチャーミングな子を採用した。本についての知識は全くなくてもいい。

そのアルバイトがさっそく店に来た。

「こんな服装でいいかしら」と、下着が見えるか見えないかの超ミニをはいてきていた。

「いい、なかなかぐつとくる」

北村が、店ではミニスカートで、できるだけ胸の谷間の見えるぎりぎりの服を着てくるよう、女の子に注文をしていた。もともと、古本屋というところは、女の子には縁のない店で、殆どが定年退職した老人ばかりが来る。若い人たちは活字離れで、本を読まないのだ。女性が入ってくることは珍しい。おばあちゃんなら、俳句の本がないとか、庭いじりの本だとか、お墓の買い方という本は買いにくる。だから、林語堂古書店ではマンガ本や、若者向けの本は全く置かない。古びた戦前の古書などを主に扱っている。なんとなく、暗く、黴臭い店に、なんと、場違いな派手な化粧にすらりと伸びた白い足。

ふらりと老人が入ってくる。ちらりと女の子を気にして見ていた。どうしてこんなところにいるのだという不思議そうな目だった。視線は足から腰に這う。老人はごくりと喉を鳴らして、気になって本を選んでいられない。そこへ、北村に云われたように、女の子が老人に近づく。

「ねえ、おじいちゃん、わたしね、本が読みたくなったの。わたしにお勧めの本ってある？」

老人はどぎまぎしながらも、

「おお、あんたのようなお姉ちゃんが本を読む。それはいいことだ。どれ、このポーボワールの第二の性なんかはどうかな」

女の子はペラペラとめくっていたが、漢字ばかりで読めない。それを小脇に抱えると、

「あと何冊か選んで」と、甘えたような声を出して、老人の首に腕を回してべたべたしだした。老人はでれでれして、もう全くしまりが無い。何冊か選んでやると、女の子が云った。

「ねえ、わたし、お金がないの。この本を買ってちょうだい」

女の子が本を読む。それは感心なことだと、老人は孫に本を買ってやるように、自分の読む文庫本と一緒に帳場に持っていった。そこに凄みをきかせた北村が、サングラスをかけて、レジに足を乗せて、タバコを吸っていた。驚いた老人は、小声で、

「すみません。この本をください」と、文庫本五冊を差し出した。

「おう、五冊で五万円だい」

老人は聞き間違いしたかと思って、

「ええ？ 五百円でしたか」「いや、五万円と云ったんだ」

老人は驚いた。なんという暴利の古本屋。

「それじゃ、これはいりません」と、返そうとすると、

「なんだと。うちの本になにかケチでもつけようってのかい。じいさんよ、あんまりもめごと起こしてもらっちゃ困るんでさ。痛い目に遭うってこともあるしな。それにレジも打ってしまった。この始末どうしてくれる」

北村のドスのきいた声に震えて、老人は慌てて財布から五万円出した。

そして、自分の文庫本一冊だけ持つと逃げるようにして帰っていった。

林語堂は一見客を相手に暴力古本屋をやるようになって、売上は倍増していた。

第482話 附 録

本が売れない。単行本が売れないのはかなり前からだ。一説には、石油ショックで単行本の価格が一挙に値上げしたからだとか。それから文庫本のブームがきて、雑誌ブームになる。高い単行本が売れないで、文庫本が売れるから客単価は下がる。売上に響くのだ。雑高書低と云われたのもつい昨日のようだが、いまは雑低書低。どちらも売れない。

それでは出版社は潰れると、雑誌社は豪華な附録をつける昔からのやり方を前面に出してきた。

少年漫画や少女漫画の月刊誌に、昔から附録はつきもので、それが楽しみで購読していた。「六大附録。飛び出す本」などと、摩訶不思議な誘い文句につい、買ってしまふ。絵や写真が立体的に見えるというのが流行った。そんな漫画の主人公のシールもあった。見る角度で、違う場面になったりする。

蓄音機がついてきた。ボール紙を切り抜いて、組み立てると、手動だが、ソノシートが付いていて、微かに音が出る。子供心に感動したものだ。

それから、やはりボール紙を切り抜いて作る顕微鏡や、天体望遠鏡というのもあった。面白いところでは、日光写真。写るのが不思議であった。本体より、その附録目当てで買ったがる。その心理は子供だけではなく、大人も同じことだ。

古川壬生夫はフリーライターをしていた。それで、いつも最新の情報を書店を覗くことで、キャッチしようと思っていた。特に雑誌のコーナーを見ると、いまの世の中の動きがよく判る。題材はすべて雑誌に隠されていた。それでも、すべての雑誌を定期購読するわけには行かないので、書店で立ち読みとなる。如何に、店員の嫌がらせの本の整理に平然と耐えられるか。また、一時間で何冊の雑誌を読めるか。必要なところは頭の中にコピーしておく。

いつも行く、大きな新刊書店の雑誌コーナーに一様に同じミニスカートをはいて、同じプリントのTシャツを着た、髪の毛の長い二十歳前後のお姉ちゃんたちが数人立っていた。何かのキャンペーンガールなのかなと、古川は思っていた。みんなキャピキャピした若さと可愛らしさを持って

いる。ただ、何もしないでずっと立っているだけなのだ。いま時の若いものは、進んで仕事しないと、古川は、何もしないで立っているだけの可愛い子ちゃんに、多少の腹ただしさを感じていた。

古川がある雑誌を手にとったら、女の子たちはにこにここと笑う。その雑誌の表紙に、「特別豪華附録つき」と書かれているが、その雑誌にはビニール袋もかかっていないし、輪ゴムできちんとバンドもしていない。よく、附録だけを取られるので、本屋がよくやるのは、ビニールに入れてしまうことだ。それが、全く、その雑誌に関してはなされていないどころか、閉じこみの附録も挟まっていない。本を振っても何も出てこない。おかしいな、附録だけ取られたのかなと思いつながら、気になる記事が載っていたから、まあ、附録はいいやと、レジで買い求めた。

古川は、日中はそうして、街角ウォッチングをしながら、何かスクープできる場面に出くわさないかなと、できるだけぶらぶらすることにしている。勿論、デジカメとボイスレコーダーは必需品だ。

さっきより、後ろからぴたりとくっついてくるものがある。振り向くと、にこにここと笑っているが、あの書店に立っていたキャンペーンガールのひとりだった。古川は変な顔をして、また歩き出す。すると、その女の子も歩き出す。立ち止まると、女の子も立ち止まる。振り向くと、にこにこ笑っているだけ。ただただ気持ちの悪いっただけだ。

「あんたねえ、さっきからぼくに付きまとっているようだが、何か用なのか」

と、訊くと、女の子は平気な顔して応えた。

「あなたに付いてきているのではないんです。その雑誌に付いてきているんです」

「この雑誌だったら、さっきの書店にまだ積んであったよ。これはぼくが買った本だ」

「ええ、だから、わたしは付いてゆくのです」

古川は、少々どころかかなりおかしい女の子だなと思うと、急に後ろも見ずに走りだした。めちゃくちゃに路地を回り、久しぶりに走って、汗をかいていた。

「もうここまで来ると、あのへんてこな女は付いてこないだろう」と、ハンカチで汗を拭こうとすると、誰かがハンカチを差し出していた。

「ありがとう」と、古川がいい香水の匂いがするハンカチで汗を拭くと、目の前ににこにここと笑っているあの女の子が立っている。

「な、なんなんなんだよ。ぼくに何か用なのかと訊いているんだ、はあはあはあ」

「ですから、わたしは、その雑誌の附録なんです」

「ええ？ いま何か云った？」

「いま、創刊号発売記念で、その雑誌を買いと洩れなくわたしたちが附録についてくるんです」

その女の子はとうとう自宅の前までついてきてしまった。

「ああ、そう、それじゃ、ここまででいいよ。あとは帰りなさい。ここは我が家だから」

そう云っても、帰りそうにない。ただ、にこにここと笑っている。無気味なやつだ。

古川が玄関を開けると、女の子も入ってきた。たまたま、古川の女房が出てきた。

「あら、あなたお帰り。その女の子、どなた？」

「それが、困っているんだ。なんて説明していいのか……」

すると、古川の女房は急に怒り出した。

「ああ、そういうことなのね。そんな若い子を連れこんで、自分で蒔いた種は自分で始末してね」

「おいおい、誤解するなよ、勝手についてきて……。あらら、怒らせちゃった。ほら、おまえのせいだぞ。だから、帰んな。判ったろう」

すると、いままでにここにこしていた女の子がしくしくと泣きはじめた。

「わたし、行くところがないんです」

そう云うなり、女の子は古川の胸に飛びこんで、おいおいと泣きじゃくった。甘い髪の毛の匂いが鼻をくすぐる。

「一というのは如何でしょうか」

雑誌社の企画会議に委嘱として参加していた古川壬生夫は、女の子を附録でつける提案をしていた。

「バカが、糞して寝ろよ。全く、アイデアが乏しい連中だ。他に部数を伸ばす附録戦略はないのか」

編集長は頭を抱えていた。

第483話 夜鳴き……

夜鳴き蕎麦が人気だった。いつ、どこに出現するか、いつも停まっている辺りを探しに、わざわざ車ででかける家族までいた。

おいしいと噂がたつと、そのラーメン屋を追いかけたり、探したりで、市民の間では、

「食べた？」「わたし、食べたわよ、ついに」という話題でもちきりだった。

小型トラックの荷台でラーメンを茹で、スープを温める厨房がついている。マイクでチャルメラの音楽を流している。昔なら、リヤカーを引いて、長椅子出して、赤い提灯がやけに懐かしく、夜更けて淋しい裏通りにうまそうな煙を漂わせていた。そのおいしいともっぱらの評判のマル拓ラーメンは、いままで商店街の外れで店を構えて営業していたが、中心商店街が没落していつてからは、客足が途絶えた。商店街の半分は空き店舗となっていて、残った店も死んでいた。

客の多くは車で入りやすい郊外型の店舗へと買物に走るのだから、立地が不利になると、店舗というのは致命的だ。ジャスコの岡田の持論で、店舗に車をつけよというのをマル拓ラーメンのおやじはその通り実行して、奥さんと二人で、夕方から夜中まで、団地や呑み屋街の入口などで屋台ラーメンを開いた。店主はもともと不潔な男で、ろくに手を洗わないで調理をするから、どこかひと味違う。微妙な味が、実は黴菌のせいなのだ。

そのラーメン移動店は、神出鬼没で、どこを通るか、どこで店を開くか判らない。風の吹くまま、気ままな稼業だ。それだから、食べたくとも食べたことがない人はますます食べたくなり、追っかけが始まる。

いままで、商店街で営業していたときと比べたら、売上は三倍になったというのだ。しかも、家賃に電気代もかからない。電話代もいらぬ。光熱費も安上がりだ。人のよく歩くところに店を開くことができる。縁日やお祭りをあてこんで、また花木、花金は盛り場で、いまは夫婦は実

に充実した仕事をしていた。前の客がひとりも来ない店の時代は暗く、落ちこんでいて、ロスも多かった。いまは、動けば動くほど見入りがいい。

その話を聞いていて、ラーメン屋のいなくなったすぐ近くで古本屋をやっている北村は、このままでは商店街と心中することになる、あのラーメン屋を見習って、うちでも積極的に外に打って出よう。

北村も、そうと決まれば早いもので、あっさりと店舗を閉鎖した。貸店舗だから家賃も月々バカにならない。客が来ない日は節電で、電灯を消しているくらい窮していた。みんなどこも「待ち」の商売だから、客が来るのをひたすら待つよりない。客足が落ちて、焦るうちはいい、焦りもなくなり、絶望的になってくると、なにもやる気が起こらない。

そうなる1歩手前で、北村は勝負に出た。業態を転換させることも必要だ。いつまでもダメなものにしがみついてもいけない。ということで、ついに「夜鳴き古本屋」を始めたのだ。パリはセーヌ川のほとりにやはり、有名な古本の屋台が並んでいる。屋台には車がついていて、いまなら車で牽引するのだろう。何も、珍しいことでもなく、昔から外国ではやられてきたことだ。

北村はウォークスルーバンを改造して、サイドが開くと本棚になるようにした。そのサイドの蓋はそのまま屋根になり、雨の日でも立ち見できるのだ。二重スライド式の本棚にびっしりと文庫本とマンガ本を並べて、均一値段で売るので。客を呼ぶには、やはりチャルメラと、スピーカーで流すと、夜中に家から数人の若者や夫婦ものがばたばたと出てきた。

「あら、ラーメン屋さんじゃないの？」

「ええ、古本屋です」

「まったく、紛らわしいチャルメラなんか流さないでくれる？」

と、大抵の客はぶりぶりと怒り出す。北村は腕組して考えた。

「アイデアはよかったんだがなあ」

すると、向こうから、やはり軽トラになにやら積んで、チャルメラを流してくるやつがいる。

「ええ、ナット」と、マイクで喋っていた。

北村は、こんな夜更けに納豆売りはないだろうと思っていた。納豆というのは朝のイメージなのだ。豆腐は夕方のイメージがある。

「おいおい、こんな夜中に納豆なんか売れるのかよ」とも北村は軽トラのあんちゃんに声をかけた。すると、あんちゃんは、苦笑いをしながら、

「納豆じゃないんです。ナットを売っているんです。ボルトとか。ネジとか」

北村は驚いた。古本も驚くアイデアだが、ボルトなんか夜鳴きして売れるものだろうか。

「売れませんね。でも、店で工具を並べて売っていても、客が来ないから苦肉の策でさあ」

そう云って、あんちゃんは、「ええ、ナットはいかがですかー」とマイクで小さく呼びかけてゆっくりと走っていた。

そのまた向こうから、また変なのがきた、

「ええ、仏壇はいかが」夜鳴き仏壇屋まで登場してきた。見れば、みんな死んだ商店街から逃げ出してきた店主たちだ。

「夜鳴き医院」「夜鳴き床屋」「夜鳴き鉛筆屋」いろいろと出てきた。誰かが成功すると物真似

のうまい日本人。真夜中というのに、外の通りは昼間より賑やかに
なった。

スピーカーの声やチャルメラが夜の街にコダマしていた。すると、窓という窓が開いて、住民
たちが叫んだ。

「うるさーい。安眠妨害だー。そんなもの売れるかー」

第484話 素焼きのピルスナー

陶器のグラスでビールを飲むとうまい。それも、中にはうわぐすりを塗っていない素焼きのも
のがいい。たまたま、津軽金山焼の松宮さんの備前風のピルスナーがあったから、それでビール
をいつも飲んでいて。泡が木目細かくなり、不思議といつものビールではないような味に変身
する。

わたしは、そう陶器を収集するほど好きなわけではないが、なんとなく日常の中には身近に使用
している。若い頃には、河井寛次郎から貰ったとか云っていた抹茶茶碗を桐の箱から出して、
ひとり、こんなものは押し入れの中で眠っていたら可哀想だ、使われるためにこの世に生まれて
きたものをと、勿体無くも、それで毎日御飯を食べていた。軽くて味わいのある形と手触り、そ
れに熱い御飯がマッチして、毎日の御飯が美味しくてたまらない。陶器には何かそんな食べ物
おいしくする力があるのだろうか。

戦後、我が家は洋菓子店と喫茶を両親が小さく始めた。その店は文化人の溜まり場となって、い
ろんな人が来た。三上強二先生もその一人で、先生の紹介で、店を青森県の民芸家協会の事務局
とした。それが発足したので、中央からいろんな人がやってくる。河井寛次郎、柳宗悦、その中
に高橋一智さんがいた。おやじは、高橋さんを気に入ったものか、弘前に行ったら必ず寄って
来た。

わたしが高校生のときに、おやじは桔梗野にある高橋先生の窯場に連れて行った。周りが畑で
、小高いところによく手入れされた庭と、瀟洒な工房があった。下の方の小さな門に、マスコミ
関係者お断りの札が出ていたので、それを見たわたしは、怖いくらい頑固なじいさんを想像して
いた。あるいは、偏屈者で、ただならぬ人だということは、マスコミの取材拒否という姿勢から
も判る。緊張して自宅と兼ねていた工房に入っていった。おやじはいつも来ていたので図々しい
くらいにズケズケものを云う。

「ほら、塵ひとつないだろう」と、床を指で拭いてみせた。老人の一人暮らしの割りにはよく掃
除され、きちんとした生活が伺えた。

高橋先生は若い頃は男前であったろうと思わせる面立ちをしていた。ちゃんちゃんこがよく似
合う。もんぺのようなズボンをはいていた。大工がはくぼんたんとも違う。裾がすぼめてある
から、作業がしやすいのだろう。いろいろと着るものにも工夫しておいでのようなようだった。

薄く入れた紅茶には蜂蜜が入っていた。わたしが、壁に掛かっているモジリアニの女の肖像を

なんとなく眺めていたら、

「これは、亡くなった女房に似ているんで、掛けているんですよ」と、ぼつりと云った。モジリアニが描く女には、瞳がなかったり、ネクタイが緩んで、顔が悲しげに歪んでいたりするものが多いが、その肖像画は、はっきりとした美人に描かれていた。日本の田舎の陶芸の窯元にモジリアニ。それは、似合っていた。リンゴ園があり、フランス語の *ne-pa* がねは一に聞えるほど、いくつかの言葉のニュアンスが津軽弁と似ていておかしいときがある。誰かが、津軽はフランス的で南部盛岡はドイツ的だと云った。太宰のダスケ・マイネ（だからだめだ）は、方言の類似点を真似たおかしさだ。

高橋先生の、亡くなった奥さんというのは、余程綺麗な人だったのだ。そして、高橋先生はいまだに愛している。高校生でもそれぐらいは判る。

それから、高橋先生は、鳥居の絵を見せてくれて、この重心はどこにあるだろうとか、向い鶴の絵を見せて、求心力の話しをしてみたり、科学者のような、はたまた禅問答のような難解な問いかけをわたしにして、笑っていた。

「今度来るときまで宿題です」と、学校では教えないことを云う不思議な老人だった。

その先生の工房から帰るときに、玄関まで見送ってきてくれたが、わたしは、つい子供のように手を振っていた。それが、後でおやじに手紙がきて、わたしが手を振ったことが嬉しいと書かれてあったのを記憶している。

わたしの周りにも芸術家という友達が多かったせいで、みんなの後押しで十年前に工芸ギャラリーをオープンしたことがあった。そこでは、毎週、企画展をやり、東北が主だったが、工芸家たちの作品を展示即売の形で行った。陶芸作家の展覧会だけでも五十を超えるほどやった。仕事の関係で、窯元巡りもよくした。若い作家を掘り出そうと動いてみたが、なかなか売れない。

洋菓子と陶芸は非常に似ている。成形し焼くという工程だけでなく、使う器具機材も共通のものが多い。デコレーションケーキを乗せて、くるくる回して、サイドにクリームを塗る回転台を陶芸でも使う。たたらというのは、平板な粘土の板を作るのだが、それをめん棒で均一の厚さにするために、いろんな厚さの長い板や、文鎮用の細長い鉄棒を使う。それを両側に置いて、生地を伸ばすのだが、パイ生地を作る作業に似ている。いまは、パイシートを作るときに使うモーターで動かすローラーをどちらも使っている。

エッチンという細かい模様を描く手法は、釉薬をチョコレートのようにパラフィン紙で絞り袋を作って模様を描くのに使っていた。

柳宗悦が、ヨーロッパに行ったとき、どうしても判らない羽根模様の陶器をマイセンで見つけて、その模様の描き方を知りたくて仕方がなかった。スリップウェアというこのやり方をイギリスの家庭婦人の台所で発見する。マーブルケーキをこしらえていた現場を見て、これだ、と手を叩いて喜んだという。マーブルケーキは、四角いチョコレートを流し込んだバターケーキの上に、チョコレートをコーティングし、その上に一筋の白いフォンダンを流し落とす。その白い一本の線をペティナイフで、両側に引くようにすれば羽根模様ができるのだ。まさにケーキと陶器とまったく同じ手法であった。

ところで、わたしの愛用の素焼きのピルスナーがある日突然になくなっていった。どこをどう探してもみつからない。誰かが壊して、密かに証拠隠滅したに違いないと、子供たちをも問い詰め

ていた。

「お父さんのいつもビール飲んでいるあれでしょ。洗面所にあったよ」と、けろりと息子が云う。

わたしが、洗面所に駆けつけたら、あった、確かに、素焼きのピルスナーがあった。ただ、ピルスナーの中にはポリドントとおやじの入れ歯が入っていた。

第485話 悦子の青春

戦前戦後に青春を送った人にとっては、人生で一番光輝く眩しい青春時代が、灰色というより真っ黒であったかもしれない。おいしいものを食べたい、腹いっぱい食べてみたい育ち盛りに麦飯と大根ばかり。だから、いまだに切り干し大根を食べたがらない老人たちがいる。嫌な思い出のある食べ物だからだ。おしゃれをしたいときにモンペ。化粧なんかするやつは非国民扱いだ。当然、学校では敵国の言葉、英語は教えない。それで、基礎的な英語を習ってこなかったばかりに、いま苦労している人が沢山いるのだ。

中には、繰り上げ卒業させられたり、卒業自体も学校が空襲で焼けたりして、やらなかった人も多い。テレビもない、車も持てない、ブランドものなどともない、趣味やスポーツをやっているほど余裕もない、そんな時間があつたら、芋掘り、勤労奉仕、竹槍訓練だ。

そして、戦後はもっと悪い。一億総懺悔して、占領国家となったが、食料はなし。闇は高いし、配給は少ないし、餓死した検事さんが有名になった。

悦子もまたそんな暗い時代に少女期を過ごした。燈火管制のもとで、黒いカーテンしても明かりが漏れるので、ろくに勉強もできない。しょっちゅうある空襲警報に怯えながら、家族と防空壕に避難した。中は暗いから、教科書を持っていっても、読めないから、明日の勉強もくそもない。

悦子は北国の港で育った。もの心ついたときから日本は戦争をしていた。そして、物資の入手難で、月に一度だけ、フライボールか羊羹のひと切れが一家に配給された。甘いものに飢えていた悦子は、そのひと口が待ち遠しかった。

学校では、教育勅語を暗記させられ、ジンム、スウゼイ、アンネイ、イトクと歴代の天皇の名前を間違えなくすらすらと云えるまで何度も立たせられた。

歴史の時間に、紀元二千六百年の歌を覚えさせられ、日本がどうしてできたかをイザナギ、イザナミがラーメンを茹でるときのように掻き回した話を何度も聞かされた。でも、おかしいことにははっきりと発言する悦子の性分では、許せないこともあった。

「先生、二千六百年前には人間はこの日本に住んでいなかったのですか」

先生はぎくりとした。

「そうです。神様たちが国を創り、それからわたしたちの祖先が生まれたのです」 悦子はまた

手を上げた。

「でも、先生は、前に、縄文時代や石器時代の話をしました。それに、お隣の中国やギリシャでもっと古い文明があると教えてくれました。あれは嘘だったのですか」

先生は汗をたらたら流していた。

「これ、声大きい。これはこれ、あれはあれなんじゃ。なんと云ってよいか、つまり、その：：」

悦子の中では人間は猿から進化したものと思っていたのに、神様の耳垢から生まれたりするものかと疑問を感じていた。おかしいことはおかしい。でも、どうして、大人たちはそれがおかしいと口では云えないのか、それもまだ子供の悦子にとっては、不思議なことだった。

戦後の中学時代は悲惨だった。全国民が貧しさのどん底でもがいていた。悦子は家の手伝いだけでなく、畑仕事もやらされた。冬の冷たさの中ではひび、あかぎれ、髪にはしらみ、目はトラホーム、見るも無残な女子生徒だった。愛だ、恋だとそんなものがどこにある。食うためだけで必死だった。

悦子には青春はないのか。やつれて老婆みたいな少女時代。云ってみれば、若さも死んでいた。

平成十五年五月。ついに、悦子はパソコンを買った。隣県に嫁に行った娘の奈緒美から勧められて、抵抗感があったが、元来、新しもの好きで好奇心旺盛の悦子は、思いきってデジタルな生活へと飛びこんだ。初めは恐る恐るキーを叩いていて、漢字変換もできなかったのが、いまじゃ、メールもなんのその。若い男性とメル友になっている。どうせ、相手は顔も名前も知らないお互いにどこの誰だか判らない。ケイタイだって、持っているのだ。初めは批判的だったが、持ってみるとこれが便利。新しいものという年取れば億劫になるものが、悦子は違った。MDプレイヤーも買って来た。若者のようにいつもヘッドホンに耳をあて、悦子の好きなリップスライムのラップをガンガンかける。家事をしていても乗りがいい。乗りがいいついでに、ジャズダンス教室にも通った。平均年齢を自分で高くしているが、気持ちではいまだきの若い奥さんには負けなつもり。

いまをときめく和平兄弟のもとに通いつめ、三味線も習っている。しんないとかそんな古いものじゃない。三味線でロックを弾くのだ。気持ちがすっかりと若返っていた。着る服もだんだんと派手になり、髪もいま流行りに染めた。読む雑誌も「主婦の友」から「ヴォーチェ」に換えた。つれあいはだんだんと不安になってくる。とても夫婦だとは思えない。何か取り残されてゆく淋しさで、夫は云った。

「おまえ、不気味なくらい若くなってゆくなあ」

「毎日がとても楽しいのよ。うきうきしている娘時分に戻ったみたいよ」

若いときできなかったことをいまはできる。人生の帳尻はいつも合っているものだ。

悦子、七十歳、只今青春中。

カメラのファインダーに新宿西口のモニュメントの時計が映っていた。シャッターチャンスということはない。相手が静止しているものであればこちらから、じっくりと攻めればいい。アングルを考え、角度も計算に入れる。副次的に画面に入るオブジェに何か意味付けすれば、一枚の物語が写せるのだ。

金本茂美は、執拗に時計ばかりを追って、写真撮影を続けていた。ひとつのテーマを追うということはカメラマンとしてはあたりまえのことだ。実際、金本のように、時計ばかり撮り続けている写真家というのはプロにいる。そして、写真集なども出している。ただ、それはそのときだけの思いつきでしかない。撮影枚数、撮影年月は圧倒的に金本の方が上だ。地方のアマチュア写真家としては異質なほうだろう。仕事で外国へ行っても、愛用のデジカメは手放さない。いつも手にはカメラがあった。

偶然の発見ということもある。どこで時計にばったりと出くわすかしのれない。そうした日常の中にも、旅行や出張の見知らぬ街にも、時計という題材は転がっていた。デジカメにしたのは、性能がかなり上がったことと、加工ができることであった。単に撮影しただけの写真にも飽きてきた。それを加工するという、撮影技術の限界を超えた新しいアートの世界が広がっていた。これからは、ただ写すという従来の撮影から、パソコンを使って、写した素材を画家のように手を加えることによって、この世にはない全く新しい画像を創り出すことができる。その方向に写真という芸術は進んでゆくだろう。

金本はすでに古希に近い年齢だ。この年になってくると、周囲の知人、友人が続けざまに他界する。親しい親友があっけなく亡くなったり、同窓生の訃報に触れるたびに、金本は、そろそろ自分にも順番が回ってくるのかとぼんやりと考えるようになった。いまは寿命がだいぶ延びたが、死神の射程距離に入ったようだと感ずるのが、おそらく七十の線だろうか。

そうすると、何かを残しておきたい衝動にかられた。金本は仕事でも偉業を残してきたし、著作もかなりあった。地域に社会運動も進めて、若い人たちが育っていった。それでも何か足りない。それはなんなのだろうと、最近になって考えるようになっていた。

デジカメに凝ったのは、六年前からだ。最初はフィルムもないカメラというものに半信半疑で、シャッター音もしない怪しげなカメラが本当に撮影されているのだろうかと思っていた。画質も悪かった。せいぜい三十万画素よりなかった。プリンターの印刷精度も悪かったから、プリントアウトしても、色から粒子から荒く、とても見るに耐えない。もともと、デジカメはプリントするためにはなかった。ファイルとして保存して、モニターで見る。アルバムにしても、MOかCDに保存するか、ハードディスクのマイピクチャーに保存しておくのだ。でも、金本の周辺ではパソコンすらまだやっていない人が多く、なんとかしてみんなに新しいデジカメの可能性を見せたかった。それで、新機種が出るたびにカメラを買った。百三十万画素から三百万画素へ、そして六百万画素を超えたとき、すでに、光学機械と遜色がなくなっていた。画質は年々向上してゆき、プリンターもよくなってきた。引き伸ばしても粗が見えない。四つ切にしても耐えられるまでとなった。

いま、金本はその最新型のコンパクトなデジカメをアクセサリのように胸ポケットに入れて

いた。仕事仲間と、新宿の高層ビル群が見えるカフェテラスで遅い昼食を摂っていた。

「金本さんは、いつもカメラを携帯していますが、時計ばかり撮っていますね。そんなに時計がお好きですか。金本さんにとって時計って何なのですか」

仲間にもう質問されて、いままで考えたこともない答を金本は探していた。

「時計か：：。消えゆく蠟燭の炎だな」

金本は自分でも驚くほどの、無意識の言葉が出ていた。

「え？ 蠟燭、です、か」仲間は納得していない。すると、金本はすべてを理解していた。

「そうだ、蠟燭だよ。みんな、自分の蠟燭を持っている。その蠟燭が燃え尽きたときが、寿命なんだ。時計も同じだ。みんな自分の時計を持っている。わたしは、その、自分の時計を探しているんだ」

いままで、気づかなかった自分の行動が見えてきていた。ドイツでもロシアでも、イギリスでも街角に自分の時計はなかった。どこかで、自分を待っているような気がしていた。だが、その時計を見るのは何か怖い気がした。後、いくら生きられるか。それは知らなくていいことのような気もしたが、きっちりと自分の始末をするためには、見ておきたい気もする。

その夜の会合で、金本は久しぶりに気持ちよく酔っていた。酔うとひとりで歩いてみたくなる。ホテルへはいつでもタクシーを拾えば帰れるのだ。仲間からはぐれて、ひとり、新宿の公園へと歩いていた。腕時計は十一時五分前だ。おかしいな、と金本は狂っている時刻を怪しんだ。

「まだ、九時頃のはずだが。電池が切れたかな」

人気のない真夜中の公園のようで、都会のどまんなかになんかこんな空間があるのが信じられない。時間を知りたくなって、時計を探していた。すると、立木の幹に時計が埋めこまれていた。

「ひどいことをするなあ」何者かの仕業か、樹木を痛めていると思ったら、なんと、その木の実のように枝からぶら下がっているのはすべて時計だった。静かな公園がチクタクチクタクと騒がしくなってきた。見ると、ベンチにも、遊歩道にも、街灯にも、公衆電話ボックスにも、消火栓にも、ありとあらゆるところに時計があった。それが一斉に時を打ったりして実に騒々しかった。何千何万という数え切れないほどの時計に金本は包囲されていた。

「ここは、時計の森か。なんなのだ、しかも、すべての時計の時刻が合っていない」

若い時計は力強く、打っているし、古びた時計は秒針もかすかに動くだけだ。人は自分の時計は見ると判るという。その時計の森からいつか金本は自分の時計を探していた。ゴミ箱の中にも、電柱にも、芝生にも時計があって、チクタクチクタクと慌しくこの世に命を刻んでいた。その中に、壊れかけた大きな柱時計が木にぶら下がっていた。金本はそれを見たとき、非常に懐かしい気がした。それは、金本が生まれた家の玄関に掛けられていたゼンマイ式の六角時計だったからだ。

「こ、これは、わたしの生家のものと同じだ」

喜びとも戸惑いともつかぬ様子で金本は立っていた。ただ、その時計は十二時まであと一分を示していた。

第487話 誰かがいる

誰かがいる。そう感じたのは、六月に入ってからだった。ぼくのすぐ傍に誰かがいる気配を感じて振り向くと、そいつはいつも姿を消していた。

つけられているという感じは、余程尾行のうまいやつでない限り、判るものだ。ぼくの後ろを常につけ狙っている男がいるのを六月の第一土曜日になって勘付いた。それが、ぼくをターゲットにしているということを確認するに至った。

たとえば、バックミラー。車に乗っていると、後続車というものがいやに気になるものだ。それが、車間距離を詰めるだけで、嫌がらせかと思ったりする。それは、白のよくあるセダンで、運転しているやつはサングラスをかけていて、顔はよく見えない。ぼくが、右折すると、そいつも右折した。偶然にしては三回も一緒に曲がるということは考えられない。そこで、不意に小路へと入って、ぼくはまいてやったことがある。

ぼくを狙うとすれば、何かの犯罪絡みか、興信所か、ぼくが役所では重要なポストに就いているから、何かと誘惑は多い。どんな役人でも金で動くと思っている連中だ。いまは、接待も厳しくなっているし、世間の目もある。ぼくだけでなく、上からも厳しく申し渡されている。

だが、それが探偵だとすれば、ぼくの素行調査ということになる。ぼくが何をしたか。横領か何か秘密裏に事件に関与していたかもしれない。意外と、本人が気がつかなくとも、利用されていたり、手足に使われて、共犯にされていた場合もある。とすれば、直属上司の都市計画課長が、何か秘密を握っていて、ぼくに書類の受け渡し役を頼んでいたりすることもたびたびあった。その書類はいつも封印してあり、中身は見られないようにしてあった。

だが、ぼくをつけているやつは、時には姿の見えない影だけを見せたりするのだ。それは、家に帰って、真夜中まで自室でパソコンを叩いていたるときに、部屋の中に影が映ったりするのだ。ぞっとして、振りかえると、それは一瞬のようで、影はいつか消えていた。実体のないものからぼくは逃げているのかもしれない。それは、ぼくにしか見えない霊かもしれない。いろいろと想像するうちに、寒気がしてきた。

ぼくは、まだ独身だから、恋人はいないにしても、密かに結婚相手として調査している人がいるのだろうか、そんなありもしないことも考えたりしていた。できるだけ、あまり怖いことは考えないようにしていた。

それでも、寝ていて、枕元でひそひそと囁く声がしたときは、いきなりがばっと起き上がり、ぼくは階段を駆け下りていた。家には両親がいたが、真夜中に何事かと起きてきた。ぼくはいまままでのこと一切を母に話した。

「おまえは仕事で疲れているんだよ。日曜日も休みなく出ているじゃないか。少し休養したらどうなんだい」

そう云うだけで、誰かがいるということは信じてもらえない。

ぼくだって、それは休みたい。ただ、仕事が忙しいのだ。どちらかという、ぼくは手も遅く、口べたで、スポーツは総じて駄目だ。仕事もとろいから、休みを返上してやらなければ、ひと

つの計画書も提出できないでいた。ただ、どんくさいが、信用がおけるからと、課長を補佐する役目を仰せつかった。それは、子供のときからのぼくを見てきた両親が一番知っている。

「あんたは、どうしても能力が人より落ちるんだから、人の倍働きなさい」と、そう云われてきた。こつこつとやれば、どんなのろいやつでも世間はやがて認めてくれる。

それで、役所ではじっくりと腰を据えて仕事ができる長期計画の業務へと配置転換させてくれた。課長はいつも云った。

「君は自分でも判っていると思うが、生まれたときからだろうな、君のその性格も含めてだよ、半人前なんだから、努力を惜しんではいけないよ」

それは、どこの職場に行っても同じことを云われた。ぼくは半人前と云われることに抵抗もなく慣れてきていたが、自分でも感心するほど人の半分の能力だということは判っていた。

そんなぼくだから、中にもうまく騙せると思っている悪い連中がいるかもしれない。決して頭が悪いのではない。頭の回転が遅いだけなのだ。それと運動神経が人よりかなり劣る。てきぱきとした仕事や、短時間で仕上げる仕事ができないので窓口業務からは外されていた。

ぼくが、影から逃げようとして、いつもびくびくしていたのが、だんだんと慣れてくると、目に見えないそいつが、何か知己のようにも思えてくるから不思議だ。

真夜中に、コツコツと窓を叩く物音がする。それは風や小枝の触れる音ではない。しかもここは二階だ。梯子でもかけなければ叩けるはずがない。ぼくは、勇気を出して、そいつの正体を見ようと、いきなりカーテンを開けた。なんと、そいつは、窓ガラスに顔をぺったりとくっつけているのだ。ぼくは、声が出なかった。金縛りに合ったように体も動かない。そいつは、ぼくと全く同じ顔をしていた。まるで、ガラスにぼく自身が映っているような。ただ、それがぼくの虚像ではないという証拠に、ぼくと違う動きをしていた。そいつはまさに別の意思を持ったぼくなのだ。

窓の鍵を開けると、そいつはぼくに指示していた。ぼくは、震える手で、開錠してやった。そいつは、図々しくも窓を開けるとひらりとぼくの部屋に入ってきた。その身のこなしといい、運動神経は抜群のようだった。

「き、君は、だ、誰なんだ。いつも、ぼくの耳元で囁いていたやつか」

すると、そいつは、ぼくより早口で云った。

「相変わらず口も遅いな。反射神経も悪い。おれか、おれはおまえの半分だよ。生まれたときから、忘れてきた残りの半分だ」

「の、残りの半分だって」

「そうだ。半人前と云われるわけだ。おれを忘れてきたのだからな。おれたちは一緒になって一人前なんだよ。おまえを探したぜ。ようやくみつけた」

そいつは、ぼくの中に強引に入りこんだ。ぼくたちは、一体となった。ぼくのハードディスクもメモリーも演算速度も急激にスペックは向上した。ぼくは、自分の体がDOS=Vでよかったとつくづく思っている。明日からのぼくは別人だろう。

人間、死んだらお終いだ、ということは最近しみじみと判る。世の中がおかしくなれば、みんな自分の生きることで一生懸命で、死んだもののことなんか忘れてしまうのだ。

それが、親しい友人でも、身内でも同じだった。どんなに可愛がって育てた息子でも、親が死んだら、仏壇に花も菓子のひとつも供えず、墓参りもしなくなり、いつか荒れた無縁仏さんになってしまう。人の噂も七十五日というが、四十九日が過ぎて、忌明けが終わると、死んだ人の話も出なくなる。

詩人のSさんが、亡くなる前に、こんなことを云っていた。

「人間は不思議なものだな。ある日突然いなくなるんだな。いままで、ここにいた人がだ」

確かに老齢のSさんの周りでは知人が次々と亡くなっていた。そのSさんまでが、不思議なことに、いままで傍にいたものが突然消えたようにこの世から姿を消した。思いだとか、面影だとか、言葉だけが断片的に残っているに過ぎない。Sさんが亡くなってからは、誰も遺作の詩集を出そうと云いささないし、死んだことを口にもしない。

どんな立派な著書を残しても、いずれは風化してしまう。まさしく「人は淋しき」である。

その人の葬式で、普段のつきあいが判る。よく、知人の通夜に行くと、思うことがある。通夜に来ている人はいいとして、来ない人の顔ぶれである。後で聞いて、行けない事情のある人はともかく、あれほど親しそうにしていた人が通夜にも顔を出さない、ということは、上辺だけのつきあいで、本心からはよく思っていなかったのだろうと詮索される。

そんなことを考えているとき、わたしは、体調不良で病院で検査を受けることとなった。医師は難しい顔をして、もう一度精密検査をすると云った。その段階で、わたしはなにか大変な病気に罹ったことを覚悟した。そういえば、すべて思い当たることが癌の症状に似ていた。

わたしは、五十を過ぎてからは、体のあちこちにガタがきていて、血圧が上がったり、疲れやすくなったこともたびたびあった。だが、そればかりではなく、どうも背中の一部が刺されたように痛い。別に節食しているわけでもないのに、最近は極端に体重が落ちて、人からも痩せましたねと云われる。

わたしは、心配になり、書店へ行って、ありったけの癌に関する本を買ってきて読んだ。怖々と読み進むうちに、間違いなく自分は癌であるという確信を持つに至った。それも、かなり末期だ。あちこちに転移しているにちがいない。

再検査の結果が出た。その病院はインフォームド・コンセントをする病院で、わたしは医者から面と向って、こう宣告された。

「ただの癌です」

「そうですか、よかった、ただの癌でしたか」

医者と互いに笑いあったが、気がつくとも笑いは止まり、青ざめていた。そうだったのだ。医者も軽く流すつもりでいたようだ。そうはいかない。他人ごとのように聞いていたが、自分の余命があと半年と聞いて、わたしは立っていることも坐っていることもできないでいた。そのとき、わたしの脳裏にはいままで周りで亡くなった人たちの顔がスライドショーされていった。走馬灯

なんていまはないのだ。

人は死ぬと忘れられてしまう。冷たいもので葬式も客が少ないときもある。やはり生きているときが義理もあるのだ。わたしは、いままでも、あちこちへ香典を持っていったが、上げたものは返してもらわねばならない。収支はとんとんでなければ不公平だ。そんな打算的な考えが浮かんだ。それで、生前葬式を挙行することにした。

寺と葬儀屋に連絡して、手配した。

一ええ？ どちら様の葬式ですって？

一わたしだ。わたしの葬式だ。

どちらも信用していない。からかいか、頭がおかしいかぐらいにしか考えていない。案内状も印刷してみんな関係者、親族に出した。翌日にはみんな驚いて、電話はくるわ、尋ねてくるわで大変な騒ぎになった。死んだらこれほど大袈裟ではない。やはり生きているから大事にされ、ちやほやされる。思った通りだった。

葬式の日。わたしは、経帷子を着て、頭には一応三角の布をあて、棺桶に入った。あまりいい気分ではない。なにか予行演習のようで、本番もこうなるだろうと思えば、ぞっとした。みんな、恐る恐る棺桶の窓からわたしの顔を覗きにくる。わたしはといえば、窓から知り合いの女の子にウインクしてみせたり、手を振ったりで忙しい。子供にはあかんべをしたり、舌をながめたりとサービスした。覗きこんだ人はみんな爆笑した。誰も泣いていない。笑いが絶えない葬式だったが、慥然と読経している坊主だけが不機嫌だった。

香典もたんまりと集まった。普段、わたしを毛嫌いしていた部下も、会社の仲間と来ていたし、死んだときより見入りはいいはずだと、わたしは胸算用していた。

葬儀一切が滞りなく終り、わたしはいつ死んでもいいことになった。身辺整理も済ませ、形見分けもした。財産の始末まで知り合いの税理士と相談して決めていた。何かさっぱりすると、自分が実に元気がいいのに気がついた。すでに半年は過ぎていたが、なかなか死なない。

そこでふたたび病院を訪れた。検査を受けると、医師は平身低頭謝った。誤診だったのだ。癌の症状には似ていたが、違っていたというのだ。

「いまさら、そんなことを云ったって、もう葬式も済ませたんだ。どうしてくれる」

わたしの脳裏には、香典返せと詰め寄ってくる知人たちの顔が浮かんだ。

第489話 婚礼写真

結婚式で何が高くなって、一番は前撮りのための婚礼写真の費用だ。見積もりを見て、わたしはうーんと唸った。

わざわざ写真を撮るためだけに、美容師に髪とメーキャップをしてもらい、豪華な金欄緞子を着せてもらい、スタジオで写真撮りだ。一生に一度だから、花嫁の恰好をして写真で残したいという気持ちが目玉が飛び出るほどかかるのだ。

どうせ、衣裳を着たところで、スタジオの中だけだから、誰に見せるわけでもない。写真だって、ただの二枚しかよこさないのだから、何人かの人に見せるだけのことだ。昔から旧態依然としたやり方に理不尽を感じて、わたしは、あることを考えた。自分の商売に新しい部門で婚礼写真部門を設けた。

さっそく、企画をたて、広告を新聞、雑誌に出した。パンフレットも作り、あちこちへ置かせてもらう。

(婚礼写真を格安で、たったの一万円)

こんな不景気な世の中だ。写真ごときに何十万もふんだくられてたまるか。わたしは、そこに新しいビジネスチャンスを模索していた。

さっそく、あちこちから問い合わせが殺到した。それは、前撮りだけをしたい人や、婚礼写真を撮らなかった人、式も挙げなかった人たちの問い合わせだった。事務所に訪ねてくるカップルや、夫婦もいた。

「あのう、なんでそんなに安いんですか」

「ああ、それはですね、実際に花嫁衣裳を着るわけじゃないからですな。貸衣裳もばかにならない。それに、化粧、髪結いも高いでしょう。もう写真の時代は終わったのに、いまだに、そんなことをみなさんしているのがおかしいでしょう。世の中はどんどんと進歩しているのです。そこで、わが社では、ご覧のように、お客様のお顔だけ撮影させていただきます。化粧もすべて、パソコンで画像処理いたします。白いお肌がお好みなら、白くおしろいも塗りましょう。口紅もお好みの色で調整いたします。ああ、髪型もですね、いろんなパターンの写真の中から選んでもらって、それを合成するわけです。勿論、花嫁衣裳も羽織袴も、いろんなパターン集の中から選んでいただけます。すべて、パソコン上で合成するわけです。どうしても着たい人は従来通りやっていただければいいわけですし、格安で記念を残したい人だけ、わが社ではこうして、婚礼写真を残せます。ただ、写真はどうしても長年で変色したりいたします。そこで、わが社では、いろんなポーズで、しかもスナップもいれて、DVDで永久保存できるようにして差上げます。ごらんになりたいときは、いつでもテレビで見れますからね」

からくりを云ってしまえばそんなことだった。

自分の体型に自信のない太めの花嫁には好評だった。みんな、必ず、パターン写真集からほっそりとしたモデルさんの首から下を選ぶ。首が太く、顔が大きいのに、腕がほっそりとしていて、ウエストもくびれていてスタイルは抜群だが、どう見ても、取って付けたような巨大な首だ。本人も首を傾げて、

「あのう、この下半身どうにかなりませんか。首がはばけていますけど」

「判りました。いくらでもご調整できます」

そこがパソコンのいいところ。いくらでも大きくしたり小さくしたりできる。

「ありがと、これでいいわ」と、本人は大変満足しているようだが、端から見るととても不気味。アンバランス。腕の細さと首の太さが合わない。

乙女心はそれでもいいのだ。

「思いきって、昨年、歌手の小室夫妻が着た全く同じ衣裳というのはどうですか」

そんなこともいくらでもできる。何千万もする豪華な衣裳も着たつもりになれる。

二目と見られない方がお見えになった。その方はさる建設会社のご令嬢だとかで、すべて命令口調だる

「あら、もっと鼻を高くしてくださらないこと」

すべて画像処理で写真に特殊効果をかけるだけだが、まるで、端で聞いていると、整形手術の場面のような感じだ。

わたしは、彼女の鼻を切り取り、シャープにさせると、間違っって別の位置につけてしまった。

「唇も細くね」「はいはい」「目もぱっちり、二重でね」「はいはい」

要望が多すぎるから、目や口をあっへ持っていったり、こっちへ持っていったり、気がつけばすっかり福笑い。もう誰か判らない別人にしまって、なんのための写真なのか。

その次に入ってきたのは、同じ悩みを抱える花嫁。その方は二目どころか、一目でも恐ろしい。

「あのう、写真を撮りたいんですが」

「ええ？ どうしても撮るんですか？ どうしても残さなきゃいけないんですか」

わたしは、そこまでしても花嫁衣裳を着た写真を残したい女性心理は判るとしても、なんとかしてやりたいところだ。

「どうでしょうか。わたくしどもでは、顔も用意しております。古いところでは聖子ちゃん、アムロにノリカ、ナオミといろいろ美人を揃えておりますが：：」

第490話 誕生日

六月七日はわたしの誕生日だった。五十という節目に、人生の半分を感ずるのは、それほど日本人の寿命が延びたことにある。すでに折り返し地点は過ぎて、あとは、終点までの道のりをのんびりと歩むだけなのだが、何か焦りがあるのはなんだろう。まだ、何もしていないような気がする。何かをしなくてはと焦るのだが、五十を過ぎて、この先、何ができるか。もう、新しいことを考えるのはやめたほうがいい。

ある作家で、経営学に明るい人の講演を聞きにいったときに、会場を見渡した彼は、

「いやあ、みなさん、見事に頭が枯れてきていて、これからわたしのお話しすることは、無意味な方ばかりですな。失礼ですが、五十過ぎて、新事業の話をして無駄なんです。もう、皆さん方は終わった人ばかりで：：」と、辛口だが、真理はあった。中にはマクドナルドの創立者のように、五十半ばでハンバーガーの会社を立ち上げて、成功した特異な例もある。

わたしの場合もぼやぼやしていれば、そのうち、年金を貰う年になり、孫がやたら増え、昔ならそのままご隠居さんだ。いまさら何ができる。

この年になって、子供のように誕生日がどうのということはないが、ひとりだけ、気にするナルシストがわたしだった。朝から家族に宣告しておく。

「いいな、今日は、お父さんの誕生日だからな。忘れるんでないよ」

妻には好きなブランドを強要する。娘には、「くれぐれも、ネクタイなどというものを買ってくるようなことをしなくてもいいから」と、暗に要求しておいた。今日は、わたしが主役なのだ。自分自身におめでとうと云っている、おめでたいお父さんなのだ。

その日だけは自分のカレンダーが祝日であり、特別な日であった。いつものように会社にでかける。先週より、みんなに云いふらして歩いているから、何人かは、課長、おめでとうございますと、中には何か小さいケーキでもくれる人がいるかもしれないなどと、淡い期待感をもって出勤だ。

たまたま、満員電車で、うつろにそのことを考えていると、いきなり、わたしの手が女に掴まれて、

「キャー、痴漢」と、触ってもいないのに、上に挙げられた。すると、周りにいた男たちが、わたしを抑えこむような恰好で、駅員に渡した。

「そんな、痴漢なんかしていない。間違いだ。今日は、わたしの誕生日なんだ。そんなことをするはずがない」と、何度も云っていたが、いつかの新聞でそのために会社を首になり、裁判で二年も闘ったサラリーマンの話を思い出して、三十六計逃げるに如かずと、ふりはらって、逃げ出した。駅から裏通りに逃げる途中、チンピラにぶつかってしまった。

「おう、てめえ、どこの組のものだ。おれを狙いやがって」と、チンピラは短刀を取り出して切りつけてきた。

「ご、ごめんなさい。き、今日はわたしの誕生日で、何も悪気がないんで、別のことを考えて痴漢にされたり：：」

わたしは、しどろもどろ。チンピラはますます逆上して、

「何をぐちゃぐちゃとぬかしてやがんでえ」

今度は殴りつけられた。わたしは、ぶっとんで、ゴミ箱にしたたか頭を打った。そこに生ゴミが山積みにしてあり、わたしは、頭から生ゴミをかぶることとなった。それが、異常な悪臭を発するので、チンピラは臭くてたまらず、

「あっちへ行け」と、鼻を抑えて短刀を振り回した。

わたしは、また命からがら逃げ出した。すると、おばあさんが自転車で買物途中、出会い頭にぶつかって、倒れたはずみに、買物のガラス器が割れて、おばあさんは倒れたまま、動かない。わたしは、どぶ様の側溝に下半身がずっぷりと浸かった。昨日、おろしたばかりの背広上下が見るも無残に汚れ、裂けていた。通行人が悲鳴を上げて、通報したので、救急車とパトカーがやってきた。これまた、面倒なことになると、わたしは逃げた。いままで、手に持っていた鞆を思い出した。大事な書類に財布、通帳に印鑑が入っている。どこで落としたのか。大変なことになった。

わたしは、泣きながら、どろどろになって逃げている。

「わたしが、一体何をしたというんだ。ただ、今日は、わたしの誕生日というだけじゃないのか。本当は、おめでたい日なんだ、それをそれを：：」

通行人が、頭に魚の骨を上げ、野菜屑だらけで、泥まみれの臭い匂いの男が走ってくるから、みんなキャーキャーと叫びながら、道を開けた。

と、そこへトラックがやってきて、急ブレーキを踏んだが間に合わなかった。わたしは、跳ね飛ばされて、道路の真中にぐっしりと落ちた。割れた頭から血が流れてきた。野次馬が倒れているわたしを取り囲んで、覗きこんでいる。

「なんだって云うんだ。今日は、わたしの誕生日なだけじゃないか」

独り言のようにわたしは呟いた。

群集が、口々に云っている声だけが遠くなる意識の中で聞えていた。

「この人、もう五十過ぎって感じじゃない。それが、いい年して、警察に追われて事故に遭ったようよ。汚らしい身なりで、何をしている人なんだか」

「こんな人にも奥さんや子供がいるのかしら。いやあね」

「違う、今日は：：、た、誕生：日：な、ん、だ」

第491話 地味婚

遥商事の屋上にぞろぞろと正装した社員や見慣れない顔ぶれが上がっていった。普段は、誰も上がらないビルの屋上だが、この日は入社して初めて屋上に上がる人もいて、みんなこれから何が始まるのかとそわそわしていた。

夕方から夜にかけて、暗くなるのでスポットライトなども用意されていた。会議室の椅子テーブルが運び込まれ、それにクロスをかぶせ、ステージにはマイクと高砂の席までしつらえてある。そして、すでに社員食堂のおばさんたちが頑張って作った日本料理が並んでいる。

この夜、遥商事の社員の北村と建部麗子の社内結婚が、同僚の発起人たちの手で演出、準備されていた。会費制で、お一人様二千元と激安だった。いまどき、結婚式が二千元でできるとは。

それというのでも、遥商事は倒産寸前、社員の給与も遅れていた。しかも賞与は去年から出していない。役員たちは報酬返上で会社の再建に取り組んでいるさなかに、二人とも、結婚資金がないから、入籍だけで式は挙げないつもりだった。それは可哀想だと有志が集まった。

「こんな、不況であえいでいるときだが、なんとかして、みんなでお祝いしてやろうじゃないか」

「そうだ、何も、ホテルや会館で豪華にやる必要はないんだ。このビルの屋上でやろう」

ということになった。

最近では芸能人でも地味婚が増えた。何もやらない人も増えた。そんな、莫大な費用をかけて、みんなにお披露目しても、三ヶ月で別れる夫婦もいるし、セレモニーほど無駄なものはない。見栄を張る必要はない。ないときはないなりにすればいい。

すべて社員たちの手作りの披露宴だ。バンドまで入っている。

さあ、いよいよ、花嫁花婿の入場だ。ウエディングドレスはレースのカーテンのお古を洋裁のできる女子社員が、即席に作ってしまった。新郎はジーンズだ。何か合わない。花嫁の指には百

円のがしゃぼんでゲットした指輪が光輝いていた。一斉に拍手が沸き起こる。

仲人を立てない結婚式がいまは九割だというから、若い人たちは、仲人などという面倒なものを嫌うのだろう。それでも、金澤社長夫妻がかって出た。北村も麗子も晩婚だが、麗子の方が年上だ。いま流行りの年上女房だが、それにしてもだいぶ老けている。

お互いに選びに選びすぎて、婚期を逃してしまった。外にはどうしても縁のある人がいないから、身近なところで妥協した。まあ、女なら誰でもいいさ、男だったらもう贅沢云わないわ、という合致点で、目と目が合った。社内にとり残された唯一の独身だった。

金澤社長から二人の紹介があった。

「北村くんは、これほどいい男なのに、いままで良縁がなかったことが不思議です。まあ、建部さんは判るとしても：：」と、花嫁にぎろりと睨まれた。

来賓祝辞は債権者の銀行、取引先の社長たち。

「この披露宴で十分判りました。もう、債権取り立ては無理だということを。となれば、もはや、破産申し立てよりないではありませんか」

と、来賓も祝辞でそこまで云っていいものか。総務部長の前田はただただ頭を下げていた。この会社も明日はないかもしれない。それほど切迫した状況なのだ。

乾杯のご発声は闇金融の社長。

「まあ、このめでたい席に免じて、支払いの催促はしないようにしますがな、はははは」と、これもまた豪快に笑う。

「おい、あんなヤバイところからうちも借りているのか」と、心配になって、工藤と笹田が話していた。金澤社長はたらりと汗を流す。

乾杯は煮酒に使う一番安い合成酒。みんな不味い顔をしていた。

「これじゃ、味醂の方がまだましだ」

料理はもっと酷い。尾頭付きがメインなのだが、これがメザシ。きれいに盛り付けされてはいるが、納豆と冷奴、たくあん、枝豆、えびは、桜えびにその百倍くらいのころもをどうして付けたのと聞きたいくらいの天麩羅。

「何か、今朝方、家で食ってきたような料理というか、ご飯だな」と、駒田課長がぼやく。

「家でももっとましなもの食べていますよ」と、本間係長も嘆く。

ウエディングケーキの入刀だが、どこにケーキがあるのか判らない。みんな立ちあがって見ていた。近づいて見ると、小型のショートケーキが一個だけ。それを五十人で切り分けるのが至難の技だ。かすかにカステラとおぼしきかけらがみんなに配られた。薬でもひょいと飲むように口に入れたら、確かにケーキの味がする。

同僚のスピーチだ。

「おい、北村、この前貸した千円、いつ返してくれるんだよ」と、スピーチまでが世知辛い。みんな生活に窮していた。

暗く、しんみりとした披露宴だったが、来賓の社長たちはご満悦だった。

「いやあ、今日は、大変面白い披露宴だった。わしなんか、毎日のようにあちこちに招待されて出ておるがね、どこも型どおりで退屈しておった。やれキャンドルサービスだ、花束贈呈だと。それは、式を挙げる二人は初めてかもしれないが、偉い人ほど呼ばれるんでな、同じことを何十

回と見せられるとまたかと飽き飽きするよ。それに比べたら、今日の貧乏たらしい披露宴は最高じゃ。わしは、メザシがこんなにも美味しいものとは知らなんだ。やはり、メザシは屋上に限る」

第492話 穴恐ろし

大東京。人も車もビルもひしめきあっている異常なマンモス都市だ。地方都市から見ると、お祭りがあったのかと思う人ごみが平日なのだ。田舎の町なら、日中は町のメインストリートでも、人影もないくらい静かだ。たまに、車が通りすぎるくらいだ。それが、歩けないほどの人が普段でも歩いているのが、信じられない。

その東京の永田町の道路から異変が起こった。アスファルトの道路が陥没を始めた。よくあることで、道路に穴が空いていた。覗くと、結構深い。下はどうやら空洞のようだ。さらさら砂時計のように穴から吸い込まれて、下へ下へと流れているようだ。

よくあるというのは、地盤沈下から陥没することだ。地下鉄工事の埋め忘れ、ビルの工事で、地下水を汲みすぎて、沈下してゆく。都会の地面の下にはどれほどの空洞があるかしのれない。地下街や設備のため、下水路、地下ケーブルと、いろいろなものも、地中を走っている。ライフラインのすべては土の下だ。工事、工事で、道路の下が掘られている。

だが、そればかりではない何か、永田町の下で起こりつつあった。初め、その穴を発見したのは、早朝の新聞運搬のトラックであった。さっそく、警察署に連絡が入った。交通機動隊が現場に駆けつけると、道路を封鎖して、迂回路を定めた。道路工事の業者たちが呼ばれた。

「変だぞ、こんなに深い穴も珍しい。昔の防空壕の跡か、地震で亀裂が入ったのか」業者たちは、深さを計測するに困惑していた。初めの直径三十センチの穴は午前中のうちに二メートルに広がった。周りの土がさらさらと岩石ごと吸い込まれるように崩れてゆく。穴は垂直に下へ下へと伸びている。井戸のような恰好をしていた。

「とにかく、危ないから、周りが崩れないようにセメントミルクを注入して固める。そして、周辺を補強しよう。穴はともかくも土砂を運んで埋めよう」

交通を閉鎖した道路に続々とダンプカーやミキサ車が到着したのはすでに夕方になっていた。報道陣はいつものことと思っていたが、二十時間もたたないのに、穴の直径が十メートル以上になったとき、これは大変だとようやく騒ぎ出した。テレビで中継も始めたら、それで一目見ようと、野次馬が押しかけた。警官隊が、群集を追い返す。

「危ないですから、下がってください」

と、みるみるうちに、穴は広がってきた。警備の警官や工事関係者が深い穴へと数人がまとめて落ちた。叫び声だけが、ずっと聞えていたが、やがて聞えなくなった。どれほどの深さがあるのかと、音波で調べたりしていたが、数十キロ以上の深さがあるということだ。穴はじわじわと周辺から崩れていって、補強が間に合わない。翌朝になると、直径三キロという大変なことになった。政府は異常事態宣言を出し、自衛隊を派遣した。すでに、国会議事堂も穴に落ちこんでい

たし、政府の主要な建物はことごとく穴に呑みこまれていった。

周辺の住民やサラリーマン、国家公務員たちは、避難命令が出されて、穴からできるだけ遠ざかるように空からヘリコプターで警告が発せられた。

地下鉄も穴の壁にぽっかりと口を開いて、半分車両が飛び出しているのも見えた。地下室も半壊して、ボイラー室にいた人が助けを求めてぶら下がっていたり、ビルの地下の部屋ががらがらと崩れて、そこから零れるように人が穴の底へと落下してゆくのが、玩具のように見えていた。

車もバスもみんな穴へと落ちて行く。都心のど真ん中に巨大な穴がぽっかりと空いていた。

三日三晩、穴は成長して行って、直径十キロという、火山のクレーターのような形で、広がっていったが、ようやくその活動を停止した。その間、どれほどのビルや車や人が穴に落ちていったことか。とくに、中小企業から零細企業、低所得者から落ちていった。それから、斜陽産業の工場が落ちて、それを支援していた銀行が落ちた。製造業だけでなく、デパート、スーパーもどんどん落ちていった。

穴の活動が不気味に停止したとはいえ、安心してられないので、東京から地方へと脱出する避難民で、一般国道も高速道路も渋滞していた。国の機能は完全に麻痺していた。多くのホストコンピュータが終結している都心が完全にやられたから、地方にもその影響は出ていた。情報伝達は中断していた。まるで、巨大な隕石がぶつかったか、水爆でも地下で爆発させたような破壊をして、一応は停止状態にあった。

ひと月、ふた月と科学班は世界から集まって、この異常な陥没を見守っていたが、一向に動きを見せない。

「日本に穴を空けたのは誰だ」

ようやく、民衆たちが重い腰を上げて騒ぎ出した。

「政府はなんとかしろ」「われわれの生活、財産、生命を脅かす穴を埋めろ」

デモ隊まで出て、ようやく危機感を持った民衆が抗議行動を起こした。民衆というのは、直截的に自分に危険が及ぶまで、すべて無関心でいられた。それが、じわじわと恐怖が押し寄せてくることで、立ちあがったのだが、いまさらそれは遅い。政府関係者は連日の穴をどうするかという協議を続けていた。国会も省庁もすでに穴の中だから、学校の教室を借りたりして、閣議が行われていた。

「この際、あの穴を活用しようではありませんか。海を埋めたり、谷を埋めたりすることはすべてわが国では限界であります。そこへ、この穴です。こんなうまい地殻変動を利用しない手はありません」

日本の大きな問題を一挙に解決してくれる恰好の穴が空いている。政府では、その穴に核の廃棄物でも、産業廃棄物でも、ゴミというゴミを投棄することに取り決めた。ゴミも輸出する金のかかる時代に、こんなおいしい話はない。

全国からダンプカーが都心へと向って集合してきた。地方のゴミもみんな都心へと運ばれ、巨大な穴へと捨てられた。いくら捨てても、穴が埋まるには何千年もかかるだろう。

関係者たちはほくそえんでいた。

「これで、当分、わが国にはゴミ問題はなくなった。安心していま以上のゴミの出る頃にまた戻

してもいい」

そう、飲んでいるのも束の間、地中奥深くから、何かが地鳴りのように響いてきた。地震のように震えがきていた。

「な、なんなのだ。何の音だあれは」

「は、は、は、はっ、はっ」と、聞えてくる。だんだんと、高く、早くなってくる。「ふぁっくしょーん」

ついに、穴が爆発した。いままで投棄したゴミというゴミが穴から日本全国に飛び散った。日本はくしゃみをしたのだった。

第493話 父よあなたは弱かった

子供は母親に付く。どんなに父親が努力しても母親にはなれないのだ。

北村泰然は十五年前に離婚した。男の子が三人、いまはみんな社会人になったが、母親が貧困に耐えかねて出ていったときは、下はまだ幼稚園だった。

北村は、博打をするわけでもない、大酒飲みでもない、浮気性でもない、浪費癖もない。家庭ではいつもいい父親でいられた。ただ、ひとつだけ、難点があった。商才がまるでないということだ。それが、すべての家庭の不和の元になり、家族の運命を狂わせた。北村は何をやってもうまくゆかない。商売は何回も変えた。初めは、果物屋をやっていた。美人の奥さんとみると、負けてばかりで、原価販売を続けて店を潰した。

二度目は、レストランを経営した。何を食べても、とても食べられたしろものではなかった。奥さんに何度も注意された。

「あなた、このルーは味見したの？」

北村は真っ青になって云った。

「そんな恐ろしいことができるか、味見だなんて」

なんでも一通りはこなす器用さはあったが、それは上辺だけのことで、中身がない。奥が深くないから、シロウト受けはするがすぐに飽きられる。続かない。事業に失敗して、借金だけが残る。それでも懲りずに、また別の商売に手を出す。その繰り返しをやってきていた。さっさと見切りをつけるのはいいが、じっくりと腰を据えて仕事をするのがない。いつもパタパタとやっつけ仕事で、やりっぱなし。いつも尻すぼみ。

元を取るところか、借金に借金を重ねて、なおも、その借金を返すために、また別の金儲けを考えようとする愚かな亭主であった。当然、生活は貧窮し、子供におやつも買ってやれない。そんな北村に奥さんは嫌気がさした。

「こんな人にくっついていれば、一生うだつがあがらないわ」

それで、貧乏が原因で夫婦喧嘩の末に奥さんは家を出ていった。よくある話で、男に甲斐性がないと女房は苦勞する。旦那の借金の穴埋めに、せっせと内職して、若さも美貌もすりへらし、

一生、地獄のような生活だ。

「よし、今度は絶対に成功するよ。おまえにも楽しませてやるからよ」

と、また北村は夢みtainな話をする。洋風弁当でチェーン展開するという。

「もういいわ、もう沢山、あなたの寝言など聞いていられないわ。どうぞ、ご勝手になんなりとやってあそばせ。わたしは、実家に帰らせていただきます。もう、貧乏は沢山」

そう、叫んで、奥さんは子供も置いて出ていった。そのあと、さしづめテレビなら、赤ん坊をおんぶして、両手に洩垂らしたガキを従い、

「おまえ、帰ってきてくれえ」と、訴える番組が昔あったが、そこまでは深刻ではなかった。北村はこの大事件のあとに、ぼんやりと考えていた。

「困ったな、広い部屋に布団一枚では恰好がつかないな」

なんとも、悠長なところがあって、端から見ていて苛々してくる。何か世俗離れした芸術家タイプなのだ。

あれから十五年が経っていた。いまは、北村は商売は古本屋をしていた。ころころ変えて、もう面倒くさい年になっていた。それでも一人分だけ、食うにやっとだ。息子たちは、関東を制覇するように東京、横浜、千葉に住んでいる。東北の田舎町で、のんびりと暮らしている北村のもとには、正月も帰らない。たまに、生きていますかどうかの確認電話が息子たちから来るぐらいだ。

実は、息子たちは、別れた母親の許に帰っていた。それは、息子たちは誰ひとりとして口にできなかった。

いつか、北村が上京して、息子のマンションに行ってみると、知らない若い女がいた。

「友達じゃないんだ。もう、実は、入籍している」と、啞然とさせられた。息子が結婚していたことも親父は知らされない。母親にはちゃんと連絡して、相談までしているのだ。

部屋の隅にダンボール箱があり、リンゴが顔を出していた。宅配便の伝票には、母親の名前があった。息子たちはどこかで見えない母親と繋がっているのであり、父親とはどこかで切れていた。

「そうか、そうだったのか」

音信不通の息子たちのパソコンはいつも母親のパソコンと繋げて、テレビ電話ができるようになっていたし、ケイタイの番号もメールアドレスも知らない父親に対して、母親は常にコミュニケーションがとれるようになっていた。いつも、家族から外されているのは父親だった。

北村は、衝撃を受けて、とぼとぼと、田舎へと戻ってきた。橋の上に佇んで、川面をじっと見ていると、死んだ魚が流れてきていた。それは、役目を終えた雄の川魚だった。土手の草にはかまきりが巣を作り、雌が雄を食う。すべてが、子孫繁栄のためにだけある。この世界は、雌が優遇され、雄は働いて働いて、孤独に死ぬだけのものなのだ。

「父とは、何なのだろう」

北村は初めてそんなことを考えた。

ひとり、居酒屋に入ると、すでに酔っ払った親父がくだをまいていた。

「なんだ、なんだ、しけた顔しやがってよ。おい、ここへ来て一緒に飲もう。てやんでえ、何が子供だ。自分で大きくなった顔しやがってよ」

どこにでも同じ父親はいる。北村は納得した。父親は、酒かっくらって、ぐだぐだしていればそれでいいのだ。それでいいのだ。

第494話 恐妻家

恐妻家と読書家。この何ら関係のなさそうなタイプが意外とイコールで結ばれることが多い。古本屋をしているわたしの知る限りでは、あの人がと思う驚くべき人が実は恐妻家であった。ここには、仮名で書くこととする。本人が、これを読むと、判ってしまうので、事実も歪曲して書くこととする。

笹田隆志さんは、普段は真面目な教育者だった。高校では古典を教え、指導課の先生も兼務して、部活では剣道部の顧問をするという、学校でも恐れられている存在だ。趣味は読書であった。寸暇を惜しんで本ばかり読んでいる。本が傍になければ、落ちつかず、やがて、活字禁断症状が出てきて、手が震えてくる。一日たりとも、本から離れていられない。震える手で、本を開くと、不思議と震えが止まった。

五十を過ぎたころから、いろいろと息子たちに仕送りや教育費がかかるので、読みたい新刊本も小遣いでは買えなくなってきていた。そこで、わたしの古本屋に通うこととなる。

「おやじ、この前の岩波の古典文学大系の残金を持ってきたぞ」

店に笹田さんがやってきた。三回で支払うと、百巻以上もある全集を買った。買ったはいいが、それがまだ店に取り置き。

「お代はいつでもいいんですが、この本、なんとかなりませんか。いつでも配達いたしますから、持って行ってくれませんか」

「そ、それは、少しだけ待ってくれ。いまに、きっと連絡するから」

とは、云ったが、いままでもそう云って預けっぱなし。一向に持ってゆかない。すでに本代は貰っているものばかりがごろごろと店の棚に売約済みとなって並べて邪魔なこと。国書総目録全巻、折口信夫全集、契沖全集などが、棚塞ぎとなっている。倉庫がないので、仕方なく店に置いているのだ。

「判った、判った。保管料を払うから」と、笹田さんは云うが、そんな問題ではない。人の店を書庫代わりに使われるのも大変だが、仮に万引きでもされたら、揃っているものが揃わなくなる。わたしはそれを心配していた。読みもしないものをどうして、笹田さんは買うのか。読むために買ったのではないのか。それを二年も三年も店に預けっぱなしだ。実際のところ邪魔だった。他の客が欲しがって、逃した客が、

「目障りだな。奪われた恋人の写真をいつまでも見せつけられているようで」と、悔しがるのだ。余計になんとかしたくなる。それで、何度か電話もしていた。ようやく笹田さんは引き取ることを了解した。

「絶対に、今週中に電話するから。今週よりないのだ、今週よりな。と、何やら意味ありげなことを云っていた。

やがて、笹田さんから、珍しく電話が店にきた。

「今夜、自宅に持ってきてくれ、七時半だ。いいね。時間だけはきちんと守ってもらいたい。今夜は家内が旅行に行っていないんだ。今夜しかないんだ。

ははん、とわたしは理解した。奥様は滅多に家を空けない人だ。何か法事か慶事があって、一泊で家を空けることとなった。そのときに、膨大な保管していた本を納品しろというのだ。

わたしは本人の気が変らないうちにと、ワゴン車に本を満載しておいた。これで店もすっきりする。全集でも巻数の多いものばかりで、確かに頭にきていた。

その夜、店を閉めてから、わたしは、郊外の静かな住宅街にある、庭の広い先生の邸宅へと向った。玄関のチャイムを押したら、インターホンから女の人の声がした。一瞬、わたしはヤバイと思ったが、案外、お手伝いさんということもあるかもしれない。変更があったら、必ず電話を入れるからと、先生からは念を押しての緻密な本の搬入計画の指示があったから、わたしは命じられるままにただ運び入れる手はずになっていた。

玄関のドアを開ける。そこに、不審な様子のお様が立っておいでだった。

「はい、林語堂古本屋と申します」

すると、奥様はいきなり鬼のような顔になり、

「ナニ？ 古本屋だって！」と、急に顔色まで変えた。奥様にとって、古本屋も共犯者、憎むべき存在なのだ。わたしは、怖々と本を玄関に運び入れた。

「はい、この本の代金はもう貰っておりますから、はい。わたしは、ただ、配達を頼まれただけでして、はい」

わたしも聞きしに勝る奥様の仁王立ちを前に、震えがきていた。とにかく、どんどん運んでしまおう。こんな役目は早めに切り上げるに限る。

「まだあるのか」と、奥様の声が震えている。

「はい、車一台分です」玄関は本でいっぱいになった。

「あんちくしょう。こんなにまた本を買い込んできやがって」

その言葉は、とても上品なお様の口から漏れた言葉とは思えなかった。本に対する永年の憎しみ、家庭の平和と夫婦の愛を奪い続けた憎き本と、読書家たる亭主、そして、その僕の古本屋に怨念の炎として吐き続けられた。

「これで、本当に終わりですから、はい。先生によろしくお伝えください」

わたしは逃げるように笹田宅から帰ってきた。

翌々日、わたしは、街中で、笹田さんとばったり逢った。とても痛々しくて声をかけられなかった。目には青たん、顔には引っかけ傷、手にも包帯を巻いている笹田さんが、放心状態で街を歩いていた。

第495話 ころりんしゃん

大工町米町寺町仏町曲がったところでわしは生まれた

寺山修司が住んでいた大工町鍛冶町から二本目の通りが柳町だ。わたしは、その柳町で生まれ育った。寺町から角を曲がって五軒目だ。寺町の近くには太宰治が下宿した豊田家があった。太宰の小説にはすぐ家の裏にある常光寺の井戸の話が出てくるが、その井戸も枯れてはいたが、わたしの遊び場であった。

柳町は海側角から内海旅館、安田の洋服屋、竹内の看板屋、元山のハンコ屋、そして、うちの菓子屋があり、大坂の家具屋、蛸名の下駄屋、柿貞の農薬・ペンキ屋、館の歯医者、そして、その隣にころりんしゃんがあった。

戦後、空襲で全市が焼けてからは、柳町は防火帯として百メートル道路にしてしまった。青森の市を東西で分ける形で、中央の柳町に広い道路と空き地を通したのだ。その両側には商店街、闇市の跡で、不法建築の商店がずらりと並び、人通りもよく賑やかであった。道路の脇には川が流れ、橋がいくつもかけられ、川端には柳が揺れていた。風情のある町だった。その町にふさわしく、いつも琴の音色が聞えていた。お婆さん二人が潇洒な平屋に暮らしていて、商店街のそこだけは、家屋が引っ込んで建てられていた。家の前は庭であり、きれいに花や野菜が植えられて手入れされていた。家の玄関にはいつもとうがらしが吊るしてあった。琴の音色はそこから聞えてくる。わたしたち町内のガキは、その家をころりんしゃんの家と呼んでいた。

子供たちはお菓子のくれる家に凶々しくもよく集まる。親たちがふみさんと呼んでいる婆さんのところに、わたしもお菓子を貰いによく行った。ふみ婆さんは、その当時はまだ五十代ではあったのだろうが、昔の五十過ぎは婆さんではあった。きちんといつも着物を着ていて、鬘も結っていた。顔はきつい感じがしたが、やはり美人だったと思わせる面立ちで、小柄な人だった。

和服姿の若いお弟子さんたちも習いに通っていた。夏なら、開け放した窓から、稽古の様子が見えていた。普段は、にこやかに近所の子供らの相手をしているふみ婆さんも、そのときは別人に見えた。稽古の最中に、暴れたり、騒いだりしても怒られた。

わたしの亡き祖父も、いつもお茶を飲みに寄っていたので、亡き祖母が嫉妬して、勘ぐっていたようだ、と、後になって聞いた話もある。なかなか魅力的な人なのだが、家族がいないところを見ると、独身で通されたのか。

家業が洋菓子屋だったが、ふみ婆さんはうちのシュークリームが好きであった。わたしが、家業を手伝うような年になり、店にふみ婆さんが、よくそのシュークリームを買いにきてくれた。

「あんさま、いましたか」と、いつも、わたしをご指名だった。年とってきて、歩くのも困難になってきてからは、電話注文で、お向かいの路地を入った家までよくシュークリームを配達しにいった。その頃は、わたしは、経理をしていたが、

「あんさまに持ってきてもらえませんか」と、わたしでなければいけなかった。小さいときから可愛がってくれたから、自分の孫のように思っていたのか。

青森高校の箏曲部で教えたりしていたが、晩年は稽古もせず、外に出ることもできなくなって

いた。

ころりんちゃんと呼ばれた家も、いつかタクシー会社に変わり、ふみ婆さんは裏通りへと引っ越して、粗末な家に蟄居していた。琴の音色が聞えなくなると同時に、わたしも小学から中学へと上がり、部活や、趣味などで忙しく、ふみ婆さんのことはすっかりと忘れてしまっていた。

社会に出て、親父の店を手伝うようになって、ふたたびふみ婆さんに気に入られた。わたしは、自分で云うのもおかしいが、不思議と婆さんたちに人気があった。若い女の子にはもてないので、いまだに、あちこちから電話や手紙がくるのは、かなりの年輩の女性が多いので、女房は笑う。

ふみ婆さんはいつもにこにこ笑って、よくお喋りをした。あの明るさはどこからくるのか。音楽に一生を捧げた。それだけで人生を堪能しているかのように、不幸の影は微塵も感じられなかった。けども、わたしに配達させて、顔を出すと、お茶を入れながら、いつも長話をするのが楽しいようだった。行けば帰れないくらい、話好きなところに淋しさが隠れていた。

ある暑い夏のとき、ふみ婆さんからご指名だ。

一あんさま、またシュークリームを迷惑でも配達してくれないか。

一ばあちゃん。こんな暑いときは、シュークリームは作らないんだ。夏はお休みだ。危ないからね。雑菌が繁殖しやすく、食中毒になると大変だから。

そう説明しても、ふみ婆さんは納得しない。

一どうしても食べたいんだ。なんとかこっそりと作ってくれろ。

と、云うが、無理なものは無理。

一秋になって涼しくなったら、一番に作って持って行ってあげっからよ。

わたしがそう宥めすかせて、そのことも忘れる頃に、ふみ婆さんは亡くなった。

わたしは、ふみ婆さんとの約束を思い出していた。早速、工場に特製のシュークリームを作らせて、ふみ婆さんの寝ている枕許へと持っていった。町内の人々が次々と弔問に訪れるほかは、身内も少ないようで、亡骸の淋しく寝ている家には二人くらいが手伝いでいるだけであった。

「あれほど、食べたい、食べたいと云っていたのになあ」

わたしは、残念で残念で仕方がなかった。

わたしの中から、ころりんちゃんの音色が本当に消えてしまった。

それから、二十年近く経っていた。わたしはとうに家業を潰して、別の仕事をしていたが、あるところで、古い二枚組のLPレコードを入手した。

「津軽の箏曲 郁田流 新発見、箏曲誕生の古雅なしらべ、日本の箏曲の原点がここにある」というタイトルがついてあるレコードの裏面を何気なく見ると、奏者は高橋富美とあり、ふみ婆さんの写真が載っていた。そのレコードは昭和五十年の芸術祭優秀賞を受賞していた。

梅雨に入った。毎日が鬱陶しい不快指数の高い日が続く。気分も暗くじめじめしてくる。人間の気持ちは天候に左右される部分もあるのだ。

桜田高士は、塾の先生をしていた。日昼は予備校の講師をして、夜は塾と掛け持ちで忙しい。まだ三十代だが、高士はどこか落ちついて見える。若いときから学究肌で、勉強が好きだったから、世俗のことについては疎いところがあった。

あまり、テレビは見ないほうだが、この朝は国際問題の速報が入っていないかとテレビをつけた。独身だから、アパートの部屋はどうも色気がない。一人分のコーヒーをいれて、トーストにハムエッグと、それでもそれぐらいは用意しないと、朝の感じがしない。新聞に目を通しながら、ちらちらとテレビを見、トーストを齧る。カリカリに焼いたものでなければいけなかった。いろいろと拘りがうるさいから、人生の制約を受けていた。

一ええ、関東地方には厚い雨雲と、停滞前線が張り出しておりますので、今日は、東京では西の風、雨ときどき殺人、ところにより血の雨が降るでしょう。

高士は、何か聞き間違えをしたかなと、リモコンでテレビのボリュームを上げながら、新聞を閉じた。

一静岡でも西の風、一日雨でしょう。海岸地方には殺人注意報が出ていますので、怪しい人影には十分注意して、防護服など忘れないように出勤してください。

「いま、なんて云った？」

高士はどうも、天気予報の気象予報士が妙なことを口走ったことに、耳を澄ませた。

「おかしいな、確かに殺人と聞いた」

それが聞き間違いでない証拠に、今度はテレビの画面の関東地方の雨マークのところに並んで、髑髏とナイフのイラストがついていた。高士は笑った。冗談も天気予報まできたか。真面目な人なら信じてしまうだろう。それに、NHKだけ。

何かおかしい。それで、朝日新聞の天気欄を見たら、同じイラストが書かれていた。そして、今日の天気概況のところに、雨ときどき殺人とはっきりと明記している。

まさか。狂っている。いや、おれの頭がおかしくなったか。高士は思った。それは、最近はやたらと殺人が増えた。不況、リストラ、倒産、減給、サービス残業、過労、うつ病、自殺、失業、就職難、強盗、詐欺、ピッキング、放火……。世の中が不景気で人間にしわ寄せがくるから、みんな苛々して、自暴自棄になり、追いつめられて犯罪に走るものも増えた。凶悪犯罪の件数もかなり増えていた。おちおち夜道も歩いていられない。屈強の男であっても安心はできない。いつ、暗闇からドスツとくるかしのれない。通り魔も、流しの殺人も増えた。むしゃくしゃするからとただ、それだけの理由で簡単に通りすがりの人を手当たり次第に刺す。

世の中が狂うというより、すべての人間がどこか少しづつおかしくなっている。

「それにしても、殺人がそんなに空から降ってくるというのかい」

高士は、まるっきりバカにして、いつもの通り外に出た。今日も一日雨のようで、傘はいつも手放せない。通りに出ると、通勤の人々がおかしな恰好をしていた。頭にヘルメット、背中と胸には座布団を縛り付けていた。

「ば、ばかな、あんなくだらないことを信じこんで、世の中はみんなマンガになってしまっ

すると、高士の横のほうから、ピューと音がしたと思うと、ナイフが高士の目の前をすりぬけて、すぐ横の板塀に突き刺さった。高士さすがに悪戯にしては本物なので、青くなった。隣りを歩いているサラリーマンも無防備だったが、一瞬顔色を変えたが、すぐに大笑いして、相手にしなかった。と、今度は矢がいっぱい飛んできた。高士は危険を感じて身を伏せたが、サラリーマンは首と腕、脇腹にまともに三本の矢を受けて、血が噴出していた。そして、苦しそうにその場に倒れこんだ。人々は、走って、駅までなだれこんだ。高士も血相を変えて一緒に走った。

「せ、西部劇じゃないんだから。一体、これはどうなっているんだ」

駅前広場にも、いくつかの死体が転がっていた。みんな、背中や腹にナイフが刺さっていた。どうしてしまったんだ。ともかく、電車に乗って、どこか安全なところに避難しなくてはと、高士は競い合って到着した電車に乗りこんだ。乗客も興奮してパニックになっていた。みんな、プロテクターに防弾チョッキまで付けているものもいて、がたがた震えていた。

電車の中でも突然、爆発音が聞えた。隣の車両から白い煙が立ち込めて、悲鳴が聞えた。自爆テロのようだった。みんな、一斉に別の車両に走るから、ただでも満員ラッシュの車内は、押す人々で圧死するものが続出した。

予備校のある駅についたが、みんな一様に駆けている。高士も駆けた。こうなれば、少しでも早く、勤め先のビルに入るほうが安全のようだった。ピュン、ピュンと、どこからともなく銃弾が空を切る音がする。通行人が次々に倒れてゆく。歩道が夥しい血で真っ赤に染まっていった。街はすでに戦場さながらだった。どこかのビルの屋上か、オフィスビルの窓から、下を歩く人々を狙い撃ちしている無差別殺人者がいる。みんな狂っていた。人が人を殺すのが、日常的になっていた。殺人事件なんか、もうニュースにもならない。それは、天気と同じなのだ。

やがて、雨が上がった。天気予報は外れたようだった。青空が雲の間から見えると、日が差してきた。人々は、ほっとしたように、傘をすぼめ、ヘルメットを取った。また平和ないつもの街が訪れていた。濡れた路面が眩しく反射していた。それつきり、ナイフも矢も凶弾も飛んでくることはなかった。

北村家の人々 その一

第497話 忘却の皮

ええ、人間には残るものと残らないものがございます。忘却とは忘れ去ること、忘れ去ることなくして忘却はないと申します。年とってきますと、近年のことをすっかりと忘れてしまうくせに、昔のことはしっかりと覚えている、ということがございます。

「おい、この前貸した金、返してくれよ」と、半分恍惚のじいさんが隣りの八つつあんに思い出したように云います。八つつあんは、先週借りた千円のことを、まだ覚えているじいさんが、惚けていないことに当てが外れて、渋々財布を出して、はい、先週借りた千円と手渡すと、じいさんはきょとんとして、

「先週なんか、貸してないよ。四十年前の六月十五日の夕方、三千円貸したろう。まだ、返してもらっていない」と、そんな遠いことは不思議と覚えております。

北村家の祖父、広助も、半恍惚であります。これが一番始末が悪い。惚けるならすっかりと惚けてもらいたい。中途半端な惚けは、接触不良の電話みたいなもので、くつついたり離れたりして、周りが混乱することになります。

御年、数えで八十七の午年であります。北村家の歴代のじいさんはすべて惚ける家系ということで、やはり、最近はとみに半惚けしてまいりました。あと、数年もすればすっかり惚けてしまうでしょうが、そうなったほうが大人しく、可愛いもので実に扱いやすい。元気過ぎる惚けというものは大変であります。

北村家は親子三代が暮らす、三世代家族。婆さんが八十二の夕エ、主人が五十二の拓道、嫁が三十九の後妻で元子、そして、上の息子は三人、関東方面に働きに行っておりまして、残っている子供は二人、元子の連れ子で、晴美、高校一年生、信之中学一年生であります。そのほかの家族というと、兎が一匹、ピラニアとひかりベタと金魚が二尾おります。

そんな家族構成でも内情は複雑で、それがどこかずれている。耳が遠い広助じいさんとの会話はとんちんかんなことが多く、補聴器を付けることに抵抗感があるのか、嫌がってしないものだから、話が伝わらない。じいさんが留守番しているときに電話がきますと大変なことになる。一ももし、北村さんのお宅ですね。東京の相澤ですが、ゆうべ、うちのお父さんが亡くなりまして、ううううう。

一それはそれは、大変結構なことですな。天気もよろしいし、今年も林檎は豊作らしいですし、いやはや、で、どちらさんでしたか。

と云うかと思うと、電話の相手が偉い人でもお構いなしに、一何、聞えない、何だって？ と電話口で怒鳴ります。大抵の相手方はものすごい剣幕と勘違いして退いてしまいます。耳が遠い分、声が大きくなる。いつも喧嘩腰で話しているように聞えます。家族が話すときも、普通の声では聞えないので、一おじいちゃん、お客さんだよ。お客さん。お客さんだと云っているんだらうが、この野郎。

と、凄い会話になるんであります。

毎日がこの調子であります。ですが、嫁の元子はじいさんを重宝がり、一家に一台とまで云っているようで、よく働くじいさんであります。じっとしていることはありません。いつもばたばたと動いている。だから健康なんでしょう。

若い頃に銀座のサロンドテでボーイをしていた記憶だけが、最近は鮮やかに甦って、みんなで夕食をいただいているときにも、せっせと給仕したり、後片付けをしたりいたします。それが実にせわしく、ゆっくりと食べていられないので、祖母の夕エが怒ります。

「いつもいつも煩いんだよ。御飯食べているときくらい静かに坐っていなさい」

人が食べたら、皿を台所に下げる。大皿から小皿に移す。まだ食べている最中でも、取り上げて、他のおかずと混ぜてしまう。食卓の上をすっきりとさせないと気が済まない性格になってしまったのです。ただ、混ぜてはいけないものと混ぜるので、せっかくのおかずが台無しになってしまうときがございます。

漬物とサラダを少しづつ余ったものを一緒の器に入れます。まあ、どちらも野菜だから、親戚みたいなものですが、酢の物と油炒めを混ぜるのだけはやめてもらいたい。それは全くの赤の他人です。なかには、きっと「混ぜるな危険」というものもありましょう。なんとなにをどうかして混ぜたら、とんでもない爆発物ができないとも限りません。

耳が遠いことをいいことに、息子の拓道はいつもじいさんと遊びます。

「じいちゃん、今度の知事選は誰が勝つかな」

「そうだなあ、やはり阪神がこの勢いで優勝だろうな」

「このボケナス、そんなこと訊いたんじゃないわ」

「ホーナスも少ないみたいでなあ、景気は回復せんし」

そうして、じいさんをおちょくって遊ぶわけです。痴呆の老人を毛嫌いすることなく、老人を玩具にしよう。その方がどっちも楽しい。明るい家庭ができるというものでございます。

広助じいさん、ときに人の顔をじっと見つめることがあります。嫁の元子の顔を珍しそうに眺めていて、突然、云いました。

「あんた、誰？」

年取ると子供に還ると申します。広助じいさんも、いまや嗜好は小学生並であります。甘いものには目がない。貰い物の羊羹など、しっかりと隠してひとりで食べている。こっそりと出しては辺りを眺め、隠し場所がみつからないように、きょろきょろしています。嫁の元子が笑って云いました。

「おじいちゃん、そんな羊羹なんて、いまの子供たちは食べませんから心配しないで」

と、云って見たが、心配なのは賞味期限。じいさんの留守のときに引き出しからぼろぼろと出てくるお菓子の製造年月日を見て驚きました。二年も三年も経っている骨董品です。中には立派な黴を培養しているのもございました。

そんなじいさんが自分の部屋にいるときは、いつも痒いとあちこち搔きます。老人が皮膚を痒がるのはよくあることでありますが、そのたびに皮がぼろぼろと剥けてきます。部屋中にじいさんの皮が散乱していました。人間、ひと皮もふた皮も剥けると、だんだんと脱皮して小さくなってまいります。しかも、だんだんと赤ん坊に還ってゆくわけであります。

ある日のことであります。じいさんの部屋から不思議と赤ん坊の泣き声があるじゃありませんか。婆さんと嫁が駆けつけたときは、部屋の真中にだぶだぶのじいさんの服を着た赤ん坊が泣いていたというじゃないですか。その後の広助じいさんの姿は誰も目撃していませんでした。

北村家の人々 その二

第498話 鵜

女は女と呼ばれるのは三十代までではないでしょうか。四十、五十と齢を重ねるに従って、女でなくなります。全く別のものになってゆくのであります。そして、七十、八十となると、それ

は恐ろしいこの世のものと思えないものになってゆきます。まるで怪談のようでございますが、女を捨てて、年寄と諦めたものなら、まだ人間に近いのですが、いつまでも遠ざかる女を未練がましく引きずり、枯れてゆくなか、怨念に変貌させた女の臭気を生臭く抱き続けるもの、それはすでに化けたものでございます。ギリシア神話に出てくるメドゥサのように得体のしれない鵺になってしまうようであります。

北村家の婆さんのタエもまさにその域にさしかかり、おどろおどろしい存在になりました。北村家を仕切るのは、半惚けたじいさんの代わりに、このタエ婆さんが握っているのであります。タエ婆さんの武器は、饒舌であります。お喋りといっても、同じことを何度も云いますので、じいさんよりは酷くありませんが、孫たちは、いつも蜘蛛の子を散らすように逃げてゆきます。末っ子の信之なんかは、哀れ犠牲者で、婆さんに掴まりますと、

「ああ、その話、三十七回聞いた」というふうに、ちゃんと回数を記録しているようで、まこと老人の話相手を務めるといのは、根気がいることでございます。

終いに、誰も話を聞いてくれなくなると、タエ婆さんは檻の中の兎に話しかけます。兎も災難ですが、寝たふりをしております。そこで、仕方なく、婆さんは金魚に向かって話しかけるのであります。

「おまえだけは、わたしの気持ちが判ってくれるだろう」

この一見芯の強そうな婆さんも、持病がございます。それはいま芸能界でも問題になっているパニック障害であります。病院を回っても、どこも悪くないのですが、自分は心臓病だ、狭心症だと思いこんでおります。毎日、発作があるようで、そのたびに血圧が上がったり下がったりいたします。神経からきているのですが、本人は苦しいもので、死の恐怖と毎日戦うことになります。それで、家族を相手に、毎日同じ病気の講釈であります。いろんな家庭医学の本を買ってきては、読んでいて、ちょっとした医学博士ですが、自分の病気については誤診しております。

口を開けば朝から病気の話。聞きたくないから、逃げるので嫁とも仲がよくありません。

家族というものがありまして、その中で孤立することもございます。何も、老人の独り暮らしだけが孤独なのではありません。大勢の家族の中にも取り残されることもございます。タエ婆さんがそれでございます。それで、鬱憤を酒を飲んで晴らそうといたします。拓道が、夜遅く帰ると、居間でひとり酒をかつくらっている婆さんがおります。

これはヤバイ雰囲気だと、拓道はそっと逃げようとするのでありますが、この夜は不覚にも掴まってしまいました。

「どこへ逃げるんだい。ちょっと、ここへ来て坐りなさい。おまえも飲まないか」

と、八十二歳の婆さんの酒の相手をさせられるのであります。くだくだとそれから愚痴を聞かされるのであります。嫁との確執、惚けじいさんのこと、病気のこと、果ては政治から戦争のことと、国際問題にまで発展いたします。拓道はただ、はいはいと聞いているだけですが、実際は聞いておりません。相手が機関銃のごとく時事問題まで多岐に渡って話す勢いにただ押され気味。こんなに酒飲んで、この人は本当に心臓なのかなと疑うほどであります。

そんな、おふくろに何とか気分転換をさせなければ、このまま寝たきり老人になってしまうと、息子の拓道は、前に英会話教室に通わせました。

「グッド・モーニング。エブリディ、エブリディ」

と、朝からうるさいこと。ちなみに、毎日毎日と云うべきところを、婆さんは律儀に繰り返すのであります。余計煩くなったので、元子は、

「誰よ、英会話なんかやらせたのは、せめて、水彩画教室とか、口を使わないものにしてよ」と、耳を押さえておりました。

それで、いまは川柳なんかノートに書かせておられます。そういった書くという才能もある婆さんで、ようやく静かになりました。

孫来たり親に隠れて金渡す

除夜の鐘毎年思う一里塚

食べ物を見てからどこの国のもの

世の中はどこかでボタン掛け違い

年なのか階段数え昇りゆく

耳遠く頭も遠くなりけり

すぐできるデジカメもらい戸惑いし

「どうだい、今日は二十も書いたよ。見ておくれ」

と、毎日、ノートを見せられる。拓道は忙しいのに、呆れ顔。

「誰だよ、ばあちゃんに川柳勧めたのは」

北村家の人々 その三

第499話 ただの同居人

拓道と元子の夫婦はバツイチ同士の再婚であります。熱烈な恋愛をした者同士のほうが、冷めやすく憎みあうとは申します。男女の仲をとりもつ潤滑油は一定の量よりないのでありましょ
うか。それを一気に使い果たしてしまったら、あとは、ぎしぎしと音が鳴るほど摩擦が増えます
。

そもその出会いは、拓道が商売で隆盛を極めていたときに、支店を手伝ってもらったアルバ
イトの主婦、元子にピンとなったからであります。どこがピンとなったかって、そんな、あなた
、心のときめきに決まっているじゃないですか。

拓道は、夫婦仲がとくに冷めていた元子は、不満のはけ口を拓道に求め、やがて二人は恋仲
になると、互いに策略を巡らせまして、元子の亭主に離婚届にハンコを押させることに成功しま
した。それで、届け出を済ませますと、荷物まとめて子供二人の手をとって、さっさと拓道のと
ころに転がりこむといった用意周到、計画的な人妻強奪はひとつの小説をかけるほどうまくいった
わけです。

そこまでして一緒になったにもかかわらず、男と女はまこと不思議な生き物で、身勝手。ひょ
んなことから、夫婦喧嘩が長引きますと、いままで、気にもしなかった拓道の鼾も雑音に聞えて
きます。愛する者の鼾なら、音楽でしようが、嫌いになると騒音公害です。

それで、元子は毎日眠れなくなって、亭主を蹴飛ばします。寝相も悪い拓道は、足を元子の顔
に乗せたり、ばたんばたと夜中に体操です。すっかりと睡眠不足になってしまい、それで哀れ

拓道は枕を抱いて、書斎に引越し、そこで寝るようになりました。そして、かれこれ家庭内別居が一年半も続いております。

元子は子供たちの相手をしたり、雑誌を読んでいたりして自分の部屋にすることが多く、拓道は、元子に云わせれば、パソコンで創作活動しているか、本を読んでいるかどっちかだというほど、ずっぴりと文学に浸っております。それでも拓道は反論いたします。

「トイレに入るときもあれば、飯を食うときもある」

「何云っているの、トイレでも、食事時でも本を読んでいるでしょ」

そんな父親を子供たちは「本馬鹿とっちゃ」と呼んでおります。元子も本ばかり読んでいるから、苛々して怒るときがありました。

「あなたは本と結婚すればよかったのよ」

そう云われて、そうかなと拓道は思ったのでした。本を配偶者として入籍すれば、これが本当の本籍だ、なんて。

元子が、夫婦の会話がないと愚痴るので、拓道は本を開いたまま、元子の傍にぴたりとくっついて、

「さあ、何でも話してごらん」と、口では云っていますが、目は活字。

子供たちが小さいときは、拓道に遊ぼうとうるさく付きまといます。そこで拓道、「本読みごっこをして遊ぼう」と、子供たちに云いました。まだ何も判らない子は、喜んで、「うん、しょう、しょう」とはしゃぎます。すると、上の子がこっそりと弟に云いました。「本読みごっこって、ただねそべって本を読むだけなんだよ。つまらないんだよ」と、判っております。

ただ、拓道のパパのいいところは、本をしっかりと持っていて、家庭サービスは欠かさないことでした。子供の運動会も必ず応援に行きます。他の子が走るときは、シートで横になって本読みごっこです。

活字中毒は家庭不和のもとになっております。元子に拒絶されても、淋しがる拓道ではありません。むしろ、自分の時間が増えたと喜んでおります。こんな男は家庭を持つべきではありませんでした。だから、先妻にも逃げられたのであります。

元子は勝気でありましたから、負けてはいません。自分勝手な夫を「ただの同居人」として、無視することにいたしました。いると思えば腹が立つ。初めからいないと思うことにしよう。哀れ、子供たちはててなし子になっておりました。

「お父さんは？」

と訊く人あれば、子供たちは、口を揃えて云いました。

「うん、本のところに行っているよ」

大概是、図書館か古本屋です。それが、勘違いされて、本妻のところへ行っていると他人は思うのであります。本が妻なのであります。多分、大地震が起きて、家が倒壊し、街が燃えても、ミサイルが飛んできて、拓道は本から目を逸らすことなく、ひたすら没頭していることでしょう。

同居人はそんなわけで、仕事も本を造ったり、売ったりする仕事ですから、頭の中まで本でいっぱいあります。頭の中にも本棚があり、ぎっしりと本が詰まっております。一日の大半が活

字の海を泳いでいますから、下界のことは知りません。これは殆ど病気でした。外の世界を見るときは、車を運転するときぐらいですか。もう家族はみんな呆れて、そんなものだと思うようにしました。

ある日、娘の晴美が朝ご飯を食べておりました。突然、拓道は本から目を逸らし、晴美をじっと見ておりました。高校の制服を着て、学校に行くところです。

「おお、おまえ、晴美か、暫く見ないうちに、大きくなって。もう高校生になったのか」

元子が呆れてものも云えないでいますと、やはりじっと見ていて、

「おお、誰かと思ったら、元子か。元気で暮らしているか」と云ったとか。

北村家の人々 その四

第500話 日曜日

やっと日曜日がくる。週休二日でない人も多いのですが、皆さん、金曜日になると、そわそわいたします。北村家の嫁、元子も日曜だけが休みでした。元子は、パートで臨海試験場に働きに行っておりました。海沿いの温泉町に暮らしている北村家では、五軒隣が水族館で、海水浴場までは歩いて三分五十秒という近さであります。もともと、夫の拓道が海が好きで、海の見える家に住みたいと、市内から車で二十五分の観光地に家を建てたのでした。

子供も大きくなったので、働き口を探していて、ちょうど大学の試験場の寮母さんの口がみつかりました。寮生は十人もいないのですが、外来と称する他の大学から研究生たちが入れ替わり立ち代りやってまいります。中には外国の大学からも来まして、インド人、中国人、ロシア人、イタリア人と賑やかであります。なんの研究をしているのかと申しますと、ホヤや帆立の遺伝子の研究であります。ヒトゲノムにホヤなんかは非常に似ているそうなのです。もともと人間は海から這い出てきたものでありますから、血液の塩分濃度が海水に近いとか、人間と海のかかわりは、神秘的でもあります。単にいそぎんちゃくの研究だと云ってしまっても、そこから癌の特効薬が見つかるかもしれません。すべて、研究というのは事実だけを調べるのではなく、応用にあります。

元子の大好物は魚介類であります。それも帆立や牡蠣が特に好きで、そんなやつを働かせるというのは危険でありました。技官という職がありまして、研究材料にする海胆やなまこなどを船を出し、沖合いで潜って採取してくることを仕事にしております。

元子は、その技官にいたく惚れられまして、研究材料で採って余った鮑などをどっさり貰ってきます。それが毎日のように、いろんな貝を貰ってくるので、鮑の刺身も飽きます。どんな高級な生海胆や帆立の刺身でも、毎日食べてごらんない。もう、見るのも嫌になります。子供たちもげんなりして、

「お母さん、また鮑の刺身？ ボンカレーのほうがいいよ」と、海産物に拒否反応を示します。

元子の仕事は多いときは三十人くらいの学生や留学生、助手たちに食事を用意すること、十いくつもある寄宿舍の部屋の掃除から蒲団の用意までと、ひとりで旅館を切りまわしているようなものです。厨房も旅館のそれ並に広いところで一人で作ります。元子は自嘲気味に、「ただの飯炊き女よ」と云いますが、ノートパソコンを持ちこんで、原価計算までやっております。てきぱきと働く器量は、多少乱雑ではありますが、男勝りであります。

元子は、教授たちからも可愛がられて、「研究室を案内しようか」と、普段は立入禁止なのが、呼ばれて中に入りました。いろんな水槽だけでなく、はつかねずみも実験用に飼育箱で鳴いております。

「先生、北村さんが、何か手に持っています」と、研究生たちが注意を促します。教授が元子を見ると、片手には箸を片手には醤油の小壺を持っております。そして、サンプルの帆立を箸でつついているのです。

「ほら、だから、危ないっていったのに」と、知っている学生たちも口々に云います。元子ははたと思い出しました。

「あっ、わさびを持ってこなかったわ」

ということで、実験所の仕事は忙しいが結構楽しい雰囲気ではあります。

夕方、買い物して、家に帰ると、また掃除と炊事という仕事の延長であります。女は同じことの繰り返し、なんら発展性のない家事労働に強いといいますが、元子の気性はすっかりと男なので、家事は元来嫌いなほうでした。嫌いなのに、そんな仕事に就いてしまったのは、待遇がいからで、貧しい夫の稼ぎをフォローするためには、好き嫌いも云ってはおられません。

明日は、いよいよ元子の待望の日曜日です。普段が休む暇もなく忙しい元子にとって、日曜ほど疲れがどっと出る日はありません。最近コンビニに寄って求人情報誌を買ってくると、なかなかいいアルバイトもないけれど、何か日曜日だけのバイトがないかと探しておりました。

さあ、日曜日です。舅姑は無料送迎バスに乗って、朝から温泉に行ってしまいました。多趣味な夫の拓道も同人仲間と文学散歩に行ってくると、寺山修司記念館へ朝からでかけ、夕方まで帰ってきません。娘の晴美は、高校の友達と、映画見て、カラオケ行ってと、ちゃらちゃらとめかしこんでやはり一日中外へ出ていました。息子の信之は、野球部の練習試合だと、これもまた、早朝からバスで遠くの中学まで弁当持参ででかけました。子供たちも大きくなると、親とは遊んでくれません。だんだんと、親離れして、友達と遊んでいたほうが楽しいのであります。日曜日になると、家族でドライブしたのはつい昨日のように懐かしく思い出されます。みんな、好き勝手なことばかりして、気がついたら元子ひとりがぽつんと家に取り残される日曜日。淋しくて仕方がありません。

それだから、何か日曜日だけの仕事を探そうとか、カルチャーへ通おうとか、いろいろと思いついておりました。子育てを卒業したら、主婦は子供以外の何かの生きがいを見つけおかねばなりません。亭主もほいほいと外に出ていてあてになんかなりません。ぽつんと家にばかりいるのも気が狂いそうであります。

そこで、元子は最近になって、押し入れで、あるペットを飼うことにいたしました。そうです。孤独を紛らわせるにはペットが一番いいのです。窓から、誰もいないことを確認すると、押し

入れを開けました。

「あなた、もういいわ。みんな出かけたわよ。ええ、夫は夕方まで帰らないわ」

押し入れからなんと間男がひょいと出てくるではありませんか。

「おっ、奥さん」と、二人はひしと抱き合います。

新しいビジネスで、閑な主婦向けに間男デリバリーも大流行らしいですな。

北村家の人々 その五

第501話 甚 六

北村広隆は五人兄弟の長男であります。五人も兄弟がおりますと、生存競争が激しく、おやつにしても鍋の中の肉にしても争いながら箸でチャンバラをやるといった、生き残るための戦いを家庭で学ぶことになります。ただ、広隆が生まれたときは、ひとりですから、敵はいないわけで、蝶よ花よと大事に育てられたわけです。そのうち、だんだんごちゃごちゃと下ができてまいりましても、弟たちの面倒見がよく、「お兄ちゃんの分もあげるよ」と、分け与え、兄は弟のために我慢をするものだということを自分でいつのまにか身に備え、そんな食べ物ごときで、はしたなく争うという戦争には参加せず、さすがご長男といった風格も出てまいります。人間、その置かれている立場で、ペルソナを作るものでございますから、兄は兄らしく育つものでございます。

下はみんな貪欲で、自己中で、我侷であります。この兄だけは大人の風格と悠長な性格で、とにかくお人好しであります。ただ、親としては心配なことは、女に騙されないかということでもあります。事実、父親の拓道もいままで、どれほどの女に騙されてきたことか。その血をひく息子ですから、ほいほいと貢いで逃げられる、なにかそんな気がしてなりません。

北村家は九人家族でありました。それがひとりひとりと社会に出てゆきます。どうしても人口密度の高い、子供たちの喧嘩する声の絶えない貧乏所帯から、みんな逃げ出したいとは思っているようであります。それで、みんな将来は、この家にはいたくない、東京に出て働くという希望を持っておりました。自分だけの部屋が持ちたい、それが家を出たいことのひとつだと思えます。貧乏人の子沢山ではありますが、それゆえに子供は早くから自立いたします。親がまったくあてにならないということは、子供にとってはよいことで、普通の親なら、東京で安月給で頑張っている息子になんらかの資金援助をしたり仕送りしたりするものでございましょうが、北村拓道は逆でした。

一お父さんだ、ボーナスが出たら、仕送りするんだぞ。

と、電話で実家に金を送れと要求するほどです。子供たちを泳がせて鵜飼のように金を巻き上げる、実に酷い父親です。家貧しくして孝子出ずというのは嘘で、がめつい親の面倒なんか誰がみるかと、さっさとみんな出てゆくだけの話です。そんな親を持つと、子供はしっかりしなければと思うのでしょうか。親の背中ではなく、親の醜く肥った腹を見て育った子供たちは、自分はあなりたくない、親を反面教師にして、商売の後継ぎなんかしないのであります。親とは全く別の生き方をしたがるものです。

その広隆が、東京の専門学校をあっさり中途退学すると、自分の目標である、コンピュータのソフト制作会社に勤めてしまいました。本当はきちんと基礎から学んで、それから社会に出てよかったのですが、彼は性急すぎるどころがありました。それが却って幸いしたようで、やがて来る就職難の前に会社に入りました。だんだんと就職が難しくなっていってまいります。世の中は、そのために卒業を遅らせようと、上の学校に入りながら、時期を待つ若者が多いようですが、これからますます大変になってくるでしょう。早い者勝ちであります。ぼやぼやしていればいい口はなくなってしまいます。

簿記にしてもコンピュータにしてもテキストだけの勉強より、実務でやったほうが覚えが早いものです。勉強の嫌いな広隆ではありましたが、ウィンドウズが出る前からのパソコンを高校生の頃からやっておりました、それでパソ通なんかやって、全国に友達を作っておりました。あの頃は通信費が高く、それを許していた拓道のところにクレジット会社から、目玉が飛び出るほどの請求書がきました。月にして、今の使い放題の額の三十倍ぐらいですから、一分いくらだったんでしょか。まだ、周りでは、パソコンをやっている人は少なく、オタッキーと白い目で見られていた迫害の時代でした。拓道は、何度も怒って、電話と繋いだケーブルを鋏で切ったのであります。それでも、父親のいないときに、また密かに線を繋いで、パソ通でチャットなんかしていました。とうとう、拓道はそのクレジット会社に電話して、解約してしまうといった挙行に出ました。金銭的にがっちりとしていた拓道は、いままでかかった通信費をアルバイトして返してもらおうと、広隆を自分の店でこき使いました。そうして、すべて、息子たちには甘い顔はしないどケチな父親を演じておりました。

そのパソコンが、後に広隆の就職と仕事に役立つことになるわけで、無駄な投資ではなかったのです。何がその人に幸いするか判りません。一日中、パソコンばかりやっていて、ろくに学校にも行っておりませんでした。毎朝、学校に行っていたと思っていいたら、午前中に帰ってきていたのです。高校の担任の先生から拓道が呼び出しを受けました。

「広隆君ですが、一学期ですでに一年分を休んでしまいましたので、あと一日でも休めば出席日数が足りなくなり、単位を取れません。このままでは落第留年ということになります」

それを聞いて、拓道は愕然となります。それで、広隆をとっちめることとなります。

「いいか、これからは熱が四十度も上がっても、這ってでも学校へ行け。いいな」

ということになりました。そのめでたい息子もめでたく無事に卒業いたしました。

ただ、そのあとの東京のコンピュータ専門学校からも電話が実家にかかってきまして、一お宅の広隆さんですが、学校に来ておりません。だ。

高い入学金、授業料もふいになりました。長男の不甲斐なさを嘆いて、生き馬の目を抜く東京で、大丈夫やってゆけるのだろうか、拓道は心配しておりました。北村家の長男はどいつもろくな者がおりません。それは、祖母のタエがいつも口癖のように云っておりました。

「北村家の長男は代々、女と酒とギャンブルで身を持ち崩す」ということになっているようです。そういったジンクスがあるので、余計に心配になります。でも、成るように成るものでございます。その広隆がこの春に弟と一緒に、独立し、若干二十四歳で、アニメのプロダクションの会社を設立して、社長におさまりました。できの悪い息子ですが、学歴ではありません。親がだらしないから、みんなそうして独立してゆきます。頼りになるのは自分よりないということ

を小さいときから判っているのです。

その広隆から突然電話が入ります。

「お父さん、何だか判らないけど、友達の保証人になっていたら、一億円払えって、銀行から来ているけど、代位弁済って何のこと？」

「てなことにならないといひけれどと、総領の甚六の広隆が何をやらかすか、拓道はそれだけが心配であります。」

北村家の人々 その六

第502話 鬼っ子

五人兄弟の中の二番目がふみたけであります。どこの二番目ものんびりしていると云われます。このふみたけもそうであります。いつもぼーっとしていて、何を考えているのかよく判りません。津軽では、赤ん坊が何を考えているか判らないので、それを称して「ホヤとナマゴの気持ちっこだべな」と云います。まさに、ふみたけは、ホヤとナマゴであります。現代的に云うと地球外生物とでも申しましょうか。

ふみたけは、兄弟の中で一番変わっております。小さいときから、よくひきつけを起こし、大学病院で脳波を調べてもらったことがあります。なんともありませんでした。ひきつけが起こるときは、慣れてくると、判るようになります。それ、くるぞと、割り箸にガーゼを巻いて、口に噛ませるために用意しておきました。瘡の虫が強いということで、孫太郎虫という蠍のような、いや百足のような虫の黒焼きを煎じて飲ませました。

一番、ベタベタとくっついて、夏の暑いときは嫌われました。よく泣くのでよく叩かれました。デパートで玩具が欲しいと通路にひっくり返って泣くのもふみたけでした。そのくせ、ひとつだけ選んで買ってやるよと、父親が云うと、暫く選んでおりますが、いらないと、買わないのであります。いつも、選ぶのに時間がかかり、おいてゆくよと云うと、買うのを諦めるおかしな子でした。これは、将来、彼女ができて、次々に取り替えて、嫁さんがなかなか決まらないのではないかと、両親は思っていました。兄弟中で一番早く結婚してしまいました。

人間はどこでどう頭角を現すか判りません。ふみたけも、中学までは、別に絵がとりわけうまい子だとは思いませんでした。マンガはよく描いていたようですが、手と足がただの線だけのマンガでありました。それが、高校に入り、漫画研究会に入ると、同人誌を出すようになり、業界から少しずつ注目を浴びるようになります。中央から、マンガの原画を描くアルバイトまで来ていました。そして、卒業名簿の進路に、みんなは工務店や大工場の名前を連ねているときに、ひとりだけ「漫画家」とありました。

上京すると、アニメ制作会社に就職してしまいます。上の兄貴とは年子のせいか、小さいときからじゃれあってやってきた仲のいい兄弟でした。二人でマンションを借りて、昼は勤めに、夜

はせつせと自分たちのマンガを描くという生活を始めました。ペンネームは萌木原ふみたけであります。だんだんと売れるようになり、マンガ雑誌に連載も頼まれるようになりました。ネットで検索すると、彼のファンクラブまであり、サイトがいくつも出てまいります。二十歳を過ぎた頃からすでに先生と呼ばれておりました。業界が若いから、そんな涙垂れでも先生です。

少し前にエヴァンゲリオンというアニメが流行りました。ガンダムもシリーズで流行りました。エヴァ系、ガンダム系と云って、若い人たちが描くマンガは殆どがパロディか、エピソードであります。オリジナリティの全くない、単なる物真似なのであります。それは、いくら技術が高くても、原作を超えることはありません。独創性がいかにあるかで、ヒットを飛ばすことができるのです。

マンガと云っても、昔のように、柵目を埋めてゆく印刷物だけではありません。いまや、ゲームになり、パソコンソフトになり、アニメーションでDVDになり、キャラクターグッズになり、ポスター、テレカ、カレンダーと、多岐に渡り、産業にまで発展しております。

活字離れで、北村拓道の経営する古本屋は没落の一途を辿っておりますが、ふみたけのマンガは人気絶頂で、売上は鰻のぼりであります。北村家では、長年使っていたテレビが音が出なくなり、修理に出すと、高くかかるというので、思いきって、バーゲンで五万円も出して買いました。拓道にとっては、思わぬ出費でありました。ところが、息子のふみたけは、ハイビジョンのプラズマテレビをどんと買ったのでした。世の中の流れがおかしくなると、逆転現象が起こって不思議ではありません。ここにきて、貧乏父さん、金持ち息子というおかしな関係が生まれました。まあ、昔から、辛抱な拓道は、いつも子供たちの食べ残しを食べてきましたし、子供のお下がりを着て暮らしてきました。正月に息子が帰ってきますと、上から下までブランドものです。親父はというと、上から下まで特価品をさらに見切ったものを着ております。何か世の間違っております。

子供たちとは、電話よりメールのやりとりが多いのですが、拓道のパソコンによくふみたけからたまにメールが入ります。

—お父さん、今度、外車を買ったから。BMWの新型だよ。

拓道は、この前、ポンコツの中古車を買ったばかりでした。

—お父さん、今度、田園調布に豪邸を建てるから。

そうかそうかと拓道は聞いておりますが、本を読まなくなったおかげで、マンガが売れに売れ、拓道の古本屋は閑古鳥が鳴いております。何かが狂っております。親に似ないおかげで、みんな子供は裕福であります。父親はせつせと売れない小説を今日も書いております。先っちょがぱっくりと破れた靴からつま先をのぞかせて、咳こみながら、キーボードを叩いておりました。孫のこと、息子夫婦のことを案じながら。

ふみたけは天才なのかもしれません。天才は忘れた頃にやってきます。珍しく、拓道に電話がきました。

—お父さん、子供、できちゃった。

拓道は、できた息子とと思っていましたが、そうか、できちゃったか。その電話の声も波長が長く、少しも慌てておりません。慌てるのは親ばかりなり。

このふみたけが子供をもち、郷里に帰ってきて結婚式も挙げました。つい、この前まで、寝転がってバタバタと泣いていた子が、父親になっているというのは何か不思議な感じがすると拓道は思っておりました。孫ができたとき、拓道は、人生というのは時系列に連動してゆくものなのだという実感を得ました。

—お父さん……。

拓道は、息子たちから電話がきますとドキリといたします。今度は何か。まったく人生というものは、次のページが見えないものでございます。

北村家の人々 その七

第503話 昨日のジョー

三男の拓人は高校ではボクシング部に入っておりました。子供のときは喧嘩好きでしたが、だんだんと虐められる方になりました。いつも、強くなりたいとそればかりを思っていたようです。

拓人は多少肥満気味のボクサーでありました。ハングリースポーツよりは、相撲に行ったほうがいいのではないかといい体型をしております。それも自己改造しなければならないと、減量を始めました。減量といっても、全く食べないのではなく、水分を減らし、筋肉をつけるためにプロテインを飲み、早朝や学校から帰った夜でも、近くを走っておりました。

試合が近くなると、拓道は息子につきあってサウナへ通いました。よしんば自分も痩せられるのではないかと淡い期待もありました。というのも、父親は健康診断で、血糖値が高く、やや肥満ということで、食事制限もしなければならないし、減量するように医者に云われておりました。息子はボクシングで、父親は成人病予防のため、二人の涙ぐましい努力が続きました。

拓道は、毎日本ばかり読んでおりますので、完全に運動不足です。それを解消するために、読書体操というものを考案しました。拓人がトレーニングで使うダンベルや腹筋マシンを借りて、片手に本、片手に錘といったポーズで、汗をかきかき読書をするのであります。そこまでして本が読みたいのでしょうか。時には、ヨガのポーズを真似て、拓人と一緒になって、柔軟体操。それでも手にはしっかりと本。

息子が減量しているときに不謹慎にもわざと目の前で大福餅というわけにはまいりません。そこで、拓道もつきあって、晩酌もなし、間食もなし、水ものも摂らずひたすら我慢することにしたしました。ダイエットというのも、根性のいることをございます。

体重計に乗るのが怖かったときもございますが、最近は体重がそのまま自分の努力の結果でありますので、楽しみになりました。拓人は自分の目標にしているライト級の体重制限六十キロまで落とすにあと少しであります。拓道も、体脂肪が標準になるまであと少しで八十を切るところであります。

親子でよく似た体型で、首が短はずんぐりむっくりとした体つきは、ボクシングというよりレスリングに向いているかもしれません。親子でサウナに入っておりますと、男同士の決意みたいなものを感じました。

拓人は、幼稚園のときに母親が出てゆきましたので、それからは父親が母親の代わりをしましたから、なんとなくファザコンというふうに育ったかもしれません。上の二人よりは甘えん坊であります。それで、可愛がりすぎるので、兄二人からとっちめられていつも泣かされておりました。そんなこともあってか、虐げられて育ったので、余計、強くなりたいと思ったのかもしれませんが。

格闘技を志す人は元来、弱さを克服するための精神鍛錬でやるのではないのでしょうか。拓人も実は、小心者であります。親父によく似ておりました。拓道も、弱い人間を自称しておりました

ので、若いときに少し合気道をやりました。それで、昔の仲間に誘われて、三人の息子が小学生のときに、道場へ再び連れてゆきました。拓人はまだ一年生でありましたので、やんちゃでいたずらばかりして、道場を走り回り、ろくに練習もいたしません。道場主は大人の間で稽古をするチビを満足そうに眺めて云いました。、

「そうやって遊んでいるうちに覚えるものだ、はははは」

拓人は小さな体で、大人を投げ飛ばします。というより、投げられてもらっています。その経験は無駄ではなかったのです。咄嗟のときに受身が出ます。ボクシングにも十分応用が利きます。

「フットワークに合気道を応用してみろ」拓道はシャドウ・ボクシングを家でしている息子に云います。

「円を描くように相手を交わすのだ。円運動はすべての周りの力を封じ込めるからな」

実際、合気道というのは合理的、科学的なよく造られた武道であります。非戦ということがこの武道の特徴であります。こちらからは攻めることはないのであります。相手が何もしなければ合気道は使えないのであります。相手の攻撃する力を利用して投げる関節技であります。相手の動きが上段者になると見えてくるようであります。一撃を交わす練習を毎日やっております。半身に構え、足は弧を描くようにくるくると回ります。まるで舞踊と同じです。ベクトルで計算された応用力学であります。うまいタイミングで相手は倒れてくれるのです。

いよいよ試合当日になりました。拓道はいまやトレーナーになったつもりでいました。ランニングするときも自転車についてゆきました。

「いいか、決して逃げるなよ。お父さんは若いとき、逃げたことでいまも後悔している」

それは確かなことでした。拓道は、借金から逃げました。暴力から逃げました。女からも逃げました。後ろからいつも卑怯者という声が追いかけてきました。自分のこともあって、男は負けると判っていても戦うときがあると、バイロンの言葉を借りて話してきかせました。

「ひるむな、相手に同情するな、自分を殴っていると思え。引くな、交わせ、追い詰めろ」

勿論、高校生のアマの試合ですから、プロのように厳しくはありません。

拓人は、そうして九州は熊本まで青森の代表として出かけてゆきました。息子に委ねた気持ちというものが父親にはありました。かつて、弱い人間でありました拓道は、いつも思い出ばかり追っていましたし、後悔ばかりしておりました。希望もなにもない暗い若いときを過ごしておりました。息子には逃げてほしくはなかった。

テレビで試合を観戦しておりました。

「行け、そこだ、ジャブだブローだ、交わせ、交わせ」

息子が追い詰めてゆくのは自分自身でありました。もし、三十年若かったら、また、拓道はそうして過去を振り返るのであります。

北村家の四番目は、紅一点の晴美であります。今年高校に入ったばかりの花の女子高校生であります。

学校では、服装にやかましく父兄にも注意するように指導しているのですが、云うことを聞くわけがありません。制服のスカート丈を短くして、ミニスカートにするのが、いまは主流であります。昔はつっぱりの生徒はスカートの丈をじょろじょろとやたら長くしていましたが、どうも、太い脚を見せたがるようで、決して美しいとは申せません。加えて、眉毛を剃って、化粧までしていますが、それも、初々しさがなく、いまが新鮮さを売りにしないでいつするのだと云いたくなるほど、若さを殺して、街を歩く女子高生はそのままお水系でもおかしくないほど恐ろしいのであります。

晴美も仲間はずれにされないよう、注意されながらも髪は染めないまでも、みんなと同じ身なりをしておりました。ケイタイは必須アイテムであります。暇さえあれば、メールばかりやっております。玩具には違いありませんが、そんなに面白いものとは思われません。

男の子は扱いやすいが、女の子は年頃になると気難しいものであります。母親の元子とはしょっちゅう口喧嘩しておりますし、父親なんかは触らぬ神に祟りなしと、近づきません。部屋はちらかして、ドアを開けるのが怖いようなものです。

「女の子らしくしなさい」という家庭教育はしておりません。持って生まれた性格はなかなか改造できないようで、男の子のように乱暴で、がさつであります。下の弟のほうが、まだしおらしく、部屋もきちんと整理していて、おとなしく女性的でさえあります。逆になって生まれてきたらよかったと、いつも親は嘆くのであります。

晴美はだんだんと母親に似てきました。料理や裁縫といった作るのは好きで、また器用であります。後片付けが苦手なようで、お菓子を作るのは結構なのですが、そのあとは、ぶっ散らかして大変な有様です。部屋がそのままゴミ箱のようなもので、お客さんが来るからと、きれいに片付けさせると、父親は娘に云います。

「よし、きれいにしたから、いまのうちにドアに釘を打ちなさい」

「ええ？ 入れないじゃない」

晴美は彼氏を作るのに焦っているようであります。友達の紹介で、他校の男子生徒をメル友にいたします。初めのうちはメールでやりとりしているのですが、顔も住所も知らない相手にだんだんと情が移ってまいりますと、互いの顔写真をケイタイのカメラで撮って、交換するようになります。そして、いよいよデートということで、ご対面することになるのですが、初めてのデートの朝は、まるでファッションショーのように賑やかであります。何を着てゆけばいいのかと、とっかえひっかえ、髪も念入りにドライヤーをかけて、化粧もばっちりです。父親の拓道は心配して、忠告いたします。

「いいか、できるだけ口を開くな。しおらしく、うんとかすんとか云っておくんだぞ」

と、娘の何もかもを判って云っているのであります。晴美は何のことかさっぱりと判りません。

日曜日。初デートは駅前のファッションタウンであります。若い人たちの溜まり場で、そこへ

晴美はいそいそと出かけてゆきました。

彼氏は別の高校の一年生で、髪型はつっぱりですが、顔はまだ童顔で、可愛い感じでありました。晴美は彼氏を見るなり笑い転げました。

「ええ？ 身長いくらあるの？ おれとつりあわないじゃねえか」おれと云うのは晴美の口癖でした。背丈が170センチある晴美が厚底の靴をはくと、男の子を見下ろします。

「まあ、いいか、我慢してつきあってやるか」と、男の子の肩を軽く叩いたつもりが、男の子はよろけて倒れました。最初からこの有様であります。すでに、男の子は、予想に反した晴美の迫力に負けて、顔面蒼白、逃げ出したいような格好をしておりました。

「おい、どこへ行くんだよ。金持ってきてんだろうな。飯くらい奢れよな。そうだな、回転寿司なんか奮発しなよ」

晴美はすらりとスタイルもよく、美人なのですが、乱暴なのが玉に瑕。その辺のやわな男の子なら太刀打ちできません。学校の女の子たちも口を揃えて云います。

「晴ちゃんって、怖い」

回転寿司では、晴美は遠慮ということを知りません。エスコートするのは男に決まっている、奢られるのは女の子の特権だとばかり、百円の安い皿は避けて、高い皿ばかりゲットいたします。男の子は、ただおろおろと財布の中身と皿の枚数を見比べて、青ざめるばかり。晴美が痩せの大食いだったとは、誰も知りません。

「いやあ、食った、食った」と、爪楊枝でしーしーさせて、げっぷなんかしています。男の子は、遠慮して何枚も重ねておりません。

「おまえ、割合、小食なんだな」と、からからと笑います。

哀れ、男の子は一か月分の小遣いをすべて食べられてしまいました。

次のデイトの約束をしようと、予定を立てますが、男の子は躊躇しております。

「なんだ、おまえ、決断力のないやつだな」と、また男の子の背中をどんと叩きました。

デイトから数日して、晴美は塞ぎこんでおりました。ご機嫌斜めのときは、放っておいたほうがいいのですが、ときおり、窓辺に立ちながらしくしくと泣いておりますので、親としても心配になり、拓道は、父親らしく優しく後ろから言葉をかけました。

「どうしたんだ。いつもなら、丼飯を二杯は食べるのに、一杯だなんて、何か心配事でもあるのか。新しい彼氏ができたんじゃないのか」

すると、晴美は女の子のように思い出したようにしくしくとしおらしくなって泣くのであります。

「だって、彼氏がケイタイのメルアドも番号も変えたようで、出ないんだもの」

「おまえ、何か云ったのか」

「ううん、ただ、今度のデイトは君の奢りで、食べ放題レストランに行こうって誘ったの。もし、来なかったら、家に怒鳴りこんでゆくって云ったの」

拓道の心配は当たりました。それで、なるべく本人が傷つかないように優しく云いました。

「それって、愛だ恋だと云うんじゃないよ。恫喝って云うんだよ」

末っ子というのは、可愛いものであります。上の子のときは、親もまだ若いから、対等になって喧嘩腰、叩いたり叱ったり、口うるさく躰ますが、下にゆくほど、だんだんと親としての迫力が衰えてまいります。親も子供と一緒に成長するわけで、角がとれてゆき、丸くなってまいります。年取ってできた子は、もう、何をしても許されるほどの溺愛です。それが、兄たちには確かに不満であります。

「ぼくたちのときは、何でも買ってくれなかったし、お父さんは信之には甘いよ」

末っ子の信之は今年中学に入ったばかりです。兄が中学に入ったときは、「もう、お兄ちゃんなんだから、ゲームなんかやらないで、勉強しなさい」と、云ったのを長男はしっかりと覚えておりました。それに引き換え、末っ子がゲームばかりしていても、なんの注意もいたしません。完全に甘くなっております。

学校に持ってゆく弁当を忘れたら、長男は罰として飯抜きでした。ところが、末っ子のときは、「おなかが空いて可哀想だ」と、わざわざ学校まで届けにゆきます。信之をべた可愛がりするのは母親も同じでした。いや、じいさんもばあさんもそうなのであります。大人のすべての視線が、まるでペットでも見るように、信之に注がれております。当然、我侭いっぱい育てつのです。

信之は、母親にべったりです。マザコンになるのではないかと心配するほどであります。小さいときは、ママと結婚するのと、父親との間に割り込んで邪魔をいたしました。母親の膝の上につい昨日まで座っておりました。それを心配した拓道は、

「中学にまでなって、離れろ」と、厳しく叱りつけました。それ以降、父親との関係がしっかりとゆきません。この子だけは兄弟の中で、一番繊細であります。ほとんど無駄口をききません。いるかいないか判らないほど静かにひとりで遊んでおりました。尾崎一雄の「隅っ子」という短編に出てくる子供のように目立ちません。

北村家の子供たちは、みんな総じて勉強は出来がよくありません。共通して悪いのが英語と数学であります。ただ、勉強は苦手でも、将来、何をしたいかという希望がはっきりとしております。姉の晴美は看護師になりたいと、そのコースを歩んでおりました。兄の拓人は体を張ってする仕事、警察官かガードマンになりたいと、そっちへ行ってしまうました。あとは、漫画家やコンピュータ関係の仕事と、みんな自分の好きな道を早くから見つけて、進んでおりました。

この末っ子は、恐らくコックになりたいと思っているようであります。いつも、夜ともなれば、彼はクッキングブックを見ながら、台所に立っております。カスタードプリン、パンプキンパイ、スイートポテトなどが得意であります。母親が残業で忙しいときは、チビママの晴美か、信之がいれば、夕食は心配がありません。

テレビでグルメ番組をよくやっておりますが、彼は熱心に見ております。将来はラーメン屋さんになるのと、小さいときから云っておりました。この就職難の時代ですから、早くから進路を

決めて、特技をつけさせ、社会に出したほうが得策かもしれません。

小学生のときから、作るのが好きで、よくケーキやパンを作りました。パン生地をごねごねと煉って、何か白い生地ではなく、心持灰色のパンが焼きあがります。できたあとの彼の手はきれいになっておりました。ということは、パンに隠し味がしみたわけで、家族は不気味な顔をして、恐る恐る食しておりました。最初にばあさんに食べさせます。それから二時間くらいして、異常がなかったら、安心してみんなで食べました。食べてくれないと、機嫌が悪くなるといけないので、みんな気を使い、おいしい、おいしいと云って涙ぐみながら食べるのであります。

すると、彼は気分をよくして、翌日もまた翌日も作りました。

「また、作ってくれるのかい。そうかい」と、複雑な笑みを浮かべて、げんなりしていました。

でも、最近はだんだんと上手になってきて、これなら売れるという素朴なクッキーを焼いたりしております。いろいろと工夫して、その辺には売っていないものを作るようになりました。シュリンプをパイ生地で巻いたり、まるでホテルメイドではないかといった凝ったものも作るようになりました。誰が教えたわけではなく、独創的な料理をする特技がありますので、拓道は、将来は調理科の高校から、専門学校へと進ませ、包丁一本サラシに巻いての職人の世界へ行ってもらいたいと思うようになりました。

その信之が、彼女を家に連れてきたというより、押しかけてきました。おとなしい無口でシャイな男の子がいまはもてるようであります。しかも上級生から騒がれているようで、色黒のがっちりとした健康そのものといった中学三年の女の子が遊びにきました。女の子たちから電話はくる、メールはくる、訪ねてもきます。拓道が見ていて、笑いたくなるほど信之は女の子に押され気味。いまから心配です。将来のことを考えると、どうなることやら。

それから二十年が経ちました。拓道も喜寿を過ぎ、好々爺になって、あちこちに住んでいる娘息子の家や孫のところを訪ね歩く旅行をするのが大半になりました。もともと旅行が好きで、死ぬのなら、旅の途上でのたれ死ぬというのが理想でありました。

信之も年上女房をもらい、遠くの街に所帯を構えました。あのチビ助がと思うのでありますが、彼ももう三十は過ぎておられます。信之が結婚して初めて、訪ねてゆくのであります。なにか古里の手土産を携えて、団地をうろうろと探しながら、ようやく玄関の前に立ちますと、中から大声がいたします。

「あなた、ゴミは出したの？ 洗濯物も取り入れてよ。お義父さんが来るんだからね。料理は作ったんでしょね」

「いまやってるよ」

拓道がドアを開けて入ると、さっきの声とうって変わって、色っぽい声の嫁が出てきました。

「あっらあ、お義父様、いらっしゃるならお迎えに行きましたのに」

と、座っていままでテレビばかり見ていた嫁がしなを作って出迎えました。台所では哀れ、信之がエプロン姿で得意の料理を作っておりました。

まあ、コックにはなれませんでした。末っ子の信之の特技はどこかで役には立っているのであります。

古本屋でも総合的に取り扱っている店は、棚の分類を図書館と同じにしているところが多い。総記、全集から始まり、哲学宗教、歴史地理、社会科学、自然科学と分類され、それが中分類と、小分類とさらに棚に分けられ、作者別にまで並べているところがある。

ところが、林語堂古書店は違っていた。どこに何があるか判らない。初めは、ちゃんとした分類で整理されていたが、どんどんと狭い店に本が詰め込まれることによって、整理不能となってゆく。終いには、とにかくどこでも置けるところがあれば置く。

お客が本を売りにきても、もう買う意欲も失っていた。

「どこか、入るんなら、置いてゆきな」と、店主の北村は、すっかりとやる気がない。もう、どうでもいい。半ばヤケクソで商売をしていた。本は黙っていても次々に入ってくる。だが、本を読む人が減ったから、売れない。どんどんと本は増える一方だ。

初めは、五坪の小さな店からスタートしたが、収納しきれなくなると、ヤドカリのように次第に大きな店へと引っ越すのだった。五坪が十坪になり、二十坪になり四十坪になりと倍倍で店が大きくなってゆき、本の在庫数も比例して十万冊が二十万冊と増えていった。

そして、いまや使われなくなった体育館を使用していた。それでも狭いので、今度は、上へ上へと古本を積み、本棚がまるで迷路のように入り組んで、それこそどこに何があるか判らない。

どこの古本屋もいっぱいになって、売りにいっても断るので、いつのまにか北村の店に集まるようになった。

「林語堂さんなら買うでしょう」と、ご親切にも他所の古本屋が推薦してくれる。引き取り手がないと無残にも焼却される本が可哀想だと同情して初めはやっていたが、すでにその域は超えていた。捨て猫がいくら可哀想だといって拾ってきて、一万匹は飼えない。林語堂は、一体いくらの本があるのか。五年前までなら棚卸も真面目にしていた。そのときは、八万冊あったと帳簿に記載されていた。それから一度、税務署が入ったことがあった。

「在庫が判らないで、利益が出たとか赤字だとか判るわけがないでしょう」と、云うものだから、頭にきた北村は、

「だったら、税務署員総出で、数えたらいいでしょう」と、開き直る。さあ、何ヶ月かかるものか。

「この本はいくらで買ったんですか」と、山の中から税務署の人が一冊だけ取り出して、北村に訊いた。

「そんな、あなた、ひと箱いくらで買ったりするんですよ。一冊づついくらいくらと仕入れてはおりません。それに、ただで置いてゆく本もあるし、中にはいらないと断ると、置いて逃げてゆく客もいる。ここは、本のゴミ捨て場ですよ。いつまでも売れない本は換金価値もない。それに資産税をかけようっていうんですか」

もう、すでに在庫管理という言葉もばからしくて使えない。百万冊あるのか三百万冊あるのは判らない。第一、店主の北村ですら、この本棚の迷路の端まで行ったことはないのだ。

店に電話がかかってきた。

一うちのお父さんが、林語堂へ行くと云って出かけたまま、もう一週間帰らないんですが、もし

かして、お宅にお邪魔しておりませんかでしょうか。

と、奥様らしき人から電話だ。すでに搜索願が出されていた。そのご婦人が、旦那さんの顔写真を持って、店にやってきた。北村が見ると、確かに一週間前には、この客は店に入った記憶がある。

「でも、そういえば、帰ったという記憶がないな」

やがて、電話でかけつけた警官隊が、店内の搜索を始めた。

「○○さん。おられますか。いたら返事してください」

警官隊も尻込みした。余りに入り組んだ本棚の迷路に、二次遭難の恐れが出たからだ。アリアドネの糸ではないが、長いロープで繋いで、中に入っていった。あとはケイタイで連絡しあい、遭難者を発見したときは、発炎筒で知らせることにした。

哲学から西洋史の棚を抜けると、古典文学の棚があり、その先には政治経済、まだまだ続く法学から経営学。

「いました。遭難者発見」

入口の帳場に搜索本部を構えていた警部のところに部下の警官からケイタイ電話が入った。発炎筒の煙が遠く、店の奥から立ち昇る。

「生きております。だいぶ衰弱していましたが、自分の尿と、古本を食べて奇跡的に生き延びていました」

その食べていた本は、グルメ関係の図書コーナーにあったという。確かに腹が減ってくると、おいしそうな本には違いなかった。

「大変です。別に、迷路の奥から白骨死体を発見いたしました。どうやら、去年から行方不明になっていた近所の男性のものと思われます」

そのことが、大々的に報道されると、林語堂は自殺志願者たちが次々に入ってくるようになった。いまや、富士山の樹海よりも身近に自殺の名所があると、それだけで有名になっていた。

北村は泣きながらインタビューに応じていた。

「ばかやろう。うちはただの古本屋なんだ。それを、それを……」

第507話 地震列島

かつて、これほど地震が頻発したことがあったろうか。学者先生によれば活動期に入ったという人もいる。ただ。不気味なのは、各地で地殻変動が盛んなのに、正規の発表を控えているところにあった。ニュースでは、警告は一応発表しているが、それが、いまどこであるという確実な情報まで地震予知がなされていないことに恐ろしさがあった。

震度6でも、建物の被害が少ないのは、昔の建物と違い、耐震建築の技術が進み、防火体制から、火器の安全設計が進んだためと思われる。ただ、津波だけは防げない。三陸沖のかつての地震による津波の被害は相当なものがあつた。三陸を訪ねれば、入江には、奥の村を津波の被害から守るための堤防や防波柵が設けられ、警報装置も万全なようだ。津波が発生したときの情報

伝達もかなりリアルタイムに送られる手はずにはなっていて、だんだんと突発的な災害に対する防災管理システムが向上してきているのは事実である。

それでもかつてのような高さ三十メートルの津波に襲われたら、沿岸の施設や鉄道、道路、観光地はひとたまりもない。指定された避難場所まで、どれほどの早さで退避できるかということ、震源地に近いところでは、間に合わない場合が多いのではないだろうか。

さる大学の地震学者が、最近の地震のデータを集計したところ、山間部や僻地で起こるより、都市部や、人口密集地で地震が起こる確率が高いという結果が出た。地震の震度を点で色分けして、地図に記載してゆくと、それは人口密度の分布とぴったり一致することが判った。しかも、地中深く震源地を測定しようとする、どうやら、地表に震源があるようだった。いままでの学説を覆すほどの異変が起こっているのである。

阿呆森大学には、地震に関しての全国の権威ともいえるべき、新藤教授がいた。その研究室では、震源地を測定する機械が、どこも狂い始めていることに注目していた。

「教授、先週の北東北全体に起こった地震のデータですが、震源地が特定できないのです」地震は波だから、必ず方向がある。数箇所に地震測定の機械を設置すれば、いまは数秒で、震源地を割り出し、その距離までほぼ正確にコンピュータで出てくるのだ。それが、ここ数年間の地震は、散漫的に広い範囲で起こっていた。比較的浅いと思われていた震源が、実は地表にあるということが信じられない。

「そうなんだ。わたしが、研究を始めて、四十年、こんなことはいまだかつてなかった。関東でも、関西でも、南九州でも同じ結果が得られている。ありえないことだ。それこそ、巨大ななまが起きているとしか思われぬ」

助教授も研究生たちも首を傾げていた。地表にはそんなパワーを発生させるメカニズムはない。あるとすれば、核爆発による実験だ。それも報告が入っていない。断層が地表で隆起したとか、陥没したとかという報告も入っていなかった。隕石が地表に衝突したということもない。活断層にしても地中深くで、データの示すような地面で起こるというものではない。

世界の地震の研究者が日本で起こっている群発地震に注目していた。それで、各国から研究のために多くの学者が来日して、世界的権威者たちを招いての合同研究チームが作られた。

アメリカの学者は、たまたま滞在中に地震を観測することができた。その報告を学会で発表していた。

「これは、いままでわたしが経験したことのない地震でありました。まるで、隣の部屋を列車が走っているような、極、身近で発生しているような感覚であります。われわれ地震学者の研究より、振動を測定する公害を研究する学者のほうが、今回のデータをうまく解析してくれるのではないのでしょうか」

まず、因果関係を明らかにしなければならない。ありとあらゆる地震が発生したときのその地域の様子を報告させた。天候、気温、風力、波の高さ、崖崩れから建物の崩壊という人為的な事象まですべて報告させた。地震が起こりうる可能性としても、実に力が小さすぎてお話にならない。

「何か、もつと重大なものをわれわれは見逃しているような気がする。それは、きっと、いままで考えもしなかった何かだ」

新藤教授は、どんな小さなことでもいいから報告させることにした。地面の亀裂、工事現場の様子、低周波が発生しているかどうか、どんなつまらないことでもいいからと、研究チームのメンバーに情報を集めさせた。

「教授、面白いことが判りました」

研究生の津上が、当時の各地の新聞の記事などを収集したデータを集計して、並べ替えてみると、地震の発生したときは、必ず、その地区に重大な事件や政治的変化が見られたということが判明した。

「たとえば、青森に地震が起こったときは、例の辞めた知事問題が露呈したときです。東京で地震が起こったときは、国会で税金値上げを可決したときです」

教授は黙って、報告を聞いていたが、終いには怒って云った。

「津上君、それと地震とどんな関係があるというんだね。われわれはいま真面目に地震の原因を探っているんだよ。ふざけるのもいい加減にしたまえ」

教授の逆鱗に触れて、津上は小さくなっていった。確かに、社会事象と地震の因果関係はないかもしれないが、悉く地震発生地域とその事件の発生した日時が一致していること、つまらないことかもしれないが、津上はそこまで調べていた。

国会で、消費税を十パーセントにし、年金支給を三割カットという案が可決された。その国会中継のさなかに日本列島を地震が襲った。これは狭い範囲での地震ではなく、北海道から沖縄まで、日本全国が揺れ動くほどの広域の地震だった。待っていましたとばかり、各都市に張り付いていた地震調査団が、震源地を特定するために一斉に動いた。津上班は、計測器を手に、ある家に入ってゆく。だんだんと震源に近づいてゆくのが判る。

「津上さん、こっちの方角です。近い、近いですよ」

針が振れきっている。人の家に集団でぞろぞろと入り、居間の中に入る。テレビで国会中継を見ていたその主人が貧乏ゆすりをしていた。台所では奥さんが苛々して、体をゆすっている。

地震の原因は国民の貧乏ゆすりだった。

第508話 夏至男

六月の夏至に生まれた夏雄は、昼間は活発で、夜は沈滞ムードだった。朝晩は苦手で、日中が体の調子がいいというのは血圧と関係があるのか。

夏雄は車のディーラーに勤めていた。ばりばりのセールスマンだった。特に、六月には一年で一番運氣もよく、何をさせても行動的で、成績も上がる。だが、六月をピークにして、だんだんと成績は下がり、真冬には毎日ただ飯食いと、上司からどやされるほど、スランプになる。人間、夏型と冬型があるようだ。夏雄は名前の通り、夏型人間だった。暑いのはいくら暑くてもいい。ただ、寒いのは苦手で、冬のない常夏の国で暮らしたいと日頃から思っているほどだった。

三十二歳で販売主任。ぴしっとサマースーツで決めて、会社訪問に出かける。マスクも悪くないのだが、何故か彼女がいない。理由は気難しそうな性格にあった。気分屋で、情緒不安定。とてもついてゆけないと女子社員たちは噂をしている。

その夏雄が、夏至を過ぎた頃から、何か鬱病にでもかかったかのように、口数も少なくなり、落ち込みはじめていた。発狂指数は六月が一番高い。一年で、鬱病になったり、自殺したり、原因不明でぼっくり死ぬのは六月が多いのだ。夏雄は、世間で云う、五月病ではなく、六月病に罹っていた。

あれほど、やる気に満ち溢れ、はりきって会社を飛び出してゆく男が、しょんぼりして、契約もとれずに社に戻ってくる。そして、パソコンに向かっていても、じっと一点を見据えたまま、時折涙ぐんだりして、どうも様子がおかしかった。

同僚の営業二課の主任が、心配して夏雄の背中を叩いた。

「おい、どうした。六月はおまえの季節だろうが。毎年、社内では記録的な成績を挙げていたじゃないか。ここんところ、スランプかい。今夜あたり、どうだい、一杯やらないか」

「いや、どうも、夜は苦手だな、明るいうちに帰ろうと思う」

夏雄は妙に夕方になると、そわそわし出して、机の上を整理すると、残業することもなくさっさと帰宅する。家に帰っても、老いた両親がいるだけなのだが。飲みのつきあいもない、麻雀にも、コンパにも顔を出さない。それでは、いつまでも結婚相手もみつかるわけがない。

夏雄は精神的に異常だった。夕方になると、妙に落ち込んできて、しんみりと頭を垂れる。それは、夏至が過ぎた頃から徐々に始まっていた。そんな夏雄のたそがれている様を、みんなはちらちらと見て笑っていた。

「あの人、前からおかしいとは思っていたけど、きっと本物よ」

「何か、人に云えない悩み事があるのよ。彼女にふられたとか」

とうとう、上司まで出てきて、夏雄は応接室に呼ばれた。

「体のほうは、別に異常がないのかね。健康診断を受けたほうがいいのじゃないか」

「……」

「プライベートなことで、何か悩みがあるのだったら、個人的にも相談に乗るが、どうだ、話してもらえんかね」

「……」

「それとも、少し、休んだらどうかね。君は疲れているんだ」

「……」

「さっきから……しか云わないが、点が六つあるのは、何か意味があるのかね」

「……………」

「そうか、今度は九つになったな」

ということで、じっと人の目を見詰めていたと思うと、急に震えだして、さめざめと泣くのだ。夏雄は不安でいっぱいになっているようだ。何の不安なのか。

「判った。明日から休暇をやろう。ゆっくりと静養するんだな」

営業課では、そんな夏雄を励まそうと、ビアガーデンに課内全員で繰り出すことになった。

「なあ、おまえのために、みんなして、激励ビアパーティーをやろうとしている。元気だせよ」

二課の主任が、夏雄の肩を揉んだ。

「いいんだ。どうせ、みんな、おれの気持ちは判らないんだ」

夏雄はやけにいじけている。

「判っているって、おまえの気持ちぐらい」

すると、いままでしおれていた夏雄が、急に立ちあがって叫んだ。

「なんだと、おれの気持ちが判るってのか。それじゃ、八月二十日と対照的になる日はいつだと思う？」

「八月二十日だと？ 何のことだい」

「そら、知らないじゃないか。八月二十日は四月二十日と同じなんだ。九月二十日は三月二十日と同じで、十月二十日は、判るか、秋の夜長だ、実に二月二十日と同じなんだよ。あの、秋の半ばがだぜ、真冬の雪降る頃と夜の長さが同じなんだぜ」

夏雄は、意味不明の月日を対比させて、主任の胸倉を掴んでいた。みんなは、一斉に立ちあがり、興奮して叫んでいる夏雄を止めようと間に入ろうとした。そのとき、夏雄の鉄拳が、主任の顔面に飛んだ。主任は鼻血を天井にまで飛ばして、その場に倒れていた。

「きさまに、おれの気持ちが判ってたまるか。夏至から、どんどん昼が短くなってくるんだ。夜が長くなってくるんだよ。ばかやろう」

夏雄はみんなの制止もきかず、主任に馬乗りになって、ボカスカと殴りつけるのをやめない。夏雄は、鼻水も涙も一緒になって、べろべろになっていた。そして、半狂乱になって、血しぶきで真っ赤になった主任の顔を殴り続けた。

「いいか、もう、これからは冬至まで、一直線に傾いてゆくだけよ。それなのに、おれの気持ちが判るだなんて、ばかやろうが」

遠くから救急車のサイレンが近づいていた。

第509話 戒名

人は突然生まれることはないが、突然死ぬときはある。いままで、元気で減らず口を叩いていたじいさんが、珍しいことに、万年蒲団をたたんで部屋の掃除を始めた。そして、疲れた疲れたといつもの口癖で、昼から内風呂に入ったまま出てこない。

心配になった倅の明彦は、嫁の悦子に云われて、そっと覗いてみると、なんとじいさん風呂場で体を綺麗に拭いたあと、そのまま事切れていた。目を剥いたまま、仰向けで倒れていたのも、慌てた倅は、じいさんの名を呼びながら、懸命に首を絞めていた。

「あんた、何しているのさ。首を絞めてどうするのさ。心臓の発作だから、マッサージだよ」

もともと、心臓の持病がある。前にも一度発作がきて、救急車で運ばれた。顔色が青くなっている。チアノーゼが出ている。

「た、大変だ、呼吸は止まり、息をしていない」

「ばかだね、呼吸と息は一緒だよ」

すでに手遅れのように、心臓マツサージの段階ではなかった。

「とにかく、電話だ」と、明彦は火葬場に電話していた。

「ええ、たったいま死んだばかりで、ええ？ 埋葬許可証？ 二十四時間おけて」

明彦は怒って電話を切った。

「実に不親切なやつだ。すぐ火葬はできないとぬかしやがる」

「それはそうだよ。みんなにお別れしないで、どうして、火葬を急ぐんだい」

「だって、もしも生き返ったらどうする、おまえ」

生き返る前に焼いちまおうって魂胆らしい。それほど、親子の仲が悪かった。

じいさんは、身辺整理して、湯灌をする必要もないほど、体を綺麗にして亡くなった。実に用意周到の死に方に遺族は関心していたが、肝心の遺族が用意が悪い。いざというときに、何をしなければならないかが、まるで判っていない。死んだじいさんをともかく蒲団に寝かせて、テレビ見ながら、ゲタゲタ笑って、

「なあ、今晚の献立は何にするんだい」と、お茶をゆっくりと啜っていた。ようやく悦子が気がつく。

「あんた、こんなワイドショーなんか見てられないんだよ。医者だ、葬儀屋だ、親戚にも電話」

元来、のんびりしている明彦は、どうもずれている。近くの医者が来たが、獣医だった。「うちは人間はみないんです」と、怒って帰った。今度はちゃんとした医者がきて、死亡を確認した。診断書もただではない。それから、葬儀屋が吹っ飛んできた。こちらは早い。手馴れたもので、家の前にすぐさまばってんの木を打つと、喪中の張り紙。近所が集まってくる。

「お寺さんはどこですか」と、葬儀屋に訊かれて、明彦ははたと困った。普段はあまり縁のないお寺だ。話には聞いていたが、行ったこともない。この家で人が死んだことはない。本家ではないので、電話で訊くしかない。

「お宗派はどちらですか」それも判らない。

「アレフでなくて、シーア派でなくて、あの、その」と、普段からまるで用のない寺のことなど覚えてもいない。ようやく、電話で駆けつけてきた本家の婆さんが、禅宗であると教えてくれた。婆さん、仏さんを見て驚いた。

「何だよ、これは」

あまり慌てたので、じいさんに嫁のネグリジェを着せて、枕は娘のキティちゃんの枕。葬儀屋がさっそく、経帷子に着替えさせ、体を拭いた。枕も北枕にして屏風がないから、祭壇で仕切り、その後ろに仏さんを寝かせた。

続々と親戚が詰め掛ける。悦子はお茶を出すのに忙しい。孫たちも学校から帰ってきた。狭い家が人でびっしりとなる。葬儀屋はビジネスライクにてきぱきと予定を決めてゆく。納棺は明日の朝、出棺はあさっての朝、火葬は午前中から午後にかかる。通夜はその翌日。葬式はさらに翌日の一時からと、それに則って、進めてゆく。新聞広告も載せる。葬儀は寺で、法事は会館で、法事に呼ぶ人選もしなければならない。

そこへ坊主が到着する。高そうなブランドものの腕時計をしている。乗ってきた車が外車の高級車だ。すぐさま読経を始めた。

それが済むと、お寺さんとの打ち合わせ、見積書なんてないようで、いくらかかるのか遺族はそればかりが不安だ。葬儀屋の方は、すべて予算に応じて、写真入りのアルバムまで持ってきていて、判りやすい。

「祭壇は、二百万、百万、五十万といろいろございます。霊柩車も、リンカーンコンチネンタルから、一番安いリヤカーまで取り揃えております」

見栄もあり、懐具合もあり、難しいところだ。結婚式のように会員制にすることはできないので、葬式は必ず足が出る。問題はお寺さんだ。

「戒名はどうされますかな」と、坊主が訊く。そんなことも考えたこともない。本家の婆さんが、口を出す。

「うちは格式ある家だから、ケチるでないよ。院は付けてもらわねば、九つくらいで」

と余計なことを云うから、坊主はにっこり笑う。

「院をつければ、読経も込みで百万円」

「ええ？ 戒名だけでひ、百、万、円」

もう少しで泡を吹いて倒れるところだった。読経を別にすれば、ひと文字十万という計算だ。それで、明彦は云いにくそうに尋ねた。

「あのう、院が付けば、あの世で、何か待遇が違うんですか。美人の付き添いがつくとか、三途の川を渡る船が特等席だとか」

「三途の川も金次第、それは棺桶に入れておきましょう。ただ、生前の功德を名で表すのですな」

明彦は自分の戒名を想像してみた。林語院古本高価買取笑顔現金払明居士と十七文字も並べば百五十万以上になる。もし、三十、五十文字が並べば五百万の戒名もあるのか。と、シロウト考えで、偉大な政治家、実業家はすごいのだろうと思いを巡らしていた。

「はあ、それでは院と居士をつけて、しかし、支払いはクレジットの十回払いでもよろしいですか」

「ははは、うちは分割はしておりませんが、まあ、いままでお宅の爺様にはお世話になったでな。二割引の八十万ぽっきりで大サービスいたしましょう」

明彦はねぎったわけではないが、戒名にも特価ということがあると始めて知った。

「して、当日は何人坊主を呼びましょう」

一人十万という。わずか三十分の読経二日分なのだが、時給計算では一時間十万。これは坊主丸儲けだ。十人並べれば百万、百人で大合唱すればなんと一千万かかるという計算だ。これは考えただけでも大変だ。明彦は悦子の手をとって不安でいっぱいになりながら云った。

「これじゃ、おいそれと死ねない。おまえ、死ぬなよ。おれももう怖くて死ねなくなったから、死なないようにするからな」

行き場のない若者ひとり。今年の春に大学を卒業したが、就職活動で失敗して、新規採用の秋からは遠ざかり、いまとなってはろくな仕事がない。就職浪人一年目を迎えていた。

竹田隆文は、一流の上場企業ばかり狙っていたが、倍率が高く、公務員試験も落ちていた。大学時代に遊んだのが祟っていた。就職試験のための俄勉強も付け焼刃で、今頃になって本も読んでいなかった四年間を悔やんでいた。当世の大学生は本を読まない。受験で燃え尽きて、解放された気分大学にはいたけれど、なにをしてきたのか。選ばなければ、どんな仕事もあるのだが、プライドが許さない。腰掛でとりあえず就職という選択肢もないわけではなかったが、履歴書に傷がつくのを恐れて、最初から高望みをしていて数十回の試験を落ちていた。人間、あまり手ごたえがなければ、やる気がなくなる。最近、リクルート情報紙に目を通すこともなく、ただ、アパートで昼間は寝て、ぶらぶらとゲーセンなどを覗いて歩いていた。田舎からはいまだに仕送りがあるから生活には困らない。

どこへ行こうか。毎日、行き先を考えるのも鬱陶しい。仲間はずでに多くが就職してしまい。自分だけが取り残されている寂寥感に襲われていた。世の中はそれほど甘くはなかった。なんとかかなと思っていたのは、学生時代だけで、社会に放り出されると、なんともならない。不景気が長引いて、どこも採用人員を減らしていたから、狭き門もいいところだ。

隆文は、行くところがないから、ファーストフード店と思ったが、ポケットに手を入れると、百円のコーヒーも飲む金もない。アルバイトという屈辱は味わいたくないので、ぐずぐずと足踏み状態だ。それで、気がついたら、図書館の前に来ていた。図書館なんか、入ったこともない。元来、本を読む習慣がなくなっていたから、いまさら、本を読むということに抵抗感がある。活字アレルギーになっている自分が、このまま阿呆になってしまうのかと、それもまた恐ろしい気がした。

図書館の中にふらりと入ると、雑誌のコーナーへと足が向いた。そこには新聞各紙と、今週の週刊誌が置いてある。他の用のない爺さんたちに混じって、隆文は週刊誌を椅子に座って見ている。もう、マンガか週刊誌より見れなくなっていた。

就職試験問題は、英語で時事問題が出たり、いままで見たこともない専門用語が羅列してあり、ちんぷんかんぷんだった。政治、経済など世の中のことに余りに無頓着だったので、新聞もテレビ欄と芸能ニュースしか読まなかった。第一、目を通す新聞ときたらスポーツ新聞ばかりだ。外国で戦争が起ころうが、株価が暴落しようが、隆文の関心といったら、巨人が勝つことと、サッカーのJリーグなどその辺に限られていた。あとは、ビデオで録画予約した映画なんかを見ること。一日のうち、ゲームをしているのが二時間、テレビを見ているのが六時間、ギターを弾いているのが二時間、パソコンでアダルトサイトを覗くのが二時間と、一日の半分はアパートで閉じこもっていた。

友人たちとたまに会うこともあるが、みんなそれぞれの新しいつきあいがあり、給与をもらっ

ているので、無職で小遣いも少ない隆文はとてつつきあえない。そんな状況で彼女もできるわけがない。煙草代にも事欠く始末だ。

図書館の奥にソファがあった。回りが本棚に囲まれて、誰にも見えない場所がある。隆文はそのソファにごろんと横になったまま、つい寝入ってしまった。いつも昼寝をする習慣がここでも出ていた。

隆文が目覚めたときは、すでに真っ暗であった。初めは、寝ぼけていて、自分がどこにいるのか判らなかつた。

「そうだ、ここは図書館だった」

起き上がると、すでに閉館したとみえ、誰もいない。非常灯と、赤と緑のランプだけが、遠くにぽつんと点いていた。腕時計を見ると、真夜中の二時だった。大変だと思った。つい、寝ていて、職員が隆文に気づかないで、閉館してしまったのだ。隆文は焦っていた。非常口のサインの見える鉄製のドアのノブを回してみたが、内からは開けられない。どこのドア、自動ドアも開けなかつた。窓もあったが、開閉できない窓だった。隆文は完全に図書館の中に閉じ込められてしまった。

「誰かいませんか」

大声で叫んでみた。どうやら、管理人も誰もいない無人のようだった。最近、セキュリティシステムが完備されて、人件費節減のために夜警など当直の職員は置かないのだ。困った。このまま、朝までいるしかないのか。職員が来ると、泥棒に間違えられるかもしれない。別に図書館には本よりないので、泥棒が入るわけではないのだが、それでも公共施設に侵入したと警察に突き出されたらどうしようか。隆文は不安でいっぱいになっただけではない。夜中の図書館がこんなにも不気味であるとは思わなかつた。

と、笑い声がどこからかするのだった。「誰がいる」隆文は、身をかがめて、本棚の脇から笑い声のする方角を見ようとした。暗がりも非常灯の明かりだけで、なんとか見える。

「きさま、どこから進入したか」

いきなり、隆文の後ろから男の声がした。振り向くと、そこに歩兵銃を突きつけている日本兵が立っていた。

「見慣れない顔だな。どこの部隊のものだ？」

「いや、ぼくは、ただ、本を読みに来たよ」

すると、今度はバサバサと鳥の羽ばたきがしたと思うと、大きな鸚鵡が飛んでいった。

「イタ、テキヲハッケンセリ」鸚鵡がそんな物真似をしていた。いつのまにか、本棚は密林に囲まれていた。どっしん、どっしんと今度は地響きがすると思ったら、突然、図鑑が開いて、そこからアフリカ象が飛び出して、通路を歩いていた。

隆文は夢でも見ているのかと思った。次々に本のページからいろんなものが飛び出してくるのではない。本棚の間は賑やかに歩く人々でいっぱいになった。鹿鳴館時代の婦人が日傘をさして歩いたり、鎧姿の中世の騎士が剣と楯で武装して、近づいてくる。まるで、世界史と動物図鑑と小説の主人公たちをどっど玩具箱にぶちまけたような賑わいだ。

「どうした。何か悩みごとでもあるのかな」

その中のひとりが隆文に近づいて話しかけた。どこかで見たことがある顔だった。誰だろうと

考えていた。

「いま、仕事を探しています。試験でみんな落ちて、滅入っているところです」

隆文は、その大きな人物に非常に安心感を感じて打ち明けていた。

「そうか、こんな狭いところにごちゃごちゃと、人間が住んでいる江戸にいるからだろう。これからは君たち若者は外国へ行くのだよ。外に目を向けたまえ。もっと広い土俵で相撲をとることを考えんとな。そのためには、勉強だよ。ここには、こんなに本がある。見慣れない本ばかりだが、知識の宝庫だ。君には世界も君自身もまだ見えていないのだ。もっともっと世の中を覗いてみる必要がある。思い切って、本を開いてみることだ。そして、一步を踏み出すのだ。そこから始めようじゃないか」

ちょん髷を結った武士が近づいてきて、声をかけた。

「勝さん、そろそろ戻りませんか」「榎本君か、そうだな。ここはどうも騒々しくていけない」

隆文はようやく思い出した。勝麟太郎だ。そして、榎本武揚。すごいと息を呑んだ。二人とも、ずっと本に吸い込まれるように消えていった。本の世界というのは、何か面白そうだった。とんでもないものが隠されているようだった。しかも、隆文の悩んでいる人生の回答がどこかに用意されている気がした。

いつのまにか、隆文は吸い込まれるようにまた隅のソファで寝入っていた。

次に目が覚めたときは、周囲が明るくなっていて、ひょいと顔を出してみると、じいさんたちが新聞を読んでいる。

「なんだ、夢だったのか。それにしてもリアルな夢だった」

と、一時間くらい午睡したと思って、新聞を何気なく手にとると、驚いた。それは、翌日の朝刊だった。腕時計を見ると九時過ぎたばかりだ。ということは、ぼくは、やはり朝まで寝ていたんだ。隆文は真夜中の図書館の様子が夢ではないような気がしてきた。

隆文は、本棚の本を見て歩いていた。日本史のコーナーから、幕末関係の本を数冊選んでいた。そして、海外で就職する法という本も選んだ。ついで、英会話と商業英語の本もだ。それを抱えて貸出カウンターまで持っていった。

「初めてですか。貸出カードを作りますので、この用紙にお書きください」

司書の女性は、にっこりと笑って云った。隆文は図書館で本を借りるのは初めてだった。何か心のときめきを感じていた。

第511話 知事の資格

各地の知事の不祥事があまりにも多いので、新たな法律を作り、知事に立候補するためには資格を取得しなければならないこととなった。これは本当は知事だけでなく、すべての政治家に行いたいところだが、それを実行すれば、現職の議員がすべて資格要件を満たしていないため、試験に落ちることとなる。清廉潔白な政治家というのは皆無に等しいということか。

青森では、その法律が実施されての最初の知事選挙になった。全国の注目を浴びていた。今回の選挙では四人の候補が届けを出したが、届け出制ではない。あくまでも、テストに合格した者だけが立候補できるのだ。専門家の間では、その試験の合格率は恐らく一割にも満たないという試算が出た。かなり厳しいテストの内容になっていて、人間の脆さ、弱点をついた欲望テストとでもいうべき内容だった。

さっそく、テスト会場のホテルに候補者たちがやってきた。

「どうですか、二村さん、自信のほうはございますか」

テレビ局のインタビューに答えて、保守側の候補が自信満々に答えた。

「なんの、政治家になるもの、どんな誘惑に負けてもいけない。わたしには、強靱な精神がある。負けてはおりません。はははは」

対する候補の横田氏は、堅くなって答えていた。

「全国初めてのテストですから、なんとも云えませんが、わたしは、金権体質を批判してきました。そんなものには目もくれません」

報道陣だけで会場は溢れかえっていた。大方の見方では、このテストで合格し、知事に立候補できる資格を得るものは一人しかいないだろうという。そうすれば、無投票で当選が決まるというもの。それほど難関だという話だった。

さあ、いよいよテストが開始された。それぞれの候補は別々の部屋で、試験管のいない部屋に閉じ込められる。隠しカメラだけが、どこかに何台か設置しており、それが、選挙管理委員会のこもる部屋のモニターに放映される仕組みになっていた。部屋の中には候補の他に二十歳くらいの可愛い女の子が待機していた。超ミニのスカートに胸の谷間の見える薄いTシャツ姿だった。候補者は、机に向かって、本を読んでいる。いや、読むふりをしている。女の子は、わざとらしく脚を組替えたりして、ちらちらと下着を見せている。その反応をテストするのだ。第一段階で合格すると、女の子はだんだんと過激な挑発に乗り出す。

「この部屋、暑いわね」

と、いきなりTシャツを脱ぎ始める。それでも、候補は知らんふり。もし、少しでも視線を送ると不合格になってしまう。どれほど女に強いかが、これからの知事に求められる資格要件なのだ。

中には、脂汗を垂らしている候補もいて、内心は、（見たい、見たくてたまらない）と葛藤しているのだが、目を閉じれば違反になる。あくまでも平生を保つことが細かくチェック分析されているのだ。

女の子は下着姿からとうとうすっぽんぽんになって、候補の前を行ったり来たりしていた。それでもぐっと我慢をするこの辛さ。拷問にも等しい。正常な男性であればとても耐えられない。そのうち、女の子は候補者の首に手を回したり、体を摺り寄せてくる。それでも我慢する。

ところが、ある候補が、耐えられなくなって、乳首にがぶりと噛み付いた。それで失格。知事になればいろんな色仕掛けも出てくるだろう。スキャンダルに巻き込まれないように、女には強くなければならない。

そのテストには一人落伍者が出て、三人に絞られた。次は、別室に移されて、金権テストを行う。候補のいる部屋に、ノックして知人の土建屋の会長が入ってくる。

「やあ、今回は知事に立候補するようで、わしら業界では総出で応援いたしますよ」

馴れ馴れしく会長は候補者と握手を交わして、さらに抱き合うといったスキンシップで近づいた。そうした行為が安心感を得る。相手の警戒感を解くには、言葉より触れ合うことだ。

「ところで、応援する見返しに、是非、公共事業の前倒しをしてくださいよ。来年からは、かなり予算が緊縮されるのは目に見えていますからな。いまのうちにですな、駆け込みということでよろしく頼みますよ。選挙資金として、この本の中に一億円の小切手が挟まっています。監視カメラがありますからな」

会長の声はマイクに入らないような小声だった。そうして、

「いやあ、この本を読みましたか。いま話題のベストセラー《指先物語》ですよ。ほう、まだ読んでいない。是非読んでみてください。いやあ、面白いですよ」

と、会長は急に声を大きく、笑いながら、本を候補者に手渡そうとした。

「そんなに面白いんですか。それじゃ、借りて読んでみますかな」と、受け取ると失格だ。とても、テストであることを忘れるような、単なる陣中見舞のような態度にころりと騙される候補がいて、そこでひとりが失格となった。

次のテストの内容は候補者には知らされていない。何がどこで起こるか判らない。二人に絞られた。マスコミの予想通りの一騎打ちになった。二人とも、無所属で出馬する予定だった。ただ、政治団体や各党のバックアップは漕ぎ着けていた。いまは、無所属のほうがクリーンなイメージがあって、本当は紐つきなのだが、表面にはあくまでも出さない。

テストが終わったように見せかけていた。二人の候補は、やれやれといった顔でラウンジでマスコミのインタビュー攻勢を受けていた。

そうして、ひとりの候補者が、事務所に帰ろうと、ホテルを出たところに高級車が到着した。車から降りてきたのは、大臣だ。党の幹事長。顔見知りなので、互いに笑顔で握手した。

「よく立候補を決断しました。わが党としても協力体制で、あらゆる団体を動因して応援しますよ。して、当確の暁には、是非、わが党に入ってくださいよ。その代わり、相当な地位を約束いたします。知事の次には国会議員、そして大臣のポストも空けておきますからな」

候補者は心を動かされた。つい、その気になって、快諾した。

「それじゃ、いまは無所属で出ますが、そのあとのことはすべてお任せいたしますよ」

そして、二人は契りの握手を強く交わした。

「失格！」と、大きな声がマイクから流れた。

政治家は権力にも強くなければならない。

第512話 ホームページ

遙商事では戦略会議が開かれていた。金澤社長が冒頭に、幹部社員の前で方針を述べていた。「わが社もこのままでは世の波に乗れずに沈没するかもしれない。そこで、このたび、思い切ってパソコンを導入した。世間ではすでにどこも持っているらしいが、わが社だけはいまだにそろばん、ものさし、計算尺。しかも、広告媒体は昔ながらの街頭放送とヒマワリだ。これからはIT時代だから、わが社のホームページを立ち上げて、通販に参入しようと思う」

「おい、ITって何のことだ」大塚主任が同僚にそっと訊いた。

「ばかだね、おまえそんなことも知らないのか。アイテエ、すなわち会いてえということで、出会い系サイトのことだよ」と、工藤係長が耳打ちした。

いままでの遙商事は完全に時代から取り残されて、それぐらいのことしかなかった。アナログ人間の集団のような会社だった。

IT担当になった伊藤はパソコンに触ったこともないので、一週間だけ、パソコンスクールのビギナーコースに通うことになった。それで、なんとか文章くらいは片手で打てるようになった。次に、「三時間でできるホームページ」という本を買ってきた。いまは、小学生でも楽々ホームページぐらい作れるようになっているのだ。

「何だ、簡単じゃないの」伊藤は、嬉しくてたまらない。

出来合いのフォーマットにただ文字を載せてゆくだけだ。壁紙も自由に選択できるし、画像も入れられる。商品のリストから注文ボタンまで、すべて用意されている。文字も、いろんな種類があるし、自分で自由に作ることもできる。アニメーションを利用して、文字も動かせる。BGMも入れられれば、ホームページを見るたびに数字が増えるカウンターも貼り付けられた。

「できた。できました、社長」

伊藤は興奮して、社長に報告に行った。

「そうか、できたか、よくやった。このひと月というもの、苦労しただろう」

二人で抱き合って泣くほどの感激だった。全社員が事務所に集まり、いよいよホームページをサイト転送する。新しい店が開店するときのテープカットのような雰囲気だった。ところが、それがスムーズにゆかない。そう簡単ではないところがコンピュータなのだ。

「おかしいな、ちゃんと設定はしたのにな。もう少しなんだけど」

伊藤は首を傾げていた。みんな期待でわくわくしていたのに、がっかりして仕事に戻った。伊藤は、カスタマーセンターに電話したが、そこはいつも話し中。何回電話しても通じない。ようやくプロバイダーに繋がり、電話で手ほどきを受けた。設定が結構ややこしい。真夜中までかかって、ようやくサーバーにアップすることができた。ネットに繋いで、アドレスを打ち込んだら、自分の作った遙商事のホームページがモニターに浮き上がった。

「やった、やったわ、みんな、社長、やりました」と、伊藤が回りを見ると、みんなはとっく

に帰って、事務所にひとり。時計は夜中の二時を打っていた。

遙商事では、紐やロープを主に販売していた。パンツのゴム紐から首吊り用のロープ、奥さんの体を縛るロープまで多用途の紐を扱っている。いままでは、デパートやスーパー、コンビニに卸していたが、売上は頭打ちから降下気味。そこで、通販で販路を広げようというわけだ。

翌日、みんなが出勤してくると、いよいよ開店のお祝いも兼ねて、朝からジュースで乾杯だ。スイッチを入れて、ネットに繋がると、モニターに遙商事の文字が浮かび上がる。

全員から拍手が沸き起こった。これで、わが社も売上が急上昇、毎日、メールで注文が山ほどくるだろうと、みんなはそう信じて疑わなかった。

「これで、わが社も世間並のテレワークという仕事に入ったわけだ。これから忙しくなるぞ。みんな頑張ってくれ。ボーナスをこれで勝ち取ろう」

社長も涙ぐんでいた。活路がこれで切り開かれれば、潰れることはない。

ところが、一日経っても、二日経っても、電話の一本もこない。メールボックスには着信がない。いつも空っぽだった。

「おかしいなあ」伊藤は期待が大きかったばかりに焦っていた。すると、あるとき受信してみたら、着信が五件もあった。

「し、社長、メールが来ました。五件です」

伊藤が叫んだ。そのたびに社員たちもパソコンの周りに集まってくる。

「どれどれ」と、メールを開いてみると、
一あなただけにそっと教えます。絶対に人に教えないでね。下のアドレスをクリックしてね。わたしの恥ずかしい秘密、見せちゃいます。

「何だ？ これは」次のメールを開く。

一ネットですぐに貸します。いまなら金利も安いネットローン。

「他にないのか」次のメールを開く。

一本を売るなら林語堂。現金高価買い入れ。レアものが眠っていませんか。

「こんなのかなのか。注文はないのか」社長は苛々して怒鳴った。次のメールは訳が判らない。なにやら添付ファイルがついている。そのクリップマークをクリックした途端、画面に火花が上がった。

「な、な、何なのだこれは」

伊藤ものけぞった。ウイルスにやられたのだ。すべてがファイになった。いままでの苦労は何だったのだろう。また一からやり直し。

だんだんとパソコンにも慣れてきて、ホームページを立ち上げてひと月経っても、注文は一件もなかった。金澤社長はがっかりして、知人のインターネットに詳しい人に相談してみた。

「ホームページで営業というのは難しいものですか」

「それはそうですよ。五年前なら、まだあまりやられていないので、見る人も多かったでしょうが、いまは、日本だけでもホームページはゆうに一億ページは超えているでしょうね」

「い、一億、ですか」

「そうです。国民ひとりひとりが、背中に自分のホームページをぶらさげて、みんなに見てくれと云っているようなものです。もっと具体的に云いますと、三百ページの単行本で33万冊です。

これは、県立図書館の蔵書に近い。いいですか、あのずらりと並んだ本棚から、一冊の本を抜いて、ぱらりとめくったページが遙商事のページということになります」

「そ、そんなに沢山の人が出しているんですか」

「いまや、角の煙草屋さんから、小学生の低学年の子供まで立ち上げている時代です。おたくのページにたどり着くにはどうすればいいか考えないと」

「アドレスをみんなに印刷して配るとか」

「あんな長いアドレスは暗記できません。それより、過激なキャッチコピーを検索エンジンに載せるとか、トップページにヌードを載せるとか、そんなことでもしないと見ませんよ」

社長は落胆して会社に戻った。そんなに満員だとは知らなかった。猫も杓子もホームページの時代だったなんて。それでも、きっと毎日、全国で何人かは見ていてくれるはずだ。カウンターが増えているから。希望を捨てないで、訪問客数のカウンターを覗くことが日々の楽しみになっていた。

「おいおい、ひと月で六十人が見ているぞ」

社長が小躍りしてみんなに云うと、醒めた目で前田課長が云った。

「それはですね、社長と伊藤さんが、それぞれ毎日覗いている件数です」

第513話 道路工事

道路工事だけはいつでも元気がいい。この不況下でも予算が下りる。湯水のように金を使い、全国津々浦々まで道路を掘り起こしては、なにやら怪しい工事が突貫作業で進められている。道路の下の土地は誰のものだろう。国道の下は国のもの、県道の下は県のもの。五十メートル掘っても、百メートル掘ってもどこまでも道路を管理する行政のもの。

道路の下はかなり深く掘られている。そんなに深く掘って、何をやっているのだろう。水道管でも、電線を埋没させるキャブシステムの工事でも、下水工事でもそんなに掘る必要もないことだ。一般市民には知らされない、どうやら大変な秘密があるらしい。一度、シートが覆っている工事現場を覗いたら、鉄枠を埋め込んで、基礎工事が大掛かりだ。それが、随分深く深く地中の底まで掘り進み、驚くほどの空間があるのは何故だ。

わたしは、地中深くに機械類を埋めているのに着目していた。電信柱をなくして、電線と地上のあらゆるケーブルを地中を埋める計画は全国で進められていることは、街の景観ということで理解はできるが、それにしても、一体、何を何ヶ月、何年もかかってやっているのでしょうか。

いろいろと街の工事状況を調べてみれば、それが行われているのは、国道に限られていた。しかも、全国の三十万以上の都市の中心部から、国道を繋ぐ格好で、都市と都市を結ぶトンネルまで造られているのだ。

国土交通省の資料室へ出向き、開示請求をして、過去の工事内容を調べても、表向きはすべて、下水及び光ファイバーの通信網整備という名目で行われていた。果たしてそうだろうか。疑惑は、調べれば調べるほど、地中深く闇の中。国民の見えないところで、国家予算の四分の一が

使われているのだ。それが、毎年そうなのだ。このまま、十年も工事が進めば、二百兆も注ぎ込むことになる。光ファイバーだけで、計画では五十兆というから、あとのオーバーした分については、とても、周辺の整備事業ということでは片付けられない。

わたしは、密かに、道路工事を請け負っている、大手建設会社の幹部が同期生ということで、接触を試みた。彼を居酒屋に呼んで、どんな仕様で発注されているか聞き出そうとした。彼は、四十半ばだが、わたしが左翼系のオンブズマンに入っていることを知って、態度を硬化させていた。

「仕事の話ならお断りだ。判るだろう。他言したとバレたら、工事の指名から外される。それだけでなく公共事業が一番やり玉に挙げられて、談合も監視され、われわれは肩身の狭い思いをして仕事をもらっているんだ」

酒の力でも口は堅く、なかなか話さない。そうすると、ますます怪しいと確信することとなった。

「まあ、ただ、何をするつもりか知らんが、見て判る通り、深いことは無駄なくらい深いよな。五十メートル以上はあるからな。それに、鉄板やコンクリの使用量も並ではないしな。目的は判らんが、地下シェルターでも造るつもりなのかな。おっと、おれが云ったとは、書かないでくれよな。首が飛ぶ」

そこまで聞いて、わたしは初めて、何か大きな事業の概観が見えてきたように思った。

これは、もっと本格的に調べる必要があるなど、わたしは現場へ潜入する決意をした。まるで、スパイのような装備を揃えていた。小型の赤外線カメラと、赤外線監視眼鏡だ。これは、米軍で使用しているやつを横流ししてもらった。夜間暗いところでも見えるばかりか、セキュリティシステムの赤外線装置を見破ることができる。それと、登山に使うザイルと、音のしない地下足袋と、全身を黒く覆ったウェットスーツだ。

それで、工事の手薄の土曜日の夜間を狙った。普段は厳重な警戒があったが、土曜の夜だけは警備が空になるのだ。国道で、一番大掛かりにがんがんやっているところの近くのマンホールから侵入した。梯子を降りてゆくと、人がひとりようやく立てるほどの下水道が続いている。まだ、使用されていないので、下水管の中は何も流れていない。

その中を懐中電灯の明かりを頼りに進んでゆくと、前方から光が漏れてくる。わたしは、慌ててライトを消すと、赤外線眼鏡に切り替えた。下水管は、途中で切れていた。まだ、すべてが繋がっていないと見える。煌々と照明が点いている広い空間に顔を出した。人の気配はない。確かに広い。ビルがすっぽりと入るくらいの広さだ。下を見ると、三十メートルはあろうか。周りはずべて鉄筋コンクリートで固められ、実に堅牢な構造になっているようだった。

クレーンも止まったままだ。一番の底には、物資をどこかへ運ぶための立派な道路までできていて、見たことのないトラックが無人で止まっている。わたしは、ザイルを下水管に引っ掛けて、昔慣らした登山技術を駆使して、地下室の底へと降りていった。どこかで、地下水が音を立てて流れている。

底に着いて驚いた。道路の両脇には共同住宅らしき、三階建ての建物がびっしりと並び、その反対側には、スーパーや病院、コンビニのような建物があるのだ。内装はまだやっていないが、

建物の造りがそうなのだ。道路に止まっている車は、特注の電気自動車のようなだった。排気ガスを出すマフラーがどこにもない。わたしは、赤外線カメラでその地下都市の様子を撮りまくった。

すると、いきなり、警備員の格好をした男たちに取り囲まれ、警棒に仕掛けられていた電気銃で、ショックを与えられ、その場に卒倒していた。

しばらく意識を失っていたが、気がつくと、手足を縛られて、土牢のようなところに転がされていた。真っ暗で何も見えない。

「おーい、出してくれ」と、叫んだが、その部屋は密室のようで声がどこにも漏れないようだった。

「新入か。いくら叫んでも聞こえないぜ」

暗がりに声がした。すぐ近くに男がいる。

「誰だ。あんたもここに閉じ込められたのか」

「そうだ、おれは聞屋だ。取材のため侵入して捕まった」

「ここは、どこなんだ。やつらは一体、何をやろうとしているんだ」

「どうやら、地下帝国を建設しているらしいが、第三次世界大戦で、地上にはこれからは放射能汚染で住めなくなると推測しているらしい」

「おれたちをどうするつもりなんだろう」

「さあな、知ってしまったやつは、口封じをさせられる」

やがて、土牢のような四角の空間に土がさらさらと入ってきていた。それが、床一面に積もり、わたしの足から腰と埋めてゆく。

「そら、おいでなすった。まるでピラミッドの中の人柱だ」

「嘘だ、おれはまだ死にたくない、助けてくれ」

わたしは、大声で助けを求めた。砂は首まで積もった。やがて、顔を覆い、頭まで砂の中に入るのだ。砂は一分もしないうちに、わたしの顔を覆い、口から耳から鼻穴から入り、塞いだ。空間は少しもない。息ができない。これは悪い夢なのだろう。早く覚めてくれ。意識が遠のく中、そればかりを念じていた。

第514話 市民課

市役所で一番忙しいのが市民課だ。一日に訪れる客数は役所一だ。

若いカップルがぴったりと寄り添いながら、婚姻届を出しにくる。

「わたし、字が下手だから、ケンスケが書いて」

「でも、自署でなければならぬだろう」とかなんとか、いちゃついて、周囲が目のやり場に困っている。その後ろでは、深刻な夫婦が互いに口も利かない。亭主のほうは、まだ、未練があるように奥さんの方を振り向くが、奥さんはあらぬ方角を向いたまま、扇子で扇いでいる。何か思いつめたような様子で、離婚届に押印して、窓口に出した。

そうかと思うと、埋葬許可証をもらいに、目を赤く腫れらかした女性がやってくる。「夫が死んで、それで許可証ですか、何も判らないものですから、どうしたらいいんでしょう」と、いまにも泣き出しそうな顔をしていた。その後ろからは、にこにこ顔の若い父親が足取りも軽くやってくる。

「あのう、出生届っていうんですか。きのう、子供が生まれたんで」

「あら、おめでとうございます。初めてのお子さんですか。男の子ですね。よかったですね」ばたばたと、慌てている様子の中年男性が、窓口に駆けつけてきた。

「て、転出届はどの用紙に書くんですか」

「同じ市内ですか、それとも」

「急ぐんだ、県外だよ、早くしてくれ」

汗を拭き拭き、後ろばかり見ている。そして、顔を隠すようにしていた。男は、転出先に電話帳で調べたでたらめの住所を書いていた。すべてが済むと、またも周囲を警戒するように眺め回すと、ふらふらとどこかへと逃げていった。

続けて青年が窓口に入った。

「印鑑証明ですね。市民カードをお持ちなら、機械からでもできますが」

人相の悪そうな、青年は、ちらちらと周りを見渡ししながら、

「持っていない。カードとハンコだけだ」

その後ろからドタドタと騒々しい足音がしてきたと思うと、振り返った青年の顔面にげんこつが命中した。青年はその場に倒れた。

「ヒロシ、なんてことするんだ。黙ってタンスからいろいろと持ち出して、また高利貸から金ば借りるつもりだろうが、そうはさせるか」

みんな呆然と眺めているところに、息をきらして、立っている初老の男がいた。道楽息子が、借金をまた作ろうとして、保証人にさせられるところだった。親子で取っ組み合いの喧嘩になったが、職員と警備員が駆けつけて、仲裁に入った。

今度は通路から、いきなり市民課のフロアに牛の鳴き声が出た。全員の目が釘付けになっていた。黒い大きな和牛が、じいさんに引かれて市役所に入ってきたのだ。

「あのですね、そんな動物を持ち込まれても困ります。どこから入ったんですか」

「裏口が開いていたからよ。裏にトラック止めているんでなあ」

「で、その牛をどうするつもりで」

「どうするもくそもねえだよ。牛もゲンカショウキヤクだとか、ややこしい話するだから、シサン課ってどこだべ。一度、うちの太郎さを見てもらって、評価額とやらを調べてもらいたいんだ」

職員が応対して、農家の人に手続き方法を教えて、お引取り願った。通路にはボタボタと牛の糞。

と、思うまもなく、青いビニール袋を担いできた中年の男が入ってきた。いきなり、窓口のカウンターにゴミ袋をどっさり置いて、口を解いて、中身を出して見せた。

「こんなものが、うちの前に捨てていったやつがいるもんで、どうしたものかと」

「キャー」と、悲鳴がしたと思うと、窓口の女子職員たちは、後方に逃げていた。男子職員も血相を変えて、慌てふためいていた。その中身は、女の下半身の切断された死体だった。

「うちとしても、困るんだよね。こんな厄介なもの、捨てられた日にゃ、街の清掃やってくれるのは市役所じゃねえのかい」

「そ、それは、け、警察でしょうが。ゴミじゃないんですよ、死体。死体なんですよ」

一時、市役所の中は騒然となった。職員が通報したパトカーがやってきて、男性と、死体を警察署まで運んで行った。床に点々と玄関まで続いている血痕を掃除のおばさんがモップで拭いていた。市民たちは嫌な顔をして、そこだけは避けて通る。

市民課の待合所で名前を呼ばれるのを待っている市民たちが、一様に何か奇妙な音を耳にしていた。それは、だんだんと近づいてくるようであった。じっと耳を澄ませばそれが飛行機の爆音であると判ってくる。窓の外を指差して、職員も市民も目を大きく見開いて、体が硬直していた。セスナのような飛行機がこっちに向かって突撃してくる。次の瞬間、ガラス窓を破って、小型飛行機が、市民課に飛び込んできた。もの凄い煙と、悲鳴と、欠片が散乱した。飛行機はかろうじてカウンターに停まったまま、翼だけがもぎ取られた格好であった。

飛行機のドアが開いて、操縦士が降りてきた。

「いやあ、着陸に失敗してしまいました。ところで、この街に引っ越してきたんだが、転入届はここでいいんですか」

職員が、呆れた顔で云った。

「市役所は、お車でお越しく下さい。飛行機ではお越しにならないでください」

むし暑い日が続いていた。市民課にはいろんな人がやってくる。

第515話 海が来る日

夏休みはもうすぐだ。長い長い夏休みだ。ぼくは計画表を学校に出さなければいけない。それで、お父さんに訊いた。

一夏休みは、どこへ連れて行ってくれるの。

すると、仕事が忙しそうなお父さんは、ひやりとした顔をして、濁った返事しかくれない。

一そうだな、まあ、忙しくなければな、海にでも行くさ。

海。それを聞いただけで、ぼくはわくわくしてくる。海から二十キロは離れている、内陸の村だから、中には生まれてこの方、海を見たこともない友達もいるくらいだ。プールでは泳げるだろうけど、海は深いので、足がつかないのだろう。そんなところでどうやって泳ぐのか。溺れたら誰か助けてくれるのか。もっと小さいときから、海って、怖い生き物のように思っていた。

それから、共働きで、農協ストアにレジ打ちに行っているお母さんに訊いた。

一ねえ、夏休みはどこへ連れて行ってくれるのさ。予定表を出さなきゃならないんだから。

日曜でも休みなしで働いているお母さんのことだから、夏休みもないのだろう。どうして、大人は夏休みがないのだろう。でも、その代わり宿題もないのだけれど。どっちがいいのかな。お

母さんも返事に困っているようだ。

—そうねえ、お父さんはあてにならないから、みっちゃんと三人だけで一泊で、篠田のおばさんところに遊びにゆこうかねえ。

篠田のおばさんとは、ここから車で一時間半くらい走ったところにある。もっと山の中の温泉場だった。そこの小さな民宿をやっていた。おととしも、妹の美津子とおばさんところへ行ったのだ。従兄弟の啓三兄さんと、辰子姉さんがいるんだ。神社のお祭りがあったり、宵宮があって、花火も買って、玩具も買って、苺飴にバナナのチョコレート、食べたな。

山もいいけど、ぼくはどちらかというと海が好きだった。本物の魚が泳いでいる海で、貝や蟹なんか獲りたい。海のない村だから、山は見飽きていたし、ひとりで行けるわけもない。もう五年生だから、ひとりで海に行ってもいいのかもしれないが、先生がいいとは云わない。

学校もあと少しで一学期が終わる。だんだんと暑くなって、半ズボンに半袖シャツだ。床屋のおじさんが、毎朝、外の道路に水を撒いている。道路も喉が渴くのだろう。風鈴があちこちの軒下でちりんちりんとう鳴っている。蝉もそろそろ啼いてきた。今年は工作にしようか、昆虫採集にしようか、でも、みんな蝶ちょや蝉を集めるのが多いから、違うことをしたいな。そうだ、海に友達と行って、貝殻を集めてくるのもいいな。それで、ぼくは、篠田のおばさんちに行くのを反対して、海に行きたいとごねた。

—いいでしょう。お母さん、夏休みの宿題で貝を集めるからさ。

お母さんときたら、海は日焼けするから嫌だとか、暑いだとか云いだすから、お母さんも泳げばと云ったんだが、そんな恐ろしいことと云う。かなづちなんだろうな。海は怖いものだとそればかり。毎年、それはニュースで何人か死んだりするけれど、そんな深いところに行かなかつたらいいんだ。

学校の帰りに沼に寄ってきて、太一君たちと遊ぶのが毎日だった。どうせ、家に帰っても暑いだけだし、外に出ていたほうが、風もあって涼しい。ぼくたちは、蝉の抜け殻を集めていた。それを標本にするのではなかった。ただ、掌の中で、潰して遊ぶのだ。その感触がたまらなくいいんだ。

—いくら持っている？

と、太一君は、お小遣いのことを訊いてくる。帰りに、なんでも屋に寄って、ラムネかかき氷を食べてゆこうというのだ。ポケットには五十円玉がひとつあった。太一君は百円持っていた。それじゃ、ラムネも買えない。アイスキャンデーなら、買える。

—そうだ、アイスキャンデーにしよう。うまくゆくともう一本当たるからな。

ぼくはいつだって、当たったことはない。太一君は、くじに強いから、この前もアイスの棒に当たりが出ていて、もう一本もらったんだ。

ぼくたちは、沼を離れようとしたときに、めまいがして、立ち止まっていた。木という木が揺れていた。すると、沼の水がどこかに吸い取られるように少なくなってゆくんだ。

—地震みたいだよ。

と、太一君は気分が悪いような顔をしていた。それで、

—ぼく、帰るわ。と、ランドセルを手に持って、バタバタと走って帰った。変なやつだった。どうせ、ぼくは、家に帰っても両親ともに働いていないし、美津子だってどこかに遊びに行ってい

るに違いないから、もう少し、沼で遊ぼうと思っていた。

遠くからサイレンが聞こえていた。火事だろうか。それも見てみたい。何か、遠くで、村の広報が聞こえていたが、ここまでは声が届かない。スピーカーでお知らせをするというのは、最近では運動会とか、夏祭りぐらいのものだ。何かあったのだろうか。それも知りたいような気がしていた。空には変な雲が流れていた。上の雲と下の雲が逆に流れているんだ。こんなことってあるのかな。細い筋雲が、青空高く見えていたし、遠く西の空には入道雲も見えていた。空も何かおかしい。

ぼくが、家に戻ろうとしたら、近所のおばあちゃんが、顔色変えて、大きな風呂敷包み背負って走ってきた。

一海が来る。海が来るんじゃない。

そう口走っていた。何を云っているのか、もう一度聞こうとすると、山の方へ向かって行ってしまった。車も人もみんな山へと昇っているようだった。

村の入口で、健司が、妹の手を引いて、やはりどこかへ走ってゆくところだ。

一海が来るんだ。海が向かってくる。

妹は泣いて走っている。二人とも裸足だ。ぼくは、何が起っているのか知らなかった。村の通りはがらんとして誰もいないようだった。床屋もなんでも屋も入口のドアも開けたまま、犬一匹いやしない。電信柱が斜めになっている。家も傾いているようだ。心配で、家に帰ると、美津子もいないし、誰も帰っていないんだ。ぼくは、急に不安になって、テレビをつけてみた。電気がきていないのか、テレビはつかない。電話で、農協にかけてみたが、通じない。お母さんもお父さんも隣の町だから、歩いてはこれない。

でも、海が来るというのはすてきなことに思えた。みんな、それを見に行ったのかもしれない。こっちから行く必要もなく。向こうから来るというのも、初めてのことだ。

そういえば、海開きというお祭りをしていた。ひょっとして、そのお祭りのパレードが来るのに違いない。ぼくは、遅れをとってしまったから、あわててランドセルを投げて、バタバタと小学校の方へと走った。何かあると、必ず小学校の校庭が使われた。盆踊りのときもそうだ。バザーも学校でやる。きっと、みんな学校の校庭に集まっているに違いない。それにしてもみんな冷たい。ぼくだけ知らされていないんだ。

小学校に行くと、そこには誰もいなかった。先生も用務員さんもいない。村もがらんとしていたけど、学校も同じだった。みんなどこへ行ってしまったんだ。ぼくは急に悲しくなってきた。蝉が急に啼きやんだ。空には鳥がいつせいに飛び立っていた。ぼくは見た。校舎の後ろに壁のようにそそり立つ海を。それは入道雲と同じくらい大きかった。来たんだ。やはり本当に海がやってきたんだ。だけど、楽隊もパレードもどこにもみえない。こんなにすごいことなのに、誰もいないんだ。ぼくは、間近で覆いかぶさる高い海を見上げていた。

元子はいまどき珍しい貞淑な妻であった。琢己が仕事から帰ると、どんなに遅く来ても、晩御飯も食べないで待っている。

「あなた、お仕事ご苦労様でした。お疲れになったでしょう。お食事にいたします？それともお風呂がよろしいですか？」

ちゃんと、玄関に三つ指ついて、夫を迎える。どちらかという、いまでは古風な女性かもしれない。

「うむ、風呂にするか」

琢己は亭主関白で、女は男にかしづくものと昔からそう思っていた。女はのさばらしておくといいいことは何もない。男尊女卑で家庭はうまくまとまるのだ。そういう家風を受け継いで、代々やってきたものだ。

「あなた、背中を流してさしあげましょう」

と、元子が風呂に入り、スカートをたくし上げて、夫の背中を洗ってやる。

「子供たちはどうした？」

「ええ、まだ部活から帰らないんですよ」

この夫婦、結婚して十五年。娘息子は中学だ。八時でないと子供たちは帰ってこない。体育大会が近いから、追込みなのだろう。

甚平に着替えるのも、妻が傍らでしてくれる。服を着るのも脱ぐのも、一切が妻の役目だ。琢己はただ、黙ってつつ立っているだけで、みんなやってくれる。そんなものだと思ってなんら不思議でもない。

夫婦で向き合って、夕食をいただく。ちゃんと、ビールも冷やしてあり、夫にビールを注いだ。

「あなた、暑いでしょう」と、元子は団扇で煽いでやる。まるで、どこかの国の王様だ。晩酌が済むと、ご飯をよそおう。そんな当たり前のことも、最近の夫婦にはないようだ。妻は夫に絶対服従なのだ。夫は父親としても威厳があり、強く逞しい。子供たちもちゃんと敬語で話す。

「お父様、ただいま帰りました」

「おお、帰ったのか」

挨拶は徹底させている。子供たちの作文でも、尊敬する人は父親なのだ。琢己はまさに、自分が大黒柱であるという家族の信頼を集めて、また家を支えている自信に満ちていた。妻は、そんな頼り甲斐のある夫に夜の生活でも体を投げ出して甘えるだけで安心する。

「おい、寝るぞ」

と、夫婦の時間割はすべて琢己が決めるのだ。元子はそれに付き従う。拒むことはできない。喜んで付いてくる。夫唱婦随とはまさにこの夫婦のことだった。

「くるしゅうない、ちこう寄れ」

「はい、あなた」

と、蒲団の中でもリードするのは琢己のほうだ。家庭円満、すべて順調。こんな仕合せでいいのだろうか。琢己はにんまりと蒲団の中で笑っていた。

「あんた、いつまで寝ているんだよ。このボケが。とっと起きな。日曜日だからって、寝てんじ

やねえよ」

と、いきなり、甘い夢の中に現実の元子の声がした。琢己は、あれあれと、寝ぼけて辺りを見渡していた。

「何をにたにた笑いながら、涎垂らして夢なんか見てんだよ。さあ、掃除、洗濯、炊事をするんだ」

「は、はい」

と琢己は飛び起きる。

「親父い、早く飯食わせろよな」

あんなにいい子供たちだったのに、現実では切れている。

「は、はい、ただいま」

琢己は、台所へ降りて行って、エプロン姿になる。日曜ぐらいゆっくりと寝かせてくれたっていいじゃないかと、内心では思っているけど、恐ろしくて口には出せない。

「それにしても、いい夢だったな。後で、続きを見れるかな」

夢の余韻にひたりながら、昼寝のことを考えていた。現実逃避には寝るのが一番。こうも毎日が地獄では、寝ていたほうがいい人生だ。

「あんた、いつまでやってんの。庭の草むしりをしたら、買い物行ってきな」

テレビばかり見ている女王様から命令が飛ぶ。

「親父よ。友達と遊んでくっからよ。金出しな」

まるで強盗だった。親をとときには脅迫して金をまきあげる子供たち。いつから、亭主というものは奴隷になったのだ。

「あんた、美容院に行ってくるから、昼寝なんかしているなよ。そんな暇があったら、便所と風呂を磨いておけよ」

元子から頭ごなしに指示が出る。すっかりと先を読まれていた。だらしのない夫は、いつも頭が上がらない。

元子も子供たちも出かけた家において、ようやく自由になれた。

「さあ、昼寝だ。あんちくしょう。夢の中で仕返ししてやるからな、覚えている」

そうして、琢己はまた逆さまの夢の世界へと落ちてゆく。

第517話 賽の河原

ひとつ積んでは銀行のため、ふたつ積んでは家のローン、みつつ積んでは教育費、そんな和讃を唱えながら、古本屋の北村は、毎日あちこちで自然と崩れる本を積み直していた。最初はきちんと整理がつくほど本棚に本がすっきりと納まっていたのだ。それが、だんだんと本を読む人が少なくなって、その代わりに、本を売りにくる客がやたら増えたお蔭で、店は通路も通れないくらい本でいっぱいになった。

入るところなら、どこだって構わないとばかり、本棚の前にも床から平積みだから、奥の本が見えない。本棚も二重陳列だから、見えたとしても、さらにその本の蔭にまた本がある。掘っても掘っても本が出てくるといった発掘調査の話のようだ。すでに、管理の限界を超えていた。

地震でなくとも、お客が触れば崩れるのだ。非常に危険な店になっていた。一度は、店の奥に母親と一緒に来た子供が本を崩して、出られなくなったことがある。ものすごい量の本が雪崩のようにどどどと音を立てて崩れた。さあ、大変だ。北村は消防署に電話して、レスキュー隊を呼んだ。

「大変だ。子供が本の中に閉じ込められて出てこれないんだ」

さっそく、消防自動車古本屋の前に到着すると、何かと通行人で店頭はいっぱいになった。テレビ局もカメラを持って取材にきた。隊員たちが、本の山をスコップで掘り起こし、ようやくのこと、子供を救出した。外には救急車も待機していたが、子供に怪我はなかったようで、元気だった。野次馬から一斉に拍手が起った。

「たったいま、無事、救出されました。前代未聞の古本雪崩に遭遇した子供はいたって元気の様子で関係者をほっとさせております。それにしても、この店はすごいものです。天井までうず高く積まれた古本は、危険きまわりないものです。住民からは、こんな危険な店を放置してよいのかという非難も沸き起こっています。こちらが、店主の北村さんです。北村さん、今後、この状態をどう改善してゆくお積りですか？」

マイクが北村に向けられた。

「すみませんでした。これからは本を買うのをやめます。当分は入口に張り紙をして、入店禁止にいたしますので勘弁してください」

哀れ、北村はすっかりとしょげかえって、もう古本屋をやってゆく気力がなくなっていた。

そんな事件があっても、古書マニアは、店にやってくる。

「今日は、お店、やっていないんですか」

「入れませんよ。本でいっぱい。でもどうしても入るといふなら、この同意書にサインしてください」

その書類には、(店内でどんな事故に遭っても、一切責任を問いません)というようなことが書かれていた。

「一応、ヘルメットを用意していますから、かぶってください」

まるで、どこかの鉱山に入るような感じで、命綱も腰に巻く。

「あのう、すみません。本を持ってきたんですけど」

と、店頭からドアを開けて、大声で呼んでいる。本を売りにきた客なのだ。店の前に車を止めて、すでにダンボール箱を五つも下ろしている。北村は慌てて、店頭へ出てきた。出てくるなり、客の前に土下座して頭を下げた。

「勘弁してください。もう、本は沢山なのです。お願いですから、本を持ってこないでください。この通り、お願いします」

お客も呆れて、途方に暮れていた。

「でも、そう謝られても困ります。こっちだって、もう、本を持ってゆく先がないんですから。」

「なんとか、只でもいいですから、引き取ってくれませんか」

「そんな、只だなんて、只でもいりません。逆にこちらからお金を差上げますから、お引取りください」と、北村は財布から金を出そうとする。

すごい時代になったものだ。本はすっかりと邪魔ものになって、いまや、産業廃棄物と核の廃棄物、古本と三大ゴミとまで云われるようになった。かつては知識の宝庫とまで云われた古本屋が、いまや最終処分場になりつつあった。中には心ない者たちが店頭で不法投棄して逃げてゆく。店頭も古本で溢れかえっていた。そうすると、古本屋の存在そのものが社会問題になってくる。

北村の性格からして、モノを捨てるということが忍び難い。古本屋をやるようになったのも、そうして、捨てることができないで、自然に溜まっていったものが、いつか在庫になっていった。五年、十年と売れないである本はすでに、読む人がいない本だ。インターネットでも通販でも、店でも売れない本は、見込みがないのだから、惜しげもなく処分すべきであったが、どこかに未練がある。たとえば、社会主義関係の図書は、いまは時代が変わったからと見向きもされないうが、そんな薄っぺらい時代性で焼却されてたまるかという気概があった。また、時代が変わると、読まれるかもしれない。時代は真理ではない、そのたびに抹殺されてゆく本の運命は可哀想すぎる。本当にいい本はどこかで残り続けてゆかねばならない。だが、問題はその保管場所だ。

「ご主人、思い切って、処分しなければ、全部死んでいますよ」

客の云うとおり、確かに本を見ることができないから、すでに店ではない。ここにある本はかつて惚れこんで買った本ばかりだった。

北村は一冊づつ品定めをしていたが、

「これも勿体無い、これもできない、おれにはできない、あんまり可哀想で……」

と、とうとう、泣き出してしまった。それでも、またあちこちで本が崩れてゆく。北村はまた、毎日のことだが、実に無益な仕事をしていた。崩れた本を積み上げる。すると、時代という鬼が崩してゆく。

ひとつ積んでは、晩酌のため、ふたつ積んではおかず代、みつつ積んでは煙草代……。

店の外に近所の人が集まって、話をしていた。すでに、入口まで本でぎっしりと埋まり、客が入れないどころか、店主の北村も出られなくなっていた。

「おい、先月から、古本屋のおやじの顔を見ていないが、大丈夫だろうか」

「わたしも、見ていないわよ。中で死んでいるんじゃないかしら。白骨死体になっていたりして。警察に連絡したほうがいいんじゃないの？」

ひそひそと話しあっているが、みんな関わりになりたくないから、見て見ぬふりをする。また、誰かが本を捨てて逃げてゆく。北村はどうしたろう。本の墓場は、いまもそこにあるという。

第518話 アンビリーヴァボ

最初に断っておきますが、わたしは、幽霊や心霊現象というものを一切信じません。そんなことは、錯覚か、見間違えで、心霊写真なんかも、そう見れば、木立の影が人の顔に見えたりするのです。世の中は、すべて科学的に解明できないことはないのです。それが、この二十一世紀に入っても、いまだにテレビではオカルトブームで、そんな映画、バラエティ番組が幅を利かせています。

世の中が複雑になって、見えにくくなるにつれこんでの商売が多いのでしょうか。却って、非科学的な時代へと逆戻りしていることがおかしくも思えます。考えてみれば、政治の世界でも摩訶不思議なことが罷り通っているので、われわれの感覚がもう、何が起っても驚かないほど、麻痺し、慣らされています。それは、テレビという茶の間の無断侵入者による、洗脳という愚民政策の一環でありました。

わたしの家では、引っ越してきた頃から、ポルターガイスト現象ではないかと女房が騒ぐいろんな物音がします。

たとえば、夜中に階段を上がってくる足音がします。それまで、わたしは、大抵は起きて、パソコンで書き物をしております。一時頃に寝るのですが、家人はみんな寝入っているようです。二階に寝ているのが、中学の息子と高校の娘、そして、何故か家庭内別居中の女房であります。階下には年寄り二人が仏間に寝ております。ですから、わたしは、てっきり、婆さんが、何かを確認するために二階に上がってきたものと思い、珍しいこともあるものだかと、翌日に訊いてみますと、夜中どころか足が悪いから普段でも二階に上がることはないと言います。じいさんも一度寝たら朝までぐっすりです。わたしは、女房や子供たちにも確かめました。みんなは幽霊と云って怖がりましたが、わたしは咄嗟に泥棒ではないかと思いました。

そんなことがあってから、また夜中に、二階の寝室を結ぶ廊下を何者かが歩く衣擦れの音がいたします。廊下を行ったり来たりして、なにやら風呂敷包みに何かものを入れて結んでいるような音がはっきりとしました。これはもう絶対に泥棒に間違いないと、確信して、わたしは、ドアをいきなり開けると、「誰だ」と、叫びました。その声で、子供たちも女房もおのおのの部屋から出てきました。廊下に誰もいなかったのです。

「ねえ、聞こえたでしょう。歩く足音」「うん、ぼくも聞いた」

みんな聞いていました。

「そら、あなたは幽霊なんか信じないというけど、実際、音を聞いたでしょう。やはり、いるのよ幽霊が」

「そんなバカな、空耳だよ。偶然、外の木立の風で擦れ合う音が、人の歩く音に聞こえたのだろうよ」

「まあ、この人は絶対に認めないのね」

わたしは、非現実的なものは認めない。何か必ず原因があるはずだ。

それから、数日して、またおかしいことがわが家に起った。会社に女房から電話がかかって

きた。

「あなた、信じないでしょうが、裏庭から手首が生えてきたの」

「そうかい、そうかい、足は生えていないのかい」

わたしはまるで相手にしない。女房は怒った。勝手にしたらいいと一方的に電話を切った。とうとう、女房のやつ幻覚を見たか。怖いと思う気持ちが、すべてをありもしないものに結びつけてしまうのだろう。

わたしは、会社から帰ると、娘に教えられて、懐中電灯をつけながら、裏庭に入った。そこは、すぐが崖で、滅多に人の目に触れない場所だった。われわれでも、雪を捨てにゆくときぐらいいだ。

まさしく、人間の手首が生えていた。誰かのいたずらか、死体が埋まっている可能性もある。わたしは、スコップで掘り起こそうとしたが、それは紛れもなく植物のようで、腕の下は根が張っている。それにしても、よくできた新種の植物だ。白い手の造りも感触もまさに本物の手首だった。

わたしは、朝になって、明るくなってから、もっとちゃんと見てみよう、と六時頃に起き出して、裏庭に行ってみた。昨日は一本より確認していなかったが、手首はあちこちへ芽を出して、全部で五本あった。子供のような掌もあるし、女性のようなしなやかな手もある。みんなおしろいを塗ったように異常に白い。わたしは、しなやかな手にそっと触れてみた。すると、手は反応して、握手を返してきた。全く、人間のそれとなんら変わりがない感触だ。わたしは驚いてのけぞった。まあ、植物にはおじき草のように反応するものもあるのだから、不思議でもなんでもないのだが、その隣の手は、子供のそれであったが、盛んにわたしと遊びたがっているようにはしゃいでいた。それで、わたしは試しに指相撲を挑んだ。すると、その草といったら、まるで意志があるかのように指相撲をしてくる。そうかと思うと、じゃんけんをしようとするのだ。どこに目があるわけでもないのに、勝ったか負けたかよく分かるものだ。悔しがって、泣いている様子であった。じゃんけんは、わたしは強いのだ。

でも、そんなことをみんなにいい触らしてても、誰も信じないし、この家はいま売りに出しているのだ。もっと町中に引越ししようということで、不動産屋にいくつか頼んでいた。万が一、幽霊が出るとかそんな噂が広まったら、ますます買い手がつかない。わたしは、この手首草のことは、他言しないように、家族に云いふくめた。

なるべく、無視して生活することにしたが、どうしても気になるので、ある日、そっと裏庭に見に行ってきた。すると、なんと、草と思っていた手首はによきによきと伸びて、立派な木になっていた。すでに丈はわたしより高い。腕が太い幹になり、指が伸びて枝になっている。さらに驚いたことに、その枝に顔の実がいくつもぶら下がっているのだ。林檎のような大きさの実が頭になっていて、ちゃんと口も目もある。そいつらが、一斉にぎろりとわたしのほうを向いた。

「コノ家ノゴ主人ダ」「ゴ主人ダ」「ゴ主人ダ」「ゴシュジンダ」

みんなが一斉に煩く喋り出す。わたしは呆然として立ち尽くしていた。秘密にしていることが、こんなに多くの口でべらべらと喋りまくられた日には、悪い噂が近所に広がる。その前にこの木を始末しなければならない。

わたしはノコギリを持ってきて、木を一本残らず根元から切り出した。

「大変ダ、人殺シ。イヤ、木殺シ」

木を根元から切ると、みんな死んでしまった。わたしは、根株も掘り起こして、二度と芽が出ないようにも庭で焼却処分した。

「ほら、信じられないことってあるでしょう」

と女房は勝ち誇ったように云うから、わたしも負けてはいなかった。

「これは、隕石か何かに乗って落下してきた宇宙からの贈り物だよ。どこかの星にはこんな植物人間たちがいるに違いない」

この世には計算できないものはない。解析できないものはない。わたしは頑固にも持論を撤回しようとしなかった。

第519話 生きている死体

若者たちに異変が起きていた。学校にもゆかない。勉強もしない。ただ、部屋に閉じこもっているひきこもりだ。村上宗吾の息子の宗太郎もその口だった。妻の佐紀子は心配して夫婦で話し合っていた。

「あなた、どうにかしなけりゃ大変よ。あの子、もう三日もご飯どころか水分も摂っていないよなんだから」

「まさか、それじゃ、死んでしまうじゃないか。隠れてなんか食べたり飲んだりしているんだろうよ」

「それがね、その形跡がまるでないのよ」

「食欲もない。精神性拒食症ってやつかな。それに、学校からも何度も電話がきているそうじゃないか。部屋で、何をしているんだ、あいつ」

「ただ、真夜中でもね、机に向かってパソコンでネットを見ていたりするだけよ」

「じゃ、寝ていないのか」

「どうも、朝まで起きているようなのよ」

「このままではどうかなるわ、いまのうちに病院に連れてゆきましょうよ」

そうして、夫婦で宗太郎を病院に連れて行くことにした。もう、二十歳を過ぎた大学生だから、自分の意思というものがある。子供ではないから、プライベートなことに親はあまり口を挟まないことにしていた。一人息子が何を考え、何をしているのか、両親は皆目見当がつかなくなっていた。選挙にも行かない。第一、新聞を読まない。世界情勢にもなんの関心もないようだった。ゲームやマンガばかりしたり見たりしていたからだろうか、両親は精神的に病んでいる息子を早く治療させねばと、息子の部屋に入った。

宗太郎は洗濯に着替えも出していないようだから、三日も取り替えていない。

「宗ちゃん、着替えしてね」と、着替えを勧めても、体が反応しない。黙って座っているだけだ

った。仕方なく、宗吾は宗太郎の服を脱がせて、着替えさせた。

「まるで赤ちゃんみたいね」と、佐紀子は笑う。

「おかしいな、体が冷たいぞ」佐紀子も触ってみて、どきりとした。体温がない。

車で総合病院に連れて行った。内科にまず連れてゆく。どこの科がいいか判らない。内科の医師はぼんやりと座っている宗太郎を見て、

「いまはスチューデント・アパシーというのが多いですから、それかもしれませんが、他の病気が原因か、まず、診察してみましょう」

医師が宗太郎の体に触れて驚いた。すぐさま検温したが、体温がない。目を見てさらに驚いた。瞳孔が開いていた。息もしていない。嘘だろうと、脈拍をとって見たが、脈もない。

「信じられない」

医師は看護婦を集めて、心電図、血圧と測定したが、測定不能。

「ま、まさか、これは死人だ。生きていないのに、どうして歩き回れるんだ」

両親が診察室に呼ばれた。

「宗太郎君は、すでに死んでいるんです」

医師は青ざめてそう云った。

「でも、死んだものがどうして、歩いているんですか」

「それが判らないんです。脳波も測定できません。心停止状態で、これは、医学的には死体なんです。死体も、死後硬直で動くことはあるのですが、歩き回るとい報告は聞いたことがありません」

医師はここまでくると医師としての限界を感じていた。すでに常識の範囲では推し量れない。

「先生、また変なの、いいえ、似た患者さんが来ております」

看護婦が血相変えて入ってきた。入れ替わりに診察室に入ってきた若者も、すでに死体だった。ただ、死後二週間は経っているものとみえ、一部が屍蠟化していた。

医師はすっかりとおじけづいてしまった。自信をなくしたというより、理解の枠を超えて、いまや発狂寸前まで追込まれていた。

「先生、さらに重症の患者さんです」

次に診察室に両親に付き添われて入ってきた若者は、半分骸骨だった。

「この子ったら、もう半年もご飯を食べないんですよ」

と、母親はしくしくと泣く。

「食べるとか、食べないとか、そんな問題じゃないでしょう。これは死体でしょう。死体。みんな何を考えているんだ」

また、看護婦が入ってきた。

「先生、ミイラですよ、ミイラが歩いてくるんです」

医師はとうとう、切れた。

「馬鹿にするな。おれはまともな医者なんだ。それを、みんなして、みんなして。ふざけるなっていうんだ。もっとまじな患者を回してよこせってんだ」

ゾンビーという映画の通りに動き回る死体が、特に若者を中心にして広がっていた。生きてい

るのか死んでいるのかははっきりしないやつが世の中に蔓延していた。保険会社も困った。死亡保険金は出したいが、現実には歩いているものに出すことはできない。病院としても、薬を処方することもできない。ただ、できることと云ったら、防腐剤を注射して、体が腐らないように保存するだけだった。

働く意欲もない、勉強する意欲もない、将来の目標もない、生きる意思もないときている若者たちが次々にその奇病に罹るのだった。

親たちは死んだものがいつまでも傍にいるから少しは安心していた。

「うちの息子はいい息子なんですよ。小遣いはいらさないし、ご飯も食べないし、お金は何もかからないの。それで年もとらないときているでしょう。まったく世話のかからない子でね」

佐紀子はそう自慢してみるが、誰がこんな希望もない若者社会を作ったんだと、いまは不満を上に向けている。教育の切り捨て、長引く不況で就職先もない、あっても不安定な将来への失望、年金も当てにならない高税金社会、働いても賞与も出なければ、昇給もない。税金だけが高くなる。生きていたって面白くもない社会だった。

ほら、あなたの後ろを歩いている若者、瞳孔が開いていませんか。骨が露出していたら、それは死体なのだ。

第520話 カルネアデスの板

それは、楽しい船旅になる予定だった。夏休みの思い出にと、豪華客船で、家族で南シナ海の孤島に行くこととなった。田原幹夫が定年退職をすることとなり、その退職金で思いきって贅沢をしようということで、妻の幸子と娘の麻紀、大学生の息子の亨と四人でツアーに参加した。

一週間の船旅だった。毎日、船の中では本格的なフルコースといいワインが味わえる。ダンスもあり、映画館では新作を上映していたし、クラシックのコンサートも聴くことができる。プールもあるし図書館だって付属してあるから退屈することはない。バーやパーマ、エステ、ショッピングゾーンと並び、ちょっとした街だった。

初めてその船に乗ったとき、幹夫は偶然にも上司の社長と一緒にいることに気づいた。

「社長、このツアーに参加していたとは、思いもありませんでした。また麻雀でも船内でしましょうかな」

幹夫が退職した会社の社長は、よく麻雀の相手をした仲間だった。

またまた偶然だが、幹夫の親友のやはり教職を退職した花田が乗船していた。

「いやあ、偶然だな。先週、一緒にゴルフをしたとき、何も云っていなかったじゃないか」

「君も定年旅行かい」

「そうだ、家族と来ている」

これは楽しい船旅になるだろうと幹夫は思った。だが、招かれざる客も一人乗っていた。幹夫

の現在つきあっている愛人のホステス、美香も乗りこんでいた。サングラスをかけて、誰か判らなかつたが、サングラスをとって、

「はい」と、手を振ってみせる美香の姿を見た途端、幹夫は青ざめて、妻の顔色を伺った。妻は幸い美香と面識はないし、愛人がいるとまだバレていない。わざと無視すると、むくれて別の方向を向いてしまった。

(どうして、美香がこの船に乗っているんだ。邪魔をしに来たわけではあるまい)

幹夫はあれこれと考えを巡らせていたが、まさか、この広い船とは云え、密閉された空間で逢引をしようというつもりなのか。

楽しいはずの旅行が複雑になっていた。

孤島に到着するまでは、どこまでもただ茫漠とした青海原が続くだけで、水平線を眺めていて気分を落ち着けるか、デッキの折りたたみ椅子に寝そべて日焼けするか、ビリヤードを楽しむか、周りは遊びでいっぱいだ。退屈することはない。

通路で美香とすれ違うとき、幹夫にウインクして、脇腹を抓ってゆく。

それは、霧がかかっていた朝方に突然起こった。船が斜めになりながら、面舵をいっぱい切っていた。船内に警報が鳴り渡り、アナウンスが入った。と、船は大きな衝撃とともに傾いていた。大型タンカーと衝突したのだ。乗船客二千人。タイタニック号の二の舞かと、人々の脳裏にあの恐怖の場面が再現した。タイタニックは徐々に沈没していったが、この客船はあっというまに横倒しになった。救命ボートも救命胴衣も付ける余裕もなく、人々は大海へと投げ出されていた。かろうじて救助信号だけは発信された。

さあ、大変なことになった。田原家は全員が海に投げ出されていた。たまたまデッキに出て朝日を眺めていたときだった。タンカーも転覆した。客船も腹を見せたまま、ひっくり返っていた。多くの乗客は、船内に閉じ込められたまま、船とともに深い海に沈んでいった。

あっというまのできごとで、避難する時間もなかつた。デッキに出ていたものだけが、海面に浮かんでいた。

「助けて、助けて」

と多くの乗客が溺れていた。周りを見ると、幹夫の近くには家族三人のほかに、愛人の美香、社長と親友の花田がたまたま一緒に溺れていた。みんな泳げないらしかった。幹夫は学生時代は水泳部で、全国大会にも出場したことがあるほどの腕前だったが、後は全員かなづちだった。その幹夫のところにはぶかぶかと小さな板きれが流れてきた。その板に掴まると一人だけ助かるかもしれない。幹夫は、誰を助けようかと、考える時間もなかつた。みんな手足をバタつかせてあっぷあっぷしているのだ。妻を助けようか、でも、愛情はとっくに冷めていた。ならば愛人の美香か、それもまた残酷な話で、見ている前で裏切られたとすれば、家族は崇って出てくるだろう。子供二人のどっちを助けても恨まれる。娘のほうが可愛いが、息子も大事だ。さんざん世話になった社長も見捨てるわけにはゆかない。幹夫を部長まで昇進させてくれた恩がある。無二の親友はどうだ。見殺しにすることはできない。みんなの目が、板きれに集まっていた。溺れるもの藁をもすがる気持ちで、全員の手が板きれに伸びていた。

「わしだけでも助けてくれ、わしは社会的地位もあるし、死んだら影響が甚大だ」社長が叫んだ。

「わたしは一番若いよ。まだ人生を知らないで死ぬなんて」

と、娘の麻紀が叫んだ。一番若いのが助かる権利があるとでもいいそうだ。

さあ、幹夫は悩んだ。よく心理テストで出されるやつだった。たった一人を選ぶとすれば誰を選ぶかという究極の選択だ。

幹夫は咄嗟に板きれを遠くのほうへ投げていた。それは別の溺れている人が幸運にも掴んでいた。

「どうせなら、全員一緒に」と、幹夫は選択していた。「助かるのだ」

「さあ、助かりたいのなら、いまからわたしの云うことを聴きなさい。一分で覚える水泳教室をいまからやります。いいですか、じたばたしないで、力を抜いて、あお向けになって、手足を広げて大の字になってください。いいですか、目は閉じていていいですよ。今日は波がないから、顔に波はかかりません。ほら、ちゃんと浮かんでいるでしょう。人間は黙っていても浮かぶようにできているのです。新生児だって泳ぐのです。胎児は魚です。われわれは海を忘れたのです。魚に戻りましょう。ほら、楽に呼吸はできるでしょう」

「あっ、本当だ。浮かんでいる。プールでも泳げなかったのに」

と、娘の声がした。「浮かんでいるわ」「わたしもよ」妻と愛人の声もした。

「おお、七十にして、初めて海が怖くなくなったわい」社長の声もした。

「どうです。プールより塩分濃度がある分、浮力がついて顔が出るでしょう。水温は三十度近くありますから、温泉気分で浮いていてください。そのうち、救援の貨物船が来るでしょう」

俄水泳教室のおかげで、幹夫の周囲には助かったかならずちたちが大勢いた。

「おっと、喜ぶのはまだ早い。一難去ってまた一難。人食い鮫が一匹だけおいでなすった」

ここでまた究極の選択の問題だった。前の板のときは、一人だけ助けるという難題だったが、今度は、誰か一人だけ餌にされるという問題だった。

「わたしはおいしくないわよ。脂肪だらけで」「いや、わしだって、年取りすぎて骨皮で不味いぞ」「一番若いやつが美味しいのだ」と、みんなの視線が麻紀に集まった。口々に、ゆうゆうと背鰭を見せて、回る鮫に訴えていた。今度のくじだけは譲り合う。

第521話 古本屋の親父たち

古今東西様々な商売がありますが、その中でもとりわけ変わっている商売、いや、親父たちのいる店と云えば、古本屋の右に出るところはございません。何が変わっているかって、客より偉そうな顔をしているのであります。林語堂古書店の北村は、若くもありませんが、この道二十年、五十を超えたばかりといえ、まだ若い、古本屋の洩垂れであります。が、それでも態度がでかいことで有名であります。今日も客がひとり、恐る恐る店のドアを開けて入ってきました。

「あのう、すみません。ちょっと、本を見さしてくださいな」

すると、帳場から北村の荒い声が飛びます。

「なんだとお、見るだけか」

「いいえ、ちゃんと買いますから」

とても気の小さな人なら入れない店です。入口のドアには張り紙がしてあります。
—どうぞ、怖がらずにお入りください。

北村は、以前はぺこぺこ客に頭を下げる仕事ばかりしてききましたので、脱サラで古本屋を始めたときから、決めておりました。もう、二度と、客から頭を下げられても、こっちからは下げまいと。それで、随分と横柄な態度で有名でした。いらっしゃいませも、ありがとうございましたも絶対に云いません。客が入ってくると、ギロリと眼鏡越しに睨みつけて、「何をしに入ってきたやがった」というような顔をします。万引も多いので、客を見たら万引と思うようにしているとかで、店内にも大きく標語が書いて貼ってあります。

《客を見たら万引と思え》

すごい店です。客を客と思っておりません。お客の方が小さくなって、
「あのう、お忙しいところ申し訳ございません。この本をどうぞ、売ってくれませんか」
「おう、売ってやってもいいが、勿体無いなあ」と、出し惜しみまでするのでございます。

お客の中には代議士先生もおります。県の部長をしている方、校長先生、作家先生と、それぞれ、大変な偉い人たちがおいでになりますが、古本屋というものは、たいていは一匹狼でして、横も縦も繋がりがございません。どんな偉い社長であろうとも、遠慮はしません。却って向こうが尊大な態度に圧倒されて縮こまっておる次第です。

でも、そんな北村にもいいところはあるのです。一度、暴走族の兄ちゃんのようないま流行りの若者が、場違いにもふらりと店に入ってくると、何か悩み事でもあるような深刻な顔をして、「人生についての、その、本がないかって」と、照れて訊くのです。

普段は、客になになにの本がないかと訊かれても、
「ない！ 帰れ！」と罵倒するところが、急に北村立ち上がり、
「偉い！ 兄さん。この本を読みなさい。金はいらない、贈呈しましょう」と、気前がよくなる。

北村の隣町で古本屋をやっている天野は、もっと徹底しておりました。

「おれは、カスにゴミを売ってやっているんだ、はははは」と、そこまで豪語いたします。確かに店内はゴミだらけ、置いている本はアダルトものから官能小説専門であります。客の多くは勿論男性でありますから、滅多に女性が入ってくることはありません。たまに、女性を捨ててしまった方が、恥じらいもなく、

「どれ、エロ本でも買ってゆくかな」と、買い物籠を下げて大声で入ってくることはあります。

あるとき、間違っか、可愛い二十歳そこそこの女の子が店に入ってきました。天野は、「しめた」と、まるで仕掛けに獲物がかかったかのように、玄関のドアに走ると、店内に内鍵をかけてしまいました。

「ようこそ、お嬢ちゃん、ふふふふ」と涎を垂らして近づきますと、女の子の悲鳴。あとで警察に呼ばれて事情聴取。

「あんた、何考えてるんだ」と、説教されたとか。

そうかと思うと、笹田古本店の親父は小説家であります。店がそのまま書齋で、帳場に原稿用紙を置いて毎日執筆活動です。ただいま、新人賞を狙って百枚の中篇を書いておるところです。出久根さんの向こうを張って、古本小説をテーマにしてひたすら書きまくっておりました。

店主が書き物ばかりしているので、万引さんたちは「あの店はフリーパス」だと噂が立って、客の半分は万引であります。しかし、笹田も手口は研究し尽くして、目下、万引小説を仕上げていました。

と、そのときに、常習犯の若い男が、コミックの棚から新刊で出たばかりの新古本一冊に手を伸ばしました。店主は気づいておりません。原稿用紙に顔を埋めて書くのに夢中でした。

「と、そのとき、いつもの万引犯の木村は、出たばかりのコミックに手を伸ばした」

笹田はいちいち書きながら喋る癖があります。万引はぎくりとして、自分の名前も知っていることに驚き、さっと取った本をジャンバーの内側に隠しました。

「なんで、親父はおれの名前を知っているんだと、木村は咄嗟に本をジャンバーの内側に隠した」

周章狼狽した。まるで、すっかりと見られているようだと、万引は本を落として逃げてゆきます。

「待て、と、親父は追いかける」

ふと、笹田が万年筆の手を休めると、床にコミックが落ちています。

「あれ、何で落ちているんだ」

そんなこんなで、変わり者、偏屈者が多い古本屋も、組合の会合で寄れば集まれば、古本が売れなくなったとこぼします。

「あんたとも売上半分か、うちもだ。どうして、客が寄り付かなくなったのだろうか」

あたりまえです。客を追っ払って、売上が悪いとぼやいている。それが判らないのが古本屋の親父なのです。

第522話 健忘症

北村拓也は最近もの忘れがひどくて、自分も困っていた。周りも困っていた。まだ五十代だから、まだボケるのは早いが、北村家は男はすべてボケの巻だから、遅かれ早かれボケるのは必至だ。覚悟をしておかなければならない。

公孫樹の葉っぱがボケ防止にいいとかで、焼酎に漬けて毎日飲んでいた。本を買ってきて読んでいるうちに、不思議とストーリーの先が読めてくる。途中まで読んでいるうちに、ぱたりと本を閉じる。

「これは前に読んだ本だ。無駄な出費をした」

ということはたびたびだ。同じ本を三回も買ってきたことがある。ボケはいいときもある。嫌な世の中がかすれて見える。細かいところに気配りしなくて済む。ボケ勝ちともいい、それが老人力の原動力になる。だが、いまは困る。まだ現役で仕事に支障があるからだ。

拓也は、実は、ここのところずっと、何かものすごく大事な大きなことを忘れていたような気がしていた。それがなんなのかは判らない。思い出そうと、毎日、考えているが、考えれば考えるほどに判らなくなる。仕事のことではなさそうだ。それも今日明日に必要なものでもなさそうだ。自分の人生においてきっと重要な何かなのだ。ずっと気がかりではあったが、どうも引っかかってはいるが、出てこない。それでも、普通に生活していて、トラブルもないのだから、案外たいしたこともないことかもしれない。拓也はそう思い直してみたが、どうもしっくりといかない。

朝、起きると、まず目に入ってくる天井、そして壁、部屋がどうも自分の部屋でないような違和感を覚えていた。生活空間から忘れてゆくものなのか。どこに何が仕舞ってあるのか第一判らない。タンスの引出しをいちいち開けてみなければ、どこに靴下が入っているのか判らなくなっている。洋服ダンスも開けてみれば、見慣れない背広がずらりと並んでいる。そういった洋服から家具までいっさいのものの買った記憶がない。

階下に下りてゆくと、台所に見なれない妻が朝ご飯の支度をしていた。妻の顔も忘れてしまうとは、逆に新鮮でいいかもしれないが。

「おお、おはよう」と、挨拶しても向こうは無視している。目を包丁から離さない。

「行ってまいりませう」と、娘か、高校生の制服で学校へ行くところだ。拓也は玄関まで見送る。

「行ってらっしゃい。荷物も多いんだな。重そうだ」

そんなことを云っても、娘も知らんぷりだ。まるで父親を相手にしていない様子だ。うちに娘なんかいたろうか。それに、ちっとも自分に似ていない子供だ。娘は父親に似れば美人になるというが、拓也はすっかりおやじで、娘がいてもとても美人になるとは思えないのだが、出ていった子はとても綺麗だ。

「行ってまいりませう」と、今度は中学の娘か。もう一人娘がいたんだ。何も覚えていない。

「はいよ、行ってらっしゃい」

じろりと横目で娘は睨んで、不機嫌そうに出かけて行った。この子も可愛い。あとはいないだろうかと、靴を確かめる。家族構成まで忘れてしまうなんて、ひどいボケだった。

朝刊をとってきて、居間のソファに腰をおろすと、テレビのチャンネルをNHKに変えて新聞と画面と交互に目を通す。よく見ると美人の妻だ。こんなハーレムのような生活があったなんて考えられない。妻はむすむすと口もきかないで、テーブルにお茶を出した。まるでお客さん扱いだ。どうも怒っている様子で、ひょっとして、最近、何か大喧嘩したに違いない。その冷戦状態がずっと続いているんだ。娘たちも母親の味方について、父親を無視している。拓也はそんなことを推測していた。困ったもので、ゆうべのことも三日前のことも、一週間、いや過去のことはすべて忘れてしまっているのだ。記憶喪失かアルツハイマーか、とくに大酒を飲んだ翌朝は記憶力がかなり減退している。どうもすっきりとしない。

カーテンを開けて、窓の下を見ると、ここは高層団地のようであった。二十階以上もありそうだ。車が小さく下を走っている。いくつも似たような建物が立ち並んでいる。自分がこんな団地に住んでいたのかと、どうも記憶が怪しい。しかし、二日酔いがどこかで晴れてきていた。もやもやが霧散し、次第に重要な人生にかかることを思い出そうとしていた。そうすれば、頭がず

きりと痛んだ。

ゆうべはかなり飲んだのだ。一人ではないようだ。誰か同僚と一緒にだった。だんだんと思い出してきた。二人で肩を抱き合って、三軒はしごした。カラオケで歌った。ボトルを三本空にした。ゆうべのことが思い出されてくる。そいつと、タクシーで、この団地まで帰ってきたのは真夜中だ。

「そうだった」と、一度に何もかも拓也は思い出していた。それで、急に妻に向かって、云った。

「あんたは、見たことがある人だが、どなたでしたっけ」

すると、玄関のチャイムが鳴った。「奥さん」と、声もする。拓也はどこかで聞いたことのある声の方を向いた。ドアが開いて、まだ半分寝ている男と拓也の妻が立っていた。

「ごめんなさいね、うちの人、また酔っ払って、お宅に間違っあがりこんで」

拓也の妻が謝っていた。

「いいえ、うちの人こそ、たびたびお宅に泊まったりして。上と下でよく間違える人がいるっていうけど、それにしても大トラでしたもの」

拓也も同僚も、ようやくすべてを思い出していた。

第523話 間違い電話です

この始まりは一本の電話からだった。

北村拓也のケータイ電話が鳴った。相手の電話番号が通知されて、ディスプレイに表示される。どうやら、アドレス帖にも登録されていない、全くの他人からのようだった。市外局番から、それは、同じ市内であることが判る。ケータイはプライベートなものなので、どうして、拓也の番号を知ったのか、誰かに聞いたのか、それとも、出先から知り合いが電話をよこしているのか、いずれにしても、見知らぬ番号からかかってくる電話には一瞬ためらう。

「はい」と、だけ云えばいい。出るのは拓也に決まっているからだ。いちいち、名前を名乗らなくてもいいことになっている。それが、相手は訊いてくる。

「斎藤さんですね」

なんだ、間違い電話か。相手は婆さんの声だった。

「違います。こちらは北村です」

そう云って、電話を一方的に切った。最近、年寄りの間違い電話が多い。ケータイにかけるのだが、やたら電話番号が長いから、プッシュボタンの押し間違えからだろう。拓也は、他に電話が来てほしい相手から来ないで、苛々していた。とくに土曜日ともなると、誰かのお誘いがなければ、まっすぐ家に帰るだけだ。男たちでもいいが、単に呑みの誘いよりは、ひとりのお目当ての女からの電話を待っていた。

またケイタイの着メロだ。拓也のはアンパンマンが流れる。

「あのう、すみませんが、斎藤さんのお宅ですね」

拓也はがっくりときた。またさっきの婆さんだ。

「あのですね、こちらはさっきの北村です。番号を確かめてからちゃんとかけてくださいね」

それで、切ろうとすると、相手は焦って、

「あれ、斎藤さんはいないんですか」

「だからねえ、間違い電話だって云っているでしょう。何番にかけたつもりですか」

「ちゃんと、斎藤さんにかきましたよ。08018090271でしょう」

「そうです。番号は合っていますが、それはぼくの番号で、もう一度、調べてください」

拓也は、仕事が終わって、近くの居酒屋に誰かいないかと、見にゆく途中で婆さんの相手をしていた。

縄暖簾をくぐる。サラリーマンでいっぱいだが、呑木にも知り合いの顔はない。まあいいか、暑いから生ビールをぐっとやって帰るか。拓也は内心がっかりしていた。

するとまた着メロだ。来た。今度こそ美智だ。と、本命の彼女の名前を叫んだ。

「あのう、斎藤さんですよ」

拓也はわなわな震えがきていた。

「あのなあ、婆さんよ、いい加減にしないと、こっちも忙しいんだから、違うって何回も云っているのに」

言葉が噛み締めた歯の間から出ていた。それで、はずっと切った。急に不機嫌になる。若い女からは相手にされず、見知らぬ婆さんから電話だ。生のジョッキはきゅんと冷えていて、ぐっと飲み干すと喉の奥が鳴った。すると、またケイタイのアンパンマンだ。今度こそと、耳に当てる。

「本当に斎藤さんでないのかえ」

拓也はマジ切れた。

「るっせえんだよー。斎藤、斎藤ってバカかあんたは、何度も何度も、いい加減にさせ、この死にぞこないの老いぼれめが」

つい、居酒屋で椅子を蹴って、大声をあげたものだから、全員の視線が拓也に集まっていた。拓也、息を切らして完全に切れていた。もう少しでケイタイを床に叩きつけるところであった。

見えない相手に腹を立てても仕方がないが、いい迷惑だ。まるで、婆さんに取り憑かれたようだった。初めは優しく云っていたのが、だんだんと興奮してきた。今度電話がかかってきたら、相手の電話番号を頼りに怒鳴り込みにゆこうか、それともぶち殺してやろうかと、拓也はいきまいていた。

だが、客の手前もある。少し冷静になろうと思っていた。また電話で。相手の番号通知では、またあの婆さんのようだった。今度は、策略があった。

「あのう、斎藤さんですか」

拓也はいつもと違うパターンで応答した。

「はい、斎藤です。あらっ、おばあちゃんかい。久しぶりだな。元気？」

すると、相手は急に態度を変えた。

「斎藤って、斎藤の誰け？」

そう云われて、返事に困る。

「誰って、忘れたのかい。孝幸だよ、タカユキ」

拓也は口から出任せの名前を云った。すると、急に電話の向こうは怒りだした。

「バカにするでないよ。あんた、北村さんでしょうが。斎藤だなんて嘘をこいてからに」

そう云って、勝ち誇ったように電話は婆さんの方から切れた。拓也は呆然と、切れたケイタイを耳に当てたまま、自分がいままで、ただの淋しい年寄りに弄ばれたことに気がついた。

ひとり暮らしの老人たちが、話相手に間違い電話をしてくるケースが増えたという。変な時代だった。

第524話 紙魚

紙魚と書いてシミと読む。本のあいだに生息する不思議な虫なのだ。古本屋の北村は、長くこの商売をやってきていたが、生きている紙魚を見たのは初めてだった。

いままでは、戦前の古い本のページの間に潰された紙魚の乾涸びた白い死体が挟まっているのは何度も見たことがある。大きいものになると親指の爪の長さくらいもある。それは、いままでも数々の文豪が書いているが、毛嫌いはしていない。本を好む虫の姿に自分の姿を重ね合わせ、本食い虫に愛情を持って接しているのである。

津軽藩の御典医までしたさる方の子孫が、土蔵の中を整理して、書画骨董を処分したいと、北村にお呼びがかかった。広いお屋敷の中に築三百年という土蔵があった。そこに、いまはサラリーマンをしている若い党首に案内された。

「来年には、ここにマンションが建つんですよ。それで、勿体無いという人もいますが、別に市の文化財に指定されているわけでもないし、住居ごと壊してしまいます。それで、蔵の中の古文書を整理してもらおうと思ひまして。初めは図書館へ寄贈しようと思ったんですが、ぼくはどうも、その役所仕事が嫌で。まだ換金したほうが良いような気がしました」

ロックでも聴いていたら似合いそうな何代目かの跡取だが、医者をしていたのは大正までだとか、昭和に入ってから造り酒屋に転業した。それも、戦時中の原料の入手難にたたんでからは、みな商売もやめて、勤人の家になっていた。

横額や、軸物、茶碗などの古美術品はすべて骨董店に売ったといい、電気もない暗い蔵の中に懐中電灯を点けて、北村は久々の興奮を抑えきれない足取りで中に入った。

茶箱がいくつか、葛籠と書箱がずらりと墓のように並んでいる。北村は電灯で照らしながら、書箱を開けて、中を確かめていると、

「こんな暗いところでいちいち合わせていても大変ですから、ひとまず車に積んで持っていってくれませんか。見積りは後で電話でください。いくらになるのか判りません。宝物が出てくるかもしれませんよ」

そう、若い主人は、車に積むのを手伝った。

北村のワゴン車は古い木に墨書きしてある箱でいっぱいになった。

店へ持ちかえり、さっそく中を改めてみる。埃もすごかったが、鼠の齧った痕や、虫食いのあとで、本の原型を留めていないものも多数あった。揃っているかどうかが問題だ。和本は、巻数が多い。合わせてみると、足りないものがある。四書五経の類から、医学書が多い。稽古館の教科書も出てくる。津軽藩の藩校の名前だ。すべて、漢文の白文。返り点など付いていない。昔の人は素読の素養があったのだ。医学書は、陰陽五行説に基づく中国伝来の傷寒論がずらりとある。本草綱目も図版入りで不揃いだがかなりの巻数だ。大槻玄沢や、華岡青州らの名前が出てくる。古いものでは元禄のものがあるから、三百年は経っている。題箋が掠れて見えないもの、虫食いが酷く、字面が読めないものなど様々だ。そうして、和綴本を改めてみると、ページの間から、するりと銀色の虫が逃げた。北村は驚いた。この古文書の中で三百年もの間、生まれては死に、子孫を繋いできた紙魚がいたのだ。生きているのを見るのは北村は初めてであった。そいつは足が速かったが、捕まえるには苦労はしなかった。まるで、ジュラルミンの鎧をまとっているかのように金属的だった。長さは一センチ以上はあった。手にとってみると、実に不思議な色だった。まるで、この世の毒を吸っていなかったかのような、純粋な輝きを持っていた。足がいくつかある。飛ぶことはないのだろう。

北村は、珍しいのと親近感で、紙魚を飼うことにした。コップの中にそいつを閉じ込めて、事典をひもとく。十回くらい脱皮して、四年は生きるという。原始的な昆虫とあった。小麦粉なども食べるとあるから、でんぷんを与えてみた。すると、紙魚が喋った。

「かたじけのうござりまする」

あれ、と、北村は周囲を見渡した。店には客も誰もいない。確かに小さな声が出た。

「そもじは名をなんと申す」

いろいろとコップの中から聞こえてくるような気がした。北村は頭を叩いた。

「いかん、いかん、幻聴かな。疲れているんだろう」

紙魚は暗所を好むとあるから、普段は黒い布をかぶせていた。そして、店のトレードマークにしようと、紙魚を包装紙のキャラクターにまでしていた。名刺にも虫の漫画が描いてある。そして、客がくると、そっと布をとって見せるのだ。大概の客は驚いて見る。

「へえ、これが、あの紙魚ですか」

それは話題性もあり、客寄せにもなると北村は思った。

「空耳か、何か、いつもごちゃごちゃと喋っているような気がするんですよ」

と、北村が説明する。

「そうだね、賢そうな顔をしているもの。四書五経を食べて育ったから、頭はいい虫なんだろう」

客もからかってそう云う。

「この虫でひと儲けできるかもしれないなあ」

北村はマスコミに情報を流して取材にきてもらうことを考え、パブリシティでの客寄せを画策していた。すると、コップの中から声がする。

「子曰く、君子は義に喩り、小人は利に喩る」

「恐れ入りました」

それにしても、殆ど客の来ない暇な一日がまた過ぎてゆく。

第525話 津軽では母に海がない

余りにも有名な詩に、海には母があるというのがある。海という漢字には母が隠されている。フランス語でもラ・メールは海でメールという母がその中にある。海は母のイメージであろうか。

なんでも拘って生きている橋本尚子にとって、気になることは徹底的に調べなければ気がすまない性分だった。ことに文学志向の彼女にとっては、言葉には異常なこだわりがある。何か気になる言葉があるとたとえ方言であってもその語源の由来まで調べるために、図書館まででかける。そうでなければ、いつもどこかに言葉が引っかかって、夜も眠れないのだった。

津軽という風土には、どうも海イコール母というイメージがない。海に囲まれている土地でもあるのに、他県に比べても、どうも農耕民族の匂いがする。

橋本尚子は、北海道からこの津軽の地に嫁にきて、早二十年近くが経っているが、いまだに津軽弁がよく理解できない。夫は生まれも育ちも純粋な津軽っ子なのだが、夫婦でも判らない言葉のやりとりがあった。もともと、北海道は東北三県から移住した者が多かった。上磯という海岸伝いにはいまだに津軽弁とおぼしき方言が残っている。イントネーションも単語もよく似ているのだ。だが、そこにはまだ海の匂いがあり、昆布を干す道南地方には、海に依存する海洋民族の顔があり、なんとなく海に母を感じずる。

江戸時代から石高が基準になり、稲作が中心であった。津軽平野の肥沃な土地を背景に、十万石ではきかなかつた。いまでも、内陸に少しでも入ると、田圃と畠、そして果樹である。漁業は、零細な沿岸漁業が多く、西海岸には全国に誇る水揚げの港がない。

その経済的基盤も含めて、津軽の母を捜しに、尚子は夫と日曜日に言葉捜しの旅に出た。夫の運転するジープで日曜日のたびにあちこち津軽地方の村々を訪問する計画を立てた。

「いろんな文献も図書館で借りてきて読んだけど、調べれば、南部はドイツ的だけれど、津軽はフランス的なよね。果樹にしてもノルマンジー地方と気候が似ているのか、りんごだけでなく、ラ・フランスといまは云っている洋ナシでしょう。それにマルメロ。方言にも似ているニュアンスがあるわ。なになにでないという否定のne pas がネハというふう聞こえるし、あれと指すlaは津軽でも《ら》と云うでしょう。どさ（どこへ？）はウ　サ？なのよ。フランス語は津軽弁と似て、あまりイントネーションを上げないのよ。棒読みに近いというのかしら」

言語学的に追跡しても、たまたま類似している単語があったぐらいで、それはどこの外国語にもあることだろう。なんら学術的な発見でもなんでもない。

尚子が海峡を挟んで、この県都青森に住んでから、不思議に思うことは、青森は港町のくせに

、魚臭くもなければ、潮の臭いもしない町だったことだ。まるで、海に背を向けて市民が生活しているようだ。郷土作家の三浦哲郎の短編に「一夜」というのがある。その中で主人公は、青森の堤川のほとりの居酒屋で飲んでいるのだが、不意に連絡船の霧笛が鳴って、ここは港町であったと改めて知るのだ。

いい魚場がないから、いい漁港と猟師町が発展しなかった。八戸の港町としての活気と比べるまでもなく、どこも零細だ。

「すみません。海のようなお母さんを知りませんか」

橋本夫婦が、西海岸の村を車で走りながら、村人に尋ね歩いていた。

「さあな、うちのがなら、日本海で芋洗って云うべな、がははははは」

尚子は意味が判らない。夫に訊いてみた。

「いいんだよ、からかわれたんだから」

夫は純情で、顔を赤らめて俯いていた。

「あのう、お母さんで、海を持っている方はおりませんか」

どうも質問の仕方が悪いようだった。ひとりの肥った中年のおばさんが、

「ああ、それはおらのことだべが」と、名乗り出た。

「おらの耳の中さ、昨日から海があるんだきゃ、ほれ」

そう云って、尚子の方に耳を向けてよこした。尚子が見ると、耳の穴から海水みたいなのが、ざっぶんざっぶんと噴出している。

「もっと、耳を近づけてみな、波の音がすっからよ」

「どれどれ」と、尚子が耳に耳をくっつけると、確かに、波の寄せる音がする。三半規管は貝殻と思えば、耳の中に海があっても不思議ではない。

「本当だ。どうしたんですか」

「昨日、磯で潜って、鮑採っていたのよ。そしたら、耳ん中さ海水入っちゃって、なんか、小魚も泳いでいるようなんだあ」

「はあ？」

あまり相手にしないほうがよさそうだ。尚子は、そんな海を現実を持っている人ではなく、イメージを探しているのだった。それは、母親たちに直に訊くよりは、母をイメージする子供に訊いたほうがよさそうだった。今度は、質問の対象を子供たちに絞った。

ちょうど、学校帰りか、ランドセルを背負った子供たちが、やってくる。

「君たち、ちょっと訊きたいんだけど。お母さんって、海の雰囲気があるかな。反対でもいいけど、海って、君たちから見て、お母さんみたいかな」

質問が難しいのか、ゲラゲラと笑ってみんな逃げていった。

そこへ漁師が通りかかった。

「あんたら、さっきから何を調べているんだ」

尚子は答えを持っているのなら、もう誰でもよかった。

「どうして、津軽では母と海が結びつかないのかって、調べているんです」

すると、漁師はさっきの子供以上にゲラゲラと笑った。

「そりゃ、みんな、おが（岡）とおふくろのことを云うがらだべさ」

第526話 結婚相談所

市で運営している結婚相談所が廃止となった。年々、相談者が減っていることもあったが、民間の施設は高額の割に独特のパーティなどを企画して結構繁盛しているようであるが、役所の窓口というだけで、何か暗く硬い雰囲気や敬遠されたものか、とんと人気がなかった。また、その建物にも問題があって、どうせ、サービス機関だからと、木造の汚らしい建物が当てられていた。そんな建物の前に木の看板に「結婚相談所」と、あっても、なんとも夢も希望もない。まして、中に入ると、うらぶれたような半分人生を終わり、棺桶に足を突っ込んでいるようなしがない定年退職間近の相談員が鼻毛を抜いているようなところでは、若い人たちは、とても相談に訪れたくもない。

それでも、一日一人くらいは相談に訪れていた。なにせ只ということがいい。民間はいろいろ費用が嵩み、年間では軽自動車を買えるくらいかかるのだ。

廃止になる最後の所長をしていたのが、問題の本村博史であった。市役所に勤務して三十年。あと、五年で定年だ。本村が所長になって二年になるが、その間に相談に訪れた利用客は年に三百人を越えていたにもかかわらず、ゴールインしたカップルは一組もいなかった。実績があつて、初めて利用価値があり、存続のための名目が立つのだが、それでは税金の無駄使いと、監査で報告された。一体、どんな相談の処理をしていたのか。

廊下がぎしぎし鳴る市役所横の古い木造の普通の家が、結婚相談所だった。その中に事務の囑託が一人、机を並べて、所長の本村が座っていた。夏の暑いときでもエアコンどころか、扇風機もない。締りの悪い窓を開けて、よれよれの開襟シャツを着た髪もボサボサで手入れもしない本村が、団扇で煽ぎながら、パソコンにデータ入力していた。民間に遅れてはならないと、登録者のデータをようやくデータベース化したのだ。条件を検索して並べるに、いちいち膨大なファイルを開いて、客に見せる手間より、一発で出てくる便利さがあった。それも、ここ一年で、ファイルをデータ化したのだ。

午前中は全く客が来なかった。本村は、自分で毎日冷たい麦茶を魔法瓶に持ってきていた。それをぐびりと呑みながら、おもむろに弁当を取り出した。子供たちはみんな社会に出たから、子供のお下がりのお弁当箱に、自分で毎朝、昼飯を詰めてきていた。開ける楽しみもない。女房は弁当なんか作ってくれるやつではなかった。おかずは、いつも夕べの残り物。それもないときは、梅干と海苔を二段に敷いて、それだけだ。実に味気のない淋しい弁当だった。

午後に、珍しくひとりの中年男性がやってきた。頭がすこし剥げている。がっちりとした体型は昔、何かスポーツでもやったのだろうか。利発そうな目をしているから学歴はありそうだ。

「日高と申します」

四十を過ぎている日高は礼儀正しく挨拶をした。囑託のおばさんが面倒くさそうに、規定の履歴書を取り出して、

「この相談申込書に、最初に記入してくださいな」と、ぶすつと云った。おばさんもオールドミスで、相談どころか、自分にも巡り合いがない。いい男がいたら、紹介するより、紹介されたい

。でも、日高は好みではない。ちょっと堅すぎる。申込書に目を通した本村は感嘆の声を挙げた。

「ほお、慶応ボーイですな。しかも理工学部で、一流企業のエンジニアで、年収も一千万ですか。ご長男さんが両親を見ていらっしゃるから、将来ともに親御さんの面倒はみなくていい。それに、マンションを購入されておるんですな。そこに一人で暮らしていらっしゃる。あとは、嫁さんだけですか」

そんな好条件の男性ほど、一人でいるケースが多いのだ。女もそうだった。気立てがよく、美人でスタイル抜群、家柄、学歴、家族構成、すべてが申し分ないのに、何故か縁がなくひとりであるというのも多い。それをこの相談所ではお見合いまで面倒をみるだけでなく、お祝い金も出し、しかも、結婚式も市の施設でなら割り引きまでしてくれるというサービスまであるのだ。

「あなたのように、恵まれている条件でも、やはり結婚はしたいですか」

本村は、そんなことを云い出した。

「結婚したいから、ここに来たんですよ」

日高は、変なことを云う人だなと思った。

「思い留まるならいまですよ。かの啄木も日記の中で書いています。《夫婦、なんというバカな制度だろう》ってね。有島武郎も《結婚、非常に恐ろしい籤引だ》とまで云っています。メナンドロスに関しては、《結婚は、避けることのできない災いだ》と警告していますしね」

日高は唖然としていた。ここは、結婚を奨励するところではなかったのか。そのために相談に訪れた者に考え直せとは。

「まあ、これから、わたしの家に行きましょう。結婚生活というものがどういうものであるか、実体験してもらいます」

本村はそうして、相談に訪れた人を自分の家が歩いてすぐだから、いつも連れて行くことにしていた。本村が日高を連れて、いきなり家に入ると、玄関から靴を手にしたまま、若い男が逃げ出すところであった。

「いまのは？」

と、日高が訊くと、

「ああ、あれは、うちの女房の間男で、いつものことです。気にしないでください」

と飄々と話すものだから、日高は信じがたい眼差しを向けていた。

「あんた、帰るなら、帰るって連絡したらどうなの」

もの凄い形相の女房の元子が、服を直し、化粧を直しながらふてぶてしい態度で開き直っていた。台所は食器の山、廊下は洗濯物が散乱、部屋もちらかって足の踏み場がない。

「また客かい。ふん、二人で掃除、洗濯してくれよな」

そうして、元子は奥の部屋でテレビを見てガラガラ笑っていた。

「結婚する前はスレンダーで、可愛いことも云っていたよ。いまじゃ、食べて寝て、ぶくぶくだ。女ってやつは、結婚を境に豹変するんだ」

頭ごなしに怒鳴る女房に、日高までびびっていた。

「さあ、君は食器を洗ってくれたまい。わたしは洗濯をするから。それが終わったら掃除だぞ」

日高はきょとんとして、どうして自分がこんなことをしないといけないのかといった顔をしていた。

「これが、結婚なんだ。重い現実なんだ。考え直すのなら今しかないよ」

市の結婚相談所は、名前ばかりだった。本当は結婚破談所。これでは一組も決まるわけがない。

第527話 試供品

女性雑誌の半分以上のページが、美容と健康の広告で埋まっている。ファッションやグルメ情報などをカットすると、見るところがなくなるほど、美しくなりたいというのは全女性の願望だった。

またまた登場する元子は、試供品マニアだった。店頭は勿論のこと、雑誌やテレビの番組で試供品をくれるとなると、まめにハガキを書いて出す。その後が煩いのも忘れていた。只ほど怖いものはない。後が煩いのは、ただの試供品が、後で電話セールスの的になるのだ。家族がえらい迷惑を蒙る。毎日のようにあちこちから電話で、奥さんはおりますかと、頻々とかかってくるから、その電話は家で仕事をしている夫の拓也がとることになる。仕事中に電話がかかってくる。忙しいときは、「いまいない」と、手短に切るのだが、外に仕事に出ている女房が何時頃帰るのかと、また何回も電話がかかってくるのだ。一社でそれだから、あちこちへ試供品を頼んでみると、その倍数で電話攻勢にさい悩むことになる。

あまり煩いので、女房がいないことにしたらいいと拓也は考えた。

「もしもし、元子さんいらっしゃいますか」

「はあ、妻は先週、亡くなりまして、昨日初七日の法事をしたばかりです。うううう」と、電話口で泣く真似までする。すると、相手は恐縮して、

「それは、どうもご愁傷さまでした」と、二度と電話はかかってこない。また、別の手も使う。

「もしもし、奥様いらっしゃいますか」

「あんた誰？ ひょっとして、女房の居場所、知ってるんじゃないのか。あいつと一緒に逃げた相手の男の名前も知っているんだろう。ええ？ 頼むよ、教えてくれよ」

この電話もかなり効果があるようだ。面倒なことに関わり合いになりたくない、二度と電話はかかってこない。

そんな夫の苦勞も知らないで、せっせと元子は試供品送れのハガキを出しまくる。もっぱら、ダイエットだとか、ビタミンだとか、肌が白くなるとかそんなありえないインチキ商品だ。本当に百パーセント効果のあるものなら、黙っていても売れるのだ。

拓也も、元子につきあって情報誌を読んだり、ドラッグストアを回るうちに、次第に健康オタクへとひきこまれていった。ただ、どれがどう効くのか判らないので、やはり最初は試供品ということになる。元子は持ち前の図々しさで、店に行くと、試供品と書かれた籠の中からごっそり

とポケットにねじりこむようにして持ち帰る。

拓也はその点は小心者と、元子にバカにされていた。

「だって、お一人様一個とはどこにも書いていないでしょう。これで、ファンデーションも当分は買わなくていいわ」

と、最近を試供品だけで済ませている。拓也にはそんな勇気はない。

「いかがですか」と、店員に勧められただけで、断りきれずについ買ってしまおうほうなのだ。

そんな拓也にもある悩みがあった。だんだんと頭のとっぺんが薄くなってきたことだ。叔父や父親などを見ている、河童だ。皿から禿げてゆくのだ。これは北村一族の宿命みたいなもので、絶対に避けられない悲劇なのだ。もう、女の子にもてる年でもないが、それでも、五十は過ぎたとはいえ、まだどこかにダンディを忍ばせていたい拓也は、降伏調印をしていない。ただ、アデランスのように車一台分もの高い費用を髪ごときに使う神経は判らない。いまは、いい薬も出ているに違いない。世の中、進んでいるのだ。

とある雑誌で、拓也は毛生え薬の広告を見た。どこのメーカーもいいことは書くが、効いた験しはなかった。ただ、そこは生えなかつたら返金しますとまで、自信を持って書いている。本当だろうか。やはりそこは慎重な拓也のこと、いきなり注文はしない。高い薬でもある。あとで、何か裏があるかもしれない。体質に合わないで、生えなかつた方には責任はとれませんみたいなことが、小さく書いてあったりするのだ。試供品を取り寄せることにした。

数日して試供品は送られてきた。それが、アンプルのようなプラスチックの容器に入っている。風邪薬とそっくりの容器なのだ。きっと、体の内部から作用するのだろうと、拓也はろくに説明書も見ないで、そいつをごっくんと飲んでしまった。吞んでしまってから、説明書を見ると、一日三回、頭皮にすりこんでくださいとある。

「ぎえっ、飲んでしまった」

そのことを元子に話すと、心配して云った。

「大丈夫かしら。なんともない？ 気分が悪いとか。むずむずするとか。病院に行ったほうがいいかしら」

気の弱い拓也は顔面真ッ青だったが、

「いいよ、少し様子見てみるよ」

それにしても紛らわしい容器に入れてと、元子も憤慨していた。

拓也が間違って毛生え薬を飲んでから、確かに体に変調が起こっていた。ジンマシンが出るとか、そんな外観には出ない、精神的なところに出てきたのだ。

「おい、元子、駅前のストアから試供品をごっそりと持ってきてやったぞ」と、拓也が会社の帰りにポケットから出したものだから、

「どうしたの？ あんなに恥ずかしがっていたのに、どういう風の吹き回し？」

「なんだか、おれ、人が変わったってみんなに今日は云われたよ。はははは」

まるで、夫の性格が百八十度変わったようだった。第一言葉使いがいつもと違う。野放図になった。積極的に外に出てゆく。人前では大声で話す。仕事でも、いままで細かいところまで気がつく拓也だったが、いまは小さなことには目もくれない。

「あの毛生え薬を飲んでからだわ。あなたが変わったの」

「おお、そうかもしれねえ、おかげで禿げなんかどうでもよくなったわい」

その葉は違うところに効いていた。拓也の心臓には遅しい毛が生えていた。

第528話 海まで三分五十秒

我が家から海水浴場という古い言い方だが、サンセットビーチまでは歩いて三分五十秒である。七月の十三日に海開きをした。水温は二十度とまだ冷たいが、市内からどっと涼を求める若い人たちがぐりだした。駐車場は満杯。ビーチバレーをするグループ、浜辺でバーベキューをやりながら生ビールを飲む家族、砂浜の上に雀台を置いて、麻雀をする学生たちと、実に賑やかだ。

わたしも、ひとりでシートを持って出かけると、変なおじさんと思われるので、中学の息子無理やり誘って、海水パンツにビーチサンダルだけで、本を何冊も持って海に行く。日曜日の暑いときに、家の中でごろごろと本を読んでいるのも不健康だ。どうせ、ごろごろしているなら、太陽の下で日焼けしながらごろごろしていたい。

東北本線と国道四号線のバイパスを横切れば、観光ホテルの脇からサンセットビーチに入る。ギャルたちがビキニ姿で、ボール投げをして遊んでいる。ふふふふふふ。適当な砂浜の上にシートを敷いて、持参してきた缶ビールを飲みながら、読書である。息子は冷たい海に入っていった。泳いでいるのは子供ばかりだ。

砂を指で握ってみる。さらさらと気持ちがいい。去年の夏、おととしの夏、十年前の夏、毎年の夏がここにあった。子供たちはみんな大きくなって、とうとう、わたし一人で来る海。女房は日焼けでそばかすがどうのと、海は大敵だった。日差しが暑い。背中だけを焼いても片焼けだから、グリルのようにまんべんなく全身を焼かねばならないと、適当に向きを変え、ごろごろとシートの上を回転しながら、じっくりと焼く。脂肪が乗っておいしそうだ。

と、ビキニの集団が、頭の上をキャーキャーと楽しそうに通りすぎる。ふふふふふふ。読書というよりも、目の保養に来ているのだ。五十過ぎたら、そんな楽しみよりなくなった淋しさ。いや、まだまだ。

どこかでラジオが鳴っている。いま流行りの歌がスピーカーから流れている。近くから遠くから歓声が遠近法で交差する。ついうとうととまどろむと、昔の記憶が夢現に錯綜する。あれは、合浦公園か、それとも下北の海か、小学生のわたしが砂遊びをしているのだった。妹の声が「にいちゃん」と、呼びかける。どこにいるのか。まだ、痩せていた若い母も日傘をさして佇んでいる。そこには家族という原初の形がいまだにあった。とても眠い。眠気の中にわたしは、退行していった。

びっしょりと汗をかいていた。肩と背中がやけにひりひりする。火傷したように皮膚が張って

いる。海水で冷まそうと、冷たい海に恐る恐る入る。最初は、とても足だけでも勇気があるほど冷たい。それが一気に頭から潜ると、体が慣れてなんということもない。底は冷たいが、海面は温かい。藻屑のように浮かんでいる。空と雲だけが見えた。こうして、空というものを改めて仰ぐことも日頃はない。わたしは、いつか魚になっていた。このまま、どこかへ流されてゆきたい。大きなビニールマットに乗ったギャルたちが接近してくる。ふふふふふふ。

ここにはなにものにも囚われない自由がある。もっとも裸に近い人間の安らぎがある。海という羊水の中で浮かんでいる記憶の中の忘れていた本能。気持ちがいい。声や歌がだんだんと遠くなってゆく。わたしは、こうして海に浮んだまま眠ることもできる。

あれほど海を怖がっていたわたしが、初めて泳げたのは小学生の高学年だ。水中メガネをつけたら、海が怖くなくなっていた。浮き袋を初めて手放した。潜るということも覚えた。耳抜きの方法を覚えたら、深く潜っても耳が痛くない。海底にある、海胆やら赤皿やらを捕った。腰に網の袋を下げて、いまなら密漁だが、子供だから誰も何も云わない。

収穫したものを浜辺で流木を集めて火をおこし、石の上で焼いて食べた。いまのように海は汚れていなかったから、海胆なんかは誰も捕らなかつたほど、足元の岩にびっしりとついていた。歩くときに刺さるので気をつけなければならないほどだった。ナマコや牡蠣、鮑なども豊富にあった。あれから四十年以上経って、いま、見る海底は、海草も疎らにしか生えていない砂漠だった。生物の姿が見えない。動く魚影もない。死んでいる海だった。じわじわとわたしたちの周囲の環境が、見えないところから蝕まれているのだ。

海が一番正直だった。人間の排水で汚れきった海水で、瞬く間に荒廃してゆく。それが海の中で見えないから、気がつかないだけなのだ。地上も砂漠化しているが海の中も同じだった。魚が捕れないから、湾内には漁船の姿も少ない。ちらほらと船影が見えるのは帆立の養殖をしているのだろう。じわじわと近海から死んでいる。ゴミの漂着もすごいものがあつた。違法投棄が後をたたない。してみれば海に浮かんでいるわたしも、人間というゴミなのだ。ゴミがゴミを生産して、捨てている。

うとうとと浮かんでいると、いきなり、体が網で捕獲された。わたしは慌ててもがいた。手足をばたつかせて暴れた。何事かと思った。

「なんだ、マグロかドザエモンかって思ったぜ。生きてるよ、こいつ」

そんな声が出た。わたしは漁師の網に引っかかっていた。

第529話 やりにくい

親父は戦後、シベリアに三年の間、抑留されて昭和二十三年に故国へと帰還した。関東軍の兵隊だけでなく、民間人も多くが武装解除されたあと、シベリアのラーゲリへと送られて、強制労働に従事させられた。その数六十万ともいう。そして、一割以上が、寒さと病気で死んで帰らぬ人となった。親父もその中にいた。三年間は、共産主義の勉強もさせられて、すっかりと洗脳

されて帰ってきたのだった。

青森に帰ってくるなり、すぐさま共産党に入党した。ピラ撒きなどをやって、多くの仲間ができていた。翌年に、戦前の仕事を活かして洋菓子店を開いた。小さな喫茶店もついていた。当然、そこが黨員たちの溜まり場になる。秋田雨雀も来た。商売そっちのけで、カンパもし、宣教活動に精を出していた。

青森になかった民商を作り、初代の会長にもなった。若いこともあり、まだ三十過ぎたばかりの親父は菓子屋の社長をしながら、ばりばりの闘士でもあった。レッドパージがマツカーサーによつてなされてから、各地で公職追放が始まっていた。共産党への弾圧が始まっていた。親父たちは地下に潜ってピラを刷ったりしていた。

その頃、わたしが生まれた。初めての男の子であり、親父は喜んだ。何故か、生まれてしばらく髪の毛が生えないでいたので、黨員たちが寄ってたかって、

「この子は徳球に似ている」「いや、アイゼンハワーだ」と、将来大物になるようなお世辞を口々に云っていたが、今から思うと、偉い人には違くないが、禿げのおじさんに似ているということだ。口の利けない赤ん坊だから怒ることはできない。

親父は、わたしが大きくなったらモスクワの大学に入れるんだと云っていたそうだ。

わたしが生まれたあたりに、銀行から融資について、アカには出せないような圧力をかけてきた。おふくろも大反対をして、商売に差し障りがあるということで、親父は泣き泣き脱党した。

たまたま、戦後の高度成長の波に乗り、会社は大きく成長していった。親父は経営者でありながら、左翼のシンパとして、陰ながら資金も出したし、応援していた。店は溜まり場には違いなかった。

わたしが、社会に出て、あちこちに修行に行つて、青森に戻ってきたとき、会社は支店も結構出して、従業員の数も多かった。わたしは後継として会社に入った。

「うちの社員はみんなだらしない。労働組合も作れない」と、社長は嘆いていた。それが聞こえたからというわけではないが、ある夜、従業員の親睦会の総会が、急遽、労働組合の決起集会になっていた。党の支部からも人が来ていた。突然のことで、幹部社員から役員は慌てふためいていたが、相談されたわたし自身も以前労組の支部委員長をしていたことがあり、容認どころか支持する立場に回っていた。一番喜んでいたのは社長だった。

「そうか、ようやく組合を作ってくれたか、やる気が出てきたな」

と、酒を持って駆け付けた。社長の目は感動のあまり、うるうるしていた。組合の委員長は自分がしたいようなことを云っていた。

「そうか、おれも三十年若かったらなあ」と、まだまだ馬力はある。

労働組合があると、当然、上部団体があり、横を睨みながら春闘の賃上げ交渉がある。いままでは、役員会で勝手に決めていたベアも、従業員組合との交渉テーブルに載せられることになる。それまでのワンマン社長の昔ながらの温情経営では通用しなくなる。数字を冷静に見た配分という形で、攻めてくるのだ。

初めての団体交渉が行われた。朝から社長はうきうきしている。自分が攻められる立場であることをすっかりと忘れていた。まるで、昔の闘志が返ってきて、何か勘違いしているようなとこ

ろがあった。社屋の会議室に役員と組合の三役、そして、その後ろには組合員たちも屯して、いよいよ第一回目の賃上げ交渉が始まった。

「昨年の数字は無視してかかります。世間並ということ念頭に要求案を策定してきました」委員長がそう云うと、

「おお、いいぞ。頑張れ」と、一人騒いでいるのは社長だった。

「それでも、それぞれ会社にはお家の事情というものがあり、他社と横並びというわけにはゆきません。そここのところはよく考えてもらいたと思います」

と、総務部長が釘をさす。

「会社は利益を出しています。業績も伸びています。当然の配分だと思いたすが」

書記長も食い下がる。

「皆さんは、利益が出たら、すべて分けて、使ってしまうというのですな。会社の経営はそうはゆきません。内部留保をしておかなければ、安定した経営をするという先行きのことも念頭に入れてお考えいただきたい」

総務部長はあくまでも撥ね付ける考えだ。

「いいではないか、なあ、みんなその分頑張るって云っているんだ、そんなケチにかからんでも」と、社長は組合の擁護に立つ。一斉に組合員たちから拍手が沸き起こった。

「し、社長がそんなこと云ってもらっては困ります」

顔色がないのは役員たちだった。

交渉は決裂した。いよいよストライキに突入するところまで行った。社長ひとり面白くない。他の役員たちが立場を硬くして、一步も譲歩しないところまでいきまいていた。

「最初から甘さを見せつけると、これからますますやりにくくなりますからな」

それが一致した意見だった。

第二回目の団体交渉は、ストライキの寸前に行われた。みんな腕章、ねじり鉢巻、工場も店も朝から開かない。

交渉のテーブルに役員と組合三役がついていた。何故か社長だけがいない。まさか、とんずらしたわけではあるまい。他の役員たちは、予定時間を過ぎても会議室に顔を出さない社長を案じていた。会社の外から労働歌が聞こえていた。マイクで叫んでいるやつがいた。シュプレヒコールに答えるように、大勢の社員たちが連呼していた。

「要求貫徹」「会社は妥結しろ」「そうだ」

どこかで聞いたことのある声だった。全員が窓から下を覗きこむと、驚いてもものも云えないでいた。

なんと、先頭に立って旗を振っている、ハンドマイクの男は、社長その人だった。

そこは巨大な村だった。なんでも大きいことはいいことだと、大きさを誇示する田舎者たちの外面のいい、器物の村だった。

上村恭介は、青森への転勤命令をもらった。左遷だった。上司に睨まれてのし返しだったが、辞表を叩きつけるところを家族のためにぐっと我慢した。初めは、単身赴任と思っていたが、いままでの過去の流された先輩たちは、戻ってこなかったと聞いたので、上村は家族で引越してきた。東京生まれの妻の美紀は、青森と聞いただけで暗い気分になった。

「あなた、青森っていうと、今も昔も田舎の代名詞みたいなところでしょう。セブンイレブンもないっていうじゃない。三越も高島屋も西武もないのよね」

「ばか、おれが調べたら、ちゃんとデパートらしきものはあるんだ。ラセラとか、アウガとか紅屋とか」

「なによ、そのラセラとかアウガとか」

「なんでも、ねぶた祭の掛け声でラッセラーというのからとったとか、津軽弁で逢うかいというのがアウガだそうだ」

美紀はますます暗い気持ちになった。言葉は果たして通じるだろうか。雪もひどいときは二メートルも積もるっていうし、きっと、いまでも馬車が走り、道路に馬糞が落ちているのだと、誤解していた。

友達に、「あら、今度、どちらに引越しですか？」と訊かれても、とても青森ですとは云えない。

「あら、青森なの。あのスケベな知事さんがやめさせられたり、十四億円のアニータ事件のあったところよ。それに、ゴミの不法投棄もあったし、いまは核のゴミ捨て場よ。あなた、大変ね、そんな危険なところに住むなんて、放射能汚染されて、髪の毛が抜けないかしら」

みんなにそう云われそうで、恥ずかしくてとても云えないのだった。

いよいよ、引越した。子供たちは喜んでる。

「わーい、スキーもできるし、スケートもできるんだよね。熊が出てきたり、カモシカも出てくるんだよね」

それを聞いて、また美紀は落ち込む。買い物の途中で熊に襲われたらどうしよう。なんでも杞憂するA型タイプだった。電車で青森駅に着いたときは、美紀は驚いた。なんと、ビルがかなり建っている。駅前の商店街を見ても、コンビニもあるし、歩いている若者たちのファッションは渋谷と変わらない。みんなケイタイを持っている。もんぺをはいて、頬を赤くした若者なんていないのだ。ちゃんと車も走っている。

会社の社宅が、住宅街に用意されていた。先輩に恭介が聞いた話では、前任者が、鬱病に罹って、自殺したとか。そんなことは美紀にはとても云えない。この町で定年退職までいるのだろうか。防人の心境で、嫌な気分になっていた。

引越しの挨拶周りで向こう三軒両隣を夫婦で訪問した。

「んだが、おめだず、都会もんだが、ここはなもかも寒ぶくて冬だば、のつつど雪降るばて、住めば都だべさ」

隣の奥さんにそう云われて、何のことか判らない。ただ、相槌を打っているが、美紀は愛想笑

いをしながらも、大変なところに来たという感じがしてきた。

「あなた、津軽語辞典とか売ってないかしら。津軽会話教室ってNOVAかどこかでやっていないの？」

ここは日本の外国なのだ。言葉が通じないという壁がある。住めば都とは云ったけど、ひと月、ふた月暮らして、学校のPTAにも顔を出したときだ。会合でも美紀をみんな仲間外れにする。みんな、昔からここで生まれて、ここで育った。保育園から一緒に幼馴染ばかりだった。結婚も同級生とか遠戚でするので、同じ姓がやたら多い。まるで団子なのだ。それで、保守的で、よそ者を受け入れない。一年経っても十年経っても、よそ者はよそ者だ。ひとりだけ、県外から転勤できていた奥さんが美紀のところに来て、

「ここは、村なのよ。わたしなんか、五年住んでいるけど、いまだにあの輪の中に入れないの。部落意識がまだ根強いところでね、みんなひそひそと陰で噂話はするし、誰誰ちゃんとこの誰誰かと、村中の猫の名前まで覚えているくせに、わたしたちにはどこか冷たいのよ」

それを聞いて、美紀はうんざりとした。確かに友達は作れそうにもなかった。言葉の壁だけでなく、そうした体質がある以上、いつまでもお客さんなのだ。

「奥さん、これ、うちの畑で採れたの」と、朝、六時で、まだ寝ているときに起こされて、玄関に出てみると、向かいの奥さんが、土のついた新鮮なほうれん草を持ってきてくれた。差し入れがあるのは、田舎のいいところだ。お返しにこちらからやるものがないほど、あちこちから、ものはくれる。みんな朝が早くて夜も早いから、生活時間が狂った。九時ともなれば、どこの家の電灯も消えていた。

若い人の姿が見えない。地元では就職先がないとかで、みんな都会に働きに行っていた。残されているのはじいさん、ばあさんばかり。

青森では昔から、モツケという人種がいるという。すぐ乗る、ノリのいいバカ者のことだ。お祭り騒ぎが大好きで、ホラ吹き。政治家にそんなタイプが多い。なんでも一番でなければならぬと口では大風呂敷だが、なんでも全国最下位だ。脳卒中の死亡率と仕事がないのは全国一だったかな。

恭介も仕事はやりにくそうだった。周りとは打ち分け合えない。都会もんには警戒する。中央に対する敵意が見える。そのくせ、自分たちでは足の引っ張りあいをする醜さ。なんでも自分が一番でなければならぬのだ。

「ここは、巨大な村なのね。いつまでも僻地と云われるのは中身の問題なのよ」

美紀が云うとおり、外から入ってくると、嫌な問題点がよく見える。

「青森は、村から脱却できないのかしらね」

そう、美紀が恭介に夕食後に云うと、恭介が諦観をもって云った。

「ここは、いつまでも村から離れられないんだ。有権者が村を選ぶから。歴代の知事の名前を見る。北村、木村、三村と」

山の手に大きな邸宅がある。ネット通販で急成長の会社の部長宅だ。リモコンで自動的に開く車庫からは高級外車が出てきた。仁科部長の出勤だった。

奥様はお手伝いさんがいるから、家事はしなくともよい。アトリエで油絵を描いている。いろんなサークルにも入っていて、外に出ているほうが多い。子供は二人。娘は私立のお嬢様高校へ通っている。息子は名門私立中学のトップだった。将来は東大間違いなしという秀才だ。部長の父が八十歳で健在だ。昔は大蔵省の役人をしていたが、いまは悠悠自適の庭弄りをしての隠居生活。家族五人が広い家に暮らしていた。

近所でも評判の人あたりのいい家族で、羨ましがられているほど、円満な家庭をつくっていた。幸福とは、この家族のためにある言葉ではないかと思うほど、なんの苦もない満たされた生活がそこにあった。

仁科部長は、来月の役員会で常務に昇格することはほぼ確定だった。社内の信望も厚く、将来の社長とまで噂されている。

その日、仁科はいつものように愛車で出勤しながら、何か嫌な予感がしていた。いままでが、あまりにも順風満帆で来すぎた。ここいらで、何か大きな陥穽がありそうだ。人生、とんとん拍子でくることぐらい怖いものはない。

仁科が、空いている住宅街を少しスピードをあげて通り過ぎようとしたときだった。突然、車の前に黒い猫が飛び出した。咄嗟に、ハンドルを回していた。いままでも、危ないことがあると、急ブレーキをかけるより、急ハンドルで避けるほうだった。この日も条件反射で、ハンドルをきった。だが、きりすぎた。車は、傾いて、歩道に乗り上げ、歩行者を何人か跳ねて、商店に激突、大破した。店の中に飛び込んで、商品もめちゃくちゃになった。仁科は車の中で意識を失っていた。通りは騒然となっていた。救急車が怪我人を運び出してゆく。二台でも足りなかった。通行人が二人即死、三人が重軽傷を負った。

仁科の怪我はたいしたことはない。三日で退院できると医者は云っていた。その頃、仁科の自宅では大変なことが起こっていた。交通事故の知らせでショックを受けたじいさんが、脳梗塞で倒れて病院に運ばれたのだ。こちらも幸い命には別状なかったが、下半身付随となり、寝たきり老人になるという。

近所は急に冷たくなった。事故とはいえ二人も殺した殺人犯と同じ扱いだった。息子も学校で、殺人犯の息子と呼ばれ、虐めにあって、不登校になっていた。

不幸はドミノ倒しでやってくる。仁科部長が、退院したあと、警察に呼ばれたり、保険会社の連絡で、忙しくじいさんの付き添いどころではなかったとき、保険会社からは冷たい返事がきていた。

一保険会社を変えるということで、先月から任意保険は失効になっていましたが。

仁科ははたと思い出した。取引先の要請で、別の保険に入るつもりで、忘れていたのだ。すべて、保険で損害賠償をするつもりが、自賠償よりないことに気がついた。

不幸はそれだけではなかった。仁科が轢き殺した相手は、なんと、大口取引先の社長夫人だったのだ。事故後、初めて出社した仁科は、社長と専務に呼ばれていた。

「実に困ったことをしてくれたねえ。この始末はつけてもらうよ」

進退伺の段階ではない。辞表を出せということだ。即日、仁科は辞表を提出し、私物の整理をしはじめた。未来の社長が、一挙に失業者に転落していた。

死亡した被害者宅を土下座して回った。殴りかからんばかりに叱咤されて、ただ、ひたすら頭を下げた。

「聞けば、保険には入っていないと云うじゃないですか、死ぬまで働いて払ってもらいますからな」

仁科の奥様は寝たきり老人の介護で疲れて、げっそりと痩せていた。息子も娘もいまは学校にも行っていない。預貯金はすべて下ろして、商店の弁償に向けられていたので、仁科家は急に米代にも事欠く始末。貧困のどん底に叩き落とされていた。女中は解雇。家はたちまち差し押さえだ。

息子が将来を悲観して、ビルから飛び降り自殺したのは、その翌日だった。息子の遺骸にとりついて、奥様は泣きじゃくり、発狂していた。娘はそんな悲惨な家にはいたくないと、どこかへ家出したきり帰ってこなかった。汚いアパートに越してきた仁科は、寝たきり老人の世話をしながら、とうとう父と二人きりになってしまったことに、ただ、呆然とこの三ヶ月の間の変わりようを思っていた。幸福な家庭を築き上げるまでには、何十年もの努力と勤勉が必要だったが、壊れるには猫の一匹で十分だった。まるで、砂の塔が崩れるように、何日もかからない。ある日突然、何が起こるか判らない。明日、あなたが、殺人犯で追われていることになっていたり、暴力団に脅迫されていることになるかもしれない。

これは、人から聞いた、本当にあった話なのだ。だが、この話には、もっと怖い付録がついている。この話を人に絶対にしてはいけないということだ。もし、あなたが、誰かにこの話をすると、その人が同じ運命に出会うというおまけつきなのだ。

ここに話してしまったわたしも、今日、車ででかけるときに、突然、車の前に黒い猫が飛び出してきたのだ。その後のことは云いたくはない。何故なら、この話はいつまでも終わらないからだ。

第532話 無機質少女

わたしが教師をして、いままで逢ったことのないA子という少女と出遭ったのは、夏休み前の土曜の深夜だった。

土曜の夜中でも、渋谷の道玄坂には、若い男女がひしめきあって、たむろする者たち、連れ立

って歩く者たちと、オールナイトで遊ぶ若者たちで溢れかえっていた。わたしは、渋谷の区域に関して、父兄と共に、未成年者の監視指導のために歩く当番になっていた。

明らかに中学生と判る幼顔の女の子たちが、大人顔負けのどぎつい化粧して、歩道の縁石に座っている。路肩に車を止めている暴走族の若者たちが声をかけてナンパしようとしている。彼女たちは相手にしていない。目的は金なのだから、金のない若者は相手にしないのだ。サラリーマンか中年男性で、ロリコン好みを狙っていた。下着なんか、いま着けているのは、ブルセラショップの買では五千円の値がつく。もっと金になるのは、写真、ビデオの撮影だ。中には小学生とおぼしき不良の卵まで混じっている。そんな少女たちが、自分の青い性を売り物にしているのだ。それを求める大人たちが一番悪いのだ。

わたしたちは、そんな子供たちが犯罪に巻きこまれないよう監視するのが仕事だった。補導員だけでは手が足りない。この渋谷だけでも、何万人という若者たちが行き来しているのだから。

その中で、ビルとビルの上にジベタリアンをしている十二歳かそこらの無表情な少女を見つけた。初めは、壊れた人形が置かれているのかと思った。よく見ると、目が動いている。さっそく、仕事で声をかけた。

「君、どこの中学？ 何年生かな。もう、一時じゃないか。この近所に住んでいるのかい」

少女は綺麗な長い髪を金髪に染めて、化粧もしているが、顔は子供だ。訊かれてもただ、じっと返事もしないで一点を凝視している。

「いま時間、ひとりでこんなところにいると補導されるよ。いま、君のような少女を監禁したりする悪いやつがうようよいるからね。先生が送ってあげるから、住所を云いなさい」

少女は黙って首を横に振り続けた。手首には幾筋ものカッターナイフで切ったような傷跡が見えた。

「どうしたの、その手首の傷は？」

明らかにリストカットの痕だ。この子は自傷癖があるのかもしれない。それとも精神的に病んでいるか。

「どうして、自分の命を大事にしないんだ。そんなことをして、死んだらどうするんだ」

すると、いままで人形のように動かなかった少女がようやく、わたしの方を向いて口を開いた。

「だって、どんなに切っても痛くもないし、死ぬって、壊れることなんでしょう。また修理すればいいのよ」

わたしはぎくりとした。中学にしては幼児のような答えしか持っていない。人間を玩具としてしか見ていない。ペットが死んだからと、玩具店に修理に持ってゆく幼児の話は聞いたことがある。わたしは、少女に冷血な臭いを嗅いだ。

「とにかく、自宅まで送ってゆくから」

「わたし、家なんてないんです」

「家出か。お母さんはどこにいるの？ 連絡して迎えにきてもらうから」

「両親もいません」

「嘘を云ってもすぐに判るからね。みなし子で家なき子というのかい。学校はどこだい」

「学校も行っていないんです」

わたしは、手に負えない子と遭遇したと思った。

「判った。それじゃ仕方がない。一緒に警察へ行って保護してもらおうしかない」

わたしは、逃げようとする少女Aの手首をむんずと掴んだ。冷たい。まるで体温がないようだった。少女は急におとなしくなり、わたしに連れられて、近くの交番と一緒にいった。警官は、扱いに慣れている様子だった。

「もう、終電も行っちゃったし、どこで夜明かしするつもりだったの？ どうだい。おなかが空かないかい。海苔巻だけど食べるかい」

警官は、食べ物で和ませてから、住所と名前を聞きだそうとしていた。

「わたし、食べられないんです」

少女は毅然とした態度で云った。

「そんな、お昼は食べたの？」

「いいえ、もうずっと」

「お父さんが心配して探しているかもしれないよ」

「家族なんかいないんです」

「君は強い子だね」わたしが口を挟んだ。「こんなところに連れてこられると、普通は泣いたりするんだが」

「わたし、泣いたことはありません」

「まさか、涙もないっていうのかい」

「はい、血も涙もありません」

警官は苛々してきていた。

「いい加減にきなさい。大人をからかうのは、その無表情の顔はなんだ。君は笑うこともないのか」

「ええ、笑うというのがどんなことなのか判らないんです。泣くということも同じです」

わたしは、冗談で話しているのでなければ、この少女はどこか狂っていると思った。普通ではない。

「君は、人を好きになったり、愛したこともないのかい」

「アイ？ その言葉の意味が判りません。どんな字を書くんですか」

とてもふざけているとは思えない。真顔で聞いてくるのだ。

「名前だけでも聞かせてくれないか。ケイタイなんか持っていたら出してごらん」

警官はしびれをきらしていた。

「わたし、ケイタイは持っていません。名前もないんです」

警官はとうとう頭を抱えてしまった。わたしも梃子摺って、溜息しか出てこなかった。

すると、少女の体から、ピッピッピッと発信音がした。

「ほら、ケイタイを持っているんじゃないのか」

警官が手を差し出すと、少女は慌てた様子で、云った。

「わたし、別におなかは空かないんですけど、一日に一回は充電しないと止まってしまうんです」

と、胸からするすると電源コードを取り出すと、
「これをコンセントに差ししてくれませんか。一時間で急速充電しますから」
少女はロボットだった。

第533話 マッチ擦るつかのま海に

啄木もそうだった。三島もそうだった。永山もそうだった。ただ、みんなもう少し生きていれば、そして、もっと自由でありさえすれば、右でも左でも、政治という汚らしい皮袋をまとったにせよ、革命のための一里塚を立てていたかもしれない。

こんなくだらない、騙しあいの掌返し、小競り合いと朝三暮四、あまりにバカにしていることに無関心でいられるほど、おれは無神経ではない。ただ、とても歯車の中に組み込まれての反復活動に耐えられないだけなのだ。一日が十日、半年、一年、十年と、無駄な足踏みばかりしていたところで。何が変わったか。だんだんと悪化してゆき、戦力はそがれ、同じ抵抗を試みるが、結果はいつも同じじゃないか。焦ることはないと自分に云いきかせはしているが、この世界はおれが生きてだけの世界だ。おれが死ぬと世界も意味がなくなる。だから、せめて息のあるうちに、玉砕か回生かを見極めたい。長編小説のラストを読まずして死ぬことこそ、悶え苦しむ活字中毒患者の無間地獄の天刑。

左右両端に偏向しすぎるとき、加熱し融点を越えたイデオロギーの転換点を迎える。歴史の融点、沸点というものが、いつも煮えたぎる頂点で形状変化を起こす。啄木もテロリストを歌い、永山は皆殺しを考え、三島はクーデターに失敗した。行きつく先はアナーキーだ。破壊だ。すべての終わりだ。

ありとあらゆる政治家も財界人も役人も、大なり小なり国を食べ物にしている。それを怒ることなく、お零れを頂戴するために投票する国民も愚か者ばかりだ。いよいよ、国は白蟻たちに蝕まれ、ぼろぼろに土台から食い尽くされて、立っていることもできなくなる。赤字国債という食い尽くした借金が、国家予算の五倍を超えても異常と思わない上も下も、明日は野となれ山となれか。こんな国も国民もいない。いっそ、すべてが滅んでしまえばいいものを。

おれは、日本人であることが恥ずかしい。テレビのチャンネルを回すと、あれはなんだ、低俗な番組に笑ってられる実に平和な国民の顔が見える。なんの哲学もなく、信条もなく、ただ、欲にまみれ、自分たちの欲求をただ満たすことだけを国に要求する。この国の墮落は国民の総意なのか。くだらないことにつつをぬかしている間にも、着々と軍備は進み、われわれの時代は戦前へと逆行しているのか。みんな容認して、誰も反対しない。明日、原爆が頭上に落ちてくるといっても、きっとバラエティ番組を見ながら、ゲラゲラと笑って贅沢三昧な生活にずっぴりと浸かって感覚が麻痺しているに違いない。

宗教も形骸化し、精神のよりどころが物欲崇拜というイドラにとって替わり、教育は荒廃し、家庭は崩壊している。少年は犯罪に走り、親の権威は地に落ちて、すでに野放し状態。そんな曲がった子供たちが社会へ出たときはどうなる。上から平然と悪事を働くから、若者が云うこと

をきくはずがない。国民は泥棒を養成しているから、みつからなければ何をしてもいいという教育だ。甘い汁を吸えないなら、政治家になる意味がないと、次々に暴露され、逮捕されてゆく数珠繋ぎの犯罪を見ていると、無関心どころか、見たくもなくなる。腐敗した政治、不景気は改善されず、失業者は増えるばかり。零細企業から目に見えないところで倒産、夜逃げ、心中は新聞記事にもならない。自殺者も三万人というが、それは表向きの数字だ。事故だと報告しているのがどれほど多いことか。保険金もあるし、世間体もある。目に見えないところから、この国は瓦解していつている。それなのに、どうだ、福祉の切り捨てだと、教育の切り捨て、税金ばかり上げて、すべて弱いものから収奪しようという政策だ。単純思考というか、国民を愚弄しているというか、これから先も、よくなるわけがない。そんな金権体質を直すことなく、この先も、きっと、同じことを繰り返してゆくのだ。そんな国なんか、めちゃくちゃに壊してやればいいのか。

「判った。寺山、君の言い分は判った。だが、早まるなよ」

原子力発電所に立てこもった寺山は、爆弾を大量に仕掛けて、いま、まさに導火線に火をつけようと、マッチを擦っていた。警官隊が原発の周辺を包囲していた。

説得に当たっていたのは、寺山の同期の金浜だった。寺山も二十年前に、病気で死ぬ寸前までいって、奇跡の生還を果たした。あのときに、死んでいれば、こんなことにならなかったのだ。こんな醜い日本を見ないで済んだのだ。彼なら、やるだろうと思っていた。いままでは、単に実験の劇場であった彼の文学思想を、現実の国という大きな舞台に移しただけの話なのだ。

もし、寺山が導火線に火を点けて、火薬が爆発したら、原発は大火災を発生させ、チェリノブイリと同じ結果を生む。そうなれば、半径五百キロは人間が住めなくなる。東京に近い、この原発でやられたら、関東一円の四千万人の避難先はない。いや、東北北陸まで入れたら、日本の人口の半数近い人間がどこかに移住しなくてはならない。たった、一本のマッチで、日本は完全に破壊されるのだ。

「寺山、君の要求はなんだ。どうしたら、止められる」

ケイタイでやりとりしていたが、寺山の決意は固かった。もう誰にも止められそうになかった。

「おや、おかしいな。どうして火が点かないんだ」

寺山の持っていたマッチは昔のものだった。いまは、どこでもマッチなんかくれない。古いマッチは湿気ていた。すべて、折れてしまった。

「ちくしょう、やはりライターにしとけばよかった」

でも、ライターつけるつかのま海にと歌えばちょっと雰囲気は壊れるのだった。

第534話 本の未来形

街から書店が姿を消してから、何年が経つだろうか。すでに、出版社も印刷屋もこの世から消えて、本というものが、博物館に収まってからは、図書館というものも、完全にどの街からも消えていた。

日槌は、ベストセラーや、最近の受賞作品を見ることはない。そんな、海のものとも山のものとも判らない作品をミーハーのように見て、落胆するよりは、時間という風化に耐え抜かれ、残り続けているものに、文学の本当の姿があると思っていた。それで、あまり人の見ない、古い作品をいつも見ていた。それは、また売価が安く設定されているから、安月給の日槌にとっては、嬉しいことだ。

本という言い方もすでにしていない。文学ファイルと云う。見たい作品は、どこの店でも売っていない。パソコンの端末から、ネットを通じて、ダウンロードするのだ。電影書店とつい先日まで云っていた。支払いは、クレジット番号を所定のページに書き込むだけで、いずれ銀行引き落としになるのだ。

ダンテの「神曲」の天国篇を購入しようと、インターネットの出版社から、掌に入るPDAにダウンロードした。それをメモリースティックに保存して、折りたたみ式の読書ヘルメットを鞆から取り出した。カフェでコーヒーを飲みながら、ヘルメットをかぶった。他に何人も、そんなヘルメットをかぶって、いろんな世界を体験している人々がいた。

耳にヘッドホンが自動的に装着されると、もう外の音は聞こえない。そして、両眼をぴったりと覆うゴーグルをかけると、カフェの室内の光景も見えなくなる。完全に彼は鎖された世界に浸りることができる。

ヘルメットのスロットにメモリースティックを挿し込むと、映像と音声、臨場感溢れるばかりに、日槌の前に拡がっていった。ゴーグルがそのままモニターになっていた。その機械が見るのは活字がいっさいない文芸体験劇場なのだ。すべて、ナレーションと、日本語の現代口語で、主人公である自分がさも喋っているような錯覚に入る。映像はすべて3DOで手を伸ばせば、触ることができるような立体的なものだった。目線も主人公のそれになっている。

「ようこそ、ダンテの神曲、天国篇へお越しくございました。これから二時間、あなたを詩的な世界へご案内いたしましょう」

日槌は、少し緊張していたが、ゆっくりとコーヒーを飲み干すと、ソファに体を埋めた。美しい白いローブをまとった美女が彼のすぐ前に立っていた。彼はダンテ自身になっているのだ。女の人は天国の案内役のベアトリーチェ。CGIで造られている、実際の女優ではないにせよ、かなり官能的なギリシア的な美人だった。日槌はドキドキした。日本語で話しかけてくる。つい、日槌も返事をしてしまうが、返事をする必要はない。別の男の声が、相手をしている。快い詩的な会話が続く。若いときに寿岳文章の文語訳でしか読んだことのなかった日槌は、現代の口語訳で、しかも、いまの若い人たちに判る言葉で翻訳されても、なお、ダンテの詩心を残している訳に感銘を覚えた。水星、金星、土星と、だんだんと天国に近づいてゆく宇宙旅行をしている気分が

壮大だった。美女と一緒に手を取りあって、宇宙空間を飛んでいるのは、いままでしたことのない体験だった。やがて光に溢れている天国へと吸い込まれてゆく。

「お客さん、もう閉店ですが」

すべてが終わって、恍惚のうちに、いまだに気持ちだけは浮遊しているときに、いきなり現実に戻された。体を揺り動かされて、ヘルメットを取ると、もう、テーブルに椅子が載せられて、ウェイターが床をモップがけしていた。

日槌は、文芸作品のすばらしい体験の余韻にひたっていた。いまのホラー小説や、サスペンスものは苦手だった。自分めがけて、ナイフで切りつけてきたり、ピストルで撃ちこまれて、血が噴出したり、主人公が亡くなると、自分が棺桶に入れられて、火葬されるまで体験できるのだが、後味が悪い。

第一人称で書かれた小説は、視点が主人公になるが、三人称なら、視点は映画のカメラと一緒に、自由自在に状況を捉える。それもまたつまらない。やはり、自分自身が物語の中に溶け込むためには自分がその場にいたほうがリアルでいい。日槌は、家に帰ってから、今度は官能小説にしようと、相手役が人妻の不倫ものを選んだ。それをダウンロードすると、自室でじっくりと楽しもうと、ヘルメットを持って、帰った。日槌はまだ独身だった。家にはおふくろがひとりだけ待っていた。さっさと飯を済ませると、ベッドに入りながら、ヘルメットをかぶった。「桜ヶ丘の団地妻マル秘なんとか」というタイトルだった。主人公は、古本屋の親父。

普通は、大学教授や会社の重役、スポーツマンなどの格好いい男たちが登場してくるのだが、古本屋の親父というのがどうも野性的でいいような気がした。作者は北村拓とある。どこかで聞いたことのある名前だった。

「奥さん、ご不用の本はありませんか。ふふふふ」と、いやらしい笑いを忍ばせて、若い人妻に玄関で対面していた。

「いらぬ本はありませんけど、いらぬ妻ならございますが」

「ええ、下取りいたしておりますよ。ふふふふ」

と、日槌が抱きつこうとすると、いきなり張り倒された。

「なんだよ、いきなり、お母さんに抱きつくことはないだろう。不気味な息子だよ」

ヘルメットをとると、母親が立っていた。

「電話だっていうの。いつも、そんな訳のわからないヘルメットかぶっていたら、人が来ても、火事でも判らないよ。いい加減にしろさい」

この読書体験マシンの欠点は、危険だということだ。説明書にも、火の気のあるところや、外では絶対に使用しないでくださいとある。

「せっかく、いいところだったのに。あとで続きを見ようっと」

日槌はたまに硬い本の合間にやわらかいファイルも見るのだ。いつでも美人とベッドを共にすることもできるのだ。

古本屋は、博物館と同じで、すでに人々の読まなくなった骨董的価値しかない本をいまだに売っていたが、それでは食えないので、店主の北村は、副業で、ポルノ小説を書いていた。書くのはシナリオみたいなものだった。それを原作にして、CGデザイナーたちがパソコンで、ゲームを

作るように小説のストーリーをリアルな絵にしてゆく。モデルは女優が多い。それに声優たちが声を合わせてゆく。実写の背景と合わせるので、ポルノ映画のように生々しい。

「団地妻シリーズにも飽きたな。今度は、熟女ものにしよう」

そうして、客の来ない店にいて、せっせとパソコンに向かって官能小説の原作を打っているのだった。小説は読むという行為から体験するという参加型に変わっていた。疑似体験、それこそ新しい文芸の形だった。

第535話 縄文式キャンプ

最近のアウトドアは行きすぎの観がある。自然に親しむということを忘れてやたら文明の利器を海や山に持ちこむのだ。

キャンプともなると、巨大な普通の家ではないかと思う、2DKもありそうな、部屋がいくつもあるテントを持ってくる。窓もちゃんとしている。中には蛍光灯があり、テレビやMDプレーヤーにノートパソコンまで持ってきている。バッテリーでは足りないと、発電機を持ちこみ、小型の冷蔵庫に缶ジュースやビールを冷やしておく。折りたたみ式の椅子とテーブルのセットも外に置いて、まるで、自分の家の居間にいる気分と同じだ。虫が寄ってこないようにベープマットに虫よけのスプレー。小型のガスボンベまで持ってきて、バーベキューのコンロに食器までセットで揃えてある。

そこまでして山に来るなと云いたい。家の庭でやっていけばいい。そういう文明の利器から離れられない人間たちが、いざというときにサバイバルできないのだ。

北村一家もよくキャンプに行く。父親の拓也が、本当のアウトドア志向なのだ。若いときはよく登山をした。子供たちを鍛えるには山が一番いいと、弱音を吐く子供たちの尻をひっぱたいて連れてくる。自然の厳しさの中で生活させることが一番いい勉強になる。

できるだけ歩かせて、ようやく着いたキャンプ場。車がいっぱい止まっていた。夏休みの土曜日だから混んでいる。

「ほら、お父さん、みんなここまで車で上がってきているじゃないか」

中学の長男が文句を垂れる。小学校六年の次男は黙々と登って来てバテ気味だった。末っ子の三男は小学三年だ。さっきまで、歩けないと泣いていたのを拓也に棒でどつかれてようやくここまで来た。

テントが二十張くらいある。どこも近代的装備で、例のようにホームセンターで買ってきた文明の利器に取り囲まれている。愛犬まで連れてきていたり、音楽をがらがんかけている。何か、高原がひとつの町になったようだ。

「ようし、ここに寝場所を確保する。毎年やっているから判るな。さあ、行動開始」

子供たちはうんざりしていた。長男ぐらいになると、拓也のやることは貧乏くさくて恥ずかし

と思う。拓也はテントも食器も鍋もいっさいを持ってきていないのだ。すべて現地調達をするという決まりがあった。

子供たちは、いろんな長い枝を拾ってくる。できるだけ太いのがいい。それを組んで建てる。結わくのは蔓がいい。柱立てが済むと、それに朴や蓆などの大きな葉っぱをかぶせて屋根にする。風で飛ばされないように、蔓で編むように押さえてゆく。ハウスができたら、家の周りに水ハケのための側溝を掘る。

みんなクスクスと笑っている。構うことはない。それが終わると、石を拾ってこさせ、竈をこしらえる。風向きを計算に入れて口を決める。毎年やらされているから手馴れたものだ。それから、薪や干草をできるだけ集めてくる。枯れ木はいくらでもある。

今度は、一番大事な食糧探した。食べられる山菜や、山の芋、茸などを手分けしてみつけてくる。近くの川で魚釣りもする。捕れなかったら飯抜きだ。普段、便利な生活に慣れている子供たちも、この不便な生活を楽しんでいる。キャンパーたちが、興味津々になって集まってきた。

「パパ、この人たち、乞食なの？」

と、よその子が父親に訊いていた。

「しっ、貧乏だからじゃないんだよ。原始的生活というやつなんだ」

火も木をこすっておこす。その火種を枯草に移して、竈に火を入れる。最初は小枝から、そして、太い木へと、だんだんと火力が安定してくる。釣ってきた魚に小枝を通して、炙って焼く。芋は火の下に埋めて蒸し焼きだ。葉っぱで作った鍋に水を入れ、山菜汁を作る。

その一部始終を見ていた他のキャンパーたちが、急に自分たちのレジャーが恥ずかしく思えてくる。

子供たちは顔も手もススで真っ黒だ。気にすることはない。豪快な自然そのものの生活に浸りきる。周りのいま流行りの歌が煩い。山に来たら、黙ってせせらぎの音や野鳥の歌、風のを聞いたらい。みんな、裸足になって、重労働に汗びっしょりだ。沢まで水を汲むのも大変だ。よそはこんなおいしい山の水を飲まずに、ペットボトルにミネラルウォーターだ。

まだ、日没前に夕食は終わる。普段の生活より時間がずれている。夜明けと共に起きて、日没と共に寝るのだ。鳥や獣と同じ時間帯で生活をする。それが、人間の体には自然でいいのだ。太古の人はろうそくや灯明もなかった。北村一家はすっかりと縄文人になりきっていた。自給自足の生活が如何に大変なものか体験するのがいい。世界がいまに、どんなことになるか判らない。あまり文明に頼りすぎていては、いざというときに、生き延びる知恵がない。どんなことをしても生きて行けるスキルを自然の中で学ばせるのだ。

いまの世の中では、一ヶ月停電ただけで餓死するものが出るに違いない。冷蔵庫が使えないだけでもパニックになる。いや、パソコンがないと生きる望を失うものも出てくるだろう。

よそでは、虫だ、蛇だと大騒ぎしている。

「虫も蛇もみんな友達なんだ。敵ではないのだ。仲良く遊べ」

木から垂れている蔓にぶらさがって、ターザンごっこをしている子供たちを見て、よその子もやりたがっていた。すると、母親が、

「いけません。怪我をしたらどうするんです。あんな真似をしたらいけませんよ。木登りだな

んて、はしたない」

街の人々はすでに文明という枷に縛られて、本当の自由ということを忘れていた。北村一家だけが、よその輦轡をかいながらも、パンツ一枚で叫びながら飛び回っていた。遺伝子だけが野生のときを覚えている。

多少の怪我も勉強だ。木登りをしていた三男が木から落ちた。すりむいただけだったが、血止め草をあてがい、草で包帯だ。みんな、よその子たちが笑っている。

「木から落ちたから、笑っているんだ」

「気にするな。木から落ちた猿が人間になったんだ。失敗がいつも大変な発見をもたらして、文明を創造してきたんだ」

長男は云った。

「じゃ、笑っているみんなは、失敗した人間なんだ」

「そうじゃない、猿が失敗して人間になったんだ。人間、これは完全な失敗作品なんだ」

暗くなってきたら、急に土砂降りの雨になった。雷も鳴っている。キャンパーたちは、悲鳴をあげて、帰り仕度を始めた。テントを畳んで、右往左往している。一台、二台と車で去ってゆく。キャンプ場は北村一家だけがぽつんと取り残されていた。

「みんな、帰っちゃった」

木と葉っぱの家は森と同化してなかなか快適だった。いつか人間どもは濡れることも怖がるようになっていた。

「雷は遠くなっていった。光って、音が鳴るまでの時間掛ける三百四十メートルくらいが距離なんだ。そらっ、光った。一、二、三、四...」

数えているうち、四人ともすっかり疲れて、獣のように寝入っていた。

第536話　ねぶた流れろ

ゆらゆら湯の町にねぶたが揺れる。毎年、元祖浅虫温泉ねぶた祭は、青森のねぶたより十日以上も早くやる。元祖と云ったのは、ねぶた発祥の地がこの温泉場の善知鳥岬で、坂上田村麿が蝦夷をおびき寄せるために、ねぶたを出して、鬩った地というのだが、それも伝説めいて怪しい。同じ青森市内だから、どこでもいいようなものだが、この浅虫ねぶたは、格別に情緒がある。狭い温泉街をねりあるくのは、昔の懐かしいねぶただ。

保育園の小さなものから、小学校、中学校、商店会と四台が出陣するのだが、どれも子供ねぶたのように小さい。それを観光客が沿道に出て、やんやの拍手をするなか、すべて地元の跳人に手作りのねぶたで、田舎のねぶたらしく、スポンサーもない。七月の二十三と二十四日が、毎年、合同運行で、四台が連なって、旅館の前を往ったり来たりするのだ。

見物客との間にロープがあるわけではない。開放的で、自由な雰囲気がある。各ホテルでは、

玄関前にテーブルを出して、ビールや樽酒をふるまう。最近は景気が悪くなったが、少し前は、刺身の盛り合わせまで出してくれた。帆立や焼き鳥まで出して、板前さんと女将さんの気風のいいところが温泉街らしい。

わたしも、子供たちが小さいときは、学校のPTAで出なければならなかった。たすきを掛けて、学校の提灯を持ってただ歩くだけのつまらない役だった。若い人の輪に入って、踊り跳ねてみたいと思うのだが、ぎっくり腰が心配だ。さりとて、年寄りに混じって提灯を持って歩くほど老いてはいない。

多分、こんなねぶたは、下北半島の各地でも、津軽半島の小さな村でも行われている、村人たちのための祭だった。青森のように商業化してしまい、豪華で大きいねぶたとは違う。まだ、ねぶたが民衆のものであった名残がここにある。

わたしは、昔のねぶたを思い出していた。子供会というのも、いまは田舎に行かなければならないだろうが、以前は各町内単位であり、絵のうまいお兄さんが、小さな子供ねぶたを自主製作していた。大八車の上に組んだ台の上に出来上がったねぶたを載せる。台上げと云って、ひとつの祭の行事なのだ。大人たちなら、それを上げるために集まった人に酒を振舞う。子供ねぶただから、二人もあれば載せられる。子供ねぶたは、合同運行はしなかったような気がする。町内をねりあるき、おにぎりや蝋燭を貰ってゆく。いまのような発電機やバッテリーはないから、ねぶたの中に人が入り、蝋燭に火を灯していた。それで、よくねぶたは燃えたときもあった。

いまでこそ、太鼓と笛のお囃子が、勇ましい音色で、心踊るものに聞こえるが、幼いときは、恐ろしい音であった。それで、よくわたしは怖くて泣いた。泣いた子は、ねぶたの後ろに引いてゆく、リヤカーに積んだ茶箱の中に収容された。歩けない子や足手まといの子もそうした箱の中に入れられた。

昔に戻りたい。あの懐かしいねぶたをまた見てみたい。わたしが、感慨深い様子で昔日に浸っていると、ひょいと目の前にピエロの化人が現れた。わたしを観光客と違ってか、おどけて見せるのだ。化人とは、ねぶたの跳人の合間に観光客へのサービスで、いろんな笑わせる仮装で、参加している人たちで、大概は化粧や仮面で、誰かは判らない。

「あんた、泣いているね」

ピエロはわたしがじーんと感動のあまり涙ぐんでいるところへ来たので、妙なことを云う人だと思った。

「泣いた子は、こっちへ来なさい」

そうして、わたしはピエロに理由もなく連れてゆかれた。酒に酔って、跳ねる大人の煌びやかな花笠と鈴の音色、いつのまにか、わたしの身長が縮んでいることに気がついた。みんなを見上げている。ねぶたも古びたねぶたに替わっていた。ねぶたの後ろに太鼓が続く。もの凄い太鼓の音に、わたしはしゃくりあげながら泣いていた。喧騒の渦の中で、幼児には刺激が強すぎる。神経質なわたしはよく虫をおこした。ピエロはわたしをひょいと抱き上げると、後続のリヤカーの茶箱の中に入れた。箱の中には二、三歳くらいの三人の幼児たちが、やはり泣いていたり、眠っていたりしていた。

わたしは、いつか自分の体が小さくなって、幼児になっていることに驚いた。箱のへりからようやく顔が出せるくらいだ。真っ暗な沿道には、多くの市民や観光客が立っていて、手を振った

りしていた。街灯も電球でぽつりぽつりと点いているようで街は暗かった。高いビルはない。どこも、せいぜい二階建の粗末な家のような。やけに看板が古い。電信柱に巻いてある看板も、「マダムジュジュ・ウテナ男性化粧品」という懐かしい文字が浮かんでいた。ここはどこだ。わたしは、浅虫温泉の駅前でねぶたを見ていたのだ。「小松屋」「料亭かやま」そして、柳の木と川が見える。遠くから連絡船の霧笛。わたしは半狂乱になって泣いていた。声が幼児のそれだった。

「ここから出してくれ。戻してくれ」

素朴なねぶたがゆらゆらと戦災から復興したばかりの青森の町並をねりあるいていた。

第537話 結婚願望

男はいくつになっても男だが、女もいくつになっても女なのだ。

すでにオールドミスになっていた木戸綾子は、シングルライフに憧れて一人ではいるわけではない。たまたま縁がなかっただけなのだ。さりとて、キャリアウーマンというわけではなく、いままでも転々と職を変えてきた。そつがなく頭がいいから、どんな職場でも男たちよりは使える。力仕事は苦手だが、人間関係の調整はうまい。上に立つ仕事をこなしてきて、成果が認められたから、ヘッドハンティングされてきた。いまや、一流の会社の中堅社員よりは高額所得者になっている。

都内の閑静な住宅街にあるマンションも購入して、ひとりで暮らしていたし、マイカーも外車の高級車に乗っている。友達も多く、ゴルフ仲間もいて、結構、私生活もエンジョイしているのだが、ただ、彼氏というものがいない。ひとつだけ、一番大事なものが欠けている。

以前は見合いの話なども出ていたが、綾子の方から断っていた。いろんな男を見てきて、大概の男がつまらなく見えてくるのだ。それまでも、交際した男性はいないわけではない。ただ、最短で一日で別れた。長くてもひと月も続かない。飽きっぽい性格でもないのだが、ひとつでも欠陥がみつかり、それが拡大されて気になるほうなのだ。どこかで妥協しなければ結婚まで行きつくことはないのに。

いつも、綾子はびしっとスーツで決めている。会社の折衝窓口だから、相手企業のエグゼクティブから、外国の企業の代表の相手もしなければならない。英語はもとより堪能だったから、社内では通訳の代わりも務めている。顔のしわなんかは、気にするほうで、週に二度はエステに通って、芸能人のように肌の若返りのために大金を投じていた。それぐらい鍛えないと、女という武器は使えない。企業にとっても女はひとつの武器なのだ。

関西から新規取引を求めて、ある会社のエージェントがやってきた。特許の売りこみなのだ。広告代理店も間に入っていた。

「こちら、外商部長の木戸です」と、社長が紹介する。相手はスマートな四十代のきれものという顔をしている。俳優の誰かに似ていた。その名前を思い出そうと、綾子は目を天井に移していた。

「高村です。以前はマサチューセッツ工科大学に研究生として半導体の研究をしておりましたが、今度、こちらにお世話になることになりました」

名刺を交換した。理工系とは思えないやわらかな目としゃれた会話に、綾子は引きこまれていた。こんな気持ちになったのも久しい。まだまだ、女心は衰えていない。

綾子の上ずったような声もおかしかったが、どうも様子がおかしいので、社長はすぐに高村を意識しているのが読み取れた。

「まあ、ここは、お二人で、決めてください。木戸はわが社の全権ですから、木戸がオーケーなら契約ですから、よく話してください」

そうやって、社長は気をきかして席を立った。

「ここではなんですから、どうですか、これから食事でもしながら」

と、高村は扱いに慣れているそぶりで綾子を外のレストランに連れ出した。高村も綾子を気に掛けている。互いに独身なのだ。ときに商売に男女の機微が利用される。心理的効果もちゃんと計算されている世の中なのだ。

「木戸さんは、そんなに美しいのに、お一人だなんて勿体無いですね」

ナイフとフォークを休めながら、高村はそこから切り出した。

「そんな、わたしなんてもうおばあちゃんですよ」

「またまた、周りの男性がうるさくありませんか。ところで、木戸さんはおいくつなんですか？」

「あら、女性に年を訊くなんて失礼でしょう」

「いやあ、失敬。そうでしたね」

(多分、四十くらいか。いや、もっと若いかもしれない) 高村は周りの女性と比べていた。しかし、最近の男も女もまるで年齢が判らない。親子で歩いていても、端から見ると、姉妹に見える母娘もいるのだ。化粧と整形、ホルモンやサプリメントなどの若返り薬から、エステまで様々の秘法が科学的にあみだされていた。

(そういう、この男はいくつなのかな。四十半ばか、それより下ってとこかな)

この男は遊んでいる。綾子は直感した。言動がスマートな男ほど警戒しなければならない。だが、高村のような男だったら、もう一度騙されてもいいかなと、綾子は思っていた。

「今度、仕事抜きで逢っていただけませんか」

そら、来た。綾子は了承し、次の約束までしていた。いままで、なかなか心ときめく人に出会ったことはない。高村が綾子の人生に遅れてやってきた少し中年の王子だった。

二人の交際が始まった。本当に仕事抜きのつきあいだった。高村は実に人生経験が豊富だった。その辺の若い男はかなわないだろう。綾子もまた、会話がウイットに富み、なんでも知っている。互いに、こんな人と結婚できたらいいだろうなど、思っていたが、それはなかなか口に出せないでいた。したいけど、できない。もどかしい駆け引きが、いよいよ燃えさせる。

二人で、一度だけ、飲んで酔った勢いで、ホテルの前まで行ったことがある。綾子は内心想っていた。この人と結婚はできなくとも、わたしの処女はあげたい。綾子はまだ男を知らないのだった。だが、男女が行きつくところまでは踏み込めない。

ある日、高村の方から焦った口調で、綾子に求婚してきた。綾子は泣きながら答えた。
「ダメなのよ。愛しているけど、そればかりはダメ」
「どうして？ ぼくのどこが気に入らないんだ」
「違うの」綾子は追い詰められていた。いずれ、バレることだから、いまのうちに告白しておいたほうがいい。いまがそのときなのだ、と意を決してすべてを高村に打ち明けようとした。
「わたしね、いずれ判ってしまうから云うけど、来年の誕生日で、白寿なのよ」
「白寿？ ということは、九十九歳ってことか。なんだ、はははは。ぼくより若いじゃないか。ぼくは今年の十月で百十二歳になるんだ」
二人は顔を見合わせて大笑いした。
未来には人間の寿命は遺伝子操作で格段に延びた。平均寿命は百五十歳。長い人生、一度の結婚では飽きてしまう。三回くらいはしなければ...

第538話 預金通帳物語

繰越残高0

入金 給与振込 二十五万三千二百十四円

自動引落とし 電気料一万三千四百二十円 共済掛金二千四百円 電話料六千三百三十三円 生命保険〇〇円 NHK〇〇円 水道料〇〇円 国民年金〇〇円 国保〇〇円 住宅公庫〇〇円 ドコモ〇〇円 クレジット代金〇〇円 学費・バス代・損害保険・自動車保険・固定資産税・返済金・灯油代金・ガス代金・新聞代...

残高不足デス。

「なんなんだ、こんな社会があるかよ。もらった給与が、気がついたら食費を下ろす前に自動引落としで、無残にもよってたかって毫り取られて、丸裸。残高ゼロだと。ふざけるのもいい加減にしろ」

ついに樋口は怒った。物価は比較的安定しているのに、やたら公共料金と税金、あれだこれだと、引き去りが多い世の中になってしまった。遥商事に勤めて二十余年。ここ三年は給与が上がらず、逆に賞与が夏冬出てない。社会保険も滞納して、資格喪失したから、社員は全員国保に切り替えた。いままで、会社で半分払っていた法定福利費も、今度は全額自分で払わねばならなくなった。踏んだり蹴ったりだった。家のローンは、だんだんと給与所得が上がることを想定してアドオン式にしていたから、支払いが多くなっていた。ボーナス払もあるのに、ボーナスが出ない。子供三人も、義務教育のうちはまだ金がかからないが、高校、大学と上がるに従って、学費や仕送りにかかるようになる。冠婚葬祭のつきあいもだんだんと出てくるから、給与が頭打ちになったいま、女房のパート収入でも足りない。

結局、家計は外のものはすべて給与自動引落としでなくなる。生活費は女房の稼ぎでなんとか食っているものの、賞与の分だけが、毎年赤字になる。それで、それをローンでいろんな名目

で借りるのだ。

教育ローンやマイカーローンと、それも返すあてがない。樋口家、いよいよピンチとなる。

「あんた、どうすればいいのよ。来月は二ヶ月分の返済だそうよ。今月足りなかったから、預金から落ちなかったって、電話があってね」

女房は、頭を抱えて、電卓を叩いていた。どう計算しても、収入より支出のほうが多いから、引き算ができないことぐらい小学生でも判る。

「うーん、何か削るものはないのかよ。おれも、先月から酒もやめたし、タバコもやめた。まあ、どちらも値上げしたのがいいきっかけだったかな」

「そうだね。わたしもパーマなんか贅沢だって、行っていないし、化粧品だって、試供品だよ。毎日、スーパーから、ウサギにやるからと嘘ついて、野菜屑を貰ってきては、野菜炒め食べさせて、少しでも食費を浮かすことを考えているんだ」

「電気は十時過ぎたら全部消すんだ。早く寝てしまうんだな。電話はやめるわけにはいかないし、ケイタイはやめよう。新聞もやめるか。銀行に毎日見にゆけばいい。駅のゴミ箱から拾うとか」

「だんだんと話があれだね、乞食に近くなってくるね。他に何かカットするものがないのかい」

「そうだよな、水道やめて近所に貰い水。風呂はどうする。一年入らない」

「ますますそれは乞食だよ」

「トイレットペーパーをやめて砂箱に割り箸刺して使おう」

「どうして使うのさ」

「昔の田舎じゃそうしていた。割り箸でぬぐって砂箱に刺した」

「汚いねえ」

「年金も払わないか。どうせ、将来は財政破綻して、貰えなくなるみたいだしさ。あれは国家的詐欺だよな。国民保険もなしにしようか。あまり病気もしないしさ、高い国保を払っているのが馬鹿らしい。まだ現金で払っていたほうが安くつくというもんだ」

「取り立ては厳しいよ。差し押さえされるかもしれないし」

「それなら、思いきって車をやめよう。車一台持っているだけで、月に七万の出費だからな。保険料、税金、車検、ガソリン代、ローンに駐車場、整備費用に消耗品と、一番かかっている。車を売り払って、来月から電車で通勤する」

「あんたがそこまでやるなら、子供にも新聞配達のバイトぐらいさせようよ。わたしも夜のお勤めにでも行こうかしら」

「なんと、その年で、その顔でか」

いつも残高ゼロの通帳を恨めしそうに眺めながら、夫婦で家計のやりくり算段を話し合っていたが、それでもボーナス分まで埋め合わせはできない。元よりそう贅沢な暮らしをしているわけではないから、削るところがない。

「家債でも発行できたらな」「誰がそんなもの買うんですか」「サマージャンボも当たらないし」「どこか思いきって削るところがないかな」

政府も赤字、会社も赤字、いまや家庭も赤字で、会社は破産、家族は自殺、のうのうと赤字国債を出して平気でいるのは国だけだ。

「そうだね、削るとしたら食費よりないわね」

「食費か。そうか、そうだよ。食べなけりゃいいじゃん！」

どこの家庭でも一番削られるのが食費だ。てっとり早いし、いくらでも落とせる。樋口家では徹底的に絶食することにした。

それから、二ヶ月。新聞の片隅に、餓死した悲惨な一家の記事が載っていた。

第539話 スポーツ音痴

北村拓也はスポーツ音痴であった。子供のときからスポーツと名のつくものは苦手で、あまりやってこなかった。特に野球はまるでダメだった。もともと運動神経が鈍いから、何をやらせてもダメなのだが、野球はひどかった。

小学生のときは、近所の子供たちでチームを作って、児童公園で野球をやっていたが、打てない、取れない、投げれないと三拍子揃っているから使えない。却って邪魔になる。そこで、チームのみんなが話し合っ、拓也を監督にすることにした。

「今日から君は監督だ。いいね。ベンチに座っているだけでいいから」

「なにに、その監督って」

拓也は監督が何者かも判らない。それで、うきうきしていたが、結局、何もしないでベンチにずっと座っていることが判った。

「なんだよ。監督って何もできないじゃないか」

拓也が文句を云うと、みんなして、

「馬鹿だね。監督が一番偉いんだよ。な、な」

すっかり馬鹿にされて、それっきり、拓也は野球に対する興味を失っていた。野球帽もグローブもバットもみんな仕舞ってしまった。ついでに、いままでせっせと集めた金田、長島、王、森などのメンコもみんな友達に上げてしまった。そのときの失意がずっといまも尾を引いている。

高校のときに、野球のクラス対抗があった。そのときも、体が大きいという理由で、一度だけピッチャーを頼まれた。拓也は断固辞退したが、みんなはそのわけが判らない。ピッチャーなんかやったことがない。

「おれの球は、きっと誰も打てないよ」

そう拓也が云うものだから、きっと凄い豪速球なんだろうなとみんなは期待していた。拓也がマウンドに立つ。

「本当だよ。おれの球をいままで、バットに当てたものはいないんだから」

それを聞いて、バッターは緊張して身構えた。外野は前進した。当たってもゴロだろうと読んでいた。拓也が投げた。ボールがもの凄い勢いで飛んでいった。みんなの顔が引きつった。

「凄い、あれじゃ、誰も打てない」「バットに当てることはできないな」

拓也のボールはあらぬ方向に飛んでいった。

「だから、できないって云ったのに」

みんなで相談して、拓也は審判に回すことにした。

「それもできないって。ルールが判らないから」と、固辞したのに、みんなは、そんな常識ぐらい知っているだろうと、笑って拓也を審判にした。しかも主審だ。

「困ったなあ」と、拓也はしぶしぶキャッチャーの後ろに立った。

ピッチャーが第一球を投げた。

「トスライク、かな」と、拓也の声は小さく、実に自信がない。

「何がストライクだよ。どこ見てんだよ。ボールじゃねえか。それに、『かな』とはなんだよ」

それはそうだ。拓也は何がボールで何がストライクか判らないのだった。さんざんなブーイングで拓也は審判も下ろされた。

「だから云ったのに」拓也はまたすっかり落ち込んで、野球に対する嫌悪感まで持つに至った。

それは野球だけではなく、サッカーにしてもプロレスにしても相撲にしても、全く興味がない。テレビでナイターを見たり、Jリーグどころか、あのワールドカップで騒いでいるときでさえ、見なかった。拓也にとって、スポーツ全般はどうでもいいことなのだ。体育会系ではなく、文化系だった。仕事は肉体労働でもあり、毎日へとへとになって疲れて帰ってくるのに、なんでスポーツをする体力が残っているのか。

アフリカの部族は、スポーツで無益な運動をする文明人が判らないという。狩をするわけでもなく、農耕するわけでもなく、ただ、肉体を勝ち負けのために消耗するというのが理解できないという。拓也もまさにそういった意識だ。スポーツとは、時間的余裕と、あまり体を動かさない贅沢な人々の余技なのだ。ブルーワーカーにとっては必要のないことだ。仕事そのまま運動なのだから。

当然、オリンピックが日本で開催しようが、関係がない。みんな騒いでいるのが馬鹿に見える。日の丸の旗を振り、一億一心となって、敵国を殲滅せんとす。まるで戦争だ。それで、金メダルがいくつとったと、国別の一覧表を見るにつけ、それが、かつて海軍の空母撃沈の数に見えてくるのだ。

会社では猫も杓子もゴルフに興じている。その話にも拓也はついてゆけない。だいたい前に連れてってもらったことがあるが、ワンホールでOBも入れて、二十八叩いたことがある。キャディは呆れて先に行ってしまう、拓也だけが取り残されていた。それで、ようやく走って、みんなに追い付くと、「よく、数えたなあ」と、皮肉いっぱいに誉められた。クラブで打ってぽてぽてだから、手で投げたほうが飛ぶ。苛々してくるのは本人だけでなく周りもだった。

酒の席でもスポーツの話に花が咲くが、拓也はいつも蚊帳の外。

「北村君って、野球はどこのファンなの？」

と女の子が訊いてくる。どきりとする。チームの名前も知らない。

「え、その、国鉄です」みんなゲタゲタ笑う。「ち、違った、西鉄です。いや、南海かな」イチロウがどこの選手か、松坂がどこの選手かそんなことも知らないのだ。

「相撲では誰が好き？」女の子がからかって訊く。

「それはもう、大鵬です」

第540話 ヤマセ

今年は冷害の年だろうか。ヤマセが東北の太平洋側に吹き、低温注意報が毎日流れている。完全な冷夏で、真夏というのに、気温は二十度を下回る。海水浴場はがらがら、寒いから夏でも長袖だった。

足立家では、朝晩が寒いから七月の下旬というのにストーブを焚いていた。衣替えで仕舞った長袖をまた衣装ケースからしゅしゅ出してきた。新聞でもテレビでも冷夏冷害を深刻に報じている。十年前のあの凶作の年を彷彿とさせた。

十年前。やはりこのような天候で、全国的に作況指数が低迷、古米も底をつき、米不足となった。スーパーでもどこでも米がない。誰かが買い占めているという噂も立ったし、値上げを待って放出するらしいという話まで囁かれて、事実、知り合いの米屋に行くと、奥から出してきて、標準米でも普通の三倍の価格で買った記憶がある。それすらもなくなると、いよいよタイ米を買うよりなかった。外米は縦に長く、粘りがなくぼろぼろして美味くなかった。ピラフにすればいいということだった。

足立芳雄はつい昨日のように思い出していた。

「パパ、もし、またそんなことになったらどうしよう。いまのうちにお米を買いだめしておこうよ」中学の息子の圭一が云う。

「でも、米って置いておくと腐るものなのよ。それより、いまは炊いたご飯をレトルトパックして売っているじゃない。赤飯やお粥もあるし、ピラフなんかもあるし、そんなのを買ってきて備蓄しておけばいいのよ」と、妻の悦子が云う。

「わたし、ご飯嫌いだから、なくてもいいわよ。うちは、毎朝パンでしょう。昼はうどんかスパゲッティだし、夜に茶碗に少しあればいいって感じ」

高校の娘の留美が云う。

「そうだね。いまは昔と違って、食生活が洋風化されて、お米が主食じゃなくなりつつあるものね。我が家でも、どうでしょう、月に四人家族で十キロあれば足りるかな」

「米でなくとも食うものはいくらでもあるだろう。いまは飽食の時代だ。それに食べ物の四割を食べ残して捨てている時代だ。農業人口も減ったし、専業農家も少ない。冷害だからといって、そう日本経済に打撃を受けるというものでもないだろう。いまでも食糧の六割は輸入しているんだ。輸入すれば餓死することもないし、日本はまだまだ豊かな国だよ。はははは」

日曜日の朝、食卓で家族でニュースを見ながらそんな話をしていた。サラダにベーコン、輸入チーズにフランスパンでの朝食だ。そのどれもが原料は輸入品だ。缶詰でもインスタント食品でも冷凍食品でも掻き集めれば一月ぐらいは暮らせる分の食糧はいつでもある。妻や娘はダイエットだと、食べないときが多い。テレビのニュースでやっている北朝鮮やアフリカの国々での食糧難の報道をどこか遠い国のできごととして見ていた。食べ物は余っていたし、逆に摂取し過ぎで、セーブしなければならないところまで来ている。みんな肥満気味になっていた。

「さあ、今日は、涼しいから海に行くのをやめて、みんなで牧場にバーベキューを食べにゆこうか。何か、お祭りをやっていて、フリーマーケットや、アイドル歌手が来ているようだ」

一家で出かけるのも珍しい。たまたま、子供たちが夏休みで予定がなかった。市の郊外にある牧場まで車で出かけた。ところが、どこをどう走ったものか、車は民家もない農道から林道へと入っていった。

「おかしいな。地図ではこっちに間違いはないはずなんだが」

林の木立に牧場という矢印の看板が出ていた。道は狭くて通れないので、広いところに車を置いて歩いてゆくことにした。看板が正しいなら、すぐそこ書いてあった。ひよっとすれば裏から入ったのかもしれない。芳雄はそう思って、あまり車も通らないような雑草の生えている道をみんなで歩いていた。今度は道標が立っていた。「ここより飢渴坂」とある。道は登りの坂道になっていた。

「パパ、なんて書いてあるの？」

「キカツ、いや、そういえばだいぶ前に歴史で習ったことがあるな。ケカジ坂と読むんだ。江戸時代に飢饉で、この坂を降りて、沢に水を汲みに行った村人が、食べ物がなくて、坂の途中で何人も行き倒れて、亡くなったというんだね。それで、いつからか飢渴坂と呼ばれていた。昔は、飢饉のことをケカジと云ったんだ」

その舗装もされていない坂道を登るうちに、道端に白いものが横たわっているのが見えた。

「キャー、パパ、骸骨だわ」

悦子が先頭を歩いていて、引き返してきた。薄汚れた単衣の着物を着ているが、中身は骸骨だ。

「警察に連絡しよう」留美がさっそくケイタイで110番した。

「おかしいな、圏外という表示で電波が届かないんだわ。同じ市内なのにね」

すると、今度は圭一が「また髑髏だ」と叫んだ。よく見ると、道のあちこちに骸骨が散らばっている。

「大量殺人事件じゃないかな」圭一は震えている。みんなは芳雄の傍にしがみつくようにして立っていた。

「いや、違う。これは随分と古い死体だよ。ほら、髑髏の目の穴から草が生えているだろう。少なくとも半年は経っている」

でも、よく見ると、まだミイラのようなものから、半分どろりと溶けかかった死体もあって、つい一週間前に倒れた人のような遺体もあった。ただ、みんな昔の着物を着ているのだ。

「これは、おかしいぞ。昔のままにこの道が発見されたのなら、もっと古い死体でなければならないのに」

一家が歩いているうち、坂の上にようやく高台のような広いところがあった。そこには民家が何軒か建っていた。それも粗末な納屋のような感じで、いまにも潰れそうなほったて小屋だ。畑もあったが、無残にも荒れたままだ。人が動いたのが見えた。

「あのう、すみません。電話貸してくれませんか。この先に死体がいくつもあるんです」

芳雄が民家の中に入っていった人に声をかけた。すると、戸が開いて、二人の夫婦ものよう

な住民が顔を出した。顔はやつれて垢で汚れているようで、目と歯だけが白く、手足も骨皮だった。第一、おかしいのが、着ている服がぼろぼろの浴衣のようなものだった。二人とも、ぎろぎろと不思議そうに一家を眺めていた。

「おめだち、何処がら来たず」腹だけが異常に膨れている飢饉のときの餓鬼の絵のような人たちだった。

「どこからって、下の街から来たんだけど、牧場でイベントがあるって新聞で見たんで」芳雄の話が理解できないように夫婦は顔を見合わせていた。一家もおかしいことに気がついた。高台からは海が見えた。眼下には街が見えるはずだったのが、なにもない。ただ、野原と林が続いているだけで、ビルも高圧電線も何も見えない。

「パパ、おかしいよ。ぼくたちタイムスリップしたんじゃないのかい」

「ま、まさか。あのう、いまは、何年なんですか」芳雄が夫婦に聞いた。

「何年って、享保巳年だ。おめだち、おがしい格好してるけど、日本人けえ」

すると、あちこちの民家から、骨皮になった農民たちが、手に鎌を持って、足立一家のほうへと近づいてきた。

「まるまると肥って、おらは若い女子にする」「おらは母親のほうでいい。美味そうだ」

何か様子がおかしい。そういえば、飛ぶ鳥の姿も昆虫も、犬猫から生きているものの姿がない。子供らしい小さな影が、泥の団子を食っている。松の皮が剥がれているのは、それをも粉にして団子にして食っているのだ。そして、食うものがなくなると、いよいよ共食いだ。一度、人間を食ったら味をしめて、人間は人間であることを忘れて、人を食う鬼となる。

「逃げろ。このままでは食われてしまうぞ」

一家は元来た道を引き返して走った。車のあるところまで走る。ともかく、車に乗って、来た道に戻るよりない。それでも、江戸時代から2003年へと戻れるかは判らない。このまま、この時代に棲みついて鬼となって生きてゆくか。

「嫌だよ。泥の団子も人間の骨付きカルビも食べたくないよう」

圭一も泣きながら走っていた。悦子も留美も神様をお願いしていた。今度からは絶対に食べ物は粗末にしませんからと。

第541話 戦場のギタリスト

砂を手で掘った蛸壺のようなところに、さっきから三田慶吾は身を埋めていた。何時間が経っているだろうか。気温は五十度近くあるだろう。ヘルメットの下は汗がぐっしょりだった。下着もまるで川に落ちたように濡れていた。それが、侵入してくる砂でざらざらに固まり、気持ちが悪かった。水筒をトラックに忘れてきたので、喉もからからだった。水が呑みたい。それに、この高熱で、体が熱射病になりはしないか。すでにかかなりの脱水症状を起こしていた。手にはカー

ビン銃を握っていたが、そいつは、いままで訓練でしか撃ったことはない。実戦経験はまるでなかった。まだ、青い空に煙が上がっていた。さっきから、呻き声や、確認しあうような呼びかけが聞こえていたが、もう、人の声は聞こえなくなっていた。

二台のトラックで、砂漠の道路を走っていたとき、先頭の車が対戦車地雷を踏んだもので、大爆発を起こした。乗っていた二十人は絶望と思われた。後続の慶吾たちが乗っていたトラックが止まったら、左右の砂漠に潜んでいたゲリラたちが、バラバラと機関銃で狙い撃ちだ。多くの隊員たちが吹っ飛ばすように倒れていった。腹を直撃されたものは、背中から内臓がはみ出していたし、顔面をやられたやつは、誰か判らないくらい顔の半分が吹っ飛んでいた。全身に十発以上も蜂の巣のようにやられたやつは、もう、人間の形をしていなかった。指から耳から腸から、拾い集めても修復できないほどの肉の破片になっていた。それは、慶吾が初めて見る人間が無残にも殺されて行く現場だった。訓練のときのようなモニターに映し出されるシュミレーションの戦闘ゲームとは違っていた。人間が死ぬというのは、こんなにもむごたらしいものなのだ。

咄嗟に、穴を掘って、貝のように砂の中に身を隠した。がたがた震えて、声も出ない。小便どころか脱糞までしていた。その臭いが立ちこめてくる。慶吾は、ここで死ぬのだろうか、あまりの恐怖に何も見えなくなっていた。遠くから意味の判らない声が聞こえていた。敵だ。みつかったら一発でとどめをさされる。もっと深く潜らねばならない。全身はすっぽりと砂の中にあり、ヘルメットだけが砂から出ていた。その隙間からでも、起伏のある砂漠だから、いま、どんなふうになっているのか、状況がつかめない。周囲が見渡せないのだった。だから、耳を澄ませて、音や声で、敵、味方の区別を知るよりなかった。時折、ズキューンと銃声がある。悲鳴も聞こえた。あれは、友人の声だ。負傷して生き残った隊員でも、みつければ処刑してゆくのだ。そこには捕虜という言葉は存在していなかった。生きるものか、死ぬものかの二つの選択だけが選ばれるのだ。

慶吾は、まだ二十二歳だった。国に交際している恋人がいる。それに、恋人と同じくらいいいとおいしい愛用のギブソンのギターが自室にあった。慶吾は、友人らとロックバンドを編成していて、隊の中でもセミプロ級と誉めそやされていた。調子に乗って、つい先月にCDを発売し、インディーズ・デビューを果たした。慶吾はリードギターとヴォーカルを担当するだけでなく、いままで五十を超える自作の歌がある。困難に立ち向かうとき、慶吾は恋人とギターのことを思うようにしていた。すると、不思議と勇氣と力が湧いてくる。

砂の中でも、指が動いていた。新しい作りたての歌のイントロを頭の中で歌っていた。左手はコードを形作り、右手はピックを持っているように動いた。そして、やさしい恋人の顔をその曲に合わせて思い浮かべていた。

こんな極限状態におかれて、発狂するやつ、泣き出すやつ、絶望して死を覚悟するやつ、いろいろあるだろうが、何か生きがいを持っているやつは、強いのだ。フランクがユダヤ人の収容所にいたときのことを書いた「夜と霧」の中に、やはり音楽家が出てくる。生きる望みを家族だけに託しているものは、先に死んでいった。詩人や、芸術家は、なんにもなくなっても、指先ひとつで生きるすべを知っている。目に見えないものは剥奪できないのだ。それが、わずかの命に光を与えていた。

二台のトラックには合計五十人くらいの自衛隊員たちが乗っていたはずだ。それが、すでに声

が聞こえないとなると、全員爆死したか、射殺されたのだろう。砂漠を渡る風の音よりしない。生きているものの声がしないのだ。アラブのゲリラも退散したようだ。暫く様子を見て、慶吾は砂から這い出ようと思った。

それにしても、みんな死ぬときは、何を思って死んだのだろう。慶吾は先の大戦のときと比べていた。国のために死ぬのだろうか。いや、このイラクと日本は戦争をしている敵ではないのだ。憎む理由がない。ならば、天皇のためか。そう思っているやつは一人もいないだろう。時代が違う。じゃ、名誉か。何の名誉だ。戦死する理由が判らない。誰のために、何のために死ぬのか。これは、殺人事件の被害者と同じではないか。弾丸はさっきは頭上をビュンビュン飛んでいた。頭を上げることができないほどだ。腹や足は撃たれても、治ればいいのだが、指が千切れるのだけは嫌だ。ギターが握れなくなるのだけは御免蒙りたい。砲弾が近くで炸裂するときも、慶吾は本能的に頭を抱えるのではなく、指を保護した。ギタリストにとって、命から二番目に大事なものは指なのだ。

ようやく、物音がしなくなったので、そろりそろりと、慶吾は砂から這い出して、砂漠の丘の上まで匍匐前進していった。その丘の向こうにトラックの残骸があるはずだ。水筒もまだ残っていればいい。すると、何か、人影を感じていた。同胞がまだ生き残っていたのかと、慶吾は喜んで立ちあがった。

そこには、死んだ自衛隊員たちの衣服を剥ぎ取った、ゲリラたちが、一斉に銃口を慶吾に向けて立っていた。青空の下に十数発の銃声が響いた。

その頃、部隊が行方不明という外電を受けた自衛隊駐屯地に、慶吾の母が詰め掛けていた。

「うちの慶吾ちゃんはどうになりましたか。うちの息子は」

「はははは、お母さん、心配いりませんで、ただの車両事故でしょう。よくあることです。わが国は戦争に行っているんじゃないんですよ。しかも非戦闘地域に、イラク復興のために行っているんです。そんな、安全なところに行っているんですから、社員旅行みたいなものですって。はははは」窓口の係はそう笑った。

まだ、何も知らされていないマスコミも、下級官吏も、情報がどうなっているのか知りたがっていた。ただ、ひとり小島首相だけが青ざめていた。

「どういたしましょうか。総理。国民に発表を遅らせては、また騒ぎますし、いかがいたしましょうか」

事態は急変した。小島は窮鼠になっていた。それでも、平然と云ってのけるポーズ。

「だから、わたしは、派遣を最後まで慎重にと云ったのだ」

ころりと変わる鼠に出口なし。

第542話 個人的な、余りに個人的な

北村拓也はいままで何人の女を泣かせてきただろうか。彼自身も数えたことはない。職業、整体師。とくに女性専門で、体の歪みを荒療治で治療してきたから、彼の腕にかかれば、どんな美女でも痛さに泣いた。

拓也は三十を過ぎたばかりだが、一字違いの、いまをときめくスターに似ていた。それで女には困らないほどもてていた。仕事も健康ブームの波に乗って上昇気流だ。若くして財を成し、ヘルスケアビルまで建てた。あまりもてるからだろうか、目移りがして、結婚相手がなかなか決まらない。周りがやきもきするほどひとりであった。それというのも、彼には人には云えない恥ずかしい秘密があった。そのために日夜悩み、彼女どころではないのだった。

拓也には一方的な恋人がいた。一方的というのは、拓也がそう思っていないのに、勝手に入りこんできて、身の回りの世話までしてくれる押しかけ恋人の常盤孝子だった。彼女も一字違いの女優に似ていた。孝子は拓也と仕事の面でも組みたがっていた。エステの資格を持ち、独特な美容マッサージを考案して繁盛していた。やはり三十は過ぎていたが、自分の店を二店も持っていた。

拓也は、ずかずかと人の気持ちの中まで入りこむ積極的な明るい孝子のような女は苦手だった。ただ、押されて閉口しているだけで、好きでもなんでもない。それでも、身近にいるというだけで、だんだんと情のようなものが湧いてくるのだった。

互いに日曜日は定休にしていたから、平日の夜は勿論のこと、日曜にはべったりと一日一緒にいることとなる。拓也は自分の時間が欲しい。ひとりにしてもらいたかった。それで、孝子がいようがいまいが、自分の好きなことをやって過ごそうと思うようにした。

どこへどう逃げても、いまはケイタイという紐つきで、電源を切っていれば、どうして切っていたと孝子が後で煩いので、嘘ごまかしができない。逃げ場所、隠れ家はなかった。どこにいても、孝子は追いかけてくる。

その日曜も拓也はひとりで、マンションから抜け出して、リゾート風のカフェにいた。エスプレッソを飲みながら、窓際のテーブルでモバイルノートを開いて、メールをしたりネットで調べものをしたりしていた。ところが、例の悩みが始まり、じっとしてられなくなる。ノートを閉じてただ、瞑想するように座っていた、

「あら、みつけた。こんなところに逃げていたのね」

孝子がやってきた。だいたい拓也の行動パターンは調査済みで、いつ、どこにいるか統計は出ている。孝子は夏向きのキャミソールを着ていたが、胸を誇示するように肩紐も見えない今流行のブラをつけていた。

「どうしたの？ 何か悩み事でもあるの？ 暗い顔しているわよ」

拓也は、こんなときには孝子が煩わしいだけだ。そっとしてもらいたいのだ。

「ねえ、たまにだけど、そんな落ち込んでいるときがあるわね。何か、拓也、隠していることがない？ わたしにできることはなんでもするわよ。遠慮なく云って」

そう云われても、人には云えないこともある。余計なお世話だ。放っておいてくれと、拓也は胸の裡で叫んでいた。いまは病人と同じなのだ。静かにしてもらいたいのに、孝子はいつものように活発にまくしたてる。

「どこか病気じゃないの？ 病院に行ったほうがいいんじゃないの。苦しそうだわ。ねえ、どこが苦しいの。痛いところあるの？」

拓也はいい加減うんざりして、面倒くさい様子で口を開いた。

「いいんだ、お願いだから、どこかへ消えて。ひとりでいたいんだからさ」

「まあ、何よ、その冷たい云い方。人が心配して云っているんじゃないの。ひょっとして、それって、男のブルーディーってやつかな。だったら、どこかへドライブして、パアッと遊んだら治るわよ。ねえ、こんなにいい天気なんだから、いまからでかけましょうよ」

そう云って、孝子は拓也の手を引いて立ちあがろうとした。拓也は急に、恐怖で目を大きくさせて、慌てふためいた。

「よせよ、おれに触るな。とにかく、そっとしておいてもらいたいんだ」

拓也はそわそわしはじめた。何か落ち着かない。急に涙ぐんだりしていた。苦痛で顔を歪めたりしていた。やはりどこか変だ。孝子はその異常に気づいた。

「やはり、これから病院に行こうよ。日曜でもやっているところ知っているから」

また、拓也の手を引く。拓也は脂汗まで流していた。そして、孝子の手を振り払って、懇願した。

「頼む。動かさないでくれ。静かに休んでいたいから」

拓也の真剣な顔に、孝子は少し不満だが、心配が先に立ち、なんとかしてやりたい衝動を抑えるのに堪えきれないでいた。トロピカルジュースを飲みながら、上目使いに拓也を見る。この人はどこが悪いんだろう。わたしにも云えないことって何だろう。孝子はあれこれと詮索していた。

。

と、拓也は立ちあがった。

「ちょっと、トイレ…」

腹具合でも悪いのかな。それとも、もっと大変な病気を隠しているとか。それが、人に云えないこととして、拓也が恋人もつぐらない、結婚もしない致命的な原因になっているようなそんな気が、孝子はしていた。第一、拓也のマンションに強引に孝子が泊まっても、絶対にベッドを共にすることはなかった。拓也は潔癖なほど孝子を拒んできた。それも怪しかった。

やがて、拓也がトイレから戻ってきた。何か歩き方がおかしい。小股で内股、中風であたったおじいさんのように、十センチずつの歩行間隔だ。みんなもちらちらと拓也を見て笑っている。妙に尻を押さえ、強張った顔をして少しづつ歩いてきていた。

「なによ、変だわ。どうしたの」孝子も笑った。せっかくのいい男がだいなしだった。それでも拓也は云えない。がっちゃぎだったとは。トイレで南薬局の痔しん膏の座薬を挿入してきた。座っても立っても痛いこの悩み、誰にも云えない。

第543話 　ただ思い出の本のために

狩野亨吉といったら、一高の校長をし、漱石の先生でもある。くしゃみ先生のモデルとなった。その狩野亨吉が、晩年は屑屋を自宅に呼んで、東京中のゴミから古書を探させ、自分のところに持ってくるように頼んでいた。狩野先生のところに行ったら、和本でもなんでも高く買ってくれるそうだ。そんな噂も広まって、何人かの屑屋が拾ってきたボロボロの本を先生の自宅までせと運んでいた。いまも昔も本はゴミとして捨てられるか、和紙の本は、雪隠の落とし紙として消費されていた。中には、豊国、国芳の絵入本が、尻を拭くために利用されていたかもしれない。外人が逸早く浮世絵に芸術的価値を見出したのは、幕末に日本の陶器を故国に送らせたとき、茶碗を包んでいた紙が浮世絵だったからだ。

そうして、貴重な文化財産が価値の知らない人によってどしどしと廃棄されてゆくのを狩野亨吉は見過ごせなかった。自宅はあっというまに本で埋められ、その数、十万冊と云われた。現在は、東北大学の図書館に狩野文庫として収まっている。

何故、狩野亨吉が古本屋の真似事をしたのかというと、それより先に、重要な和本百一巻を発掘したからであった。「自然真営道」と云われるその膨大な医学書でもあり、百科事典でもあった大著をこの世に書き残した安藤昌益をゴミの中から見つけていたからだ。昌益の他の刊本を探すため、狩野は余生を注ぎこんでいた。

古本屋を地方都市でちまちまと営む北村拓也もまた、一冊の本を掘り当てたいがために、この商売を始めたといっても過言ではない。一般の人が、足を棒のようにして古本屋を探す苦労に比べたら、はるかに古本屋をやっていたほうが、多くの本に巡り合うことができる。ひょっとして、という気持ちが働いて、別れた初恋と再会を果たすことができるような気持ちで、拓也は脱サラして店を持った。そうして、あっというまに二十年がこようとしていた。いまは、孫までできて、すっかりと髪も白くなり、これまで百万冊をくだらない古本を扱ってきたにもかかわらず、拓也が探していた本とは巡り合うことはなかった。死ぬまでに一度だけでもいい。その本の顔を拜んでから死にたいものだ、常日頃から思っていた。狩野亨吉のような重要文化財級のものを掘り当てようというわけではない。それは、ある二冊の本だった。

一冊は講談社の絵本だった。拓也が就学前に父親から買ってもらった絵本なのだが、子供心に一番のお気に入り、葦編三絶ならぬ、ぼろぼろになるまで繰り返し見ていた絵本だった。

なんということもない。少年雑誌に登場してくる鉄腕アトムや鉄人28号と云った、漫画でもなく、単にリアルなタッチで描かれた時代ものの絵本だった。そのタイトルをどうしても思い出せないでいた。ただ、ストーリーと挿絵をすべて覚えていた。侍ものだから江戸時代の話と思いこんでいた。いくさに行く父を見送るシーンから始まる。兄と妹、母が残された。親子三人で苦勞するが、やがて戦火を逃れて親子三人がバラバラになってしまう。主人公の菊という名前から、拓也はその絵本を「白菊物語」と間違えて覚えていた。なんとしてでも、手に入れて、もう一度見てみたい。きっと、タイムマシンで過去に戻ったように懐かしい思いに触れることができるだろう。拓也は想像しただけでも身震いがした。

古本屋もインターネットの時代に入り、拓也はネットの古本サイトでも検索してみた。拓也の店も加盟している全国二百店の古本屋の在庫、二百万冊のデータベースの中からもその本はみつからなかった。

そのうち、呑み会の席で、児童文学研究会の北彰介氏と一緒にになった。先生なら、大概の童話や絵本の知識はあるだろうと訊いてみた。

「はて、白菊物語とな、そんな童話は覚えがないな」

拓也は物語のあらすじを話して聞かせると、北先生ははたと、膝頭を叩いて云った。

「北村君よ、それは白菊物語ではなく、『孝女白菊』というのだ。戦前に色刷りで出た講談社の絵本だが、戦後しばらくして復刻版が出た。それなら、セットで持っている。貸してあげよう」

北村拓也は、眩暈がするような感激を感じていた。胸がドキドキした。ようやく、巡り合うことができるのだ。北先生が、翌日、「孝女白菊」の絵本を店に持ってきてくれた。実に四十五年ぶりの対面である。

「ああ、これだ、これですよ、先生。覚えている。そのままだ。はははは」

拓也は感動のあまり、気が触れたように笑った。客がそそくさと店を出てゆく。

その絵本はまるごとカラーコピーして北先生に返した。幼い頃の視線がそのまま戻ってきていた。空の雲も、飛ぶ鳥の数まではっきりと覚えていた。それが舞台は熊本、西南の役であり、明治に入ってからのお話であることも、いまは判る。兄が山賊に襲われた妹を助けるのに、僧侶の袈裟を着て、太刀で斬りつける場面は、子供心にもわくわくして見ていたものだ。

本とは、そうした思い出の詰まったカプセルでもあった。

もう一冊の本は、小学館の少年少女世界名作全集の中のスティーブソンソンの「宝島」だった。それは、拓也が九つの誕生日に文学少女であった上の姉からプレゼントとして貰った本だった。それまで、読書らしきことはしたことがない。小学生になって、初めて手にした本が「宝島」であった。あとは、それが手に入れば、いつ古本屋をやめてもいい。

拓也は、児童書が仕入れでどっさり入るたびに、本の山からはやることを抑えながらそれを探した。以前には、その文学全集のシリーズがどっさりまとめて入ったのに、「宝島」だけが抜けていた。

その文学全集は、拓也が中学に上がったときに、もう読まないだろうと、父親が、田代平の開拓村の分校に寄付した。あとで、山の児童たちからお礼状が殺到して、拓也は返事を書くにてんてこまいしたことを覚えている。

そして、今日、すなわち、平成十五年七月二十九日に、拓也は、知り合いの女性が里帰りして、実家の本を整理したいからと電話をもらい、車でかけつけた。

「お金は本当にいりませんから、なんだか、処分する本のほうが多くて気の毒だけど、お願いするわ」

十年ぶりで逢った。あのとき、おなかが大きかったのを思い出して、

「お子さんは、大きくなったでしょう」と拓也が訊くと、二年生という。子供の年で時間の早さが判る。とにかく、玄関にあった本の束をろくに見もしないで車に積んだ。店に帰ってから、じっくりと売る本と処分する本とを分けるのだ。

拓也が、本の束から、懐かしい装丁の少年向の文学全集の端本をみつけた。あれ、と思った。

それは、あれほど拓也が探していた「宝島」と、文字がかすれているが、背表紙にかすかに見えていた。

「あ、あった。出た、出てきたぞ」

人生最初の小説が、思わぬところからひょっこりと出てきた。まさに宝島だった。

第544話 海に咲く花

平成四年七月三十日。わたしは、浅虫温泉に家を建て、その日が引き渡しになっていた。大工が最後の仕上をしていたり、電話工事業者がテストをしていたりしていた。いよいよ完成だ。

いつ入居するのかと、暇そうな近所の人々が、窓の外に集まって覗いていた。それほど余所者が、引越ししてくるのが珍しい土地だった。街に出てゆく者はいても、入ってくる者は滅多にいない。わたしは、街が嫌いだった。どうせ、家を建てるなら、海がベランダから見えて、裏の窓からは山が見えていればと、贅沢なロケーションの土地を探していた。

工務店の人から、家の中の説明を受けて、玄関の鍵を受け取った。これで、わたしも一国一城の主だという気分になった。玄関の両側には大好きな紫陽花を植えた。庭と畑もある。いろんな作物も植えてみようと、今年はまだ終わりだが、来年のために、庭の設計も考えていた。破産してから、三年で家を建てる。周りが怪しむほど早かった。

彼女に電話した。通じた。テストだと云った。

一これから、買い物につきあわないか。がらんとした家の中で使うものだよ。どんなものがあるのか、みたててほしいからさ。

彼女とホームセンターで待ち合わせした。

いろいろと紙に書いてみたんだが、どうだろう。

わたしは、彼女に購入するもののメモを見せた。女でなければ判らないものもある。トイレの中で使用するもの。風呂場で使うもの。台所で使うもの。あれもこれもとだいぶ買った。何回も車まで運ばなければならなかった。

一生活ががらりと変わるわね。

何か嬉しくないような云い方をした。それは、いままでは家賃一万八千円の風呂もない二間の部屋だった。そこから二階建の六LDKに引っ越すのだ。彼女は淋しそうな顔をしていた。

一どうして、海辺の温泉場なんか家を建てたのよ。遠くなるじゃない。

恨み事のように云ってすねていた。そうか、それで機嫌が悪いのだ。

一車で一時間もかからないじゃないか。いままで通り逢えるし。

がらんとした家の中に買ってきたものを据え付けた。玄関マット、トイレの中にはプラント。便座カバーの果てまで。

一ちょっと、女の子っぽかったかな。まあ、いいか、男ばかりでしょう。色気があってもいいね。

彼女はそう、見たてたピンクの花柄のタオルを見て笑った。

一女はひとりいるよ。おふくろだ。

七月三十一日。いよいよ我が家の引越した。細かいものはわたしの車で運ぶ。大きいものは運送屋のトラックだが、タンスなどの家具も電化製品も一式、新しいものを購入していた。いままで中古のオンボロで長年我慢させてきたのだ。この際、新しい皮袋に新しい酒だ。

あいにくの朝からの土砂降りだった。男の子ばかり三人がいた。上は中学、下二人は小学生。片親でも生活には困らないところを見せたかった。見返してやりたい意地だけで仕事をしてきた。

二間の汚い部屋からおさらばだ。息子たちは手に手に大事なものを、それは玩具だったが、抱え込んで、緊張した面持ちで車に乗っていた。スコールのような夏の雨が視界を見えなくする。ワイパーはハイで動いていた。

一さあ、ここがおまえたちの新しいお家だよ。

初めて見る息子たちははしゃいでいた。いままで、自分の部屋というものを持ったことがない。それに、ベッドなんて初めてだ。ふかふかの蒲団もだ。大きなテレビにビデオ、ワイヤレスの電話まである。

一す、すごいぞ。お風呂までついているぞ。

一兄ちゃん、トイレもお尻に水が出るんだぞ。

息子たちは目を丸くして興奮していた。

二階の西向きの部屋はわたしが一人で寝るには広過ぎる部屋だが、ベランダがあり、そこから湯の島、裸島、むつ湾と、津軽海峡が遠く見えた。

息子たちは、何か落ち着かないと、その夜は以前のままだに、枕を持ってきてわたしの蒲団に入ってきて一緒に寝た。一人で寝るのが怖いのだった。

八月一日。東京の姉の家にそれまでいた老父母をわたしは長男で男一人だから引き取ることにして、東京から呼んだ。その引越しが翌日だった。一日ずらしたのは、引越しが重なると混乱するからと、翌日にしてもらった。地元にいる妹も引越しの手伝いに来てくれた。われわれの荷物はほぼかたづいていた。

両親が旅行鞆を下げて、四年ぶりに郷里に帰ってきた。事業が整理され、一家離散したのが、また元通りの家族として一緒に住む日が意外にも早く来ていた。

トラックも東京からお昼に到着した。妹は弁当まで作ってきていた。それを引越し荷物の谷間にみんなして思い思いに座って食べた。

一よく、こんな何でも揃って、驚いた。男のおまえがねえ。

と、おふくろは感心していたが、わたしはそんなに気が付く男ではない。もう、棲めるようになっていたのに両親はびっくりしていた。

本家の仏壇も里帰りだ。仏様もあっちへ行ったり、こっちへ来たりで大変だったろう。わたしは、この日をどんなに待ち望んだことだろう。

夜になっても、荷解きは終わらない。両親の荷物が多かった。北海道や東京の姉から心配して

電話がくる。暗くなってきたら、晩御飯も弁当にした。ビールも冷蔵庫で冷えていた。まさに、ビールの栓を抜こうとしたときだった。ドーンと、外で大きな爆発音がした。何事だろうと、わたしたちは、カーテンを上げて外を見た。その夜は浅虫温泉の毎年の花火大会の日だった。外に観光客が詰め掛けている賑わいも、引越しのどさくさで判らなかった。

一みんな、作業やめ。二階のベランダで花火を見ようや。

ビールやジュースを手に、ベランダにシートを敷いて、家族全員で花火を見た。船から海に花火を浮かべてゆく。すると、まるで海から花が開くように花火が炸裂した。長い間、苦労してきた両親の横顔に安堵の色が見えた。以前とは違うのは、ひとりだけ欠けていたこと。

「すごいや、家から花火が見えるんだ」息子たちは叫んでいた。

そして、再会した家族を祝福するような花火が、海の上に大輪を咲かせていた。

第545話 ねぶたを聞いた

花火とねぶた祭は遠くで聞くのがいい。どうも、人混が嫌いで、だんだんと祭という名のつくところに足が遠くなる。ねぶたもずっと見ていない。

祭期間中は三百数十万人が来るらしいが、青森市の人口が三十万弱だから、一日当たりにして、六十万の観光客。街が倍に膨れ上がる。

街外れではないが、わたしの営む古本屋は普段でも人通りがない。ねぶた運行中の七時過ぎにはぱったりと人通りが途絶える。客が来ない店が余計淋しくなってしまう。

売上は祭の間はダウンするのだ。それなのに、祭の寄付だけは取りにくる。その言い草が面白い。「あんたたちも、祭で潤っているでしょう」だ。普段より落ちるので、祭はないほうが良いとは云えない。潤う商売もあるだろうが。観光客が古本屋に立ち寄る確率はどれほどか。

それで、いつもシーンと静まり返った店にいて、パソコンで本のデータを打ったりしていた。開けた窓から、ねぶたの太鼓が遠く響いてくる。外の通りを下駄をひっかけて歩く音がする。遅れて参加する跳人の鈴の音が聞こえてくる。交通規制で、いつもなら、車がひっきりなしに走る、店の前の三車線の国道も車が走らないのでひっそりとしている。弧線橋を超えた、街中は賑やかで、お囃子の音が、小さく聞こえるのだ。こんなときに、わたしは、店で仕事をしながら、NHKのラジオを低くして、祭の音だけを楽しんでいる。

交通規制で、市内は通れない。脇道はどこも渋滞している。それで、祭が終わり、観光客が帰って、いつものように車で家に帰れるのは十時過ぎだった。それまで毎日、残業だった。どうせ、時間が長いんだと、たまたま隣が酒屋だったので、冷えた缶ビールをやりながら仕事をしてきた。帰る頃には酔いも醒めているだろう。

ねぶた祭を見たのはいつのことだろうか。あれは、末っ子がまだ小学校の一年坊主だったときだ。十三年前になる。

上の兄は二人とも、ねぶた愛好会で、笛を吹いていた。毎日、おやつが貰えるからと、笛を持

って参加していた。末っ子だけは置いてゆかれて、店の後ろにある部屋でテレビを見ているのだった。客は少ないが、わずかな日銭で食っているので閉めるわけにはゆかないと、わたしは、年中無休で、夜十時まで店を開けていた。客足は途絶えるが、たまに、祭が嫌いな客がふらりと入ってくる。

末っ子は、お囃子が遠くから聞こえると、行きたいようと、だだをこねて泣くのだった。可哀想だとは思いますが、ひとりでもふたりでも客が買ってゆく売上も無視できない。そのうち、末っ子は、床に寝転んでぎんぎんと泣いた。市内にいる妹にねぶたに出してやりたいがと、電話をすると、向こうも、親戚が集まってきていて、その料理を作ったり、ビールを出したりで、とても面倒はみてもらえないと断ってきた。こんなときに母親でもいればと、思ってもいけないことが頭をよぎった。

あまり泣いて不憫に思ったので、早めに店を閉めて、息子の手を引いて、ねぶたを見にゆくことにした。わたしは、余り見たいとは思わない。息子はようやくしゃくりあげながらも、泣き止んでくれた。

繁華街に近くなると、もの凄い人だった。ねぶたの運行する国道は、五重六重でもきかない人垣で、とても立っても見えない。息子なんかは、大人の足より見えないのだ。しかたなく、息子をひょいと、肩車すると、ようやく息子には見えたようで、機嫌が直った。暑い。日中は三十度を越えた。その熱気がいまだに、籠っているときに、息子がわたしの髪を掴んで、肩に乗っているから、だらだらと汗が背中と胸を流れた。息子はいつのまにか、重たくなっていた。首も手も足も痛くなる。震えてくるのだ。三十分も見たらどうか。末っ子は、急に、「降りる」と、云い出した。「もう、いいよ」と、云う。つまらないのだ。二時間も見ていたら、眠ってしまうだろう。

「どうだ、晩御飯まだだから、腹減ったろう。札幌ラーメンでも食べて帰ろう」

わたしは、末っ子の手をとって、近くにある札幌ラーメンの店に入った。ねぶたがまだ運行しているから客はまばらだ。暑いときには熱い味噌ラーメンをふうふうして食べるのがいい。わたしは生ビールを、末っ子にはサイダーを頼んだ。店の中は静かだった。外が騒がしい分、余計、淋しい感じがした。店員も、外に出て、ねぶたを眺めていた。そこからなら、ねぶたの頭より見えないだろう。激しい太鼓のリズムがラーメンをすする音に混じっていた。

「パパ、おいしいね」と、末っ子は父親を独占している祭の夜を得意げだった。

「ラーメン食べたの、兄ちゃんたちには秘密にしておこうね」とも云った。よほど嬉しかったのだろう。こんなことも云った。

「また来年、ねぶたのときに、ここに来ようね」

いろんな露店が並んでいた。

「綿菓子はどうだ。クレープでも買うか」

「いいよ、いいよ」と、末っ子は遠慮していた。親父の懐具合を判っていてか。

「それなら」と、二人で食品店に入って、五十円のアイスクャンデーを買って、なめながら帰った。

わたしは、もう、何十年も昔のことのよう、そんなことを思い出していた。その末っ子が

らさっきメールが来ていた。いまは、横浜で働いている。

一父さん、今年のねぶた、どうだい。あのラーメン、また食べたいね。

第546話 猫の目

朝から、随分と黒塗りの高級車が頻繁にご主人のところにやってくる。みんな、テレビで見る顔ばかりだ。昔、大臣をしたことのある偉い人も来た。何か、いつもの家と雰囲気が違うようだ。慌しく、人の出入りだけでなく、電話もしょっちゅうかかってくるし、奥様も秘書も大忙しだ。マスコミの連中も玄関の前に陣取って、取材合戦をしている。おかげで、飼い猫のわたしゃ、邪魔だというんで、追い出されたってわけだ。こうして、塀の上で、人間どもの企みを眺めていたってつまらない。と、退屈していたところに、向かいの大学の先生とこのミケかい。

「どうしたの。涼みに出ていたの？」

「そうじゃない。おまえはニュースを見ていなかったのかい」

「うん、わたしは、歌番より見ないんだ。V6が好きだもの」

「なんと、低俗な。いまはな、政界は大騒ぎなのだ。自由党と民主党が一緒になるんだ」

「ああ、あなたのご主人は自由党のイチロウでしょう。で、四番を打っているんだよね」

「あのなあ、大リーグと一緒にしてもらっちゃいけねえ。いまは、真面目な政治の話してんだから」

「それでね来客が多いから、ご機嫌斜めっていうわけ？」

「そうなのだ。おかげで朝から何も食べていない。みんな猫のことなんか忘れてるんだ」

「でも、いいじゃない。いつも、ご馳走ばかり食べさせてもらっているんだから」

「ご馳走って、ご主人の余りものだよ、残飯だ。昨日だって、刺身に鯛のお頭だけ、海老だ、蟹だと、もう飽きた。たまには庶民の食べ物を食べてみたいよ」

「まあ、なんという贅沢。それって、感覚麻痺していない？ とても、わたしたち庶民感覚じゃ考えられない」

「じゃ、おまえと交代しようか。毎日美食ばかりでも飽きるぞ」

「で、二つの政党が一緒になるって。合併するの？」

「そうだ。市町村合併、銀行合併。弱いものは団結するのよ。そうでなくっちゃ、強いものには勝てないってわけだ」

「いまは、自民党が一番なんでしょ」

「そうだ。一番を倒すためには政敵であった二番、三番が手を結ぶ。これはよくあることだ。かつて春秋戦国時代に群雄割拠していた国と国が、合従連衡したり、ころりと寝返ったり、まるで猫の目のようにな。普通は、一番と三番が結託して二番を落とす。二番というものは、いつも落とされるものなのだ。今度は、そうはゆかない。水と油が一緒になるんだ」

「水と油は分離するでしょ。どうして混ざるの？」

「それはだな、卵を入れるのよ。そして攪拌すると、マヨネーズになるってものよ」

「政治って、料理みたいね。でも、嫌だな、猫の目って、いい意味じゃないんでしょ」

「そうよ、われわれ猫は、いつも悪い意味で引き合いに出される。たとえばだ、猫に小判。猫をかぶる。猫ばば。猫も杓子も。どうして、犬も定規もと云わないんだ。犬はいい意味で使われるのに、猫は陰険、泥棒だ」

「そうだね。猫権侵害で訴えましょうよ」

ミケと堀の上から見てみると、かつて選挙で罵倒しあっていた相手が、にこにこご主人と握手しているではないか。

「昨日の敵は今日味方。選挙前になると、どうして政治家というものはこうも節操がなくなるのかね。いや、普段からないのだから、中身は空っぽ」

「そうだね。まだ猫のほうが、我が道を行くって、人にはこびないし、犬のように尻尾を振らない、ひたすら猫イズムを貫き通す」

「そうだよ、全く、猫のほうが哲学的というものだ」

「犬は単純。でも、世の中は犬のほうが賢いなんて云っている」

「それでも、政治家よりはましさ。ご主人の悪口はいいたかないが、普通の稼ぎで、あんな財は蓄えられない。真面目なサラリーマンが一生かかって、どれほどの貯金ができるというのだ。代議士になった途端、先生、先生といろんな会社がへいこら頭を下げに来る。袖の下はバレないように秘書がやってくれる。証拠も残さない。みんなやってることだ。それに、いろんな会社の名誉顧問だ。大きいビルの特別室が顧問用にあてられて、その報酬もすごいもの。笑いが止まらない」

「ふーん、わたしたちは、せいぜい盗ってもメザシ一匹の可愛い泥棒猫だけど、何億って金を動かしているのね」

「乞食は三日やったらやめられないが、代議士は半日やったらやめられないのだ」

「ねえ、中でどんな話をしているのか、天井裏から聞いてみましょうよ」

「そうだな、そっと行ってみようか」

そうして、わたしとミケは天井裏を歩いて、ご主人の密談している応接間の上へと向かった。代議士先生たちの話し声がしてくる。

「民主党と自由党が一緒になるとして、党の新しい名前を考えないといけませんな」

「そうですね。自由党と民主党だから、そうだ。いい名前がある。こんなのはいかがでしょうかな。ズバリ、自由民主党」

「ええ????」

勝手にやってる。まあ、元々根っこは一緒だからそれでもいいが、ご主人にはすっかり失望した。実に恥ずかしい。そんなレベルなんだ。

梅雨がしつこく、なかなか明けなかった。せっかく夏休みだというのに、夏がいつまでも来ない。子供たちは海水浴もできないでいた。二十度以下の日が続き、朝晩は十度以下にもなり、七月の終わりにストーブまで焚いた。考えられない異常気象だった。

八月になっても、梅雨明け宣言は出なかった。関東がようやく梅雨明けをして、南東北も梅雨明け宣言をしたにもかかわらず、この青森だけは一向に梅雨が明けそうもない。以前にもこんな不安定な年があった。一度、気象庁で梅雨明けを宣言したのに、雨ばかり降っていたので、また撤回した年があったのだ。

北海道はもともと梅雨がないから、じわじわと南から梅雨が明けてゆき、岩手、秋田まで梅雨が明けた。それなのに、青森だけが、日本でただ一県、梅雨にストーカーされていた。

県民の多くが、長引く梅雨で、頭から足の先までカビが生えていた。初めはみんな気持ち悪がつっていたが、洗っても洗ってもすぐにまた顔一面にカビが生えるから、もう面倒くさくなっていた。若い人は新しいボディーペインティングだとそれをファッションにまでしていた。ひどい人になると、カビが全身を覆い、誰だか判らない。青カビ、赤カビ、白カビに黄色カビ。

サラリーマンが出張で東京へ出ると、みんな、気持ち悪いから離れている。

「あなた、青森の方でしょう」

と、すぐ判る。

家の中もカビだらけ。掃除してもきりが無い。壁から床、天井とカビだらけ。そこでカビの生えたテレビを見ながら、カビ顔の奥さんが、ふふふふと笑っている不気味さ。

じとじと、湿り気がとれない。洗濯物も乾かない。毎日、よく枯渴しないと思うほど、雨ばかり。青森県の上空に高気圧に追いやられ、居場所のなくなった梅雨が籠城していた。湿度計は百近い。不快指数も高く、ただでも、不景気で、貧乏県、いいことのひとつもないゴミ捨て場の青森県に、また暗く、陰湿なイメージができた。

ねぶたも雨。花火大会も湿気で火がつかない。それより、観光客が激減していた。

「いやあね、カビ臭いところに行って、あなた、カビのお土産買ってきたらどうでしょう」

新しい知事も頭を悩ませていた。

「どうしたら、梅雨が明けるのだろうか」

県議会でもそのことばかり。

「ストリップを頼んで、太陽が出てくるように、みんなして踊って騒ぎましょう」

ある県議がそう提案した。

「天岩戸じゃないんだ」

また別の県議が云った。

「梅雨を捕獲するよう、自衛隊に要請しましょう。太平洋へ連れて行って、捨ててくるのです」

まるで生き物か何かのようだ。

「なかなか開かないときは、口をお湯で温めてですな、ゴム手袋で一気に開けるんですな」

「瓶詰めじゃないんだ」

なかなかいいアイデアが出てこない。

子供たちは不満だった。海にも山にも行けない。観光地は全滅だ。キャンプも雨で中止。海水浴場はがらがら。いつになったら梅雨が明けて、夏が来るのだろう。

空は鉛色にどんよりと曇って、まさに「北暗ければ」と寺山修司が歌った、それ以上に暗い暗い青森となっていた。

観光キャンペーンを急遽変えた。どうせなら、このじめじめした気候を売り出そうと、県の商工観光課では、新しいポスターを全国に印刷して配布した。

一青森は今日も雨だった。いるだけで悲しくなってくる町。

センチメンタルジャーニーなら青森へ。

そして、客を呼び込むための地元出身の演歌歌手にキャンペーンソングまで作らせた。どうせなら、暗い悲しいイメージで売り出そう。

なんでもかでも日本で最下位の青森県にようこそ。空港や駅で出迎えのキャンペーンガールたちも、これ全身カビルック。笑顔で迎えることはない。みんな、どこかむしゃくしゃして仏頂面。

それでも、避暑にやってくる観光客がぼちぼち見えた。

「いいわあ、じめじめしていやだけど、気温が低くて、寒いくらい。向こうは三十五度の猛暑というのに羨ましいわ」

ようやくというか、太平洋から高気圧が張り出してきて、雨雲が追いやられようとしていた。雲間から、あれほど待ちわびていた太陽が顔を出した。

「わあ、お日様だ。何ヶ月ぶりだろう」

すると雨も止み、湿気もなくなってきた。大人から子供までみんな大喜びだった。气象台も、ようやく青森県の梅雨明け宣言をした。

一昨日で、あれほどしつこくねばっていた梅雨も完全に明けました。今日からは秋でしょう。

第548話 踊りゃ損損

なんでも新しいものが好きな北村は、新商品が出るたびに飛びついてきた。

音楽マニアで、若いときからオープンリールで、テープデッキに名曲を録音してきたが、アカイなどのメーカーが倒産すると、機械もそのまま埃をかぶったまま、お蔵入りとなってしまった。8トラックのテープに凝ったときもあり、それもカセットテープにおいやられて、機械の生産が中止となると、テープが再生できないまま、処分しなければならなくなった。

ダンスケブームのときも、重量十キロを超える重いステレオ録音の機械を肩から下げて、ヨーロッパに行ったときもあった。外国でもまだ珍しいときで、みんな見せてくれと、寄ってきたものだ。その録音したテープや音楽テープがずらりとコレクションであったのも、だんだんと時代の流れで音質も悪く、テープ自体の消耗もひどくなり、それらをこのたび、すべてMDにダビング

することにした。音楽を録音するメディアも、CDからDVDやMDになってきた。カセットテープを電気店に買いに行っても、少しより置いていない。近いうちにそれも姿を消すのかもしれない。

ビデオが出たときも飛びついた。最初のカメラは一体型ではなく、バッテリー込みでデッキだけでも十キロ以上もある重いもので、旅行に持ってゆくには肩がこる。それが、何年もしないうちに、一体型になったが、それでも大きい。VHSのカセットをそのまま使うもので、いまから思うと恥ずかしいくらい大きい。やがて、それも8ミリの小さなカセットになった。得意げになって、片手で持てるビデオカメラを提げて歩いていた。

それも何年も続かない。周りの人がさらにコンパクトなカメラを手にしていった。子どもの運動会だ学芸会だと必ず持っていったのが、それも恥ずかしくなってきた。十年どころか五年ともたない。すぐに骨董品になってしまうほど、周りの技術開発は目覚ましい発展をしていた。そのたびに振り回されて、ついてゆくのに、無駄な出費もかなりある。いまは、デジタルのカメラで、掌に隠れるくらいに小さい。カセットもいらなくなる。メモリースティックやカードに保存して、パソコンに取り入れ編集できる。それをDVDに取り込んで保存している。

北村は趣味でいろいろと書いていたので、書くというマシンには魅力があって、これもすぐに飛びついた。学生時代には英文タイプライターを購入して、パチパチチーンとやっていた。それでは日本語が打てないので不満になり、シルバーリードの電動和文タイプライターを購入した。活字は鉛のものを機械が一個ずつ拾って打つのだが、何千という活字の中から探すのは時間がかかった。原稿用紙一枚を打つのに、一時間かかったこともある。それに、印字もかすれたり、ポイントも同じ大きさよりないので、これも不満だった。

と、悩んでいるときに、とうとうワープロというものが出た。それは画期的なものだった。印字はリボンだったので高くついたが、今度はちゃんと漢字に変換できる。ただ、24ドットというギザのある荒い文字では、何か機械的で面白くはなかった。

ワープロ全盛期がやってきて、性能も向上してゆく。次世代のワープロとして、48ドットのギザが目立たないワープロを購入したのが十五年前だ。初めてフロッピーというものに保存できる。5インチ以上の大きなフロッピーや、3.5インチでも2DDのフロッピーだった。

仕事で使うということで、北村は印刷、出版をやりはじめた。友人からワープロの親玉である電子編集機を買った。テキストだけで分厚い本が十冊あり、読むだけで頭が痛くなる。印刷屋がそろそろ活版から、データ入力に切り替えはじめたころに名機だった。

それでも、その編集機はフォントが明朝とゴシックの二つよりなく、漢字辞書もまだお粗末、写真などの取り込みもモノクロで、ちょっと壊れると部品も高い。消耗品も安くはなかった。北村が仕事の合間に、その機械で打ち込んだ創作がかなりあったが、まだプリントアウトしていればよかったのだが、世の中が、パソコンに移行してゆくにつれて、大変なことが起った。その機械で保存したフロッピーディスクがパソコンや最新のワープロでは開けないのだ。何枚ものフロッピーがあり、それに書き込んだ時間も膨大なものであり、それが、すでに閉鎖された世界のものとなったと知ったときはショックだった。

ひとつの機械が時代を終えるとき、次の機械に移行するため、コピーが可能でなければデータを取り込めない。ただ、方式ががらりと変わるから、ぷつりと切れてしまうのだ。金庫の中に原

稿用紙を入れたまま、鍵を紛失してしまったようなもので、慌てたときには遅かった。いままで、おれは何をしてきたのかと、北村は流行を追うことに疑問も感じてきていた。

機械に対して懐疑を持ってからは、新しいものにすぐ飛びつくことはしなかった。それで、息子たちがパソコンを取り入れて遊んでいるときも、父親はぐっと我慢して、その成り行きを見守ることにしたのだ。ゲームの機械もすぐどころどころと変わるので、子どもたちも大変だ。沢山のゲームソフトを揃えたが、本体が生産中止になると、すべてが使えなくなる。

ようやく七年前に重い腰をあげてパソコンを買った。買ってはまだどこかで疑っている。電気店の販売員に、何度も念を入れて確かめた。

「すぐに別のものが出ないでしょうね」

ウィンドウズ95だった。怪しい。大丈夫か。ワープロで打った創作ものも、フォーマットが違うので開けないものがある。爾来、すべてパソコンに切り替えた。五台くらい取替えながら、98、2000、me、XPとバージョンアップしてきた。フロッピーもなくなり、CDに保存した。DVDレコーダーも安くなったから、いまはそれに保存している。

それに甘んじて、もうこれからは安心だと、北村はやはり膨大な量の創作ファイルを薄い円盤に保存していったのだが...

またまた、ものすごい革命的なメディアが開発されていた。メーカーはそれを全世界で同時に発表するや、いままでのパソコンはすべて使えなくなり、CDもDVDも新しい機種では使えない。みんな、「えー」という驚きと不満の悲鳴。

われわれはいつもメーカーに騙され、踊らされていた。いままでの人生は何であったのだろう。年老いた北村は、いままで書き溜めたものが、日の目を見ない棺に収まったまま、閉じられた闇の世界に自分の分身が隔離されていることに嘆き悲しんだ。それは、同じ思いで憤懣やるかたない人はかなりいた。

ただ、笑っている人もいた。機械音痴で、昔からワープロもパソコンも毛嫌いしてきた北村の仲間たちがいる。いまだに、頑固一徹に、モンブランのぶっとい万年筆で、紙の原稿用紙に書き続けているもの書きたちだ。彼らは嘲笑って云った。

「だから云ったんですよ。これから世の中、どんなに悪くなるか判らない。進歩は悪だとね。そのうち、電気も使えなくなるほどの災害か戦争が起るかもしれないが、われわれは鉛筆でも筆でもあれば、記録してゆけるのだ。はははは。ご苦労さん」

第549話 コスモポリタンたち

わたしが、彼と出逢ったのは、寝苦しい熱帯夜の夜中でありました。八月に入って、いままで冷夏と思われていた低温注意報も解除され、連日三十度を超える暑さになり、ようやく夏らしくなりました。熱帯夜というのは、最低気温でも三十度以上あることで、その夜はとても寝ていら

れず、夜中の二時過ぎに、起き出して、近くの公園まで散歩いたしました。

土曜日の夜ということもあって、アベックや涼みに出ている人など、驚くほど多勢の人たちがふらふらと歩いているのであります。わたしのように五十代の人もおりますが、若い人、小さな子どもまで連れた家族までおります。あんな幼稚園くらいの子もこんな真夜中に起こして散歩とは少し異常な感じがしました。

「あなたも寝苦しくて出てきたんですか」

わたしは三十くらいのサラリーマン風の男性に声をかけてみました。

「いいえ、寝苦しいということはありません」

わたしのようにラフなタンクトップと半ズボンではなく、暑いというのに、きちんとサマースーツを着ている。彼は、公園のベンチに腰をかけました。

「暑くはないですか。お仕事の帰りかなんかですか」

「いいえ、仕事はしていません」

わたしは、悪いことを訊いたように思いました。いまは、いろんな理由で仕事がない人がいるのだから、わたしのように仕事を持っているものが、彼らの犠牲の上に立っているようで、すまない気持ちになっていました。

「大変ですね」と、わたしは失業中の彼に同情しますと、彼は逆にわたしの方に哀れみの目を向けてきました。

「あなた方のほうが大変ですね。リストラで、人員を削られて、残ったものも会社では残業もつかないで、こき使われているというじゃないですか。それで、随分と過労や鬱病で、自殺するものも出ているとか」

「おっしゃる通りです。いまは、週休二日とは名ばかりで、日曜も出勤しています。自分の平常業務ではとても業務量を消化できないんですね」

「そうですね。それに、ボーナスもカット、昇給もなし、将来は年金も貰えないかもしれない」

「そうですね。若い人たちも老後には期待していないようです。われわれも定年後の不安があります。退職したあともしばらくは働かなければ家のローンも残っていますからね」

どっちが失業者か判らない。サラリーマンをしているものが哀れに見えてきます。それに比べて、失業中の彼のほうが、何か安泰という顔をしています。諦めからなのでしょうか。

「あなたは、仕事がなくとも不安ではないんですか」

彼は笑って、実に余裕のある態度で答えた。

「ぼくは仕事をしなくてもいい身分だから」

きっと、資産があるか、親がアパートかマンションを経営しているとか、そんな仕事をしなくてもいい人なのでしょうか。すると、彼はわたしの考えていることに答えるように云いました。

「ぼくはもとより親も年金暮らしだから、普通ならとても養ってもらえません。でもね、ぼくは税金を納めなくてもいいんです。いまは、年金も掛けていませんし、健康保険もやっていません。払うべき義務もなければ、まあ、支払う金もないですが。はははは」

こんな人もいるのです。でも、どうして食べているんだろうと、わたしは怪しみました。

「それは、羨ましい。貯金もないんですか」

「そうです。その代わり借金もありません。ぼくには身分を証明するものがないんです」

「でも、いまは役所も煩くないですか。国保でも半分近い人が払っていないからと、これからは取り立てが厳しくなるですよ」

「それは全然心配していません。ぼくには住民票もないし、戸籍もないんです。仕事もないけど、家もない。私有財産がひとつもないんです。無論、車も持っていません。役所から請求されることはないわけです」

「そんなことがあるんですか。それじゃ、まるで無国籍者じゃないですか。住所不定無職というホームレスでも、ちゃんと戸籍はあるんです」

失業者は大きく笑いました。その声でみんな集まってきました。彼の知り合いらしかったのです。

「ここにいるみんなも同じなんです。ぼくたちの仲間で、みんな国籍がありません」

わたしは愕然としました。こんな、高い税金を取られて、借金に借金を重ねて、まるで銀行の奴隷のようにローンを返すために働いて、毎日くたくたに疲れきって帰ってくる。共稼ぎの妻とは冷戦状態で、家庭不和。娘、息子も云うことをきかないで、働きもしないでぶらぶらしています。わたしの小遣いは月に五千円です。これでは同僚と酒を飲むこともできません。煙草もやめましたし、好きな麻雀もぱったりとやめました。そうまでして、何を守ることがあります。それもこれも、政府の失策の膨大なツケが、われわれサラリーマンの背中に重くのしかかっているのです。彼らのように、日本を捨てたい。国籍なんかなくてもいい。みんな幸せそうに、ゆっくりのんびりと暮らしているようです。われわれとはどこか違う安らぎがありました。わたしたちは、いつもカリカリしてあくせくと走り回っていました。

「どうすれば、あなた方のように、税金を納めないで暮らすことができるんですか。脱税なんかじゃないんでしょう」

すると、周りに集まっていた家族連れや、夫婦もの、若いカップルたちも一斉にゲタゲタと笑いました。

「だから、ぼくたちは、仕事をしていない。収入がないし、固定資産もない、将来の年金もいらないし、病気もしないんですから」

わたしは溜息をついた。こんな素敵な生活があったなんて。かつてのフーテンや、ヒッピーといった、どこにも属さない人たちに似ていて、社会という鎖もなくすごく自由な雰囲気を持っている人たちでした。

「お願いだ。わたしもあなた方の仲間に入れてくれ」

わたしは、急に現実から逃げたくなって懇願していました。

「それは、いいんですが」と、みんなは顔を見合わせていました。「その代わり、失うものも大きいですよ。自由の代価はいまあなたが住んでいる世界のすべてと同じ重さがありますから」

「いいんだ、こんな腐敗した国も会社も家族もいない」

蒸発する父親がよく、こんな気持ちになって、ある日突然、すべての生活に見切りをつけてふらりといなくなるのでしょうか。わたしもいい加減、そんな気分になっていました。

「いいんですか。家族も捨てて、仕事も捨てて、地位や名誉、財産、おいしい食べ物、いままで嫌なこともあったでしょうが、いいこともあったでしょう。それもすべて捨てなければならない

んですよ」

わたしは、ちらりと未練がましく振り返りましたが、辛いことばかりだから、この際、彼らと同じ自由の生活に逃げようと思いました。

「いいです。すべて、諦めます。あなたたちと一緒に気楽な生活をしたい。是非教えてくれ」

失業者も、夫婦ものも困った顔をしていましたが、わたしが可哀想に思えてきたのでしょうか。その自由になる秘訣をそっと教えました。

「いいですか、簡単なことです。ビルの上から飛び降りるとか、川に身投げするとか、首を括るとか。ぼくたちはみんな、そうして自由になったんです。ここにいる人たちはみんな死んでいるんです。幽霊なんですから」